東北大学埋蔵文化財調査年報 1

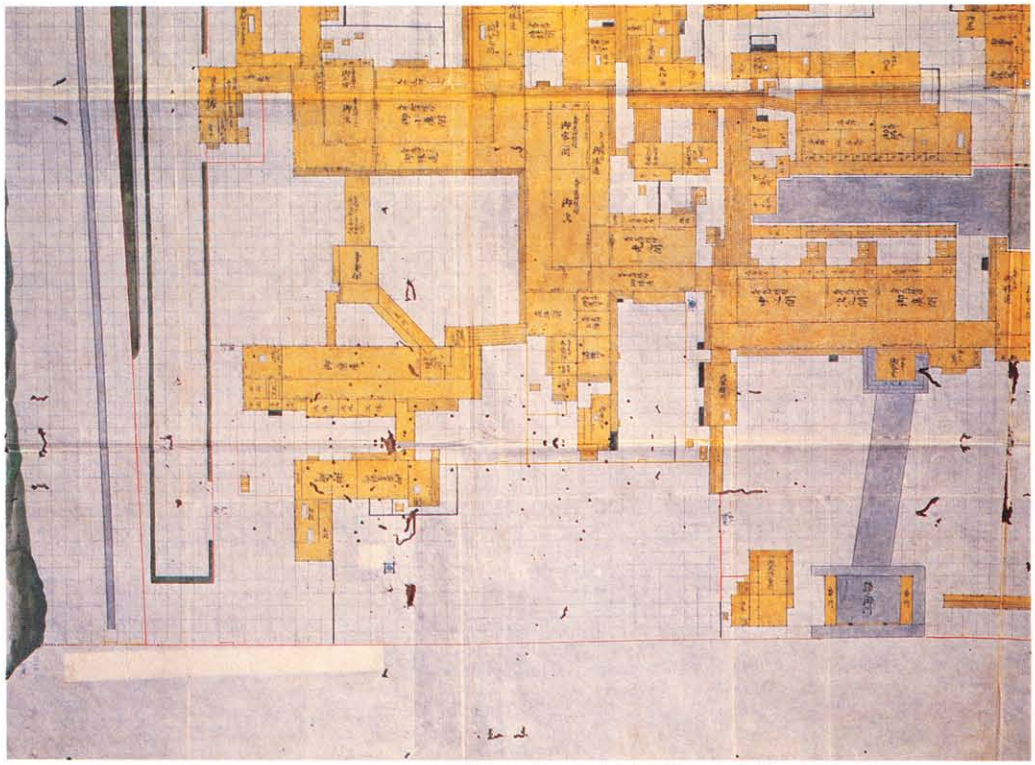
東北大学埋蔵文化財調査委員会
1985

東北大学埋蔵文化財調査年報 1

東北大学埋蔵文化財調査委員会
1985

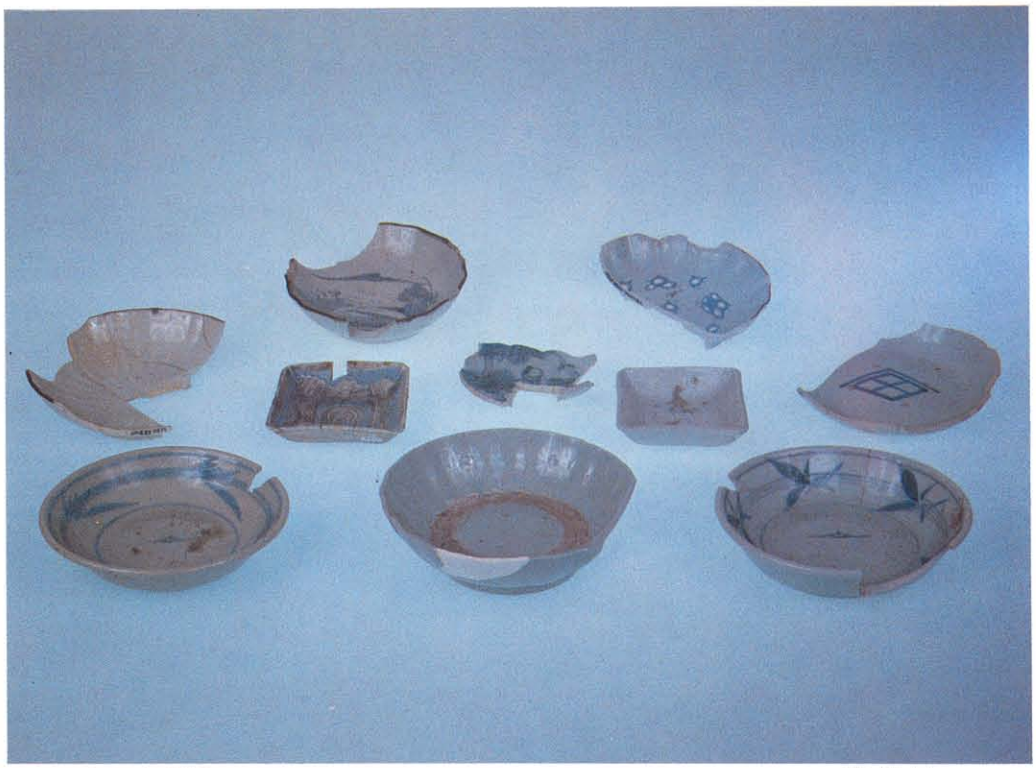
カラー図版１．　　東北大学川内地区キャンパス（南から）

肯山公造制木写之略図二の丸部分



カラー図版2　　嘉永六年二の丸図玄関、小広間、馬場座敷部分

磁器茶碗



カラー図版３

磁 器 皿

陶 器 皿

カラー図版4

陶器土瓶

序

近年国内各地において、先人の貴重な遺跡や有形文化財の調査と発見が、新聞等の報道により一般社会に周知されているところであるが、これらの遺跡等の埋蔵文化財の学術研究は、考古学や歴史学、さらに関連諸科学分野の発展に寄与することは疑いない。

本学敷地内にも、埋蔵文化財包蔵地があることから、文化財保護法の趣旨を尊重し、埋蔵文化財の保存・活用を図る目的で、昭和58年11月に、東北大学埋蔵文化財調査委員会を設置し、調査班を組織して文学部史学科考古学講座の指導を受け、爾来意欲的に活動している。

このたびの報告書は、川内地区伊達家累代の居城仙台城二の丸跡の発掘調査の成果をまとめたものである。発掘調査ならびに報告書の刊行にあたっては、関係各位の御協力、御努力を賜った。ここに御礼申しあげる。

本書が斯界に多く活用され、もって史学発展の一助となれば幸甚である。

最後に調査研究にあたっては、今後とも学内・学外の御指導と御協力をお願いする次第である。

昭和60年 3 月

東北大学埋蔵文化財調査委員会委員長

東北大学長　石田名香雄

例　　言

1．本年報は東北大学埋蔵文化財調査委員会が昭和58年4月から同59年3月までに調査と保存を実施し、その後引き続き整理作業を終了した東北大学川内地区の二の丸跡に関する報告書である。

2．調査は埋蔵文化財調査委員会の委嘱をうけ埋蔵文化財調査班が行った。

3．遺跡名は略号で示した。

(1)　二の丸第1次調査（NM1）

(2)　二の丸第2次調査（NM2）

(3)　二の丸第3次調査（NM3）

4．遺構・遺物の作図、挿図、図版の作成は梶原洋・佐川正敏・大場拓俊・佐久間光平・佐藤広史・山田しょう・前沢聡央・市村賢則・山田富士子・相川美子・門脇弘子・菱沼孝志が行った。写真撮影には、梶原洋・佐川正敏・山田しょう・菱沼孝志・門脇弘子があたり、引き伸しは菱沼孝志・門脇弘子が行った。

5．本文の執筆は、梶原洋・佐川正敏・大場拓俊・佐久間光平・山田しょう・前沢聡央・市村賢則・山田富士子が行った。執筆者名は文末に（　）で記載した。

6．佐藤巧(東北大学工学部教授)・蟹沢聰史(東北大学教養部教授)・竹内貞子(斉藤報恩会自然史博物館)・内藤俊彦(東北大学附属植物園)・高橋理(東北大学文学部考古学研究室)の各氏には玉稿を賜った。ガラスの分析では旭硝子株式会社から全面的な御協力を賜った。

7．表紙絵の二の丸玄関と広間は、佐藤巧教授の原図による。

8．芹沢長介氏(東北大学名誉教授)には陶磁器の同定について多大な御協力を賜った。

9．NM2は保存措置がとられ、将来の調査に委ねられることとなった。

10．発掘調査から報告書作成に至る過程で次の方々から御指導・御助言を賜った。ここに記してお礼申しあげたい。（敬称略順不同）

伊東信雄・渡辺信夫・今泉隆雄・難波信雄・志村宗昭・池田圭介・広川吉之助・青山忠正・藤沼邦彦・佐藤則之・嘉藤美代子・千葉考弥・高倉敏明・松根努・吉田行雄・大沼二郎・大沼興治・加藤吉男・吉川昌治・野津芳・坪倉晴利・伊藤延行・池田栄次・池田民哉・John F.Morris・Richard L.Reece・Ivan F.Dornon・Louise Cort・佐藤弥市・佐藤達夫・松根金之助・伊藤嘉章・前川要・藤澤良祐・高橋良一郎・佐藤正己・東北大学考古学研究室・東北歴史資料館・宮城県多賀城跡調査研究所・仙台市博物館・仙台市歴史民俗資料館・多賀城市教育委員会・稲垣服飾株式会社・栃木県陶磁器指導所・福島県窯業試験所・千葉製作所・相馬大堀焼協同組合・瀬戸市歴史民俗資料館・Freer Gallery of Art・阿子島香・小林正史・佐藤和男・早坂正治

11．編集は須藤隆の指導のもとに、梶原・佐川が担当した。

凡　　例

1．原則として遺物の実側図は縮尺⅓（瓦は¼）写真は½に統一した。他の縮尺のものはそれぞれに明記した。

2．注は各章ごとにまとめて章末に記載した。引用文献はまとめて本文の末尾に記した。

埋蔵文化財調査委員会（組織）

委員長		石田名香雄
委　員	青葉山地区協議会委員長（薬学部長）	南原利夫
	川内地区協議会委員長（法学部長）	廣中俊雄
	星陵地区協議会委員長（医学部長）	星野文彦
	片平地区協議会委員長（科研所長）	小島　浩
	文学部教授	渡辺信夫
	文学部助教授	須藤　隆
	理学部助教授	中川久夫
	工学部教授	佐藤　巧
幹　事	施設部長	小村一郎
調査員	文学部助手	梶原　洋
	〃	佐川正敏（昭和59年２月16日から）

（昭和59年３月現在）

発掘調査整理参加者

桑月　鮮	菱沼孝志	高橋邦仁	福山義幸
佐藤広史	相川美子	高橋千秋	星野　晃
鈴木博子	門脇弘子	高橋康幸	増井啓太
高橋　理	堀千香子	高橋　学	丸山規之
林　　努	宮脇康朗	田村裕彦	森永宏喜
馬場保之	村田章人	田村幸敬	安井英斉
藤田　淳	青山和夫	中川浩之	安川洋生
前沢聡央	井出隆一郎	長田　治	吉澤　正
松山　聡	川口哲男	中村和人	荒川　努
山田しょう	川崎俊彦	野村真也	田中譲二
山田富士子	川村　剛	早田直彦	斉藤直昭
大場拓俊	鈴木真一郎	平野信行	

本　文　目　次

序
例言
目次
図目次
表目次
図版目次

第Ⅰ章　昭和58年度調査の概要 …… 1
　1．はじめに …… 1
　2．調査に至る経過 …… 2
第Ⅱ章　川内地区二の丸跡の調査 …… 5
　1．遺跡の立地と歴史的背景 …… 5
　2．二の丸第1次調査（ＮＭ１） …… 6
　　(1)　調査方法と経過 …… 6
　　(2)　層序 …… 10
　　(3)　東区の遺構 …… 10
　　(4)　ＮＭ１の遺物 …… 12
　　(5)　まとめ …… 16
　3．二の丸第2次調査（ＮＭ２） …… 17
　　(1)　調査方法と経過 …… 17
　　(2)　層序 …… 17
　　(3)　遺構 …… 17
　　(4)　主な遺構の変遷 …… 26
　　(5)　ＮＭ２の遺物 …… 30
　　1）遺物出土状況 …… 30
　　2）江戸時代末期から明治時代初期の陶磁器 …… 30
　　①　茶碗……30　　②　皿……43
　　③　土瓶……56　　④　徳利…72
　　⑤　急須・油脂・蓋・香合・甕…74　　⑥　土鍋…76

⑦　土師質土器・瓦質土器 …78
3）明治時代初期以降の陶磁器 …… 83
4）ＮＭ２の陶磁器のまとめ …… 83
5）木製品 …… 88
①　建築材…89　　②　箸　…97
③　竹製品 …97　　④　その他 …97
6）金属製品 …… 98
7）その他の遺物 ……101
8）瓦 ……104
9）墨書陶器について ……108
4．二の丸第３次調査（ＮＭ３） ……110
(1)　調査方法と経過 ……110
(2)　層序 ……110
(3)　遺構 ……110
(4)　ＮＭ３の遺物 ……120
1）陶磁器 ……120
2）その他の遺物 ……120
3）瓦 …… 123
5．ＮＭ２礎石建物と二の丸建造物 …… 131
(1)　二の丸におけるＮＭ２・３の位置 …… 131
(2)　ＮＭ２の石敷遺構 ……132
(3)　ＮＭ３と二の丸の位置 ……132
6．二の丸の焼失について ……138
7．ＮＭ１・２・３調査の意義 ……140
第Ⅲ章　仙台城二の丸の小広間について　佐藤　巧 ……142
第Ⅳ章　仙台城二の丸跡から出土した陶磁器の化学組成について　蟹沢聰史 ……162
第Ⅴ章　ＮＭ２の石敷遺構から出土した植物種子および果実　内藤俊彦 ……166
第Ⅵ章　ＮＭ石敷遺構の花粉分析の結果について　竹内貞子 ……174
第Ⅶ章　ＮＭ２出土の動物遺存体　高橋　理 ……175
第Ⅷ章　ＮＭ２出土の熔融ガラスの分析結果　旭硝子株式会社 ……178
引用文献 …… 182
Summary …… 184
図　版 …… 194

図　目　次

図１　東北大学と埋蔵文化財…… 3
図２　ＮＭ１試堀区の配置…… 7
図３　ＮＭ１発掘調査区の位置…… 8
図４　NM１1983年度発掘調査区の概況… 8
図５　ＮＭ１土層断面図…… 9
図６　ＮＭ１遺構変遷図（1983年度）…11
図７　ＮＭ１出土の遺物……13
図８　ＮＭ１出土の瓦(1)……14
図９　〃　(2)……15
図10　NM２・ＮＭ３発掘区・試掘坑配置図…18
図11　ＮＭ２土層断面図……20
図12　ＮＭ２遺構配置図・断面図
２層上面……21
図13　〃　４層上面……22
図14　〃　５・６層上面……23
図15　〃　７層上面……24
図16　石敷遺構内遺物出土状況……27
図17　石敷遺構の平面図と断面図……27
図18　陶磁器の部位名称と計測部位……29
図19　茶碗と小形茶碗の外形プロファイル…34
図20　ＮＭ２出土の茶碗(1)……35
図21　ＮＭ２出土の茶碗(2)……36
図22　ＮＭ２出土の茶碗(3)……37
図23　ＮＭ２出土の茶碗(4)……38
図24　ＮＭ２出土の小形茶碗……39
図25　ＮＭ２出土の陶器皿類……53
図26　ＮＭ２出土の磁器皿類(1)……54
図27　ＮＭ２出土の磁器皿類(2)……55
図28　ＮＭ２出土の磁器皿類(3)……56
図29　ＮＭ２出土の土瓶(1)……62
図30　ＮＭ２出土の土瓶(2)……63
図31　ＮＭ２出土の土瓶(3)……64
図32　ＮＭ２出土の土瓶と急須……65
図33　ＮＭ２出土の土瓶の蓋……66
図34　土瓶と小形茶碗の実容積比較……67
図35　各遺跡出土の土瓶・急須の実容積…68
図36　ＮＭ２出土の徳利……75
図37　ＮＭ２その他の陶磁器……77
図38　ＮＭ２出土の土鍋……80
図39　NM2出土の土師質・瓦質土器……81
図40　ＮＭ２出土の炭櫃・蚊遣……82
図41　ＮＭ２出土陶磁器の（FeO＋MnO＋CaO＋MgO）＋（Na_2O＋K_2O）関係 85
図42　器種ごとにみた産地別出土数の比較‥86
図43　NM2出土の産地別陶磁器一覧表・87
図44　ＮＭ２出土の木製品(1)……91
図45　ＮＭ２出土の木製品(2)……92
図46　ＮＭ２出土の木製品(3)……93
図47　ＮＭ２出土の木製品(4)……94
図48　ＮＭ２建築材解説図……95
図49　定義如来五重塔屋根柿葺詳細図…96
図50　ＮＭ２出土の金属製品(1)……99
図51　ＮＭ２出土の金属製品(2)……100
図52　NM2・3出土の和釘長さグラフ‥100
図53　ＮＭ２出土のその他の遺物……102
図54　ＮＭ２出土の軍靴の底……103
図55　ＮＭ２出土の瓦(1)……106
図56　ＮＭ２出土の瓦(2)……107

図57　NM3発掘区土層断面図・石垣平面図及び断面図……112
図58　掘立柱建物Ⅰ柱配置図と柱穴計測部位……113
図59　打込はぎ石垣実測図……114
図60　NM3遺構変遷図(1)……115
図61　NM3遺構変遷図(2)……116
図62　NM3各遺構平面図及び断面図(1)…117
図63　NM3各遺構平面図及び断面図(2)…118
図64　NM3各遺構平面図及び断面図(3)…119
図65　NM3出土の陶磁器(1)……122
図66　NM3出土の陶磁器(2)……123
図67　NM3出土金属製品他……125
図68　NM3出土の瓦(1)……128
図69　NM3出土の瓦(2)……129
図70　NM3出土の瓦(3)……130
図71　NM2・3発掘区・現況建物と二の丸遺構‥133
図72　礎石・石敷機能時の配置(NM2)…133
図73　二の丸小広間付近の変遷(1)……134
図74　二の丸小広間付近の変遷(2)……135
図75　二の丸小広間付近の変遷(3)……136
図76　二の丸小広間と周辺の建築図……160
図77　二の丸表主要建物復原立面図……161
図78　仙台城二の丸跡出土陶磁器の化学組成……165
図79　ヒメグルミおよびオオモミジの生育地と石敷遺構の位置……168
図80　サクラ属の核の大きさ……170
図81　エドヒガンの果実の散布……170
図82　NM2石敷遺構出土の植物種子‥173
図83　分析試料写真……181
付図1　現況建物・道路と二の丸建造物との関係
付図2　御二の丸御指図
付図3　嘉永六年・御二の丸御城中並中奥下水抜溝御絵図

表　目　次

表1　昭和58年度の事前調査と立会……2
表2　NM1の調査経過……6
表3　NM1の層序・遺構……10
表4　NM1の遺物の分布……12
表5　NM1の瓦の属性表……16
表6　NM2の調査経過……19
表7　NM2出土遺物の分布表……28
表8　NM2茶碗の分布……30
表9　NM2小形茶碗の分布……31
表10　NM2出土の茶碗の属性表……40
表11　NM2出土の小形茶碗の属性表…41
表12　NM2出土の皿類の器形分類……45
表13　NM2出土の皿類の文様分類……46
表14　NM2陶器皿の分布……47
表15　NM2磁器皿の分布……47
表16　NM2出土の陶器皿属性表……57
表17　NM2出土の磁器皿属性表……58
表18　NM2出土の土瓶の属性表……69
表19　NM2出土の土瓶の蓋属性表……70
表20　NM2土瓶の出土分布表……71
表21　NM2出土の土瓶の蓋の出土分布表……71
表22　NM2その他の陶磁器属性表……77
表23　NM2出土の土師質・瓦質土器の分布…79
表24　NM2出土の木製品の分布……89

表25　ＮＭ２出土の金属製品他の分布‥ 103
表26　ＮＭ２出土の瓦の分布…… 105
表27　ＮＭ３遺構新旧関係表…… 110
表28　ＮＭ３調査経過…… 111
表29　ＮＭ３柱穴計測表…… 113
表30　ＮＭ３出土の陶磁器の分布…… 121
表31　ＮＭ３出土の陶磁器観察表…… 123
表32　NM3出土の木製品･金属製品他の分布…… 124
表33　ＮＭ３出土の瓦属性表…… 127
表34　仙台城二の丸建築関係年表…… 137
表35　年始御礼と建物との関係…… 148
表36　月次御礼と建物との関係…… 149
表37　主なる年中儀式と建物との関係… 149
表38　接見、拝命、御礼と建物との関係…… 151
表39　Ｘ線粉末回折法による鉱物同定結果‥ 163
表40　ＮＭ２出土陶磁器および地球化学的標準試料の分析結果…… 164
表41　NM2石敷遺構から出土した植物種子および果実…… 167
表42　花粉百分率表…… 174
表43　ＮＭ２動物遺存体一覧表…… 177
表44　溶融ガラスの成分(組成)…… 179
表45　軟化温度および比重…… 179

図　版　目　次

図版１　ＮＭ１全景と断面図…… 195
図版２　ＮＭ１東区遺構(1)…… 196
図版３　ＮＭ１東区遺構(2)…… 197
図版４　ＮＭ２発掘区全景と遺構…… 198
図版５　ＮＭ２作業風景・遺物出土状況… 199
図版６　ＮＭ２の遺構(1)…… 200
図版７　ＮＭ２の遺構(2)…… 201
図版８　ＮＭ２の断面…… 202
図版９　ＮＭ３発掘区全景…… 203
図版10　ＮＭ３の遺構(1)…… 204
図版11　ＮＭ３の遺構(2)…… 205
図版12　ＮＭ３の遺構(3)…… 206
図版13　ＮＭ２出土の茶碗(1)…… 207
図版14　ＮＭ２出土の茶碗(2)…… 208
図版15　ＮＭ２出土の茶碗(3)…… 209
図版16　ＮＭ２出土の茶碗(4)…… 210
図版17　ＮＭ２出土の小形茶碗…… 211
図版18　ＮＭ２出土の陶器皿(1)…… 212
図版19　ＮＭ２出土の陶器皿(2)…… 213
図版20　ＮＭ２出土の陶・磁器皿…… 214
図版21　ＮＭ２出土の磁器皿(1)…… 215
図版22　ＮＭ２出土の磁器皿(2)…… 216
図版23　ＮＭ２出土の磁器皿(3)…… 217
図版24　ＮＭ２出土の磁器皿(4)…… 218
図版25　ＮＭ２出土の土瓶(1)…… 219
図版26　ＮＭ２出土の土瓶(2)…… 220
図版27　ＮＭ２出土の土瓶(3)…… 221
図版28　ＮＭ２出土の土瓶(4)…… 222
図版29　ＮＭ２出土の土瓶(5)…… 223
図版30　ＮＭ２出土の土瓶(6)…… 224
図版31　ＮＭ２出土の土瓶・急須・蓋…… 225
図版32　ＮＭ２出土の土瓶の蓋(1)…… 226
図版33　ＮＭ２出土の土瓶の蓋(2)…… 227
図版34　ＮＭ２出土の徳利とその他の陶磁器…… 228
図版35　NM2出土の土鍋とその他の陶磁器 …… 229
図版36　ＮＭ２出土の土鍋と土師質・瓦質土器‥ 230

図版37　ＮＭ２出土の土師質・瓦質土器… 231
図版38　ＮＭ２出土の瓦(1)…… 232
図版39　ＮＭ２出土の瓦(2)…… 233
図版40　ＮＭ２出土の木製品(1)…… 234
図版41　ＮＭ２出土の木製品(2)…… 235
図版42　ＮＭ２出土の木製品(3)…… 236
図版43　定義如来五重塔の柿葺作業…… 237
図版44　定義如来五重塔の軒付…… 238
図版45　柿葺屋根と道具…… 239
図版46　ＮＭ２出土の金属製品…… 240
図版47　ＮＭ２出土の金属製品
ガラスボタンと伊達家籏の矢…… 241
図版48　ＮＭ２出土のその他の遺物…… 242
図版49　ＮＭ２出土の軍靴の底と軍靴の見本… 243
図版50　ＮＭ１出土の瓦と銅輪…… 244
図版51　ＮＭ３出土の陶磁器…… 245
図版52　ＮＭ３出土の瓦(1)…… 246
図版53　ＮＭ３出土の瓦(2)…… 247
図版54　ＮＭ３出土の瓦とその他の遺物… 248

第Ⅰ章　昭和58年度調査の概要

1．は　じ　め　に

川内地区、青葉山地区、富沢地区には、東北大学埋蔵文化財調査委員会が設置され、埋蔵文化財調査班が調査を実施する以前から周知の遺跡が存在し、小規模な調査も実施されてきた(図１)。

この中で川内地区はかつての仙台城二の丸とその周辺に広がる武家屋敷であり、近世の歴史学・考古学にとって重要な遺跡である(附図１)。

昭和49年の文系厚生会館建設時には仙台市教育委員会によって、工事に伴う事前調査が実施され、石敷の溝状遺構が発見されている。また昭和52年には、川内図書館本館裏の排水路建設の際、石敷の遺構に併い陶磁器・簪(かんざし)・笄(こうがい)などが発見されたため、文学部考古学研究室により小規模な緊急調査が行われた。昭和54年１月には、教養部プール新築工事の際に、井戸やピットが発見されたため、再び考古学研究室の手によって緊急調査が行われた。井戸内からは、江戸初期に遡る陶磁器類の他、種々の木製品等も発見された。

このように川内地区では、小規模な緊急調査が実施されてきたものの保存や事前調査を計画的に実施する機関がなかったため、充分な調査と保存は行われてこなかった。

青葉山地区は、東北大学植物園に連る広大な地域であり、昭和47年、工学部の各学科がこの地域の南半部に移転した。しかし、工学部移転当時、遺跡の存在は知られておらず、発掘調査が実施されたこともなかった。

しかし、青葉山地区に隣接する青葉台では、昭和46年頃、後期旧石器時代の遺跡が発見された(青葉山Ａ遺跡)他、昭和55年には金属博物館前の露頭でも石器が採集された(青葉山C遺跡)。このようなことから当大学の青葉山地区内にも旧石器時代の遺跡の存在する可能性が指摘され、文学部考古学研究室は昭和56年からこの一帯の分布調査を実施した。その結果、昭和57年に薬学部に通じる露頭断面から後期旧石器時代の石器を３点採取した(青葉山B遺跡)。さらに青葉台でも新しい遺跡を１ケ所発見し、旧石器時代の遺跡の分布密度はかなり高いことが明らかになった。また露頭の観察から後期旧石器時代ばかりでなく、３万年前より古い前期旧石器時代に遡る可能性も明らかになった。

富沢地区の周囲には、縄文時代前期の集落跡である三神峯遺跡、三神峯古墳、土手内横穴古墳群、金山窯跡、富沢窯跡などが群在しており、仙台市内でももっとも遺跡の密集度の高い地区の一つである。

昭和52年には、富沢地区の東北大学構内のグランド造成予定地区で遺物が採集され、考古学

研究室が緊急調査を行った結果、縄文時代、弥生時代、平安時代の複合集落遺跡であることが判明し、金山遺跡(芦ノ口遺跡)として登録された。

2．調査に至る経過 (昭和58年度調査の概要)

昭和58年(1983年)度に行われた発掘調査は、事前調査4件、試掘調査1件である。また立会調査は8件にのぼる。発掘調査5件の内訳は、川内地区二の丸跡の事前調査が3件、青葉山地区の事前調査が1件である。青葉山地区では、試掘調査が1件行われた(表1)。

調査の種類	調査地点	原因	調査期間 実働日	面積	平均深度	時期
事前調査	川内二の丸第1次調査(NM1)	文系棟新築工事	昭58年8/1～9/14(32)	150㎡	3.2m	近世(江戸)
	〃 第2次調査(NM2)	文系厚生会館除害施設	〃 10/31～11/30(24)	60㎡	1.0m	〃
	〃 第3次調査(NM3)	〃	〃 12/1～1/9(27)	70㎡	1.2m	〃
	青葉山F地点(AOF)	理薬厚生会館除害施設	〃 10/14～10/27(10)	50㎡	2.0m	後期旧石器時代
試掘調査	青葉山B地点(AOB)	北青葉山図書分館新築工事	〃 11/21～12/21(24)	100㎡	2.5m	〃
立会	青葉山工学部厚生施設(3ヶ所)	除害施設	〃 10/4～6			遺構・遺物なし
	川内教養部厚生施設	〃	〃 11/25～			〃
	川内二の丸A地点北側	共同溝埋設	昭59年 1/12～20			近世(江戸)
	川内文系グランド北側(一部調査)	排水管埋設	〃 1/18 24～26			〃
	川内二の丸C地点拡張(一部調査)	除害施設	〃 1/27、28			〃
	青葉山工学部資源工学横	研究棟新築	〃 2/14			遺構・遺物なし
	青葉山理学部サイクロトロン横	焼却炉作業室新築	〃 2/25			〃
	川内教養部サッカー場	排水管埋設	〃 3/26 28～30			近世(江戸以降)

表1 昭和58年度の事前調査と立会

Tables. 1 Rescue excavations in fisical year 1983

(1) 川内地区の調査 (付図1)

8月1日から9月14日にかけて文系棟新築工事に伴う事前調査を実施した。この地区は、旧二の丸の西端にあたると推定された(二の丸第1次調査NM1と略記する)。

10月31日から11月30日までは、文系厚生施設の除害施設建設に伴う事前調査を実施し、二の丸、小広間附近と推定される遺構を発見した。この遺構の重要性が明らかになったことから全掘せずに保存のための措置を講じることとなった(二の丸第2次調査NM2)。

このための代替地として、さらに南西側に発掘区を移し、ひき続き12月1日から翌年1月9日まで調査を行った。その結果この地区からも、二の丸南端を画すと考えられる石垣が発見された。その重要性を考慮して、石垣部分を除いて施工することとし、残りの部分について記録保存のための調査を行った(二の丸第3次調査NM3)。

(2) 青葉山地区の調査

10月14日から10月27日にかけて、理学部・薬学部厚生施設の除害施設建設に伴う事前調査を

図1　東北大学と埋蔵文化財
Fig. 1 Archaeological sites and Tohoku Univesrsity

(1.2.6.7.10.11は東北大学構内もしくはその隣接遺跡である)

実施した。その結果、後期旧石器時代に属する石器の集中地点が発見され、周知の遺跡である青葉山B遺跡はこの部分まで広がっていることが判明した（青葉山F遺跡：AOF）。

さらに11月21日から12月21日にかけて、東北大学附属図書館北青葉山分館の新築に伴う試掘調査を実施し、後期旧石器時代に属する礫等を発見した他、基本層序を確認し、本調査に備えた。また3月1日からは、同地点の本調査を開始した（青葉山B遺跡：AOB）。

(3) 立 会 調 査

8件の立会調査は、青葉山地区3件、川内文系地区4件、川内教養部地区1件である。

立会調査は、掘削作業を監視しながら、必要に応じて調査員が、スコップ等で断面・平面を削り、図面を製作・写真撮影することを原則とした。

（梶原　洋）

第Ⅱ章　川内地区二の丸跡の調査

1．遺跡の立地と歴史的背景

東北大学文系四学部・教養部植物園一帯は、旧仙台城二の丸跡とその周辺の武家屋敷跡、お裏林などに相当する（図１、付図１）。

川内地区は、広瀬川に向かって西から東へ、ゆるやかに傾斜する海抜50～70mの上町段丘上にある。西から南へと大きく蛇行する広瀬川に囲まれるように位置し、広瀬川が仙台城の外堀として機能していたことが推測できる。南側には、海抜140m前後の仙台城本丸が控え、西側一帯には、東北大理学部・工学部の研究棟の立ち並ぶ、仙台市内でもっとも高位の段丘である青葉山段丘が城の背後を守るかのように連っている。川内地区の東側には市街地が広がり、一望のもとに見渡すことができる（図１）。

伊達政宗の仙台城築城以前については、詳細は明らかでないが、国分氏により城が築かれていた可能性が指摘されている（伊東1979）。

また、この地には現在、新寺小路にある龍川院があったとも伝えられている（伊東1979）。慶長５年（1600年）、政宗によって、現在の本丸部分の築城が開始されたが、その当時、現二の丸部分には、政宗の長女五郎八（いろは）姫の居住する西屋敷や、後に宇和島藩主となった政宗の四男宗泰の屋敷があったと言われている（伊東1979）。

仙台城二の丸の歴史をふりかえると、当初本丸で行われていた仙台藩の諸行事は寛永15年（1638年）二代目忠宗によって、二の丸の造営が開始されるとともに、二の丸に移された。その後、網村代の元録年間には大規模な改築が行われたことが知られている（佐藤巧　1962）。

当初南側に片寄っていた二の丸敷地は、やがて政宗時代の西屋敷の全てをとり込み、北側に拡張され、この部分に奥向きの建物が立ち並ぶことになる（佐藤巧1962）。このように二の丸は仙台藩の行政の中心であるとともに、藩主の居館としてもその威容を誇ってきた（付図１）。

戊辰戦争の動乱の後、仙台藩は大幅にその所領を削られ、藩主は知藩事となり、それと共に二の丸には藩の勤政庁が置かれた。明治４年（1871年）の廃藩置県以後は明治政府の管轄下におかれ、東北鎮台（仙台鎮台）の本営として使用された。しかし明治15年（1882年）失火のためにその建物のほぼ９割が失われた。その後、この地には、第二師団司令部が置かれ、第二次世界大戦後は、米軍の駐留する地となった。昭和32年（1957年）に至り、米軍より返還され、東北大学の管理下に入り教養部・理学部附属植物園として使われ、昭和47年（1972年）以降は文学部・教育学部・法学部・経済学部・図書館が置かれた。

2．二の丸第１次調査（ＮＭ１）

(1) 調査方法と経過

経済学部の西側新築される文系棟の建設に伴なう事前調査として、昭和57年(1982年)11月12日～11月22日までの実質８日間の試掘調査を行なった。発掘区は建築予定地の範囲内に十字形に設定し、調査を実施した。調査面積は110㎡である(図２)。

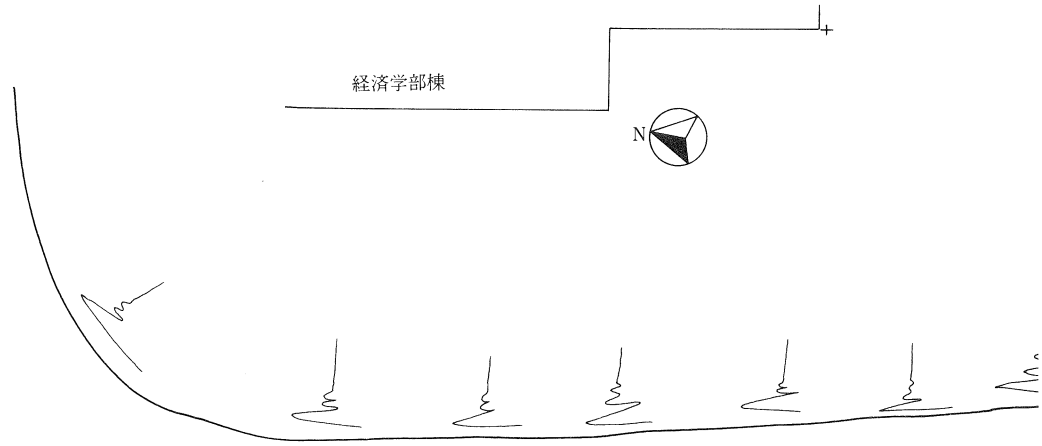
昭和58年(1983年) 8月1日から前年度試掘調査区の北側に、9×4ｍの発掘区を設定し、その内部を３×３ｍのグリッドに区分し調査を開始した。大学建設時の盛土を排除したが、地山が確認できないため、南側に２×１ｍの深掘区を設定し調査を進めた結果、約３ｍの盛土層下で江戸時代に属すると考えられる包含層を確認することができた(図３)。

その所見から、人力での排土は不可能と判断し、建設機械を使用して、15×10mの範囲を３ｍ掘り下げ調査を進めることとした。期間中降水と湧水により、しばしばグリッド上端まで満水となり、調査は著しく難行したが、４時期にわたる溝やピットを検出し(図４)、9月14日に調査は終了した(表２)。

830801	排土作業。湧水ひどく、ポンプ使用。1982年度とは異る方向の暗渠あり、北東すみに一部旧表土あり。やり方用貫板すみ打ち。
830802	排土作業継続、排水作業継続、北東すみ旧表土清掃、1セント銅貨(1953年)出土、陶磁片出土。
830803	北東隅2M×3Mの区を深掘り、北西区2M×2M深掘り。溝と遺構確認、遺物(瓦)出土。
830804	北東区－北西区のトレンチ設定、北西区南側ガリッド拡張、北西区深掘継続、20～30cmほど全体レベル下がる、平板にて地形測量、杭うち。経済学部棟南面の延長線を基準とし、発掘区南側に基準杭設定、3M×3Mグリッドとする。
830805	平板測量、遺構の観察。
830806	米軍暗渠等の攪乱はげしいので層位的な掘り下げをやめ、A･B-1(北東区)の深掘りに切りかえる。A-3･4(北西区)湧水のため放棄。
830808	平板測量、西側コンタ入れ。北東区深掘り続行、U字形土管測暗渠出土、水はけ悪く米軍盛土層はグライ化している。
830809	北東区深掘り続行、桟瓦、破片出土、土のグライ化激しく、沼か池のような部分か。B-3･4に2M×2Mの深掘り設定、平板測量西側コンタ入れ。
830810	AM雨、PM作業、北東区深掘り、３M下でグライ土。針金、コンクリート、新しい瓦など出土。
830811	北東区深掘りで、遺構の肩を出した。黒褐色土層内から丸瓦等出土。
830818	PM作業、水抜き作業、平板にグリッド、深掘区を入れる。原点移動し、新原点設定。
830819	水抜き作業、平板実測、暗渠を入れる、ユンボで西半分を掘削、湧水多く水抜き必要。
830820	ユンボで東半分を３M下黒色土 面まで掘削。西半湧水多く、ポンプ炭でつまる。
830822	AM作業中止、PM、水抜き、17:00ころ大型ポンプ来る。
830823	AM東半分排水終了、PM、東半分の清掃と壁削り、グライ土からレンガと磁器片(新、黒褐色土から、丸瓦、磁器片出土。)
830824	雨天のためAMのみ、東側壁崩落、ユンボ使用できず、北側セクション写真をとり、崩落に備える。
830825	水抜き３回、雨天中止。
830826	〃　〃
830827	〃　〃
830829	ユンボ使用、東半分、西半分を掘削清掃、東区深掘り黒褐色土排土、グライ土(８層)を出す。
830830	東区深掘り内で溝状遺構発見、ベルコン導入、馬作成。
830831	東区排土、溝の続き確認、西区清掃、地山とグライの境を出す、ベルコン２台運転。
830901	東区、排土後清掃、溝確認、西区溝確認後一部掘る。
830902	東区遺構写真掘りあげ、平瓦、丸瓦出土、溝１からは陶磁器出土、ピット１・２範囲確認。
830903	ピット２セクション、レベルとる。
830905	ピット1･2･3掘り上げ後、図面完了、溝１ほぼ掘りあげ、西区肩線入れ。
830906	ピット１、終了、ピット１に切られる、ピット４を発見、ピット３セクションレベル、溝２確認。
830907	南壁の土砂くずれを清掃、ピット４構掘りあげ、期限延長を決定。
830908	ピット４実測、ダメ押し、溝１ダメ押し、ピット５掘りあげ、溝２掘りあげ開始。
830909	溝２掘りあげ実測、東区北壁セクション写真了。
830910	雨　中止。
830912	雨のちくもり、AM水抜き作業、PM、東区北壁セクション。
830913	西壁(東区)セクション、注記終了。
830914	撤収作業。

表２　NM１の調査経過

Table. 2 A work record of daily excavations at NM1



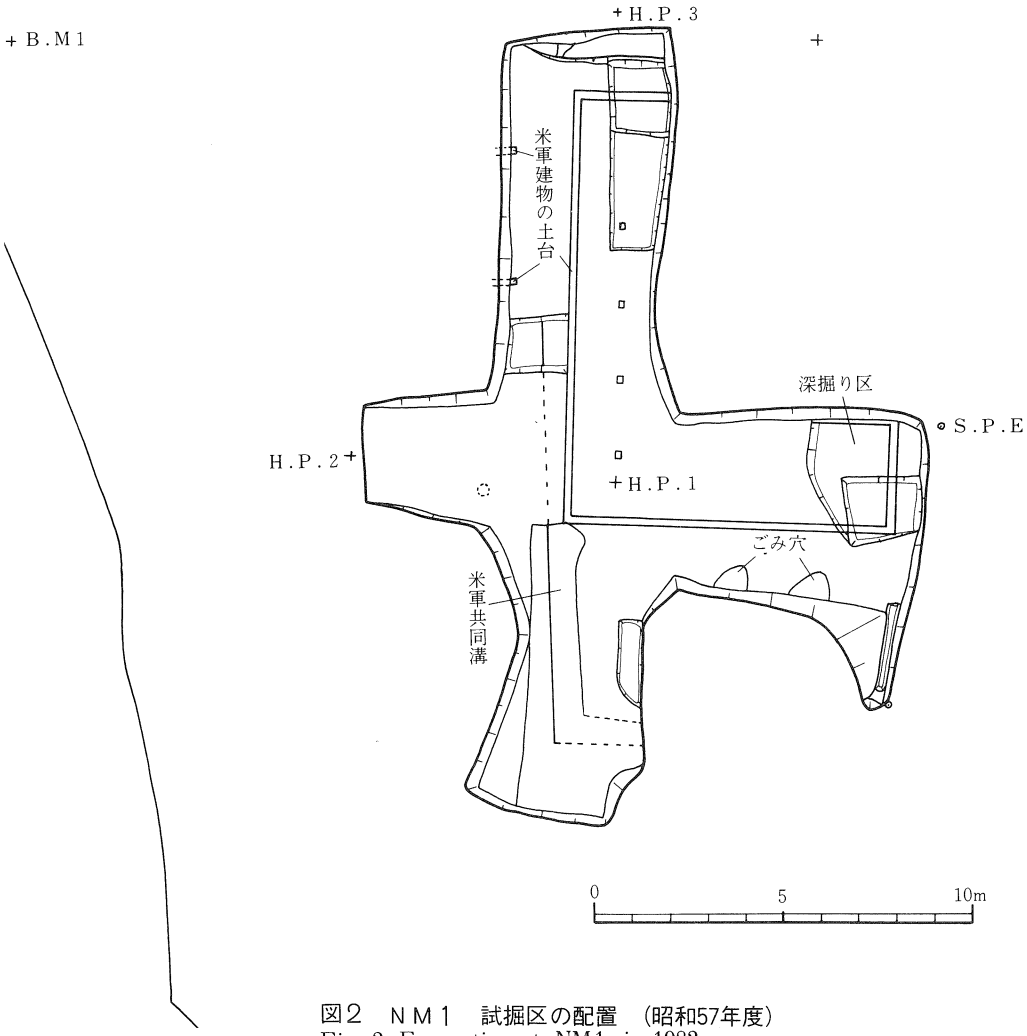


図2　ＮＭ１　試掘区の配置　(昭和57年度)
Fig. 2 Excavation at NM1 in 1982
NM1 i.s　NM1 i.e. Location 1 of *Ninomaru (Secondary Citadel)*

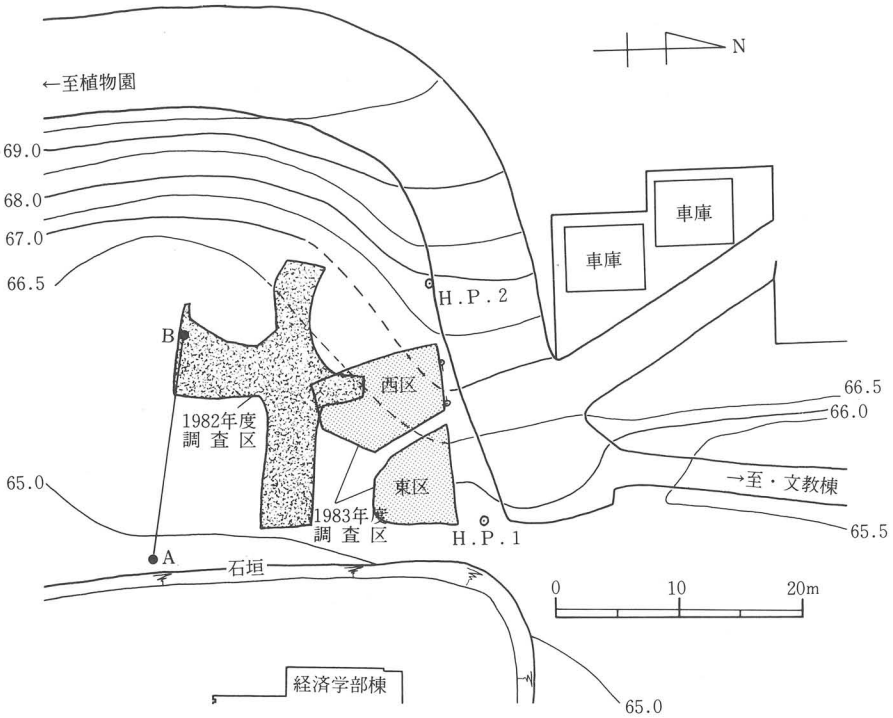


図3　NM1 (1982・83年) 発掘調査区の位置
Fig. 3 Location of excavations (1982, 1983) and elevations at NM1

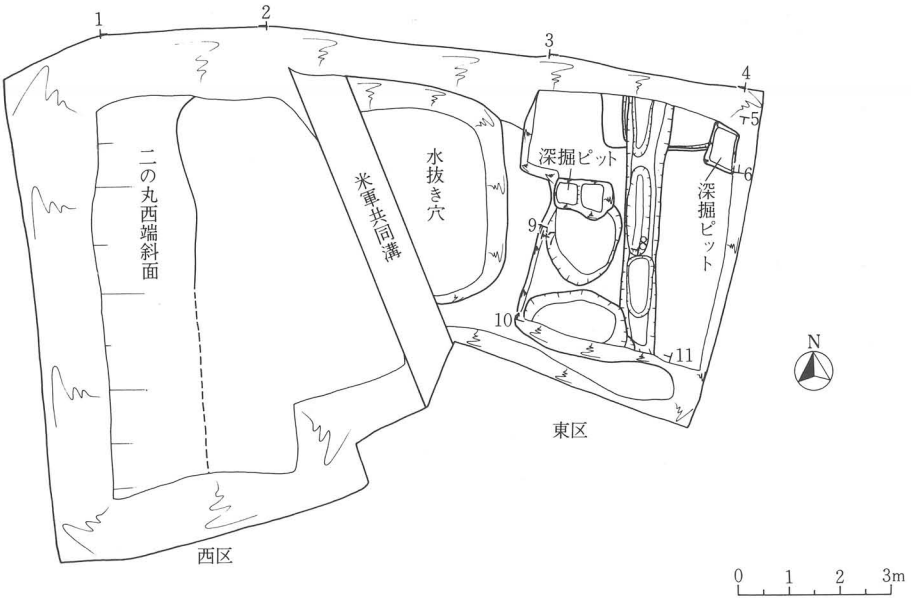


図4　NM1　1983年度発掘調査区の概況
Fig. 4 Excavation at NM1 in 1983

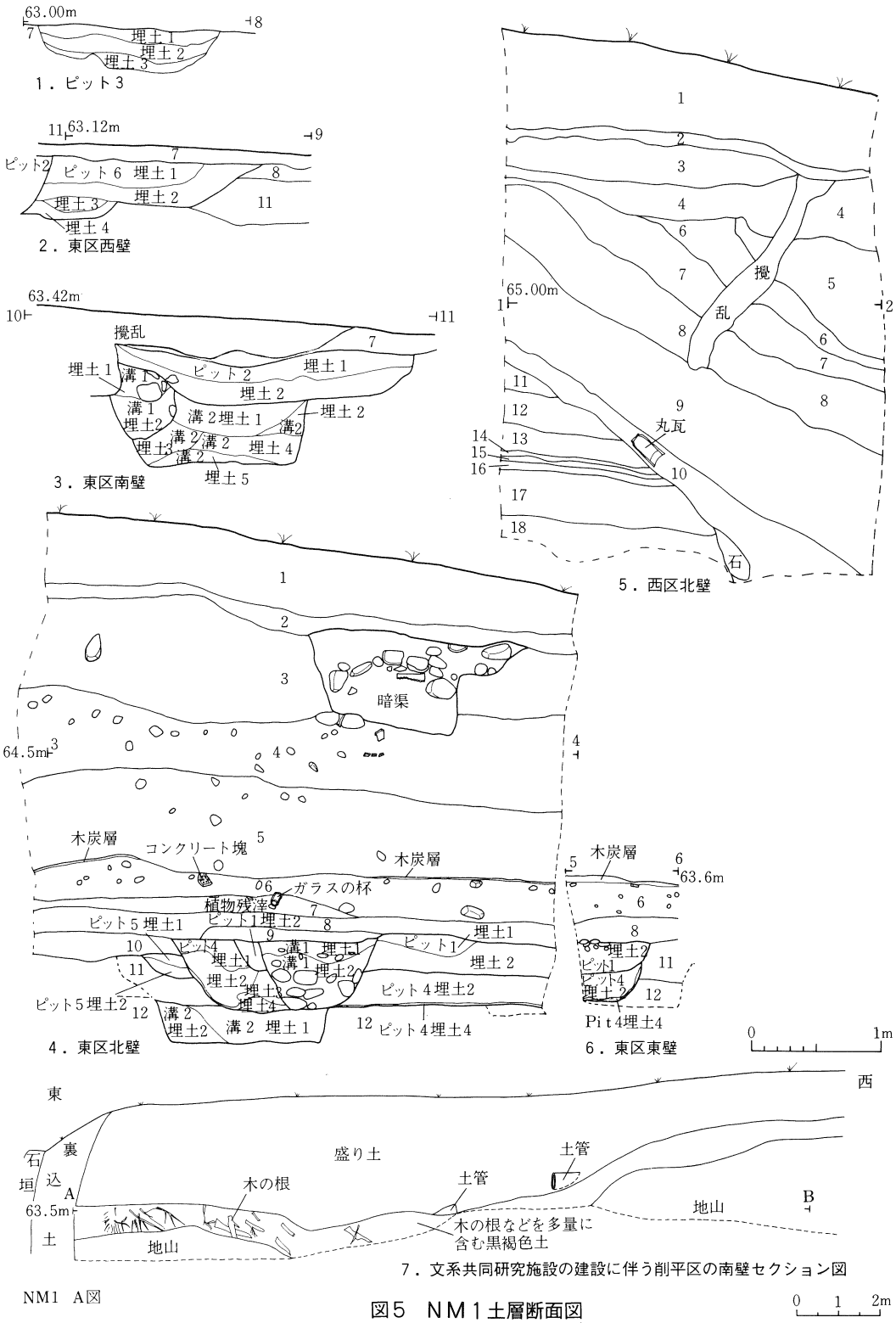


図5 NM1土層断面図
Fig. 5 Cross sections of NM1

(2) 層　　序　(図5)

1) 東　区

表土から約2m50cmの深さまでは、明治時代以降の盛土層と考えられる。1層は大学建設時のもの、2層から5層までは、米軍による整地(共同溝設置)層、6～7層(煉瓦・セメント片を含む)は、旧軍隊の盛土と考えられる。それ以下には、ガラス・煉瓦・セメント等の混入はなく、陶磁器類から見ても、江戸時代の包含層に相当すると推定できる。8層から11層までのうち、10・11層は自然の堆積によるものではなく、盛土層と考えられる。12層は地山の粘土層である。以下砂質土と粘土が交互に堆積しており、部分的に小礫もまじる。

2) 西　区(図5－5)

東区と同様9層までは、明治以降の盛土層と考えられる。10層が江戸期の層で、東区の8層に対応する。11層以下は自然層である。

11層以下を切って斜面が作られており、10層の下部には、斜面にそって石が置かれていた。

3) Ⅰ区南側断面(図5－7)

建設に伴う削平の結果、南側に連続した断面が形成され、当該地区の大まかな地形が把握できた。約2.5mの盛り土の下に木の根などを含む黒褐色シルト層が存在し、この層の上面が、かつて地表面だったことが推定できる。さらに地山の自然層が、幅8.5mに渡って掘り込まれ、堀状遺構の存在が予想される。黒褐色シルト層はおそらく東区の7層もしくは8層に対応すると考えられる。

以上の所見から、従来、大規模に削平されていると考えられていた文教棟・経済棟がある平坦面でも包含層は削除されたとしても、表土直下に遺構が残存している可能性が高くなった。

(3) 東区の遺構　(図6)

8層以下が、江戸時代以前に相当すると考えられる。遺構としては、溝が2本、ピットが6基検出された。掘り込み面と遺構との関係は、表3にまとめた。

1) 8層上面

① ピット2は、発掘区南西隅にあり、半分は区外である。楕円形を呈し、長径2.2m、深さは約30cmである。埋土中に径10cm程の小礫を含み、人為的に投げ込まれたと考えられる。溝1を切っている。

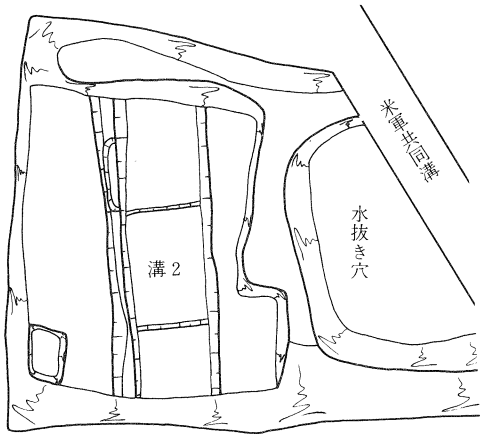
② ピット6は平面では確認されておらず、断面にのみ残っている。ピット2よりも新しい遺構である。

層	溝	ピット
8		6
		2
10	1	1
		4
11		5
12	2	

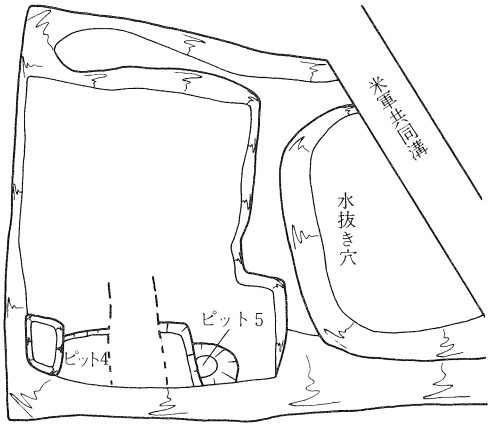
第3表 NM1の層序・遺構
Table. 3 Strata and features at NM1

2) 10層上面

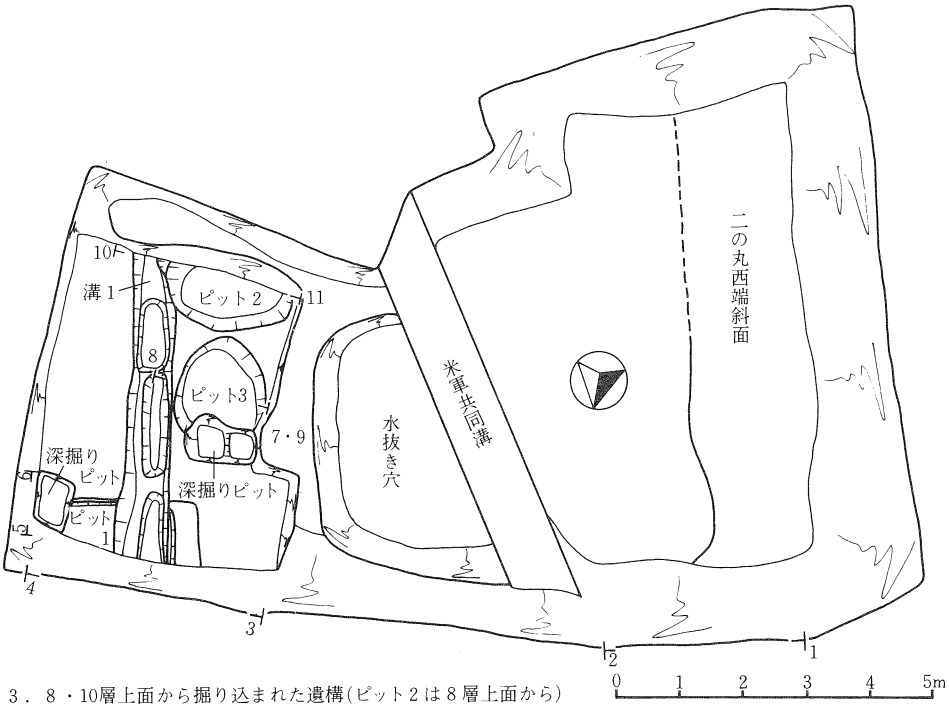
① 溝1は発掘区の中央を南北に走り、幅約80cm、深さが約30cmである。内部に5～10cmの礫



1．12層上面から掘り込まれた遺構



2．11層上面から掘り込まれた遺構(ピット4を除く)



3．8・10層上面から掘り込まれた遺構(ピット2は8層上面から)

図6 NM1遺構変遷図 (1983年度)

Fig. 6 Distribution of pits, drains and another features on each stratum at NM1

が詰め込まれており、人為的に埋めたと考えられる。傾斜は北が高く南が低い。暗渠と推定される。

② ピット1は、東区北東隅で確認されたが、大部分が区外にある。確認部の大きさは 2.2×0.9m、深さは約25cmである。 全体を推定すれば、方形の竪穴状遺構となろう。 壁の立上りは明瞭であり、床面も平坦である。柱穴等は確認されなかった。白山四丁目遺跡に類似の遺構が見られ、その中ではごみ穴と推定されている。しかし当遺構の場合は、遺物がほとんど見られないため性格は不明である。

③ ピット3は、 ピット2の北側に位置し、一部試掘抗によって切られているが、ほぼ円形に近い外形をもつ(図6)。径は約1.5m、深さは約10cmである。 遺物として埋土中から瓦片が発見された。

④ ピット4は、ピット1の直下にある。外形はピット1と同じくほぼ隅丸方形と推定されるが、西側に約50cmはり出し、深さも50cmとピット1より深い。このピットは一時期開口していたものが後に人為的に埋め戻されたと推定される。埋土2層から木片、3層から陶磁器片が発見された。形態と方向から考えてピット1は、ピット4の存在が明確だった時期に作られたと推定できることから、両遺構の時間差はほとんどないと考えられる。

⑤ ピット5は、ピット4に切られており、全体の形は不明である。深さは約18cmと浅い。

3) 12層上面

溝2は、溝1と同じく、南北方向に伸びる。幅は溝1より広く、約1.4m、深さはやや浅く25cmである。北から南に向って階段状の傾斜をもつ。

(4) NM1の遺物(図7、図版50、52—5・6)

1) 陶磁器類、金属器類、木製品類、自然遺物

いずれも破片であり、かつ少量のため、遺構・層序との関係を中心にして、それを表として示し(表4)、ここでは簡単な解説にとどめる。

① 東 区

3層

1953年アメリカ合衆国発行の1セント銅貨が出土した。裏面にはリンカーンの横顔が描かれ

出土地点		遺物	陶器					磁器				土師質	金属器		自然
			碗	皿	土瓶	徳利	その他	碗	皿	土瓶	その他	皿	その他	鉄器	その他	遺物
東区	3層	層中													1(1セント銅貨)	
	7層	層中				1	1	1 ?	2							
	8層	層中		1								6				
		ピット2														
	10層	溝1					1(刷け目)	4	1			1				1(貝)
	不明	ピット3	1			1						1				
	〃	不明										1		1(環)		
区	不明	不明			1(山水文)				1(擂絵)							

表4 NM1の遺物の分布

Table. 4 Distribution of artifacts at NM1

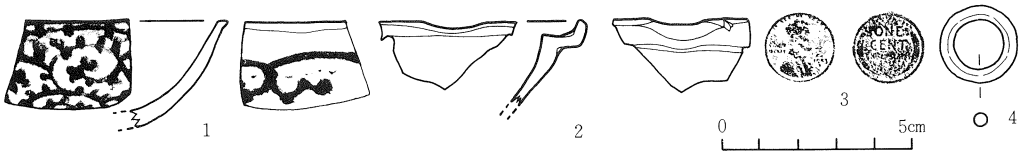


図7　NM1出土の遺物
Fig. 7 Artifacts from NM1

ている。米軍宿舎の整地層上から出土している(図7－3)。

7層

磁器：　内面に蕨(わらび)手唐草文を配し、外面にも唐草文を配した皿の破片(図7－1)の他に染付の碗と皿の破片が各1点出土した。

陶器：　外面に鉄釉をかけ、周囲に数条の沈線を廻らした徳利と推定される破片の他に、木灰釉を掛けた大堀の皿(図7－2)が出土している。

8層

陶器：層中から灰釉を掛けた皿の高台部分の破片が1点出土している。畳付の部分は露胎となっており、釉掛けの際の指痕も見られる。

土師質土器：ピット2から灯明皿の破片が4点まとまって出土した他、胎土に2～3mmの礫を含む異った土器が2点発見されており、時代が遡る可能性がある。

10層

磁器：溝1から染付茶碗の破片が4点、皿の破片が1点出土した。皿の内面には文様の一部があるが、全体の構成は不明である。裏面は唐草文の末端が見られる。

陶器：同様に溝1から唐津産の内面に刷毛目の施された鉢の破片が出土している。

土師質土器：溝1から灯明皿の破片が1点出土した。

不明層

陶器：ピット3から茶碗の口縁部破片が1点、徳利の体部破片が1点出土している。茶碗には木灰釉が、徳利の外面には吹掛絵付透明釉・内面には木灰釉が掛けられている。

金属製品：鉄製の輪が1点出土した(図7－4)。

ピット2・3出土の礫：なお、ピット2・3の埋土には、拳大から人頭大の礫が多数含まれており、これらを採集して観察したが、人為的な加工および使用の痕跡が見られるものは無かった。仙台市今泉城(山田1983)や多賀城市新田遺跡北寿福寺地区(多賀城市教委 近刊)では、中世の礫石器や石製品が数多く出土しており、時代的な違いを感じさせるが、江戸時代のこうした礫の性格も今後明らかにしなければならない課題のひとつである。

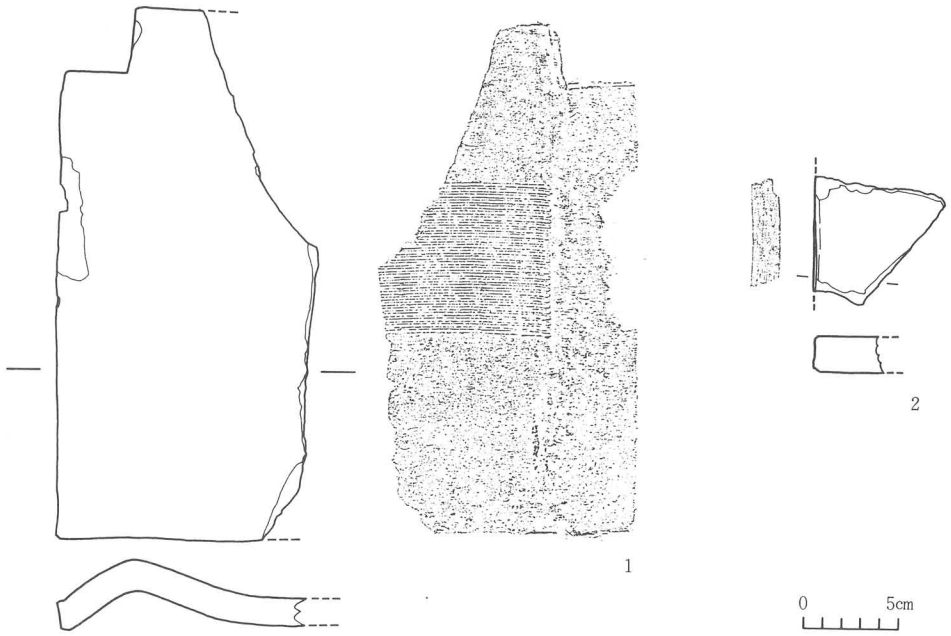


図8　NM1出土の瓦(1)
Fig. 8 Ceramic roof tiles from NM1 (1)

② 西　区

層不明だが、陶器としては大堀の山水土瓶の体部破片が1点出土し、磁器としては、摺絵(すりえ)の染付皿の破片が1点出土した。　(梶原　洋)

2）NM1出土の瓦（図8・9、図版50、52―5・6）

破片総数は123点と発掘区の面積に比べて少ない。丸瓦・平瓦・軒平瓦・桟(さん)瓦が出土しているが、図示できるものはほとんどなく、軒平瓦2点、丸瓦2点、桟瓦1点、印の押された平瓦片1点の計6点のみである。全体に共通して、胎土は小石まじりで粗い（表5）。

①軒平瓦（図9―1・2）　唐草文様をもつもの2点のみの出土である。2点とも瓦当部の破片であり、しかも少片で、全体の文様はわからない。調整は瓦当部の表は型づくりのまま。瓦当部の裏、凹面はヨコナデ調整され、平滑である。凸面は粗いヘラケズリされ、ざらざらしている。文様のある瓦当の表面には、型から抜くのを容易にするためか、砂が付着している。

②丸瓦（図9―3・4）　図示した2点の他に破片が10点ある。調整は3・4ともに凹面は布目と布目に切られた横方向の筋目が見え、凸面は玉縁部、体部ともヨコナデで仕上げられている。凹面の筋目は型に入れる以前に、粘土塊から1個体分の粘土を切離す際についたものと思われる。他に凸面をヘラミガキで仕上げている破片、凹面に棒状のものをさしこんだような圧痕を残す破片がある。

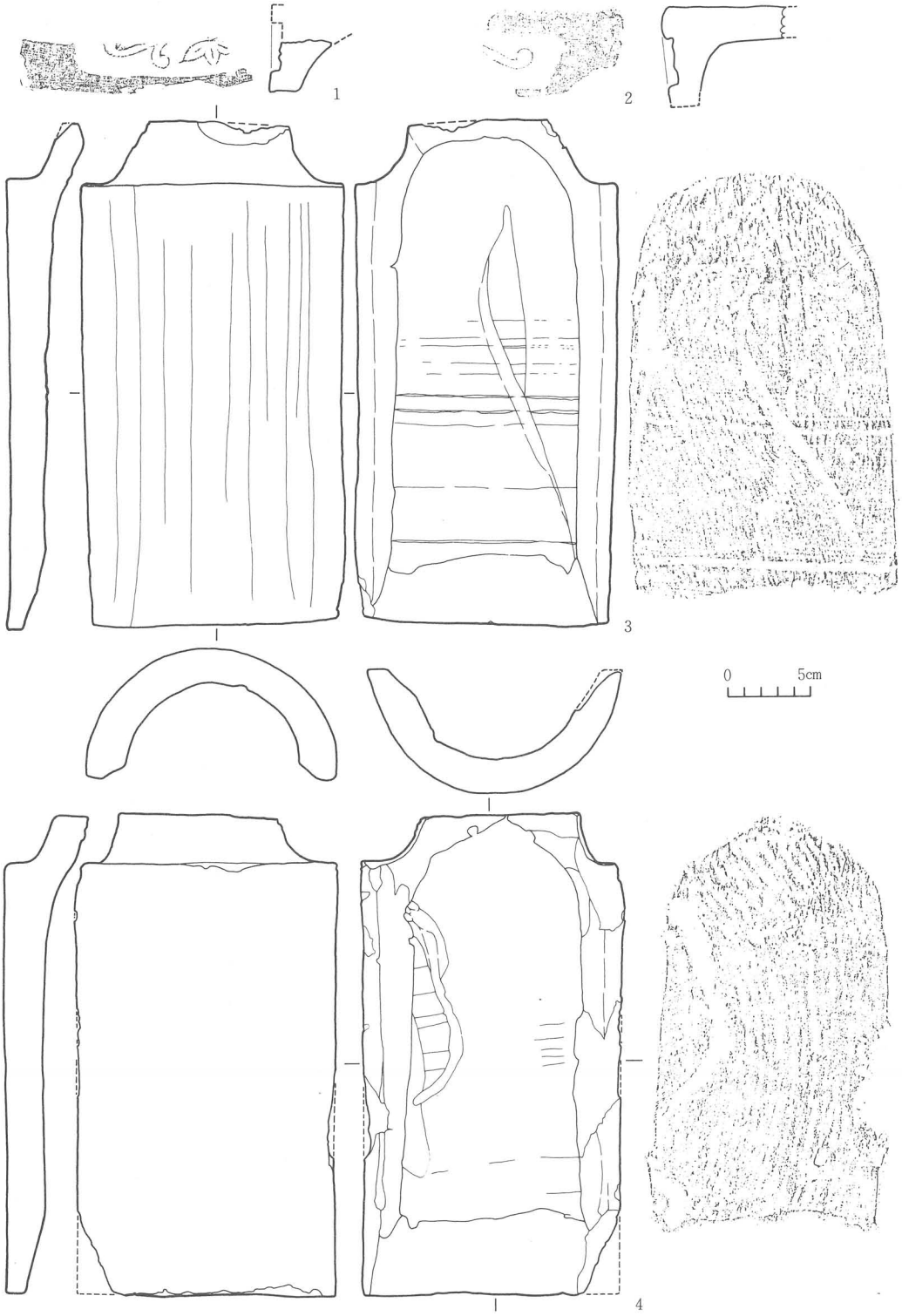


図9　NM1出土の瓦(2)
Fig. 9 Ceramic roof tiles from NM1 (2)

図	出土区層位	種類	残存部位	法量（単位mm）				色調 表面	色調 割れ口	胎土	焼成	備考	図版
9－1	1号溝東区埋土中	軒平瓦	瓦当部	長(145)		幅(30)		N4/1 灰色	N 8/1 灰白色	小石混じりの粗い胎土	不良	唐草文	
9－2	中央区深掘り	〃	〃	長(62)		幅 54		〃	10Y 7/1 灰白色	〃	〃	〃	
9－3	西区10層	丸瓦		長 305	幅 155	高 79	厚 20	2.5GY4/1暗オリーブ灰色～10GY7/1明緑灰色	10Y 6/1 灰色	〃	良好		
9－4	撹乱中	丸瓦		290	156	72	19	N5/1 灰色	N 5/1 〃	〃	良好		
8－1	北東区グライ層	桟瓦		長277	幅130	厚18		N4/1 〃	10Y 7/1灰白色	〃	不良	裏面に櫛目あり	
8－2	北東区深掘り グライ仕下部	平瓦片						N3/1 〃	〃	〃	〃	富の印(鑑)を押したもの	

表5　NM1の瓦の属性表

Table 5 Attributes list of ceramic roof tiles from NM1

③**桟瓦**（図８－１）　西区斜面の明治以降の盛土層から出土したものである。型づくりの後、調整はほとんど加えられていない。凹面には櫛目が施される。

④**平瓦片**（図８－２）　「富」の印が押されている。

平瓦は出土しているが、図示できるものはない。図９－３は西区10層、図９－４はカクランから出土している。図９－１は溝１の埋土、図９－２は試掘深掘出土で８層相当層から出土しており、仙台城二の丸と関連ある遺物である。　（前沢聡央）

(5) ま　と　め

遺構は、４時期にわたる。まず、12層上面（自然層）に溝２を構築し、人為的に埋め戻した後（もしくは同時に）、11層を盛土し、そこにピット５を掘る。さらに10層を盛土し、ピット４→ピット１→溝１を構築する。その後９層・８層を盛土し、ピット２→ピット６（ピット３は切りあいなし）を構築している。溝１と２が同一方向に走り、ピット１と４が同一位置に同じような形態で構築されている事実は、盛土による断続はあるものの、これらの遺構のそれぞれの位置関係がはっきりと知られている程度の時間内で、次々と構築されたことを示している。

二の丸絵図中、享和二年（1802年）図をもとにした旧二の丸と四学部建築物との関係位置図（付図1）を参照すれば、当該地区は、二の丸の最西端を画する堀状の部分にあたっており、溝１・２がそれに相当する可能性もある。しかし、いずれの溝も幅が1.4m、そして0.8mと細く、図に示された堀（１/1000として幅約４m）ほど広くはない。この堀についてはむしろ工区断面に現われた、幅８m程の落ち込み部が相当する可能性がある（図５－7）。ピットについては、絵図中にそれらしきものを見出すことはできない。また、西区では断面図に見られるように斜面となっており（図５－5）、これは絵図中に見られる観音堂へ至る階段で示される斜面に比定される可能性が高い。絵図中に見られるように、この部分は、二の丸の建物区域外であり、恒久的な建物などがあったとは考えられない。しかし、臨時的な建物が存在していた可能性は充分に考えられる。この地点では、瓦がやや多く出土するものの、その他の遺物は極めて少なく、時代を明確に判定できるものはない。このことは、この地点が二の丸の中心部から外れていたことと関連すると考えられる。　（梶原　洋）

3．二の丸第2次調査（NM2）

(1) 調査方法と経過

調査区は、川内地区の南端にある文系厚生施設の東側にあたる。厚生施設の建物に平行して調査区を設定した。長軸の方位はN16°E、大きさは東西5.5m、南北10mである。これをさらに3mの小グリッドに区画し、南北方向をA～D、東西方向を1～2とした(図10)。試掘の結果、約1mの厚さで盛土があり、その下に二の丸の建物跡が確認された。バックホーによって盛土層を排土し、調査を開始した。調査の経過は表6に示した。遺物は、区(小グリット)・層・遺構構ごとに収納し、実測は遺形を使用した。

(2) 層　　序（図11)

基本層序は、大別すると次の通りである。1層(盛土層)は、大学建設時の1a層と、米軍駐留時と考えられる。粘土を主体とする1b層と、その下の1c層からなる。2層は焼土直上の砂層で、整地層と考えられる。3層は基本的に火災による焼土層である。一部は火災直後に整地を受けていると推定される。4層は、3層直下の火災による炭層、もしくは炭化物を多量に含む層である。5層・6層・7a層は、砂・粘土からなる層で、盛土層と判断される。7b層以下は、自然堆積層である。

(3) 遺　　構

3層(焼土整地層)を境に、大きく二の丸焼失以後と以前にわけられる。

1) 2層上面（二の丸焼失以降の盛土層　図12)

2層を掘り込んで作られている遺構としては、8基のピットが確認された。ピット7・8・10は外形がほぼ正方形に近く、内部に丸石が詰め込まれ、埋土として砂が入る。ピット6・12は丸石はないが、埋土しての砂が入る。これらは礎石の掘り方と判断されるが、建物の規模・プランは復元できなかった。ピット9と11の性格は不明である。

2) 3層上面（二の丸焼失後、焼土整地層　図13)

遺構としては、主にピットが検出された。

ピット1・2・4・5・24は焼土を含む埋土を持つ。この中で特にピット1には、炭化骨片が混じっていた。ピット24からは、焼けた骨片が多量に検出され、種の同定が行われた(本文第Ⅶ章)。

ピット13・14・15・16・17・23は焼土を含む不定形のピットであるが、下部から根石と思われる礫群が検出され、礎石の抜き取り痕と判断された。

3) 5層上面（二の丸焼失面　図14)

主な遺構としては、帯状の焼け面とピットが検出された。

帯状の焼け面は、礎石抜き取り痕の間を結ぶように広がる。周囲に縁石を持ち、径5cm程の

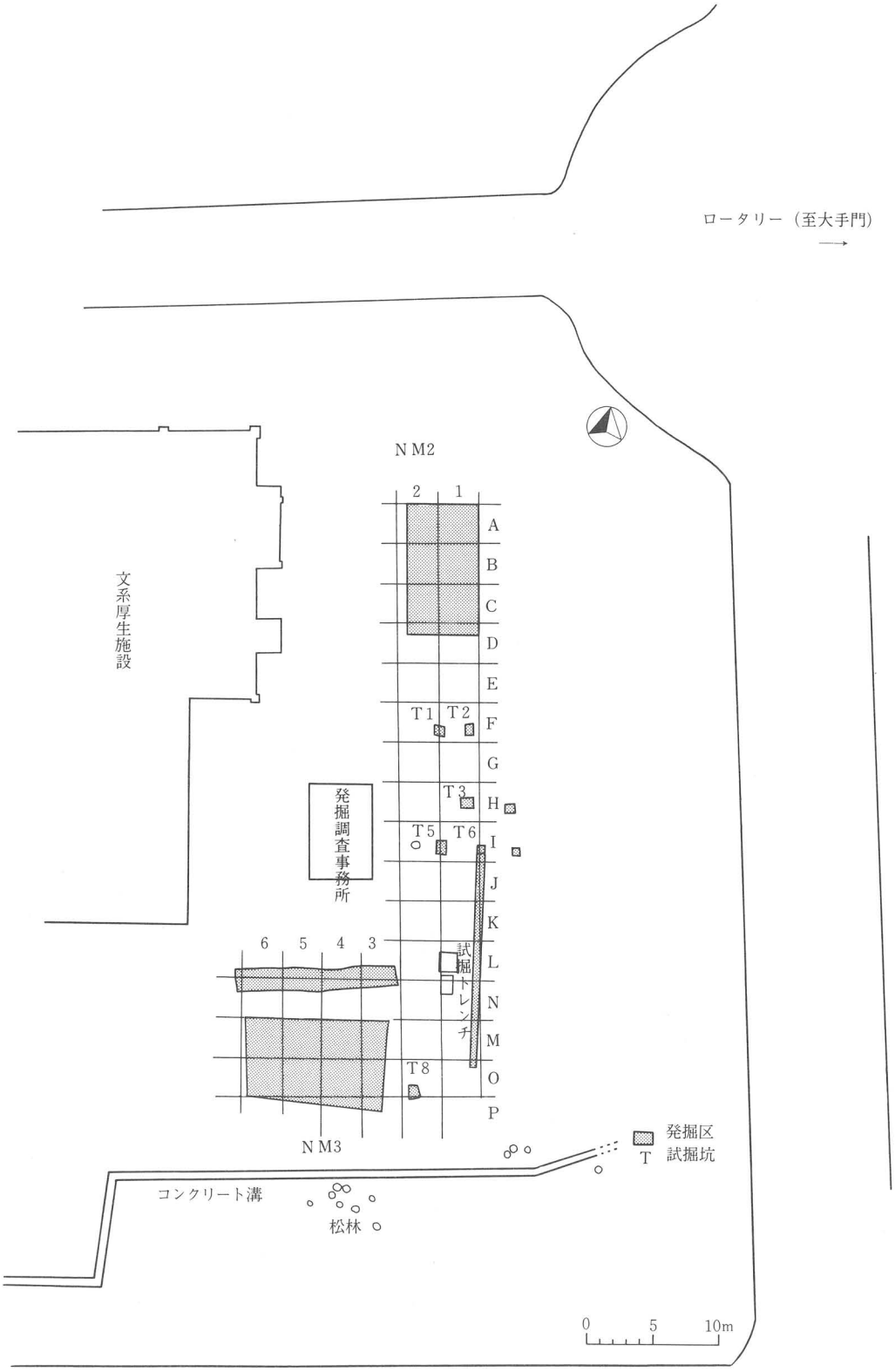


図10　NM2・NM3発掘区試掘坑配置図

Fig. 10 Grids showing location of excavations and test pits at NM2 and NM3

NM2 and NM3 i.e. Location 2 and 3 of *Ninomaru* (Secondary Citaclel) of Sendai Castle

	83 10/31	11/1	11/2	11/4	11/5	11/7	11/8	11/9	11/10	11/11	11/12	11/14	11/15	11/16	11/17	11/18	11/19	11/21	11/22	11/25
①発掘にともなう諸作業	①器材移動 ②発掘区内清掃																			・前日の雨のため排水 ・拡張のため試掘
②発掘区全体に関する諸作業 グリット 全測セクション 原点移動	①グリット設定 ②深　掘	①原点移動 ②全体図実測	・やり方を組む																	発掘区全景写真
③基本層の掘り下げ		①2層上面清掃 ②2層の掘り下げ ③3層上面清掃 ④3層の掘り下げ					・4層上面の清掃と掘り下げ		・5層上面の清掃	・5層の掘り下げ				・5層掘り下げ(B−1、C−1区) ・C−2、D−2区まで掘り下げ	・A−2を一部掘り下げ				・B−1区6の掘り下げ	
④基本層についての実測写真		①2層上面写真 ②3層上面写真		①A−2区焼けた壁土写真	②A−2区焼けた壁土写真	①C−1区焼けた壁土写真						・金箔付木片の分布図	・6層上面実測							
⑤遺構の掘り下げ			pit 1 2 4 5 6 7 11	pit 12			pit 13 14 15 16 17 18 ・焼け面遺構確認			・pit 23 24 礎石1の据付個			・pit13,14 据え方 ・pit 27範囲確認	・pit17据え方 ・pit 23据え方 ・pit33,34	・pit 34据え方 ・pit 27遺物取り上げ		・pit 27 ・pit 33 ・pit 23据え方	・1号溝確認		
⑥遺構の実測				pit 4 5 7 8 9			pit 13 14 15 16 17 18	・焼け面遺構(C−1区付近) ・A−1、2区の砂の分布(pit 27)	pit 19 20 21 22	pit 23 24 25 26	・pit 19、20再実測	・pit15礎石据え方 ・pit 28 29 30 31	・礎石1の据付個	・pit17据え方 ・石敷遺構(pit 27)	pit13据え方 pit14 〃 pit17 〃		・pit 33	・pit 34	・pit 23据え方 ・1号溝上面	
⑦見学者			須藤助教授 阿子島 関沢 須田 山田しょう 市村	芹沢長介先生御夫妻 山田しょう 森島 市村 生協職員	須田 山田しょう 森島 市村		芹沢先生 須藤助教授 須田 宮脇 大立目	柳沢 佐久間 市村	市村	須藤助教授 阿子島 野田 金田 森島 青山	後藤秀一	阿子島 田中発田 田 山田しょう 山田しょう 森島 藤田 大矢 市村 大立目	須藤助教授 山田 大矢 市村 田村	渡辺教授 柳沢 山田しょう 大矢 市矢	須藤助教授 佐久間 市村	佐藤巧教授				柳沢 森島

11/26	11/28	11/29	11/30		12/23	12/24	12/26	12/26	12/27	12/28	12/29	12/30	12/31		84 1/7	1/9	1/10		1/17	
・拡張のため試掘		・NMC重機による排土															・現場プレハブの引越し			
発掘区全景写真			セクション編引		・東壁セクション ・やり方修正	セクション実測						・全体の清掃 ・全景写真 ・セクション図作成				・セクション図再検討 ・遺物の抜きとり			・北壁セクション図修正	
	・A−1、A−2区、6層掘り下げと遺構検出																			
	グライ層(pit 36)の確認															・pit 36西側壁面精査				
・pit 27石敷遺構																				
仙台市文化財係職員山田しょう			山田晃 須田 市村	山田晃 山田しょう																

表6　NM2の調査経過

Table. 6 A work record of daily excavations at NM2

層名	色調	土質	内容	
1a	黒褐色	シルト＋礫＋粘土	コンクリート片、ガラス片が多く、砂、シルト、粘土、礫が不均質に混じる盛土層	
1b	黄褐色	砂礫＋粘土	礫、粘土塊が不均質に混じる。盛土層	
1c	灰色	砂質土	上下に酸化鉄を含む砂層	
2a	灰褐色	砂質土	酸化鉄を含む	
2b	黄褐色	砂質＋粘土	1cm以下の礫を含む	
3a	青灰色	砂土質土	炭、酸化鉄を含む	焼失後整地層
3b	赤褐色	砂質土	焼土層、炭、遺物を含む	焼失後整地層
4	黒色	炭化物	炭もしくは、焼土面、遺物を含む	焼け面
5a	明灰色	砂質土	上部熱による変色、酸化鉄斑を若干含む	自然層
5b	褐色	シルト質土	黒褐色と黄褐色の粘土塊がまだら状に混じる上面は焼け面を形成する部分もある	自然層
5c	黄褐色	砂質粘土	径約1cm程度の礫を多く含む、酸化鉄によって赤味を帯びる	自然層
5d	灰色	砂質土	部分的に腐植土を含む	自然層
6a	黄褐色	砂礫土	最大5cmの礫や腐れ礫を含む、酸化鉄によって赤味を帯びる	自然層
6b	青灰色	砂質土	部分的に存在	自然層
7a	黒褐色	砂質土	粘土を含む、部分的	自然層
7b	黄褐色	砂質土	1～2cmの小礫を多く含む	自然層
8	赤褐色	砂質土	酸化鉄を多く含む	自然層
9	黒褐色	シルト質土	黒色の植物遺体から成る	自然層
10	灰褐色	シルト質粘土		自然層
11	青灰色	砂質粘土	植物遺体をまばらに含む	自然層

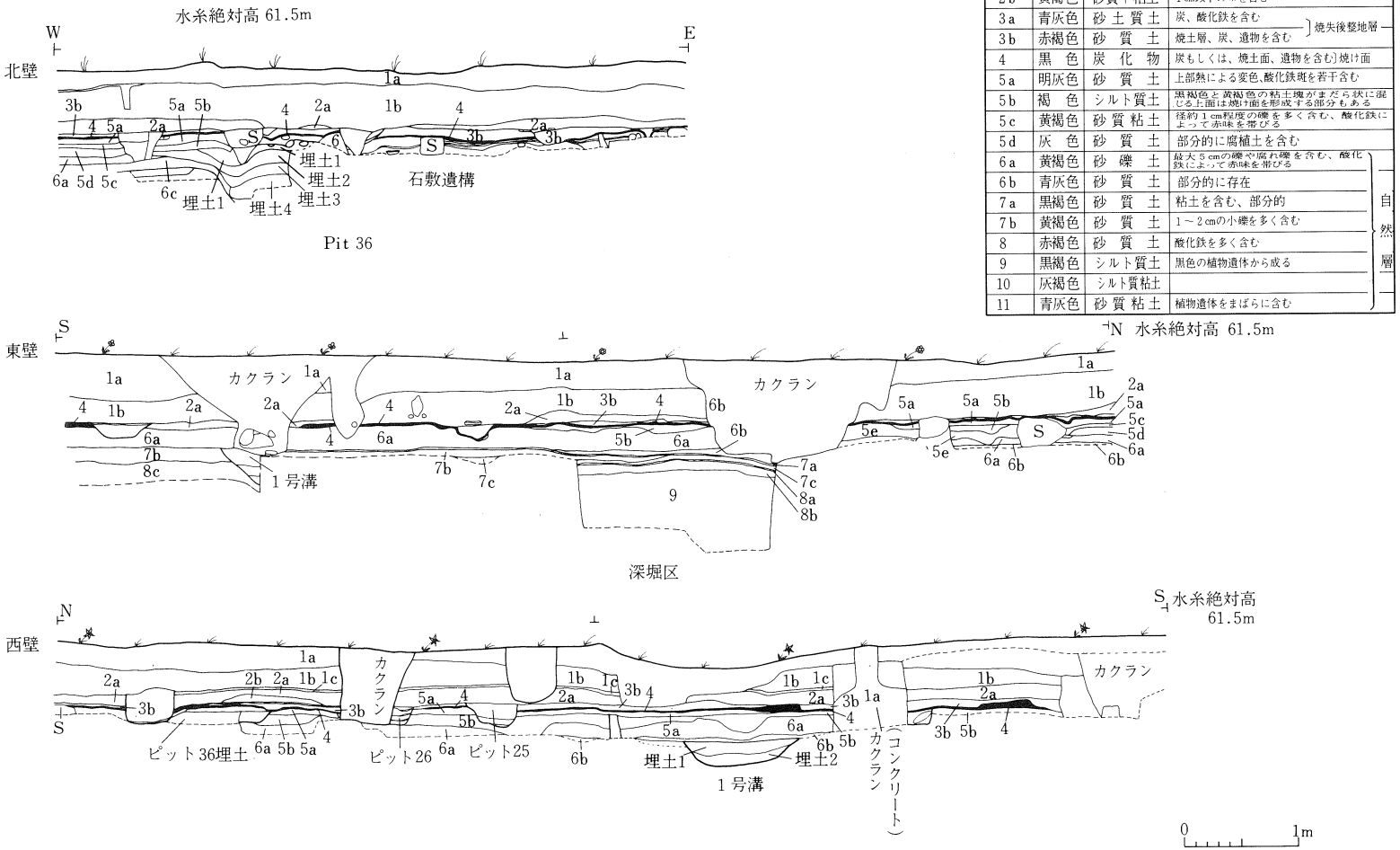
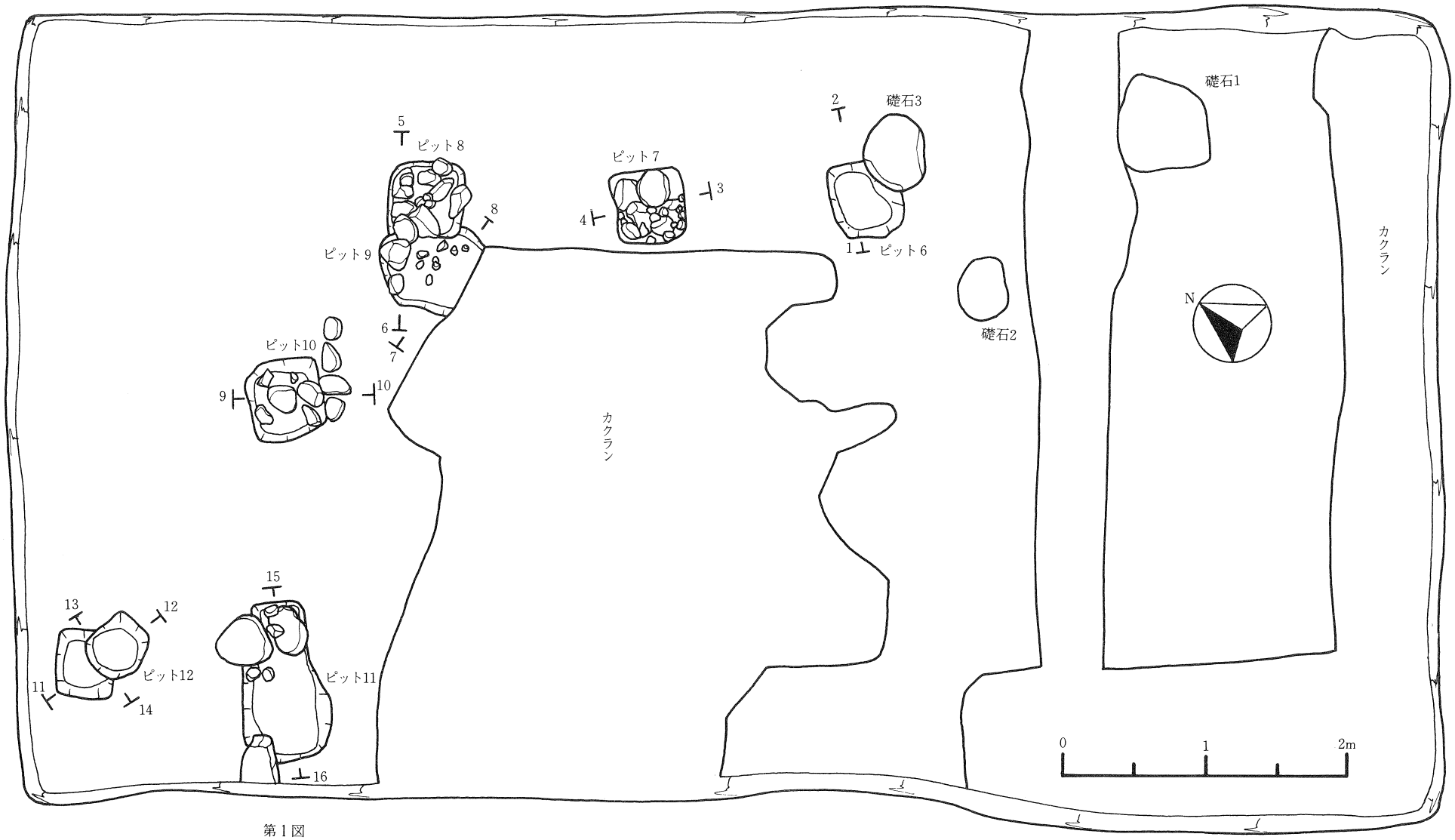
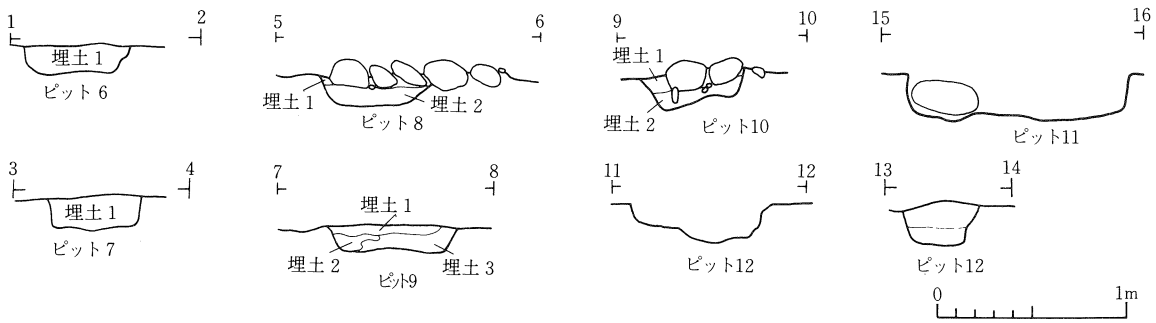


図11 NM2 土層断面図

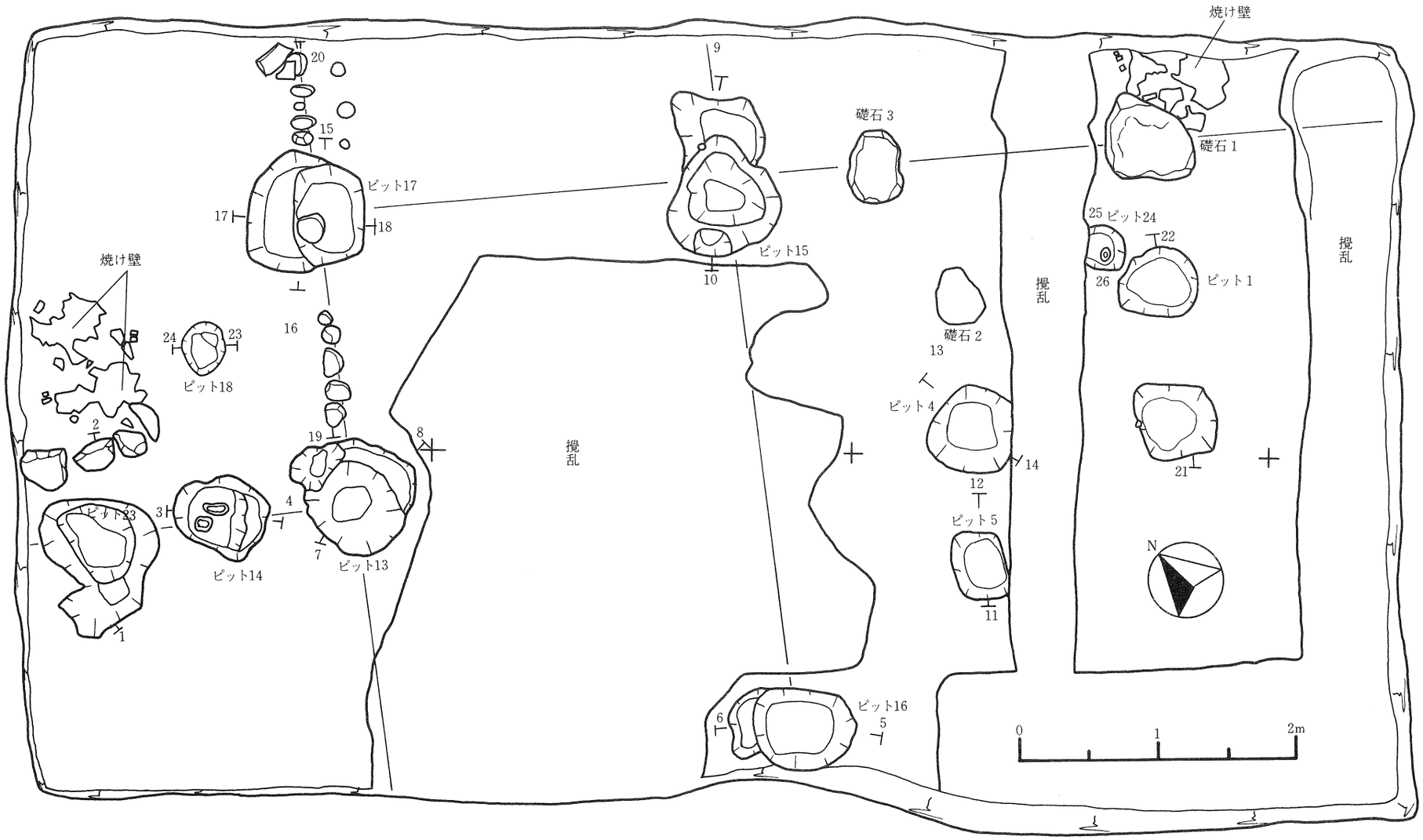
Fig.11 Cross sections of excavation at NM2

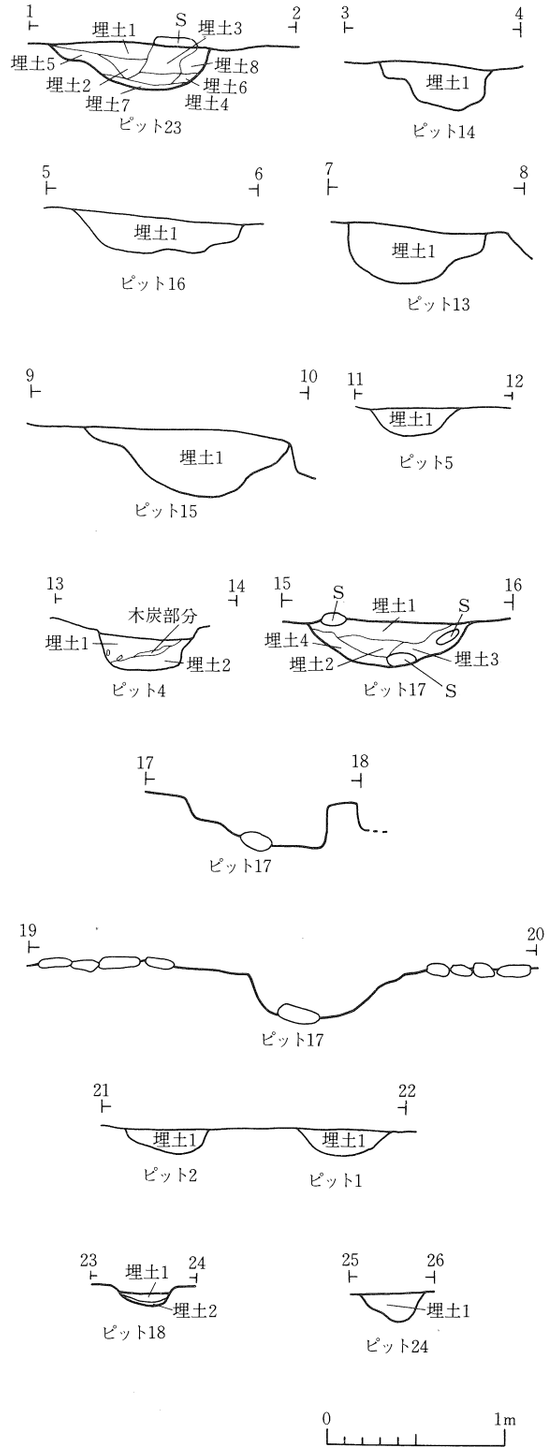




	埋土	色調	土質	備考
ピット6	1	灰褐色	粗砂	焼けていない粗砂が主体となる。
ピット7	1	灰褐色	粗砂	粗砂が主体で、玉石、礫が多量に含まれる。
ピット8	1	灰褐色	礫を多く混入する粗砂	2～3cmの礫が多量に含まれる。炭化物を少量含む。
	2	黄褐色	シルト質粘土	2～3cmの小礫を少量含む。しまり、粘性あり。
ピット9	1	黄褐色	粘土	青灰色粘土をブロック状に含む。小礫を含む。粘性、しまりあり。
	2	赤褐色	砂質ローム	3層起源の焼土を主体とする。しまり粘性なし遺物をかなり含む。
	3	灰褐色	シルト質粘土	小礫を含む。粘性、しまりやや良。
ピット10	1	灰褐色	玉石を含む粗砂層	しまりはないが、部分的に乳灰白色粘土ブロックを含む。上部の玉石はよくしまって据えられている。
	2	黄褐色	粗砂を多量にふくむシルト	焼土、木炭粒をふくむ。しまり良。
ピット12	1	黄褐色	シルト質粘土	砂、礫、が混入する。
	2	黄褐色	シルト質粘土	焼土塊、木炭粒が多量に含まれる。

図12 ＮＭ２遺構配置図・断面図(２層上面)
Fig. 12 Distribution and cross sections of features on stratum 2 at NM2



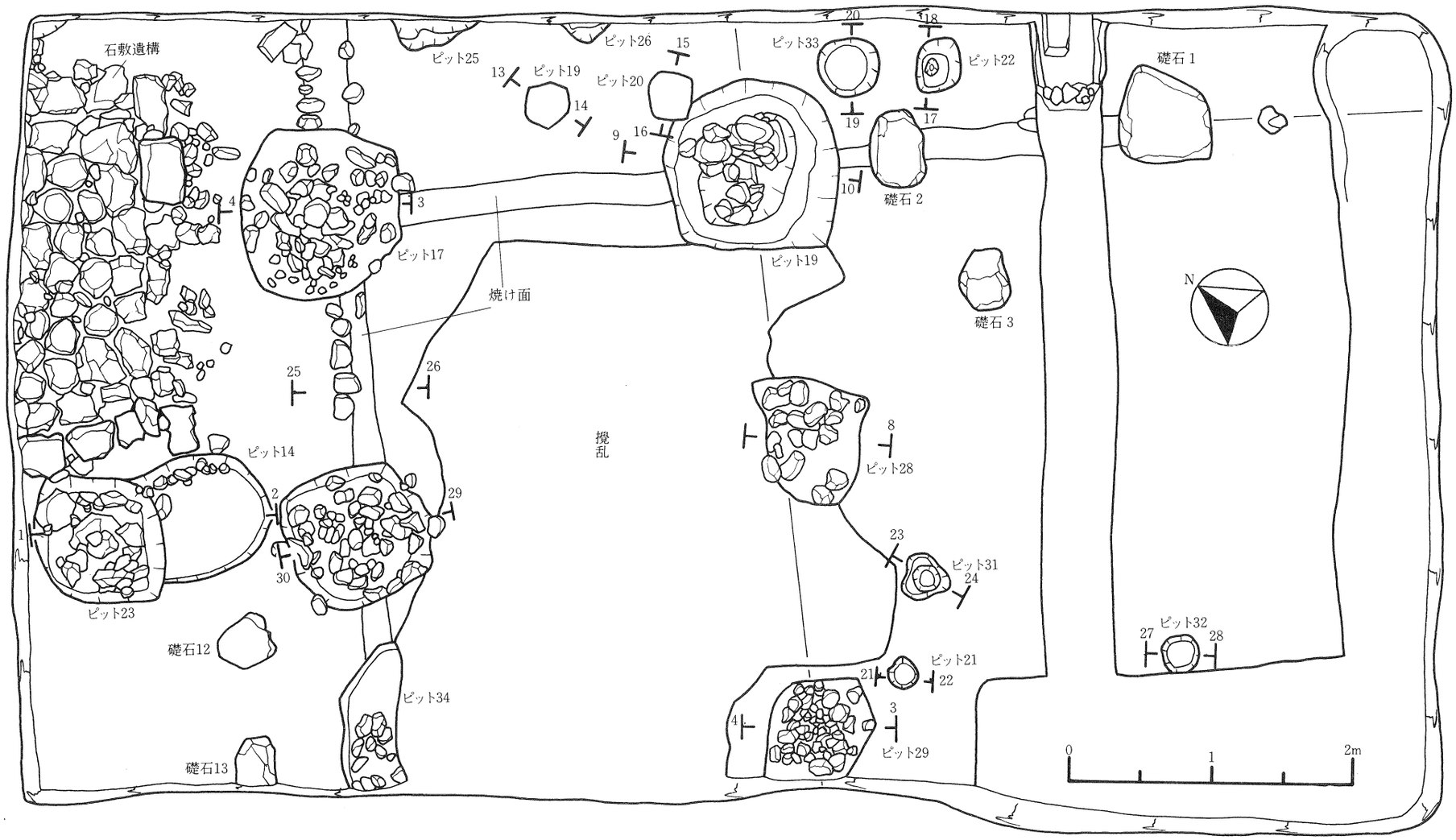


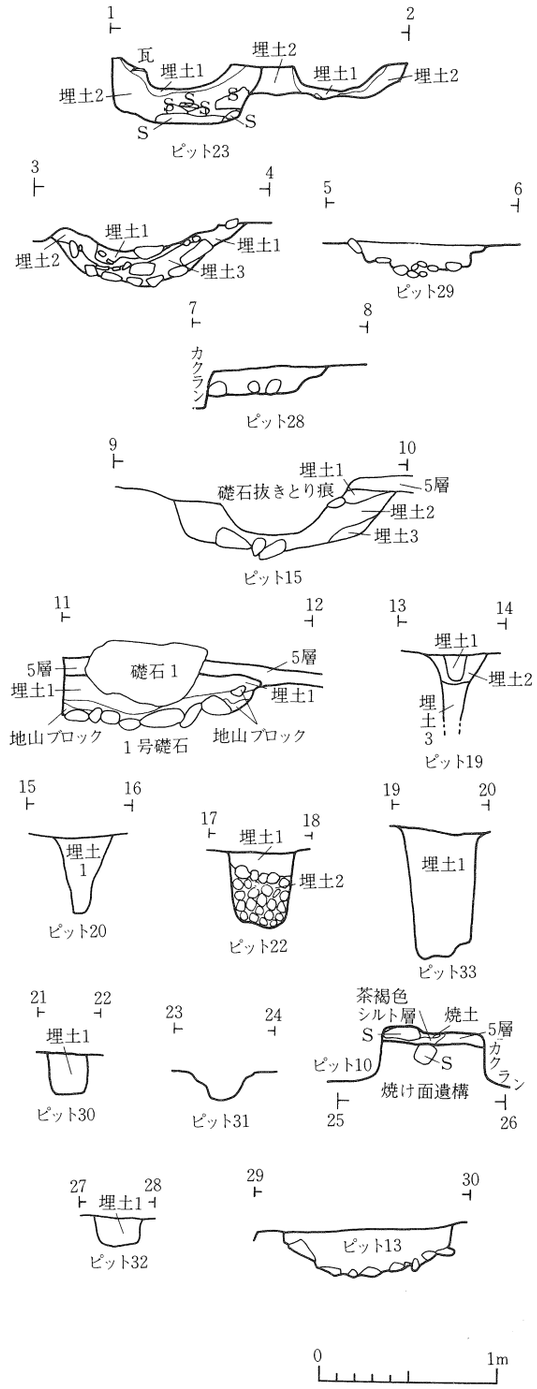
遺構	埋土	色調	土質	備考
ピット23	1	赤褐色	砂質ローム	焼土、粘土、礫が不均質に混じる層。ガラス片あり。
	2	赤褐色	砂質ローム	焼土が主体で木炭粒、粘土が混じる層。磁器片あり
	3	黄褐色	砂質ローム	黄褐色の粘土と焼土(粗砂)とが不均質に混じる層。
	4	灰褐色	粘土	木炭粒が混じる。
	5	黄褐色	粘土質ローム	黄褐色粘土、焼土、木炭粒が不均質に混じり、小礫が混入。
	6	灰褐色	粘土質ローム	灰褐色色粘土に焼土(粗砂)がブロック状に混じる層。
	7	灰褐色	砂質粘土	木炭粒と焼土とがブロック状に混じる層。
	8	灰褐色	粘土	木炭粒が多量に含まれる。
ピット14	1	赤褐色	砂質ローム	赤褐色の焼土に灰白色粘土をブロック状に含む。木炭粒、小礫を含む。底面にしまりの良い焼土(粗砂)層が広がっている。
ピット16	1	赤褐色	砂質ローム	木炭粒、灰褐色粘土、5層起源のブロック、焼土(粗砂)、礫を含む。
ピット13	1	赤褐色	砂質ローム	赤褐色の焼土に灰白色粒土をブロック状に含む。木炭粒、小礫を含む。底面にしまりの良い焼土(粗砂)、礫を含む。
ピット15	1	赤褐色	砂質ローム	焼土(粗砂)礫粒を主体とする。木炭粒を含む。焼瓦片が出土。

遺構	埋土	色調	土質	備考
ピット5	1	赤褐色	砂質ローム	焼土(粗砂)を主体とする。木炭粒を含む。
ピット4	1	赤褐色	砂質ローム	焼土を主体とする。木炭粒を含む。粘性乏しく、礫を含む。
	2	黄褐色	シルト	礫を含む。粘性あり。
ピット17	1	赤褐色	砂質ローム	砂、粘土、木炭粒、小礫などを不均質に含む。
	2	?	砂質ローム	砂、粘土、木炭粒多い。1層より粘性少ない。
	3	赤褐色	砂質ローム	砂、木炭粒、焼土を含む。
	4	灰褐色	粗砂	礫が混入するが、木炭粒は少ない。
ピット2	1	赤褐色	砂質ローム	焼土(砂質ローム)を主体とする。木炭粒を含む。粘性は弱い。礫を含む。
ピット1	1	赤褐色	砂質ローム	焼土(砂質ローム)を主体とする。縄器の椀が出土焼けた骨片が出土。
ピット18	1	暗褐色	砂質ローム	焼土が主体となる。焼けた鉄製品が出土する。
	2	黒	純粋な木炭層	壁面に密着する。
ピット24	1	赤褐色	砂質ローム	木炭粒、灰褐色粒土ブロック(5層起源)、焼土粒を含む。焼けた骨片が多く出土。

図13　ＮＭ２遺構配置図・断面図（４層上面）
Fig. 13 Distribution and cross sections of features on stratum 4 at NM2

第３図





遺構	埋土	色調	土質	粘性	しまり	備考
ピット23	1	赤褐色	シルト		良	礫、木炭粒を含む。埋土２の酸化した部分と考える。
	2	青褐色	シルト	強		グライ化する。木片、瓦を含む。
ピット14	1	赤褐色	シルト		良	礫、木炭粒を含む。埋土２の酸化した部分と考える。
	2	青褐色	シルト	強		グライ化する。木片、瓦を含む。
ピット17	1	暗褐色	砂質ローム		やや良	木炭粒、腐った小木片を含む。
	2	赤褐色	粘土質ローム		良	酸化鉄が沈着する。
	3	オリーブ青	砂質粘土			グライ化する。軟質でしまり不良。腐った木片を含む。
ピット29	1	茶褐色	砂質粘土			茶褐色砂質粘土に赤褐色あるいは青灰色の粘土ブロックが混入する。径1～2cmまどの礫を含む。
ピット28	1	茶褐色	砂質粘土			ピット29に同じ。
ピット15	1	赤褐色	砂質粘土	やや弱	やや不良	礫を多く含む。
	2	茶褐色	シルト質粘土	やや弱	やや不良	礫、粗砂を多く含む。
	3	暗灰色	シルト質粘土			礫、粗砂を多く含む。
礎石1据え方	1	暗褐色	シルト質ローム			基本層5、6層に比してしまりが不良で黒色を帯びる。木炭粒を少量含む。
	2	暗褐色	シルト質ローム			地山のシルト質粘土のブロックを多量に含む。木炭粒を含む。しまりは埋土１より良。

遺構	埋土	色調	土質	粘性	しまり	備考
ピット19	1	暗褐色	粗砂	弱	やや不良	炭化物を多量に含む。
	2	暗褐色	砂質ローム	弱	不良	混入物少なく比較的均質。
	3	暗褐色	小礫を含む粗砂	弱	不良	黄褐色粘土ブロックを少量含む。
ピット20	1	暗褐色	砂質ローム	弱	不良	ピット19埋土３に類似。
ピット22	1	暗黄褐色	砂質ローム	やや強	不良	赤褐色粗砂ブロック、小礫を含む。
	2	暗褐色	粗砂、礫を多く含む砂質粘土			底部まで連続的にこぶし大の玉石が埋められている。
ピット33	1	褐色	砂質ローム	弱	不良	礫、玉石を含む。地山起源の赤褐色砂質粘土、灰色粘土ブロックを多量に含む。一度に埋められたような状況である。
ピット30	1	灰褐色	粘土	強	やや良	ややグライ化する。粗砂をかなり含み、1～2cmほどの礫を含む。酸化鉄が斑状に沈着する。
ピット31						
ピット32	1	灰褐色	砂質粘土（グライ化する）			
ピット13	1	赤褐色	砂			炭化物を含む、10cm大の礫数個、小礫多く含む、焼け砂が広がる。

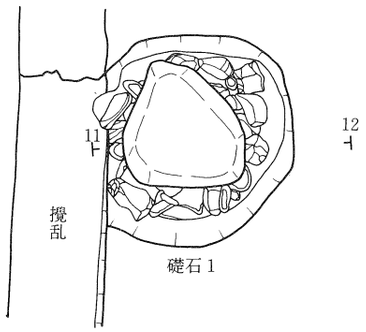
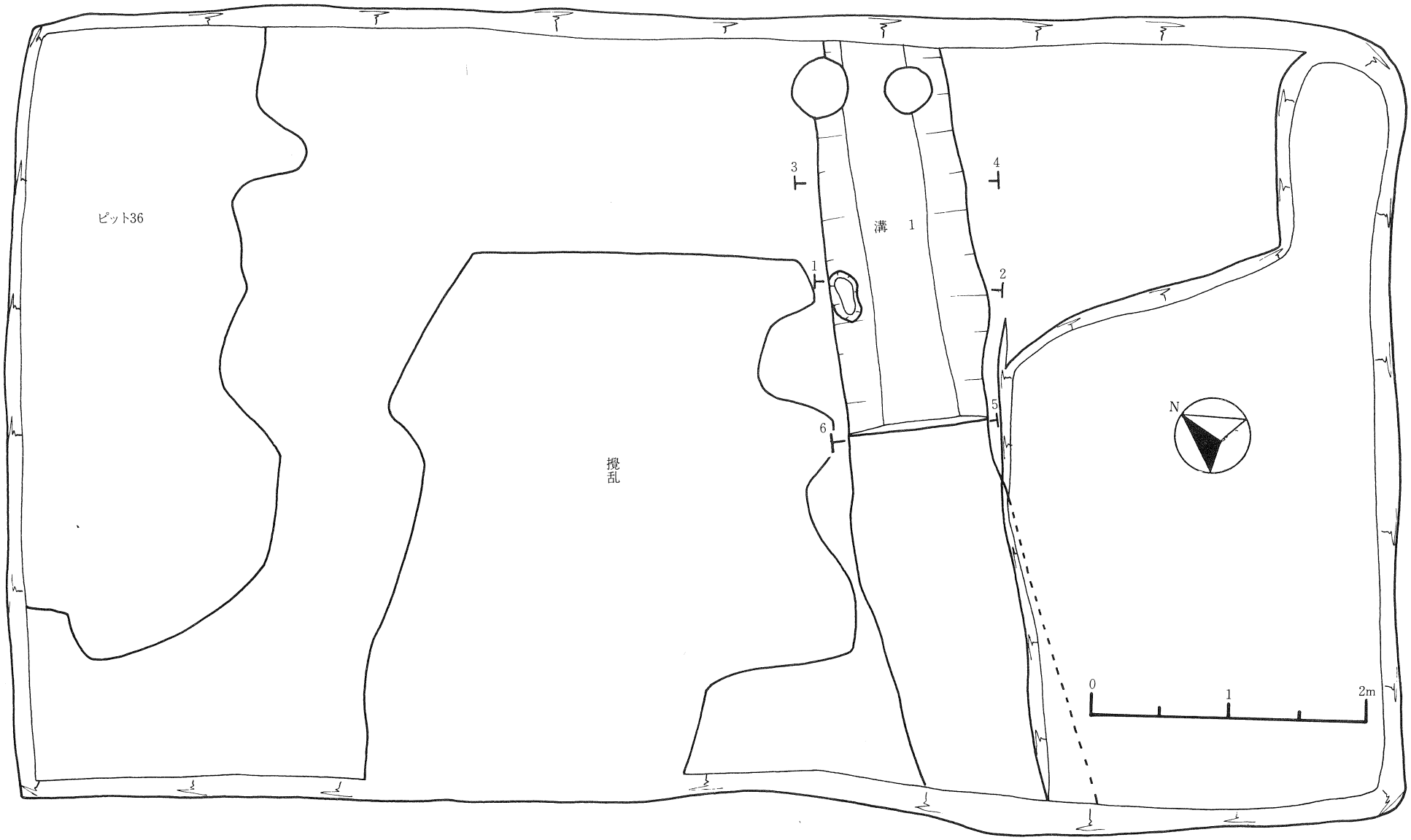
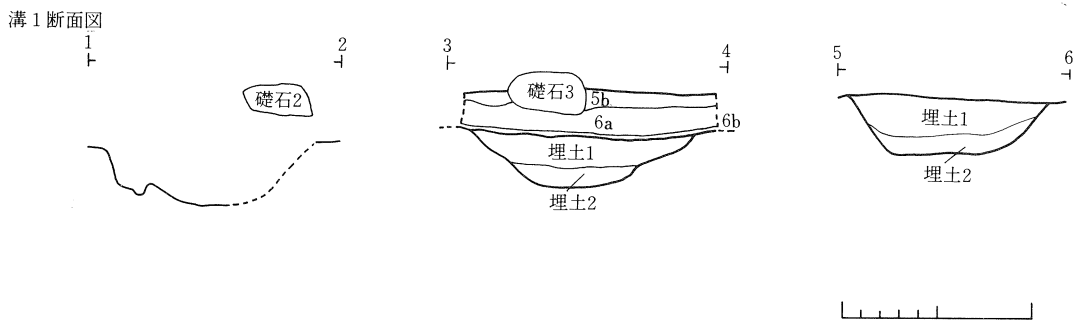


図14　ＮＭ２遺構配置図・断面図（５層・６層上面）

Fig. 14 Distribution and cross sections of features on strata 5 and 6 at NM2





遺構	埋土	色調	土質	粘性	しまり	備考
溝2	1	暗褐色	砂質ローム	弱	不良	粗砂、礫、地山ブロックの明褐色および灰褐色のシルト質粘土ブロックを多く含む。人為的に埋めた土と考える。
	2	暗褐色	砂質粘土	良	やや良	粗砂、礫を多く含む。溝の西側ではグライ化し、溝の使用に伴う堆積層と考える。

第15図　ＮＭ２遺構配置図・断面図（７層上面）

Fig. 15 Distribution and cross sections of features on stratum 7 at NM2

柱痕も見られる。これらは地覆(じふく)と呼ばれる礎石間を結ぶ木材が焼けた痕跡と推定される。(注)。ピット19・20・22・33は、南北方向の礎石抜き取り痕と平行に位置する。埋土は2重の構造をもち(図14)、上部のピットの埋土は焼土が入り壁面が焼けている。それと重複する下部のピットは、5層に類似した埋土を持ち、焼土は含まれない。

ピット30～32の性格は不明である。

4）6層上面（礎石構築時面　図14）

6層上面からは、礎石掘り方・石敷遺構の掘り方が認められる。

礎石1、ピット14・15・16・17・28・33は5層を排土後、6層上面の精査の段階で、掘り方が確認された。礎石2・3・12・13は掘り方をもたず、6層上面に直接据えられている。南北方向の掘り方(礎石1・ピット15・17)は、一辺が110～120cmで方形をなし、6層上面から約30cmの深さをもつ。掘り方の底面には径10～20cmの礫や瓦片が敷かれた状態になっている。南北に並ぶ礎石の方向は、磁北から約15度西へずれる。

東北方向の礎石の掘り方は、ピット13を除いて、攪乱によって破壊されているため、全体像は把握できないが、ピット13では、一辺約1mで南北方向の掘り方に近似する。

礎石の大きさは、礎石1で長径70cm、短径65cm、厚さは35cmである（図14）。礎石は6層上面から掘り方が構築され、根石が詰め込まれた後据えられた。その後6層上面まで掘り方の埋め戻しが行われ、さらに礎石の高さの中程ぐらいまで5層の盛土によって覆われる。火によって礎石の上半が焼けていることにより、礎石1の場合、地表に出ている部分は約10cm程度であったことが判明した。

上述の礎石と掘り方を一括して以下のように呼ぶ。

礎石1・2・3・4（ピット15）、5（ピット17）、6（ピット28）、7（ピット16＝29）、8（ピット13）、9（ピット34）、10（ピット14）、11（ピット23）、12、13。

これらの礎石から推定される建造物の配置は、南北方向に礎石1・2・4・5が連なり、それに直交し、礎石4から西側に延びる礎石6・7、礎石5から延びる礎石8・9によって構成されるL字状(鍵形)が考えられる。このL字状の建物の北側には石敷遺構があり、その南側には礎石10・11が連なる。また礎石8・9に平行するように12・13が並ぶ。これら4つの礎石がL字状の礎石群とどのように関連するかは現在の時点では明確でない。

礎石間の距離は南北方向の1・4・5の間が各約3m、東西方向の4・6・7・5・8・9の間が、1.6～2.3mとばらつきはあるものの平均すると約1.98mとなる(図71)。これを尺で換算すると南北方向が約10尺、東西方向が約6尺5寸となる。

石敷遺構は、この礎石列と同時構築と考えられる(図14)。礎石掘り方の構築面である6層は発掘区の北東までは拡がらず、この層を切るように、ピット36の埋土であるグライ層が広がる。

石敷遺構は、このグライ層中に構築されている。この遺構は、本来の機能を喪失した後、ごみ捨て場として使用された事が明瞭である。中には陶磁器の他、屋根材・瓦・鉄製品・木製品・動物遺存体・植物遺存体などが乱雑に堆積し、その後に粘土で蓋をされて埋められている(図16)。火災の痕跡は、この上面に見られる。遺物を取り去ると、底面には平たい石が敷かれており、周囲には一段高く縁石が置かれている。縁から底石までの高さは約20cmである(図16・17)。石敷遺構は、この発掘区が保存されることとなったため、掘り方までは調査されていない。

5) 7層上面(図15)

溝1が7a層を切って掘られている。これは東西方向に延びる溝で、その方向は礎石の東西方向にほぼ一致し、ピット15・27・28に平行するが、これらの礎石より1時期古いものである。2号礎石、3号礎石は、この溝を埋め戻した後、盛土6層上面に置かれている。5層によって覆われている点は、他の礎石と同じである。

溝1の埋土の2層には砂が多く、底部はグライ化していることから、この溝にはかつて水が流れた可能性が考えられるが、常時堀状になっていたかどうかは不明である。1層は、溝を人為的に埋め戻した土と考えられる。

注. 佐藤巧教授の御教示による。

(4) 主な遺構の変遷

7層上面

1号溝を東西方向に構築

6層上面

1号溝を埋め、その後に6b、6a層等を盛土し、礎石掘り方を構築し、根石、礎石を据える。この時期に、ピット36(グライ範囲)の中に、縁石と底石が置かれ、石敷遺構が構築される。その後礎石と同様に縁石の途中まで盛土(5層)がなされる。この遺構は最終的には、粘土によって覆われ廃絶された後、火事によって生じた、焼土層(3層)と炭火層(4層)に覆われる。

3層上面

3層では、新しい遺構の構築はないが、礎石が抜き取られ、ピット状になる。その後、盛土(2層)がなされ、その面から新しい礎石掘り方が構築されている。

(梶原　洋)

図16　石敷遺構内遺物出土状況
Fig. 16 Partially exposed stone floor of washing area filled with various artifacts at NM2

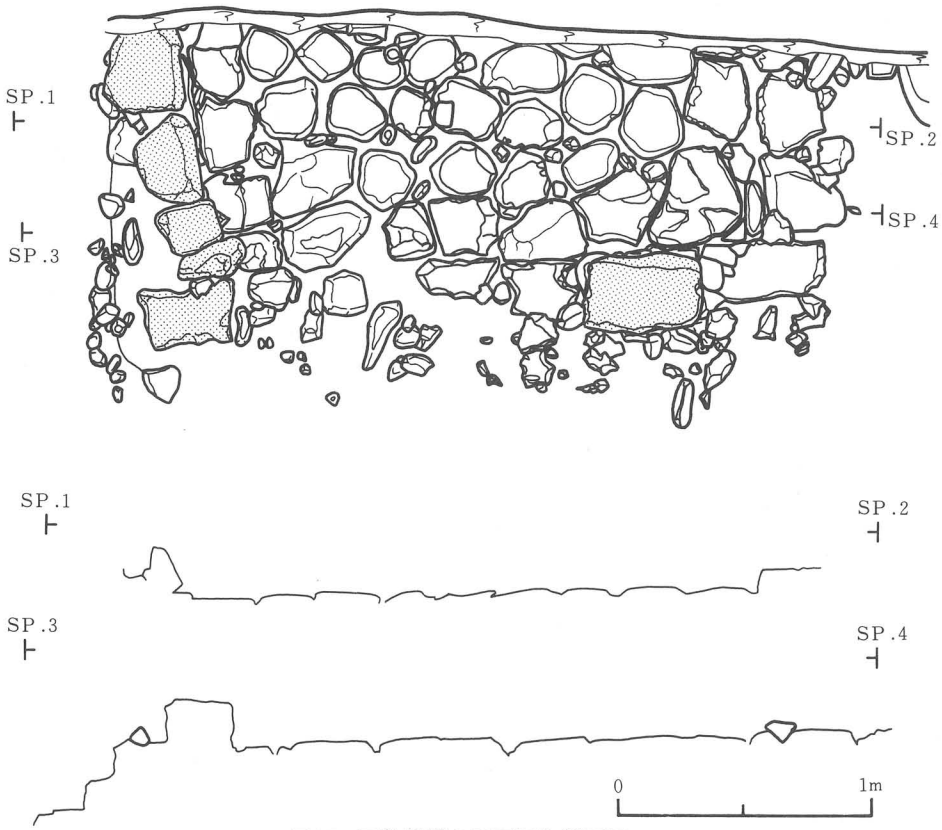


図17　石敷遺構の平面図と側面図
Fig. 17 Exposed stone floor of washing area and profile at NM2

時期	出土遺物 / 出土地点	磁器						陶器									炻器		瓦・土師質	木製品			金属製品	ガラス		その他
		碗		皿			その他	小型茶碗	皿			土瓶		徳利	土鍋	その他	徳利	その他	皿	建材	箸・椀	その他		ガラス板(g)	ガラス容器	
		茶碗	小形茶碗	丸皿・菊皿	手塩皿	不明			丸皿	灯明皿	不明	本体	蓋													
火災前	石敷遺構	45	7	46	4	1			19	6	2	66	20	5	5	3		1	17	85	27	105	7			2
	石敷orピット36											7	1			2			39	3		4	13	45	1	2
	ピット36	4	3	2					3		1								7	28		29				
	B－1																						3			
	B－2																						3			
	A－1内ピット			1		1			1										6			9				
	A－2内 〃							2								1			4		5	8				
	B－1内 〃	1																					6			
	不明		D-1 1			13						1	1													
	小計	50	11	49	4	15		2	23	6	3	74	22	5	5	6		1	73	20	121	27	155	32	45	1	4
火災時直後	A－1	7		6	1	1			3	3	3	17	2	6					4	2		1	9	121	189		6
	A－2			2										1					4	1	2		6	114	1008		2
	B－1			2										2					1					115	5		2
	B－2	1							2		2									1			2	2	2		3
	C－1	5	9	2	8				2	3	2	7	2	1	7	2			1					221	127	3	3
	C－2	6	1						1					4	1		3		1	2				23		1	7
	D－1	1																				1				1	
	A－1内ピット																		1					5			1
	A－2 〃	3	1	1									1						1					9	642	49	
	B－1 〃			1																				61		1	
	B－2 〃	1		1									1			4				3				3	9		2
	C－1 〃			1																			1	18	21	16	
	C－2 〃																		2					8			
	3層 4層						1							8		1	3			1	7	1	11	28	558	4	
	不明	12	5			5			3		6	8	1					1		1			29				
	小計	36	16	16	9	6	1		11	6	13	32	7	22	8	7	6	1	15	11	9	3	58	728	2879	75	26
火災後	A－1内ピット																				1	1	15	5	8	1	
	A－2 〃																						1	2	15		
	B－1 〃																							2	3		
	2層																							3	131	2	
	1層						1							1					1	3				4	5		
	不明											4							5						111	6	1
	小計						1					4		1					6	3	1	1	16	16	273	9	1
	合計	86	27	65	13	21	2	2	34	12	16	110	29	28	13	13	6	2	94	34	131	31	229	776	2561	85	31

表7　NM2　出土遺物の分布表

Table 7　Distribution of artifacts at NM2

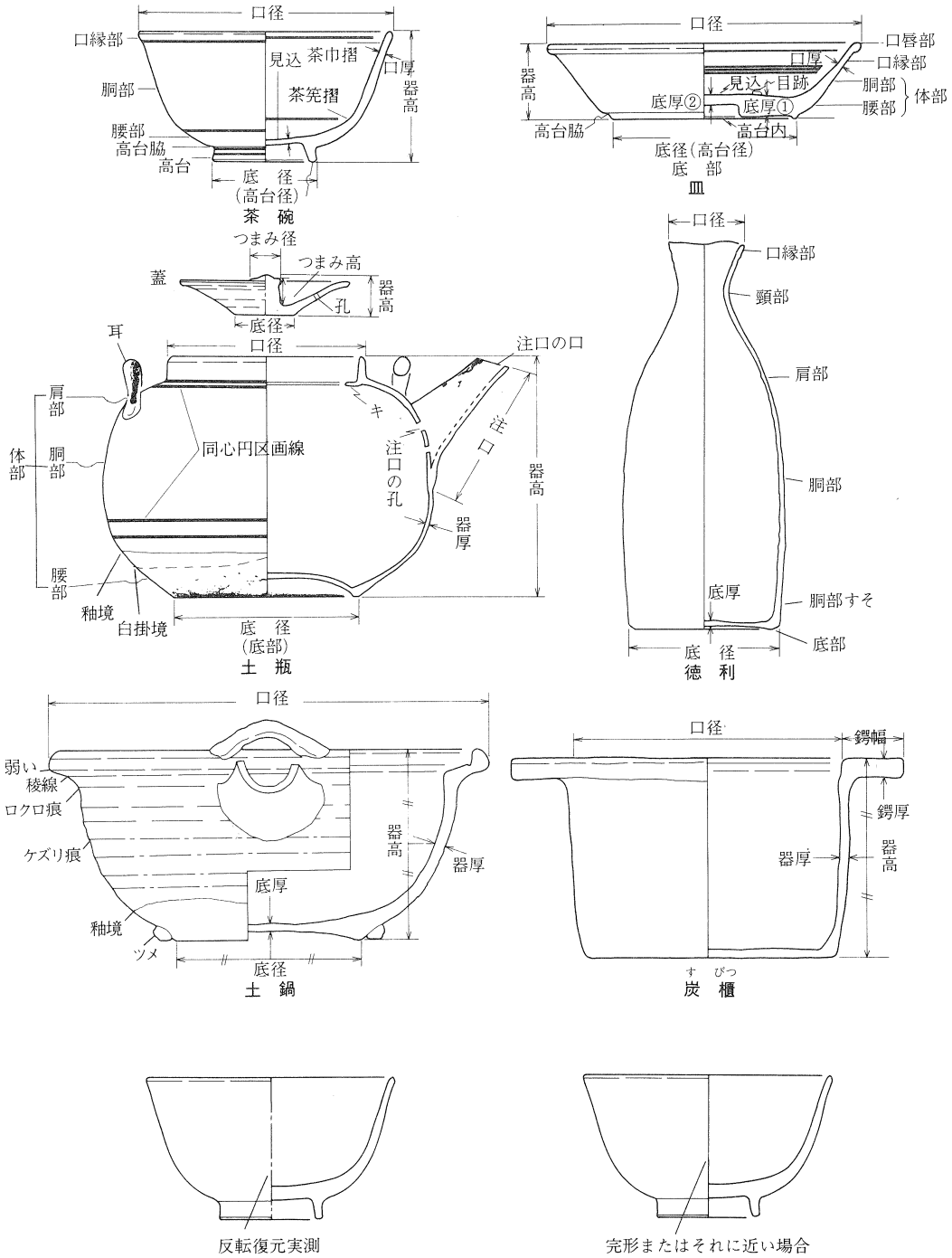


図18　陶磁器の部位名称と計測部位
Fig. 18 Denomination of ceramic details and points of measurements

(5) ＮＭ２の出土遺物

1) ＮＭ2の遺物出土状況（表７）

１・2層の盛土を排除した段階で、焼土層が全面に広がった。この段階での遺物は火災後整地層（3層）と、炭化物層（4層）に多く、平面的には特にＡ－1・2区、Ｃ－1区に多く見られた。Ａ－1・2区では、染付碗・熔融ガラス片・玉縁口縁丸皿・角型手塩皿などの陶磁器の他、釘・カスガイなどの金属製品、焼けて褐色化した瓦、赤色化した壁土などが集中して発見された。Ｃ－1区は、礎石1にほぼ重なるように焼壁が積重って発見され、その周囲から釘などの金属、湯呑茶碗、土鍋が集中して出土した。また付近のピットからは、焼土と共に焼けた獣骨片が発見された。

火災以前の5・6層では、廃棄場として使われていた石敷遺構内から、染付碗・輪花形丸皿・笹文玉縁口縁丸皿・土瓶・炭櫃（すびつ）などの陶磁器、木栓・箸・屋根材などの木製品、鉄鏃などの金属製品、魚骨などの動物遺存体、種子などの植物遺存体が集中して発見された。

石敷遺構の外側のピット36の埋土上部からは、屋根材や硯などの石製品が出土している。瓦は、礎石の掘り方内から、礫に伴って発見された例が多い。（梶原　洋）

2) 江戸時代末期から明治時代初期の陶磁器

① 茶碗

Ａ．茶碗（いわゆる飯茶碗）（表10）

ａ．分析対象と出土状況

総数200点の中から類型化が可能な個体105点を選択し、分析対象とした。接合する資料はきわめて少なく、破片資料が多い。

火災前は出土資料の90パーセントの個体が石敷遺構の埋土から出土している。これらは石敷遺

出土地点＼類型		I1-A	B	C	B或C	D	E	F	G	C或F	H	I	J	K	L	M	N	O	P	Q	R	その他	小計	計
火災時直後	A－1				3					1						2						1	7	36
	ピット13															1							1	
	ピット14																					1	1	
	ピット23																	1					1	
	B－2				1																		1	
	ピット16															1							1	
	C－1	1														2	1					1	5	
	C－2			1			1	1		1						1						1	6	
	D－1															1							1	
	不明	2		1						1						4	1				2	1	12	
	小計	3		2	4		1	1		3						12	2	1			2	5		
火災前	ピット36				1											1				1		1	4	50
	石敷遺構	9	5	5	1	2	1	1	1		1	3	3	2	3	5			1	1		1	45	
	ピット25												1										1	
	小計	9	5	5	2	2	1	1	1		1	3	4	2	3	6			1	2		2		
計		12	5	7	6	2	2	2	1	3	1	3	4	2	3	18	2	1	1	2	2	7	86	

表８　ＮＭ2　茶碗の分布（1層、2層出土のものは除く）
Table. 8 Distribution of “rice bowls” at NM2

構廃絶後、他の遺物とともにここに投棄されたものである。火災後にはA－1とC－1・2の2ケ所に遺物の集中が存在する(表8)。

b．製作工程

茶碗はすべて磁器である。素地をロクロ水挽で成形し、口縁部を若干弯曲させたり（後述する端反り碗型）、高台を削り出す作業が行なわれる。素焼きの後、呉須によって絵柄や見込文が描かれ、石灰釉が施される。畳付は無釉のものが多い。本焼きの結果残された目痕はすべて4つである。なお、釉の発色の悪いものも製品として購入され、使用されていた。

出土地点＼類型		I-A	B	C	D	無文	その他	小計	計
火災時直後	ピット14					1		1	17
	C－1	1		2	5	1		9	
	C－2				1			1	
	不明	1			2	2	1	6	
	小計	2		2	8	4	1		
火災前	石敷遺構		1	2		2	2	7	13
	ピット36		2			1	2	5	
	D－1				1			1	
	小計		3	2	1	3	4		
計		2	3	4	9	7	5	30	

表9　NM2　小形茶碗の分布
（1層、2層出土のものは除く）
Table 9 Distribution of "tea bowls" at NM2

c．類型化

類型化の大別は器形で行なうが、2点を除きすべて端反り碗型（以下Ⅰ型）である。これにはⅠ$_1$型とこれに比べて胴部の立ち上がりの強いⅠ$_2$型がある。他の2点は碗型（以下Ⅱ型）と沓（くつ）型（以下Ⅲ型）である。Ⅰ型は口径が約115mm（約3寸8分）、器高が約60mm（約2寸）であり、プロファイルがよく近似している（図19－1～8）。この大きさだと「横から持つと親指と中指の指先が碗の径の直径に達するから、片手でしっかりと持つことができる（秋岡,1984）。」なお、高台内の削りの状態（底厚）は多様である。重さは150gから200gのものが多い。以上が当時の茶碗の手頃な大きさと重さだったであろう。

さらに文様によって細別される。一般的に口縁部と腰部に引かれた同心円区画線によって胴部主文様帯が区画される。高台脇あるいはその附近にも同心円区画線（以下高台脇同心円文）が2条引かれるが、間隔が広いもの(a)と狭いもの(b)がある。内面は茶巾摺と茶筅摺の附近に同心円区画文を各1条引き、見込文を描く例が多いが、茶巾摺に文様帯を描く例もある。

Ⅰ$_1$型

＜源氏香文・蝶文系＞

Ⅰ$_1$－A：2種類の源氏香文を交互に配し、間に蝶文を描く。見込文は蝶。高台脇同心円文はa（図20－1、図版13－1・2）とb（図版13－3）があり、aはbに比べ口径が10ミリメートル程大きく、また腰部も厚い。Ⅰ$_1$－B（図20－2、図版13－4）：源氏香文の両脇に花文を配し、これらに相対する位置に蝶文を描く。見込文は蝶文。高台脇同心円文はa。畳付は赤味を帯びる。Ⅰ$_1$－C（図20－3、図版13－5・6・7）：見込文が⊥であり、高台脇同心円文がbである点以外は、Ⅰ$_1$－Bと同じである。胴部の蝶はⅠ$_1$－Bより細身である。

＜草花文系＞

Ⅰ$_1$－D（図20－4、図版13－8、14－1）：コウモリ文に枝垂れ文を冠し、これに相対する位置

に蝶文を描く。枝上の３個１対の丸は葉であろうか。見込文は蝶。高台脇同心円文はａ。畳付は赤味を帯びる。Ⅰ$_1$—E(図21—1、図版14—2)：草花文と蝶文。花文はⅠ$_1$—A～C の花文と同じである。３個１対の丸は葉であろうか。見込文は蝶。高台脇同心円文はｂ。Ⅰ$_1$—F(図21—2、図版14—3)：草花文と蝶文だが、それらの線はⅠ$_1$—E に比べて細い。見込文は⊥。高台脇同心円文はｂ。Ⅰ$_1$—G(図21—3、図版14—4)：葡萄文と蝶文。蔓上の３個１対の丸は葉であろうか。見込文は蝶。高台脇同心円文はｂ。

＜山水文系＞　高台脇同心円文はすべてｂである。

Ⅰ$_1$—H（図21—4、図版14—5・6）：山水文。次のⅠ$_1$—I に比べて家の左上の山（あるいは島）の裾が短かく、家の真上に夕陽（？）を描く。見込文は寿。Ⅰ$_1$—Ⅰ(図22—1、図版14—7・8、15—1)：山水文。見込文は鳥。Ⅰ$_1$—J（図22—2、図版15—2）：山水文。家の上の島（あるいは山）と浜の千網は、Ⅰ$_1$—H・Ⅰに比べて簡略化されている。見込文は不明。口縁部内面の同心円文は３条、胎土が灰色である。畳付は赤味を帯びる。

＜その他＞

Ⅰ$_1$—K（図22—3、図版15—3）：菊花文。見込文は鳥。高台脇同心円文はａ。Ⅰ$_1$—L（図22—4、図版15—4・5）：寿文を３単位配し、その間を割菊文でうめる。見込文は♁。高台脇同心円文はａ。Ⅰ$_1$—M(図22—5、図版15—6)：山形に武田菱文を４単位配し、見込文も同文。高台脇同心円文はａとｂがある。Ⅰ$_1$—N(図23—1、図版15—7)：蓮弁の内外に並草葉文を描いた。見込文は不明。

＜口縁部茶巾摺に文様帯がある＞

Ⅰ$_1$—O（図23—2、図版15—8）：４条１帯の縦方向の区画線の間にジグザグ文。Ⅰ$_1$—P(図23—3、図版16—1)：縦縞文に重ね花文。花芯は点描き。見込文は寿か。Ⅰ$_1$—Q(図23—4、図版16—2)：縦縞文に重ね花文。花芯は線描き。茶筅摺の同心円区画線が２条である点もⅠ$_1$—Pと異なる。見込文は不明。

Ⅰ$_2$型：上下の割菊文の間に竜唐草文を描いたもの（図23—6、図版16—3）と唐草文の一種？を描いたもの（図23—13、図版16—11）がある。

Ⅰ型：Ⅰ$_1$型かⅠ$_2$型か判別不能な個体であり、文様には松文（図23—7、図版16—5)、菖蒲文（あるいは杜若文）（図23—10・11・12、図版16—8・9・10)、風景・山水文（図23—9、図版16—7）、その他（図23—14、図版16—12）がある。

Ⅱ型（図23—15、図版16—13）：文様は不明。

Ⅲ型（図23—5、図版16—4）：同心円区画線がない状態で茗荷文？を描く。茶巾摺は渦文。

器形判別は不可能だが、胴部片にはⅠ$_1$—Nと異なる並草葉文(図23—8、図版16—6)、竜唐草文（図版16—14）があり、見込文にはほかに∪文（図版16—16）と花文（図版16—15）がある。

d．生　産　地

類型化されたものの一部について行なった胎土分析の結果、I_1—Ab、I_1—D、I_1—Eが平清水産のグループに入る。また、I_1—Jは非平清水産のグループに入る。I_1—Jは切込の窯跡出土品中にも存在し、とくに茶巾摺の同心円区画線が2条である点も切込焼の特徴の一つといえる（芹沢　1976）。胎土が唯一灰色である点、そして切込産に鉄分が多いという特徴を示す畳付の赤味などを考え合わせると、I_1－Jは切込焼と断定できる。I_1－Mは後述する山形に武田菱文をもつ磁器皿についての胎土分析結果を参考にすれば、平清水産と推定される。

e．各類型の時間的消長（表8）

I_1－A・B・C・I・J・Lは火災前の石敷遺構廃絶を境に減少する傾向をもつが、I_1－Mは増加する傾向にある。火災時においてもI_1型が主体を占める状況は変わらないが、I_1－Mの完形品の重さが130gであることは、時間的に新しくなるにしたがい、より軽い茶碗が用いられるようになったことがうかがえる（秋岡　1984）。

f．茶碗の蓋と容積

北海道白老仙台藩陣屋跡（白老町教育委員会 1982）や 愛知県瀬戸市かたみ 第2号窯跡上層（愛知県教育委員会ほか 1975）では、茶碗の蓋が出土したが、二の丸第二次発掘調査では出土しなかった。前二遺跡でも茶碗の個体数に比べて蓋の数は非常に少なく、当時の茶碗の使用にあたっては、必ずしも蓋付でなかったことがうかがえる。ちなみに茶碗に蓋を被せると、蓋の縁は茶碗の約七分目に位置する。この位置は茶碗の実質容積を考える上で参考になる。

完形・半完形の茶碗11個体に水を入れて計量した容積の平均値は245cc（1合4勺）である。蓋が茶碗の7分目に位置していたと仮定すると、実質容積は全容量の60パーセント、すなわち147cc（8勺）となる。実験によればこの中には約4勺の米を炊いた分量が収まる。江戸時代の1日の米の摂取量は普通5合であり、1日2食であったといわれているので；1食分は2合5勺となる（山下ほか 1982、鬼頭 1983）。この2合5勺の米を炊いてNM2出土の茶碗に盛ると、約6杯分になる。もちろん蓋にこだわらず飯の盛り方を変えれば、杯数も異なるわけである。

B．小形茶碗（表11）

土瓶が多数出土しているので、湯呑として使用されることが多かったと推定される。また、徳利があるにもかかわらず盃がないので、小形茶碗の中にはぐい呑として使用されたものがあった可能性が高い。

破片資料の中から類型化可能な40個体を選択して分析対象とした。火災前は石敷遺構・ピット36より、火災後はC－1よりほとんどが出土している（表9）。

小形茶碗は磁器か陶器（2個体）かによって大別される。磁器は器形によって、端反り碗型（以下Ⅰ型）、碗型（以下Ⅱ型）、半筒型（以下Ⅲ型）、盃（？）（以下Ⅳ型）に分類される。量的

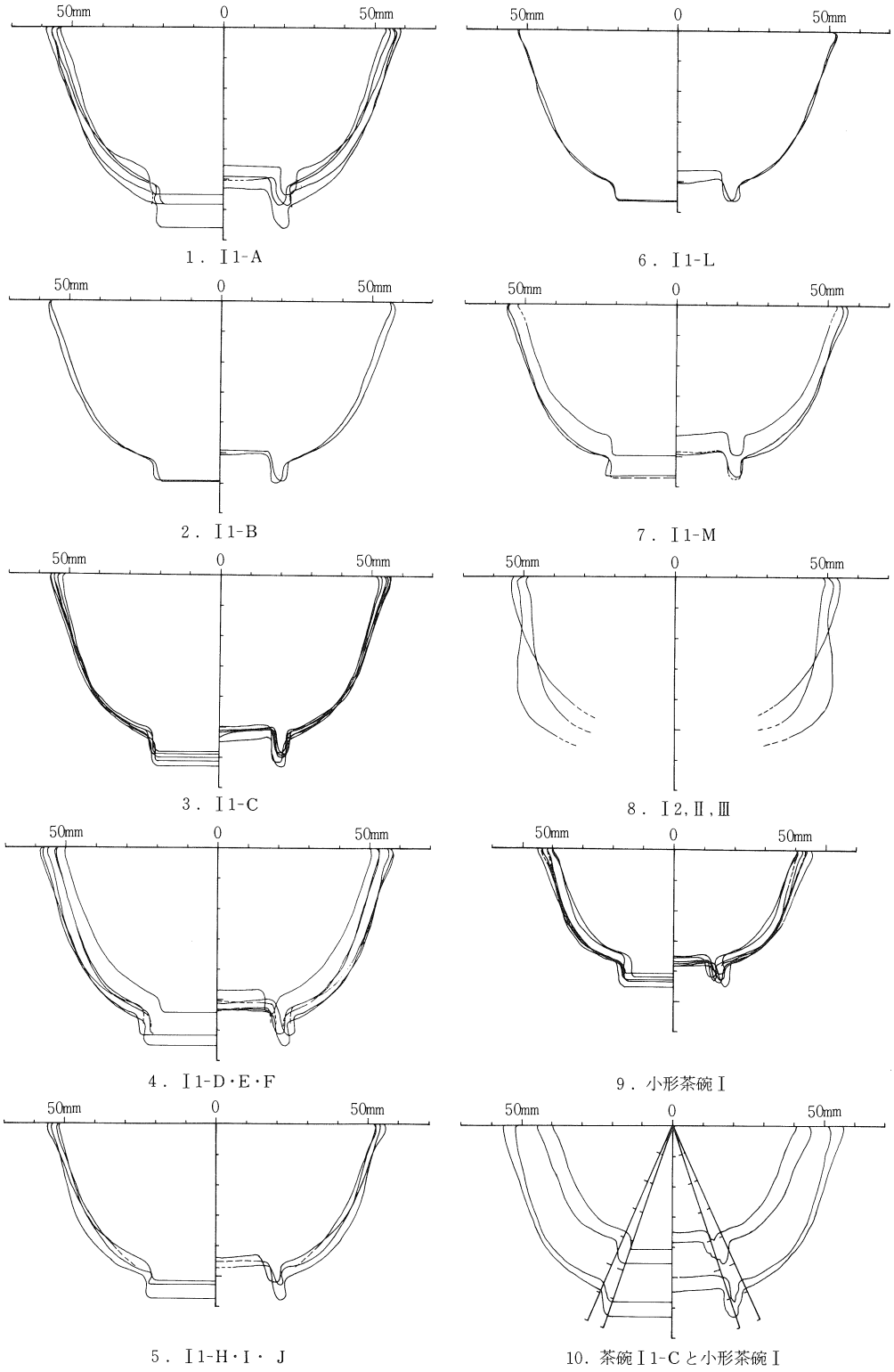


図19　茶碗（1～8）と小形茶碗(9)の外形プロファイル
Fig.19 Profiles of "rice bowls"(1—8.10) and "tea bowls"(9.10)

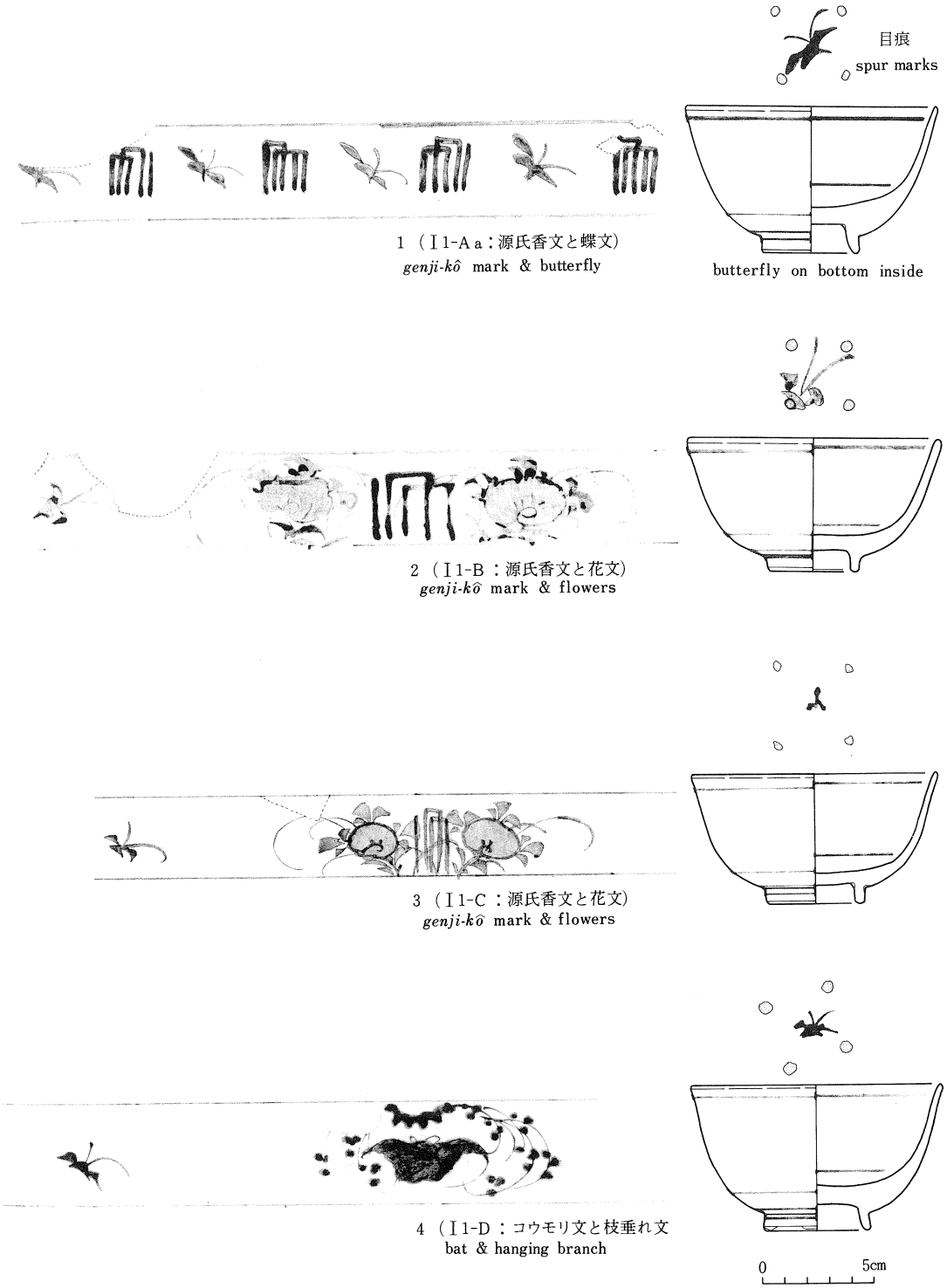
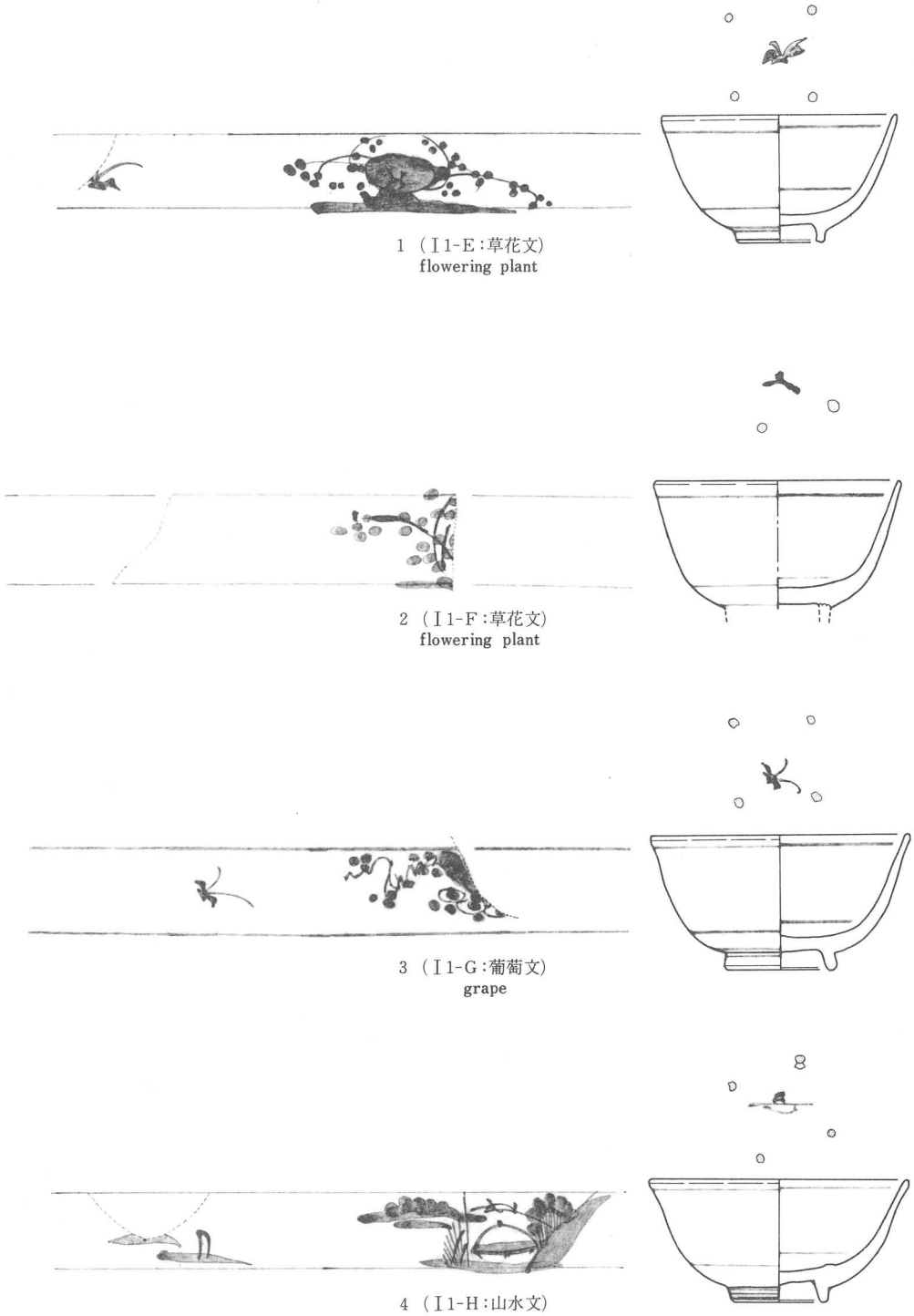


図20 NM2出土の茶碗(1) porcelains Mid. of 19c (before 1882)

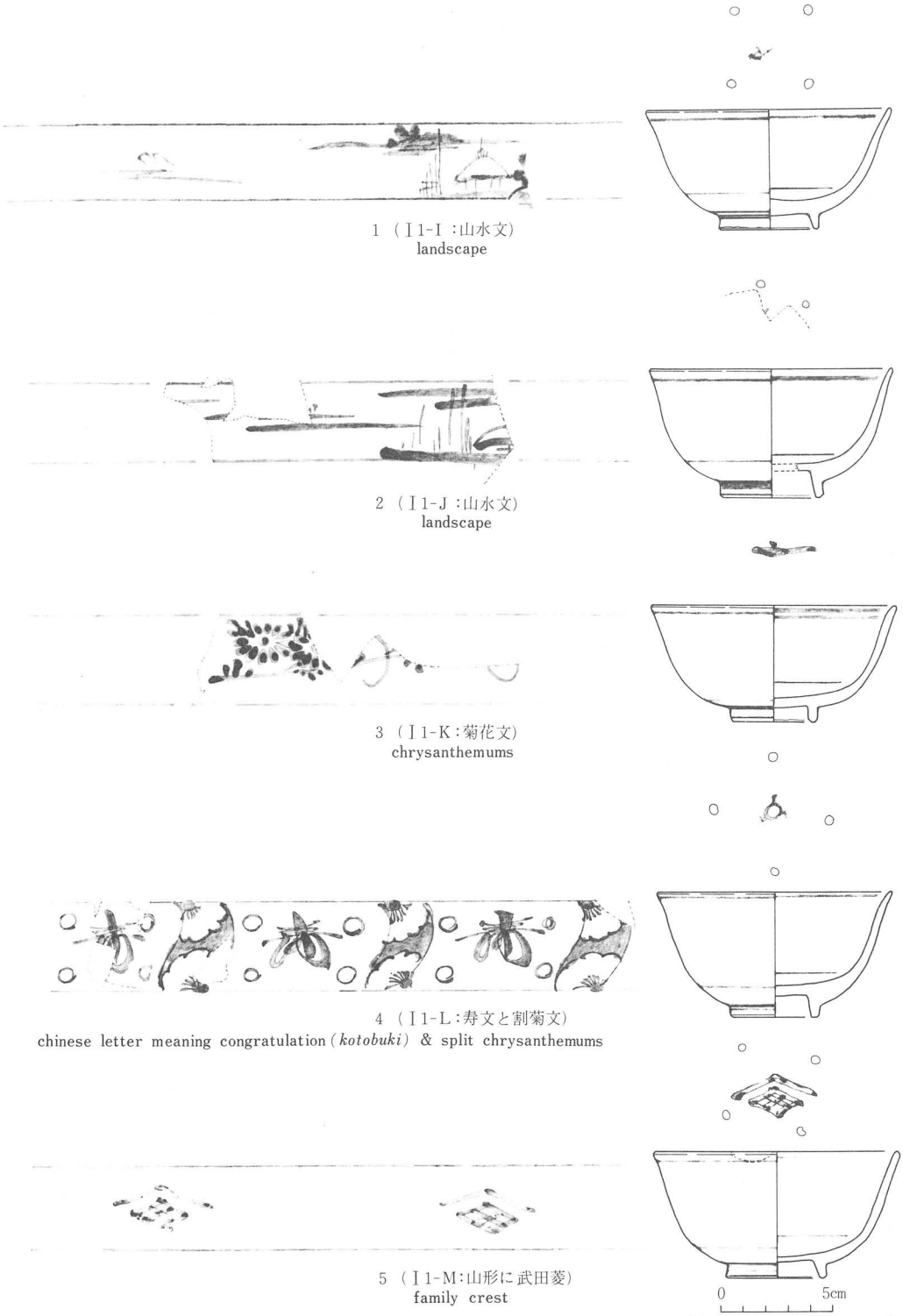
Fig. 20 "Rice bowls" with cobalt blue (designs executed in cobalt under a clear glaze) (Hirashimizu ware)



porcelains Mid. of 19c. (before 1882)

図21 NM2出土の茶碗(2)

Fig. 21 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2 (2) (Hirashimizu ware)

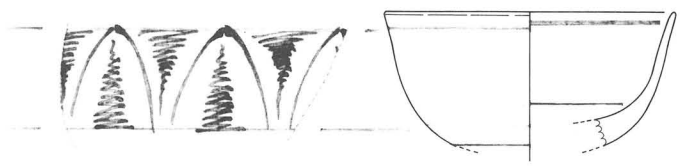


Mid. of 19c. (before 1882) porcelais.

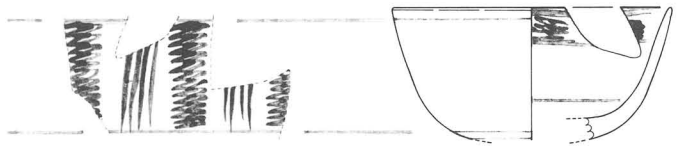
図22 ＮＭ２出土の茶碗(3)

Fig. 22 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2 (3)

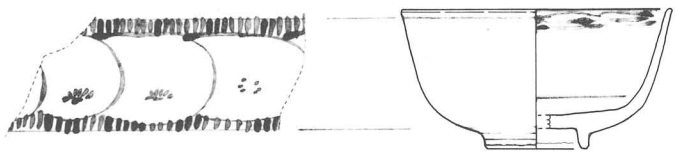
(1、3、4 Hirashimizu ware 2 Kirigome ware)



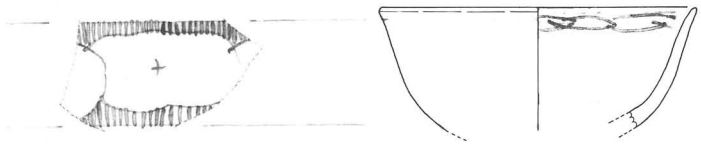
1（Ⅰ1-N：蓮弁文に並草葉文）
series of petals & grass



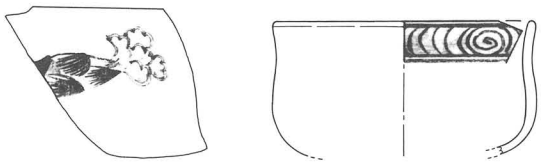
2（Ⅰ1-O）



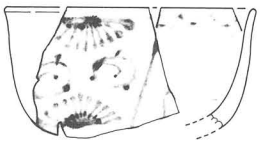
3（Ⅰ1-P：縦縞に重ね花文）
vertical stripes & overlapped flowers



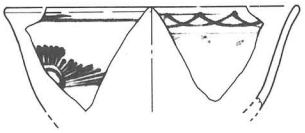
4（Ⅰ1-Q：縦縞に重ね花文）
vertical stripes & overlapped flowers



5（Ⅲ：茗荷文？）
myoga flower?

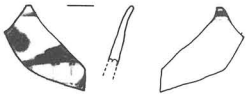


6（Ⅰ2：割菊文に竜唐草文）
split chrysanthemum & *ryūkarakusa*-scroll



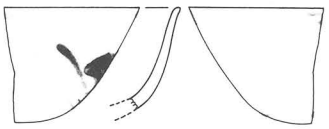
7（Ⅰ：松文）
pine tree

8（蓮弁文に並草葉文）
series of petals & grass

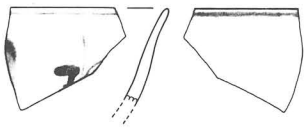


9．（Ⅰ：風景・山水文）
landscape

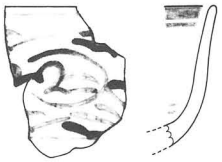
10（Ⅰ：菖蒲文） iris



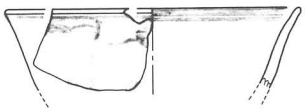
11（Ⅰ：菖蒲文） iris



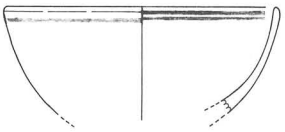
12（Ⅰ：菖蒲文） iris



13（Ⅰ2）



14（Ⅰ）



15（Ⅱ）

0 5cm

Mid. of 19c.（before 1882）

図23 ＮＭ２出土の茶碗(4)

Fig. 23 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2 (4) porcelains

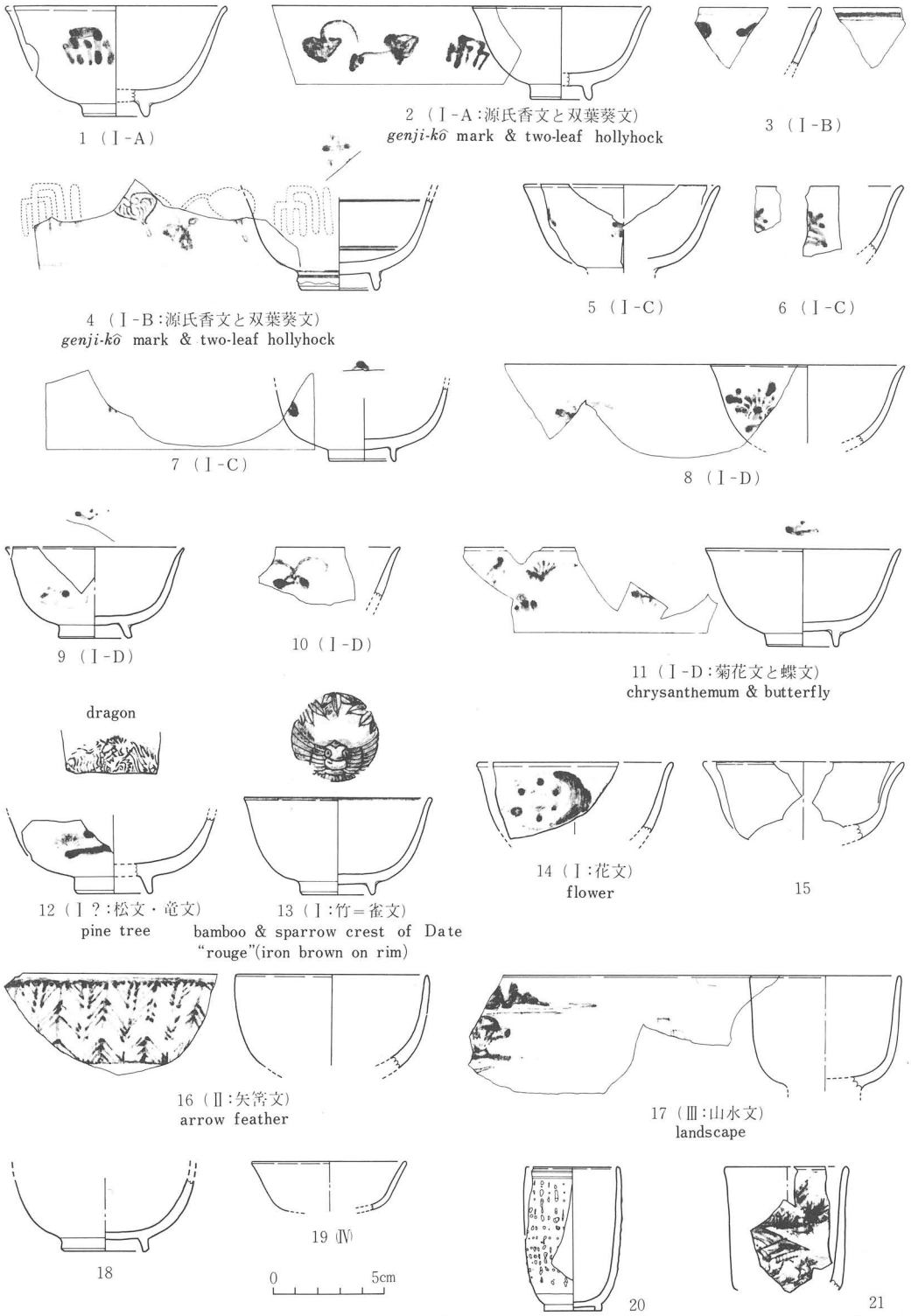


図24　ＮＭ２出土の小形茶碗　porcelains except No. 20　Mid. of 19c. (before 1882)
Fig. 24 "Teabowls" with cobalt blue from NM2　No. 21 more recent

No.	地区・遺構・層	残存(注)状況	法量 口径	器高	底径	口厚	底厚	器形	文様 類型	幅	釉色 色名	JIS番号	備考	図	図版	登録No.
1	石敷遺構埋土	L	116	67	47	3	7	I_1	Aa	48	浅青緑	5.0BG$^{8.5}/_{6.5}$	見込蝶	20—1	13-1・2	1
2	〃	M	108	58	42	3		〃	〃	45	明灰緑	4.0G$^{7.5}/_{1.5}$				4
3	〃	M	112	57	48	4	3	〃	Ab	44	〃	〃	容積247cc、平清水焼(分析)		13—3	3
4	C1—3層	M	116	59		3	7	〃	〃	43	〃	〃	被火熱			2
5	石敷遺構埋土	M	110	58	38	3	5	〃	〃	45	〃	〃				7
6	?—3層、石敷遺構	S	112	50		3		〃	A	45	〃	〃				5
7	石敷遺構埋土	S	?			3		〃	〃	44	〃	〃				6
8	〃	S	110			3		〃	〃		〃	〃				8
9	〃	S	?			3		〃	〃		〃	〃				10
10	?—1層	S	?			4		〃	〃		〃	〃				11
11	?—2 or 3層	S	?			3		〃	〃		〃	〃				12
12	?—3層	S	?			3		〃	〃		〃	〃				13
13	石敷遺構埋土	S	?			3		〃	〃		〃	〃				14
14	〃	底部			44		10	I_1	B		〃	〃				15
15	〃	L	114	60	41	4	6	〃	〃	43	青白	3.0PB$^{9.0}/_{1}$	容積300cc、見込蝶	20—2	13—4	16
16	〃	M	110	60	44	3	5	〃	〃	43	明灰緑	4.0G$^{7.5}/_{1.5}$				17
17	〃	M	110			4		〃	〃		黄白	2.0Y$^{9.0}/_{0.5}$				24
18	〃	S(底部)			?		6	〃	〃		明灰緑	4.0G$^{7.5}/_{1.5}$				30
19	?—3層ピット2埋土	M	102	62	44	4	5	I_1	C	44	〃	〃	容積286cc、被火熱			18
20	石敷遺構埋土	L	110	65	45	4	7	〃	〃	43	〃	〃	容積230cc、見込	20—3	13-5・6	19
21	〃	M	106	62	48	4	6	〃	〃	42	〃	〃			13—7	20
22	〃	L	107	60	45	4	5	〃	〃	45	〃	〃	容積260cc			21
23	〃	M	110	62	44	4	8	〃	〃	45	〃	〃				22
24	〃	M	108	63	44	4	8	〃	〃	45	〃	〃				23
25	C2—4層上	S(底部)			44			〃	〃		〃					29
26	A1—4層	S	?			4		I_1	B或C		黄白	2.0Y$^{9.0}/_{0.5}$				25
27	?—1層	S	?			4		〃	〃		明灰緑	4.0G$^{7.5}/_{1.5}$				26
28	ピット36埋土	S	110			4		〃	〃		〃	〃				27
29	石敷遺構埋土	S	?					〃	〃		〃	〃	被火熱			28
30	B2—3層	S	?					〃	〃		〃	〃				31
31	A1—3層	S	?					〃	〃		〃	〃				32
32	A1—4層	S	?					I_1	B或C		黄白	2.0Y$^{9.0}/_{0.5}$				33
33	石敷遺構埋土	L	114	65	45	2	10	I_1	D	46	明灰緑	4.0G$^{7.5}/_{1.5}$	容積280cc	20—4	13—8	39
34	〃	S	110	64	50	3	5	〃	〃	45	〃	〃	平清水焼(分析)		14—1	40
35	〃	L	102	56	38	2	4	I_1	E	39	〃	〃	容積180cc	21—1	14—2	41
36	C2-3層、?-1層、?-3層上	S	106	63	44	3	6	〃	〃	44	〃	〃				42
37	試掘撹乱	S	110			3		〃	〃		明灰	N7.5	平清水(分析)			43
38	C1-3層、C2-3層、C2-4層	M	112	60	45	3	6	I_1	F	41	明灰緑	4.0G$^{7.5}/_{1.5}$		21—2	14—3	44
39	?—1層	S	116	60	44	3	6	〃	〃	42	〃	〃				45
40	石敷遺構埋土	S	?			3		〃	〃		〃	〃				46
41	〃	M	112	61	45	3	5	I_1	G		〃	〃		21—3	14—4	47
42	A1—4層	S(底部)			?		4	I_1	C或F		〃	〃	見込			67
43	?—3層上	〃			?		2	〃	〃		〃	〃	〃			68
44	C2—1層	〃			45		4	〃	〃		〃	〃	〃			69
45	石敷遺構埋土	L	112	56	43	3	6	I_1	H	39	〃	〃	容積220cc	21—4	14-5・6	72
46	〃	M	110	53	44	3	4	I_1	I	39	〃	〃			15—1	71
47	〃	L	108	54	45	3	6	〃	〃	38	〃	〃	容積210cc	22—1	14-7・8	73
48	?-1層、石敷遺構埋土	L	108			3		〃	〃	36	〃	〃				75
49	ピット25埋土	S	?			2		I_1	J		灰	N5.5	切込焼			74
50	石敷遺構埋土	S	?			2		〃	〃		〃	〃	切込焼(分析)			77
51	〃	M	114	58	46	3	2	〃	〃	41	〃	〃	切込焼	22—2	15—2	78
52	〃	SS				3		〃	〃		〃	〃	切込焼			168,169,171
53		M	106	58	42	4	7	I_1	L		明灰緑	4.0G$^{7.5}/_{1.5}$	見込		15—5	34
54	A1-3層、石敷遺構埋土	S	?			3		〃	〃		明褐	N7.5	〃			35,36,37
55	石敷遺構埋土	L	106	57'	39	3	4	〃	〃		明灰緑	4.0G$^{7.5}/_{1.5}$	容積220cc	22—4	15—4	38
56	〃	P	114	55	45	3	3	I_1	M	42	黄白	2.0Y$^{9.0}/_{0.5}$	容積260cc、重量120g	22—5	15—6	99
57	C1—4層	S	114			3	5	〃	〃		明灰緑	4.0G$^{7.5}/_{1.5}$	被火熱			100
58	?—3層上	M	110			3			〃	43	〃	〃				101
59	試掘坑No.9	M(底部)			43		6		〃		〃	〃				102
60	?—3層上	S	?			3			〃		〃	〃				103
61	石敷遺構埋土	〃	110			3			〃	38	〃	〃				104
62	ピット2:	〃	115			3			〃		〃	〃				105
63	D1—2層	S(胴部)						I_1	M		明灰緑	4.0G$^{7.5}/_{1.5}$				106
64	ピット9埋土	S	?			4		〃	〃		〃	〃				107
65	ピット13埋土	〃	110			3		〃	〃		〃	〃				108
66	石敷遺構埋土	S(胴部)						〃	〃		〃	〃				109

表10　NM2 出土の茶碗属性表

Table10 Attributes of "Rice bowls" from NM2

No.	地区・遺構・層	残存状況	法量					器形	文様		釉色		備考	図	図版	登録No.
			口径	器高	底径	口厚	底厚		類型	幅	色名	JIS番号				
67	?－3層	S(胴部)						I1	M		明灰緑	4.0G7.5/1.5				110
68	?－1層撹乱	〃						〃	〃		〃	〃				112
69	?－2 or 3層	S	110			3		〃	〃		〃	〃				113
70	ピット16埋土	〃	110			3		〃	〃		〃	〃				114
71	A2－?層	〃	?			3		〃	〃		〃	〃				115
72	?	S(胴部)						〃	〃		〃	〃				116
73	?－1層	S	?			3		〃	〃		〃	〃				117
74	A1－4層	S(胴部)						〃	〃		〃	〃				118
75	C1－3層	S	?			3		〃	〃		〃	〃				119
76	?	S(胴部)						〃	〃		〃	〃				120
77	?－1層	〃						〃	〃		〃	〃				121
78	石敷遺構埋土	S	110			3		〃	〃		〃	〃				122
79	C1－3層	〃	106			3		〃	〃	42	〃	〃				123
80	ピット17埋土、A1-4層上	〃	110			3	4	〃	〃	42	〃	〃	A1－4層上のみ被火熱			124
81	石敷遺構埋土	S(底部)			46		5	〃	〃		〃	〃				125
82	ピット36埋土	〃			44		3	〃	〃		〃	〃				126
83	撹乱	S(胴部)						〃	〃		〃	〃				127
84	石敷遺構埋土	S	126			3		I1	K	49	浅青緑	5.0BG8.5/2.5				79、80
85	〃	〃	110	53	40	3	6	〃	〃	45	白	N9.5	被火熱	22－3	15－3	81
86	?－3層	〃	116			3		I1	N	41	明灰緑	4.0G7.5/1.5	〃	23－1	15－7	82
87	C1－3層	〃	116			3		〃	〃		〃	〃				83
88	ピット23埋土、A1-4層	〃	100			3		I1	O	49	青白	3.0PB9.0/1.0		23－2	15－8	85
89	?－1層	〃	?			3		〃	〃		〃	〃				86
90	石敷遺構埋土	M	106	55	40	2	5	I1	P	51	淡白	4.0G8.5/2.5	見込は寿	23－3	16－1	87
91	〃	〃	106			3		I1	Q	49	明灰緑	4.0G7.5/1.5		23－4	16－2	88
92	ピット36埋土	S	116			4		〃	〃		浅青緑	5.0BG8.5/2.5				89
93	ピット2埋土、?-2or3層	〃	115			3		I2	竜唐草	42	明灰緑	4.0G7.5/1.5		23－6	16－3	90
94	?－2or3層	S	?			3		〃	〃		〃	〃				91
95	A1－3層	〃	116			3		〃	唐草?	48	〃	〃		23－13	16－11	161
96	C1－2層	〃	130			3		I	松		〃	〃		23－7	16－5	92
97	ピット14埋土	〃	110			4		〃	カキノハタ		〃	〃		23－10	16－8	93
98	?－3層	〃	116			3		〃	X?		青白	3.0PB9.0/1.0		23－14	16－12	95
99	C2－撹乱	〃	?			2		〃	山茶		明灰緑	4.0G7.5/1.5		23－9	16－7	160
100	C2－3層	〃	110			3		〃	カキノハタ		〃	〃		23－12	16－10	162
101	ピット36埋土	〃	96			3		〃	カキノハタ		〃	〃		23－11	16－9	157
102	石敷遺構	〃	110			2		II	?		〃	〃		23－15	16－13	156
103	試掘坑No.8	〃	106			4		III	茗荷		〃	〃		23－5	16－4	94
104	ピット7埋土	S(胴部)						?	並草葉		青白	3.0PB9.0/1.0		23－8	16－6	84
105	D1－撹乱	〃						?	竜唐草		明灰緑	4.0G7.5/1.5			－	196

表10　NM2出土の茶碗の属性表(2)

No.	地区・遺構・層	残存状況	法量					器形	文様	釉色		備考	図	図版	登録No.
			口径	器高	底径	口厚	底厚			色名	JIS番号				
1	石敷遺構埋土、?－3層上	S	100	52	40	2	5	I	A	明灰緑	4.0G7.5/1.5	見込は米印か?	24－1	17－1	1
2	C1－4層	M	82	41	25	3	5	〃	〃	〃	〃	被火熱	24－2	17－2	2
3	?－1層	S(胴部)						〃	〃	〃	〃				6
4	ピット36埋土	S	93			3		I	B	青白	3.0PB9.0/1.0		24－3	17－4	3
5	〃	〃	?			2		〃	〃	〃	〃				4
6	石敷遺構埋土	〃			38	3		〃	〃	〃	〃	見込は米印	24－4	17－3	5
7	〃	S(胴部)			26		4	I	C	〃	〃		24－5	17－5	7
8	ピット10埋土	S	85	47	?	3	?	〃	〃	〃	〃	口紅あり	24－7	17－6	8
9	石敷遺構埋土	〃	?			3		〃	〃	〃	〃	〃	24－6		9
10	C1-6上	〃	86	41	34	3	3	I	D	明灰緑	4.0G7.5/1.5	貫入あり、被火熱	24－9	17－9	10
11	C1-3層,C1-4層	M	84			3		〃	〃	〃	〃	〃 、 〃	24－8	17－8	11
12	C1-?層,?-2or3層,?-3層	S	88	44	32	3	3	〃	〃	〃	〃	貫入あり、見込は鳥印	24－11	17－7	12
13	C1－2層	〃	86			3		〃	〃	〃	〃	〃	24－10		13
14	C1－4層	〃				3		〃	〃	〃	〃	〃			14
15	C1－3層	〃				3		〃	〃	〃	〃	〃			15
16	?－2 or 3層	〃				3		〃	〃	〃	〃	〃			16
17	〃	S(胴部)						〃	〃	〃	〃	〃			17
18	D2－撹乱	〃						〃	〃	〃	〃	〃			18
19	C2－3層	〃						〃	〃	〃	〃	〃			19
20	石敷遺構埋土	S	92	43	32	2	4	I	竹ニ雀文	〃	〃	貫入・口紅あり、平清水?(分析)	24－13	17－10	21
21	?－1層	〃	90			2		〃	花　文	灰白色	N8.5		24－14	17－16	23
22	?－1層	S(底部)			34		5	I?	松文,竜文	青白	3.0PB9.0/1.0		24－12	17－11	24
23	石敷遺構埋土	S	90			3		I	唐草?	〃	〃				25

表11　NM2出土の小形茶碗の属性表(1)

Table11 Attributes list of "tea bowls" from NM2

No.	地区・遺構・層	残存状況	法量					器形	文様	釉色		備考	図	図版	登録No.
			口径	器高	底径	口厚	底厚			色名	JIS番号				
24	?－3層上	S	?			3		Ⅰ	無文	青白	3.0PB 9/1.0				26
25	C1－4層	〃	?			2		〃	〃	〃	〃				29
26	石敷遺構埋土	〃	90			3		〃	〃	明灰	〃	口紅(オリーブ色)あり	24—15	17—15	31
27	〃	〃	?			3		〃	〃	薄緑	4.0G 8.5/2.5	口紅あり			32
28	ピット36埋土	M	82			3		Ⅱ	矢筈文	明灰緑	4.0G 7.5/1.5	貫入あり、口紅あり、164cc.	24—16	17—12	20
29	〃	S	68			3		Ⅲ	山水文	薄青	5.0BG 8.5/2.5		24—17	17—13	21
30	石敷遺構	S	64			2		Ⅳ	無文	青白	3.0PB 9.0/1.0	盃か?	24—19	17—17	34
31	?－2or3層	SS	?			3		?	詩歌	青白	3.0PB 9.0/1.0			17—20	37
32	C2－?層	〃						?	丸文	明灰緑	4.0G 7.5/1.5			17—18	39
33	ピット14埋土	S	?			3		?	無文	青白	3.0PB 9.0/1.0	口紅あり			27
34	攪乱	〃	?			4		?	〃	〃	〃				28
35	?－2or3層	〃	?			3		?	〃	〃	〃	口紅あり			30
36	?	〃	?			3		?	〃	〃	〃	〃			33
37	ピット12埋土	S(胴部)							〃	〃	〃	貫入			36
陶器	炻器														
1	ピット36埋土	S(底部)			39		3	?	無文	明灰	N7.5	胎土:黄白色(2.0Y 9.0/5.0),貫入大堀	24—18	17—14	1
2	?－3層	S	40	65	26	2	3	筒形		灰褐	4.0YR 3.5/3	胎土:暗褐灰色(4.0YR 3.5/9)平清水	24—20	17—21	7
3	ピット23埋土・ピット36埋土	S	86			3		端反形	無文	灰白	7.5Y 7/2	胎土:灰白(N8/0)、貫入大堀		17—19	

表11　NM2出土の小形茶碗の属性表(2)

にはⅠ型がほとんどで、他は各1個体である。

Ⅰ型　口径は約80～90㎜(2寸7分～3寸)、器形は約40～45㎜(1寸3分～1寸5分)であり、プロファイルもよく近似している(図20－9)。これはちょうど茶碗を3分の2程度縮小した大きさである(図18－10)。小形茶碗の文様はその多くが内外面ともに同心円区画文をもたない点で、茶碗と区別される。以下胴部文様によって細分を行なう。

Ⅰ－A(図24－1・2、図版17－1・2)：源氏香文と双葉葵文。見込文は不明。Ⅰ－B(図24－3・4、図版17－3・4)：源氏香文と双葉葵文。内外面に同心円区画文がある。見込文は米印。Ⅰ－C(図24－5～7、図版17－5・6)：篆(てん)字様の文字文ともいわれる(愛知県教育委員会ほか1975、白老町教育委員会 1982)。見込文と口紅がある。Ⅰ－D(図24－8～11、図版17－7～9)：菊花文と蝶文。見込文は鳥。貫入が入る。本類型はC－1グリッドに集中する(表9)。このほかⅠ型には、見込に「竹ニ雀文」の印判を押したもの(図25－13、図版17－10)、花文をもつもの(図24－14、図版17－16)、見込に竜文の印判を押し外面に松文をもつもの(図24－12、図版17－11)、無文で口紅(黒もある)をもつもの(図25－15、図版17－15・19)などがある。

Ⅱ型(図24－16、図版17－12)：矢筈文。Ⅲ型(図24－17、図版17－13)：山水文。Ⅳ型(図24－15、図版17－17)：無文。盃の可能性が強い。そのほかの磁器には詩歌を書いたもの(図版17－20)、丸文をもつもの(図版17－18)がある。

磁器小形茶碗の容積は平均110cc(6勺)であるが、蓋付茶碗で推定される7分目という実質容積を小形茶碗に適用すれば、小形茶碗の実質容積は約70cc(4勺)となる。

陶器には大堀産の茶碗の底部(図24－18、図版17－14)と平清水産の炻(せっ)器質で簾(すだれ)状の文様を描いたもの(図24－20、図版17－21)、そして大堀産で端反型の無文のものがある。

C．茶碗の年代

NM2出土の茶碗と同一型式あるいは類似する茶碗は、他の地域でも出土している。これらの中で年代を限定できる遺跡は、北海道白老町の白老仙台藩陣屋跡と愛知県瀬戸市かたみ第2号窯跡上層である。前者には仙台藩が北方警備のため安政3（1856）年から慶応4（1868）年まで滞陣し、戊辰戦争後は南部藩と一ノ関藩が白老一郡の支配のために滞陣し、明治4（1871年）には廃絶された（白老町教育委員会 1982）。したがって、この陣屋跡出土の茶碗の使用年代は1856年から1871年の間となる。かたみ第2号窯跡上層は報告者が陶工の加藤家の墓石、位碑、そして寺の過去帳を分析した結果、使用年代の下限を1850年と定めている（愛知県教育委員会ほか 1975）。以上対比資料からみたNM2出土の茶碗の下限年代は19世紀中葉の後半に位置づけることができよう。

（佐川正敏）

注．属性表の残存状況はP，L，M，S，SSの5段階に分け表示した。
残存部分の面積の推定完形面積に対する比率が100%、すなわち完形品をP，99%～60%をL，59%～30%をM，29%～20%をS，19%以下をSSとした。他の器種の基準も同様である。

② 皿

この時期出土の皿類は、陶器皿62個体、磁器皿95個体、計137個体である（土師質の皿類は除く、⑦を参照のこと）。これらは、日用雑器としての小形丸皿類（いわゆる玉縁口縁丸皿、輪花形・菊形丸皿、油皿など）、小形角皿（手塩皿）のたぐいで、長皿や大皿類は全く認められない。主として石敷遺構から出土し、他に3層・4層出土のものが多い。

陶・磁器各皿類を器形に基づき、それぞれⅠ～Ⅱ類、Ⅰ～Ⅲ類に大別、さらに各類の中で細分を行なった（表12）。陶器皿Ⅰ類は高台をもつ丸皿、Ⅱ類は油皿（灯明皿）と称される丸皿、磁器Ⅰ類は高台をもつ丸皿、Ⅱ類は高台をもつ輪花形・菊形丸皿、Ⅲ類は手塩皿と称される角皿である。これらはさらに底部、口縁部などの差異から、陶器皿はⅠ類を3タイプ、Ⅱ類を4タイプ、磁器皿はⅠ類を3タイプ、Ⅱ類を4タイプ、Ⅲ類を1タイプに細分することができる。これらの細別において、陶器皿と磁器皿の両者間に同一器形はない。

以下、陶器皿・磁器皿ごとに各類の諸特徴をみていくが、皿類の部位名称は図18、文様分類は表13、各類の個体数及び出土状況は表14・15、また、各個体の属性観察は表16～20にまとめて示した。

A．陶　器　皿

a．製作上の特徴

胎土：全般にⅠ類は粒子が緻密でⅡ類は粗い。Ⅱ類の中でも$Ⅱ_1$・$Ⅱ_3$類は砂粒を混じえ特に粗い。

細粒胎土のⅠ類は白色ないし灰白色、粗い胎土のⅡ類はおおむね褐色ないし橙色を呈す。

成形：いずれもロクロ水挽後、外面口縁部～底部はロクロ削りを行う。高台はロクロ回転による削り出し。$Ⅰ_1$類の玉縁口縁は折り返しによるもので、断面ではしばしば小さな穴が観察される。

文様：施文されるのは$Ⅰ_1$類と$Ⅰ_3$類のみで、他は全て無文。$Ⅰ_1$類で施文されているものは全て呉須染付であり、花文（A類）が最も多い。$Ⅰ_3$類の場合は鉄絵。

釉薬：灰釉（木灰と藁（わら）灰）と鉄釉（飴釉）が用いられる。鉄釉はⅡ類に限定されるが$Ⅱ_4$類のみ灰釉。Ⅰ類は全て灰釉。$Ⅰ_2$類は底部、$Ⅱ_1$～$Ⅱ_4$類は外面口縁部から底部にかけてが無釉。

焼成：目跡が5個と3個付く例がある。5個は$Ⅰ_1$類に、3個はⅡ類に限られる。ほとんどの資料に細かい貫入が認められるが、$Ⅰ_1$類、$Ⅰ_3$類、Ⅱ類の一部には貫入が全くない。

b．各器形ごとの諸特徴

Ⅰ類（図25－1～11、図版18－1～17、19－1～7）

$Ⅰ_1$類が30個体と最も出土点数が多く、$Ⅰ_2$・$Ⅰ_3$類は少ない。$Ⅰ_1$類は折り返しによる玉縁口縁をもつ。

$Ⅰ_1$類（図25－1～9、図版18－1～17、19－1～4）

出土点数は30（22）個体（注1）。形状にややバラエティーがある。概して胎土は白色ないし灰白色、釉は灰白色ないし緑がかった灰白色を呈し、1点（図25－5）を除いて他はいずれも細かい貫入が認められる。目跡は確認できる資料では全て5個、畳付部は露胎である。文様には呉須染付による花文：Aa～Ae類（図25－1～5）が多く、他には山形に武田菱文：B類（図25－6）、紅葉に松葉文：C類（図25－7）、無文（図25－8・9）のものがある。

$Ⅰ_2$類（図25－10、図版19－5・6）

この器形と推定される資料は3個体出土した。口径に比し高台径が小さい。3個体とも胎土は浅黄橙色、全体の色調は明黄褐色を呈し、貫入は全く認められない。腰部から高台内にかけては無釉、おそらく無文であろう。

$Ⅰ_3$類（図25－11、図版19－7）

1個体のみの出土。やや粗い胎土をもち、全体的に器厚が薄い。内・外面口縁部には（藁）灰釉特有の乳濁が認められる。腰部から高台内にかけては無釉、見込には鉄絵が施されている。

Ⅱ類（図25－12～15、図版20－1～4）

いわゆる油皿（灯明皿）と称される浅い小形の丸皿類。全般的に胎土は粗く、施釉は内面では全てであるが、外面は口唇部から口縁部周辺までにとどまる。いずれも無文。$Ⅱ_2$類、$Ⅱ_3$類$Ⅱ_4$類の底部はロクロによる削り込み、$Ⅱ_1$類の底部もロクロ削りがなされている。これらの皿類は図37－12の皿受とセットになる場合がある（図版35－9）（注2）。

陶・磁器	器形				特徴	文様タイプ	図	図版
陶器製	I類	高台をもつ丸皿	I1		玉縁口縁。腰部～口縁部へかけてはゆるやかな立ち上り。高台内は比較的高い。	Aa、Ab、Ac、Ad、Ae、B、C、無文	25-1～9	18-1～17 19-1～4
			I2		体部は丸味をもってふくらむ。高台内は比較的高い。口径に比し高台径が小さい。	無文	25-10	19-5・6
			I3		体部中半でやや屈曲をもつ。口縁部は外反。器厚は全体的に薄い。	K	25-11	19-7
	II類	油皿（灯明皿）と称される丸皿	II1		口縁部はやや内弯、底部は平坦かもしくはやや上げ底状。	無文	25-12	20-1
			II2		口縁部は外反、底部は〜状。	無文	25-13	20-2
			II3		口縁部はやや内弯、底部はII2類と同様〜状。	無文	25-14	20-3
			II4		口縁部はやや内弯。II1～II2類に比し厚手。底部は〜状。	無文	25-15	20-4
磁器製	I類	高台をもつ丸皿	I1		玉縁口縁。深さがなく、体部中半から立ち上る。薄く低い口縁をもつ。高台は低い。	G	26-1	20-5
			I2		玉縁口縁。蛇ノ目高台。底部～体部へかけては明瞭な屈曲をもつ。	B、Da、Db I	26-2～6 27-1～3	20-6～8 21-1～6 22-1～6
			I3		浅い。体部中半から立ち上る。底部は厚手だが口縁部は薄い。	H	27-4	22-7
	II類	高台をもつ輪花形・菊形丸皿	II1		輪花形。花弁数16枚。やや高目の蛇ノ目高台。	E、F、	27-6・7	22-9 22-1・2
			II2		輪花形。花弁数20枚。やや高目の高台。	無文	27-8	23-7・8
			II3		輪花形。花弁数24枚。高台はII2類よりさらに高い。	無文	27-9	24-1
			II4		菊形。花弁数32枚。低い蛇ノ目高台。	無文	27-10	24-2
	III類	角皿（手塩皿）			低い高台。平面形は隅切のほぼ正方形。	Ja-イ、Ja-ロ Jb	28-1～3	24-3～13

表12　NM2出土の皿類の器形分類

Table12 Morphological classification of dishes from NM2

文様タイプ			図	図版	文様名称	施文手法	備考
A	a		25－1	18－1	花文	呉須染付	陶器
	b		25－2	18－2	〃	〃	〃
	c		25－3	18－3	〃	〃	〃
	d		25－4	18－4	〃	〃	〃
	e		25－5	18－6	〃	〃	〃
B			25－6、27－1・2	19－1、21－6、22－1～5	同心円文＋山形に武田菱	〃	陶器、磁器
C			25－7	19－1	松葉に紅葉文	〃	陶器
D	a		26－2～4	20－6～9、21－1・2	笹文＋同心円文＋鳥文	〃	磁器
	b		26－5・6	21－3～5	笹文＋同心円文＋鳥文	〃	〃
E			27－6	22－9	梅花文	呉須染付＋筒描	〃
F			27－7	23－1・2	山水文	呉須染付	〃
G			26－1	20－5	竹林七賢人図	〃	〃
H			27－4	22－7	萩文(?)	印刻＋呉須染付	〃
I			27－3	22－6	笹文	呉須染付	〃
J	a	イ	28－1	24－3～5	松葉にふくら雀文	浮文（凸文）	〃
		ロ	28－2	24－6	松葉にふくら雀文＋呉須	浮文（凸文）＋呉須染付	〃
	b		28－3	24－13	（幾可学文）	浮文（凸文）	〃
K			25－11、27－12・13など	19－7、23－4～6など	不明	呉須染付、鉄絵	陶器、磁器

表13　NM2出土の皿類の文様分類
Table. 13　Classification of dish design from NM2

II_1類（図25－12、図版20－1）

6(3)個体出土。胎土は粗い。黒褐色ないし暗オリーブ褐色を呈す鉄釉が施されるが、外面の体部から底部にかけては無釉。目跡は3個体付く例がある。一部の資料にタール状付着物が観察される（図25－12）。

II_2類（図25－13、図版20－2）

2個体出土。図25－13は鉄釉が外面口唇部まで全体的に薄掛けされている。暗赤褐色～赤褐色を帯びる。無釉の底部は円形に橙色に発色し、外面口縁部にはタール状付着物が認められる。

II_3類（図25－14、図版20－3）

2(1)個体出土。II_1類とは口縁部、II_4類とは底部の削り込みの形態が異なる。図25－14は暗オリーブ灰色を呈す鉄釉が外面口縁部まで施釉されている。

II_4類（図25－15、図版20－4）

1個体出土。II_1～II_3類とは異なり胎土は灰色で緻密、また釉も鉄釉ではなく暗オリーブ色の灰釉が用いられている。施釉はやはり外面口唇部までである。

B．磁器皿

a．製作上の特徴

胎土：白色ないし灰白色を呈す緻密なもの。ただし、I_2類の一部にはやや青味を帯び、黒色粒（鉄分？）が比較的多く含まれるものがある。

成形：3手法みられる。I類はロクロ水挽後、外面口縁部から底部までロクロ削りを施こし、高台（蛇ノ目高台も含む）をロクロ回転によって削り出す。II類はロクロ水挽によって素形を作り、その後「型打ち」を行い、高台をロクロ回転によって削り出す。III類は「型起し手法」。なお、I_1・I_2類の玉縁口縁は折り返しによる。

器形		文様	火災前 石敷遺構	火災前 ピット36	火災前 石敷遺構ピット17	火災前 ピット36 B1−6	火災時・直後 A1	火災時・直後 B2	火災時・直後 C1	火災時・直後 C2	火災時・直後 区不明	試掘	不明その他	小計			総計
Ⅰ	Ⅰ1	Aa	1											1	30	34	62
		Ab	1											1			
		Ac	1											1			
		Ad										1		1(1)			
		Ae	1											1			
		B						1						1(1)			
		C	1											1			
		無文	2											2			
	(Ⅰ1)	(A)	7	1			2				1			11			
		― ?	4				1	1	2	1			1	10			
	Ⅰ2	無文		2	1									3(3)			
	Ⅰ3	K	1											1			
Ⅱ	Ⅱ1	無文	6											6(3)	12		
	Ⅱ2	〃					1		1					2			
	Ⅱ3	〃					2		1					2(1)			
	Ⅱ4	〃							1					1			
	(Ⅱ)	(〃)				1								1			
不明		―	2	1			3	2	2		3		3	16			

注（ ）を付したものは推定を意味する。
（ ）内に数字が入る場合は内数。

表14　NM2・陶器皿の分布

Table14 Distribution of dishes at NM2

器形		文様	火災前 石敷遺構	火災前 ピット36	火災前 石敷遺構A1−4	火災時・直後 A1	火災時・直後 A2	火災時・直後 B1	火災時・直後 C1	火災時・直後 ピット16	火災時・直後 ピット23	火災時・直後 ピット18 C2	火災時・直後 ピット13 B1	火災時・直後 区不明	その他 試掘	その他 不明その他	小計			総計
Ⅰ	Ⅰ1	G													1		1	39	47	95
	Ⅰ2	B				3	1	1								3	8(5)			
		Da	13		1												14(7)			
		Db	4			1	1							1			7(4)			
		K														1	1(1)			
		― ?	1			2		1		1		1	1	2			9(9)			
	Ⅰ3	H	1														1			
		I															2	6		
	(Ⅰ)	(無文)	2														2			
		― ?	1											1			2			
Ⅱ	Ⅱ1	E	1														1	3	28	
		F	2														2			
	Ⅱ2	無文	5													1	6(3)			
	Ⅱ3	〃							1		1						2(1)			
	Ⅱ4	〃	1														1			
	(Ⅱ)	K	1													1	2	15		
		― ?	9						1					1		1	13			
Ⅲ		Ja-イ	3			1			4							1	9(4)	18		
		Ja-ロ							4					3			7(6)			
		Jb	1														1			
		(Ja)												1			1			
不明		―	1		1	1											3			

表15　NM2・磁器皿の分布

Table15 Distribution of porcelain dishes at NM2

文様：呉須染付（I_1・II_1類）、呉須染付と筒描（II_1類の一部）、印刻と呉須染付（I_3類）、型起し成形時の浮文（凸文）（Ⅲ類）などがある。 II_2、II_3、II_4類は無文、 I_3・II_1・II_4類にはいわゆる口紅が施されている。

釉薬：全て石灰釉とみられる。I_2類の高台内及びII_2・II_3類の見込部では蛇ノ目釉ハギがなされている。

焼成：目跡は4個（I_2・Ⅲ類）、5個（I_2類）付く例がある。I_2・II_4類では貫入のみられるものがある。

b．各器形ごとの諸特徴

Ⅰ類（図26－1～6、27－1～5、図版20－5～9、21－1～6、22－1～8）

I_1・I_2類は折り返しによる玉縁口縁をもつ。蛇ノ目高台をもつのはI_2類。量的に最も多いのはI_2類で39(26)個体、I_1・I_3類は1個体のみの出土である。

I_1類（図26－1、図版20－5）

1個体のみの出土。図26－1はI_2類と比較すると小形で浅く、高台も低い。胎土は白色、釉は明緑灰色を呈するが、焼成が不良なためか釉の一部が白っぽく（白斑状）浮き出ている。外面には源氏香文、内面には竹林仙人図：G類が施文されている。

I_2類（図26－2～6、27－1～3、図版20－6～9、21－1～6、22－1～6）

磁器皿の中では出土数が最も多く39(26)個体。大きさの変異は小さい。この器形の皿は、釉調・呉須色調・目跡の数などから2群に分離することが可能である。ひとつは、胎土が総じて青味がかった灰白色（黒色粒―鉄分？の含有量が他の磁器と比較すると多い）、釉は明オリーブ灰～明緑灰色を呈し、釉面は白斑状になる例が多く全般的に透明感に乏しく、ややくすんだ調子の一群である。目跡は5個、蛇ノ目高台内は輪状に釉ハギがなされ（蛇ノ目釉ハギ）、その部分のみ鈍い橙色に発色している。これらの特徴に加え、器形の歪みをもつ比率が高いという傾向ももつ。内面に呉須染付による同心円文（1本、3本、1本）と笹文・鳥文（〜）を描いたDa類（図26－2～4）、笹文を描いたⅠ類（図27－3）をもつものがある。他の一群は胎土が黒色粒が少ないため前者より白味が強く、釉面は白斑状になるのは稀である。したがって透明感をもっている。目跡は4個、蛇ノ目高台内は輪状に釉ハギがなされるが、前者のように橙色に発色していない。この一群には、Da類と同様の文様構成（笹文）をもつが笹の展開方向が逆で、その単位数が異なる（前者は4つ）文様（Db類）をもつもの（図27－5・6）、同心円文と山形に武田菱文を描いたB類（図26－1・2）をもつものがある。

器形・文様のモティーフ、高台内蛇ノ目釉ハギの点などで共通点が認められる一方、胎土、釉調、目跡の数などに相違をもつこれら2群は、後述するように異なった生産地の製品であることを示している。

I_3類（図27－4、図版22－7）

1個体のみの出土。図27－4はI_1類と同様小形で浅く、高台も低い。底部は厚手だが口縁部は薄い。萩文(？)を印刻後、その部分に呉須を染付(H類)しているが、この施文手法が認められるのはこれ1点のみである。口唇部にはいわゆる口紅が施されている。

不明・その他（図27－5、図版22－8）

図27－5は他の丸皿と比較するとやや口径が大きい。胎土は黒色粒の含有量が比較的多く、青味がかった灰色を呈す。釉は明緑灰ないし緑灰色を呈する。胎土・釉調の特徴は、後述のII_2・II_3類の無文の輪花形丸皿と類似する。おそらく高台をもつ浅い丸皿で、見込には蛇ノ目釉ハギがなされるものであろう。他に2個体同様の資料がある。

II類（図27－6～13、図版22－9、23－1～8、24－1・2）

成形は、ロクロ水挽後、型に入れて仕上げる「型打ち」。高台は蛇ノ目高台も含めていずれもロクロ削りにより作出されている。「花弁数」により細分される。花弁を模した波形は、II_1・II_2類やII_3類では底部と体部の境界付近から認められる(輪花形)のに対し、II_4類は見込中央部からはじまる(菊形)。

II_1類（図27－6・7、図版22－9、23－1・2）

4(1)個体出土。同じ構成の山水文(F類)をもつ皿が2個体あるが(図27－7、図版23－2)、焼成不足のため、図27－7は釉の一部が白斑状になりやや不透明、呉須は灰青ないし暗灰青色を呈す。両者とも「口紅」が施されている。図27－6は呉須染付と筒描によって梅花文(E類)が配され、やはり口紅が施されている。いずれも蛇ノ目高台内は輪状に釉ハギがなされているが、I_3類の一部の資料のように輪状の無釉部が橙色に発色している例はない。

II_2類（図27－8、図版23－7・8）

5(3)個体出土。胎土はやや青味がかった灰白色、釉は明緑灰色を呈し、いずれも無文。II_1類や後述するII_4類のように口紅が施されることはない。見込部は輪状に釉ハギ(蛇ノ目釉ハギ)がなされている(この釉ハギは、重ね焼きの際に皿と皿が釉を媒体として融合するものを防ぐためである)。

II_3類（図27－9、図版24－1）

2(1)個体出土。無文で、見込は蛇ノ目釉ハギ、口紅が施されないなどII_2類と共通した特徴をもつが、花弁が4枚多く、釉もやや灰色味が強い点などが異なる。高台内もII_2類に比し少々高目である。

II_4類（図27－10、図版24－2）

1個体のみの出土。菊形丸皿。胎土は白色、釉も白色で無文、口紅が施されている。蛇ノ目高台内は輪状に釉ハギがなされている(橙色には発色していない)。他類の磁器と異なり細かい

貫入がある。

不明・その他（図27—11～13、図版23－3～6）

図27—11～13はいずれも輪花形・菊形丸皿であるが、 II_1、II_2、II_3、II_4類のいずれかの器形であるのかそれ以外であるのか不明である。図27—11は青磁の口縁部破片で、本遺跡では単独の出土品である。

Ⅲ類（図28－1～3、図版24－3～13）

18個体出土。形状は斉一的で、平面形態は隅切のほぼ正方形をなすが、各辺はやや内弯気味。型起し成形時に浮文(凸文)が施される。松葉にふくら雀文：Ｊａ類(図28－1・2)と、全体のモティーフは不明であるが幾何学的文様：Ｊｂ類(図28－3)をもつものの２種類がみられる。前者にはさらに浮文の周辺部を呉須によって染付するもの：Ja—ロ類(図28－2)と染付しないもの：Ja—イ類(図28－1)がある。

Ｃ．陶・磁器皿各類型ごとの出土状況

皿類の出土した遺構・層を、二の丸火災前・火災後に分け、その出土点数を各類型ごとに示した(表14・15)。この表からいくつかの傾向・特徴がうかがわれる。

まず平面分布をみると、火災前では陶・磁器とも石敷遺構埋土から出土した資料がほとんどであり、他にはピット36出土のものがごくわずかあるにすぎない。これは、火災前の時期の皿は各類ともほぼ例外なく石敷遺構廃絶後、そこに一括廃棄されたものであることを示している。焼失時ではＡ－1区、Ｃ－1区からの出土がやや多いが、特定の類型に限って分布上の偏在性が強く認められるということはない。ただし、磁器Ⅲ－Ｊａ—イ類(手塩皿)は、Ｃ－1区にやや集中する傾向を示している。

次に各類の時期別分布をみると、明瞭な時期差を示す類型が認められる。陶器では、Ⅱ類の油皿のうちII_1類が全て石敷遺構出土であるのに対し、II_2、II_3、II_4類の油皿は石敷遺構から出土したものは１点もない。一方、陶器I_1類は全て石敷遺構と関連をもつようである。磁器ではI_3類の山形に武田菱文（Ｂ類）をもつ一群、及びⅢ類の松葉にふくら雀文と呉須染付(Ｊａ—ロ類)をもつ一群は、石敷遺構からは出土せずいずれも３層と４層出土である。

石敷遺構は二ノ丸火災時より古い時期のものであるから、この出土状況は、磁器I_2－Ｂ類及びⅢ－Ｊａ—ロ類、陶器II_2、II_3、II_4類が他の陶・磁器より時期的に新しいことを示唆していると言える（注3）。つまり、江戸時代末期から明治時代初期にかけての時期でも陶器II_2～II_4類、磁器I_2－Ｂ類・Ⅲ－Ｊａ—ロ類は、より後半の時期に帰属させることが可能である。

Ｄ．生産地について

東北地方及びその周辺地域では、近世から近代にかけての窯跡の調査例はほとんどなく、公表資料も少ないことから生産地の同定は困難である。今回胎土分析を実施し、より客観的に生

産地の同定を行なうことにも努めたが、皿類は分析資料が少なく、また継続分析中の資料もあるため一部の分析結果しか参考にできなかった(注4)。したがって、今回確実に生産地が同定できた資料は一部のものに限られている。

陶器では、相馬大堀産(福島)、磁器では、切込産(宮城)・平清水産(山形)・伊万里産・瀬戸産と推定される資料群が抽出できる。

相馬大堀産とみられるのは、陶器Ⅰ$_1$～Ⅰ$_3$類(図25－1～11)、Ⅱ$_1$、Ⅱ$_2$、Ⅱ$_3$、Ⅱ$_4$類(図25－12～15)である。ただし、陶器で最も出土量の多いⅠ$_1$類の資料は、一部あるいは全て、磁器とともに陶器も製作していた平清水産の可能性もある。図41に示した胎土分析において、Ⅰ$_1$類破片(2点)は大堀産の土瓶、徳利などのグループからやや離れて位置するし、また平清水焼窯址から、A、B、C類の文様をもつⅠ$_1$類と全く区別のつかない特徴を持つ破片を採集できたからである(注5)。また、平清水産とみてほぼ間違いのない磁器Ⅰ$_2$類の丸皿に用いられている山形に武田菱文(B類)が、陶器Ⅰ$_1$類にも施文されているという事実も平清水産とする裏づけとなる。平清水産の製陶技術には相馬大堀の影響もあり(高橋 1977)、両窯で全く共通した特徴をもつ製品を生産していたとも当然考えられる。陶器Ⅰ$_1$類は、それぞれの窯跡出土資料と本遺跡出土資料の肉眼による多くの属性の対比、胎土分析データ間の対比から判別しなければならない一群であろう。

磁器皿Ⅰ$_2$類の一部(Ⅰ$_2$類の記述の中で前者とした一群)(図26－2～4、27－3)、Ⅱ$_2$・Ⅱ$_3$類の輪花形丸皿(図27－8・9)、Ⅱ類不明・その他とした丸皿(図27－5)は切込産とみて間違いない。胎土分析を行なったⅠ$_2$－Ⅰ類、Ⅰ$_2$－Da類(各1点)はいずれも切込産のグループに属する。これらの資料と同様のものは、切込の工房址からも大量に出土している(芹沢 1976、芹沢編 1978)。Ⅰ$_2$類の説明の中で記述したように、総じて胎土は青味がかった灰白色で、また焼成技術の影響か釉面は白斑状～白濁状になりくすんでやや失透調、蛇ノ目釉ハギがなされているⅠ$_2$類(高台内)、Ⅱ$_2$・Ⅱ$_3$類(見込部)の露胎部は鉄分が反応して鈍い橙色に発色するという特徴をもつ。

平清水産は、磁器Ⅰ$_2$類の一部(後者とした一群)(図26－5・6、27－1・2)、及びⅢ類の角皿(手塩皿)(図28－1～3)である。Ⅱ$_1$類の輪花形丸皿も胎土・釉調・蛇ノ目高台の形態などから平清水産と考えてよいかもしれない。胎土分析は、Ⅰ$_2$－B類、Ⅲ－Ja－ロ類各1点ずつ行なったが、そのデータはいずれも平清水産として問題はない。なお、平清水産のⅠ$_2$類の一群には、切込焼の一群と器形が全く同じで、用いられる文様のパターンが類似した例(図26参照)があり、これは平清水窯と切込窯の技術的交流の一端を示している。

伊万里産とみられるのは磁器Ⅰ$_1$類の玉縁口縁をもつ丸皿(図26－1)である。単独出土で、釉調、呉須色調は他の磁器製のものとは異なる。灰青色ないし暗緑青色を呈す呉須染付による

竹林仙人図は伊万里特有のものである(注6)。

瀬戸産と推定される磁器皿も散見するが(図27—4・12)、不明な点が多い。

以上のような結果から、NM2出土皿類の生産地のあり方として、陶器が相馬大堀産、磁器が切込産、平清水産で大半を占め、伊万里産、瀬戸産(?)などの西日本の磁器皿がわずかに入りこんでいる様相をとらえることができる。

E. 年代について

前述の茶碗類のように、北海道白老陣屋跡出土資料と対比しうるものはなく、また、年代のわかる他遺跡の資料と比較できるものもないため、比較資料による年代の限定はできないが、江戸時代末期～明治時代初期の時期に位置づけられるNM2出土皿類は、その出土状況を検討すると年代がさらに狭くおさえられるものがあるようである。

皿類の中に、この時期の中でもより後半に位置づけられるものに、磁器製では山形に武田菱文の玉縁口縁丸皿(I_3—B類)、呉須染付のあるふくら雀文の手塩皿(Ⅲ—Ja—ロ類)、陶器製では油皿(II_2～II_4類)があることは前述したが、これらの陶・磁器皿類は、石敷遺構からは全く出土せず、全て火災時(明治15年)の地層である3・4層出土であることから、江戸時代末期まで遡ることはなく、明治時代初期のものと限定しうる。陶器製の花文・紅葉に松葉文をもつ玉縁口縁丸皿(I_1—Aa-e・C類)、油皿(II_1類)、また、磁器製の笹文をもつ玉縁口縁丸皿(I_2—Da・Db類)、輪花形・菊形丸皿(II_1—E・F、II_2・II_4類)、ふくら雀文の手塩皿(Ⅲ—Ja—イ類)などは前者より時期的に古く位置づけられるようであるが、これらについては年代をより狭く限定できず、江戸時代末期から明治時代初期の年代幅でおさえざるを得ない。

これらNM2出土皿類を生産地との関連で考えると興味深い様相がとらえられる。前述したように、NM2出土皿類のほとんどを占める生産地は、磁器皿が切込産(宮城)、平清水産(山形)、陶器皿が相馬大堀産(福島)であるが、NM2出土皿類の中で時期的により後半に位置づけられるとした磁器皿はいずれも平清水産で、陶器製は相馬大堀産である。つまり、後半期に位置づけられる磁器皿の中には切込産の皿類は認められない。他方、これらの皿類より古く位置づけられる皿類には、切込産・平清水産・相馬大堀産の製品がみられる。

ところで、平清水窯、相馬大堀窯は明治に入っても生産を継続しているが、仙台藩の御用窯としての切込窯は、幕藩体制の崩壊、つまり明治維新とともに廃窯へと向かう(芹沢 1981)。この生産地の状況は、まさにNM2出土皿類のあり方に対応している。すなわち、明治維新後まもなく煙を絶つに至った切込窯の磁器皿は姿を消すが、なお生産を継続し、その製品を供給していた平清水窯、相馬大堀窯の皿類はその後も利用されていたのである。NM2出土皿類の出土状況は、当時の生産地のあり方を反映していると考えられる。　(佐久間光平)

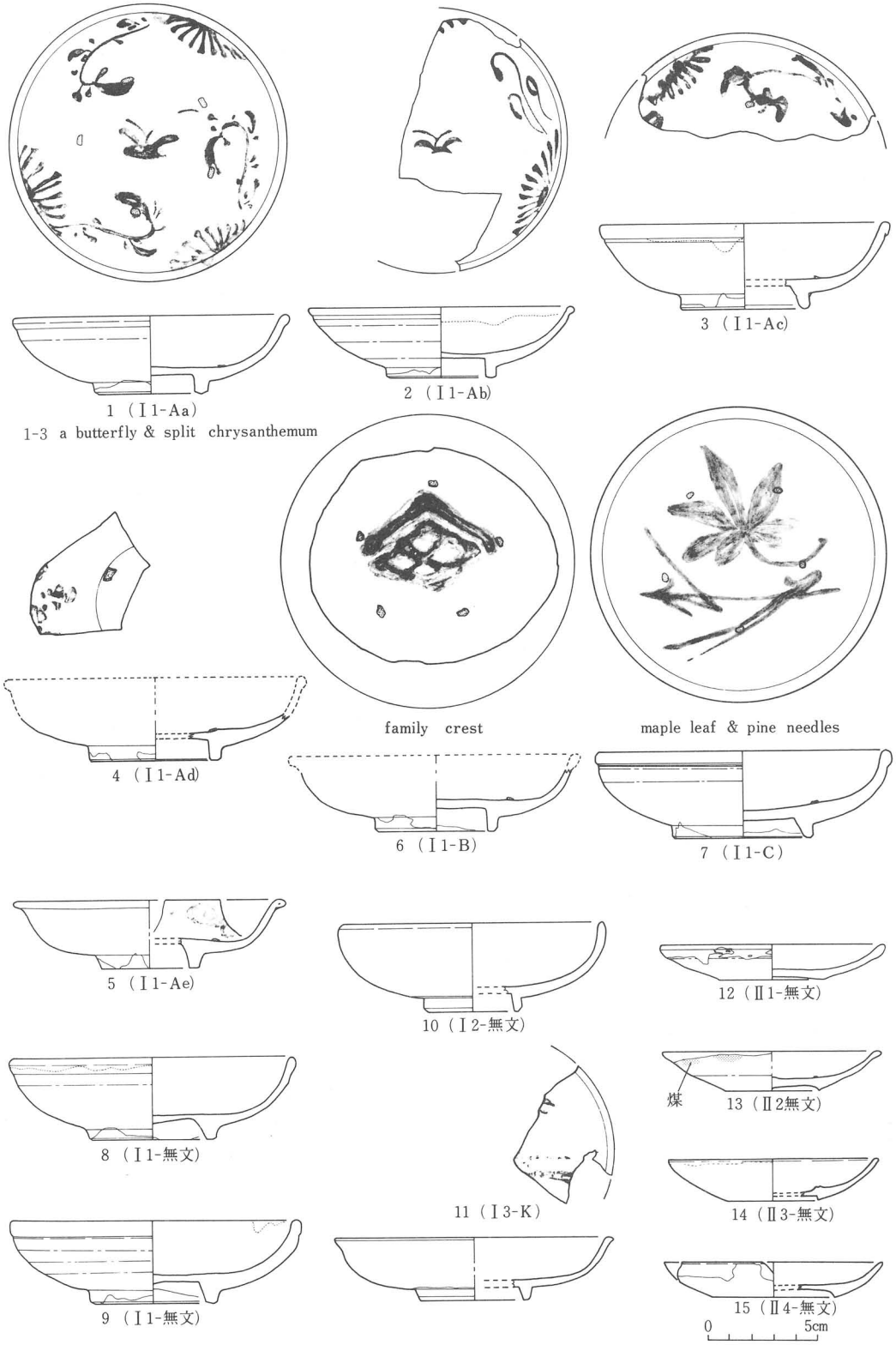


図25 NM2出土の陶器皿類 (Ⅰ類:1～11、Ⅱ類:12～15) Mid. of 19c.(before 1882)

Fig. 25 Dishes from NM2 (1-9 Sôma-Ôbori or Hirashimizu ware 10-15 Sôma-Ôbori ware)

1-7、10、11 cobalt bl and rounded rim 12-15 oil lamp dishes covered with iron glaze

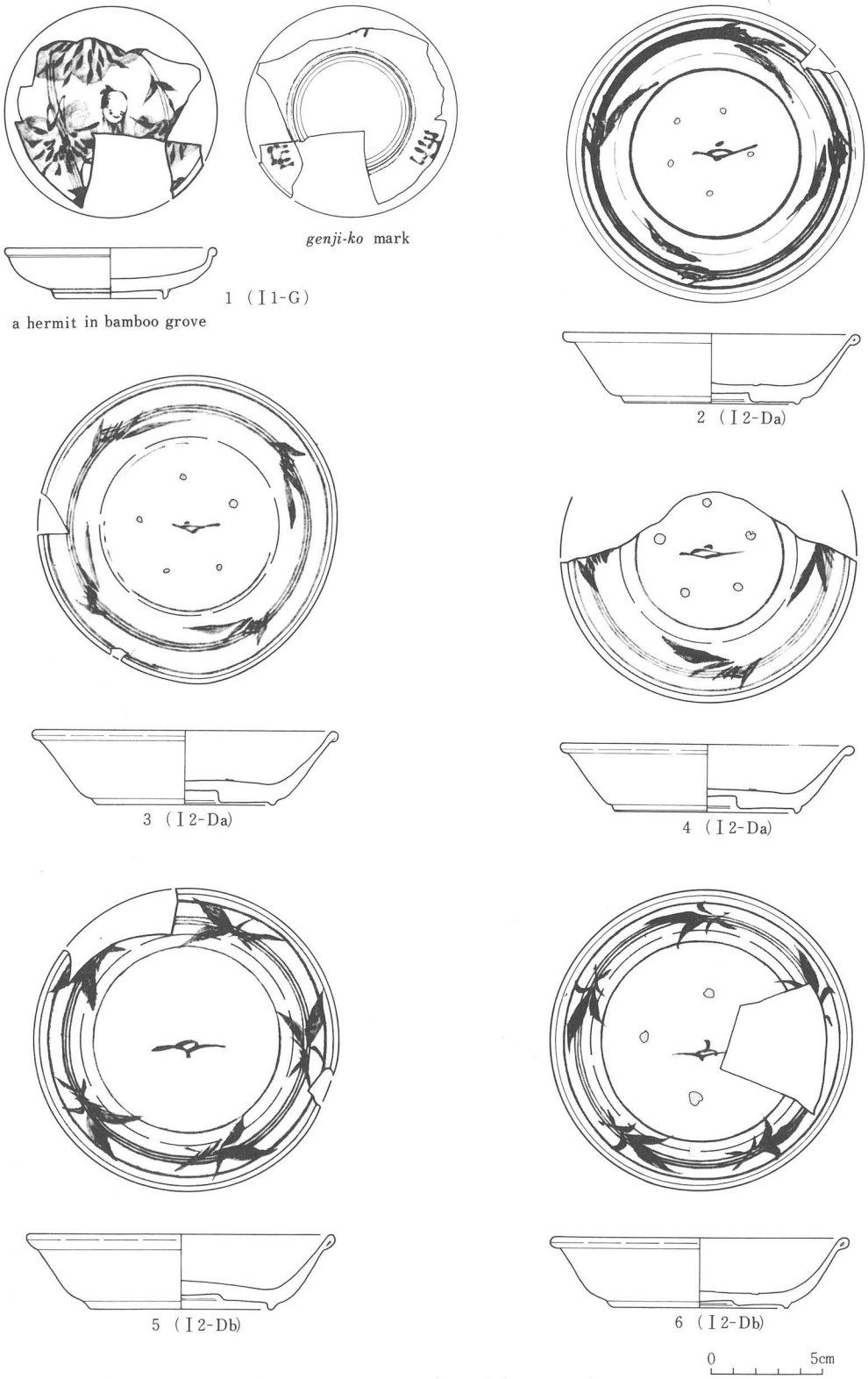


図26　ＮＭ２出土の磁器皿 (1)　(Ⅰ類: 1～6)　Mid. of 19c. (before 1882)

Fig. 26 Dishes from NM2 porcelains (1 Imari ware 2-4 Kirigome ware 5、6 Hirashimizu ware) with cobalt bl. 2-6 bamboo grass & flying goose

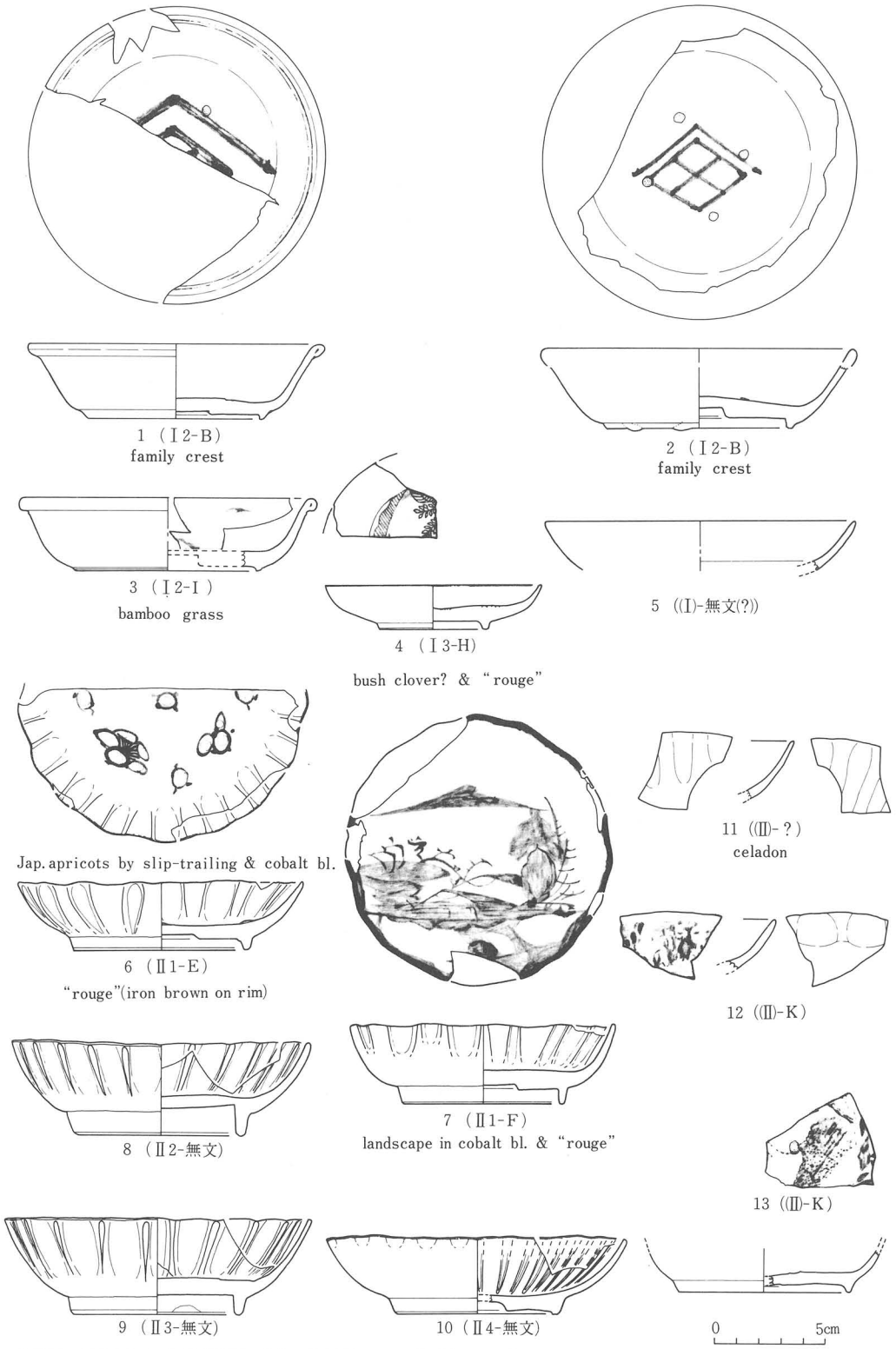


図27　ＮＭ２出土の磁器皿(2)　(Ⅰ類:1～5 Ⅱ類:7～13) (Ⅰ類:1～5, Ⅱ類:7～13) Mid. of 19c. (before 1882)

Fig. 27　Dishes from NM2　porcelains (1、2 Hirashimizu ware 3、8、9 Kirigome ware 4、12 Seto ware)
1-4、6、7、12、13 cobalt blue　6-13 formed by jigger-molding

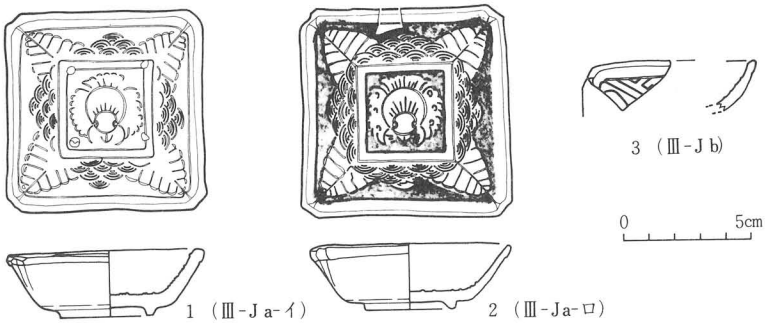


図28 NM2出土の磁器皿 (3)(Ⅲ類:1～3) Mid. of 19c.(before 1882)

Fig. 28 Molded square dishes from NM2 porcelains (Hirashimizu ware)
1、2 "puffy" sparrow" design 2 with cobalt blue

注1.( ) 内の数字は推定個体数、たとえば 30(22)は30個体のうち22個体が推定個体数であることを示す。( ) 内数字が大きいのは残存率の低いものが多いため。以下同様。

注2.鈴木省三 (1977)、pp 235～236

注3.厳密に考えれば、"廃棄"の時間差は必ずしも遺物の製作あるいは使用の時間差を示すとは限らないが、遺物及び出土遺構・層の性格から、廃棄の時間差は製作ー使用ー廃棄の一連の過程の時間差を示すものと思われる。

注4.胎土分析した資料は、NM2出土皿8点(陶器製3、磁器製5)、窯址表採品(平清水) 2点(陶器製1・磁器製1)計10点である。NM2のものは属性表に示してある。窯址表採品は、陶器製ー玉縁口縁丸皿、磁器製ー桜花文手塩皿(角皿)。

注5.大場拓俊氏表採。

注6.野村泰三 (1975)、三好一 (1975)。

③ 土 瓶

A. 分析対象と出土状況 (表20・21)

破片の中から類型化が可能な106点を分析対象とした。残存率が極めて低く、完形や完形に近い個体が少ない。分布は、多くが石敷遺構から出土し、他にピットや層中出土のものが少量ある。ただし後述する山形に武田菱文をもつものなどは、3層や4層からのみ出土する。

B. 土瓶本体の類型化

土瓶本体は、口縁部に蓋の受口である「キ」があるもの(Ⅰ類)と、ないもの(Ⅱ類)に大別でき、前者が平蓋を伴ない、後者が山蓋を伴う。さらにⅡ類は、体部が外弯するもの($Ⅱ_1$類)と腰部が屈曲するもの($Ⅱ_2$類)に細別できる。細部はまず注口の形が直線になっている鉄砲口が少なく、曲線になっている溜口が多い。耳は、ほとんど「より山」と呼ばれるものが多い。これは、一定の長さの粘土紐を山形にし両端を指で押し潰したものである。ただし1点のみは、「ぬき山」と呼ばれるものである。これは、型抜きで作り中心に穴を設け、耳の上に刻がある。底部は、高台内が半球体形をなす碁笥底(ごけぞこ)形と呼ばれる。また、底部脇には、ツメと呼ばれるものが3個ある。これは、片手で施釉の際に用いられる。

No.	器形(注1)	残存率	地区・遺構・層	法量(mm) 口径	底径	器高	口厚	底厚	胎土 色調	粒子	成形及び調整	文様タイプ	釉薬 種類	色調	貫入(注2)	目跡	生産地	備考	図	図版
1	I1	L	石敷遺構	(126)	(51)	36	4	5	白色N9.0	密	ロクロ水びき→外面口縁部以下高台内までロクロケズリ	Aa	灰釉	灰白 7.5Y8/2	○	5	(大堀)	畳付部～高台内一部露胎 釉色はやや緑がかる	25－1	18－1
2	〃	M	〃	(136)	(58)	39	3	—	〃	〃	〃	Ac	〃	灰白 10Y 8/1	〃	(5)	(〃)	〃	〃 3	〃 3
3	(I1)	S	2or3層	(128)	—	—	3	—	〃	〃	〃	(A)	〃	〃	〃	—	(〃)	釉色はやや緑がかる。一部胎土分析		〃 16
4	(〃)	〃	石敷遺構	(130)	—	—	4	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	(〃)	釉色はやや緑がかる。		〃 13
5	(〃)	〃	〃	(136)	—	—	3	—	白色N9.5	〃	〃	〃	〃	灰白 2.5GY8/1	〃	—	(〃)			〃 14
6	(〃)	〃	〃	(130)	—	—	3	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	(〃)	釉色はやや緑がかる。		〃 15
7	(〃)	〃	〃	—	—	—	3	—	〃	〃	〃	〃	〃	灰白 10Y 8/1	〃	—	(〃)	〃		〃 17
8	I1	M	石敷遺構、A1-6層	(128)	(54)	35	2	3	灰白色 7.5Y8/1	〃	〃	Ab	〃	黄白 2.0Y9.0/0.5	〃	(5)	(〃)	口縁部外面指痕？畳付部露胎	25－2	〃 2
9	〃	L	石敷遺構	135	64	40	4	5	〃	〃	〃	C	〃	〃	〃	5	(〃)	高台内釉薬い畳付部露胎黒ずむ	〃 7	19－2
10	〃	P	〃	135	63	39	4	3	白色N9.0	〃	〃	無	〃	灰白2.5GY8/1～明緑灰7.5GY7/1	〃	5	(〃)	高台内指痕有り畳付部露胎	〃 9	〃 3
11	〃	L	石敷遺構、C1-3、4層	132	59	38	3	4	黄白色 2.0Y9.0/0.5	〃	〃	〃	〃	灰白7.5YR8/1～明緑灰7.5GY8/1	〃	5	(〃)	釉色は灰オリーブに近い。	〃 8	〃 4
12	〃	M	石敷遺構	—	(46)	30	3	—	灰白色 10Y8/1	〃	〃	Ae	〃	明オリーブ灰色 2.5GY7/1	×	(5)	(〃)	I1類の中では器形がやや異なる（？）	〃 5	18－4
13	(I1)	S	〃	(136)	—	—	3	—	灰白色 2.5Y8/1	〃	〃	?	〃	灰オリーブ色 7.5Y6/2	○	—	(〃)	口縁部一部釉剥落		〃 5
14	(〃)	M	B2－4層	—	55	—	—	3	白色N9.5	〃	〃	B	〃	灰白色 7.5Y 8/2	〃	5	(〃)	畳付部～高台内一部露胎	25－6	19 1
15	(〃)	S	試掘	—	(64)	—	—	(3)	黄白色 2.0Y9.0/0.5	〃	〃	Ad	〃	明緑灰色 7.5GY8/1	〃	(5)	(〃)	畳付部露胎	〃 4	18 6
16	(〃)	〃	石敷遺構	(137)	—	—	3	—	白色N9.0	〃	〃	(A)	〃	明緑灰色 7.5Y8/1	〃	—	(〃)	外面釉が不均質にかかる		〃 9
17	(〃)	〃	〃	—	—	—	3	—	白色N9.5	〃	〃	(〃)	〃	灰白色 7.5Y8/1	〃	—	(〃)	釉はやや緑がかる		〃 12
18	(〃)	〃	〃	—	—	—	(3)	—	白色N9.0	〃	〃	(〃)	〃	〃	〃	—	(〃)			〃 7
19	(〃)	〃	ピット36	—	—	—	4	—	白色N9.5	〃	〃	(〃)	〃	灰白色 7.5Y8/2	〃	—	(〃)	口唇部釉剥落		〃 11
20	(〃)	〃	A1－4層	—	—	—	3	—	白色N9.0	〃	〃	(〃)	〃	〃	〃	—	(〃)			〃 8
21	(〃)	〃	A1－3層	—	—	—	—	—	白色N9.5	〃	〃	(〃)	〃	〃	〃	—	(〃)	釉がくすんでいる。熱を受けるなどの二次的影響		〃 10
22	(〃)	〃	2層	—	—	—	4	—	白色N9.0	〃	〃	—	〃	灰白色 5Y 8/1	〃	—		口縁部外面釉剥落		
23	(〃)	〃	C2-カクラン、C2-3層	—	—	—	5	—	灰白色 7.5Y8/1	〃	〃	—	〃	灰白色 2.5GY8/1	〃	—				
24	(〃)	〃	ピット36、A1-3層 石敷遺構	(144)	—	—	3	—	白色N9.0	〃	〃	—	〃	灰白色 2.5Y 8/1	〃	—		玉縁口縁剥落		
25	(〃)	M	B2-3層、ピット25	(136)	—	—	3	—	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃	—		一部胎土分析		
26	(〃)	S	1層、C1－3層	—	—	—	3	—	灰白色 7.5Y8/1	〃	〃	—	〃	灰白色 2.5YR 8/1	〃	—				
27	(〃)	〃	C1－3層	—	—	—	3	—	〃	〃	〃	—	〃	〃	〃	—				
28	(〃)	〃	A1－3層	—	—	—	3	—	白色N9.0	〃	〃	—	〃	淡黄色 2.5Y 8/3	〃	—		玉縁口縁剥落		
29	(〃)	〃	石敷遺構	—	—	—	3	—	〃	〃	〃	—	〃	灰白色 2.5Y 8/1	〃	—				
30	(〃)	〃	〃	—	—	—	—		白色N9.5	〃	〃	—	〃	〃	〃	—				
31	(I2)	M	ピット36	(120)	—	—	4	—	浅黄橙色 10YR8/3	やや粗	〃	無	〃	明黄褐色 10YR 7/6	×	(無)	大堀	胎土は黒色粒(鉄分)をほとんど含まない	25－10	19－5
32	(〃)	S	〃	—	(45)	—	—	—	浅黄橙色 10YR8/4	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃			〃 6
33	(I2)	S	ピット17掘り方、石敷遺構	—	—	—	4	—	浅黄橙色 10YR8/3	〃	〃	(無)	灰釉	明黄褐色 10YR 7/6	〃	—	大堀	一部胎土分析		
34	I3	〃	石敷遺構	(128)	—	—	2	—	灰白色 10YR8/1	〃	〃	?	〃	灰オリーブ色～灰白色7.5Y6/2～10YR8/1	〃	—	〃	高台脇～高台内露胎、釉一部孔雀 平失遺	25－11	19－7
35	II1	P	〃	103	48	19	4	5	にぶい黄橙色 7.5YR7/4	粗	〃	無	鉄釉	黒褐色～暗オリーブ褐色10YR2/2～2.5Y 3/3	○	無	〃	外面口縁部下以下底部まで露胎、口縁部スス状付着物	〃 12	20－1
36	〃	S	〃	(109)	—	—	4	—	にぶい橙色 7.5YR6/4	〃	〃	〃	〃	黒褐色～暗オリーブ褐色 2.5Y 3/1～2.5Y3/3	一部○	—	〃	〃 〃		
37	〃	M	〃	(108)	—	19	4	(4)	黄灰色 2.5Y6/1	〃	〃	〃	〃	暗オリーブ褐色 2.5Y 3/3	○	(3)	〃	口唇部スス状付着物		
38	(II1)	S	〃	—	—	—	—	—	にぶい褐色 7.5YR6/3	〃	〃	(〃)	〃	黒褐色～暗赤褐色 2.5Y 3/1～2.5YR3/3	×	—	〃	外面口縁部以下露胎		
39	(〃)	〃	〃	—	—	—	5	—	にぶい橙色 7.5YR6/4	〃	〃	(〃)	〃	〃	一部○	—	〃	口唇部スス状付着物		
40	(〃)	〃	〃	—	—	—	5	—	にぶい黄橙色 10YR7/3	〃	〃	(〃)	〃	黒褐色 10YR 2/3	〃	—	〃	〃		
41	II2	M	A1－4層	(100)	40	18	2	3	浅黄橙色 10YR8/4	やや粗	〃	無	〃	暗褐色～褐色 2.5YR3/3～5YR4/8	×	3	〃	底部オレンジ色に発色、外面口縁部下以下底部まで露胎	25－13	20－2
42	〃	S	C1-3層、C1-2or3層	—	—	—	2	—	淡黄色 2.5YR8/3	密	〃	〃	〃	黄褐色 2.5Y 5/4	○	—	〃	外面口縁部下以下露胎、釉が既炭化なる(カキトリ?)		
43	II3	S	A1-3層、C1-3層	(93)	—	18	2	2	にぶい黄橙色 10YR7/2	粗	〃	(無)	〃	暗オリーブ灰色 2.5Y3/3	〃	(4)	〃	〃	25－14	20－3
44	(II3)	〃	A1－3層	—	—	—	2	—	明褐灰色 7.5YR7/1	〃	〃	(〃)	〃	黄褐色 10YR 5/8	〃	—	〃	〃		
45	II4	〃	C1－3層	(98)	—	18	4	2	灰オリーブ色 5Y 6/2	密	〃	無	灰釉	暗オリーブ色 5Y 4/3	○	—	〃	外面口縁部以下底部まで露胎	25－15	20－4
46	(II)	〃	ピット36、B1－6層	—	—	—	3	—	褐灰色 10YR6/1	粗	〃	(無)	〃	灰オリーブ色 5YR 4/2	×	—	〃	釉うすがけ		
47	不明	〃	?	—	—	—	—	—	白色N9.0	やや粗		?	〃	—	—	—		手失遺		
48	〃	〃	B2－3層	—	—	—	—	—	灰白色 7.5Y8/1	密		?	〃	灰白色 2.5Y 8/2	×?	—		釉うすい		
49	〃	〃	1層	—	—	—	—	—	黄白色 2.0Y9.0/0.5	〃		?	〃	灰白色 5Y 8/1	○	—		I1類の底部破片か？文様は花文？		
50	〃	〃	C1－3層	—	—	—	—	—	灰白色 7.5YR8/1	〃		—	〃	灰白色 2.5Y 8/1	○	—		I1類の破片か？		
51	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	灰白色 2.5Y8/1	〃		?	〃	〃	○	—		〃		
52	〃	〃	ピット36	—	—	—	—	—	淡黄色 2.5Y8/3	やや粗		—	〃	にぶい黄橙 10Y R 7/3	○	—				
53	〃	〃	3層	—	—	—	—	—	白色N9.5	密		—	〃	灰白色 10YR	○	—		I1類の破片か？		
54	〃	〃	石敷遺構	—	—	—	—	—	灰白色 5Y 8/2	やや粗		?	〃	灰白色 7.5Y 7/2	×	—				
55	〃	〃	A1－3層	—	—	—	—	—	灰色 5Y 5/0	〃		—	〃	暗赤褐色 5YR 3/3	×	—		皿とすれば灯明皿？皿でなければ徳利？		
56	〃	〃	B2－3層	—	—	—	—	—	灰白色 7.5Y 8/1	密		—	〃	灰白色 5Y 8/1	○	—		I1類の破片か？		
57	〃	〃	A1－4層	—	—	—	—	—	白色N9.0	〃		—	〃	〃	×?	—				
58	〃	〃	A1－4層	—	—	—	—	—	灰白色 5Y.8/2	〃		—	〃	灰白色 2.5Y 8/1	○	—		I1類の破片か？		
59	〃	〃	石敷遺構	—	—	—	—	—	灰白色 7.5Y7/1	〃		—	〃	灰白色 5Y 7/1	○	—		内面には釉はつかない？皿でない？		
60	〃	〃	C1－2、D1·2－カクラン	—	—	—	—	—	灰白色 2.5Y7/1	やや粗		—	〃	灰オリーブ色 5Y 6/2	×	—		高台は I～III類と比較すると厚い		
61	〃	〃	3層	—	—	—	—	—	黄白色 2.0Y9.0/0.5	〃		—	〃	黄白色 7.0Y 9.0/0.5	×	—		64と類似。		
62	〃	〃	3層	—	—	—	—	—	〃	密		—	〃	〃	×					

注 1.（　）を付したものは推定を意味する。法量、文様タイプ、目跡、生産地についても同様。

注 2. ○はあるもの　×はないもの。

表16　NM2出土の陶器皿属性表

Table 16 Attributes list of dishes from NM2

（注 1．上段、下段の数字は、図19のそれぞれ①、②の部位を計測したもの）

No.	器形	残存状況	地区・遺構・層	法量(mm) 口径	底径	器高	口厚	(注1) 底厚	胎土 色調	成形及び調整	文様 タイプ	釉薬 種類	釉薬 色調	釉薬 貫入	目跡	生産地	備考	図	図版
1	I_1	M	試掘抗3	(94)	48	23	4	6	白色N 9.5	ロクロ水びき→外面口縁部以下高台内までロクロケズリ	G	石灰釉	明緑灰色 10GY8/1	×	無	伊万里	釉面一部白斑状	26−1	20−5
2	I_2	L	石敷遺構	132	76	31	3	8/5	灰白色 N 8.5	〃	Da	〃	明緑灰色 10GY8/1	○	5	切込	高台内ヒビ割れ、高台内露胎部オレンジ色 高台内蛇ノ目釉ハギ、釉面一部白斑状	〃 2	〃 6
3	〃	M	〃	—	75	—	—	6/5	灰白色 N 8.5	〃	〃	〃	明オリーブ灰色 2.5GY7/1	×	無	〃	見込み一部白斑状 高台内蛇ノ目釉ハギ→オレンジ色化		21−1
4	〃	L	〃	136	79	31	3	8/5	〃	〃	〃	〃	明オリーブ灰色 5GY7/1	〃	5	〃	高台内蛇ノ目釉ハギ→オレンジ色化 釉面白斑状、半失透調、ゆがみ大	26−3	20−7
5	〃	M	〃	(131)	(80)	32	4	7/3	〃	〃	〃	〃	明緑灰色 5G 7/1	〃	〃	〃	高台内蛇ノ目釉ハギ→オレンジ色化	〃 4	〃 8
6	〃	〃	〃	—	74	33	3	6/5	〃	〃	〃	〃	明オリーブ灰 2.5GY7/1	○	無	〃	釉一部白斑状、高台内ヒビ割れ 高台内蛇ノ目釉ハギ→オレンジ色化		21−2
7	〃	〃	〃	(140)	(80)	35	2	8/5	〃	〃	〃	〃	〃	×	(5)	〃	釉面白斑状、半失透調、高台内蛇ノ目釉ハギ→オレンジ色化		20−9
8	〃	S	〃	—	(80)	—	—	8/—	〃	〃	〃	〃	灰白色〜白色 10Y 8/1	〃	(〃)	〃	釉薄い、失透調、高台内蛇ノ目釉ハギ→オレンジ色化		
9	(I2)	〃	石敷遺構、A1-3層	—	—	—	3	—	〃	〃	〃	〃	明オリーブ灰色 2.5GY3/1	一部○	—	〃	釉面白斑状		
10	(〃)	〃	石敷遺構	—	—	—	3	—	灰白色 N 8.5	〃	〃	〃	〃	×	—	〃	〃		
11	(〃)	〃	石敷遺構、A1-4層	—	—	—	2	—	灰白色 2.5Y 8/1	〃	〃	〃	灰白色 2.5GY6/1	〃	—	〃	釉薄い、失透調		
12	(〃)	〃	〃	(142)	—	—	4	—	青白色 3.0PB9.0/1	〃	(〃)	〃	明緑灰色 10GY 7/1	〃	—	(〃)	釉薄い、呉須色調やや切込の一群と異なる。		
13	(〃)	〃	〃	—	—	—	—	—	〃	〃	(〃)	〃	明オリーブ灰色 2.5GY7/1	○	—	切込	釉面一部白斑状		
14	(〃)	〃	〃	—	—	—	—	—	〃	〃	(〃)	〃	明緑灰色 10GY 7/1	×	—	〃	釉白濁		
15	(〃)	〃	〃	—	—	—	2	—	灰白色 N 8.5	〃	(〃)	〃	明オリーブ灰 2.5GY7/1	〃	—	〃	釉面一部白斑状		
16	I_2	L	石敷遺構、C-不明	137	81	34	4	9/7	〃	〃	Db	〃	明緑灰色 10GY8/1	〃	無	平清水	高台内蛇ノ目釉ハギ	26−5	21−3
17	〃	M	石敷遺構	136	80	30	3	6/5	灰白色 10Y 8/1	〃	〃	〃	明オリーブ灰色 2.5GY8/1	〃	〃	〃	高台内蛇ノ目釉ハギ、釉面一部白斑状		〃 5
18	〃	L	A2-3、4層	135	77	33	3	6/4	白色N 9.0	〃	〃	〃	明緑灰色 7.5GY8/1	〃	(4)	〃	高台内蛇ノ目釉ハギ	26−6	〃 4
19	(I2)	S	石敷遺構	—	—	—	3.0	—/—	〃	〃	〃	〃	明緑灰色 10G 7/1	〃	—	〃			
20	(〃)	〃	区不明-3層	—	—	—	4	—/—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃			
21	(〃)	〃	石敷遺構	—	—	—	—	—/—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃			
22	I_2	M	A1-3層	(132)	(78)	30	4	6/4	〃	〃	B	〃	明緑灰色 7.5GY8/1	〃	(4)	〃	高台内蛇ノ目釉ハギ、釉面一部白斑状		21−6
23	〃	〃	1層、A1-4層、A2-3層 pit 36	(134)	(80)	34	3	6/5	〃	〃	〃	〃	明緑灰色 10GY 8/1	〃	(〃)	〃	高台内蛇ノ目釉ハギ	27−1	22−1
24	〃	〃	1層	—	86	—	(3)	6/5	灰白色 N 8.5	〃	〃	〃	〃	〃	4	〃	〃 釉面一部白斑状	〃 2	〃 2
25	(I2)	S	D2-カクラン	—	—	—	—	7/6	〃	〃	〃	〃	明緑灰色 10GY7/1	〃	(4)	〃	〃 〃		〃 5
26	(〃)	〃	B1-3層	—	—	—	—	8/—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	(〃)	〃	〃		〃 6
27	(〃)	〃	1層	—	—	—	—	5/—	青白色 2.0PB9.0/1	〃	(B)	〃	明緑灰色 7.5GY8/1	〃	—	〃	〃 釉面一部白斑状		
28	(〃)	〃	A1-3層	—	—	—	—	7/4	〃	〃	B	〃	〃	〃	(4)	〃	〃		
29	(〃)	〃	A1-4層	—	—	—	—	6/5	〃	〃	〃	〃	明緑灰色 10GY7/1	〃	(〃)	〃	〃		22−3
30	(〃)	〃	A1-3層、カクラン	—	—	—	4	—/—	灰白色 N 8.5	〃	?	〃	明緑灰色 7.5GY8/1	〃	—	〃	文様Cをもつ口縁部破片か？		
31	(〃)	〃	2or3層	—	—	—	3	—/—	〃	〃	?	〃	〃	〃	—	〃	〃 釉面一部白斑状		
32	(〃)	〃	A1-4層	—	—	—	3	—/—	〃	〃	?	〃	明緑灰色 10GY 7/1	〃	—	〃	〃 内外面にススが付着物		
33	(I2)	S	B1-2、3層	—	—	—	3	—	灰白色 N 8.5	〃	?	石灰釉	明緑灰色 10G 7/1	×	—	〃	文様Cをもつ口縁部破片か？		
34	(〃)	〃	B1-3層、ピット13	—	—	—	3	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃		
35	(〃)	〃	ピット16	—	—	—	3	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃		
36	(〃)	〃	C2-3層、ピット18	—	—	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃 一部胎土分析		
37	(〃)	〃	区不明-3層、ピット13	—	—	—	3	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃		
38	(〃)	〃	石敷遺構	—	—	—	—	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	〃		
39	(〃)	〃	1層	—	—	—	—	9/(6)	青白色 3.0PB9.0/1	〃	K	〃	明青灰色 5BG7/1	〃	(無)				23−4
40	(〃)	〃	A1-4層	—	—	—	3	—	灰白色 N 8.5	〃	Db	〃	明青灰色 10BG7/1	〃	—	平清水	玉緑口縁にはなっていない		
41	(I)	〃	ピット36、石敷遺構	(134)	(85)	(33)	3	—	灰白色 N 8/1	〃	I	〃	明緑灰色 7.5GY8/1	一部○	—	切込	一部胎土分析	27−3	22−6
42	(〃)	〃	ピット36	—	—	—	3	—	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—	〃	No41と類似するが、口縁部内面に同心円文		
43	(〃)	〃	区不明-3層	—	—	—	3	—	〃	〃	?	〃	〃	×	—		I3類破片か、釉面一部白斑状		
44	I_3	〃	試掘-カクラン、石敷遺構	—	—	19	3	5	白色N 9.0	〃	H口縁	〃	明青灰色 5BG7/1	〃	無	(瀬戸)	文様は印刻鉄須、登付部露胎	27−4	22−7
45	(I)	〃	石敷遺構	(144)	—	—	3	—	灰白色 N 8/0	〃	(無)	〃	明オリーブ灰色 2.5GY7/1	〃	—	切込	見込蛇ノ目釉ハギ？	〃 5	〃 8
46	(〃)	〃	〃	—	—	—	3	—	青白色 3.0PB9.0/1	〃	(〃)	〃	明青灰色 5BG7/1	〃	—	〃			
47	(〃)	〃	〃	—	—	—	—	—	灰色 10Y 6/1	—	—	〃	灰色 7.5Y 8/1	〃	—	〃	No45に類似、		
48	II_1	M	〃	—	(79)	35	4	7/5	白色 N 9.0	ロクロ水びき→型打ち、高台・高台内ロクロケズリ	F口縁	〃	明緑灰色 10GY8/1	〃	(無)	(平清水)	高台内蛇ノ目釉ハギ		23−2
49	〃	L	〃	120	71	35	4	9/6	灰白色 N 8.5	〃	〃 〃	〃	〃	〃	(無)	(〃)	高台内蛇ノ目釉ハギ、釉面白斑状半失透調	27−7	〃 1
50	〃	M	〃	(129)	(79)	31	4	6/4	白色 N 9.0	〃	E 〃	〃	〃	〃	4	(〃)	高台内蛇ノ目釉 ハギ	〃 6	22−9
51	II_2	S	〃	—	(78)	43	3	7	灰白色 N 8.5	〃	無	〃	明緑灰色 10GY7/1	〃	無	切込	見込蛇ノ目釉ハギ、登付部露胎		23−7
52	〃	〃	〃	—	—	—	—	9	〃	〃	〃	〃	明緑灰色 7.5GY7/1	〃	〃	〃	見込蛇ノ目釉ハギ		
53	〃	L	〃	139	74	43	3	8	〃	〃	〃	〃	明緑灰色 10G 7/1	〃	〃	〃	見込蛇ノ目釉ハギ、釉面一部白斑状	27−9	24−1
54	(〃)	S	〃	—	—	—	3	—	灰白色 10Y 7/1	〃	(無)	〃	明緑灰色 7.5GY7/1	〃	—	〃			
55	(〃)	〃	〃	—	—	—	—	—	〃	〃	(〃)	〃	明緑灰色 7.5GY7/1	〃	—	〃			
56	(〃)	〃	不明	—	—	—	—	—	青白色 3.0PB9.0/1	〃	(〃)	〃	明緑灰色 10GY8/1	〃	—	〃			
57	II_3	L	A1-2、3層、A2-3層、ピット13石敷遺構、不明	134	77	42	3	5	灰白色 N 8/0	〃	無	〃	緑灰色 7.5GY6/1	〃	無	〃	見込蛇ノ目釉ハギ	27−8	23−8
58	(〃)	S	C1-4層	—	—	—	3	—	灰白色 10Y 7/1	〃	(〃)	〃	〃	〃	〃	〃			
59	II_4	M	石敷遺構、不明	(136)	(73)	36	4	8/3	白色 N 9.0	〃	無口縁	〃	灰白色 2.5GY8/1	○	〃		高台内蛇ノ目釉ハギ	27−10	24−2
60	(II)	S	石敷遺構	—	—	—	3	—	〃	〃	K	〃	明青灰色 10BG7/1	×	—	(瀬戸)		〃 12	23−5
61	(〃)	〃	C1・2、D1・2カクラン	—	(98)	—	—	6/5	〃	〃	K	〃	灰白色 10Y 8/1	〃	(5)	(切込)	高台内蛇ノ目釉ハギ、オレンジ色に発色	〃 13	6
62	(〃)	〃	石敷遺構	—	—	—	3	—	青白色 3.0PB9.0/1	〃	—	〃	明灰青緑色 4.0GY7.0/2.5	〃	—		青磁破片	〃 11	3
63	(〃)	〃	〃	—	—	—	—	—	〃	〃	—	〃	明青灰色 5BG7/1	〃	—				
64	(〃)	〃	区不明-カクラン	—	—	—	3	—	灰白色 7.5Y 8/1		−口縁	〃	灰白色 7.5Y 8/1	○	—				
65	(II)	S	石敷遺構	—	—	—	—	—	灰白色 7.5Y 8/1		−口縁	〃	灰白色 7.5Y 8/1	○	—		胎土分析		
66	(〃)	〃	〃	—	—	—	3	—	白色N 9.0	ロクロ水挽→型打ち 高台・高台内ロクロケズリ	−口縁	〃	灰白色 2.5GY 8/1	〃	—		釉面一部白斑状、半失透調		

表17　NM2出土の磁器皿属性表(1)

Table 17 Attributes list of porcelain dishes from NM2

No.	器形	残存状況	地区・遺構・層	法量(mm) 口径	底径	器高	口厚	底厚	胎土 色調	成形及び調整	文様 タイプ	釉薬 種類	色調	貫入	目跡	生産地	備考	図	図版
67	(Ⅱ)	S	区不明-2or3層	—	—	—	—	—	青白色 3.0PB 9.0/1	ロクロ水びき→型打ち 高台、高台内ロクロケズリ	—	石灰釉	青白色 3.0PB9.0/1	○	—				
68	(〃)	〃	ピット36	—	—	—	—	—	白色N 9.0	〃	? 口紅	〃	明緑灰色 7.5GY8/1	〃	—		内面呉須染付		
69	(〃)	〃	石敷遺構	—	—	—	—	—	〃	〃	— 口紅	〃	明緑灰色 10GY8/1	〃	—		釉面一部白斑状		
70	(〃)	〃	C1－3層	—	—	—	—	—	青白色 3.0PB9.0/1		— 口紅	〃	明青灰色 5BG7/1	〃	—				
71	(〃)	〃	石敷遺構	—	—	—	—	—	白色N 9.0		— 口紅	〃	灰白色 5GY8/1	—	—				
72	(〃)	〃	〃	—	—	—	—	—	灰白色 N 8.5	ロクロ水びき→型打ち 高台、高台内ロクロケズリ	? 口紅	〃	明青灰色 5BG7/1	×	—		内面呉須染付、No.68と同様		
73	(〃)	〃	〃	—	—	—	—	—	青白色 3.0PB9.0/1	〃	—	〃	明緑灰色 7.5GY8/1	〃	—				
74	(〃)	〃	〃	—	—	—	—	—	白色N 9.0	〃	—	〃	明緑灰色 2.5GY8/1	〃	—				
75	Ⅲ	P	〃	77	36	26	5	5	〃	型おこし	Ja-イ	〃	明緑灰色 7.5GY8/1	〃	4	平清水	見込一部ヒビ割れあり	28－1	24－3
76	〃	〃	C1-3層	78	37	24	4	5	〃	〃	〃	〃	灰白色 10Y8/1	〃	〃	〃	釉面白濁化、半失透調		
77	〃	〃	C1-4層	77	37	23	4	5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃		24－4
78	〃	〃	C1-3層	78	36	24	4	5	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	やや歪む		〃 5
79	〃	S	D1、2-カクラン	—	(36)	24	5	6	青白色 3.0PB9.0/1	〃	〃	〃	明緑灰色 10GY7/1	〃	(4)	〃			〃 10
80	〃	〃	C1-3層、不明	—	—	—	4	—	灰白色 N 8.5	〃	Ja-イ	〃	灰白色 10Y8/1	〃	—	〃			〃 7
81	〃	〃	石敷遺構	—	—	—	4	—	〃	〃	(〃)	〃	明オリーブ灰色 2.5GY7/1	〃	—	〃			〃 9
82	〃	〃	石敷遺構、A1-3層	—	—	—	4	—	〃	〃	(〃)	〃	〃	〃	—	〃	No.81と同一個体？		〃 8
83	〃	〃	A1-4層	—	—	—	—	—	〃	〃	(〃)	〃	〃	〃	—	〃			〃 12
84	〃	L	C1-4層	81	35	26	3	4	白色N 9.0	〃	Ja-ロ	〃	白色N 9.0	〃	無	〃	二次的加熱で黒ずむ、釉面白濁化	28－2	〃 6
85	〃	S	C1-3、4層 区不明2or3層	—	—	—	—	—	灰白色 N 8.5	〃	(Ja-ロ)	〃	灰白色 10Y8/1	〃	—	〃	釉面一部白斑状		
86	〃	〃	C1-3、4層	—	—	—	—	—	〃	〃	(〃)	〃	明緑灰色 10G7/1	〃	—	〃			
87	〃	〃	3層	—	—	—	3	—	〃	〃	(〃)	〃	灰白色 7.5Y8/1	〃	—	〃	釉面白濁化		24－11
88	〃	〃	C1-4層、区不明-3層	—	—	—	—	—	〃	〃	(〃)	〃	明緑灰色 10GY8/1	〃	—	〃	釉面一部白斑状		
89	〃	〃	C1-3、4層	—	—	—	—	—	〃	〃	(〃)	〃	灰白色 10Y8/1	〃	—	〃	釉面白濁化、二次的加熱？胎土分析		
90	〃	〃	3層	—	—	—	—	—	〃	〃	(Ja)	〃	—	—	—	—	二次的加熱　白濁		
91	〃	〃	〃	—	—	—	—	—	〃	〃	(Ja-ロ)	〃	—	—	—	—			
92	〃	〃	石敷遺構	—	—	—	3	—	白色N 9.0	〃	Jb	〃	明緑灰 7.5GY8/1	×	—	平清水	幾可文のものはこれのみ	28－3	24－13
93	不明	〃	A1-4層、石敷遺構	—	—	—	6	—	灰白色 N 8/0	ロクロ水びき→型打ち 高台、高台内ロクロケズリ	—	〃	灰白色 10Y7/1	一部○	(4)		蛇ノ目高台破片		
94	〃	〃	石敷遺構	—	—	—	—	—	灰白色 N 8.5	〃	—	〃	緑灰色 10GY6/1	×	—		Ⅳ3類体部破片か？		
95	〃	〃	A1-4層	—	—	—	—	—	白色N 9.0	〃	—	〃	〃	〃	—		?		

表17　NM2出土の磁器皿属性表(2)

Ⅰ類(図29－1～4、図版25－1・2、図版26－1・2)　胴部が外弯し、底部が基筍底を持ち安心型と呼ばれるものである。耳は「より山」で注口は鉄砲口と溜口である。注口の孔の直径は4mmで5・6個ある。すべて絵付され、山水文が多く笹竹文や蝶文もある。ただし、図29－3、図版26－1と腰部が屈曲する図32－5、図版30－4は製作の特徴からⅠ類と推定できる。

Ⅱ$_1$類(図29－5、図30－1～2、図版26－3～4、27－1)　胴部が外弯し、底部内が水平な基筍底で、1点のみある耳は「ぬき山」(図30－1、図版26－4)である。注口は鉄砲口と溜口で、注口の孔の直径が6mmで3個ある。絵付がなく、糠白釉と青釉で施釉される。ただし、(図32－4、図版30－3)のみは、鉄絵によって流し掛風の文様が描かれる。

Ⅱ$_2$類(図30－4～図32－3、図版27－3、30－2)　腰部が屈曲し、底部が基筍底で耳は「より山」である。注口は溜口が多く、注口の孔の径は、3・4・6mmあり、孔が大きい場合には孔の数も少ない。文様には、山水文と山形ニ武田菱文が多く牡丹(ぼたん)文と飛鉋(とびがんな)文もあり、釉薬による装飾効果として、鮫肌(さめはだ)釉と木灰釉もある。

Ⅱ$_3$類(図30－3、32－6～9・11、図版27－3)　Ⅱ類と推定はできるものの口縁部と腰部が不明であるものを示す。肩部に葡萄(ぶどう)文？を描くもの、胴部に筒描(つつが)きで区画線を描くもの、肩部に段を有する青釉がそれぞれ1点ずつ出土する。また、口縁部が不明であるが腰部が屈曲し、胴部に弱い凹凸があり筒描きに鉄絵具で駒絵を描いたり、筒描きのみのものもある。

不明(図32－10、図版31－4)胴部に黒絵具と筒描きで駒絵を描く。

C．蓋の類型化

総数40点の中から類型化が可能な29点を分析対象とした。残存率は、低いが器形の類型化が可能なものが多い。出土状況は、土瓶本体と同様である。本体のⅠ類に平蓋(Ⅰ類)が伴い、Ⅱ類に山蓋(Ⅱ類)が伴う。

Ⅰ類(図33－1～5、図版31－7～32－1)　口縁部の高さ、つまみの大きさに規格性はなく、底部は糸底である。平蓋のみは、すべて直径3㎜の孔が1個ある。巴文が多く笹竹文の文様もある。

Ⅱ類(図33－6～18、図版32－2～33－6)　器形が山形をなし、無文や梅花文・菊花文の劾みを持つつまみが蓋の上につく。口縁部に沈線を有しないⅡ$_1$類が多く、沈線を有するⅡ$_2$類もある。装飾は、青釉と鮫肌釉が多く山形に武田菱文や巴文もある。

D．製作の特徴

a．素地　すべて陶器である。素地の種類と装飾方法との間には一定の結び付きがある。

㋑　極めて細かく鉄分の少ない粘土質で、可塑性の強い灰白色土である。水挽で伸びるため薄く軽い。これは白掛に山水文や牡丹文、笹竹文、青釉をもつものに用いられ、ていねいに製作されている。

㋺　少量鉄分を含み、㋑より純度の落ちる灰白土色で、器厚が厚く重い。白掛のない蝶文や巴文、鮫肌釉、糠白釉をもつものに用いられる。

㋩　少量鉄分を含み、意図的に鉄砂を混入した灰白色土である。駒絵で筒描と鉄絵を併用するものと筒描きのみのもの、白掛に葡萄文？をもつものに用いられる。

b．絵付(筒描)　すべて下絵である。白掛に山水文や笹竹文、牡丹文、葡萄文？、巴文が描かれる場合と素地に蝶文や巴文、駒絵、草花文、梅花文？が描かれる場合とがある。山水文や巴文はクロームと鉄を用いる。クロームは筒描風に描き、酸化炎で暗オリーブ色、環元炎でオリーブ色に発色する。鉄は木灰釉を含ませて濃淡を出し酸化災で暗褐色、環元炎で褐色に発色する。他に呉須を加えたものや、呉須だけのもある。笹竹文の顔料は、呉須のみやクロームである。牡丹文は呉須のみである。山形に武田菱文は、鉄とクロームの調合で黒色に発色すると思われる。

c．釉薬　素地の性分や焼成方法により微妙に発色を異にする。ここで用いられる釉のほとんどは、相馬大堀産の木灰釉や青釉、鮫肌釉、糠白釉である(注1)。

①木灰釉　土灰釉とも呼ぶ。樹木を焼いた灰に長石を調合。大堀では、浪江町小丸産の砥山石に欅(けやき)灰などを調合している。白掛に絵付のⅠ類やⅡ$_2$類と蓋は、直火を受けるために薄掛である。貫入はきわめて細かく入る。酸化炎では灰白色、環元炎では灰色を発色する。白掛を用いないⅠ類蝶文やⅡ類巴文は、酸化炎で灰黄色に発色する。Ⅱ$_2$類山形に武田菱文や飛鉋文などは、幾分厚く釉掛し、環元炎で明録灰色を発色する。これは灰と長石の調合が異なる木灰釉である。

同類の釉は、Ⅱ類の駒絵で酸化炎で淡黄色を発色し、貫入がない。

②糠白釉　藁灰釉とも呼ぶ。珪酸分の多い藁や籾、草木の灰と長石を調合。酸化炎で灰白色、環元炎で緑青色を発色。貫入は木灰釉より大きく入る。

③青釉　クローム青磁や銅青磁とも呼ぶ。糠白釉に銅成分のクロームを調合。酸化炎で灰色、環元炎で灰汁色に発色する。一部に、糠白釉の珪酸分を含まない織部釉(銅釉)がある。この中に数点、青釉に織部釉の流し掛と思われるものがある。貫入は糠白釉と同様に大きく入る。

④鮫肌釉　釉原料名や釉色を示すものでなく、釉の焼縮が素地のそれより極端に大きいため亀裂を生じたものである。ここでは、最初にいわき市勿来産の原石が単味で用いられた。酸化炎で明赤褐色、環元炎で暗赤褐色である。焼成温度が高ければ亀裂が大きく生じる。

E．容積

完形や完形に近い個体15点より求めた。 蓋の位置や柄の高さ、本体の重量、器厚を考慮しなければならない。ここでは、煤や茶渋の付着を持つもので(図29－1)を基準とし、茶渋痕の上下(体部までの器高80%と55%)で押えた。算出方法$V=\frac{1}{3}\pi h(a^2+ab+b^2)$数値は、(図34)に表示した。さらに小形茶碗(湯呑)との数量(何杯)関係も表示した。基準の資料は、多数出土する小形茶碗Ⅰ類のNo11を用いた。実容積は、飯茶碗の七分目程度に当る点に注目し、同様に求めた結果、4勺程度となる。土瓶の実容積÷小形茶碗の実容積は、そのまま人数を限定できない。そこで、同時期の遺跡と比較した(図35)。土瓶の大きさは、その遺跡で使用された湯呑の大きさの問題もあるが、遺跡の性格により限られてくる傾向が強い。土瓶の実容積、湯呑茶碗の数量、さらに人数を求める問題は、消費地における各器種のセットの確立を知る上で重要であり、今後の課題としたい。

F．産地・時期

東北地方の近世窯跡の調査は、数例しかなく、生産地の同定は困難である。従って、研究者の鑑定(注2)や一部の胎土分析資料から求めた。ほとんど相馬大堀産であり、1点のみ不明である。しかし、$Ⅱ_1$類糠白釉は、胎土の肉眼観察より上野目産の可能性もある。相馬大堀産と上野目産は、器種や成形、釉薬に類似する点が多く技術的な交流があるため、とりわけ産地同定が困難である。また、同地域の消費地の調査例がほとんどなく、正確な年代は求められない。一部の製品のみに限り生産開始を知り得た。しかし、白掛を用いたⅠ類や$Ⅱ_2$類の山水文は、慶応年間から明治四十年代まで生産された。呉須を用いたⅠ類や$Ⅱ_2$類の山水文や笹竹文、牡丹文は、幕末から生産され、$Ⅱ_2$類の鮫肌釉は、明治七年から生産された。以上の点から遺物の年代は、江戸時代末期から明治時代初期の間である。ただし、火災時(明治15年)の3、4層出土の山形に武田菱文は、明治時代初期に限定される。　(大場拓俊)

注1．窯業技術は、栃木県陶磁器指導所や福島県窯業試験所、相馬大堀焼協同組合、高橋良一郎氏(大堀焼研究家)の御教示を頂いた。

注2．芹沢長介(東北大学名誉教授)氏や高橋良一郎氏の御教示を頂いた。

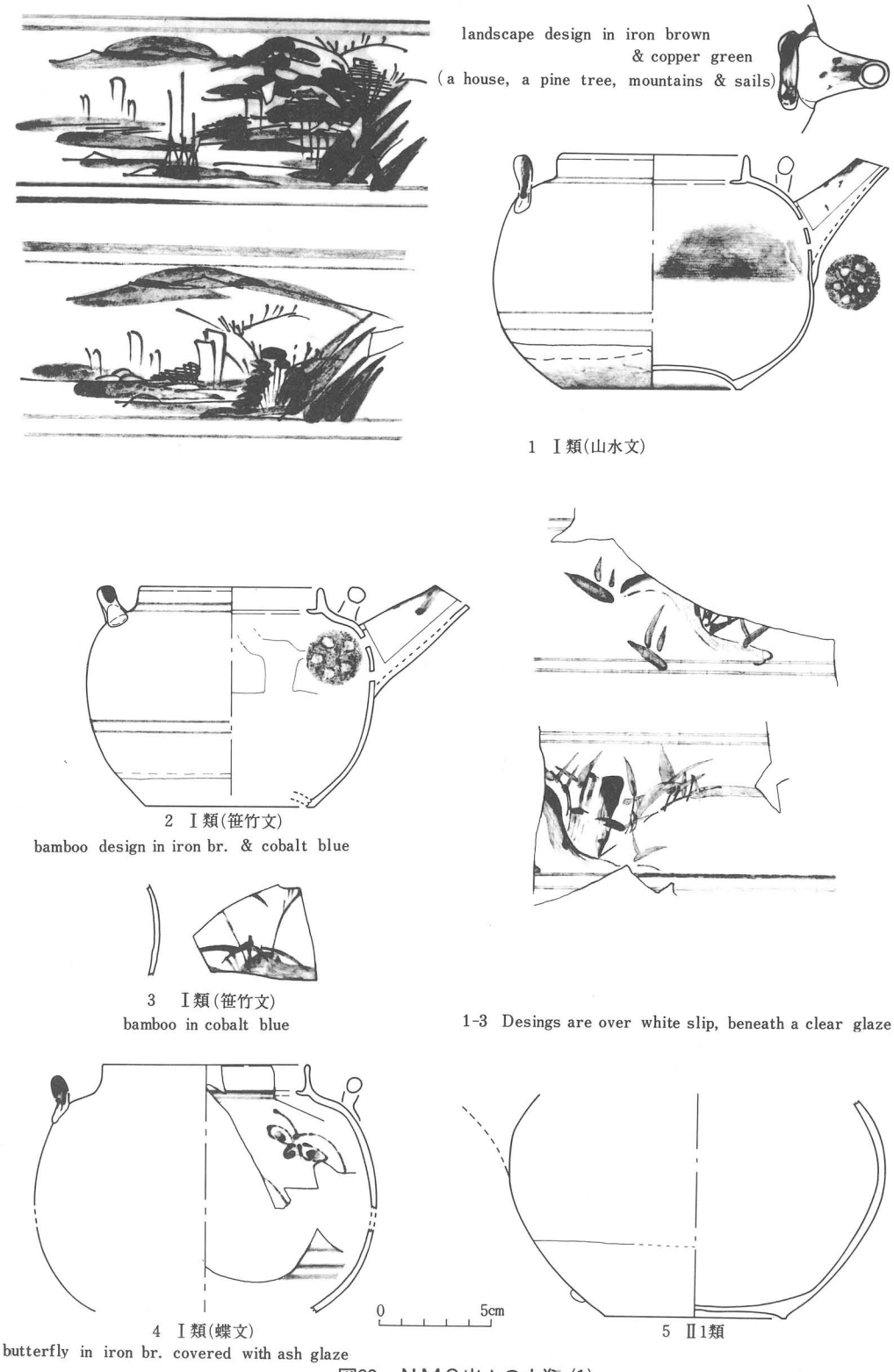
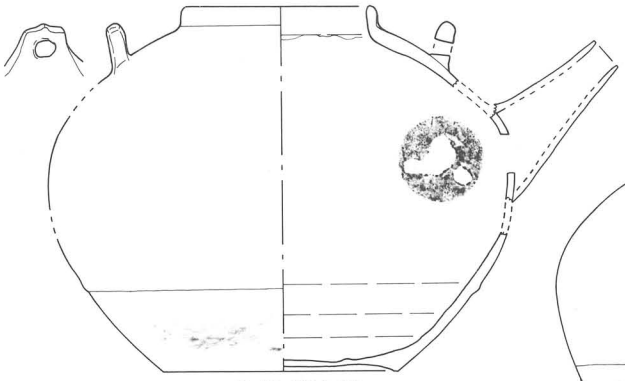
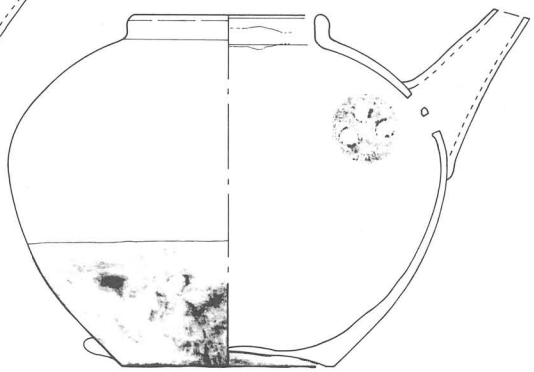


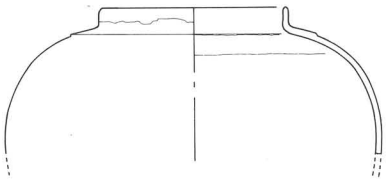
図29 NM2出土の土瓶 (1) Mid. of 19c. (before 1882)

Fig. 29 Teapots from NM2 (1) (Sôma-Ôbori ware)



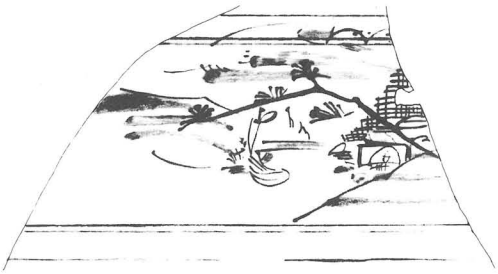
1．Ⅱ1類（糠白釉）
covered with ash glaze



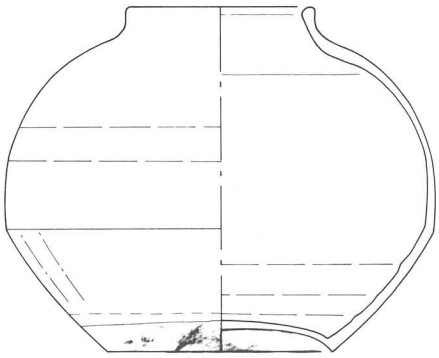


3．Ⅱ類（青釉）
covered with blue glaze

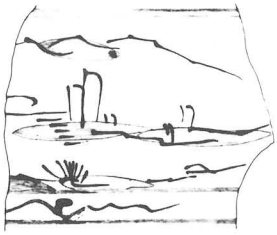
2．Ⅱ1類（青釉）
covered with blue glaze



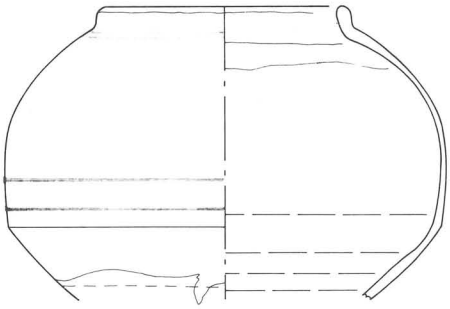
landscape rendered in iron br. & cop. green over withe slip, beneath a clear glaze



4．Ⅱ2類（山水文）



landscape rendered in iron br. over white slip, beneath a clear glaze



5．Ⅱ2類（山水文）

0 5cm

図30　ＮＭ２出土の土瓶(2)　　Mid. of 19c.(before 1882)

Fig. 30　Teapots from NM2 (2)（Sôma-Obori ware）

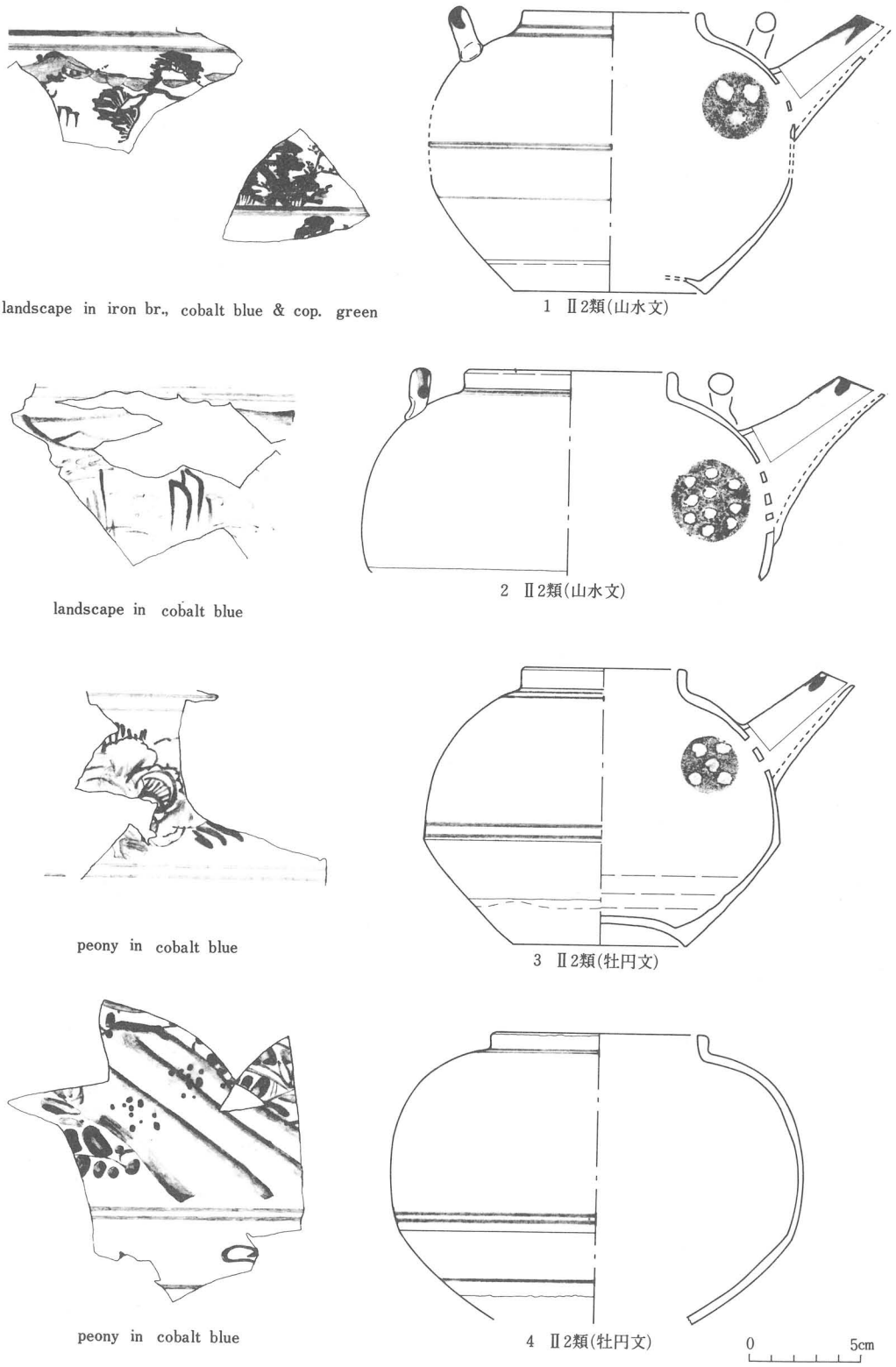


図31 NM2出土の土瓶 (3)

Mid. of 19c. (before 1882)

Fig. 31 Teapots from NM2 (3) (Sôma-Ôbori ware)

1-4 Designs are over white slip, beneath a clear glaze

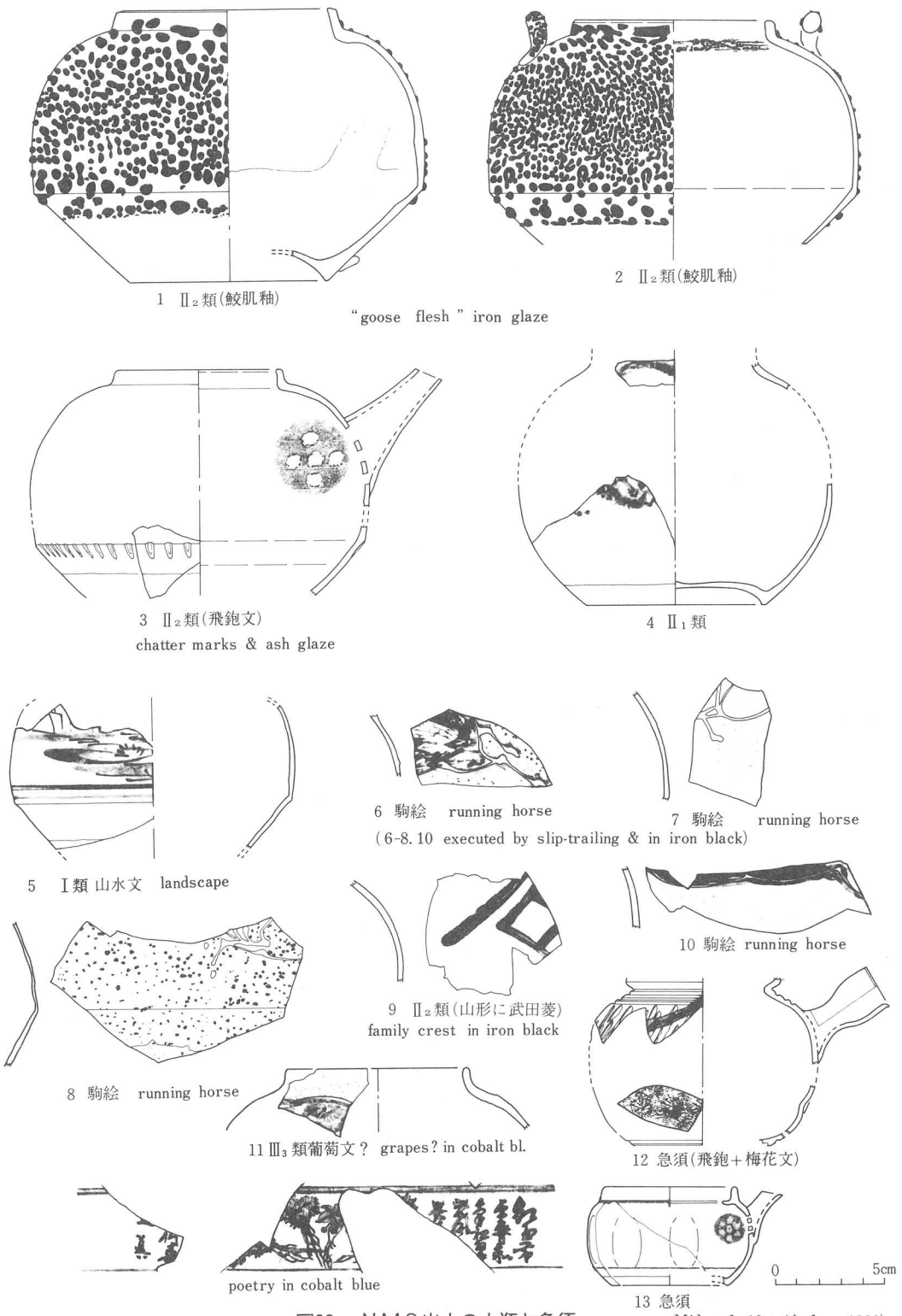


図32 NM2出土の土瓶と急須 Mid. of 19c. (before 1882)

Fig. 32 Teapots and small teapots *(kyusu)* (12、13) from NM2

(1-11 Sôma-Ôbori ware 12 Ninhonmtsu Banko ware 13 Seto ware)

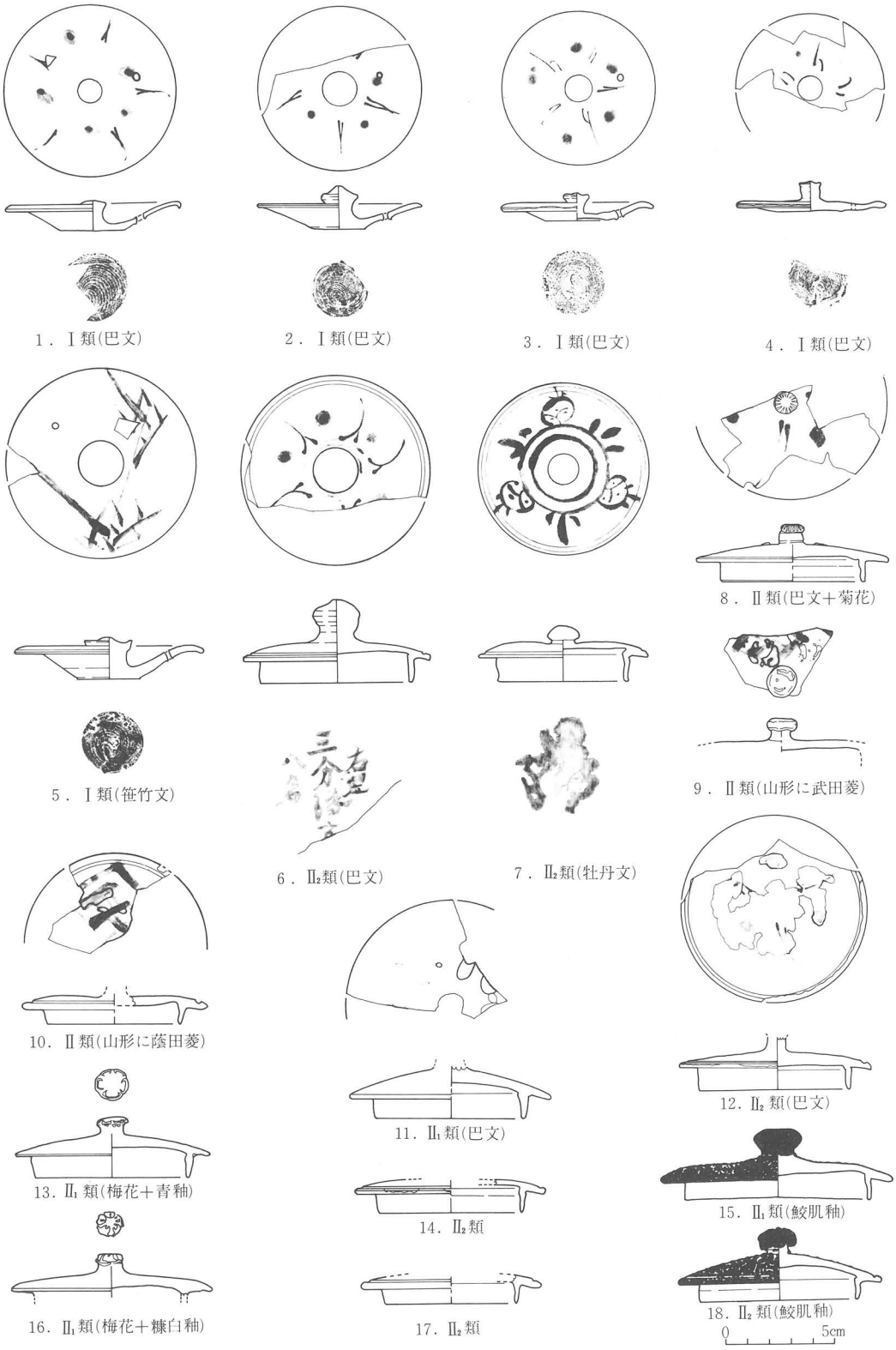


図33　ＮＭ２出土の土瓶の蓋

Fig. 33 Teapots lids from NM2

Mid. of 19c. (before 1882)

1-4、6、8、11、12 teapots with landscape 5、teapots with bamboo design 9、10 teapots with family crest 13、14、16、17 teapots covered with blue glaze 7 teapots with peony design 15、18 teapots covered with "goose flesh" iron glaze

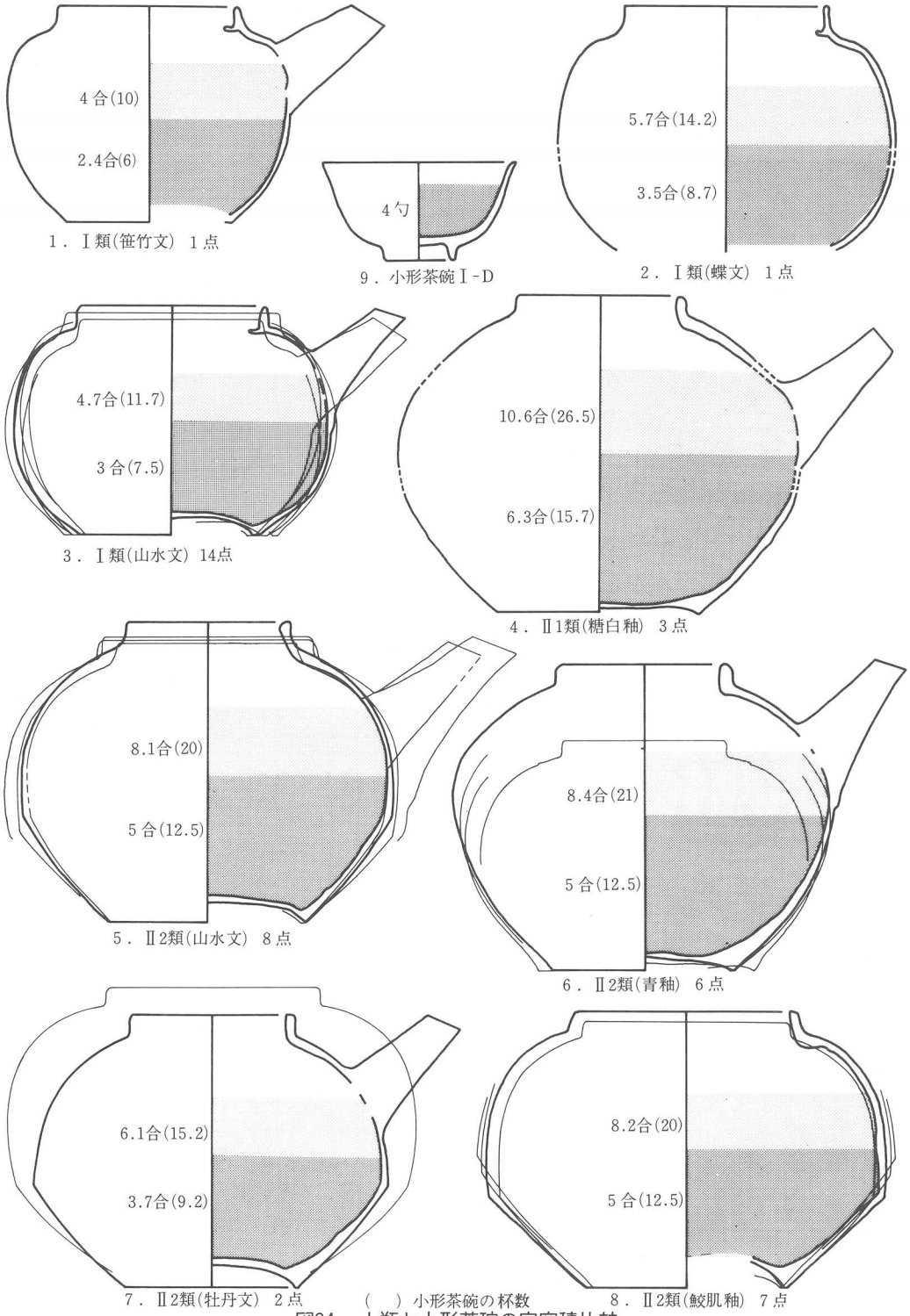


図34　土瓶と小形茶碗の実容積比較
Fig. 34 Teapot capacity vs. "tea bowl" capacity

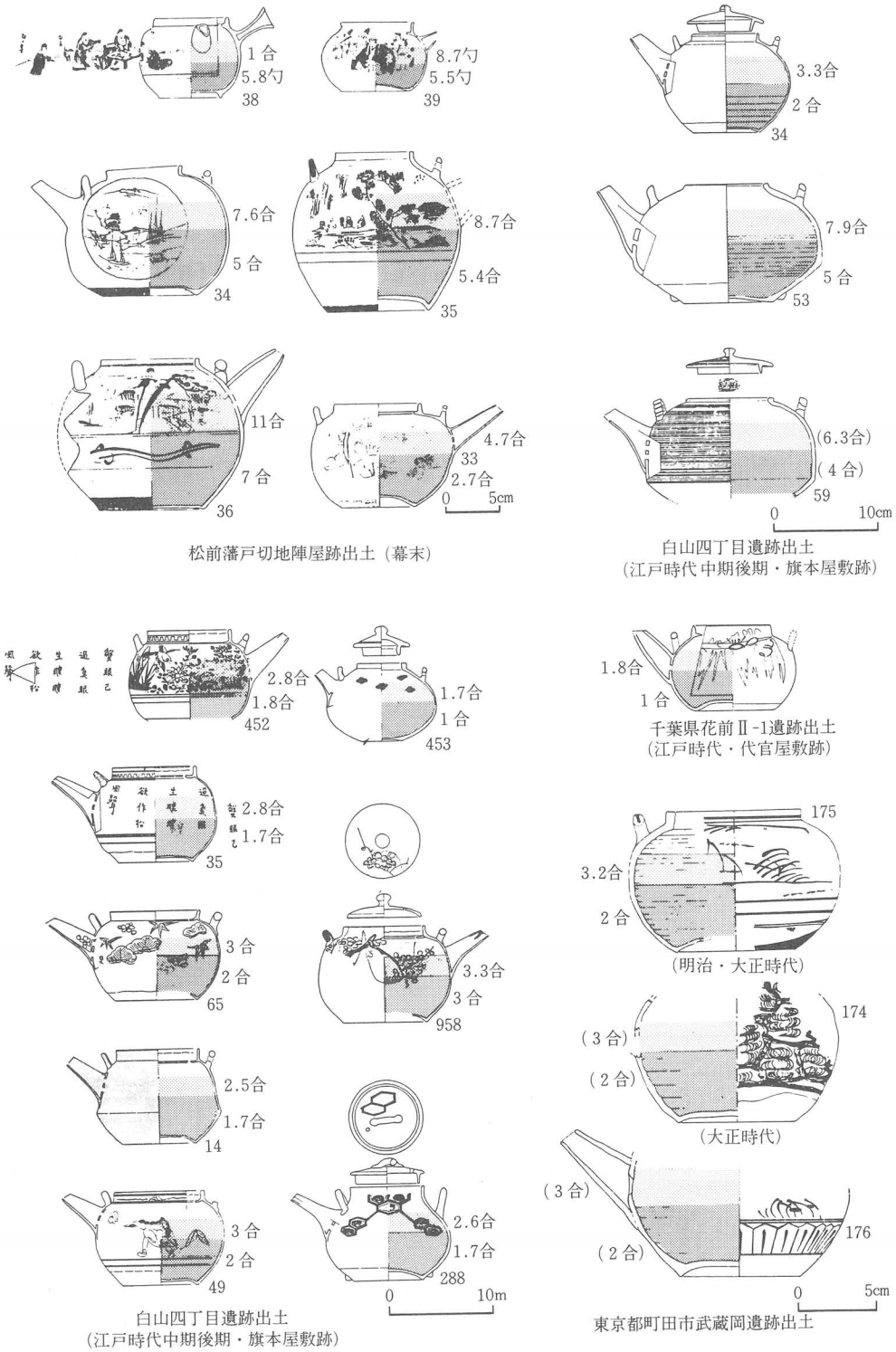


図35　各遺跡出土の土瓶、急須の実容積
Fig.35 Capacity of teapots and small teapots *(kyusu)* from other sites

No.	器形	残存状況	出土区、遺構、層	法量 (mm,g) 口径	底径	器高	内径	器厚	穿孔の孔	容量	胎土 色調	混入	文様	釉薬 種類	色調	貫入	釉厚	焼成	煤の付着	備考	図	図版
1	I_1	L	石敷遺構	81	80	104	77	1	5	3	灰 7.5Y 8/2	×	山水文	木灰釉	灰 2.0GY7.5/4	○	薄い	甘い	○	内面に茶渋付着	29-1	25-1
2	〃	M	〃	—	87	—	—	1	—	(3)	灰 5Y 8/2	〃	〃	〃	灰 4.0G 8.5/2.5	〃	〃	普通	〃			
3	〃	S	〃 A1-4層	—	87	—	—	2	—		灰 7.5Y 8/2	〃	〃	〃	灰 10.5YR 8.5/2	〃	普通	〃	〃	白挂が剥落	30-5	28-1
4	〃	M	石敷遺構	94	—	—	88	2			灰 7.5Y 8/1	〃	〃	〃	灰 2.0Y 9.0/0.5	〃	〃	〃	—			
5	(I_1)	S	〃	—	—	—	—	1	6		灰 7.5Y 8/1	〃	〃	〃	灰 4.0G 8.5/2.5	〃	薄い	〃	〃			
6	〃	〃	〃 A1-5層	—	—	—	—	3			灰 10YR 8/1	〃	〃	〃	灰 2.0Y 9.0/0.5	〃	普通	〃	〃			
7	〃	〃	A1東壁-3層	—	—	—	—	2			灰 7.5Y 8/2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃			
8	〃	〃	石敷遺構 A1-3層,4層	88	—	—	85	1			浅黄橙 7.5Y 8/3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	白挂が剥落		
9	I_1	〃	C1-3層、4層	74	—	—	72	1			灰黄 7.5Y 4/2	〃	〃	〃	〃	〃	薄い	〃	〃	〃		
10	(I_1)	〃	A1-5層	—	—	—	—	2			灰 7.5Y 6/1	〃	〃	〃	灰 7.5Y 8/2	〃	普通	〃	〃			
11	〃	〃	石敷遺構 3層上,4層	—	—	—	—	1			明黄灰 7.5YR 7/1	〃	〃	〃	灰 2.0Y 9.0/0.5	〃	〃	甘い	〃	白挂が剥落		
12	〃	〃	〃 A1-5層,3層	—	—	—	—	2			灰 7.5Y 8/2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	普通	〃	〃 染付も		
13	〃	〃	石敷遺構	—	—	—	—	2			灰 7.5Y 8/1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	内面に茶渋付着		
14	〃	〃	〃 A1-3層,4層中	—	—	—	—	2			灰 10Y 8/1	〃	〃	〃	明緑灰 7.5Y 8/1	〃	〃	〃	〃	白掛を薄染付も		
15	〃	〃	石敷遺構	—	—	—	—	2			浅黄橙 10YR 8/3	〃	〃	〃	灰 4.0GY 9.0/3	〃	〃	〃	〃			
16	I_1	〃	〃	83	—	—	79	3			灰 7.5Y 8/2	〃	〃	〃	灰 2.0Y 9.0/0.5	〃	〃	〃	〃			
17	(I_1)	〃	A1-3層 A1-4層	—	—	—	—	2			浅黄橙 7.5Y 8/3	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃			
18	I_1	〃	C1-3層	76	—	—	71	1			灰 7.5Y 7/1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—			
19	(I_1)	〃	A1-4層中	—	—	—	—	2			浅黄橙 7.5Y 8/3	〃	〃	〃	灰 7.5YR 8/1	〃	薄い	甘い	○			
20	〃	〃	石敷遺構	—	—	—	—	2			灰 7.5Y 8/2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	普通	—			
21	〃	〃	〃	—	—	—	—	1			灰 10YR 7/1	〃	〃	〃	〃	〃	普通	〃	○			
22	〃	〃	〃	—	—	—	—	1			灰 10YR 8/2	〃	〃	〃	灰 5YR 8/2	〃	薄い	〃	〃			
23	〃	〃	〃	—	—	—	—	2			明褐灰 7.5YR 7/2	〃	〃	〃	明緑灰 10GY 8/1	〃	〃	〃	〃			
24	I	M	〃	82	76	88	80	2	5	3	浅黄 5Y 8/3	〃	笹竹文	〃	灰 2.0Y 9.0/0.5	〃	〃	甘い	〃	染付も	29-2	25-2
25	〃	S	〃	77	—	—	72	1			灰 7.5Y 8/2	〃	〃	〃	灰 N 0.5	×	普通	普通	—	染付	29-3	26-1
26	〃	〃	〃	97	—	—	86	2			灰 2.5Y 8/1	〃	蝶 文	〃	明オリーブ灰 5GY 7/1	○	〃	〃	○		29-4	26-2
27	II_1	〃	〃	70	91	(142)	66	2			灰白 10YR 8/1	〃	×	鉄白釉	灰 N 8/0	〃	厚い	〃	〃	耳が鉄山型 大機or工野H	30-1	26-4
28	(II_1)	〃	〃	—	—	—	—	2			浅黄橙 10YR 8/3	〃	〃	〃	明緑灰 10GY 7/1	〃	普通	〃	—			
29	〃	〃	C1-2,D1-2 カクラン	—	—	—	—	3			明緑灰 10GY 8/1	〃	〃	〃	明緑灰色 10GY 7/1	〃	〃	〃	○			
30	〃	〃	石敷遺構orピット36	—	—	—	—	2			灰 5Y 8/2	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃			
31	〃	〃	A1-東壁	—	—	—	—	3			灰 2.5Y 7/1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	被火熱		
32	II_2	M	石敷遺構	74	82	138	68	2			灰 10Y 8/2	×	〃	青釉	青灰色 9.0GY5.0/10	○	〃	甘い	〃		30-2	27-1
33	(II_2)	S	C1-3層、4層	—	97	—	—	2			灰 5Y 8/1	〃	〃	〃	暗オリーブ灰色 4.0G 5.0/4.5	〃	〃	高い	〃	被火熱		
34	〃	〃	石敷遺構	76	—	—	74	2			灰 5Y 5/1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—		30-3	27-2
35	〃	〃	石敷遺構orピット36,3層4層,ピット13	—	—	—	—	3			灰 7.5YR 8/2	〃	〃	〃	オリーブ灰色 2.0Y 6.0/1	〃	〃	普通	—			
36	〃	〃	C1-4層	—	—	—	—	2			灰 N 6/0	〃	〃	〃	オリーブ灰色 4.0G5.5/6	〃	—	—	—			
37	〃	〃	石敷遺構	—	—	—	—	3			灰白 7.5YR 8/2	〃	〃	〃	オリーブ灰色 5.0BG4.5/8.5	〃	普通	普通	—			
38	〃	〃	〃	—	—	—	—	2			浅黄橙 10YR 8/3	〃	〃	〃	オリーブ灰色 4.0G5.5/6	×	〃	甘い	—			
39	〃	〃	〃	—	—	—	—	1			灰白 5YR 8/2	〃	〃	〃	オリーブ灰色 4.0G6.5/4.5	〃	〃	〃	—			
40	〃	〃	4層中	—	—	—	—	2			灰白 7.5YR 8/2	〃	〃	〃	灰オリーブ色 2.5G6.5/4.0	〃	〃	〃	—			
41	〃	〃	石敷遺構A1-3層,5層	—	—	—	—	3			灰 10YR 8/2	〃	〃	〃	オリーブ灰色 4.0G6.5/6	〃	〃	〃	—	墨書?		
42	〃	〃	C区	—	—	—	—	3			灰 10YR 8/1	〃	〃	〃	オリーブ灰色 4.0G6.5/4.5	○	〃	普通	—			
43	〃	〃	C2-カクラン	—	—	—	—	2			灰 10YR 8/1	〃	〃	〃	暗オリーブ灰色 4.0G 5.0/4.5	〃	〃	〃	—			
44	〃	〃	C1-3層	—	—	—	—	2			灰 5Y 8/1	〃	〃	〃	暗緑灰色 9.0G 4.5/4.5	〃	〃	高い	—			
45	〃	〃	石敷遺構orピット36	—	—	—	—	2			灰 10YR 8/1	〃	〃	〃	緑灰色 4.0G 5.5/0.5	〃	〃	普通	—			
46	〃	〃	〃 〃	—	—	—	—	3			浅橙 5YR 8/3	〃	〃	〃	暗オリーブ灰色 4.0G 5.0/4.5	〃	〃	〃				
47	〃	〃	カクラン	—	—	—	—	2			灰 2.5Y 8/1	〃	〃	〃	オリーブ灰色 4.0G 5.5/6	〃	〃	〃				
48	〃	〃	石敷遺構	—	—	—	—	4			灰 10YR 8/1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	—			
49	〃	〃	石敷遺構orピット36	—	—	—	—	3			灰 7.5YR8/2	〃	〃	〃	暗オリーブ灰 4.0G 5.0/4.5	×	〃	甘い	—			
50	〃	〃	〃	—	—	—	—	2			浅橙 5YR 8/3	〃	〃	〃	オリーブ灰色 4.0G 6.5/6	○	〃	普通	—			
51	〃	〃	D2-カクラン	—	—	—	—	3			灰 10YR 8/1	〃	〃	〃	青灰色 4.0G 5.0/4.5	〃	〃	高い	—			
52	〃	M	石敷遺構	—	80	—	—	3			灰 5Y 8/2	〃	〃	〃	暗オリーブ色 4.0GY 3.5/5	〃	〃	〃	○	青釉のハネモノか?	29-5	26-3
53	II_2	〃	〃	—	78	—	—	3			浅 5Y 8/3	黄	〃	(木灰釉)	灰 4.0GY 9.0/3	〃	〃	普通	〃	転土に白色粒子含む、鉄錆、変焼不明	32-4	30-3
54	III_1	〃	〃	74	89	126	63	2			灰 7.5Y 8/2	〃	山水文	木灰釉	灰 4.0GY9.0/3	〃	普通	〃	〃		30-4	27-3
55	III_1	S	C1-4層	—	—	—	—	2			灰 10Y 4/1	〃	〃	〃	灰 4.0G8.5/2.5	〃	〃	〃	—		32-5	30-4
56	III_1	S	石敷遺構	—	—	—	—	2			にぶい黄橙 10YR 7/2	〃	〃	〃	明オリーブ灰 5GY 7/1	〃	〃	〃	—	薄い白掛、張出形で平置を伴うか?		
57	II_3	S	石敷遺構 A1-5層	—	—	—	—	3			灰 7.5Y 8/2	〃	〃	〃	灰 2.0Y 9.0/0.5	〃	薄い	甘い	—	白掛が剥落、張出形で平置を伴うか?		
58	II_2	M	石敷遺構	?	—	—	—	2			灰 7.5Y 8/2	〃	〃	〃	浅黄 5.0Y 9.0/3	〃	普通	〃	○			
59	II_2	M	〃 A2-3層,5層	100	125	88	—	2			灰 7.5Y 7/1	〃	〃	〃	灰 2.0Y9.5/0.5	〃	普通	普通	〃	染付も	31-1	28-2
60	(II)	S	石敷遺構	—	—	—	—	2			にぶい褐 7.5Y 6/3	〃	〃	〃	灰 4.0GY 9.0/3	〃	〃	〃	〃			
61	(II_2)	S	〃	—	—	—	—	2			浅黄橙 10YR	〃	(山水文)	〃	灰 2.0Y 9.0/0.5	〃	〃	〃	—			
62	(II_2)	S	〃	—	—	—	—	4			灰 7.5Y 8/2	〃	山水文	〃	〃	〃	〃	甘い	—	茶渋が付着?		
63	II_2	S	石敷遺構	96	—	—	85	2			灰 7.5Y 8/1	〃	山水文	木灰釉	灰 2.0Y 9.0/0.5	×	薄い	甘い	—	染付	31-2	28-3
64	(II_2)	S	石敷遺構orピット36	—	—	—	—	2			灰 7.5Y 8/2	〃	(山水文)	〃	〃	○	普通	普通	—			
65	II_2	S	石敷遺構	77	76	123	65	2	5	(35)	灰 7.5Y 8/2	〃	牡丹文	〃	〃	〃	薄い	甘い	○	染付	31-3	29-1
66	II_2	S	〃	97	—	—	—	3			灰 7.5Y 8/2	〃	〃	〃	〃	×	〃	〃	—	〃	31-4	29-2

表18　ＮＭ２出土の土瓶の属性表

Table 18　Attributes list of teapots from NM2

No.	器形	残存率	出土区、遺構、層	法量(mm、g) 口径	底径	器高	内径	器厚	注口の孔	容量	胎土 色調	混入	文様	釉薬 種類	色調	貫入	釉厚	焼成	煤の付着	備考	図	図版
67	(II3)	S	石敷遺構	80	—	—	74	2			浅黄橙 7.5YR 8/3	×	葡萄文?	〃	灰 7.5YR 2.0Y9.0/0.5	○	普通	甘い	—	白掛に染付		
68	II2	M	〃	100	90	124	—	3		5	灰 10Y 7/1	〃		鮫肌釉	暗赤褐 8.0YR3.5/5.5	〃	〃	高い	×	内面底部に木灰釉	32-1	30-1
69	(II2)	S	石敷遺構5層	—	90	—	—	3		5	にぶい黄橙 10YR 7/3	〃		〃	〃	〃	薄い	甘い	○?			
70	(〃)	〃	〃	—	84	—	—	2			褐灰 10YR 6/1	〃		〃	暗赤褐 10.0R 3.5/3	〃	普通	普通	○			
71	(〃)	〃	〃	88	—	—	—	3			灰白 5Y 8/1	〃		〃	暗赤褐 8.0YR3.5/5.5	〃	〃	〃	—			
72	(〃)	〃	〃	—	—	—	—	3			灰白 10Y 8/1	〃		〃	暗赤褐 8.0YR3.0/4	〃	〃	高い	—	重ね焼跡		
73	(〃)	〃	〃	—	—	—	—	2			灰白 2.5Y 8/2	〃		〃	暗赤褐 8.0YR3.5/5.5	〃	薄い	甘い	—	小形		
74	(〃)	〃	〃	—	—	—	—	2			灰白 10YR 8/1	〃		〃	〃	〃	〃	普通	—			
75	(〃)	〃	〃	—	—	—	—	2			灰白 10Y 8/1	〃		〃	〃	〃	〃	〃	—			
76	II2	〃	〃	93	—	—	84	2			灰白 5Y 8/2	〃		〃	暗赤褐 8.0YR3.0/4	〃	普通	〃	—		32-2	29-3
77	(II2)	〃	〃	—	—	—	—	2			灰白 10Y 8/1	〃		〃	暗赤褐 8.0YR3.5/5.5	〃	〃	〃	—			
78	(〃)	〃	〃	—	—	—	—	3			灰白 10Y 8/1	〃		〃	〃	〃	〃	〃	—			
79	(II3)	〃	石敷遺構A1-4層	76	—	—	70	2			浅黄橙 7.5YR 8/3	〃		(木灰釉)	にぶい橙 7.5YR 6/4	○	薄い	〃	—	箆描き		
80	—	〃	石敷遺構	—	—	—	—	2			灰白 10Y 8/1	微粒子	駒絵	木灰釉	明褐灰 7.5YR 7/2	〃	〃	〃	—	黒絵貝+箆描(駒絵)		
81	(II3)	〃	〃	—	—	—	—	3			灰白 10Y 8/2	〃	〃	〃	灰白 10Y 7/1	白	〃	〃	—	箆描(〃)	32-7	30-2
82	〃	〃	〃	—	—	—	—	2			灰白 10Y 7/1	鉄砂粒子	〃	〃	オリーブ灰 2.5GY 6/1	×	〃	〃	—	鉄絵+箆描(駒絵)体部凸凹	32-6	30-5
83	〃	〃	石敷遺構3層	—	—	—	—	1			灰黄褐 10YR 6/2	〃	〃	〃	オリーブ灰 5GY 6/1	〃	〃	〃	—	鉄絵+箆描(〃)体部凸凹		
84	〃	〃	〃 A1-4層 B2-4層	—	—	—	—	1			灰黄褐 10YR 6/2	〃	〃	〃	オリーブ灰 7.5Y 6/2	〃	〃	〃	—	箆描(駒絵)、体部凸凹	32-8	31-1
85	〃	〃	石敷遺構	—	—	—	—	1			灰白 2.5Y 8/2	〃	〃	〃	灰オリーブ色 7.5Y 6/2	〃	〃	〃	—	箆描(駒絵)、青磁釉風		
86	(II2)	〃	〃	—	—	—	—	2			灰黄褐 10YR 2/6	微粒子		〃	灰白 2.5Y 8/2	○	〃	〃	—	白掛		
87	—	〃	〃	—	—	—	—	2			灰白 5Y 7/1	〃		〃	灰白 5Y 7/2	〃	—	—	—			
88	—	〃	石敷遺構	—	82	—	—	2			灰黄褐 10YR 6/2	〃		—	—	—	—	—	—			
89	II2	〃	3層	—	—	—	—	3			灰 5Y 7/2	×	山形・武田菱	(木灰釉)	灰オリーブ色 2.5G 6.5/4.0	○	〃	〃	—	青磁風	32-9	31-2
90	—	〃	B1-3層 A1-4層	—	—	—	—	2			灰 5Y 6/1	〃	〃	(〃)	にぶい黄橙 2.0GY7.5/4	〃	〃	〃	—			
91	—	〃	4層	—	—	—	—	2			にぶい黄橙 10YR 7/2	〃	〃	(〃)	灰オリーブ色 2.5G 6.5/4.0	〃	〃	〃	—			
92	II3	〃	石敷遺構	—	—	—	—	3			灰白 7.5GY 8/1	〃		(〃)	灰白 7.5Y 7/2	〃	〃	〃	—			
93	II3	〃	石敷遺構A1-4層	76	—	—	70	2			にぶい黄橙 10YR 7/2	〃		(〃)	灰白 10Y 7/1	〃	〃	〃	—	腰部に飛鉋	32-3	30-2
94	—	S	石敷遺構A1-3層	—	76	—	—	2			灰白 10YR 8/2	〃		木灰釉	オリーブ黄色 7.5Y 6/3	〃	普通	普通	—	重ね焼跡		
95	(II)	S	A1-4層 B1-3層	—	—	—	—	3			にぶい黄橙 10YR 7/2	微粒子		(木灰釉)	灰白 10Y 7/1	〃	〃	〃	—	青磁風、被火熱		
96	(II)	S	石敷遺構	—	—	—	—	2			灰白 10Y 8/2	〃		〃	灰白 7.5Y 7/2	〃	〃	〃	—			
97	—	S	石敷遺構A2-6層 3層	—	—	—	—	3			灰白 2.5GY 8/1	〃		〃	灰黄色 2.5Y 7/2	〃	〃	〃	—			
98	(II3)	S	石敷遺構	—	—	—	—	2			灰白 5YR 8/1	×		〃	オリーブ灰 2.5GY 6/1	〃	〃	〃	—	青磁風		
99	—	S	〃 orピット36	—	—	—	—	3			灰白 5Y 8/1	微粒子		〃	オリーブ灰 2.5GY 6/1	〃	〃	〃	—	〃		
100	—	S	石敷遺構	—	—	—	—	3			灰白 10YR 8/1	×		〃	オリーブ灰 5GY 5/1	〃	〃	〃	—	〃		
101	—	S	A1-2層、A1-3層 B1-4層	—	—	—	—	2			灰白 10Y 8/1	〃		〃	灰白 7.5Y 7/1	白	〃	厚い	〃	—	〃	
102	—	S	A1-4層	—	—	—	—	2			灰白 5YR 8/1	〃		〃	明オリーブ色 5GY 7/1	〃	普通	〃	—	〃		
103	—	S	〃	—	—	—	—	2			灰白 10Y 8/1	〃		〃	明緑灰 10GY 7/1	〃	〃	〃	—	〃		
104	—	S	ピット9	—	—	—	—	2			灰白 10YR 7/1	〃		〃	明緑灰 7.5GY 7/1	〃	厚い	〃	○	〃		
105	II3	S	石敷遺構orピット36	—	—	—	—	2	5		灰白 5Y 8/2	〃	(山水文)	〃	灰白 5Y 7/2	〃	普通	〃	—	腰部に飛鉋		
106	—	S	B2-1層	—	—	—	—	2			灰白 10YR 8/2	〃	不明	〃	にぶい黄橙色 2.0GY7.5/4	〃	○	〃	—	白掛なし		

No.	器形	残存率	出土区、遺構、層	法量(mm,g) 口径	底径	器高	重量	つまみ径	つまみ高さ	胎土色調	文様	白掛	釉薬 種類	色調	貫入	釉厚	焼成	備考	図	図版
1	II2	L	石敷遺構	86	70	38	—	22	20	灰白 5Y 8/2	巴文	○	木灰釉	灰白 10Y 8/2	○	薄	甘い	クローム十鉄 墨書	33-6	32-6
2	I	L	〃	81	30	14	(29)	13	11	浅黄 5Y 8/3	〃	〃	〃	灰白 5Y 8/1	〃	〃	普通	クローム十鉄	33-1	31-7
3	I	P	〃	74	30	14	26	13	10	にぶい黄橙 10YR 7/2	〃	〃	〃	灰白 2.5Y 8/1	〃	〃	〃	〃	33-3	31-10
4	I	M	〃	76	24	19	—	17	15	灰白 7.5Y 8/2	〃	〃	〃	灰白 5Y 8/1	〃	〃	〃	〃	33-2	31-8
5	I	P	C1－3層	76	27	13	25	11	10	灰白 5Y 8/2	〃	〃	〃	灰白 7.5Y 8/2	〃	〃	〃	〃		
6	I	M	石敷遺構	74	20	19	—	16	14	灰白 5Y 8/2	〃	〃	〃	灰白 7.5Y 8/2	〃	〃	〃	〃		
7	I	M	C1－3層	68	24	14	—	10	10	にぶい黄橙 10YR 7/2	〃	〃	〃	灰白 10Y 8/1	〃	〃	〃	〃	33-4	32-2
8	I	S	石敷遺構	73	25	17	—	15	13	灰白 7.5Y 8/2	〃	〃	〃	灰白 10Y 8/1	〃	〃	〃	〃		
9	I	M	C1-3、3、C1-4層	72	32	—	—	—	—	浅黄 5Y 8/3	〃	〃	〃	灰白 2.5Y 8/2	〃	〃	〃	〃		
10	I	S	石敷遺構	(62)	(29)	—	—	—	—	灰白 5Y 7/1	〃	〃	〃	灰白 2.5Y 8/1	〃	〃	〃			
11	II2	L	ピット13 不明	(90)	72	24	(45)	—	—	灰白 5Y 8/2	〃	×	〃	灰白 7.5Y 7/2	〃	〃	〃	染付	33-11	32-4

表19　NM2出土の土瓶の蓋属性表

Table 19　Attributes list of teapot lids from NM2

No.	器形	残存率	出土区、遺構、層	法量 (mm、g) 口径	底径	器高	重量	つまみ径	つまみ高さ	胎土色調	文様	白掛	釉薬 種類	色調	貫入	釉厚	焼成	備考	図	図版
12	Ⅱ1	M	ピット17、A1-3、3層	88	64	26	—	11	9	10Y 8/2	巴文	○	木灰釉	5GY 6/1	○	薄	普通	クローム＋鉄 つまみ菊花文	33-8	32-2
13	Ⅰ	L	石敷遺構	86	28	19	(50)	21	13	7.5YR8/2	笹竹文	〃	〃	2.5Y8/1	〃	〃	甘い	染付	33-5	32-1
14	Ⅱ2	P	〃	78	60	25	45	14	8	7.5Y 8/2	牡丹文	〃	〃	7.5Y8/1	〃	〃	普通	染付 墨書	33-7	32-8
15	Ⅱ2	M	ピット17、A1-4、4層	84	61	—	—	—	—	10Y 8/2	山形二武田菱	×	〃	5GY 7/1	〃	〃	〃		33-10	32-4
16	Ⅱ1	M	C1-3層中、A1-3層	—	—	—	—	14	10	10Y 8/2	〃	〃	〃	5GY 7/1	〃	〃	〃		33-9	32-3
17	Ⅱ1	M	石敷遺構	93	70	—	—	—	—	5Y 7/3	巴文	○	〃	2.5GY7/1	〃	〃	〃	砂鉄混入 染付	33-12	32-6
18	Ⅱ1	L	〃	88	70	27	(55)	14	8	7.5Y 8/2	×	×	青釉	10GY 5/1	無	厚い	〃	つまみ梅花文	33-13	33-1
19	Ⅱ1	L	3層上	92	70	—	(72)	13	9	5GY 7/1	〃	〃	糠白釉	2.5GY6/1	〃	〃	普通	つまみ梅花文	33-16	33-2
20	Ⅱ2	S	石敷遺構	88	66	—	—	—	—	10YR 8/3	〃	〃	青釉	10G 5/1	〃	〃	〃			
21	Ⅱ1	P	〃	106	85	32	104	22	12	7.5YR 6/4	〃	〃	鮫肌釉	7.5YR4/3	〃	〃	〃		33-15	33-3
22	Ⅱ2	P	〃	92	72	32	69	16	11	7.5YR 8/4	〃	〃	〃	5YR 3/3	〃	〃	〃		33-18	33-4
23	Ⅱ2	S	〃	90	66	—	—	—	—	10YR 7/1	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃			33-6
24	Ⅱ1	S	ピット16	86	66	—	—	—	—	10G 7/1	巴文	〃	木灰釉	7.5Y 7/2	○	〃	〃			
25	Ⅱ2	S	A1-4層中、4層上	82	60	—	—	—	—	10Y 8/2	—	〃	〃	5GY 6/1	〃	〃	〃		33-14	
26	Ⅱ2	S	3層	94	72	—	—	—	—	10Y 8/2	—	〃	〃	5GY 6/1	〃	〃	〃		33-17	
27	Ⅱ1	S	石敷遺構orピット36	86	—	—	—	—	—	10YR 7/2	×	〃	青釉	2.5GY 5/1	無	〃	〃			33-5
28	Ⅱ2	S	ピット13	—	—	—	—	—	—	10Y 8/2	—	〃	木灰釉	5GY 6/1	○	〃	〃			
29	Ⅱ1	S	不明	—	—	—	—	—	—	5Y 8/2	—	〃	糠白釉	7.5GY7/1	〃	〃	〃			
30	Ⅱ2	S	石敷遺構	—	—	—	—	—	—	7.5Y 7/1	—	○	木灰釉	10Y 8/1	〃	〃	〃	染付		

表19　土瓶の蓋属性表(4)

出土点＼類型		Ⅰ類 山水文	笹竹文	蝶文	Ⅱ1類 糠白釉	青釉	Ⅱ2類 山水文	牡丹文	山形に武田菱	鮫肌文	駒絵	木灰釉	Ⅱ3類 その他	小計	合計
火災後	A－1	7		1	1				1			6	1	17(16)	
	C－1	2			1	3								7(4)	
	C－2														
	不明					1			2			1		4(2)	
火災前	石敷遺構	13	2		3	8	9	2		11	7	7	4	66(44)	
	石敷のピット36	2				4							1	7(7)	
	不明					1								1(1)	
不明						4								4(4)	
小計		24(17)	2	1	5(2)	21(20)	10(4)	2		11(9)	7(7)	14(13)	7	106(78)	

表20　ＮＭ２土瓶の出土分布表
Table 20　Distribution of teapots at NM2

出土点＼類型		Ⅰ類 巴文	笹竹文	Ⅱ類 糠白釉	青釉	巴文	牡丹文	山形に武田菱	鮫肌文	巴文(鉄砂)	巴文(白掛なし)	木灰釉	その他不明	小計	合計
火災後	A－1							2						2	
	C－1	2												2	
	ピット13										1			1	
	ピット16										1			1	
	不明			1										1	
火災前	石敷遺構	7	1		2	1	1		3	3		3	1	20	
	石敷orピット36				1									1	
不明				1										1	
小計		9	1	2	3	1	1	2	3	3	2	3	1	29	

表21　ＮＭ２出土の土瓶の蓋の出土分布表
Table 21　Distribution of teapot lids at NM2

④ 徳　　利（図36、図版34）

本調査で出土した徳利は、陶器31個体・磁器２個体・炻器６個体の計39個体である。主に３層、４層、ピット13、石敷遺構に集中する傾向が認められる。大半は破片で、器形・法量が推定できるものはわずかであるため、詳細な分類は不可能である。施文の方法から、Ａ類（無文）、Ｂ類（文様or 文字を描く）、Ｃ類（釉を流す）、Ｄ類（鮫肌）、Ｅ類（沈線を施す一炻器のみ）に類型化できよう（図36下表）。なお、Ｆとしたものは細片であるため文様が不明のものである。

Ａ．陶　　器（No１～31）

いずれもロクロ水挽きにより成形されている。きわめて薄手に作られたものが多い点は土瓶に類似する。底径のわかるものについては、60mm前後と80mm前後の２グループに分けられる。

No４（図36－３、図版34－３）は胴部下半から底部まで現存する。底径は65mmを測る。底部から10mm前後のところに２ケ所の指痕が確認できる。胎土は精良で淡黄色を呈する。胴部下端で白掛土（しろがけど）が全面に剝落するが、胴部すそを巡って２本の直線が描かれ、灰白色の灰釉が薄く掛けられている。焼成はややあまい。産地は平清水と推定される。

No７（図36－２、図版34－２）は口縁部から胴部上半まで現存する。口径は28mmである。胴部から頸部へゆるやかに移行し、肩部は明瞭でない。頸部から口縁部にかけてはわずかに外反する。白掛には細かなひび割れが生じ、部分的に剝落しており、ところどころに灰白の胎土が露出する。光沢のある木灰釉が掛けられている。文様の絵柄は不明。産地は平清水と推定される。

No８（図36－4、図版34－４）は胴部上半から底部まで現存し、容積は約360cc（２合）と推定される。精良な灰白色の胎土に白掛を施こし、呉須により菊花文と思われる絵柄が描かれる。胴部はわずかなふくらみを有し、頸部へはゆるやかに移行するものと思われる。産地は平清水と推定される。

No10（図36－１、図版34－１）は胴部上半から口縁部まで現存する。口径は29mmを測る。胴部径が細く、容積は約180c.c.と推定される。肩部から細く短かい頸部へと収まり、口縁部にかけて比較的強く外反する。精良で灰白色の胎土に白掛を施こし、肩部には２本の直線がめぐる。釉はやや黄色がかった灰白で光沢をもつ。産地は平清水と推定される。

No12（図36－５、図版34－５）は胴部下半から底部が現存する。底径77mmを測る。胎土は精良で淡黄色、白掛は施こされず、釉調は暗い灰白色で透明感はない。底部付近に１ケ所、指痕が確認される。文様はない。産地は不明。

No16・17は灰色の胎土で、表面に青味を帯びた糠白釉を流す、文様類型Ｃ類としたものである。器厚は３mm前後と、本調査出土の他の陶器徳利より厚い。No18・19 の破片も胎土・色調・成形などの類似性から、明らかにＣ類に含まれる。いずれも産地は平清水。

No15はB類中ただ1点、胴部に文字の書かれたものである。いわゆる貧乏徳利と呼ばれる大形の徳利の破片で、内外面とも灰白色の石灰釉が掛けられている。文字は部分的で判読できない。産地は不明。

No.26・30は大堀に特徴的な鮫肌釉(D類)の小破片である。チョコレート色の釉の粒子ひとつひとつは、縦断面形が丸まることなく平面的である。

B．磁　　器 (No.32、33)

磁器が一点(No.32)、半磁化したものが一点(No.33)出土した。

No.32(図36－6、図版34－6)は白磁で、口縁部から胴部下半までと、底部のごく一部が現存する。口径は35mmを測る。白色で精良な胎土に光沢透明釉が掛けられる。胴部は直線的に立ち上がり、比較的明瞭な肩部を有する。頸部は短かく、胴部同様に直線的に立ち上がり口縁でゆるく外反する。頸部つけ根付近に、高さ幅とも1～2mm、断面玉状の隆帯が一条、上下より削り出されており、これをはさむように釉溜が生じている。釉溜の部分は色調がやや暗く、釉の薄い隆帯部の胎土の白色を強調するような趣きがある。無文・産地は平清水か。

No.33(図36－7、図版34－7)は半磁化した製品である。口縁部から胴部上半まで現存する。口径は32mmを測り、注ぎ口が作り出されている。やや灰味をおびた白色の精良な胎土に、光沢の強い釉が掛けられている。胴部から頸部への移行はゆるやかで、口縁部にかけて外反する。無文。産地は平清水か。

C．炻(せっ)　　器(き) (No34～39)

6個体が出土した。いずれも胴部に沈線が連続して施される(E類)。細片のNo.34のみ、胎土は黄色味の強い灰褐色で、沈線幅は0.2～0.5mmと細い。他の個体はすべて褐灰色の胎土で、沈線幅は1mm前後である。No35・39は、胴部にくぼみのあるヘソ徳利である。その他はいずれも小破片で、くぼみ部が現存しないが、同種の器形と思われる。

No39(図36－8、図版34－8)は口縁部から胴部まで現存する。胴部上半に三ケ所、長径約35mm、短径約30mmを測るだ円形のくぼみのあるヘソ徳利である。口径は22mmで、胴部には幅1mm前後の沈線が連続して施される。胴部最大幅は胴部下半にあると思われる。頸部は短かく直線的に立ち上がり、口縁は小さな玉縁状をなす。胎土は精良で褐灰色、艶消釉が掛けられるが、ヘソ部分には光沢があり暗赤褐色を呈す。産地は平清水。

D．出土状況

陶器は、焼失前では石敷遺構、焼失時・直後では3層・4層・ピット13などに集中する傾向が認められる。徳利については詳細な分類が不可能なために、焼失前後間での比較は困難である。図36下表中文様類型C類とした、表面に糠白釉を流すタイプ(No.16・17・18・19)は、焼失前後にまたがっている。D類の鮫肌徳利破片(No26・30)は、いずれも焼失前のものであるが、出土数が少な

いため、これが焼失前に限って存在するかどうかは不明である。

磁器については白磁・半磁それぞれ1個体ずつ出土したのみで、分布の特徴、焼失前後間での比較はできない。

炻器(E類)は(C 2－4層、ピット16に集中しており、焼失前には存在しない可能性が高い。

(市村賢則)

⑤ 急須・油指・蓋・香合・甕

A．急　須(図32－12・13、図版31－5・6)

3層やピット16より陶器2点、石敷遺構より炻器1点が出土する。陶器のうち1点は、相馬大堀産で意図的に鉄砂を含む素地を用いて、胴部を凹凸させて黒絵具で文様を描く。他の1点は、素地に呉須と白掛を用いて、その部分のみに施釉される。炻器(図32－12)は「キ」を持ち肩部と腰部に沈線を有し、その間に飛鉋と梅花文を施す。釉薬は、糠白釉にコバルトを含む濃藍色が流し掛けされている。産地は平清水焼の可能性を持つが、粗い粒子の素地である点、二本松万古(ばんこ)焼に類似する。二本松では、類似する製品が明治10年代に生産されている。磁器(図32－13)は、菅家文章の一節「紅玉帯雪辱和気松翠火風□是□□……□□春□道具」と不明な文様が描かれてある。

B．油　指(図37－1・5・6、図版34－10、35－1・2)

ピット16やピット5より陶器2点を出土する。細部は欠損し形態は不明であるが、多賀城跡作貫(さっかん)地区から類似する完形品が出土する。それぞれ大堀産で、木灰釉を使い酸化炎で浅黄色、環元炎で灰白色に焼成され、きわめて細い貫入に黒い染みが目立つ(図37－1・6)。

前者の油指より体部が長く、弱々しい把手を持つ陶器が3層より1点出土する(図37－5)。釉薬は、全面に糠白釉と一部に鉄釉(飴釉)の流し掛がある。産地は、上野目(かみのめ)産の可能性もあるが大堀産であろう。これは、水指の可能性もある。

C．蓋　(図37－11、図版35－7)

ピット16より陶器が1点出土する。大堀産の油指の蓋と思われ、釉薬と貫入は同じである。釉薬は外面に厚掛し、内面にきわめて薄く掛け、橙色に発色する。

D．香　合(図37－2・3、図版34－11・12)

ピット36もしくは石敷遺構から陶器が1点と3層上から磁器が1点出土している。陶器(図37－2)は鉄分を含まない純度の良い素地に呉須で麦藁手を描き、石灰釉を掛ける。磁器は無文で石灰釉を掛ける。

E．坏　?　(図37－7、図版35－3)

3層より陶器が1点出土する。大堀産と思われ、少量鉄分を含み木灰釉を掛け環元炎で緑青色に発色する。

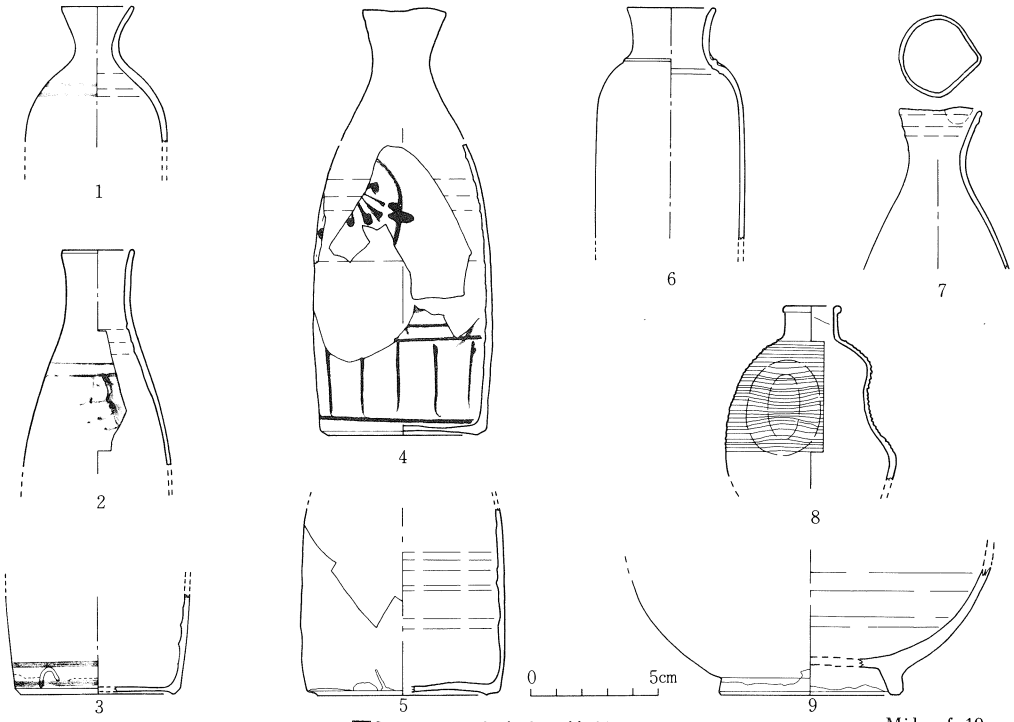


図36　ＮＭ２出土の徳利

Mid. of 19c.
(before 1882)

Fig.36　Bottles from NM2　(1-4、8 Hirashimizu ware 6、7？)
1-4 Cobaltblue over white slip, beneath a clear glaze 6、7、9 porcelains.

No.	残存状況	出土区、遺構、層	法 (mm) 口径	底径	器高	底厚	胎土	装飾 類型	備考	釉薬 種類	色調	白化粧	産地	備考	図	図版
1	S	A1-4層	—	—	—	—	淡 5Y 8/3 黄	B		木灰釉	灰 5YR 8/1 白	○				
2	S	区不明3層、A1-3、4層 ピット8	—	—	—	—	灰 5Y 7/2 白	B		木灰釉	アイスホワイト 3.0PB 9.0/1	○	平清水			
3	S	A1-2、3、4層、ピット13、石敷遺構	—	—	—	—	灰 5Y 7/1 白	B		木灰釉	パールホワイト N 8.5	○				
4	S	A1-4層、ピット17	—	65	—	—	淡 2.5Y 8/3 黄	B		木灰釉	灰 7.5Y 8/1 白	○		指痕2ヶ所　腰に二条の直線巡る、やや焼ぶがせい 白化粧が腰で切れる	36-3	34-3
5	S	A1-4層、A2-3、4層、B1-2層、ピット13	—	—	—	—	灰 5Y 7/1 白	F(A?)		木灰釉	灰 10Y 8/1 白	○				
6	S	3層	—	64	—	—	淡 7.5Y 8/3 黄	B		木灰釉	灰 10Y 8/1 白	○	平清水	指痕3ヶ所		
7	S	C-2 2層、3層	28	—	—	—	灰 5Y 7/1 白	B	モチーフ不明	木灰釉	プロスティホワイト N 9.0	○	平清水	白化粧一部剥落	36-2	34-2
8	S	石敷遺構	—	64	—	—	灰 7.5Y 8/1 白	B	菊花文？	木灰釉	灰 10Y 8/1 白	○	平清水	法量二合	36-4	34-4
9	S	A1-3、4層、B1-3層、C2-4層、ピット8、ピット19	—	—	—	—	灰 5Y 8/2 白	B	蕨手文	木灰釉	灰 5Y 8/1 白	○	平清水			
10	S	3層	29	—	—	—	灰 5Y 8/1 白	B		木灰釉	灰 2.5Y 8/1 白	○	平清水	法量一合？　釉はやや緑がかる	36-1	34-1
11	S	3層	—	—	—	—	灰 5Y 7/2 白	B		木灰釉	灰 5Y 8/2 白	○				
12	S	3層、C-2-4層、ピット5	—	77	—	—	淡 2.5Y 8/4 黄	A		木灰釉	淡 5Y 7/3 黄			指痕1ヶ所	36-5	
13	S	3層、B-24層 ピット5	—	(84)	—	—	淡 2.5Y 8/3 黄	A?		木灰釉	灰 7.5Y 7/2 白		平清水			
14	S	表土	—	—	—	—	淡 5Y 8/3 黄	F		木灰釉	灰 5Y 8/2 白	○				
15	S	試掘トレンチ4層	—	—	—	—	灰 7.5Y 8/2 白	B	文字	石灰釉	灰 10Y 8/1 白			いわゆる貫乏徳利、文字は判断不能		
16	S	A1-4層	—	—	—	—	灰 5Y 5/1	C		ぬか白	パールホワイト N 8.5～アイスホワイト 3.0PB 9.0/1		平清水	釉を垂らして装飾する 釉は部分的に青白く発色		
17	S	A2-2層、C2-2層 3層、ピット13	—	—	—	—	灰オリーブ 7.5Y 6/2			ぬか白	パールホワイト N 8.5～アイスホワイト 3.0PB 9.0/1		平清水	釉は部分的に青白く発色		
18	S	A1-4層、石敷遺構	—	—	—	—	灰 7.5Y 7/2 白	(C)					平清水	釉のない部分だが、上記と同種のものと思われる		
19	S	ピット13	(35)	—	—	—	灰オリーブ 5Y 5/3	(C)					平清水	〃		
20	S	ピット13	—	(64)	—	2	灰 5Y 7/2 白	F		木灰釉	灰 5Y 7/1 白					
21	S	3層	(28)	—	—	—	灰 5Y 7/1 白	F		木灰釉	灰 7.5Y 7/2 白					
22	S	B1-4層	—	—	—	—	灰 7.5Y 7/1 白	F		木灰釉	灰 7.5Y 7/1 白					
23	S	ピット2	—	—	—	—	灰 5Y 7/2 白	F		木灰釉	灰 2.5Y 8/1 白	○				
24	S	ピット13	—	—	—	—	灰 7.5Y 6/1	F		木灰釉	灰 7.5Y 7/1 白					
25	S	A1-4層、ピット12	(28)	—	—	—	褐 7.5YR 5/1 灰	F(C?)					平清水			
26	S	石敷遺構	—	—	—	—	浅黄橙 10YR 8/3	D	鮫肌		暗 7.5YR 3/3 褐					
27	S	ピット5	—	—	—	—	淡 5Y 8/3 黄	A?		木灰釉	灰 5Y 8/2 白	○				
28	S	C2-1、4層、C2水道カクラン、ピット5	—	—	—	—	灰 5Y 8/2 色	B		木灰釉	灰 5Y 8/2 白	○	平清水			
29	S	C2-1、4層	—	59	—	3	淡 5Y 8/3 黄	B		木灰釉	灰 5Y 7/1 白	○				
30	S	石敷遺構	—	—	—	—	淡黄橙 10YR 8/3	D	鮫肌		暗 10YR 3/3 褐					
31	S	石敷遺構	—	(80)	—	4	灰 5Y 7/2 白	F		木灰釉	淡 5Y 7/3 黄		平清水	器厚はなく、体部のふくらみは大きい　品質有		
32	M	石敷遺構	35	(62)	—	—	プロスティホワイト N 9.0	A		石灰釉？	パールホワイト N 8.5		平清水	口縁、頸部で強・体部よりは薄い、肩部が明瞭に1稜重、その上に釉溜がきている。	36-6	34-6
33	S	表土排土、B1-カクランピット9	32	—	—	—	パールホワイト N 8.5	B		〃	パールホワイト N 8.5		〃	手縄、正ぎ口がつくり出される 法量二合？	36-7	34-7
34	S	A1-3層	—	—	—	—	灰黄褐 10YR 5/2	E	沈線 巾 0.2～0.5	木灰釉	褐 7.5YR 4/4		〃	拓器、拓器中これのみ粒土に黄色が強く、沈線は細く鋭さい		
35	S	C2-4層、ピット16	—	—	—	—	褐 7.5YR 4/1 灰	E	1～1.3	〃	暗赤 5YR 3/6 褐		〃	拓器ヘソ徳利、わずかに凹みが認められる		
36	S	3層	—	—	—	—	褐 7.5YR 4/1 灰	E	0.5～0.9	〃	暗赤 5YR 3/4 褐		〃	拓器ヘソ徳利と思われる		
37	S	3層	—	—	—	—	褐 7.5YR 5/1 灰	E	0.5～1.0	〃	にぶい赤 5YR 4/4 褐		〃	拓器		
38	S	ピット16	—	—	—	—	褐 7.5YR 5/1 灰	E	0.6～1.1	〃	暗赤 5YR 3/2 褐		〃	拓器		
39	M	C2-4層、ピット16	22	—	—	—	褐 7.5YR 4/1 灰	E	0.9～1.1	〃	暗赤 5YR 3/6 褐		〃	拓器、ヘソ徳利、凹みが3ヶ所 腰部は短く直立する、王様の口縁	36-8	34-8

F．貼花の器　（図37－4、図版34－13）

石敷遺構より陶器が1点出土する。素地に意図的な鉄砂を含み、図案化された九曜文を貼花とする。貼花に白海鼠釉を掛け口縁に鉄絵を描き、環元炎で焼成された大堀産である。

G．駒絵？の器　（図37－10、図版35－6）

3層より陶器が2点出土する。素地に特徴があり、長石粒子や白い粒子を多量に含む相馬駒焼である。木灰釉を使い、酸化炎や環元災でそれぞれ焼成される。

H．鍔のある器　（図37－8、図版35－4）

石敷遺構より陶器が1点出土している。鉄砂を含ませた素地に、土瓶の腰部に当る部分に鍔を持つ。木灰釉を掛け酸化炎で焼成した大堀産である。

I．壺・甕

3層上より堤産の陶器1点と石敷遺構もしくはピット36より堤産と思われる陶器が1点出土している。2点とも胎土が類似し砂粒子を含む。3層上の1点は「黒釉」と呼ばれる黒色の釉が掛けてある。釉は火災のため変色している。

J．玉縁の器　（図37－13、図版35－8）

4層より鉢類と思われる陶器が1点出土している。糖白釉を掛け環元炎で焼成した大堀産か上野目産である。

K．灯明皿受け（図37－12、図版35－9）

石敷遺構より完形で1点出土している。砂粒を含む褐色の胎土に、底部脇のみを除き鉄釉（飴釉）を全面に施釉し、酸化炎でオリーブ褐色に発色する。Ⅲ類の灯明皿の胎土と釉が同一であり、大堀産であろう。

L．器形不明（図37－9、図版35－5）

石敷遺構より磁器の破片が1点出土している。糠白釉を掛け環元炎で焼成した製作時の指跡があり、上部には不明の凹凸があり、部分的に鉄釉、全面に石灰釉を掛けて焼成されている。

M．器形不明（図37－14）

石敷遺構と5層上より陶器の細片で2点出土している。大部分は不明であるが円盤状の型を用い、縁に型作りの痕跡と底部の縁の方向にケズリ痕が見られ、木灰釉が掛けてある。

（大場拓俊）

⑥　土　　鍋（図38、図版35－10、36－1）

石敷遺構とC－1区3・4層に集中している。口縁部の形態と法量はみな少しずつ違いがあり、口径164～215㎜、底径72～80㎜、器高95～103㎜で、完形品はないが口縁部に把手が一対つき、その片方の下に注口があると思われる。ただし、注口が確認された個体は1個体のみで、後述のように注口が少くとも把手の下にはない例があるので、すべてが同形態であったかどう

No.	器形	残存状況	出土区、遺構、層	法量(mm) 口径	底径	器高	内径	器厚	胎土	文様	釉薬 種類	色調	貫入	釉厚	焼成	種類	産地	備考	図	図版
1	急須	S	石敷遺構	—	—	—	—	2	灰 N 4.0	鳳凰花卉	無釉				普通	炻器	二本松	コバルト釉流し掛	32-12	31-5
2	〃	S	ピット16 B2-4層	—	—	—	—	2	灰 7.5Y 8/2 白色	鉄絵	(木灰釉)	明褐灰 7.5YR7/1	×	普通	甘い	陶器	相馬大堀	胎土に鉄砂含む		
3	(〃)	S	A1-4層,A1-5層	—	—	—	—	1	灰 5Y 7/1 白色	絵付(呉須)	〃		×	普通	普通	〃	〃			
4	油指	L	ピット16	—	—	—	—	2	灰 10Y 8/2 白色		木灰釉	灰 7.5Y 8/2 白色	○	〃	〃	〃	〃		37-1	34-10
5	〃	S	ピット5、ピット16	—	—	—	—	—	灰 10Y 8/2 白色		〃	灰 7.5Y 8/2 白色	○	〃	〃	〃	〃		37-6	35-2
6	香合	M	A2－6層	54	40	17	46	3	灰 N 9.5 白色	麦藁手	石灰釉	灰 N 9.0 白色	○	厚い	〃	磁器	平清水	油指の蓋?	37-2	34-11
7	〃	S	3層	—	—	—	—	3	灰 N 9.0 白色		〃	灰 N 9.0 白色	×	普通	〃	〃	不明		37-3	34-12
8	蓋	P	ピット16	50	35	12	36	4	灰 10YR 8/1 白色		木灰釉	灰 4.0GS.5/2.5 白色	○	厚い	〃	陶器	相馬大堀		37-11	35-7
9	油指	S	C1－3層	—	—	—	—	3	灰 2.5Y 7/1 白色	飴流し掛	糠白釉	灰 10YR 7/1 白色	○	普通	〃	〃	〃		37-5	35-1
10	(坏)	S	石敷遺構	—	—	—	—	1	灰 10YR 7/1 白色		木灰釉	オリーブ灰 10Y 6/2	○	〃	〃	〃	〃		37-7	35-3
11	筒形	S	ピット16,C2-3層	—	—	—	—	2	明褐灰 7.5YR 7/1 色	駒絵	〃	オリーブ灰 2.5GY6/1	○	〃	〃	〃	相馬駒	筒型状器形、長石、白い粒子含む	37-10	35-6
12	〃	S	石敷遺構	—	—	—	—	2	青灰 5BG 5/1 色	九曜文	〃	オリーブ灰 2.5GY6/1	○	〃	〃	〃	相馬大堀	筒型状器形に九曜文の貼付	37-4	34-13
13	鉢	S	B1－4層	—	—	—	—	3	明緑灰 10GY 7/1 色		糠白釉	灰 10YR 7/1 白色	○	〃	〃	〃	不明		37-13	35-8
14	不明	S	石敷遺構	—	—	—	—	3	灰 5Y 7/1 白色		木灰釉	にぶい黄橙色 10YR 6/3	×	〃	〃	〃	相馬大堀	器体に錆	37-8	35-4
15	壺甕	S	3層	—	—	—	—	13~16	緑青灰色 5B 4/1		黒釉	暗灰色 N 3/0	○	〃	〃	〃	堤	2次焼成		
16	〃〃	S	A1－5層	—	—	—	—	9	明緑灰色 10GY 8/1		鉄釉 灰釉	暗オリーブ褐2.5GN/1 10GY3/1	○	〃	〃	〃	堤			
17	灯明皿受付	P	石敷遺構	91	40	54	56	3	灰 10Y 7/2 白色		鉄釉	オリーブグリーン 4.0GY3.5/5	×	〃	〃	〃	相馬大堀		37-12	35-9
18	不明	S	〃	—	—	—	—	2	灰 N 9.0 白色	不明	石灰釉	灰 N 9.0 白色	×	〃	〃	磁器	不明	指当て?	37-9	35-5
19	急須	L	C2－4層	60	43	45	56	2	灰 3.0PB 9/1 白色	不明	石灰釉	灰 3.0PB 9/1 白色	×	〃	〃	〃	瀬戸		32-13	31-6
20	不明	S	石敷遺構	—	—	—	—	3	灰 10Y 8/1 白色	〃	木灰釉	にぶい黄橙色 10YR 7/2	○	〃	〃	陶器	相馬大堀?			
21	不明	S	石敷遺構orピット36	—	(90)	—	—	3	灰 7.5Y 7/1 白色	〃	〃	浅黄 2.5Y7/3	○	〃	〃	〃	〃?		37-14	
22	不明	S	石敷遺構	—	—	—	—	3	コロスチ・ホワイト N 9.0	—	石灰釉	灰 N 9.0 白色	×	〃	〃	磁器				

表22 NM2その他の陶磁器の属性表

Table 22 Attributes list of various ceramics from NM2

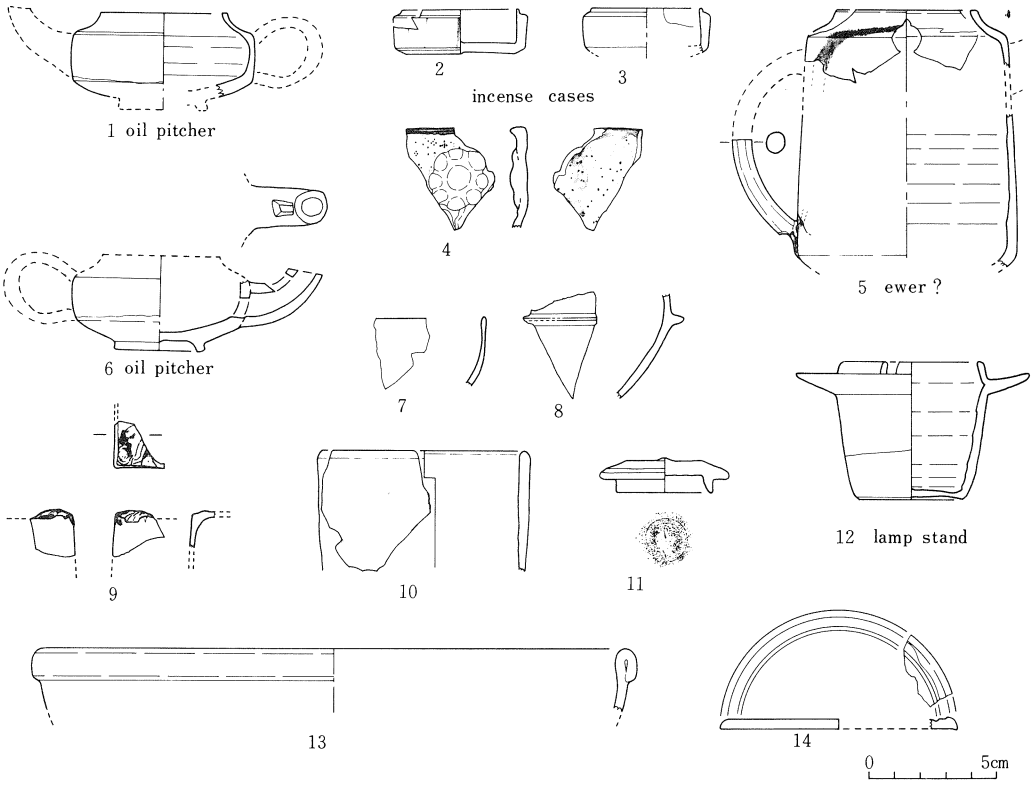


図37 NM2その他の陶磁器

Fig.37 Various ceramics from NM2

Mid. of 19c
(before 1882)

Only 9 is pcrcelain.

かはわからない。底部は相馬大堀産の土瓶と同じ形態で、非常に薄い。ツメがおそらく3個つくが、土瓶と違って底の縁についている。体部外面下半は削りで仕上げられている。体部外面上半と内面には暗赤褐色・極暗褐色の鉄釉が掛けられる。外面は漬け掛けである。釉の上には黒斑が特徴的である。胎土は比較的軟質の浅黄橙色のものと硬く焼きしまった灰色のものの二つがある。後者は相馬大堀産の鮫肌土瓶に似る。 図38－1 のみ黒斑の見られない極赤褐色の釉で他と異なる。図38－5は釉が黒変し、図38－7は焼き損じ。目痕の形は変化があるが、焼台は五脚と思われる。

胎土は相馬大堀産のものに類似するが、大堀産ではこのように口縁部に把手が立つ土鍋は今のところ知られていない。胎土・釉調は明らかに異なるが、同形態の鉄釉土鍋の破片1点が、1976年の東北大学の切込西山(きりごめにしやま)磁器工房址の発掘で出土しているが(図版35－11)、ここで焼いたものかどうかはわからない。多賀城市山王遺跡出土の例は注口が少くとも把手の下にはない(図版35－12)。胎土・釉とも異なり、小形である(口径147mm、底辺57mm、器高63mm)。

⑦ 土師質(はじしつ)土器、瓦質(がしつ)土器

酸化焔焼成の橙色の素焼の土器を土師質土器とした。ロクロ水挽きの皿、擂鉢(すりばち)、鉢類、蚊遣(かやり)？土管と、不明土製品があるが、透明の鉛釉を薄く掛けた焙烙(ほうろく)も、便宜的にここに含めた。 これに対し、燻(くすべ)焼環元焔焼成によって灰白～黒色を呈したものを瓦質土器とした。鉢類の一部と炭櫃(すびつ)がある。土師質・瓦質土器はほとんどが細片で、出土量も多くなく、形態・法量等について分析できるものはない。これらの土器は一般に火に関連した用途に用いられることが多い。胎土には粗い砂粒を多く含んでいる。この種の器を焼いてきた近くの窯は仙台市の堤(つつみ)窯がある。堤の佐大土管店の佐藤弥一氏、佐藤達夫氏と現在の堤の陶工松根金之助氏によれば、これらの器種は素焼の擂鉢を除けば、堤でも焼いてきており、胎土は概ね堤のものとみてもよいとのことである。

A．擂　　鉢（図39－6～11、図版36－4）

本調査区出土の擂鉢はすべて素焼である。

B．皿　　（図39－1～5、図版36－2）

近世によく見られる素焼の小皿である。完形品は一点のみ、ほとんどは細片である。体部の曲線や口縁部の形態に変化があるが、復元可能なものの大きさは口径115～125mm、底径70～80mm、器高20～25mm前後で、他もほぼこの範囲に収まると思われる。底部は上げ底気味である。この種の皿は神事や灯明皿に用いられるが、本調査区では灯明皿に用いられた痕跡(煤痕)のあるものはない。

C．鉢　　類（図39－12～14、18～20、図版36－3・5、37－1）

土師質のものと瓦質のものがある。完形品は無く、大きさには変化があるが、口唇部は膨ら

んで内側に突出する。口縁部を強くするため、持ちやすくするためなどが考えられる。 図39—12、図版37—1は口縁に水平な沈線が刻まれている。七輪の口縁を針金で縛って補強するような行為が想起される。これらも一般的に見て火鉢の類と見てよいだろう。図39—20は外面が磨かれており、蚊遣？としたものの底部かもしれない。

D．蚊遣（かやり）？（図40—3～5、図版37—8）

3～4個体認められた。体部上半が内弯し、口縁部が内側に折れこんでいる。外面は丁寧にヨコミガキされ滑らかである。多賀城作貫（さっかん）地区から多数出土している完形品との類似から、蚊遣（かやり）（中に杉葉などを入れて燻し、蚊を追い払う道具）と推測した。但し多賀城で出土のものは瓦質である（図版37—3）。蓋や透し穴のある破片、煤のついた破片はない。1点内側に墨書されたものがあり（図40—3、図版37—8）、『月日』『主立（おもだち）』の文字が読める。（P.109参照）。

E．焙烙（ほうろく）

豆などを炒る器で、薄い透明な鉛釉が掛けられている（図版37—4、参考品）。細片が6点出土しているのみである。

F．土管（図39—16・17、37—2）

土管の接続部の破片が2～3層から各1点出土している。進駐軍の遺構から出土する、胎土が層状に剝がれる素焼の土管とは焼成が異なるが、管部の径はほぼ一致する。火災時から火災直後の時期であり、土管の出現時期が今後の検討課題となろう。

G．不明土製品（図39—15）

多角形の板状の土製品である。

H．炭櫃（すびつ）（図40—1・2、図版37—6・7）

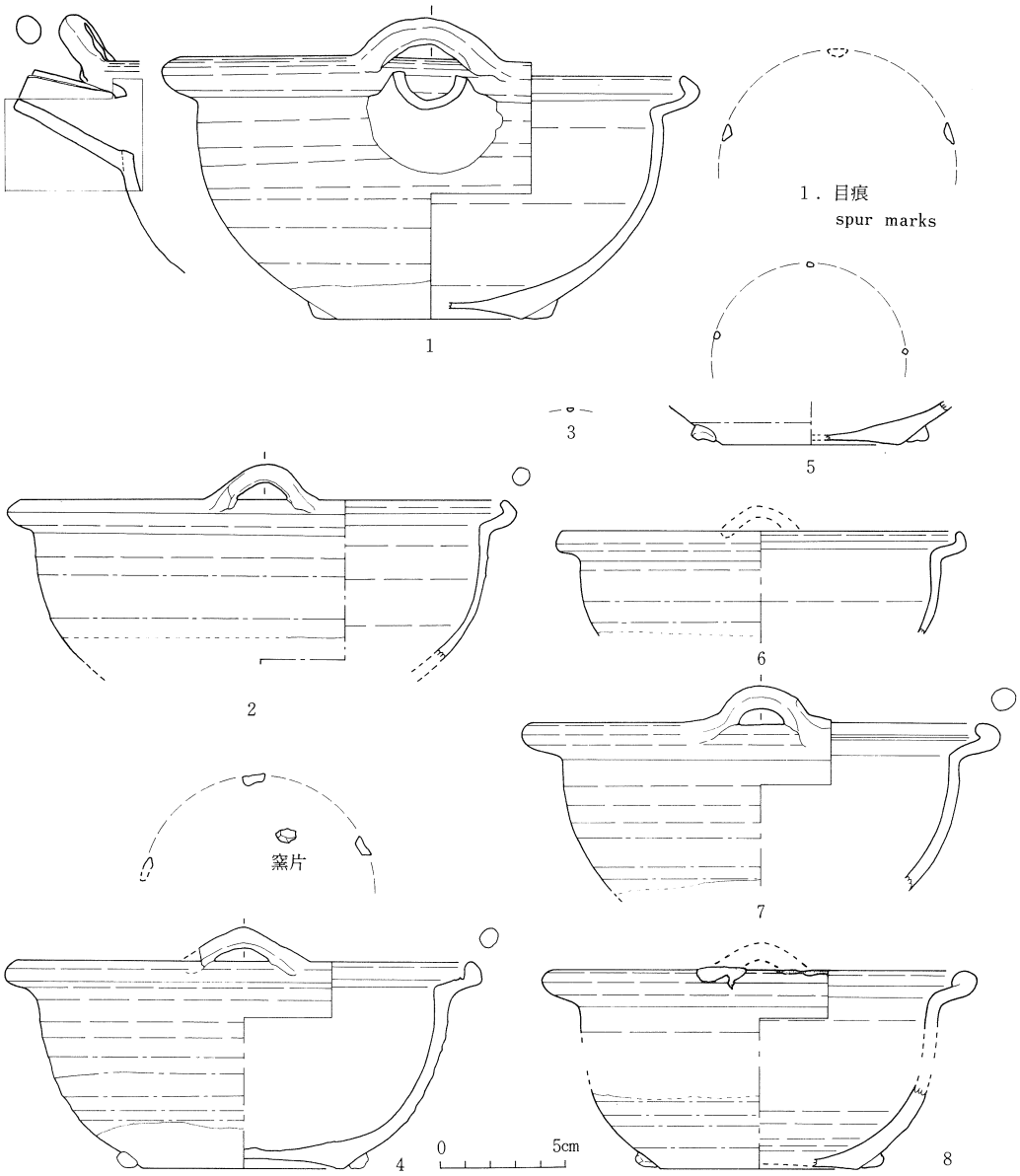
C—2区4層から3片出土している他はすべて石敷遺構出土である。細片が多く個体の識別が困難であるが、最低4個体ある。内外面に黒色処理を施した箱状の容器で、平面形は正方形

器種＼出土地点	火災前							火災時・直後												火災後	
	ピット36	石敷orピット36	石敷遺構	ピット14掘り方	ピット17掘り方	ピット23掘り方	ピット32	A1—4層	C1—4層	C2—4層	A1—3層	A2—3層	B1—3層	B2—3層	3層	ピット15抜穴	ピット16抜穴	ピット23抜穴	2 or 3層	ピット10	1層
擂鉢		7 (3)	7 (3)					1						1			5 (1)				1
皿	7	39	17	2	6	2	2	1	1	1	3	4	1			1		1		1	1
鉢類	5 (3)	8 (4)	8 (4)					2 (1)		1							1				1
蚊遣？		12 (3)	1									1									
焙烙		1	1														1				1
土管															1				1		
不明土製品									1												
炭櫃			約150							3											

数は破片数。( )内は識別できた個体数。

表23　NM2　土師質・瓦質土器の分布

Table 23　Distribution of red earthenware and smudged black earthenware at NM2



No.		口径	底径	器高	器厚	底厚	釉色	胎土色	備考	図	図版
1	石敷遺構	215	78	103	5	2	梅暗赤褐色 2.5YR2/3	浅黄橙色 7.5YR8/4	釉に黒斑無し	38-1	35-10
2	〃	203	—	—	3	—	暗赤褐色 5YR3/5	浅黄橙色 10YR8/3		38-2	
3	〃	—	—	—	—	—	暗赤褐色 5YR3/3	浅黄橙色 7.5YR3/3			
4	〃	—	—	—	—	—	暗赤褐色 2.5YR3/3	褐灰色 10YR4/1			
5	〃	—	—	—	—	—	梅暗赤褐色 2.5YR2/4	浅橙色 5YR8/4			
6	C1-3層	—	—	—	—	—	暗褐色 7.5YR3/3	浅黄橙色 7.5YR8/3		38-3	
7	C1-3、4層	190	80	95	5	4	暗赤褐色 5YR3/5	灰白色 10YR7/1	焼台五脚	38-4	36-1
8	〃	—	72	—	—	2	黒褐色 2.5YR3/2	灰白色 10YR7/1	〃 釉黒変	38-5	
9	C1-3層	(164)	—	—	(3)	—	暗赤褐色 5YR3/4	浅黄橙色 7.5YR8/3		38-6	
10	C1-3、4層	190	—	—	5	—	にぶい赤褐色 7.5YR4/3	灰黄褐色 10YR5/2	釉薄く窯変、焼損じ	38-7	
11	〃	(174)	80	—	(5)	—	暗赤褐色 2.5YR3/4	橙色 5YR7/6	目痕無し	38-8	
12	C2-3層	—	—	—	—	—	梅暗褐色 2.5YR2/3	灰色			
13	C1?-3層	—	—	—	—	—	梅暗褐色 7.5YR2/3	灰色 5Y6/1			

他にC1-4層、C2-4層、ピット15抜穴、2 or 3層、ピット1より細片各1点　単位ミリメートル

図38　NM2出土の土鍋　　Mid. of 19c. (before 1882)

Fig. 38 Cooking pots covered with iron glaze from NM 2

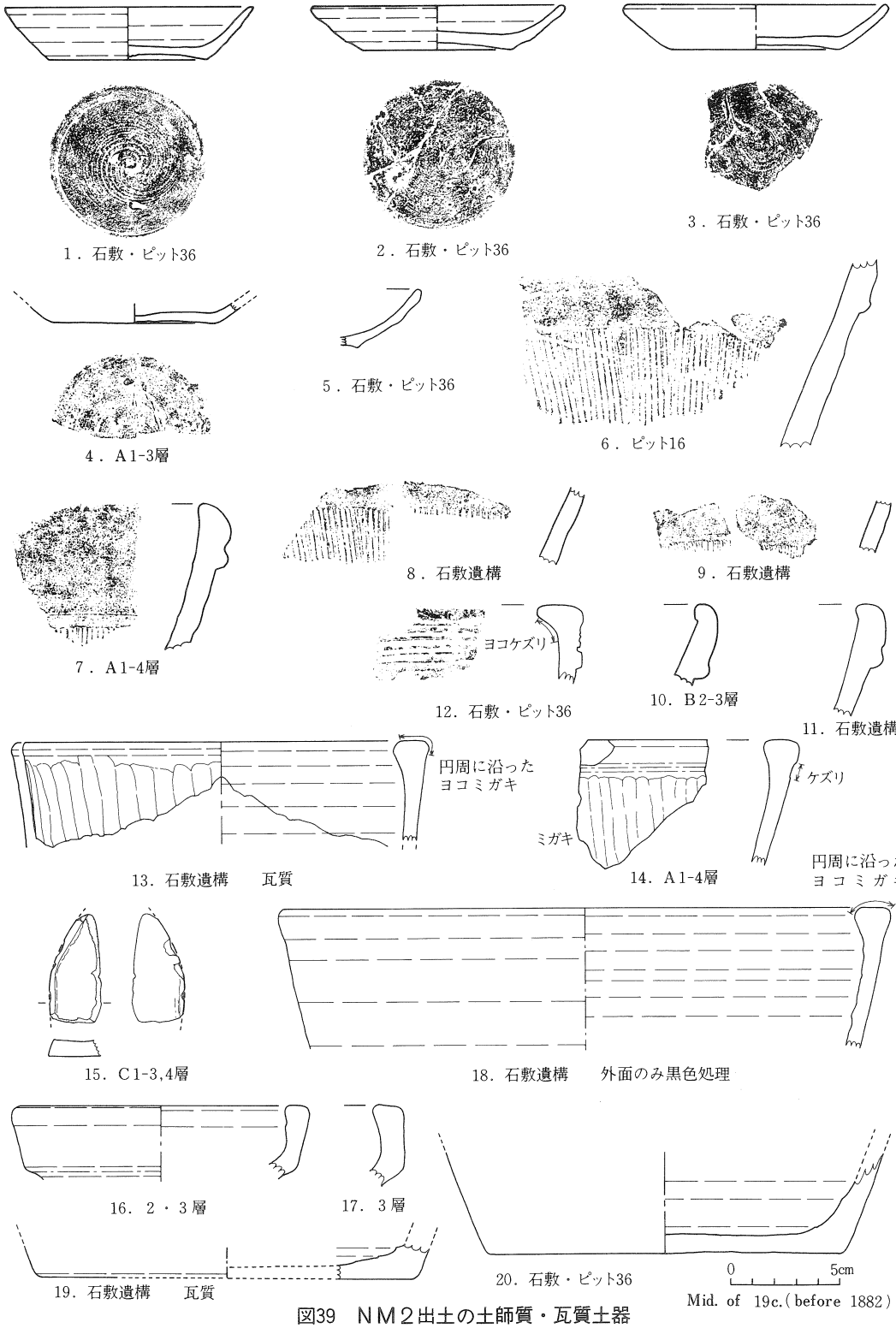


図39　NM2出土の土師質・瓦質土器

Fig. 39　Red earthenware and smudged black earthenware from NM2　Nos.13、18、19 black earthenware

1－5 皿 dishes　12-14、18-20 鉢類 braziers　16、17 土管 pipes　6－11 擂鉢 mortar　15 不明土製品 unknown piece

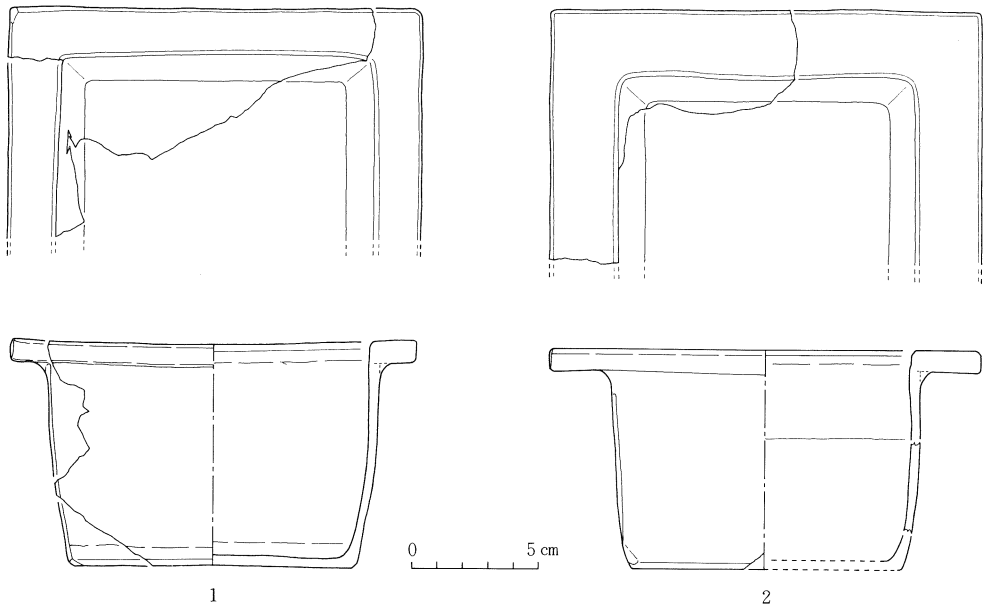
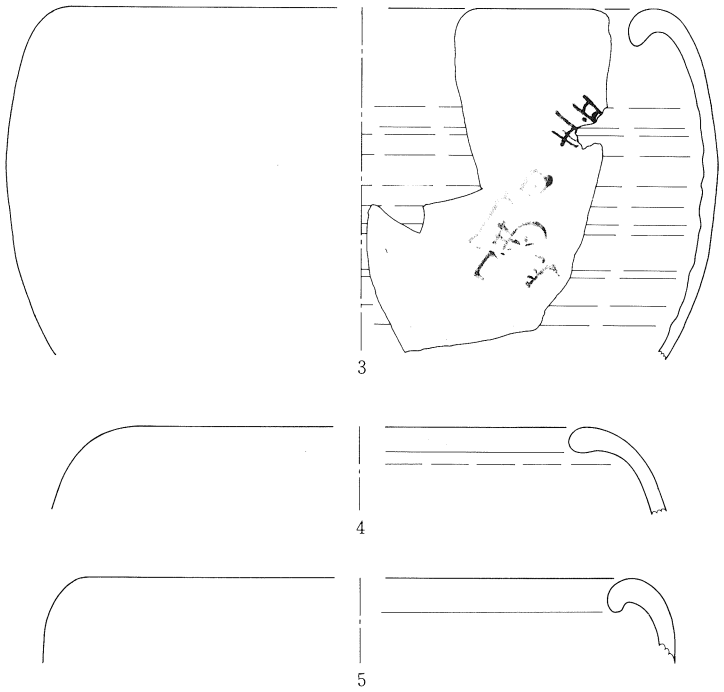


図	出土地点	箱部上辺	器高	器厚	鍔幅	鍔厚	図版	備考
1	石敷遺構	324	177	7	37	17	37－6	
2	〃	328	170	8	54	17	37－7	内面上部、黒色処理無し



0 5cm

図40　NM2出土の炭櫃・蚊遣　　Mid. of 19c.(before 1882)

Fig. 40　Rectangular charcoal heaters and braziers for smoking out mosquito

か長方形である。黒色処理が及ばず、橙色や灰白色を呈するもある。№2の内面は黒色処理が直線的に切れている。重ね焼きの痕だろうか。粘土板をつなぎ合わせて組み立てられており、つなぎ目に粘土を埋めてなでている。口縁の鍔と本体の接合部では鍔(つば)の側に2～3条の溝を刻んで接合している(図版37―5)。堤ではこの形の容器を「すびつ」と呼んでおり、近代の民家では堀り火燵(こたつ)の炉に鍔の部分を引っかけて用いたという。朝倉他(1981)によれば火燵は江戸期には普及しており、これらの「すびつ」も火燵に用いられたのかもしれない。

(山田しょう)

3) 明治時代初期以降の陶磁器

湯呑(図24―21) 磁器に筒形の山水文を描く。 (大場拓俊)

4) ＮＭ2の陶磁器のまとめ

① 時期・産地・使用者

ＮＭ２出土の陶磁器は破片資料がほとんどである。これらは火災前では本来の機能を失った石敷遺構に、火災直後ではＡ―１とＣ―１・２に集中して分布する。これらは壊れて破片になった陶磁器の集中的廃棄と火災直後の跡始末の痕跡を反映している。

これらの陶磁器の時期(製作・使用・廃棄)は、ほぼ明治初期である。まず茶碗からは同一類型の磁器を出土して時期のわかる北海道白老(しらおい)仙台藩陣屋跡と愛知県かたみ第２号窯跡と対比すると、下限時期は1860年前後となる。皿からは切込廃窯に伴ない、平清水に依存度を増す時期であり、1869(明治2)年前後となる。1874(明治7)年製作開始とされる鮫肌土瓶と1877(明治10)年頃の福島県二本松万古(ばんこ)急須が石敷遺構埋土から出土した。そして、火災は1882(明治15)年に起った。以上より製作・使用時期が一部幕末まで遡るものがあるにせよ、多くの陶磁器は明治初期の約15年間のものといえる。

視覚による属性分析に加え理化学的分析を行なった結果、産地には切込(茶碗・皿)、平清水(茶碗・皿・徳利)、相馬大堀(皿・土瓶・灯明具)、相馬駒焼(陶器)、二本松万古(急須)があることが判明した。このほか伊万里や瀬戸と推定される磁器もあるが、主に在地や隣接地、とりわけ平清水産や大堀が多い(図42)。磁器皿の分析によれば、少なくとも1882(明治15)年の火災以前から、切込産が減少し平清水産が増加する傾向があり、これはすなわち仙台藩の保護を失ったことによる1869(明治2)年の切込廃窯を背景とした現象と解釈できる。また、そうした情勢の変化の中でも土瓶などは相馬大堀から供給されており、土瓶製作の技術水準の高さなど廃藩後も民窯として独立して採算の合う条件が整っていたことがうかがわれる。

山形に武田菱文は、茶碗・皿・土瓶に共通する文様であるが、土瓶と陶器皿は相馬大堀産であり、茶碗と磁器皿は平清水産である。この文様をもつ陶磁器は石敷遺構がゴミ捨て場として使用されなくなって(1877年頃)から火災時(1882年)までの間に増加(茶碗)または出現する。従

って、これらはその時期に注文主が同一文様をもつ陶磁器のセットを商人に注文し、商人は平清水と大堀に依頼して作らせたものであろう。

ＮＭ２出土の陶磁器はその大きさにおいて、従来の江戸期の食器研究結果を裏付けることになった(秋岡 1984)。すなわち、膳に一汁一菜と湯呑、あるいは一汁二菜を並べるとすると、直径約3寸8分の茶碗と直径約4寸の皿であるから、丁度当時の一般的膳(一辺約8寸5分) の上に無理なく収まることになる。一方、土瓶の数に対して湯呑が、徳利の数に対して猪口が少なすぎる。また、大皿が皆無であることから、個人用膳の上に並べられる器を使用する場が付近にあったことになろう。また、陶磁器中とくに複数の食器に占める磁器の割合は高い(図42)。 中でも茶碗はすべて磁器である。 当時、一般庶民(農・工・商)の食器の多くは陶器であった様である。一般庶民の使用した大堀産土瓶も山水文の描き方が粗雑であるなど、ＮＭ２に比べて質の上で一定の差を見出すことができる。

幕末に北海道に構築された仙台藩白老(しらおい)陣屋跡、松前藩戸切地(へきりち)陣屋跡の出土食器の組み合わせは、NM2のそれとよく近似している。また、茶碗がすべて磁器であるなど、食器中に占める磁器の割合も高い。こうしたものが足軽など下級武士が詰めていた長屋跡から出土していることからみて、彼らの使用したものであったと判断できる。従って、当時の下級武士が自宅で使用したものまでは不明だが、少なくとも彼らが支給されていたものは、一般庶民とは質的に1ランク上のものと見ることができる。もっとも、ＮＭ２の食器類中には多くのハネモノ、つまり釉の発色のきわめて不良なもの、多少歪みを生じているものが含まれている。これは一方で財政上の困難を反映すると解釈できるほか、その使用者が武士階級でも下級に層する者であったことを示していると言える。「NM2のまとめ」で後述するように、これらの陶磁器が近世陶磁器の最終末の特徴をほとんど留めていながらも、時間上はすでに廃藩後の明治初年に属する東北鎮台の下級兵卒らの使用物であった可能性が高い。下級兵卒も江戸時代の下級武士的性格と類似することからみて、NM2の陶磁器の使用者を下級兵卒とみることは妥当であろう。

(佐川正敏)

② 陶磁器の化学組成結果と考古学的考察

本遺跡出土の陶磁器は、多くが在地や隣接地の切込産や相馬大堀産、平清水産と推定できる。しかしながら、窯跡の多くが未調査で、製品の胎土色調や粒子が類似することから、識別が困難な資料もある。そこで理化学的方法(原子吸光法)による主成分分析を蟹沢聡史（東北大学教養部教授）に依頼した。その分析方法は第Ⅳ章で詳述されているのでここでは省略する。資料は、出土品の産地が判明するものを選んだが、産地不明な資料が少なくないため、平清水窯跡表採品も対象とした。内訳は陶器が16点、磁気が20点、炻器が６点（本遺跡出土品32点と表採品10点）で、器種の多い茶碗や皿や土瓶や徳利が主である（表41)。

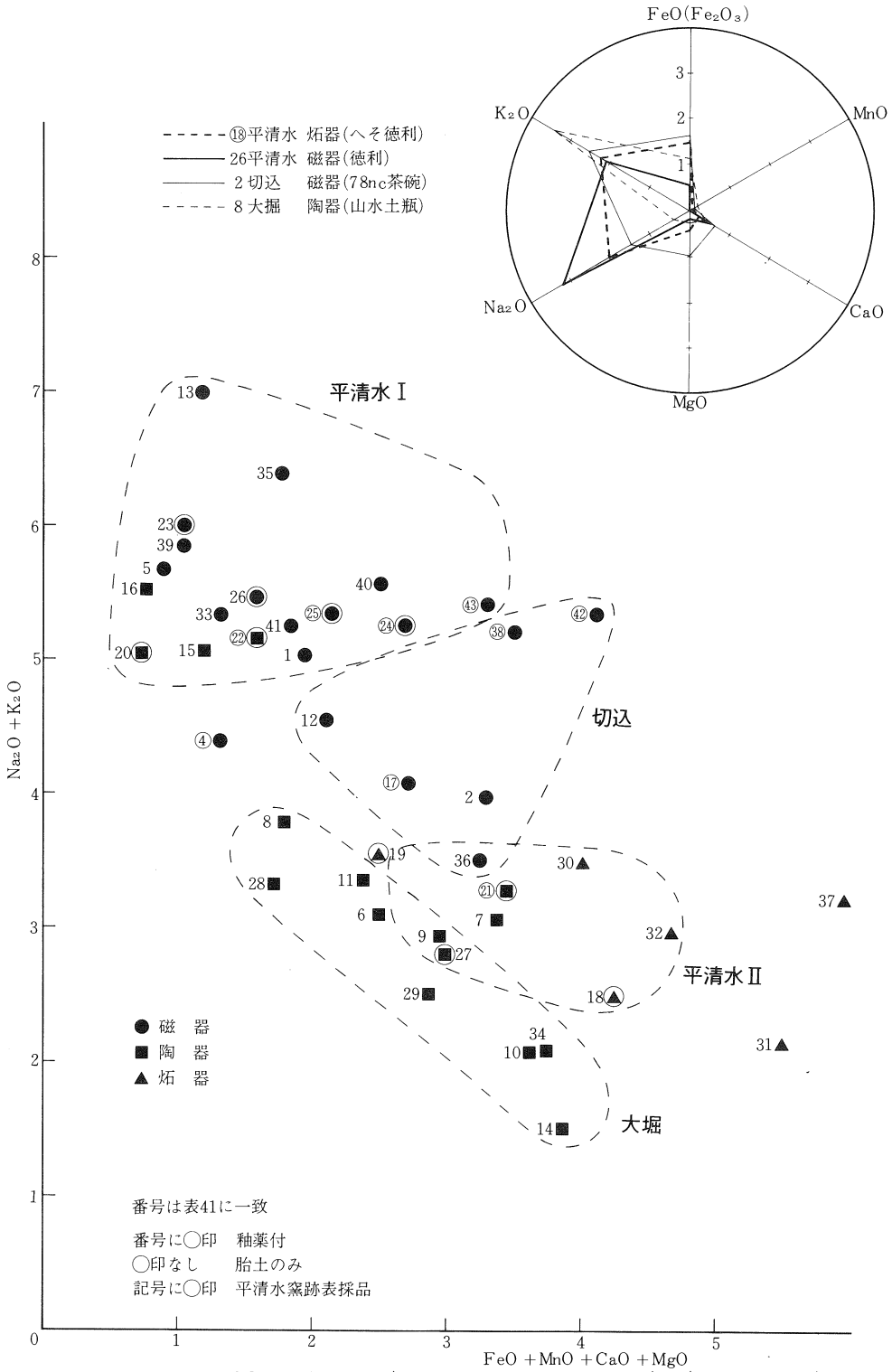
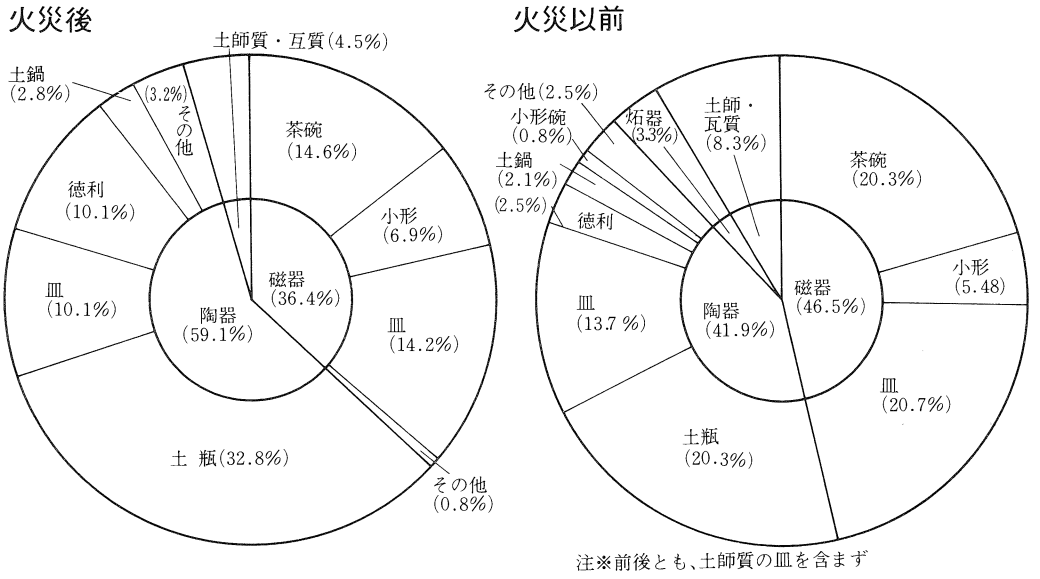


図41 NM2出土陶磁器の(FeO+MnO+CaO+MgO)+(Na2O+K2O)の関係

Fig. 41 Relation between the (FeO+MnO+CaO+MgO) and the (Na2O+K2O) in the ceramics from NM2



percentage variation before and after the fire in 1882

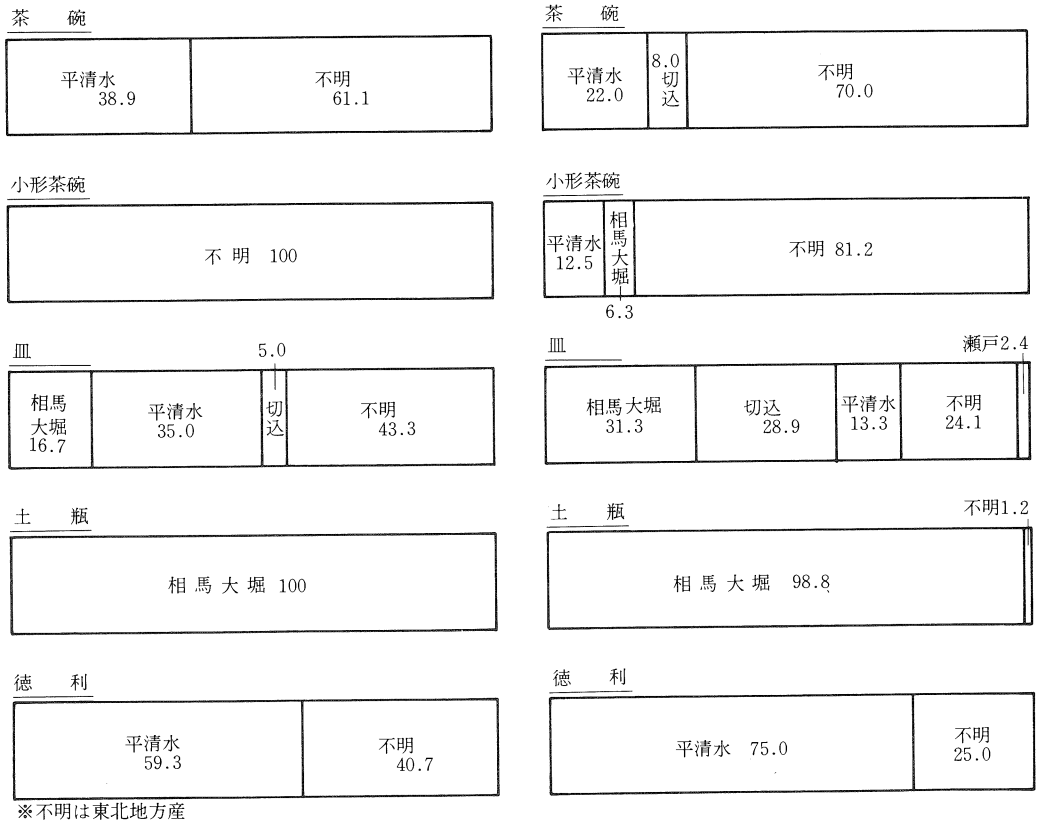


図42 器種ごとにみた産地別出土数の比較

Fig. 42 Percentage of excavated ceramics divided according to place of production

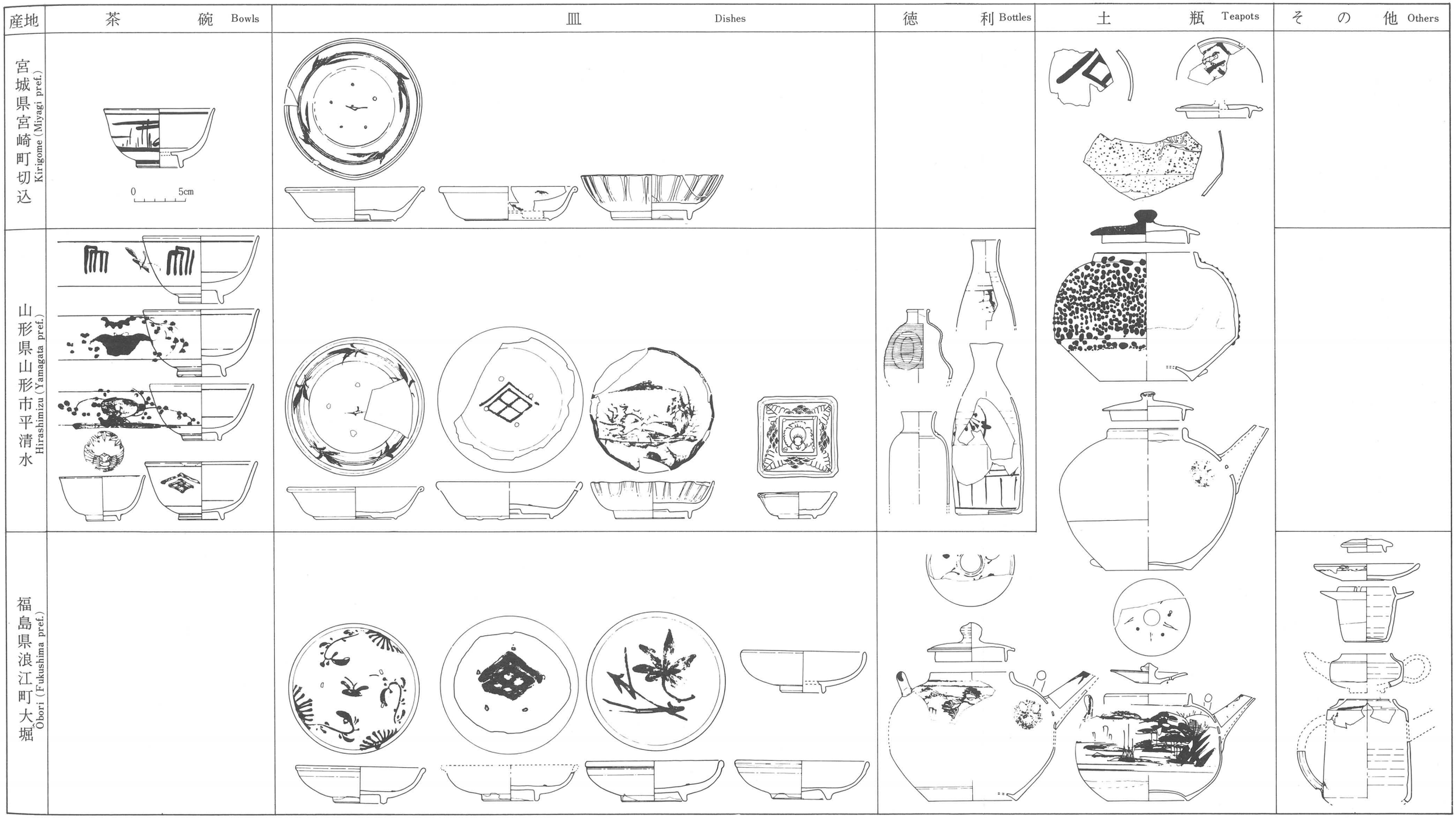


図43　ＮＭ２出土の産地別陶磁器一覧表

Fig. 43　Types of excavated ceramics divided according to place of production

陶器の出土品13点と表採品３点は、Na_2O+K_2Oが富む一群と乏しい一群に分けられる。前者は、陶器の中で最も灰白色を有する胎土で玉縁を持つⅠ類の皿(No15・16）である。これらは、窯跡表採品に分布値が隣接し、同類の胎土と器形を考え合わせると平清水産と推定できる。後者の中では、Na_2O+K_2Oが富むⅠ類巴文蓋(No８)が前者に最も近接し灰白色に近い浅黄橙色の胎土をもつ。続いてⅡ類鮫肌土瓶(No11)、鉄砂を含むⅡ類土瓶(No９)、Ⅰ類青釉土瓶(No10)、Ⅱ類の皿(No14)の順にNa_2O+K_2Oが乏しくなる。その間に油指し(No28)や徳利(No６・29)や片口土鍋(No34)が分布する。徳利は、土瓶群の胎土と同様の色調を有する点と大堀の分布値に隣接することから大堀産と推定できる。ただし徳利(No６)は胎土が異ることから平清水産の可能性もある。土鍋は、玉縁の器形が大堀で見られず、胎土の粒子が粗く、大堀産の土瓶の胎土と異なるが、大堀に隣接することから同一産地の可能性がある。炻器の出土品４点と窯跡表採品２点の分布では、窯跡表採品と出土品の徳利(No30・32)は互に近接し、小形茶碗(No37)と急須(No31)は離れている。前者は褐色の胎土と粒子の状態から同一産地と推定できる。急須は、胎土の粒子が粗い点で二本松万古とは異るが、暗褐色胎土と文様や釉薬に同様な点があるので同一産地であろう。小形茶碗は、明褐色胎土で他の炻器とは異るが、高台の仕上がナデてあり丁寧に製作されていることから素地の選択の結果とも考えられる。また、素地から筒描が剝落する点を考慮すると平清水の可能性もある。磁器の出土品16点と窯跡表採品４点は、窯跡表採品に多くが隣接し集中する。この一群は、鉄分が微量で畳付は灰白色が多く、平清水と推定できる。それに対し鉄分が多く畳付が茶色で灰色の釉薬を持つ茶碗(No２)は、切込特有のもので分布値の上でも明確に示されている。他の切込と推定される資料の茶碗(No38・42)は畳付が薄く茶色を呈するが、明確に産地は決めかねる。急須(No４)の胎土が灰白色で透明感を持ち釉が完全に溶けている資料は、分布値に明確に示されているように瀬戸産であろう。今回は、産地推定の基礎資料となる窯跡資料が少なく出土品の産地を明確に決めかねた。とりわけ、肉眼で識別困難な出土磁器や表採炻器の分布値が離れており、同一産地の分布値の範囲が問題となる。窯跡の多くが未調査の段階において、産地の基礎資料の充実と消費地出土資料の比較に基づいた産地同定は、とりわけ今日的意義があると言える。

（大場拓俊）

5）木　製　品

出土資料の内訳は表24に示した。木製品は石敷遺構に集中し、その多くが木羽などの屋根葺材である。明治15年の火災時に形成されたと考えられる３・４層からは、一部が炭化した板材の破片が出土するが、数は少なく、焼け落ちた建物の残骸は火災後片付けられたものとみられる。このことは、３層が多少動かされている可能性があることを示している。なお樹種同定は時間の都合で行えなかった。

種類＼出土地点	火災前					火災時・直後								火災後				計
	ピット36	石敷遺構	ピット36 or 石敷	ピット方17 掘り	ピット方23 掘り	各区4層	各区3層	ピット抜き穴13	ピット抜き穴14	ピット抜き穴16	ピット抜き穴17	ピット1	ピット3	ピット8	ピット9	ピット10	ピット12b	
板材	5	6	1				3											18
板または角材	1	2	1		1			1	1						1			8
下げ末								1										1
くさび					1													6
野付板		4				1	1											4
木羽	22	67	1		3	2												93
ヒバ皮		6																6
白木箸		19																19
白木箸(小)		7																7
塗箸															1			1
漆器椀		1				1					1	1						4
栓		1																1
桶の柄?		1																1
不明木製品		1																1
丸棒		4			1													5
杭																	1	1
竹製品		8																8
笹茎	2	1				1												4
切片	1		1	2	3	2					2							11
燃料?	5	17				1												23
炭化断片	17	62	3	4	4	3	2			1	4		1	1	9	1		112
断片	4	10		3		2	3	3	1		3				4			33
計	57	217	7	9	13	12	6	5	4	2	10	1	1	1	15	1	1	362

(数は破片数)

表24　ＮＭ２出土の木製品の分布

Table 24 Distribution of wooden materials at NM2

①　建　築　材

長さ1尺、幅2寸程の薄く割られた板の破片が石敷遺構から多数出土した。東北大学工学部佐藤巧教授にこれが屋根葺きに用いられる木羽(こば)であると御教示頂いた。折りしも、宮城郡宮城町大倉の定義如来西方寺(じょうげにょらいさいほうじ)が五重塔の新築を計画され、工事が進行中であったので、工事を担当されている仙台市の阿部建設株式会社の大沼二郎氏、大沼興治氏の御厚意により、1985年2月・3月に工事現場を見学させて頂いた。大沼二郎氏、棟梁で山形県文化財保護指導員の加藤吉男氏、柿葺(こけらぶき)職人の吉川定男氏らに以下の遺物を鑑定して頂いた。野津芳、坪倉晴利、伊藤延行、池田栄次、池田民哉の各氏による柿葺も実見させて頂いた。以下は、その御教示をまとめたものである。

A．木羽(こば)（図44、図版40－1～5）

長1尺2寸、幅3寸前後、厚1分程の薄板を重ねて屋根を葺く方法を柿葺(こけらぶき)（木羽葺(こばぶき)）という。戦前は民家でもよく見られたが、戦後は資材と職人の不足で急速に廃れた。仙台市では大崎八幡神社が柿葺である。寿命は30～50年程である。木羽は角材をナタで割って作られる（図版43－　）。板目に割る方が丈夫だが、技術的に困難なので柾目に割る。定義如来五重塔では、建物の本体と共にアオモリヒバを使っている。割った板の表面は凹凸があるが、これが重ね合わされた時に隙間を作って空気を通し、屋根の乾燥を良くする。

木羽は上下に１寸ずつずらして重ねられる。このずらした部分を葺足(ふきあし)という（図48－２、

葺足は墨打ちで揃える(図版43－2)。 葺足が長くなると風で剝がされたり、腐食しやすくなる。木羽の幅は時々裂いて調整する。釘は竹釘(図版40－2)を用いる。真竹を削り、糠油で炒って脱水して使った。木羽を打ちつける地釘は1寸、後述する軒付に使う軒釘は1寸2分を使う。釘はまとめて口に含み、1本ずつ口から頭を先にして出し、打ちつけていく(図版43－3～5)。

NM2出土の木羽は完形品は1点で長さ30cm、幅はやや狭い傾向がある。すべて柾目である。材は、加藤氏・吉川氏らの肉眼による鑑定では、多くは杉で若干の檜が(図44－3)が含まれるようである。普通ひとつの屋根では同一材が使われるので、複数の建物の木羽が混ざっている可能性もある。竹釘が残存している例が2点ある。釘穴は直線ではなく、交互に2列並ぶ例が目につく(図44－1～3・8)。 定義如来五重塔の軒付板でも板が緩まないよう同じ方法が使われている(図版44－11)。図44－1、図版40－3は、一端の幅1寸の部分が腐食が進み、葺足を示している。木羽の破片の多くは一端の保存が良く、他端は腐食して失われているが、これは葺足側が腐食したためと考えられる。図44－6は表面に一見文字のような削り痕がある。製作者の名を墨書することはあるらしいが、これについては何とも言えない。

B．軒付板(軒積板)(図45－1・2・4・8、図版40－6・7)

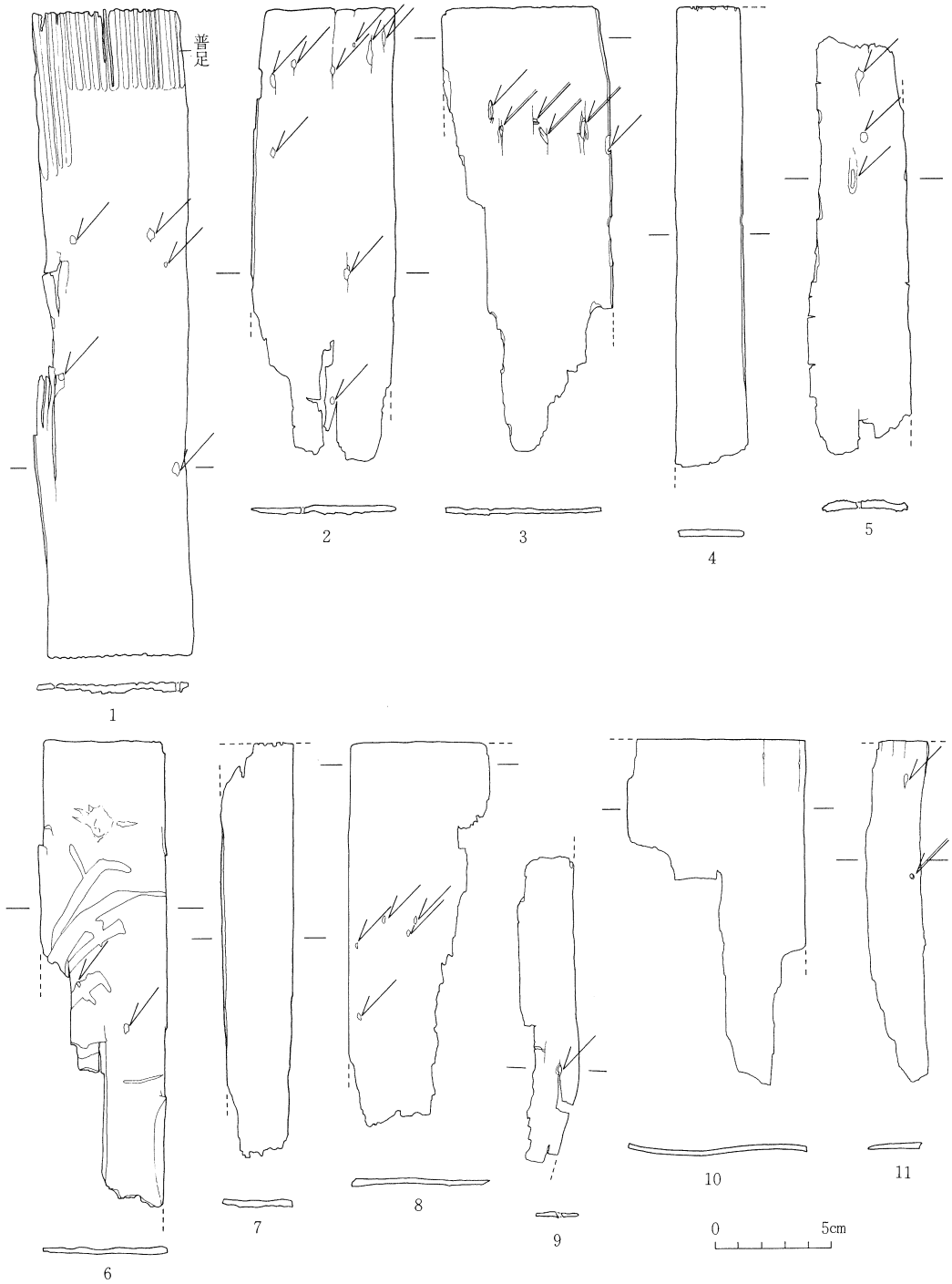
柿葺の屋根の軒先には、木羽が葺かれる前に軒付板(軒積板)が積まれる(図49、図版44)。ここにも竹釘が使われる。本調査区からも竹釘やその穴を残す軒付板の破片が出土している。図45－8は軒先側が腐食している。軒付裏板(図49)は側面を竹の合釘で繋ぐ(図48－3)が、図45－2は側面にその合釘の痕を示している。

C．檜皮(図45－5、図版41－1)

檜の外皮で屋根を葺く方法を檜皮葺きという(渋谷・長尾1959 pp 324～326、長尾 1982 pp168～179参照)出土した檜の皮6点中、全体の形が分かるのは1点だが、他もみな屋根材であったと思われる。図45－5は表側、矢印の位置に切れ目が入れられ、折り曲げるようになっている。(他に失敗した切れ目が1つ、裏側にはこれらに対応する折り目が三つある)。これは棟の部分に折り曲げて重ねられ、品軒を構成した棟折(図48－1、「折曲げ」)と考えられる。両端の腐食が著しいことは、中央部が図のように箱棟(後述)のあふり板で覆われていたか、あるいは棟瓦でおさえられていたことを示す。曲げた時の角度は約170度で、回廊のようなあまり大きくない、屋根の勾配の緩い建物だったと推定される。檜皮の出土数は少く、また史料から二の丸の建物の多くは柿葺と考えられるので、檜皮は棟の部分にだけ使われた可能性がある。

D．下げ束(図46－1、図版41－4)

箱棟の芯の下げ束である(図48－1)。 屋根の野地板の上に檜皮や木羽が葺き上がるまで、下げ束を差し上げて下げ止栓で止めておき、工事が終ってから下げて固定する(長尾 1982 P.



竹針の跡　bamboo nail hole
竹針が残っている surviving bamboo nail

図44　ＮＭ２出土の木製品(1)　木羽　全て石敷遺構出土　Mid. of 19c. (before 1882)
Fig. 44 Wooden materials from NM2 (1)
koba (shingles) made of cedar and cypress

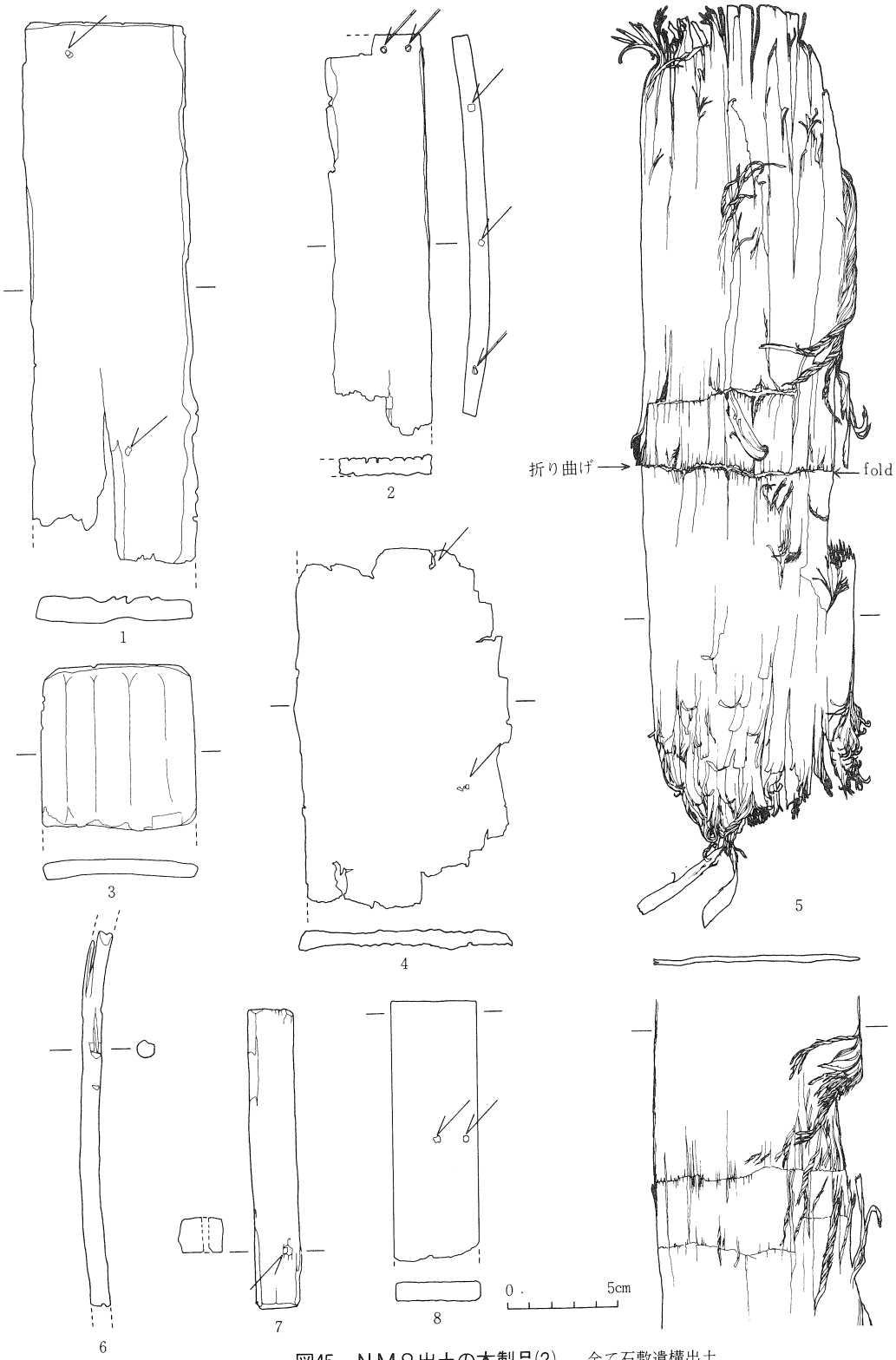


図45　ＮＭ２出土の木製品(2)　全て石敷遺構出土

Fig. 45 Wooden materials from NM2 (2)　Mid. of 19c. (before 1882)

1.2.4.8 野付板 *Nokitsuke ita*(shingles on eaves)　3. 桶の柄？ lateral fragment of pail ?

5. 檜皮棟折 ridge shingle (cypress bark), 6. 丸棒 unknown stick　7. 角材 square lumber

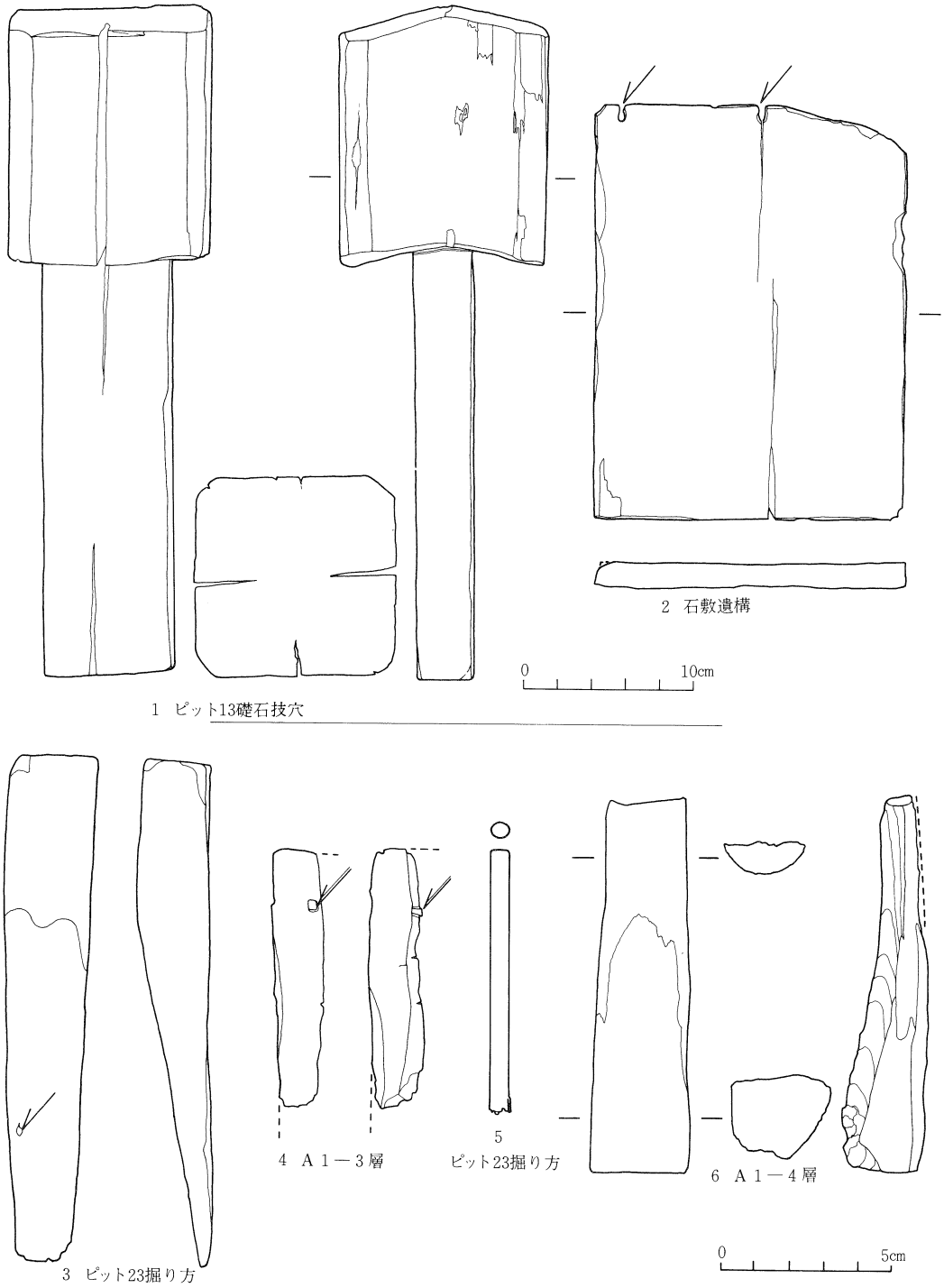


図46 NM2出土の木製品(3)

Fig. 46 Wooden materials from NM 2 (3) Mid. of 19c. (before 1882)

1.下げ束 ridge tenon 2.板 材 board 3.楔 wedge 4.野付板？ shingle on eave？ 5.丸棒 unknown stick 6.切片 chip

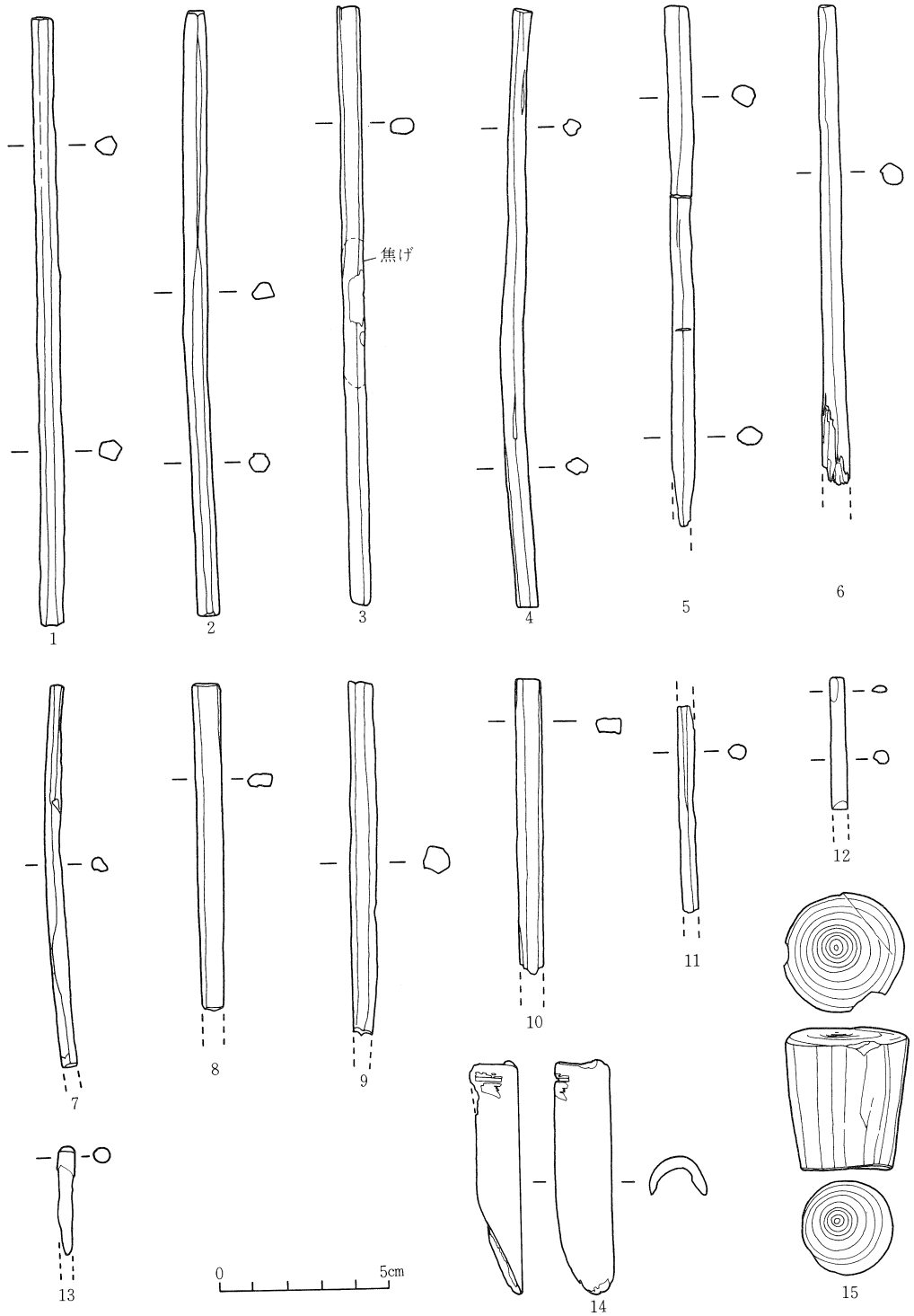


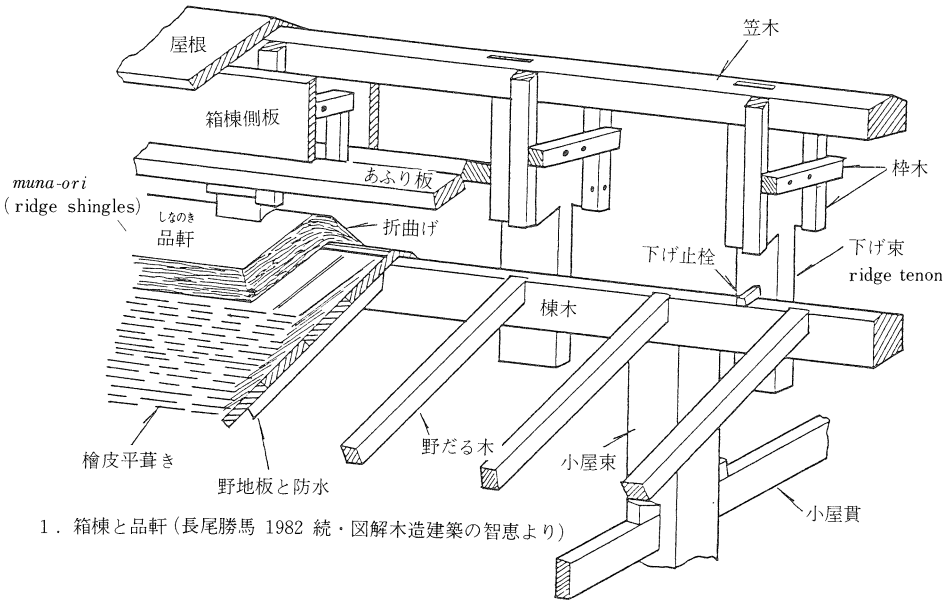
図47　ＮＭ２出土の木製品(4)　　全て石敷遺構出土(13のみピット９)

Fig. 47 Wooden materials from NM2 (4)　　Mid. of 19c. (before 1882)

No. 13 after 1882

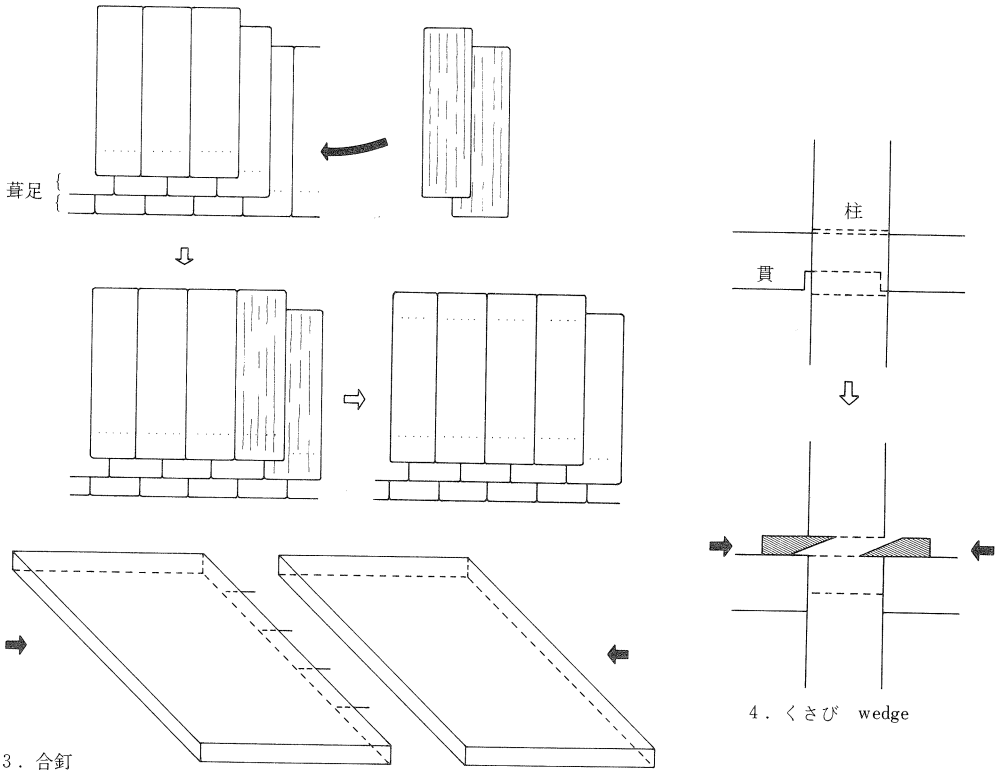
1-6、8、10 箸 chopsticks　7、11、12 箸(小) small chopsticks

13 塗箸 chopstick with laquer　14. 竹製品 bamboo implement　15. 栓 plug



1．箱棟と品軒（長尾勝馬 1982 続・図解木造建築の智恵より）

2．柿葺きの手順 process of shingling



3．合釘

4．くさび wedge

図48　ＮＭ２建築材解説図

Fig. 48 Illustrations of building constructions from NM2

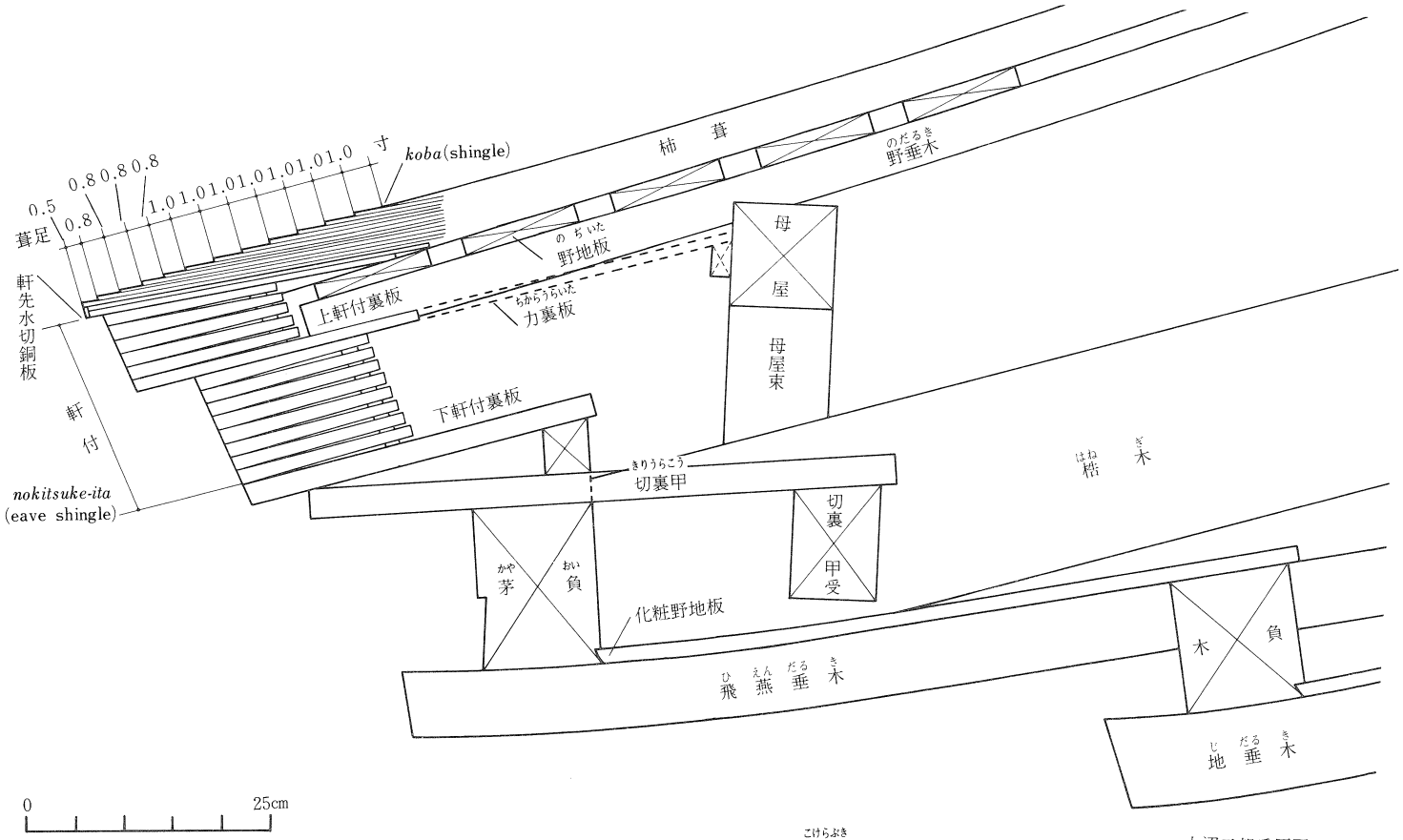


図49　定義如来五重塔屋根柿葺詳細図

Fig. 49 Detail example of shingled roof (Jôge-nyorai five-storied pagoda)

大沼二郎氏原図
by Jirô Ônuma

173、179参照)。下げ束の上にはさらに外装がなされる。本例は表裏に2個ずつ釘穴が有るので、何らかの外装がなされたと思われるが、頂部に棟の形が作り出され、槌で打ち込んだ痕があるので(加藤吉男氏によれば、柄の部分にも傷があり“かなり無理して突っ込んだ”痕が見える)、図48－1のように笠木を上に渡すのではなく、下げ束の間を横木でつなぐような構造だったと思われる。屋根上に出る部分の高さが低いので小さな建物である。箱棟は柿葺(こけら)き・檜皮(ひはだ)葺きの他、瓦葺きの屋根にも作られるが、本例は小さいこと、また先述した通り二の丸の建物の多くは柿葺きと見られるので、柿葺きの屋根に使われた可能性が高い。佐藤巧教授によれば、二の丸の建物の屋根の細部構造は史料ではあまり明らかでないが、新しい時期に箱棟が登場してくることは考えられるという。本例は杉材で、非常に保存が良く、明治15年の火災で火を受けた痕が全くないのが、やや不自然だが、火災後の礎石抜取り痕から出土しているので、やはり文化元年(1804)の二の丸全焼後に再建された建物の部材と考えた方が良いと思われる。

E．楔(くさび)　(図46－3、図版40－8)

長さから、柱貫(はしらぬき)に使った楔と思われる(図48－4)。釘穴があるが理由は分からない。クリ等の雑木製と見られる。

建築材から推定されるNM2付近の建物の屋根構造についてまとめると、まず、石敷遺構の廃棄時に近辺で柿葺きの屋根の破損・修理・解体等があったと思われる(複数の建物の可能性も有り)。上部に棟瓦が乗っていたか、木造の箱棟があったのか不明だが、檜皮を棟に積んだ小さな建物もあった。火災で焼失した近辺の建物も3・4層から出土する木羽の断片から柿葺きで、棟瓦、熨斗(のし)瓦の出土が多いことから棟を瓦で組んでいたと思われる。また、下げ束の出土からおそらく柿葺きに箱棟を組んだ小さな建物もあった。

② 箸　(図47－1～13、図版42－1～3)

削ったままの白木の箸で、石敷遺構から出土。断面は多角形で部分によって異なり、割箸ではない。完形品4点はいずれも6寸で短い。幅は6～8mmである。また、完形品が無いが、幅4mm程で一端が偏平になるものがある。一応、箸の一種とした(図・表中では「箸(小)」と表記)。塗箸1点(図47－13)は火災後のもの。

③ 竹製品(図47－14、図版41－11、42－4・6・9)

すべて石敷遺構の出土で、径30～50mm、長さ95～105mmの竹幹が4本、竹幹を裂いて紐状にしたものが1束、一端を斜めに切ったものが1点ある。いずれも性格は不明である。表中「笹茎」としたものは竹または笹の枝茎。

④ その他

表中「板または角材」としたものは、腐食した断片で板材か角材か不明なもの。「漆器椀」は

いずれも断片または復元不能な程に腐食が進んでいる。「桶の柄？」(図45—3 、図版41—2)はよく目のつまった柾目板を削って弯曲させている。角が落してあり桶の柄かもしれないが、薄いので何とも言えない。桶職人の佐藤和男氏(仙台市東七番丁 佐藤風呂店) に鑑定して頂いた。「丸棒」(図45—6、46—5、図版41—5・9)は表面を丸く仕上げられた棒状のものを一括。図46—5は箸の一種だろうか。「切片」は切り屑・削り屑と考えられるものである(図46—6、図版41—7・10)。ピット17とピット23の石敷掘り方から檜を含む手斧(ちょうな)痕のある切片が出ている。「燃料？」(図版42—5・8)は径30～150mm、多くは40～70mmの樹皮がついたままの炭火した木の幹で、一端ないし両端が切り落とされているものがあるので、燃料の可能性があると考えた。もともと「炭」だったかどうかは分からない。「断片」は全体の形状が不明なもの。

6) 金属製品

金属製品は和釘がほとんどである。内訳は表 25 に示す。東北大学金属材料研究所の志村宗昭助教授、池田圭介助教授、広川吉之助教授に材質について御教示頂いた。鉄は鍛造品、銅の多くは黄銅と思われるが、まとまった資料が少ないのと、整理日程の都合で分析は行わなかった。和釘の分析は現在進行中である。和釘・鎹(かすがい)については、木製品と共に大沼二郎氏、加藤吉男氏らに御教示を得た。

① 和　　釘 (図50—1～3、5～8、図版46—1・2)

日本古来の鍛造の釘である。仕上げの際、熱い表面に真綿をこすりつけて錆(さび)止めする。このため錆ず、断面四角形なので材が固定後回転しない効用がある。ほとんどは焼土層である3層に含まれるため、平面分布も3層の残存の良いA1・B1・C1区に多い。多くは錆て、表面に焼土がこびりついている。計測可能なものの長さを図52に示す。大形の釘は錆や破損で計測不能なものが多く、資料が不足している。完形のものも多くは先が潰れて丸くなっているので、使用前の長さは実測値より1～2mm長くなる。すると3cm、4.5cm、6cm、7.5cm、即ち1寸、1寸5分、2寸、2寸5分にやはり集中が見られるが、中間の長さの釘もまんべんなく存在している。長さ以外の属性では特に分類できない。

なお、内部が四角く空洞になった資料が見られるが、これは鍛造の際、表面に耐腐食性のマグネタイト層が形成され、内部のみ腐食したと考えられる。和釘の製作過程の復元例は、西岡他1981に紹介されている。屋根瓦にも四角い釘穴が多く見られ、ピット36からは実際に釘が遺存した例が出土していることから(図版39—3・4)、瓦に使用された釘も含まれているのだろう。また頭の丸い銅釘が2本ある(図50—6、7)。

② 洋　　釘 (図50—4)

和釘と異なり、断面が円く、機械造りで針金を一定の長さに切断して作られる。2本のみ出土。1・2層は重機で剝がしているので3層の和釘との層位的な出土量の対比はできない。朝

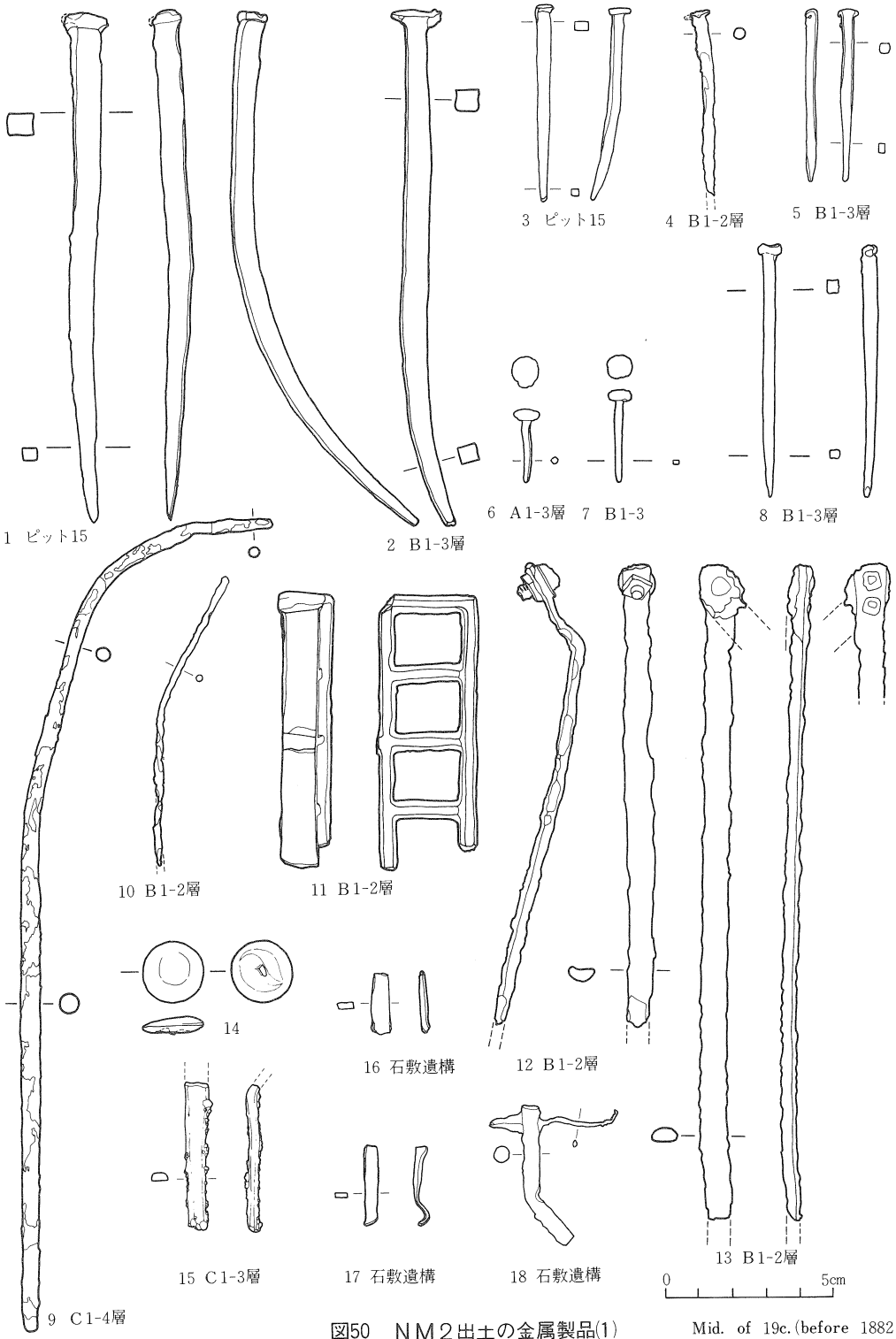


図50　NM2出土の金属製品(1)　　Mid. of 19c. (before 1882 Nos. 4、10-13 after 1882)

Fig. 50 Metal materials from NM2 (1)

1-3、5、8 和釘 Japanese nails(iron) 4 洋釘 Western-type nails (iron) 6、7 銅釘 Jap. nails (cop.) 9 針金 wire (cop.) 10 針金 wire (iron) 11-13 部品 fragments (iron) 14 ボタン button (cop.) 15 さじの柄？spoon.？(cop.) 16・17 断片 fragments (steel) 18 部品 fragment (cop.)

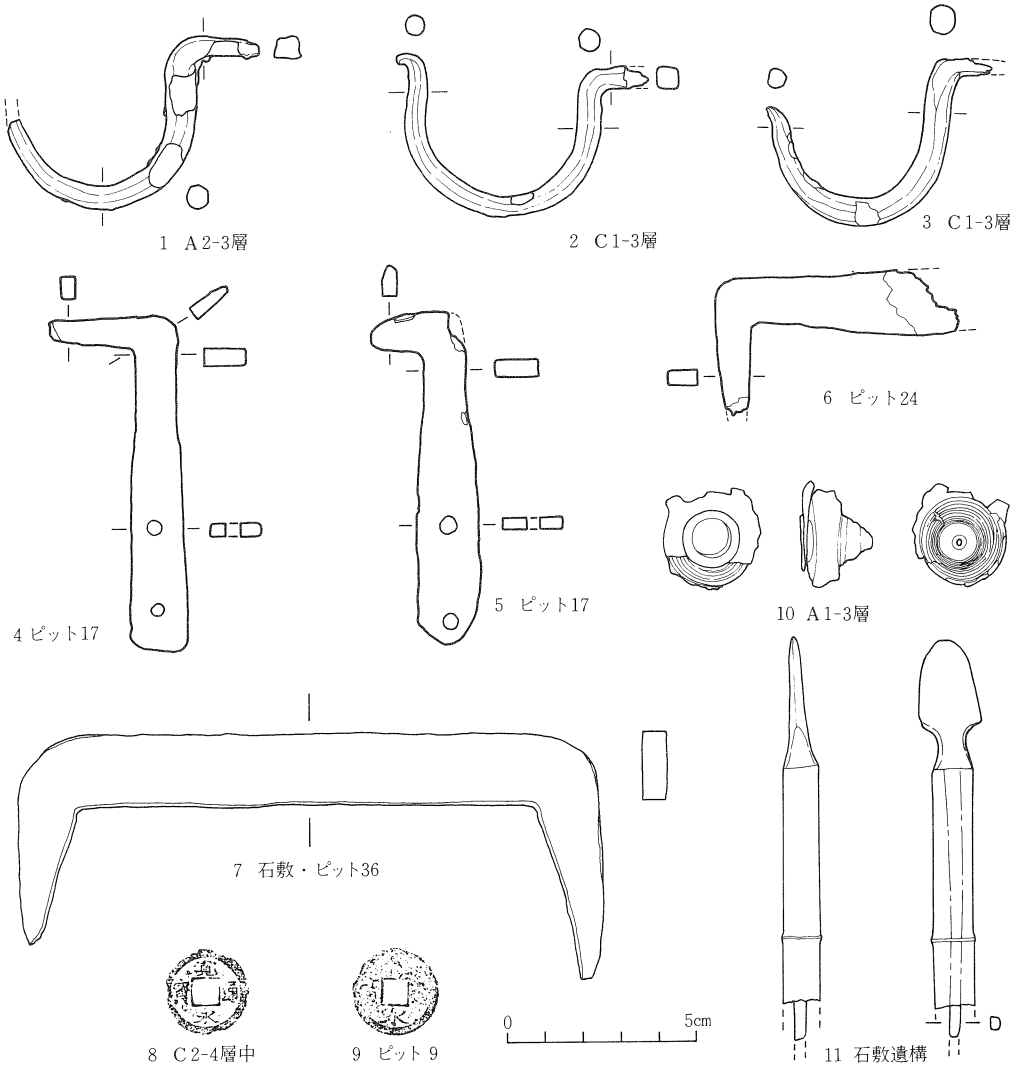


図51 NM2出土の金属製品(2)

Fig. 51 Metal materials from NM2 (2) Mid. of 19c. (before 1882)

1-3 釣 hooks (iron) 6、7 鎹 staples (iron) 10 ぜんまい spring (organic materal & cop.)
4、5 目鎹？ staples？ (iron) 8、9 寛永通宝 coins (cop.) 11 鏃 arrow head (iron & bamboo)

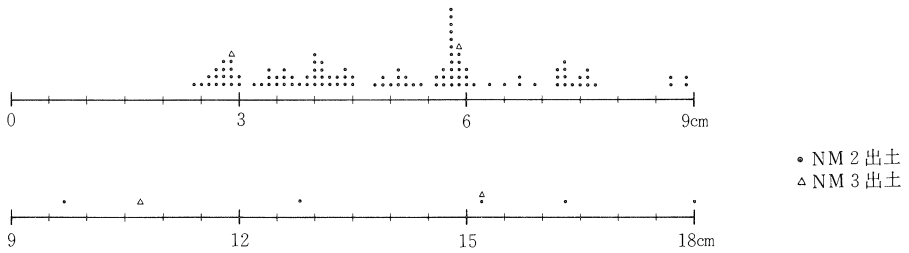


図52 NM2・3出土和釘長さグラフ

Fig. 52 Distribution of length of Japanese nails from NM2 and NM3

倉他(1970、P176)によれば、洋釘の使用は明治11年に福島県下にみられ、14年富岡工場で多量に使用され、地方の市中に出回るのは27年頃からとされる。

③ 鎹(かすがい) (図51－6、7、図版46－3)

図51－7は片足が短い。止められた材の大きさが異っていたためであろう。

④ 鏃(やじり) (図51－11)

小さな平根(ひらね)で出土時には茎が黒漆塗りの竹の篦(の)に差し込まれていた。伊達家旧蔵の江戸後期"箙(えびら)の矢"中の平根を比較のために図版47－2a・2bに示す。後者には糸による根巻があるが、本例には見られない。仙台市立博物館の嘉藤美代子氏に御教示頂いた。

⑤ ぜんまい？(図51－10、図版46－7)

ぜんまい状のものを銅の鋲に巻き、銅製のケースに止めたものが1点、明治15年の火災時のA1－3層から出土している。ぜんまいそのものは金属ではなく、黒ずんでいることから、有機物と思われる。鋲の先端には小さな穴があいているが目的は不明である。懐中時計のぜんまいにしてはシャフトが延びてない。

⑥ そ の 他

ボタン2点(図50－14)は表側と裏側を接合して作られ、中空になっている。

"鉤(かぎ)"(図51－1～3、図版46－6)としたものは座金を付けて固定していたらしい。また、赤色の顔料のようなものが付着した断片が2点見られるが、素地が鉄であるため、顔料が否かの判定は難しい。図50－12・13、図版47－3はボルト、ナット、ワッシャーのついた近代の部品である。

7) その他の遺物

ボタン、硯、ガラス、靴底等がある(表25)。動物遺存体については別項参照。

① ボ タ ン(図53－1～8、図版47－5・6)

型押しのボタンで11点出土。直径10.3～11.5mm(平均10.8)、厚さ2.4～3.5mm(平均3.0)。装飾の刻みがついたものが1点ある。松根努氏(仙台市一番町、まつねボタン)と稲垣服飾株式会社(大阪市)に調査頂いた。白い不透明のガラス製で、メリヤスの肌着またはももひきの前に使われたものと思われる。このタイプのボタンは戦前までは大阪の真田(さなだ)山近辺で作っていたらしい。ガラスのボタンは明治中期には製造されていたが手作りで、どの様なボタンを生産していたかは不明とのことである。他の遺物同様、明治15年の火災の前後の層から出土しており、東北鎮台(ちんだい)(陸軍第二師団の前身。明治4年または5年に国分町より二の丸跡に移る。明治6年仙台鎮台と改む)関係のものの可能性がある。

他に貝製と思われるボタンが2点ある(図53－5・6)。

② 土 玉(土 製 品)

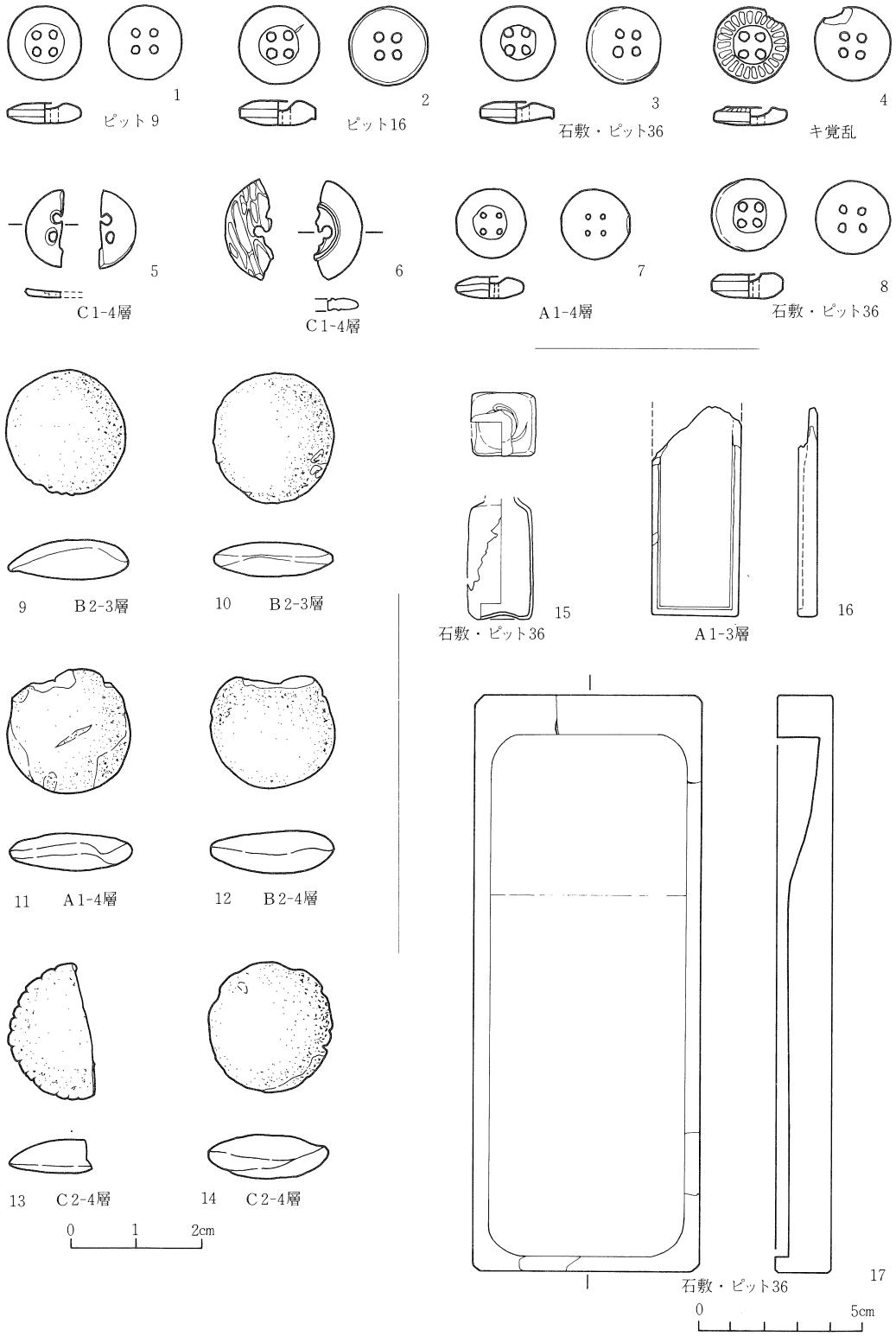
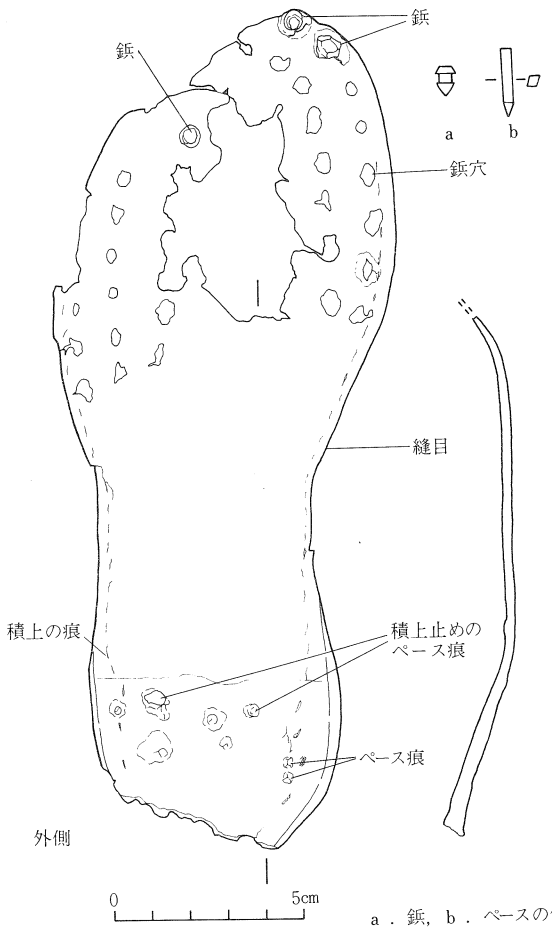


図53　NM2出土のその他の遺物　　Mid. of 19c. (before 1882)

Fig. 53 Various artifacts from NM2

1-8ボタン buttons (1-4、7、8 glass 5、6 shell)　15　ガラス小瓶 glass phial

9-14土玉 marbles ? (red earthenware)　16、17　硯 inkstones



a．鋲，b．ペースの例
examples of spike-pin(a)
and wooden nail(b)

図54　ＮＭ２出土の軍靴の底
Fig. 54 Sole of a modern military shoe (1871—1882)

数は破片数、但し板ガラス、熔融板ガラスはg数（分析サンプルは抜けている）

出土地点 / 種類	火災前					火災時～火災直後																							火災後							計
	B1—5層	B2—5層	石敷orピット36	石敷遺構	ピット25	A1—4層	B1—4層	C1—4層	D1—4層	A2—4層	B2—4層	C2—4層	4層	A1—3層	B1—3層	C1—3層	A2—3層	B2—3層	C2—3層	3層	ピット1	ピット2	ピット4	ピット5	ピット13抜き穴	ピット14抜き穴	ピット15抜き穴	ピット16抜き穴	ピット17抜き穴	ピット23抜き穴	ピット20	ピット24	ピット6	ピット8	ピット9	ピット10	ピット12	B1—2層	各区2層	各区1層	不明	
和釘(鉄)	3	3	12	1	4	23	34	37		7	1	9		95	80	176	105	1	13	28	15		2	7	6	2	56	3	3	1	4		2	1	2		2					738
かすがい(〃)			1											1?					1												1										4
鐵(〃)				1																																					1
鉤(〃)															1	2																									3
部品(〃)																												2									3				5
丸釘(〃)																1																		1							2
鋲(ペース)(〃)					1																						1														2
断片(〃)							1	2								2																	1						2		8
ボタン(銅)																																							1		1
煙管(〃)																																							1		1
釘(〃)					1									1																											2
さじの柄?(〃)																1																									1
部品(〃)				1																																					1
針金(〃)								1																																	1
ぜんまい(〃)														1																											1
断片(〃)				1																			1																		2
断片(スチール)				2																																					2
断片(鐵,ススリ)				1																																					1
寛永通宝												1																													1
ボタン			2			3	1					1		1		1	2		1									2						1			1			1	17
貝製ボタン								1								1																									2
土玉						1					1	2						2																							6
硯				2								2		1					1																						6
ガラス容器			1						1							2				1																				2	7
ガラス容器(黒)												1				1				3	4	12					1						1					2		4	29
板ガラス						16				5	2			19		2						1						9								1		2		13	70
熔融板ガラス			45			25		125		89			245	124	5		914			313					497	145				49		20	3		5	3	14	85	44	5	103	2858
靴底																													1												1
布片							1																																		1

表25　ＮＭ２出土の金属製品他の分布
Table 25 Distribution of metal and other artifacts at NM2

粘土を指で押えておはじきのような形に作っている。何に使われたものか分からない。周縁に刻みのついたものが1点ある（図53―9～14、図版48―4）。

③　ガラス容器

ガラスの小瓶が1点(図53―15、図版48―2)と、瓶と思われる透明ガラス及び黒い色ガラスの破片がある。朝倉他(1981)によれば、日本の近代ガラス業は明治9年工部省の品川硝子製作所設立以後である。

④　板ガラス・熔融板ガラス（図版48―5・6）

熔融し塊状になった板ガラスが多数見つかっている。これについては別項(第Ⅷ章）に詳し

熔融してない板ガラスは種類が違うようである。 出土状況から見て明治15年の火災で焼けた仙台鎮台の建物にはガラスが使われていたらしい。明治5年頃撮影の大阪鎮台の士官たちの背後にはガラスが映っている（朝日新聞社編1985、P.24)。

⑤　靴　　底（図54、図版49―1）

火災後の柱の技き穴から出土している。吉田行雄氏(仙台市一番町、ロダン・シューズ）に鑑定して頂いた。鋲を多数打ち込んだ痕があることから、軍靴(ぐんか)の短靴(たんか)である。仙台市歴史民俗資料館蔵の軍靴(年代は不明)を参考品として図版49に示す。軍靴には長靴(ちょうか)と短靴(たんか)があり、短靴は鋲が打たれ、最下級の兵士のものである。形は明治から第二次大戦までほとんど変わらなかった。本例は牛皮製で焼けて縮んでいる。明治に軍靴の修理をされた方々の気憶では、当時仙台には靴を縫う機械が無かったこと、縫い目が一列であることから手縫いと思われる（機械では普通二列に縫う。手縫いの方が丈夫な為と思われる)。踵(かかと)は踵の芯や表皮(おもてがわ)が重なり厚くなるので、普通は縫わずに積上(つみあ)げを重ねてペースと呼ばれる木の釘で止める。内側に突き出たペースの先はペース削りという鉄のヤスリで削る。鉄の釘を使わないのは汗でさびやすいためである。積上げの上に化粧皮と化粧―短靴の場合は馬蹄形等の金具―が付けられる。本例も踵の中央に積上げの痕跡とそれを止めた二つのペース穴がある。その後方に散在する三つの穴はなんのためかよくわからない。ふまつ芯(土踏まずに入れる芯)でも止めたのであろうか。踵の縁には粗い縫い目に平行して、この部分を止めたペース痕がある。歴史民俗資料館の例は踵にすべて頭の無い鉄の釘が使われており、靴の前半分には半貼(はんぱり)と呼ばれる皮が貼られている。

朝倉他(1981)によれば、明治2年の海外視察後、外相陸奥宗光が皮革が軍事上重要であることを痛感し、明治3年御用商人西村勝三が東京の築地入舟町に伊勢勝製靴工場を設立したのが西洋靴製造のはじめとされる。

（山田しょう）

8）瓦

出土量は破片数にして602点あるが、小片が多く図示できるものは多くない。時期別に見ると明治15年の火災前(5～6層)がもっとも多く、火災時とその直後(3・4層)がそれに次ぐ。火災

前ではＡ１・Ａ2区に出土数が集中しており、平瓦が多い。火災時とその直後ではＢ1区・Ｃ１区及びＢ１区のピット15に出土数が集中しており、棟瓦・熨斗瓦の出土が多い。表25に遺構変遷の時期ごとに破片出土数を示す。平瓦１点、棟瓦１点、熨斗瓦３点、種類不明１点、桟瓦片１点の計７点について図示した（図55、56）。

① 平　　瓦　（図55－１、図版38－１）

各時期の各層・遺構から出土しているが、完形のものはなく、縦横の寸法のわかるものも図に示した１点のみである。調整技法の時期的な変化はない。すなわち凸面は粗いヘラケズリ、粗いヨコナデでザラザラに仕上げ、凹面はヨコナデ、ヘラナデ、ヘラミガキで平滑に仕上げている。図55－１は凸面は粗いヨコナデ、凹面はヘラナデで仕上げている。火災前Ⅱ期に属する。

② 棟　　瓦（図55－２、図版38－５）

棟瓦とは各種の棟の最上段におく瓦の総称である。破片ばかりで完形品はなく、縦横の寸法のわかるものもない。図55－２は角桟をもつものである。この瓦も含め、火災時の瓦には焼けを受けて変色したものが多い。調整は凸はヨコナデ・ヘラナデにより平滑に仕上げられ、凹面は桟の部分がヨコナデにより平滑に仕上げられ、その他の部分は粗いヘラケズリによりザラザラに仕上げられている。表25には棟瓦の項目があるが、この中には棟積みに用いる熨斗瓦片が含まれている可能性がある。すなわち両者は棟にのせられるという点では同じで、桟がついている点を除けば調整等には差がないため、小破片では両者を区別することは難しいからである。

③ 熨　斗　瓦（図56－1～3、図版38－2・3、39）

②の棟瓦と異なり、両面ともヘラナデにより平滑に仕上げられ反りのないものをとくに②と区別して熨斗瓦と呼んでおく。図56－１は２隅に釘穴がある。図56－３は不明文字と盃の絵が線刻されている。図56－２は辺に櫛目が切られ、側面に「カ」の印が押されている。水切

時期	出土地点	平瓦	丸瓦	棟瓦	熨斗瓦	不明	計
火災前Ⅰ	ピット36埋土	26	9	10		45	90
〃	1号溝	1	2			1	4
火災前Ⅰ計		27	11	10		46	94
火災前Ⅱ	5層Ａ１区	4				18	22
〃	Ａ２区	20				33	53
〃	Ｂ１区					1	1
〃	Ｂ２区					1	1
〃	Ｃ１区					1	1
〃	ピット13礎石抜り方	3	1			3	7
〃	ピット14　〃	4	1			5	10
〃	ピット17　〃	3				6	9
〃	ピット23　〃	15				12	27
〃	ピット33埋土		1				1
〃	石敷遺構	10	2	7		52	71
火災前Ⅱ計		59	5	7		132	203
時期	出土地点	平瓦	丸瓦	棟瓦	熨斗瓦	不明	計
火災時・直後	ピット23 礎石抜き取り	4				2	6
〃	ピット26埋土			1			1
〃	火災時・直後計	24		20	39	79	162
火災後	2層	15				3	18
〃	ピット6 礎石抜き取り	3					3
〃	ピット7　〃	3					3
〃	ピット8　〃					1	1
〃	ピット9　〃					2	2
〃	ピット10　〃	3				3	6
〃	ピット12　〃	4				1	5
〃	火災後計	28				10	38
不明	カクラン	23	2		2	30	57
〃	不明	9	1		2	36	48
	合計	170	19	37	43	333	602
火災時・直後	4層Ａ１区	1		4		16	21
〃	〃 Ａ２区			1		1	2
〃	〃 Ｂ１区			1		4	5
〃	3層Ａ１区	3		2	1	16	22
〃	〃 Ａ２区					1	1
〃	〃 Ｂ１区	1		2	7	4	14
〃	〃 Ｃ１区	1		4	11	9	25
〃	Ｃ２区	1				1	2
〃	地区不明			1	5	18	24
〃	ピット1埋土	1					1
〃	ピット2　〃	3					3
〃	ピット3　〃	1					1
〃	ピット13礎石抜き取り	1					1
〃	ピット14　〃	3					3
〃	ピット15　〃	3		4	15	7	29
〃	ピット17　〃	1					1

表26　ＮＭ２出土の瓦の分布

Table 26 Distribution of ceramic roof tiles at NM2

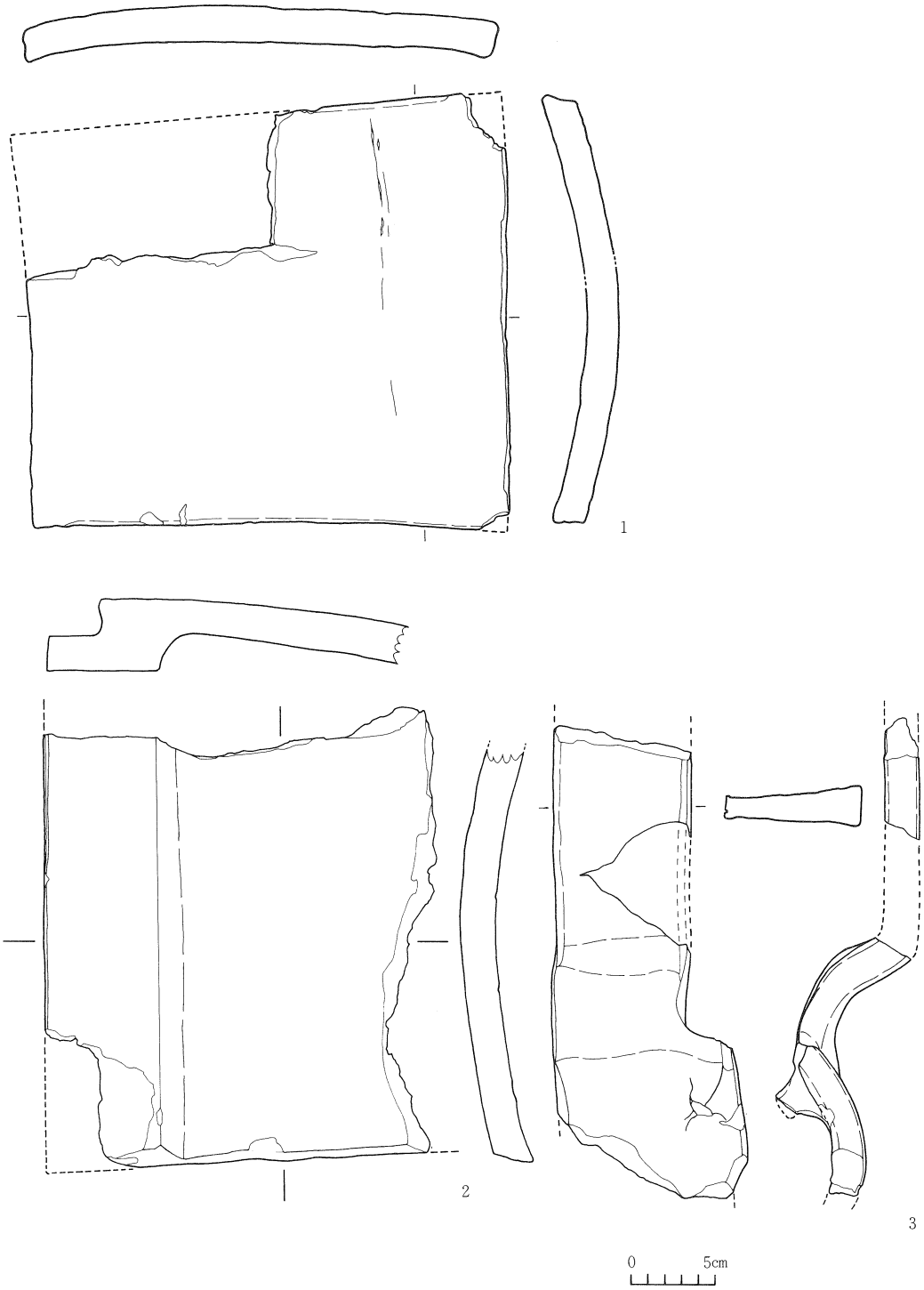


図55　ＮＭ２出土の瓦(1)

Fig. 55 Ceramic roof tiles from NM2 (1)

19c. (before 1882)

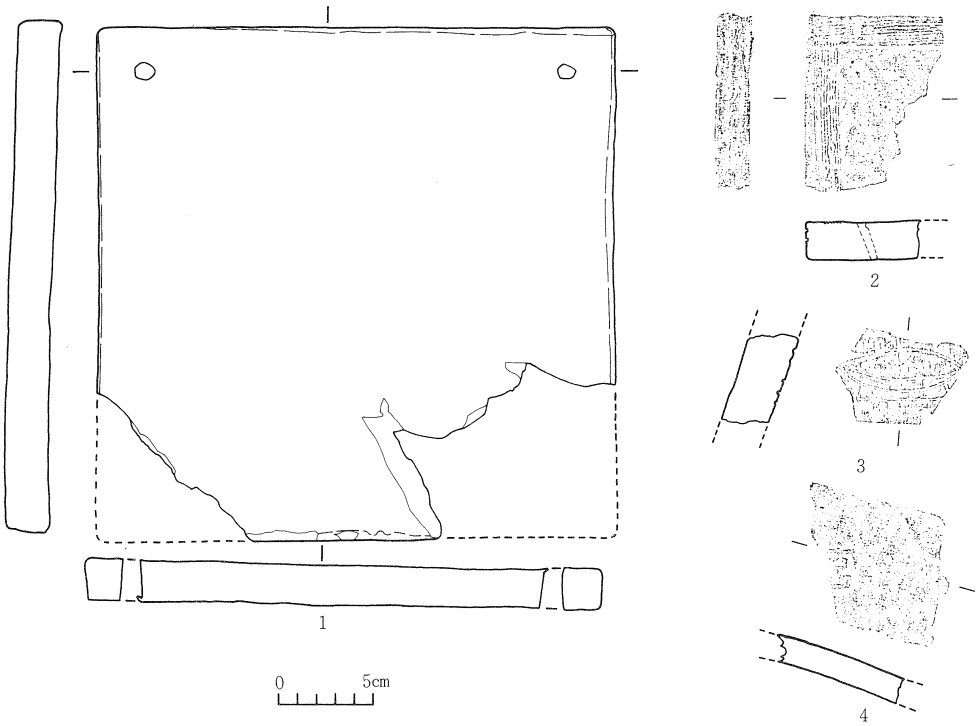


図56　ＮＭ２出土の瓦(2)
Fig. 56 Ceramic roof tiles from NM2 (2)

19c. (before 1882)
No. 4 more recent

時期	図	出土地点	種類	法量(単位mm) 長さ	幅	厚	色調 表面	割れ口	胎土	焼成	備考	図版
火災前2	55－1	A1－5層上面	平瓦	280	255	18	N 5/1 灰色	N 5/1 灰色	小石混じりの粗い胎土	良好	凸面はヨコナデ 凹面はヨコナデ調整により仕上げ	38-1
火災時・直後	55－2	ピット26埋土	棟瓦	(229)	(252)	22	N7/1 7.5YR7/6 灰白色～橙色	10Y 5/1 灰色	〃	〃		38-5
〃	56－1	3層	熨斗瓦	271	272	23			〃	〃	焼けにより全体に変色	39-1
〃	3	ピット15	〃				5YR 5/2 灰褐色	7.5YR6/6 橙色	〃	〃	不明文字と菱の絵を線刻 焼けにより変色	38-2
〃	2	C1－3層	〃				N 7/1 灰白色	N 7/1 灰白色	〃	不良	「力」の文字(印鑑様のものを押したもの) 縁、辺に櫛目が切られる	38-3
〃	55－3	A1－4層中		(279)	110、80	11～23	5YR7/6 N2/1 橙色～黒色	7.5YR5/2 灰褐色	〃	〃	器種不明、焼けにより変色	38-4
火災後	56－4	1層カクラン	桟瓦片				N3/1 7.5Y5/1 暗灰色～灰色	7.5Y 6/1 灰色	径1mmまでの砂粒を含む	〃	「宮」の文字(型によるレリーフ)あり	

ＮＭ2　瓦の属性表

りの溝や葺土の痕が見られるものもある(図版39)。棟瓦と異なる特徴をもつことから本当に熨斗瓦として用いられたものか若干疑問がある。海鼠塀に貼ったものと考えることもできる。しかし焼失時とその直後の瓦の破片の出土状況を見ると、この種の瓦と棟瓦の出土状況は非常に類似しており、棟積みに用いた熨斗瓦と考えるのが妥当であろう。

④　種類不明の瓦（図55－3、図版38－4）

表面はヘラナデで平滑に仕上げられている。

⑤　桟（さん）　瓦（が）（図56－4）

1層(盛土)中から出土したものである。「宮」の型によるレリーフがある。ごく新しい時期のものと考えられる。NM3にも同様のものが出土している(図70)。

ま　と　め

時期別の破片の出土数を見ると、明治15年の火災以前と火災時のものとの間には若干違いの

あることがわかる。すなわち、火災以前は平瓦が中心であり、丸瓦も若干出土している。これに対し火災時では棟瓦・熨斗瓦中心であり、丸瓦がまったく出土していない。このことは建物の違いによる可能性もある。木製品の出土状況などと考え併せれば、明治15年に焼け落ちた建物は木羽葺の上に瓦の棟を組んだものであり、火災以前には本瓦葺きの建物が近くにあったと推定できよう。

（前沢聡史）

9）墨書陶器

① 右　翼（図33－6、図版32－7）

三分隊

（百？）八名

A．時　期

石敷遺構の埋土中から発見された。土瓶の蓋の裏に書かれていたものである。

a、石敷遺構は、本来の機能終了後、ごみ捨て場として使われ、満杯になった時点で、粘土で覆われ、その後に明治15年の火災を受けている。したがって、この中から出土した土瓶は、これ以前のものと考えられる。

b．遺構が浅く長期間のごみ捨て場としては使用できない。

c．遺物中に、器形・文様・産地の同一のものが、複数存在しており、使用－廃棄に至る過程が短かかったと推測される。

d．この蓋は、相馬大堀焼の土瓶に伴うもので幕末から明治初期の時期と推定される。

e．共伴した遺物中、鮫肌の土瓶は、明治7年以降に製作が開始されたと考えられている（高橋、1977）

以上から、土瓶の蓋に墨書が書かれた年代は、幕末から明治初期の間と推定される。

B．釈　文

右翼三分隊（百か？）八名

翼は翼であろう（注1）。内容は、軍の編成に関するものであるという仮定に基づいて考察を加えたい。

C．考　察

軍事編制に関するものとすると、幕末の仙台藩と、明治初年の明治政府の兵制が問題となってくる。

仙台藩の兵制については、まとまった記述は見られず、各記録に散見するだけである（注1）。仙台藩においては、文久3年（1863年）と慶応3年（1867年）に、兵制改革を行っている。その結果、戊辰戦争時の兵制における呼称は、大隊・小隊などとなっていた。『仙台叢書』第12巻『戊辰始末』には、小隊・大隊の記事が甚だ多出する。例えば133頁には「仙臺第三小隊・隊長

……」「中軍　二小隊　従軍　三小隊」等の記載がある。しかし具体的な一小隊の数の内訳や分隊の呼称は見られない。一小隊の内訳について、より詳しく記載のあるものとしては、渋川助太夫の日新録(大郷町史史料集第一巻)があげられる。その中の記載をまとめると、小隊二隊、大番組64人（したがって一小隊は32人）大番組の与頭(くみ)壱人、中隊長、小隊指揮役壱人、半隊指揮役二人、左右嚮導四人、鼓手役四人となっている。分隊についての記載はここには見られない(日新録P.84)。

明治政府初期の兵制については、松下芳男の『明治軍政史論』に詳しい。明治3年(1870年)に、東北鎮台が仙台に置かれ、その常備兵は、旧藩の常備兵をこれにあてている。また、同年城郭、武器の管理が兵部省の管轄下におかれることになった。また、同年11月には、鎮台常備兵の軍令が、藩知事から直接天皇に移されている。明治7年には、徴兵制がしかれたが、仙台鎮台では、歩兵二大隊、砲工兵各一中隊の欠員がある。明治8年(1875年)以降の陸軍の階級機構には、分隊という呼称は見られない。

一般的に、明治以降の兵制の中に、右翌(右翼)などの名称は存在せず、また分隊の呼称も公式的な兵制の中にはない(注2)。ただし、松下の記載の中に、明治3年(1871年)の常備編隊規則の中の砲兵隊の編制に「砲2門を似て1分隊とす。3分隊をもって1隊とす。別に砲6門」とある（松下P 1978、P.62)。

D．結　論

以上の事実から考察すると、右翌、分隊という名称が、いつの時代の兵制に基づくものなのか、確実には立証できない。しかし、上述のように明治政府の下における近代的な兵制の中に砲兵隊とはいえ分隊の名称が出現することは重要な事実である。また前述の事実や、二の丸の中心部である小広間裏がごみ捨て場として使われていたということ、陶磁器に粗末なものが多いなどという状況をふまえると、鎮台兵の使用した物品という可能性が高くなる。

②　月　日

蚊遣?(図40－3)の内面に書かれているので、蚊遣が機能を失い破片となった後に、字が書かれたと判断される。「月日」の字は3～4文字書かれており、同一の筆跡であるので、同一人物が書いたと判断される(注3)。

③　主　立

「月日」と同じ蚊遣の内面に書かれているが、筆使いは「月日」と異なる。なお、「主立」とは「重要な人物……」の意であり、「月日」とは連続して意味をなすものでもない。

④　勝（?）

土瓶(図33－7、図版32－8)の蓋の内面に書かれており、「勝」とも読めようか。(梶原、佐川)

注1．仙台藩の兵制については東北学院大学難波信雄助教授に御教示いただいた。
注2．東北大学文学部国史学研究室青山忠正助手の御教示による。
注3．墨書陶器の検討に当たっては、東北歴史資料館千葉景一氏に御教示を賜った。

4．二の丸第３次発掘調査（ＮＭ３）

(1) 調査方法と経過 (図10)

ＮＭ２が保存されることとなったため、新たに５×10mの発掘区を設定した。極力遺構の破壊を防ぐため、まず１から11までの１×１mの試掘抗を設けた。二の丸遺構の存在の証拠となる焼土層が確認された地点を避けた結果、発掘区南方の文系厚生施設建物南西部が選ばれた。南北５m、東西10mの範囲で、バックホーにより表土盛土層を除去した際、南端部で石垣と考えられる石列が発見された。そのためその部分を避けて、さらに発掘区を北側に１m拡張し、６×10mの大きさで調査を進めることとした。グリッドは、東から３・４・５・６、南からＰ・Ｏ・Ｍに区分した (図10)。 グリッドの東北部は、米軍関係と考えられているコンクリート製の土台によって攪乱を受けている。

(2) 層　　序 (図57)

１～７層はいずれも極めて新しい盛土で、層を切ってコンクリートの構築物が存在する事から、米軍もしくは旧日本軍による盛土と考えられる。

８～12層は、グライ化した層で、金属片・ガラス・刻印の入った桟瓦等を含む。従って二の丸焼失後の整地層であり、この層より下層が、江戸時代に層すると判断される。13層以下は、自然堆積による地山と考えられ、江戸期の遺構は全てこの面で確認されている。この地点では、ＮＭ２で確認された江戸期の盛土層（５層・６層・７層）は確認されず、遺構の前後関係を層位的に理解することはできなかった。

(3) 遺　　構

はじめに

第３次調査の遺構は主に３層より検出され、①柱穴痕を持つピット、②池に関する遺構群、③石垣、④柱穴痕を持たないピットと溝、⑤その他の遺構に分類することができる。それぞれの切り合いによって前後関係を決定することができるものもあるが、ほとんどの遺構が13層で確認されているため、層位的には明らかな時期差を見出すことはできない (図59・60)。切りあい関係については表27に示した。

１）柱穴痕を持つピット

(図58・59・61)

掘立柱建物１に属するものとそれ以外に分けることができる。発掘区北西部の

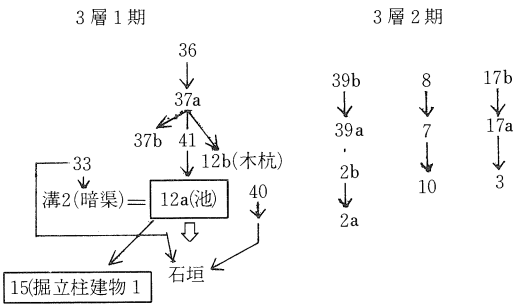


表27　ＮＭ３遺構新旧関係
Table 27　Feature changes at NM3 listed chronologically

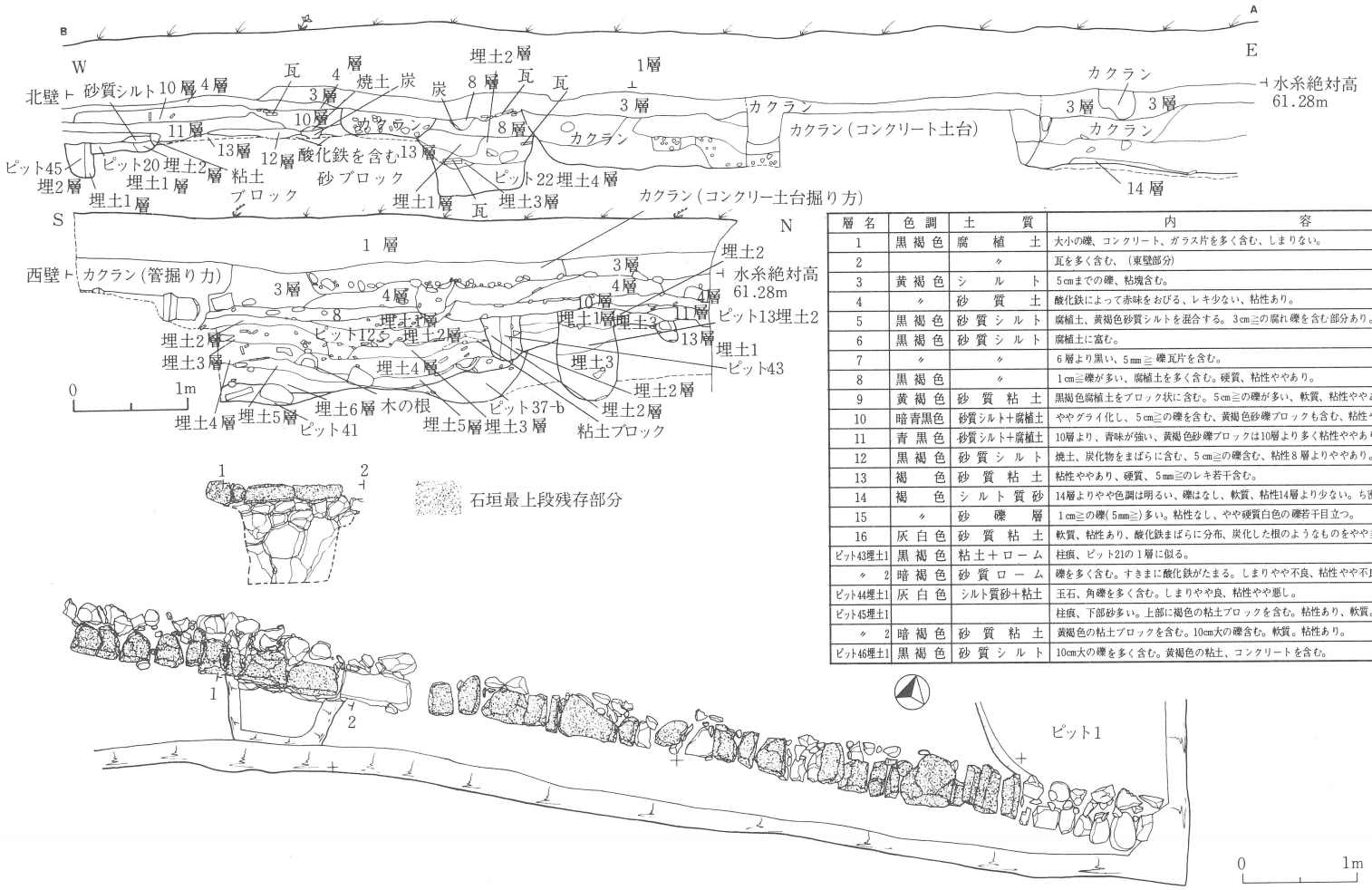
	83 11/29	11/30	12/1	12/2	12/3	12/5	12/6	12/7	12/8	12/9	12/10	12/12	12/13	12/14	12/15	12/16	12/19
①発掘にともなう諸作業	・重機による排土	・壁落とし					・ローリングタワーの移動										
②発掘区全体に関する諸作業			・グリッド設定														
③基本層の掘り下げ		・グライ層検出		・清掃と遺構の精査	・N-6カンニングトレンチ設定				・N6、O-6の掘り下げ O-3、4の掘り下げ	・O-3,4)掘 N5,6)り O-6)下げ							
④基本層についての実測																	
⑤遺構の掘り下げ	・石垣の検出		・石垣の上面精査		・pit 3 4	・pit 7 ・pit 5	・pit 2 ・1号溝	・pit 7 8 ・pit 11	・pit 9 10	・pit12~21確認 ・2号溝確認 ・pit 1 ・pit 2	・pit12 ・pit 1 ・pit22,23確認 ・pit 2組分	・2号溝 ・pit 2 ・pit 3	・pit12掘り下げ		・pit24、25 ・pit17,a,b ・2号溝玉石の除去 ・石敷1の範囲確認 ・pit26,27確認	・pit12砂層まで掘り下げ ・pit27 ・pit31 ・pit28	・pit22 ・pit33確認
⑥遺構の実測						・pit 3	・pit 2	・O-5、6集石 ・1号構	・pit 7 8 9 10		・pit14,15 16,18,19 の掘立柱	・pit12覆土 ・玉石の実測 ・石敷1	・2号溝	・pit24	・pit 1		・pit25 32 28
⑦見学者			・須藤 助教授 ・渡辺先生 ・桑　月 ・阿　部 ・山田(晃) ・藤　田 ・市　村			・桑　月 ・　林 ・山田しょう ・松　山 ・森　嶋 ・市　村 ・長　田		・会　田 ・須　田 ・山田しょう	・芹沢先生 ・会　田 ・梁　瀬 ・宮城県職員					・山田(晃) ・高　橋 ・山田しょう ・森　嶋		・仙台市職員 ・仙台市博物館職員 ・小　井　川 ・阿　子　島 ・山田しょう	

NM3拡張区

12/20	12/21	12/22	12/23	12/24	12/26	12/27	12/28	12/29	12/30	12/31	84 1/7	1/9	1/26	1/27	1/28
									・ローリングタワー除去				・NM3拡張区の重機による排土	・拡張区の清掃	
							・北壁セクション	・セクション ・発掘区清掃	・全景写真 ・セクション写真 ・東西壁セクション		・東西セクション註記 ・遺物抜取り	・全体測量			・全体測量 ・全体写真
							・ベルト除去							・地山層での遺構の確認	
					・N-3付近平面図										
・pit 33	・pit12砂層掘る ・pit36、37確認 ・3号溝確認 ・pit 28確認 ・pit28 ・pit 33	pit36、37	・pit39 ・pit38	・pit 39確認	・pit39 ・pit13、b	・pit20 ・pit37、b ・pit42									・pit 1、2の掘り下げ
・pit12 ・pit22 ・pit27 ・pit33 ・pit17	・pit 33	・pit 36	・pit 37 ・pit 38 ・3号溝 ・pit 28 ・pit40 ・pit13	・石垣実測	・pit39	・pit20					・pit 12 南壁セクション				・pit 1、2
	・山田しょう							・木村有香先生							

表28　NM3　調査経過

Table 28　A work record of daily excavations at NM3



層名	色調	土質	内容
1	黒褐色	腐植土	大小の礫、コンクリート、ガラス片を多く含む、しまりない。
2		〃	瓦を多く含む、（東壁部分）
3	黄褐色	シルト	5cmまでの礫、粘塊含む。
4	〃	砂質土	酸化鉄によって赤味をおびる、レキ少ない、粘性あり。
5	黒褐色	砂質シルト	腐植土、黄褐色砂質シルトを混合する。3cm≧の腐れ礫を含む部分あり。
6	黒褐色	砂質シルト	腐植土に富む。
7	〃	〃	6層より黒い、5mm≧礫瓦片を含む。
8	黒褐色	〃	1cm≧礫が多い、腐植土を多く含む。硬質、粘性ややあり。
9	黄褐色	砂質粘土	黒褐色腐植土をブロック状に含む。5cm≧の礫が多い、軟質、粘性ややあり。
10	暗青黒色	砂質シルト＋腐植土	ややグライ化し、5cm≧の礫を含む、黄褐色砂礫ブロックも含む、粘性ややあり。
11	青黒色	砂質シルト＋腐植土	10層より、青味が強い、黄褐色砂礫ブロックは10層より多く粘性ややあり。
12	黒褐色	砂質シルト	焼土、炭化物をまばらに含む、5cm≧の礫含む、粘性8層よりややあり。
13	褐色	砂質粘土	粘性ややあり、硬質、5mm≧のレキ若干含む。
14	褐色	シルト質砂	14層よりやや色調は明るい、礫はなし、軟質、粘性14層より少ない。ち密な砂層
15	〃	砂礫層	1cm≧の礫（5mm≧）多い。粘性なし、やや硬質白色の礫若干目立つ。
16	灰白色	砂質粘土	軟質、粘性あり、酸化鉄まばらに分布、炭化した根のようなものをやや多く含む。
ピット43埋土1	黒褐色	粘土＋ローム	柱痕、ピット21の1層に似る。
〃 2	暗褐色	砂質ローム	礫を多く含む。すきまに酸化鉄がたまる。しまりやや不良、粘性やや不良。
ピット44埋土1	灰白色	シルト質砂＋粘土	玉石、角礫を多く含む。しまりやや良、粘性やや悪し。
ピット45埋土1			柱痕、下部砂多い。上部に褐色の粘土ブロックを含む。粘性あり、軟質。
〃 2	暗褐色	砂質粘土	黄褐色の粘土ブロックを含む。10cm大の礫含む。軟質。粘性あり。
ピット46埋土1	黒褐色	砂質シルト	10cm大の礫を多く含む。黄褐色の粘土、コンクリートを含む。

図57　ＮＭ３発掘区土層断面図・石垣平面図及び断面図
Fig. 57 Cross sections of excavation and a stonewall at NM3

ピット14・15・16・18・19・21・43・45は柱の掘り方の径が約30cm、柱穴痕の径が約12cm、深さが約20～27cm、柱間が東西方向で0.9m（約3尺）、南北方向で1.91m（約6尺3寸の一間）の掘立柱建物跡と考えられる（図58）。ただし43・45は西壁・北壁セクションで確認され、その位置と特徴からこの掘立柱建物1に属するものと考える。建物の長軸方向は後述の石垣に平行する（図59－2）。また12（池跡）と15の切り合いからこの建物が12より新しいことがわかる。さらに21の柱穴痕からは化粧瓶と思われる破片が出土しているが、それだけでは必ずしもこの掘立柱建物の構築された年代を示すとは限らない。従って二の丸に伴う遺構の可能性も否定できない。

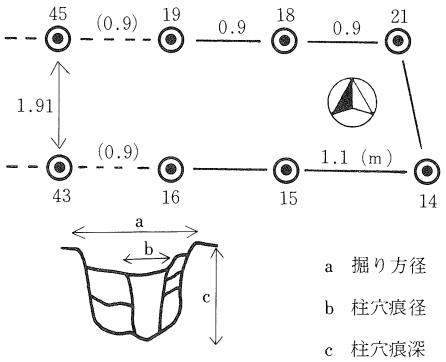


図58 NM3 掘立柱建物1柱配置図と柱穴計測部位
Fig. 58 Points of measurements and post span of construction1 at NM3

掘立柱建物1の柱穴			
ピットNo.	掘り方径	柱穴痕径	柱穴痕深
⑭	26	12	22
⑮	30	12	25
⑯	29	11	28
⑱	32	12	19
⑲	30	13	27
㉑	32	11	28
平均	29.8	11.8	23.3

その他柱穴痕を持つ柱穴			
ピットNo.	掘り方径	柱穴痕径	柱穴痕深
㉔	60	18	32
㉕	54	14	20
㉖	50	14	22
㉘	52	14	30
平均	54	15	26

ただし、ピット43、45は断面図上かかっているのみなので、計測しいない。（単位はcm）

表29 NM3 柱穴計測表
Table 29 Size of post holes

この他、掘立柱建物としては組まないが、柱穴痕を持つピットとして24・25・26・28がある。柱の掘り方の径が50～60cm、柱穴痕の径が14～18cm、深さが20～32cmと大きさからみても先の掘立柱建物1の柱穴とは明らかに異なる（表29）。29は打ち込まれた杭の跡である（図59－2）。

2）池に関する遺構群（図60・63）

ピット12は石垣が構築される以前にあった人工的な池と考えられる。埋土は埋め戻した層と底部のグライ化した層に分けられ、切り石や瓦の破片が含まれていた。瓦の中には平瓦や丸瓦に混じって瓦頭に三ツ巴紋を持つ軒丸瓦が出土している。池の底部はさらに掘り込まれ、段状の構造を持つ。池底付近では、杭跡（ピット12b）を囲むように、上面がほぼ水平に置かれた切石、平たい丸石が発見された（図60・63）。また池に続く溝2にはこぶし大の丸石が詰められ、底部は水平を保っており、暗渠と推定される（図63）。発掘の所見では溝2とピット12との切り合いは見られず連続した遺構と考えられる。28は柱穴痕を持つピットであるが、溝2に切られている。

3）石　垣（図57・59・60・64）

石垣は発掘区の南寄りに北西部の掘立柱建物1の東西軸と平行に一列発見された。石垣最上段の天端石（てんばいし）には切り石を使い、二段目には大きさのそろった丸石を積む。三段目から下は合端（あいば）

(面取りをして作り出した前後左右の石との接点)をとった丸石を裏込め石(友飼石、栗石)と共に積んだ打ち込みはぎの石垣である。この石垣は天端石の頭が13層上面で検出された。天端石の上端から最下端までの高さは90cmと低く、試掘抗の所見では下端に続き、南側に玉石が敷かれていることが確認された(図57)。

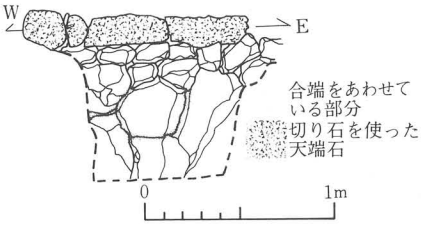


図59　打込はぎ石垣実測図
Fig. 59 Side view of stonewall

ひとことで石垣といってもその規模、使われる位置によって性格は様々である。たとえば城壁、天守台の土台といったものは大規模な土木工事が行なわれ、高く美しい石垣が営まれるであろうし、曲輪内の仕切りや土留、塀、庭の意匠などに使われれば規模ははるかに小さくなる。今回出土した石垣は、南側を未調査のまま残したとはいえ、その高さや石の大きさからいって大規模な建築物を伴なうものではない。したがって二の丸内という位置関係からむしろ土留、あるいは垣根か塀の土台といった類のものと思われる。

前後関係ではピット1・12・33はすべて石垣に切られているので、石垣はこれらより新しいものといえる。

4）柱穴痕を持たないピットと溝（図60～64）。

柱穴痕を持たないピットの切り合いは、39b→39a、8→7→10、17b→17a→3、2b→2a(いずれも旧→新)である。また単独のものでは、24・27・32・38、溝1が検出された。このうち溝1は13層で検出されたものの、焼けた壁が溝に落ちた状態で発見され、溝の底部も焼けており、明治15年の二の丸焼失時のものと思われる。焼けた鬼瓦の破片や大堀の土瓶の破片もここから出土した。また3も13層で検出され、瓦が出土している。11は不整形なピットであり、性格は不明である。

5）そ　の　他（図60）

掘り方などは確認できなかったが、8～12層で0～5・6区にグライ化した粘土の層があり、中から大量の礫・瓦が出土している。この遺構は層と遺物からみて二の丸以降のものと考えられる。

6）ま　と　め

今回調査した地点は二の丸南端部と推定される。

検出された遺構群に層位的な前後関係は見出せなかったが、大まかには池に関する遺構群がもっとも古く、二の丸構築以前の遺構と考えられよう。二の丸の地は、もと伊達政宗の四男宗泰の屋敷があった場所であり、のち二の丸を造営したことがわかっている。従ってその時代まで遡る可能性がある。石垣と溝1は池を埋戻した後の遺構で、二の丸焼失時に存在したことが確実である。また掘立柱建物1は、柱穴痕出土の遺物は新しいものの二の丸に伴う遺構である

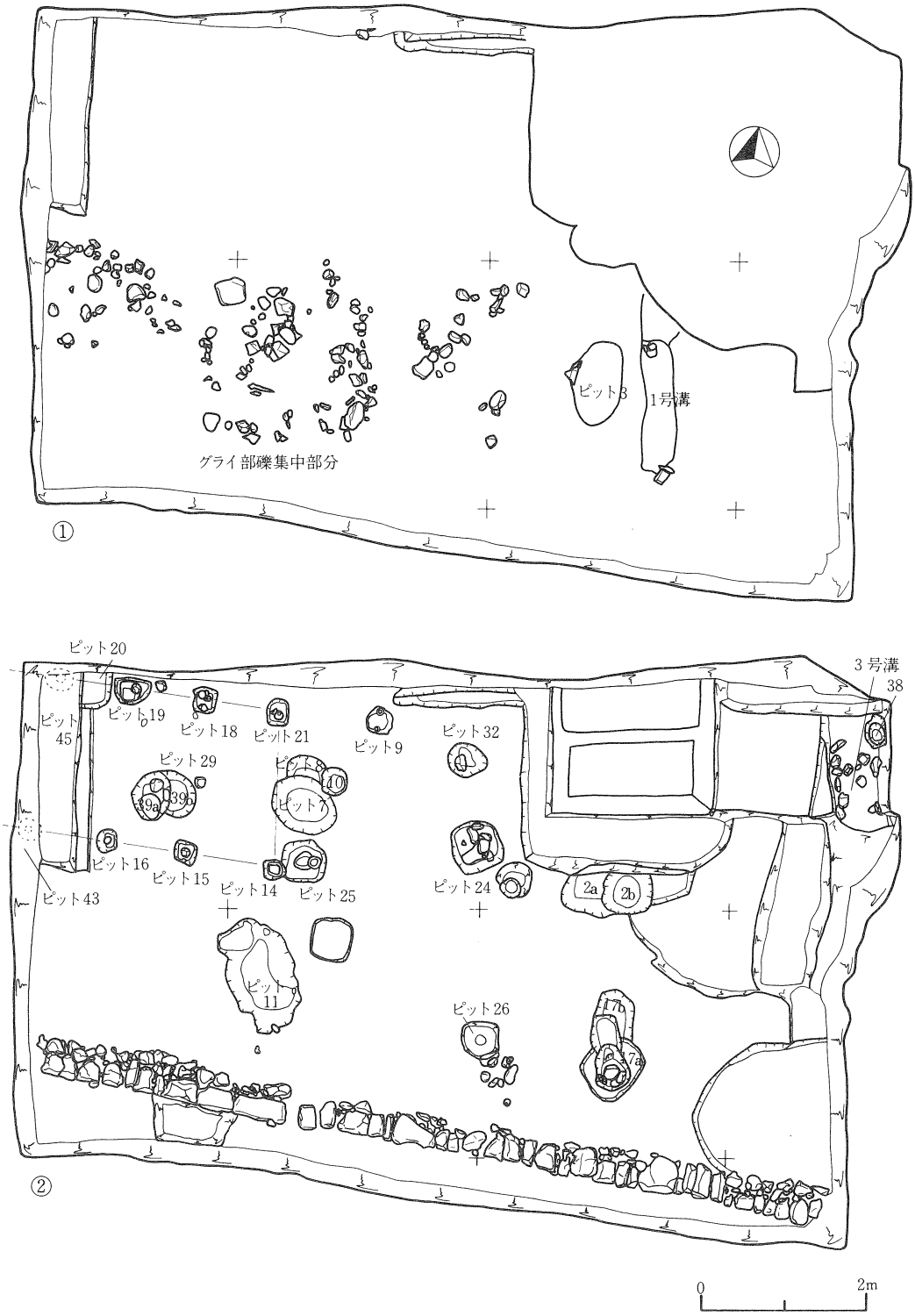


図60 ＮＭ３遺構変遷図(1)
Fig. 60 Historical transition of features at NM3 (1)

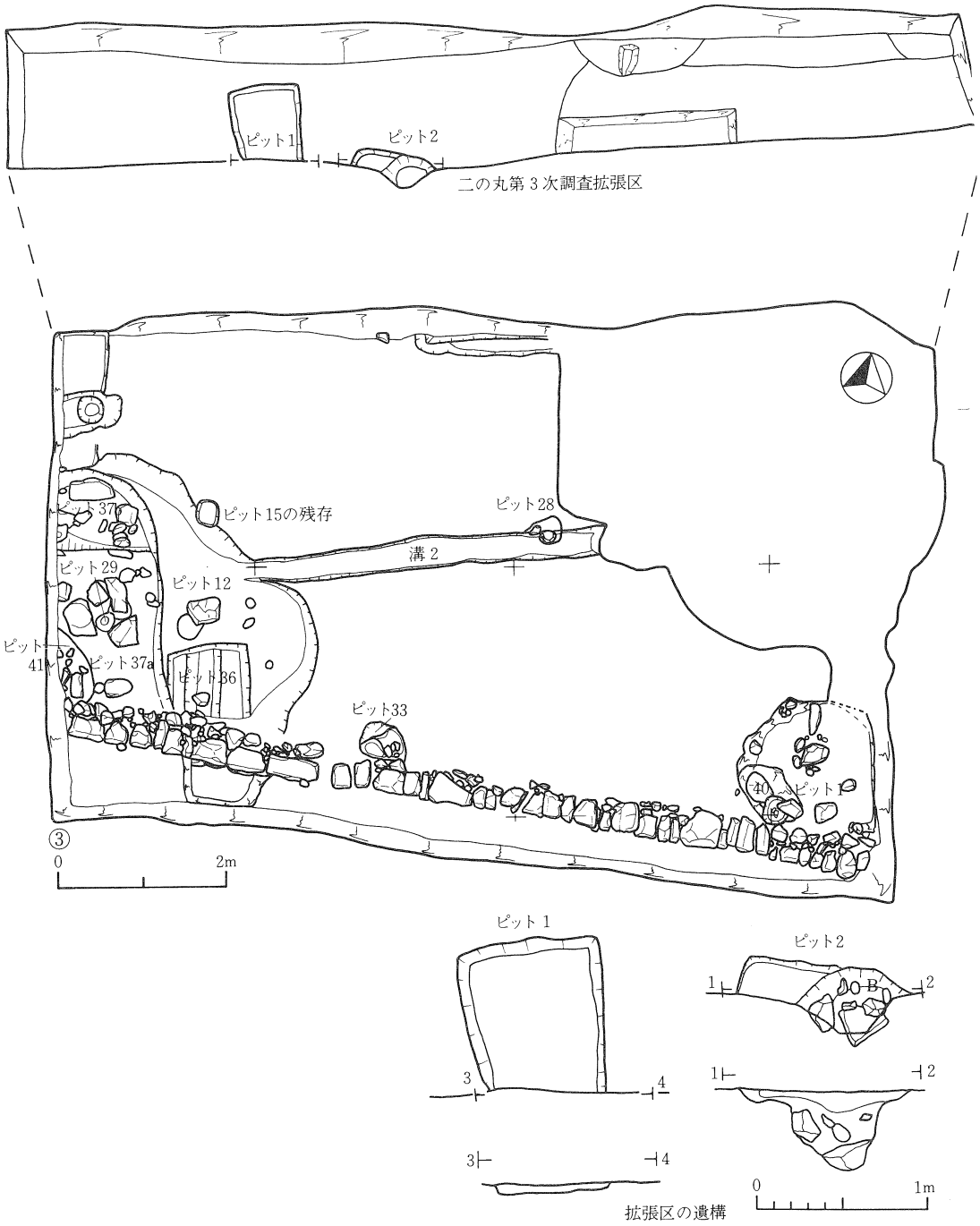


図61　ＮＭ３遺構変遷図(2)

Fig. 61 Historical transition of features at NM3 (2)

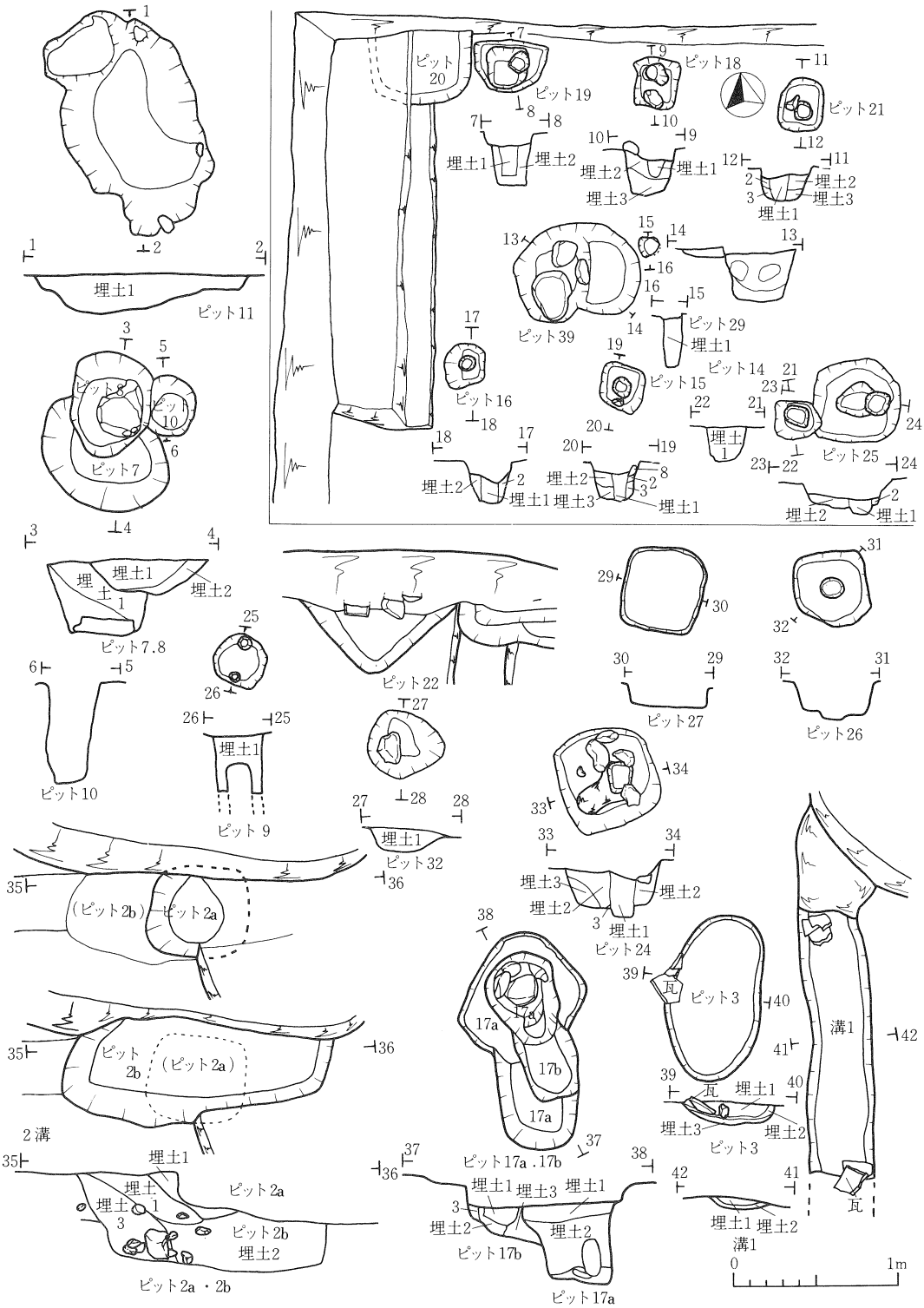


図62　ＮＭ３各遺構平面図及び断面図(1)
Fig. 62 Plans and cross sections of pits and ditches at NM3 (1)

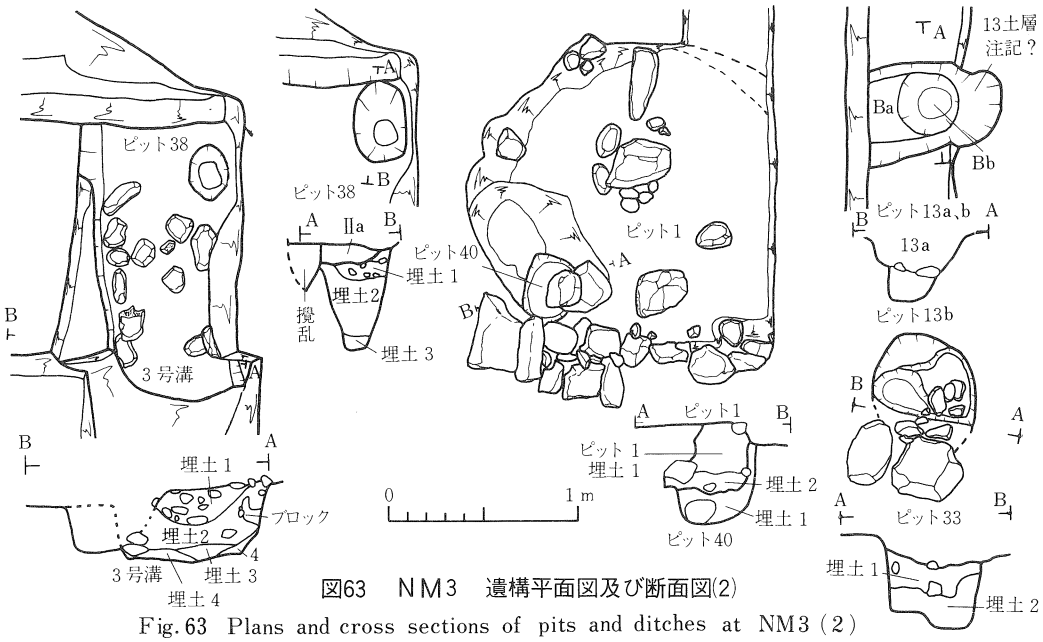


図63　NM3　遺構平面図及び断面図(2)

Fig. 63　Plans and cross sections of pits and ditches at NM3 (2)

遺構名	層名	色調	土質	内容
20	1	黒褐色	砂質シルト	軟質、粘性ややあり、炭化物小量含む、黄褐色粘土ブロックを少し含む。
	2	黒褐色	砂質シルト	径4cmくらいの礫を含む。
19	1			柱痕
	2	灰白色	シルト質細砂	粘性ややあり、しまり良し。(地山の灰白色シルト質砂質に黒色土、黄褐色土のブロックが少し混じっている。)
18	1			柱痕
	2	黄褐色	砂質粘土	粗砂を多く含む、ピット15の2層に類似。灰褐色粘土ブロックを多く含む。
	3	灰褐色	砂質粘土	礫、粗砂を多く含む。
21	1	灰褐色	粗砂を含む粘土	しまり悪く、すきまに酸化鉄が凝集に付着し赤褐色である、木炭粒を少量含む。
	2	灰褐色	砂＋粘土	酸化鉄が付着し、赤褐色となる部分がある。粘性、ややあり、ややしまる。
	3	黄褐色	砂質粘土	粘性やや弱い。礫を含む。ピット15の2層に類似するが、粘土ブロックは少ない。しまりは2層に比べて良い。
39a	1	暗褐色	粘土	砂、礫混じる。
	2	灰褐色	砂質粘土	礫を含む。
29	1	灰褐色	粗砂を含む粘土	ピット21の1層に同じ。打ち込まれた杭あり。
16	1	灰褐色	砂質粘土	粘質、粗砂を多く含む粘土。しまり不良、すきまに酸化鉄付着し、赤褐色となる。
	2	暗褐色	砂質ローム	木炭粒少し含む。粘性ややなし、しまりやや良、木炭粒、礫、小王石を含む、ピット12内にあるが、ピット12より黒味が強い。また粗砂の含有が少なく粘性がある。
15	1	灰褐色	砂質粘土	粘質、粗砂を多く含む粘土。しまり不良、すきまに酸化鉄付着し、赤褐色となる。木炭粒少し含む。
	2	黄褐色	砂質ローム	灰褐色粘土ブロックを多く含む、黄褐色砂質ロームは地山礫層起源、しまりやや良く、粘性ややあり、木炭粒、礫含む。
	3	灰褐色	砂質粘土	2層に比べ、しまり不良、粘性2層に比してあり礫を含む。
14	1			エレベーションのみ
25	1	暗灰褐色	砂質粘土	しまりきわめて悪い。しかし、ピット21の1層に比べ粘土質が強くしまり良い。
	2	暗褐色	砂質粘土	黄褐色粘土ブロックを多量に含む。しまりは3層に比べて良いがやはり不良である。
11	1	暗青灰色	シルト質粘土	グライ化し、粗砂を多量に含む。粘性あり、しまりやや不良で朽ち木の根がある。
				礫(2～5cm)多く含む。(周辺のグライ部分のうち、特に暗青灰色の強い部分である。)
7	1	青灰色	グライ＋砂質粘土	礫、王石含む、炭化物含む、しまりやや良し。
	2	暗褐色	粗粒砂質粘土	礫、王石、炭化物を含む。
8	1	暗褐色	粘土	粗砂、礫、王石、炭化物を含む。
	2	赤黄褐色	粘土＋粗砂	1層に比べてしまりやや良。赤褐色粘土ブロック状で多く、礫、炭化物を含む。
10	1	黒褐色	砂質土	レンガ、王石が全体に特に多く詰まっている。しまり、きわめて悪い。
22	1	暗褐色	砂質シルト	5cmほどの礫、粘土、腐れ礫を孤雑に含む、粘性ややあり、上面に瓦あり。
	2	黄褐色	砂質シルト	3cmほどの礫を多少含む。
	3	焼土		焼瓦を含む。
	4	青灰色	砂	底部付近に青白色粘土を含む、風化粘土ブロックや10cm大の礫を少し含む。
26	1	青灰色	グライ砂	しまり悪し、粘性なし
	2		粘土＋砂礫	グライ化し、色彩多様で赤褐色の粒状あり、灰黄色の粘土の小ブロックを含む。粘性に富みしまりよし。
27	1			ピット26　1層に同じ
9	1	暗褐色	シルト質粘土	礫、王石含む、腐った木片有り、杭、玩存。
32	1	茶褐色	砂質粘土	礫多く含む、地山由来のブロックを含む。しまりやや悪い。粘性やや強い。底部に5～8cmの礫やや多い。
24	1			西側柱列と同様きわめてしまり悪し。
	2	暗黄褐色	粗砂	黄褐色粘土ブロック及び、地山礫層の礫を含む。しまり良し。
	3			a層よりやや赤褐色が強くなる。地山礫層のブロック。しまり良し。
2a	1	暗褐色	シルト質土	砂、小礫、瓦、焼土を含む。しまり悪い、不均質な土
2b	1	〃	〃	褐色の粘土多く含む。焼土、グライ、砂混じる。
	2	灰褐色＋褐色	粘土	斑状に混じる。礫混入、しまり悪い。
	3	褐色(暗赤褐色)(灰褐色)	粘土(シルト質)	焼土、小礫、砂などが、比較的等質に混じっている。

遺構名	層名	色調	土質	内容
12a	1	灰茶褐色	砂質シルト	しまり良し、粘性悪し。砂粒を多く含む。礫を含む。
	2	灰茶褐色	砂質シルト	しまり悪し。粘性やや良い。砂礫を多く含む。酸化鉄がしまりの強い土のすきまに小さな入りこんでいる。
17b	1	灰茶褐色	砂質シルト	
	2	明褐色	シルト	灰色のシルト質ブロックを含む、しまり良し、粘性悪し。
	3	灰褐色	砂質粘土	砂、礫を多く含む。2層同様酸化鉄が入り込んでいる、しまり良し、粘性悪し。
3	1	黄灰色	シルト質粘土	斑状に赤褐色粘土混じる。微細な粒子で粘りあり、角レキ少々含む。しまり良し。
	2	青灰色	細砂	粘りなく、しまりなし、手ば、グライ化。
	3		砂質ローム	小礫、砂混じり。酸化鉄の付着が多く粘りなし。しまり悪し。地山(互層)が混じったような土質である。
1号溝	1	赤褐色	焼壁を主体とする砂	焼け壁と焼けた砂。しまりなく、粘性なし。
	2	〃		粘土小礫、炭化物を多量に含む。瓦を含む。粘性、しまりなし。2層の下に側溝的に赤サビ色の粘土がべったりすこびるがある。
3号溝	1	灰暗褐色	細砂	しまりきわめて良。礫を多量に含む。
	2	〃	〃	しまりきわめて良。赤褐色および灰白色粘土ブロックを小量含む。遺物少ない。
	3	黄褐色	砂礫層	しまりきわめて良、木炭粒を小量含む。
	4	灰褐色	粘土	地山の粘土に比して、砂を多く含み、やや褐色みを帯びる。
38	1	赤褐色	粗砂	焼土、ブロック、木炭粒を多量に含む。しまり良し、粘性。
	2	暗褐色	砂質ローム	しまり良し、粘土のブロックを多く含む。
	3	暗褐色	粗砂＋礫	木炭粒を含み、しまり良し。
1	1	暗褐色	砂質ローム	粘土ブロック(赤褐色、及び、灰褐色)を多く含む。しまり、2層より不良。
	2	暗黄褐色	粗砂＋小礫	王石を含む。しまりやや良。
40	1	暗灰褐色	粘土＋ローム	粗砂を多く含む。木炭粒を多く含む、粘土ブロックを少量含む、しまり良し。
13	1	暗褐色	細砂質ローム	木炭粒を含む。粘性不良、しまりやや良し。
	2	暗褐色	砂質ローム	地山由来の灰白色粘土の大きなブロックを含む。1層に比べてしまり、粘性やや不良。木炭粒含む。
	3	暗褐色	砂質ローム	粗砂を多く含む。灰白色粘土ブロックを多量に含み、ブロック間がグライ化している。しまりやや不良。粘性は2層と比べてやや不良。
	4	青灰色	シルト質粘土	グライ化している。粘性しまりあり、赤褐色の礫粗砂片まじる。水分多し、礫混在なし。
33	1	褐色	シルト	石灰質に関わると思われる土。しまりなし。粘性弱し。小礫をかなり含んでいる。炭化物が多くある。
	2	青灰色	粘土	褐色のシルト質土が混ざる。斑状に灰褐色粘土が入る。しまりなし。粘性やや強い。小礫含む。
12	1	黒褐色	粘土質シルト	礫含む、しまりやや不良、粘性2層より良し。
	2	暗褐色	粘土＋ローム	粗砂を多く含む、木炭粒を含む、王石を多く含む、しまりやや不良、粘性やや良い。
	3	暗褐色	砂質ローム	2層よりやや悪い。2層に比してしまり良く、粘性はややあり。下部に褐色粘土ブロックと炭化物を多く含む。
	4	暗褐色	粘土＋ローム	2層よりやや悪い。粗砂を多量に含む。3層に比べて、しまりやや不良で、粘性はある。礫は3層より多く含まれる。
	5	青灰色	シルト質粘土	グライ層。粘性あり、しまりやや不良。
	6	灰白色	粗砂	一部が5層の影響をうけて、青灰色を帯びる。礫を含むが他はほぼ均質な粗砂層、ただし、厚くなる部分は、酸化鉄の沈着により赤褐色となり、礫を含む。
41	1	赤褐色	粗砂	ピット12の6層に比して粒径が大きく礫の含有が多くなる。赤色みも強くなるが、一部分は斑点状に灰白色を呈する。6層に比してしまり良く粘性はなし。
36	1	褐色	砂質	酸化鉄多量に含み、小礫多く混じる。
	2	褐色	粘土	砂、礫、多量に混じる。
37a	1	褐色	砂質粘土	小礫を多量に含む。しまり良し。
	2	灰褐色	粘土	小礫、砂を含む。しまり良し。
37b	1	暗赤褐色	粗砂	ピット12の6層に似るが酸化鉄はより赤味が強い。さらに粗砂の径が大きく、粘土も多く含み、礫も多く含む。粘性ややあり、しまりやや不良。
2号溝	1	暗青灰色	シルト質グライ	粘性あり、しまり良し。暗紫である。こぶし大前後の王石をすきまなく詰めてあった。
28	1	暗青灰色	グライ質砂	柱痕。粘性あり、しまりなし。
	2	赤褐色	砂質土	地山起源の岩片、礫混じる。グライ小ブロック混じる。粘性しまりなし。若干砂質粘土のブロックもある。
	3	青灰色	グライ質砂	岩片、若干混じるが、柱痕部分よりやや明るい青灰色で、しまりあり。

NM3　遺構埋土注記表

Notes on refilled soilin pits and ditches at NM3

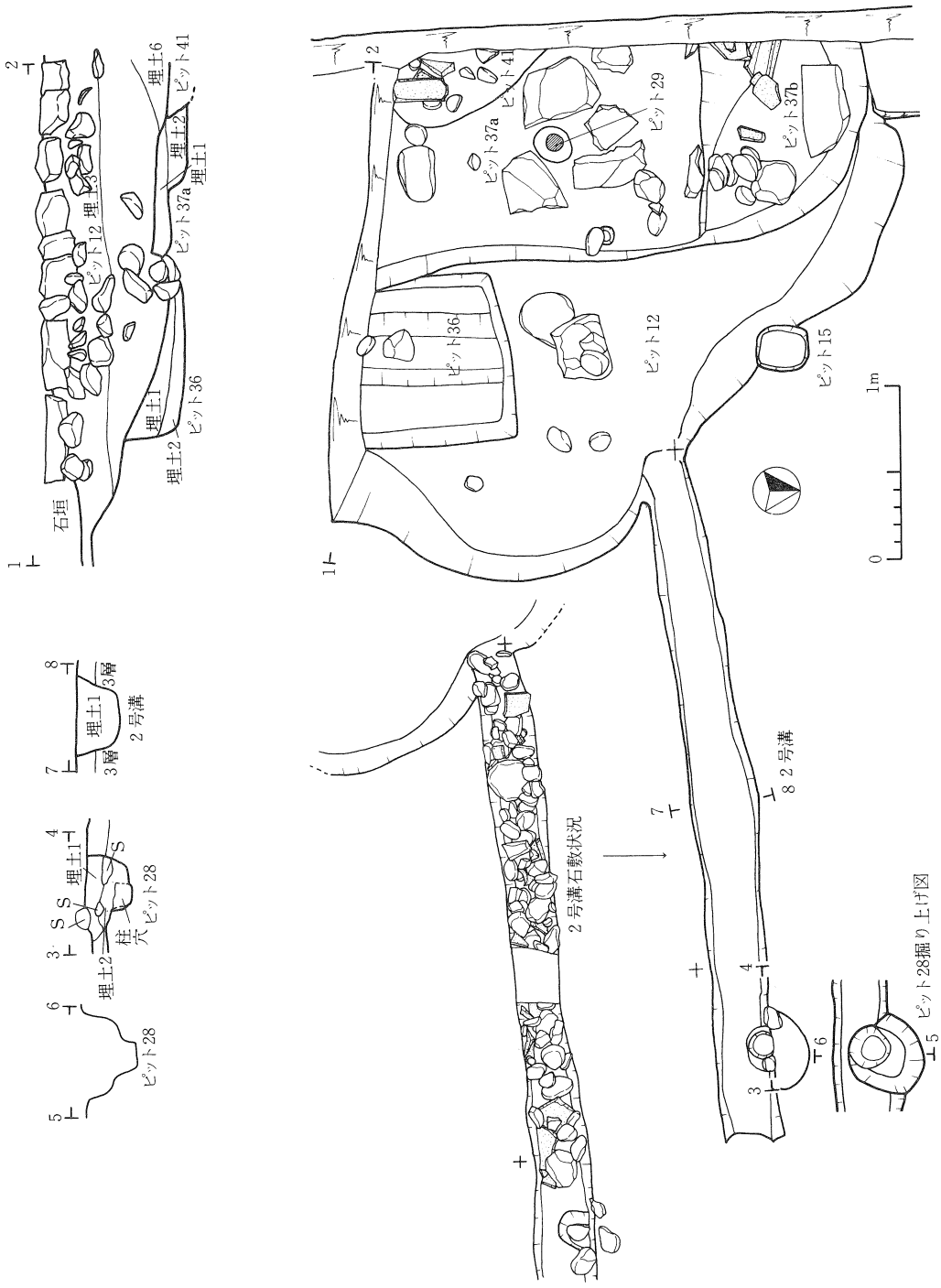


図64　ＮＭ３各遺構平面図及び断面図(3)
Fig. 64 Plans and cross sections of pits and ditches at NM3 (3)

可能性も否定できない。

(4) ＮＭ３の遺物

1） 陶磁器（図65・66、図版51）

ＮＭ２に比べて出土量がはるかに少なく、ほとんど細片で、出土状況も散慢である（表30）。したがって全体の傾向を概述するにとどめる。１～５層及び第２次大戦後の攪乱出土のものは、一部を除き分析対象から外した。８～12層には確実に近代窯業の製品が含まれる。遺構出土のものはピット21の柱痕から出た化粧瓶（図65－6）以外、明確に近代と言えるものはない。全体にＮＭ３では遺物・遺構ともに明確な年代決定の資料を欠いている。ピット12の最上部埋土がやや出土量が多く、その上を覆うＮ６－８～12層及び06－８層、１号、２号溝と接合関係を持つ。またピット18とＮ６－８～12層も接合関係を持ち、８～12層とこれらの遺構の埋没時期がごく近いことを示している。陶磁器は全体にＮＭ２と共通していることから、江戸末期から明治初期の近世最終末の製品と考えてよいだろう。

① 茶　碗

磁器製茶碗はＮＭ２のI_1－ＢやI_1－Ｍ、また図65－20等、平清水焼と推定される破片が多い。また、仙台城も含めて仙台附近の近世遺跡から多数出土する相馬産と推される陶器茶碗（図65－－1、3～5）がピット12の最上部埋土から出ている。ＮＭ２ではまったく見られないこの種の茶碗は、磁器製のものより一段ランクが低いのではないだろうか。図65－10は旧陸軍の磁器茶碗で、17・18も確証はないが、同時期のものと推される。

② 皿

磁器はＮＭ２のI_2、II_4、Ⅲ類（図66－1）、陶器はI_1類（図65－21）等が見られる。

③ 土　瓶

細片で器形は不明だが、山水文・青釉・灰釉のものがある。

④ 土師質土器・瓦質土器

皿（図65－8・9）、鉢類（図65－15・16）、焙烙（ほうろく）がある。 胎土は金雲母を含む図65－15以外は概ねＮＭ２のものと共通しており、堤（つつみ）産の可能性もある。瓦質は１点のみ。

⑤ その他の陶磁器

湯呑？（図66－２・３）徳利？（図65－７）、貧乏徳利、染付の磁器朱肉入れ（図66－５、内面に朱肉の残滓が残っている）、近代の型造りの化粧瓶（図65－６）等がある。

2） その他の遺物 （図67、図版54、表32）

ごく少量である。熔融ガラスもＮＭ２よりはるかに少ない。図67－7は池底に打込まれた杭。

○１～７層・攪乱・出土区不明のものは集計してない。
○特に断りの無い限り時期は近世。
○分類タイプはNM2による。
○数は破片数。

器種 / 出土地点	茶碗							皿						土瓶					その他					土師質瓦質				近代製品			
	磁器					陶器		磁器				陶器		磁器	陶器				陶器				磁器					磁器		陶器
	I1-B	I1-M	I1	他	小形		小形	I2	II4	III	他	I1	他		山水	青釉	灰釉	他	徳利	土鍋	甕	不明	不明	皿	鉢	焙烙	不明	朱肉入	化粧瓶	他	
ピット１				1											1	1	3														
〃 2												1												1							
〃 3																									1						
〃 6																								2							
〃 11				1												1	2	1						2	1						
〃 12 上部				1		13		1	1	2							1		1			1	1	12		1	1				
〃 18						1															2										
〃 20 柱痕																								1							
〃 21 柱痕																													1		
〃 22															2																
〃 23																1	1														
〃 26		1																							1						
〃 34																				1											
〃 35											1																				
〃 43掘り方																									1						
１号溝				1						1																					
２号溝				2							1																				
石垣裏込土																	1														
グライ部礫集中部分																						1									3
N 3 － 8 層																															
O 6 － 〃					1	1					1																	1		1	
N 6 － 8 ～ 12 層			1			3						1												1			1				
N 5 － 〃																								1	1						
O 5 － 〃			1																												
O 4.5－ 〃																	1														
地区不明 8 ～12層	1				1					1	1	1			1	1	1					1	4		1		1			5	3
N 6 － 13 ～ 16 層			1	1								1			1																

表30　ＮＭ３出土の陶磁器の分布

Table 30 Distribution of ceramics at NM3

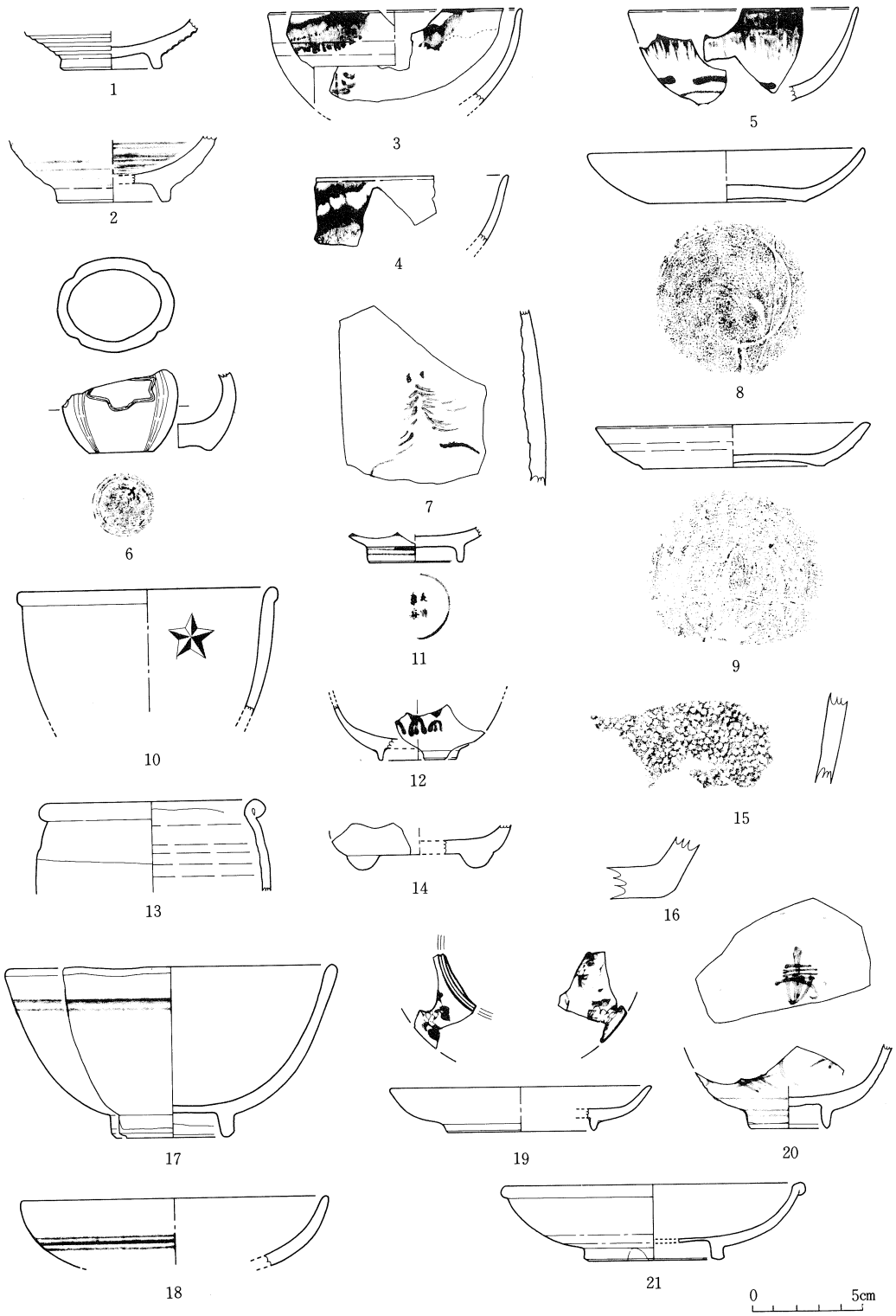


図65 ＮＭ３出土の陶磁器(1)
Fig. 65 Ceramics from NM3 (1)

probably 19c.
Nos. 6、10、17、19、and 20 are more recert.

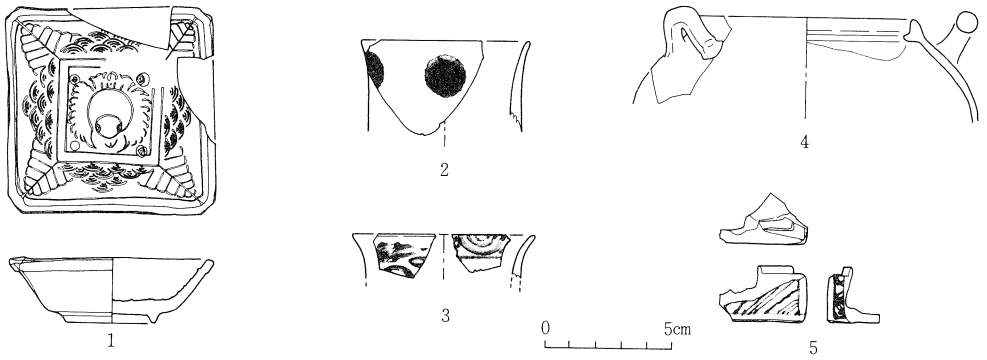


図66　ＮＭ３出土の陶磁器(2)
Fig. 66 Ceramics from NM3

probably 19c
porcelains except 3

図	図版	種類	地区・遺構	釉	装飾	備考
65－1		陶・茶碗	ピット12	鉄釉 内 明 緑 灰 10GY 8/1 外 暗 赤 7.5R 3/4		相馬大堀
2		〃	ピット12、N6-8～12層	灰 褐 7.5YR 6/2	化粧土刷毛塗り 灰 白 5Y 8/2	
3		〃	ピット12、O6-8 層	明 緑 灰 7.5GY 8/1	灯掛け に ぶ い 緑 4.0G 5.0/4.5	相馬大堀
4		〃	ピット12、埋土1層	灰 白 2.5Y 7/1	〃 明 灰 緑 4.0G 7.5/1.5 に ぶ い 緑 4.0G 5.0/4.5	〃
5		〃	ピット12、2号溝	青 白 3.0PB 9.0/1	に ぶ い 青 3.0PB 3.0/6	〃
6		磁・化粧瓶	ピット43柱痕	白 N 9.5		型造り
7		磁・徳利？	ピット12	明オリーブ灰 5GY 7/1	鉄絵 オリーブ灰 10Y 6/2	
8		土師・皿	〃			堤？
9		〃	〃			〃
10		磁・茶碗	排土	青 白 3.0PB 9.0/1	スタンプ こ い 青 3.0PB 2.0/8.5	
11		〃	8～12層	灰 白 N 8	染付 に ぶ い 青 3.0PB 3.0/6	
12		〃	〃	灰 白 N 8.5	〃 濃 紫 青 6.0PB 2.5/10.5	
13		陶・甕	ピット18、N6-8～12層	鉄釉 極 暗 赤 褐 7.5R 2/3	オリーブ黒 10Y 3/2	堤？
14		土師・鉢？	ピット3、埋土1層			〃
15		〃	O5-8～12層			
16		〃	ピット11			堤？
17		陶・茶碗	排土	オリーブ灰 5GY 6/1	に ぶ い 青 3.0PB 3.0/6	
18		陶・皿	グライ部礫集中	明 緑 灰 7.5GY 7/1	こ い 青 3.0PB 2.0/8.5	
19		磁・皿	8～12層	(青 白 3.0PB 9.0/1)	染付 つ よ い 紫 青 6.0PB 3.5/10.5	
20		磁・茶碗	N6-8～12層	(〃)	〃 ス カ イ 6.0PB 6.5/7.5	平清水
21		陶・皿	〃	灰 白 7.5Y 8/2	〃(底内) に ぶ い 青 3.0PB 3.0/6	大堀 or 平清水
66－1		磁・皿		明 緑 灰 10GY 8/1	暗 青 3.0PB 2.0/5.5	平清水
2		磁・茶碗？	Aトレンチ	灰 白 N 8.5	スタンプ 灰 青 3.0PB 3.0/3	
3		陶・〃	8～12層	灰 白 7.5Y 8/2	染付 に ぶ い 青 3.0PB 3.0/6	
4		磁・土瓶	〃			
5		磁・味噌入れ？	〃	青 白 3.0PB 9.0/1	染付 こ い 青 3.0PB 2.5/10.5	

表31　ＮＭ３　出土の陶磁器観察表
Table 31 Notes on ceramics in Fig. 65 and 66

3）瓦

出土破片数は1409点と多いが、完形品はなく、図示すべきものも少ない。遺構ではピット12（池跡）からまとまって出土している。ここではピット12等、やや古い遺構より出土した瓦と新しい盛土層から出土したものとを分けて扱う（表33）。

前者の例として次のようなものがある。

①　軒　丸　瓦（図68－2～4、69－4、図版53－1・2、52－4）

いずれも書割立て三引き文をもつものである。図68－2は図68－3、図68－4より周縁部の幅

	出土地点 / 種類	拡張区ピット1	ピット2	ピット8	ピット12	ピット14	ピット28柱痕	ピット38	ピット43	2号溝	石垣外埋土	グライ部礫集中部分	N3-10・11層	N5-8~12層	N6-8~12層	O6-8~12層	8~12層	N6-13層	O6-14層	Aトレンチ	Bトレンチ	合計
木製品	板材	3									3										1	7
	木羽	2																	1			3
	杭				1																	1
	燃料?		1																			1
	炭化断片	1													4							5
	自然木					1																1
金属製品	キセル(銅)	1																				1
	さじ(銅)																1					1
	鋲(銅)			1																		1
	棒状鉄製品								1													1
	和釘(鉄)	7			1		2	1		5				5	6	1	7		2	1		38
	洋釘(鉄)												1									1
その他	ボタン														1			1				2
	焼ガラス塊		1										1				1					3
	板ガラス片	1										1					1			2		5
	ガラス容器片												1							1		2
	ガラス片			1																		1
	シジミ												1									1
	不明貝																			1		1

表32　ＮＭ３　出土の木製品・金属製品他の分布
Table 32 Distribution of wooden, metal and other artifacts at NM3

の広いものである。図68－3・4は瓦当の文様のある方の面に砂が付着しており、型から抜くのを容易にするためと思われる。調整は凸面はヘラナデにより平滑に仕上げ、凹面は粗いヘラケズリによっている(図68－2)。図69－4は、九曜文をもつもの。文様部は周縁を型で作った後星を粘土玉を張りつけて作っている。

② 軒　瓦（図68－5）

軒平瓦ではなく、桟瓦葺きの軒先の瓦である。小破片で文様もごく一部しかわからない。

③ 丸　瓦（図68－1・69－1、図版54－1・2）

2点とも玉縁をもつ。図68－1は図69－1やＮＭ１出土のものと比べて大きい。図68－1は凸面はタテ方向のヘラケズリ、ヨコ方向のヘラケズリ後ヨコ方向のヨコナデを施し、最後にタテ方向のヘラミガキで仕上げられている。凹面には布目の痕跡が全体をおおっていて、布の継ぎ目と推定される痕跡も見える。図69－1の凸面は図68－1と同様だが凹面では布目の及んでいる範囲がわずかで、粘土塊からの切離し時の痕跡と思われる筋目がはっきりしている。また上下に砂が付着しているほか、棒状のものをさしこんだような圧痕もある。

④ 棟　瓦（図69－2、図版53－7）

屋根形の桟と箱状の垂れをもつものである。

⑤ 鬼　瓦（図69－3、図版52－1）

どのような部分なのかはっきりわからないが、下り棟の鬼瓦の下部ではないかと推定できる。

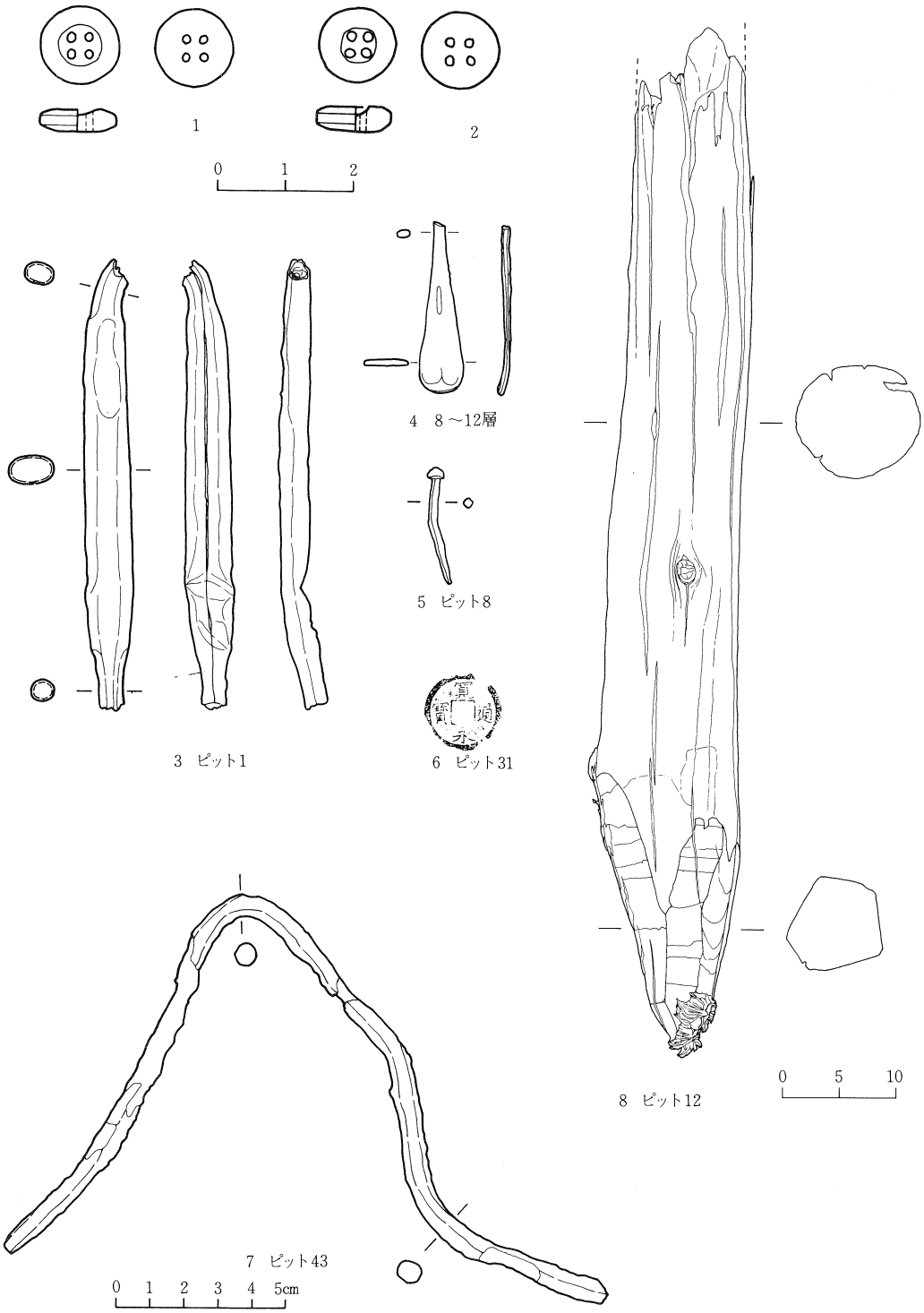


図67 ＮＭ３出土金属製品他
Fig. 67 Various artifacts from NM3

1、2.ボタン button (glass) 3.キセル pipe (cop.) 4.さ じ spoon (cop.) 5.釘 nail (cop.)
6.寛永通宝 coin (cop.) 7.棒状鉄製品 fragment (iron) 8.杭 stake (wood)

以上が江戸時代末期から明治初期と考えられる瓦である。明治初期以降のものとしては次のものがある。

A．軒　　瓦（図69－5・6、図版52－2・3）

桟瓦葺きの軒先瓦に用いられた瓦である。図69－5は小巴に3つ巴文をもつもの、図69－6は万十軒瓦である。いずれも小巴部のみの破片である。小巴部の裏側はあらいヨコナデで粗面に仕上げられている。

B．桟　　瓦（図70－1～6、図版53－3・4）

図68－2～6は小片である。「宮」または「宮四九」の型によるレリーフをすべてもっている。瓦の胎土は小石まじりの粗いものが普通だが、この種の桟瓦は細砂を含む細かい胎土である。

C．平 瓦 片（図70－7・8、図版53－5・6）

図69－7は「和田」、図70－8は「ノメ」の印の押されたものである。

近世の瓦については他にほとんど報告例がないため詳細はわからない。ただ図68－1の丸瓦については、この遺跡の出土例の中で1点だけ他より大きいものであるが、昭和58年の仙台市による仙台城三の丸発掘でも出土しており、他の遺物より古いものである可能性がある。この他ＮＭ１出土のものと比較してわかるように、丸瓦には製造工程の仕上げの段階で凸面にヘラミガキを施すものとしないもの、凹面では布目のはっきりするものとしないもの、棒状のものをさしこんだような圧痕をもつもの、などさまざまなバラエティーがあるが、時期差をあらわすものかどうかわからない。今のところこれらは同時に用いられたと考えるのが妥当と思われる。

図	出土地点	種類	残存部位	法量（単位mm）			色調 表面	色調 割れ口	胎土	焼成	備考	図版
68－2	ピット12埋土1層	軒丸瓦	瓦当部	(155)	〔164〕	23	N4/1 灰色～灰白色	5Y 8/1 灰白色	小石混じりの粗い胎土	不良	書割立て三引き文	53－1
3	ピット12	〃	〃	(108)	〔152〕	25	N 4/1 灰色	10Y 7/1 灰白色	〃	〃	瓦当部の前面に多量の砂が付着　書割立て三引き文	53－2
4	〃	〃	〃	(80)	〔139〕	(21)	N 3/1 灰色	N 8/1 灰白色	〃	〃	〃　〃	
5	ピット12埋土1層	軒瓦	〃	幅 (86)		高 (53)	N 4/1 灰色	10Y 7/1 灰白色	〃	良好		
68－1	〃 埋土5層	丸瓦		長 320	幅 182	高 92 / 厚 28	N3/1 7.5Y8/1 明灰色～灰白色	10Y 8/1 灰白色	〃	不良		54－1
69－1	〃 埋土2層	〃		長 294	幅 151	高 77 / 厚 20	5PB5/1 7.5GY7/1 青灰色～明緑灰色	10GY 7/1 明緑灰色	〃	良好		54－2
2	ピット13a埋土	棟瓦		長 (164)		幅 (114)	5B 1.7/1 青黒色	5B 7/1 明青灰色	〃	不良		53－7
3	12層	鬼瓦					10YR 7/4 にぶい黄色	10GY 4/1 暗緑灰	〃	良好	熱を受けて変色	52－1
4	C 5 － 10 層	軒丸瓦	瓦当部	瓦当部 (134)	〔154〕	瓦当部厚 25	5PB 4/1 明青灰色	7.5Y 6/1 灰色	〃	不良	九曜文	52－4
5	10層	軒瓦	〃	瓦当部 94		厚 22	N 4/1 灰色	N 7/1 灰白色	〃	良好	三つ巴文	52－3
6	〃	〃	〃	78			7.5YR 7/4 にぶい橙色	10YR 8/4 浅黄橙色	〃	不良	焼けて変色	52－2
70－1	ピット3埋土	桟瓦		(179)		290	10Y 4/1 灰色	10Y 8/1 灰白色	細砂を少し含む	〃	型による「宮四九」のレリーフ	53－3
2	3層	〃					N 3/1 暗灰色	10Y 8/1 灰白色	〃	〃	型による「宮」のレリーフ	
3	1層	〃					〃	7.5Y 7/1 灰白色	〃	〃	型による「宮四九」のレリーフ	
4	カクラン中	〃					〃	7.5Y 7/1 灰白色	〃	〃	型による「宮」のレリーフ	53－4
5	〃	〃					10Y5/1 5Y7/2 灰色～灰白色	5Y6/1 5Y7/1 灰色～灰白色	〃	〃	〃	
6	〃	〃					10Y 4/1 灰色	N 7/1 灰白色	〃	〃	型による「宮四九」のレリーフ	
7	O 5、6、10層	平瓦					N 3/1 暗灰色	7.5Y7/1 10Y4/1 灰白色～灰色	〃	〃	「和田」の印(鑑)様のものを押す	53－5
8	〃	〃					N 4/1 灰色	N 5/1 灰色	0.1～0.5mmの砂粒を含む	良好	「ノメ」の印(鑑)様のものを2ヶ所で押す	53－6

表33　NM3 出土の瓦属性表

Table 33 Attributes list of ceramic roof tiles from NM3

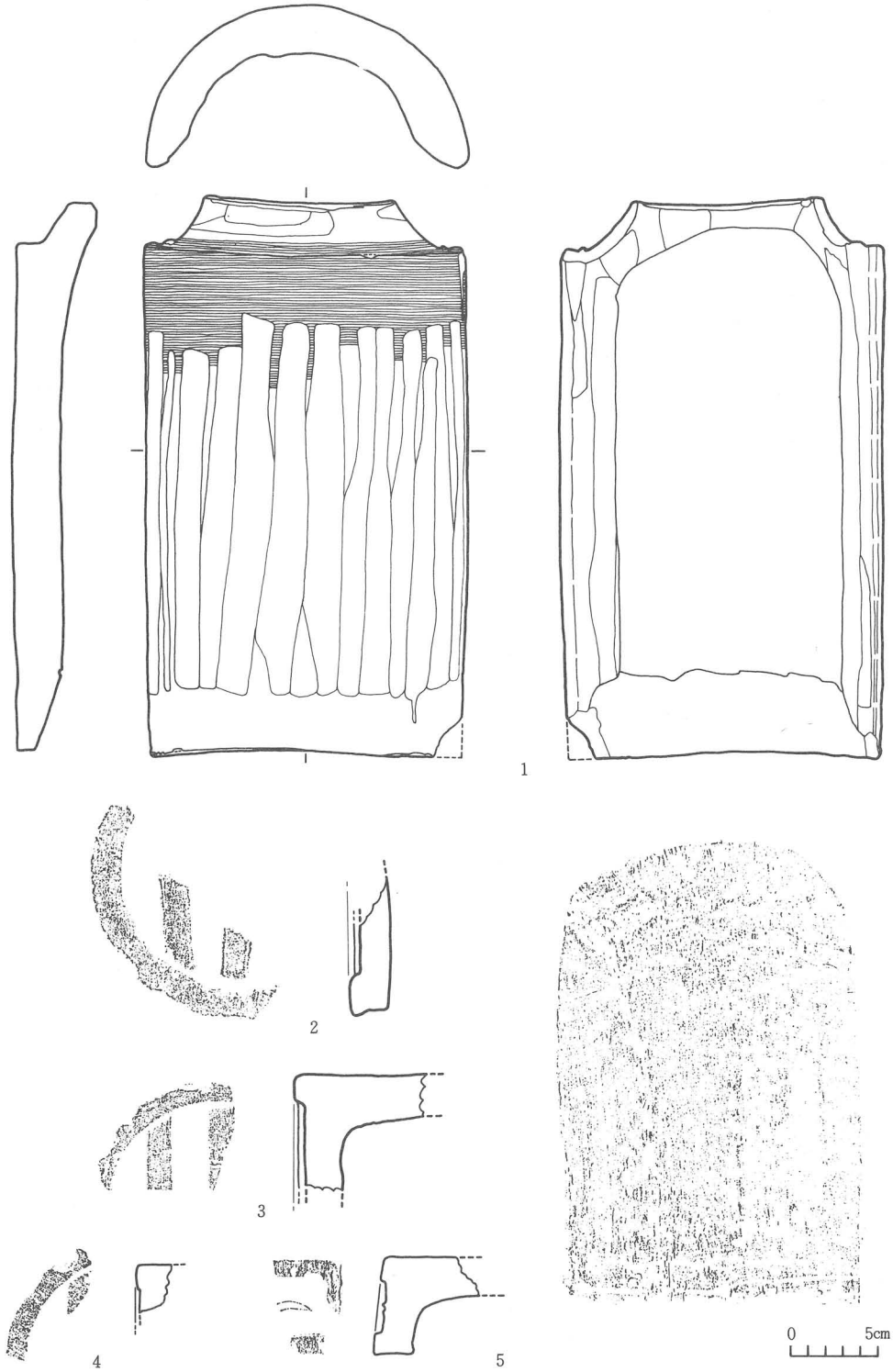


図68　ＮＭ３出土の瓦(1)
Fig. 68 Ceramic roof tiles from NM3 (1)

before 1882

図69　ＮＭ３出土の瓦(2)
Fig. 69 Ceramic roof tiles from NM3 (2)

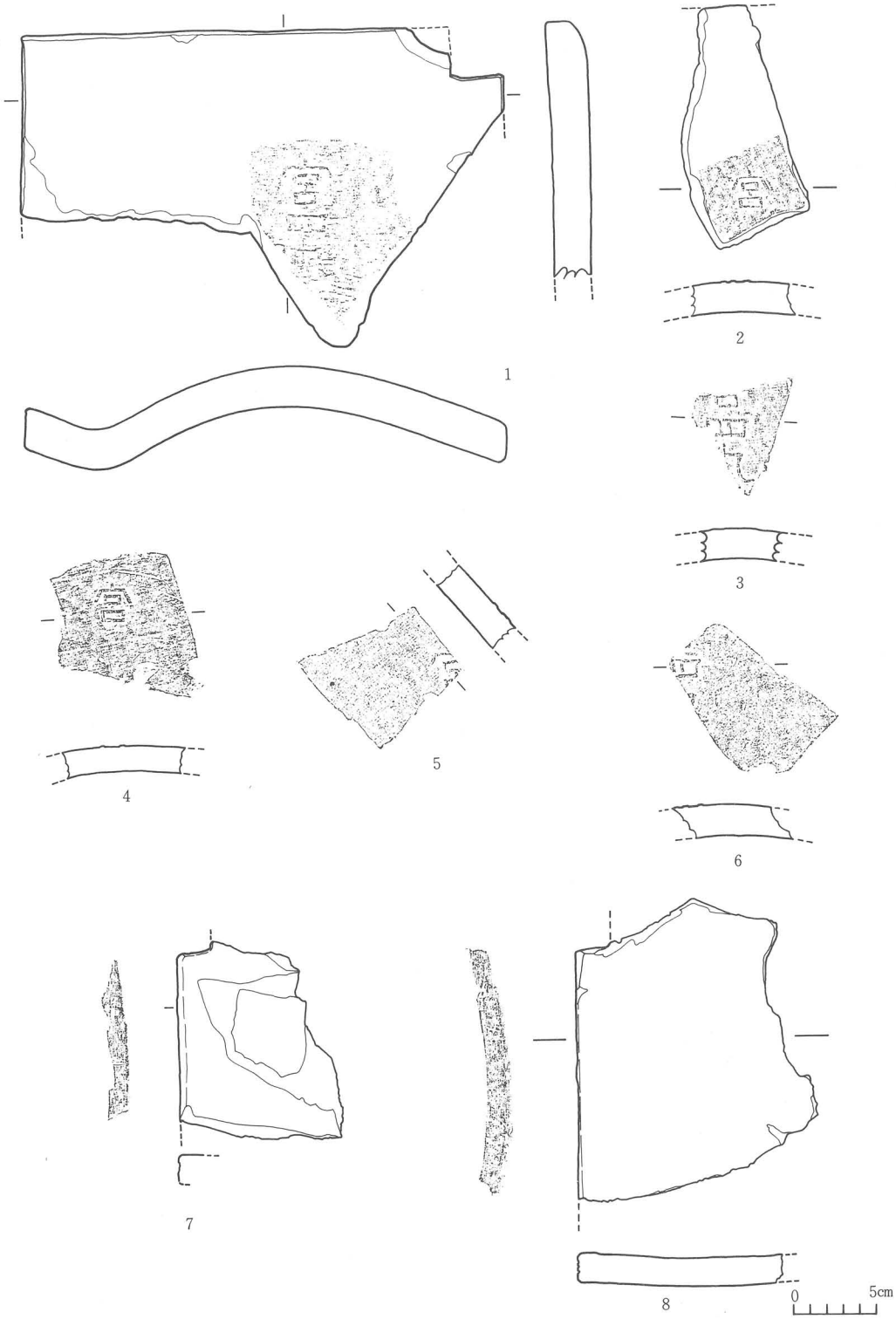


図70　ＮＭ３出土の瓦(3)　　after 1882

Fig. 70 Ceramic roof tiles from NM3 (3)

5．ＮＭ2礎石建物と二の丸建造物

(1) 二の丸におけるＮＭ2・3の位置

享和２年(1802)の絵図面を使った二の丸建物と、文系四学部建物の現況との推定対比位置図(付図１)を参照すれば、この２地点は、馬場をはさんだ二の丸南端部(ＮＭ3)と、馬場座敷から小広間付近(ＮＭ2)に相当すると推定される。試掘坑・試掘トレンチによる知見では、ＮＭ2から試掘トレンチにかけては、一面焼土が広がり、火災により焼失した建造があったことがわかる。しかし、ＮＭ3にはほとんど見られず、二の丸建物群が密集していない場所であったことがうかがわれる。ＮＭ2の南端とＮＭ3の北端との距離は約30mある。ＮＭ2の礎石4から南北方向の礎石列を南側に延長した線をたどって、ＮＭ3の石垣の延長線までの距離を計ると、約42mとなる。１間を2.0mとすると、約21間となる。この値は図69・74－1に示された間数に近似する。種々の絵図(図73－75、付図1)を参照すると、この空間には元禄年間以降は馬場が存在したと推定される(佐藤1967)。

ＮＭ2の検出遺構の特徴は以下のようにまとめることができる。①礎石建物は鉤の手状を示す(図72)。②南北方向の柱間は約3m、東西方向は約2.2m(7尺)である(図72)。③礎石建物北側に石敷遺構(幅2.9m)が存在する。

これらの事実から、①について絵図上で検討すると、最も古い図(図72－1)の中の「御書院」東側に併行する「御廊下」と「小広間」あるいはそれにつらなる部分とが作る、鉤の手状の構造や図73－2、図74－1の中の、馬場座敷北側の「御膳立」と「御廊下」の鉤の手状の構造が注目される。

前述の礎石との石垣の距離42.0mという事実から考察した時、建物の間数がわかる。図74－1の原図(斎藤報恩会所蔵)を使い、1間＝6尺5寸(196.7cm)として計算すると、同図では礎石と石垣間は約21間となる。また、文化年間図(県立図書館所蔵)では23間とあらわされている(図74－2)。「御膳立」と「馬場屋敷」の隅から21間をとると、両図のはるか南方にずれ、中島池に重複してしまう。(馬場端からさらに約12間)。石垣が図74－1の南端を画する石垣とすると、この位置のずれは、大きすぎ、図と一致しない。次に鉤の手の構造を御廊下と小広間の角からとすると、石垣は図74－2 南端の部分から４間の位置にあり、図74－1ともよく一致する。
ついでこの南北礎石間距離(図72)について考察を加える。図74－1では「御膳立」が幅2間、「御廊下」が1.5間と表わされており、３m前後の値をもつ南北の礎石幅が「御膳立」のものとすると、1間1.5mとなり1間6尺以下になってしまう。二の丸の一間は6尺3寸もしくは6尺5寸と推定されており「御廊下」の1間約2.0m、約6尺5寸という値とほぼ合致する(注1)。この点からも、この礎石列が小広間に連なる御廊下であることが推定できよう。

(2) ＮＭ２の石敷遺構

以上の事実から、ごみ捨てとして使われていた石敷遺構は、この「御廊下」に面した施設と推定される。絵図に相当する建物を探すと、御上段の西側「御廊下」の東側にあたる正方形の構造物が注目される。

図73－１では、御廊下(A)の北側に連結した部分が見られる。また、御廊下(B)にも張り出し部分が存在する。図73－2では、すでに南東側に「馬場座敷」が新築され、それと共に御廊下(B)は「御膳立」と呼称が変わり、御廊下(B)の北側にあった。張り出し部分は消滅して、その後図で見る限り、その部分に再びこのような張り出しが作られることはない。図73－２では、御廊下張り出し部分のうち西側の１画が、便所として図示されている。従って、図73－１の張り出し西側も便所であろう。その東側にほぼ正方形の別の張り出しが認められ、宮城県立図書館蔵の原図には「壹司置所（だいすおきどころ）」と記載されている。壹司が茶事の道具を入れる棚であることを考えると、１種の物置として使われていたと推定される。図74－１では、特別な張り出し部分はなくなり正方形の張り出し部分には変化がない。図74－２では、基本的には変化がないが、西側に新たに便所が１箇所設けられている。さらに、時期不明の第２師団で作製した二の丸図には、（図75－2）西側（図の上方）に『田村様に便所』と、その下に『手掛水』と記載があり、手洗場と推定できる。石敷の作り方を見ると（図17）、手洗場とする解釈の方がより妥当と考えられるが、手洗場などを伴った物置として使われた可能性もある。また、時期的な使用目的の変化も考慮する必要がある。以下廃絶の時期についても考察する。明治２年時の勤政庁時代のものである図75－１では、御廊下付近の張り出しは、見あたらない。これは図が略図であるため省略したものか、あるいは図中の他の便所等がそのまま記載されていることを考慮すれば、すでにその時期には機能を停止して取り壊されていた結果とも考えられる。また遺物から見ると、石敷遺構出土遺物の中で前述のように、茶碗・皿・土瓶などの陶磁器類は切込産・平清水産・大堀産が大部分を占める。時期的にもほぼ江戸末～明治10年代にかけてのものに限られており、それ以外の時期のものはほとんどない。鮫肌の土瓶が伝承通りに、明治７年以降に焼かれたものとすれば、幕末から明治７年前後に作られた遺物が捨てられた後、明治15年に焼けるまでの間に粘土で蓋をされたことになる。

(3) ＮＭ３と二の丸の位置

発見された石垣は前述のように二の丸の南端を画すもので、図73－１に示されている石垣と推定される（付図１）。石垣に切られて発見された池は、二の丸構築以前に造営された苑池と考えられるが、その時期・規模・造営方法などは不明である。　　（梶原　洋）

注1.　東北大学工学部建築意匠学科　佐藤　巧教授の御教示による。

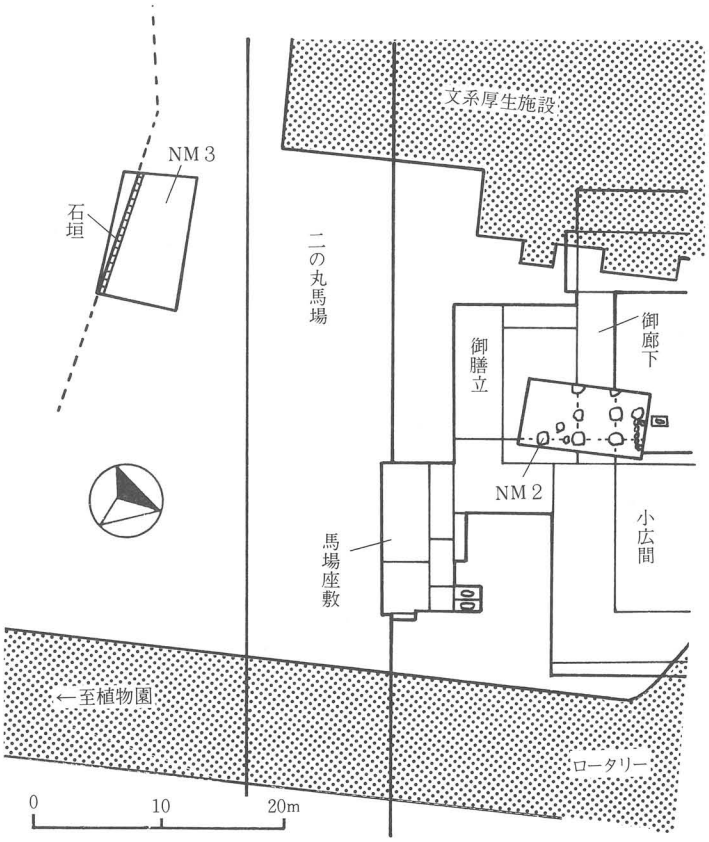


図71　ＮＭ２・３の発掘区・現況建物と二の丸遺構
Fig. 71 A superimposed plan of excavations, university building, road and ruined structures in Yedo era

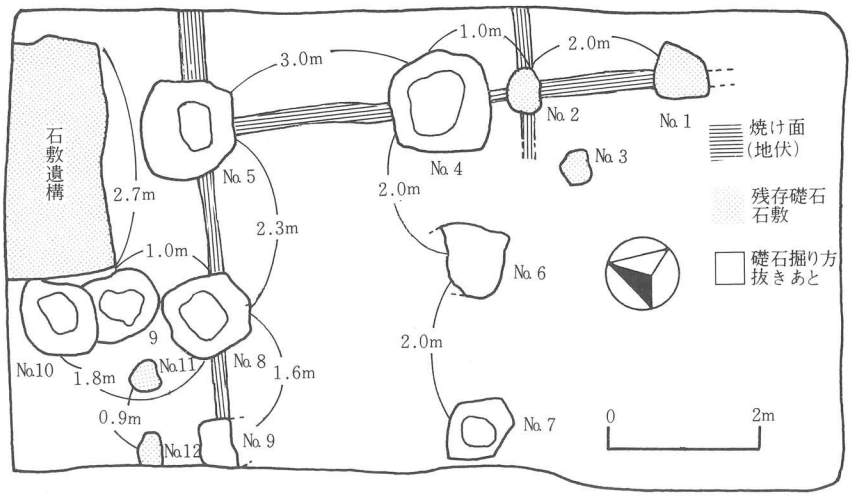
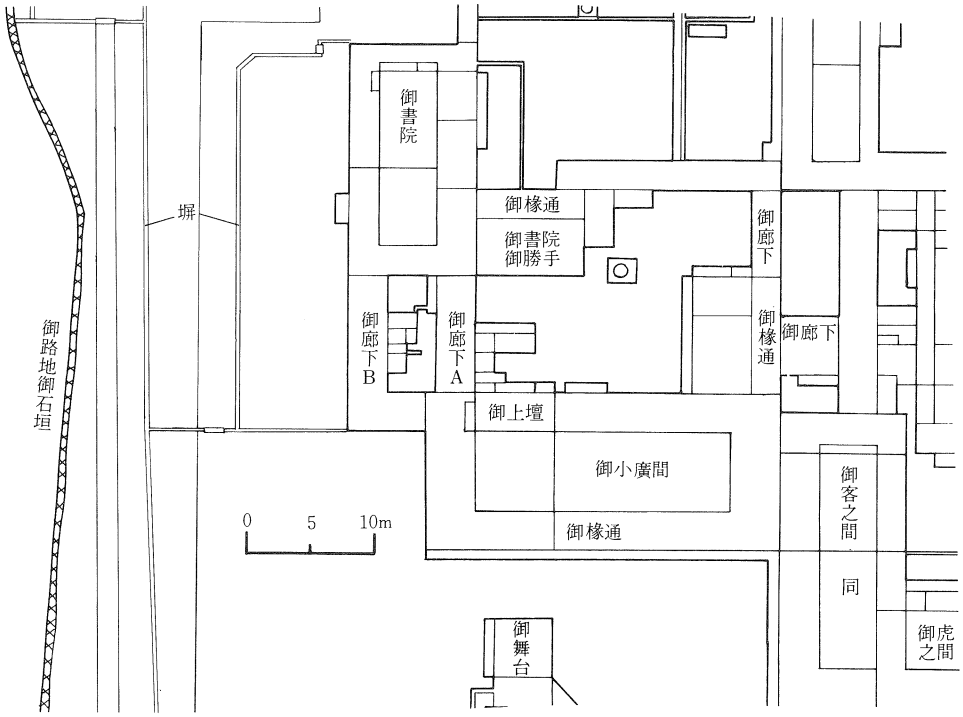
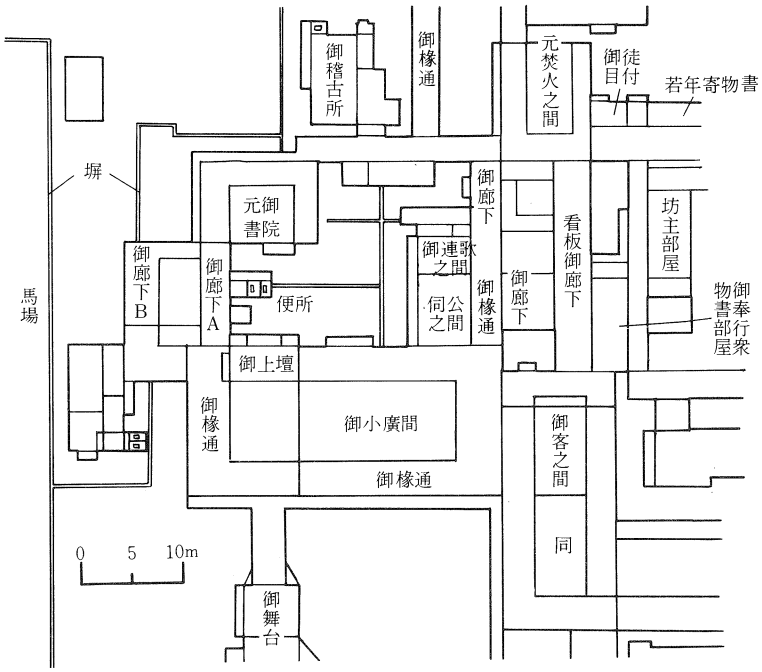


図72　礎石・石敷機能時の配置(ＮＭ２)
Fig. 72 Excavated stone floor. rows of foundation stones and/or their holes at NM2



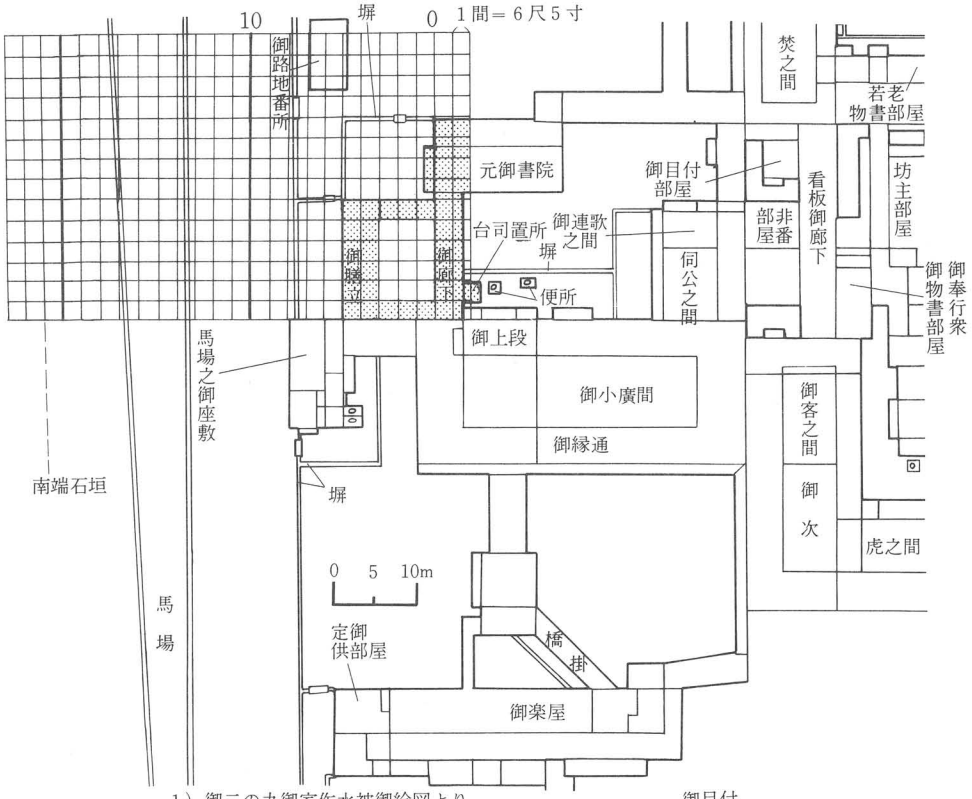
1）御二の丸御指図より



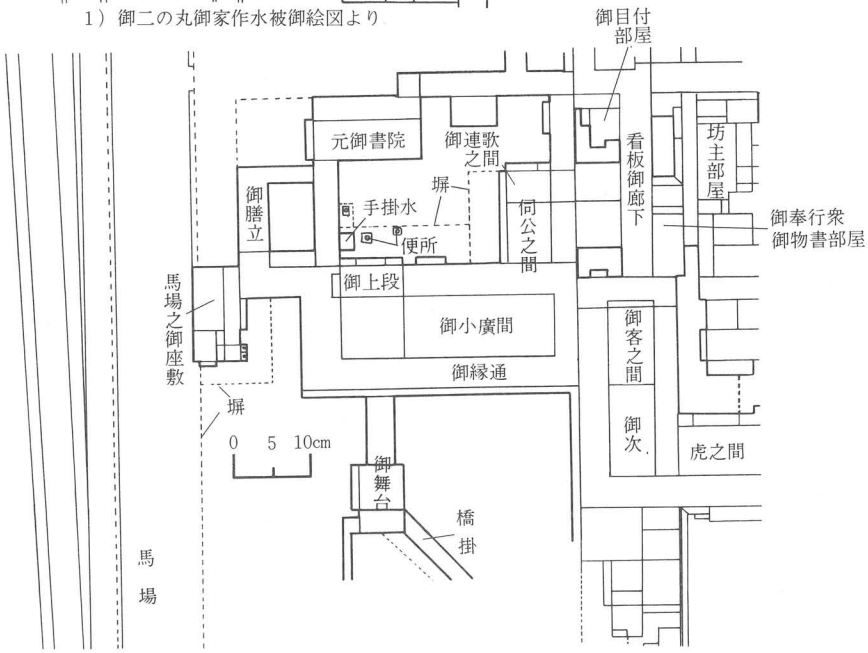
2）享和２年　御家作御絵図写より

図73　二の丸小広間附近の変遷(1)　（仙台城1967図版より）

Fig. 73 Historical transition of structures around ceremonial hall in the secondary citadel (1)



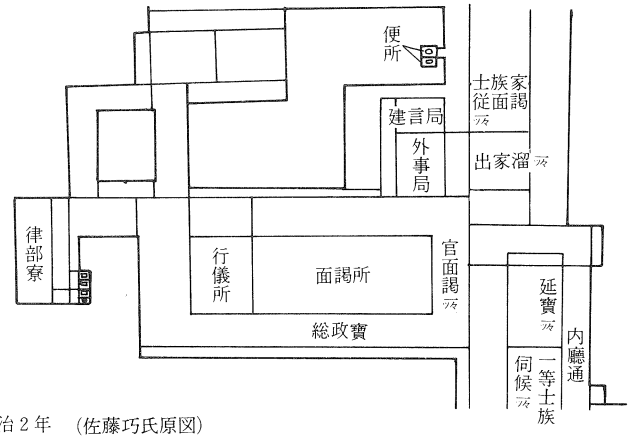
1）御二の丸御家作水被御絵図より



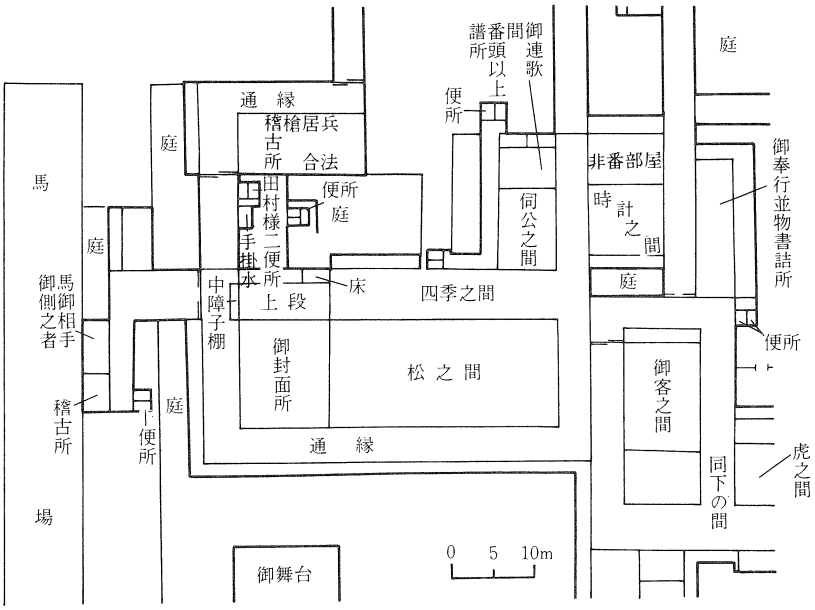
2）御二の丸御城中並御中奥下水抜溝御絵図・嘉永6年（1853）より

図74　二の丸小広間付近の変遷(2)　（仙台城1967図版より）

Fig. 74 Historical transition of structures around ceremonial hall in the secondary citadel (2)



1）明治２年　（佐藤巧氏原図）



2）時期不明第二師団作製二の丸平面図より

図75　二の丸小広間附近の変遷(3)
Fig. 75 Historical transition of structures around ceremonial hall in the secondary citadel(3)

西暦	年号	建築	人物	火事・倒壊・その他	行事
1620	天保	城山西麓 西曲輪(西館)	五郎八姫		
1629	寛永6		政宗		政宗、西屋敷で茶を賜う
1631	寛永8				西曲輪で歌伎・箏観劇
1636	寛永13		政宗死去		観桜、能
1638	寛永15	忠宗、二の丸許可 若林城より移築	忠宗		
1639	寛永16	二の丸完成 図91			
1675	延宝3	二の丸記録所 万善堂	網村		
1676	延宝4	因縁殿			
1681	天和元	新馬場			
1683	天和3	愛宕神祠			
1688	元禄元	二の丸寝所地祭 茅葺を命ず			
1690	元禄3	万善堂修造			
1691	元禄4	万善堂完成			
1692	元禄5				虎の間 三代 治家記録編纂
1699	元録12	二の丸輪蔵			
1700	元禄13	二の丸奥方			
1717	享保2		吉村	地震、城中諸所被害	
1718	享保3	二の丸等、石垣土手 普請成る			
1719	享保4			大雨城内土居崩	
1720	享保5	修復			
1736	元文元			地震 被害大	
1751	宝暦元		宗村	大雨	
1804	文化元		周宗	二の丸 中奥 雷火により焼失	
1805	文化2	再建地祭			
1806	文化3	中奥造営成る			
1809	文化6	二の丸造営成る			
1810	文化7	万善堂修復成る			
		二の丸奥対面所に 星場	斎義		
1855	安政2	二の丸因縁殿並に 愛宕神祠 再建	慶邦	二の丸因縁殿 火災	
1858	安政5	二の丸中奥馬場に 備荒倉			
1861	文久元			地震 被害大	
1868	慶応4				二の丸に軍事局を置く 仙台藩降伏 奥羽鎮撫入る 仙台藩減封（28万石）
1869	明治2				二の丸に勤政庁
1871	明治4				東北鎮台を二の丸に移す
1873	明治6				仙台鎮台と改す
1875	明治8			本丸大広間破却 城内 礎石等を榴ヶ岡へ	
1881	明治14			二の丸仙台鎮台本部全焼	
1882	明治15			二の丸仙台鎮台本営9割焼失	
1884	明治17			二の丸米蔵跡、鎮台木材小屋 焼失	
1945	昭和20	9、米軍進駐開始 二の丸跡を埋め立て 住宅等を建築		7、空襲により大手門脇櫓 衛成衛兵所 (二の丸能舞台 楽屋遺構 など全焼)	

表34 仙台城二の丸建築関係年表（三原良吉1967より）

Table. 34 Chronological table on the Sendai Castle

6．二の丸の焼失について

明治15年(1882年) 9月7日二の丸の焼失により、寛永15年(1638年)以来約250年間にわたり、偉容を誇ってきた二の丸のほぼ全殿舎が灰燼に帰した。これ以降、大手門や裏池、石垣などの一部の遺構を除いて、二の丸をしのぶものはほとんどなくなってしまったといってよい。火事の原因については、当時の陸羽日々新聞が火災発生後3日間にわたり、記事を掲載している。それによれば、火事の原因は銃工場として使用していた旧台所内で、砲隊が使用していたコールタール油に火が入り、茅葺の屋根に燃え広がった結果、全焼するに至ったとのことである。

これを見ると、仙台城二の丸は、旧藩時代の使用目的や呼称に関係なく、鎮台の建物として使用されていたことがうかがわれ、このことにより小広間裏石敷遺構が単なるごみ捨て場として使用されていたことも間接的ながら裏づけられる。

火災の様子や、さまざまなエピソードが講談風にまとめられた記事は、当時の状況を窺うのに格好の資料であることから、全文を以下に掲載した。注

(明治15年9月8日　陸羽日々新聞)

仙台鎮台本営出火、昨7日午前11時少し過ぎる頃、突然火事ありと叫ぶものあり何処の火事やと逸早く火の見に上り彼方を見やれば、川内なる青葉城、即ち鎮台本営にて、黒煙天を焦がすばかりなれば、すわ大事なりと筆投げ捨て、息をも継かず片平町の公園地まで駈付けたるに、火勢の鋭こと言わん方なく非常の号砲號鐘を、聞き付け駈集りたる各町の消防組警察署の喞筒、本営の兵士等八方より駈廻りて、尽力せられしも、看る看る参謀部を始め、各局課、輜重兵営、工兵第二方面本署等凡そ178棟に燃広がり榴ケ岡の兵営より一大隊ばかり駈足にて走せ付けられし時分は、早や下火のころにてありしが、正午12時30分頃全く鎮火なしたり、扨て焼残りしは衛戍兵の詰所、金庫、新築金庫、新築職工場、第二方面倉庫、新築廐、被服庫、火薬庫并に、大門の十棟の外物置小屋等なるが、雑と九分通の焼失なるべし。火薬庫へ火の廻らざりしは、実に風少なかりし僥倖なりしが兵士二小隊ばかり同庫の近傍に立並らび、又、同方角への火は、殊に烈しく防がれざる容子なりし。若し火薬庫にして破裂せば或いは、市街も基難を免がれ得ざりしならん。比日風位は、最初は西なりしが、火事半より南となり、火薬庫へ向き少しは危険なりしも風力殊に微弱にして、煙の延程には、あらざりし。

扨て、当本営は、伊達政宗公が慶長十二丁未の年始めで、ここに本城を据え、これを青葉城と號し二の丸は二代目の藩主義山公が元和年中に築かれしにて、文化元年6月24日雷火の為め、全城炎上し尋で新築ありて明治5年4月に至り、ここに鎮台本営を置かれたるなりと、尚洩れたることは後號に記すべし。

鎮台事務所、右出火の報あるや、県庁より和達少書記官が、公園まで出張られ、官部七等属の見舞として、本営へ遣わされし処同営に於ては差当り、事務所に差支ゆる旨を似て、公園地内元勧工場を借用し度しとの義に付、此趣を県令へ復命せしめられしに、聊か差支これなき故御用あるべしと、回

答せられたるよし。

（明治15年９月９日　陸羽日々新聞）

仙台鎮台本営出火続報　旧伊達藩士族中に去る者ありと聞えたる当区北四番丁、沼澤興三郎氏は、一昨日鎮台本営出火せりとの警報を聞くや、矢を射る如く旧大手前に駈往き。吁伊達家累代居住し玉いし青葉城も今日を限りに一片の烟と成果ること残念とや云わん、残り惜しとや云わん、心魂ともに焼るるが如しと路上に仆れて、大声を発し、泣叫びつつ転回る様の可笑くてや、傍に居合せし矢野某なる者が思はずも一笑したるに、沼澤氏はムックと起き、此の恩知らずめがと云いさま、飛掛りて矢庭に蹴倒し、数多度踏躙りしかども、流石に返す詞のなくてや、平誤りにあやまりながら、這這何へか逃げ去りしと云う。沼澤氏にしては、左もあるべし。

右出火の火元は未だ判然せざる由なれども焼始めしは、旧藩の頃御台所と称えし萱葺の建物（当時銃工場）なりとの事。又本営に火の揚るや、火薬庫の破烈を恐れ、川内の家家にては、一人も残らず逃げ失せ、公園下辺にも余程逃けし向もありしが、逃げ損となりしは、幸中の幸なりし。

又、本営内に、入獄の者18名ありたるが、火の揚るや直に皆な門外へ解放せられしも、一人として逃ぐる者なく、何も踏止まりて、消防に尽力せしは、殊勝なりしと。

また営内に繋ぎ置かれたる馬80余頭は、直に門外へ逐い出されるると、其処彼処にて蹴り合を始め怪我せしも多く、驚いて崖より落ち、其まま倒れたるも二頭あり、何れへ馳行しか、今に行方の知ぬも二頭あるよし。

怪我人も五・六名ある由なるが、中にも傳令使長中原少尉は、余程の火傷にて、昨日より出勤なかりしと云う。

鎮台仮事務所は、愈愈片平町公園地の元勧工場へ設けられたり。

参謀部副官大尉富岡三蔵氏は、出火見舞の答礼として、昨日県庁、警察本署、両裁判所等へ参られたるよしに聞く。

また、本営の火事最中、木町通北56番丁の間の、南官行宅の草屋根へ飛火し、ポッと燃上りしが、ソレと云て消し止め大事には至らしめざりしと。

（明治15年９月10日　陸羽日々新聞）

本営出火の火元　仙台鎮台本営が、去七日を以て焼失せる其火元の未だ分らずにあるまま、世説區區なりしが、今確なる筋より聞く所によれば、右は同営内兵器磨場なる砲隊用掃杖本部に於て、コールタール油(石炭の蒸溜して油となるもの)を、塗抹する際、其油が火の上に滴り落ると均しく火は飛散りて、傍なる油壺に入るや、俄然火焔に飛騰して、折柄天気続きに燥き切たる茅葺の屋根裏につきざれば、何かは堪らん忽ち屋根から屋根へ燃移り、僅僅一時間余にして、東北第一の大城を蕩燼するに至りしなりと云う。　（梶原　洋）

注　かなづかいとふりがなは適宜改めた。

7．NM1・2・3調査の意義

仙台藩主の居館として、また藩政の中心として、約250年間にわたって偉容を誇ってきた仙台城二の丸は、明治15年(1882年)に焼失して以来、そのよすがすら窺い知ることは難しかった。その後、旧帝国陸軍第二師団司令部として、また戦後は米軍の駐留地として、約70年間にわたり、一般人の立入を拒む聖域であった。失われた二の丸について関心がもたれ、調査が可能になったのは、ようやく東北大学のキャンパスとして平和を取り戻した昭和32年(1957)以降であり、実際に調査が始まったのは昭和58年(1983年)である。

調査の結果、遺構・遺物の遺存状態が予想以上に良好で、絵図ともよく照合し、さらに絵図に示されていない建物跡なども確認されたことから、二の丸の研究に新な資料を提供すると共に、旧藩時代から明治初期にかけての城内の暮らしぶりの一端を明らかにすることができた。

NM1は二の丸の西端にあたり、お裏林の斜面に続く平場と推定される。中心部からは外れてはいるものの、暗渠の溝や竪穴状ピットなど江戸時代の遺構が検出された。遺物も少量ではあるが陶磁器、瓦などが出土した。(Ⅱ章2節参照)。

NM2の礎石群とそれに伴う石敷遺構は、2代目藩主忠宗の創建した二の丸の中心部の小広間の裏手にあたる御廊下とその側の張り出し部分と推定される。(Ⅲ章参照)。貼り出し部分の石敷遺構は、その本来の機能を失ってから明治15年の焼失時まで、ごみ捨て場として使われており、中から多量の遺物が出土した。大部分を占める陶磁器は、切込、平清水、大堀など近隣の窯のものが多く、伊万里や瀬戸はきわめて少ない(Ⅱ章3節、Ⅶ章参照)。陶磁器の使用・廃棄時期は幕末から、明治10年代と推定される。石敷遺構の中からはこの他に屋根材・箸などの木製品、瓦、自然遺物も出土している。小広間の裏がごみ捨て場として使われたこと、陶磁器が日常雑器であることなどを考慮すると、石敷遺構に遺物が廃棄された時期は幕末ではなく、藩の権威が消失した明治4年の東北鎮台設置以後と推定される。火災時以後の層からは多量に焼融ガラスが出土し、当時、ガラス窓が使われていた事が明らかとなった(Ⅷ章参照)。この段階の陶磁器には切込産のものが含まれておらず、文様にも若干違いが見られる(Ⅱ章3節参照)。しかし、互いに接合するものもあり、石敷内への廃棄と焼失が時期的に比較的近いことを示唆している。

石敷遺構から、タイ・タラ・サケなどの魚骨、シジミなどの貝類が出土し、鎮台当時の食生活の一端を窺うことができる。焼失後の層とピットからはイノシシの焼けた骨片など哺乳動物の骨やガン・カモ種の鳥類骨が発見された。この遺存体は石敷内の遺存体と種類が異っている。

下層からは溝が検出されているが、これは二の丸創建時より古いと推定される。ただし、礎石の方向と一致することから、それほど時を隔てたものではない。

ＮＭ３の遺構は大きく３時期にわけられる。最古の遺構の中で、池跡は二の丸に伴う石垣に壊されていることから、それより古く、二の丸造営以前にあった伊達宗泰邸の遺構の一部分である可能性もある。池を壊して作られた石垣は、絵図から二の丸創建時に構築された二の丸最南端の外郭線と推定される。掘立柱の建物は池を埋め戻した層の上面で検出されたが、時期は不明である。この他、明治以降と考えられる遺構が確認された。(Ⅱ章４節参照)。

遺物の中で陶磁器はＮＭ２出土のものに類似する。瓦では丸瓦にＮＭ２出土のものと大きさの上で異るものがあり、NM3とNM2の間の時期差を反映していると推定される。

ＮＭ２の石敷遺構内の土壌の花粉分析の結果と、出土した植物の種子の同定結果により、今から約100年ほど前の附近の植生は、基本的に現在の植物園附近の植生と大きく異なるところはない。ただ、花粉分析から見て、現在よりも松・杉の比率が高かったことがうかがわれる(Ⅵ章参照)。また、桜はソメイヨシノではなくエドヒガンの種子が発見され、屋敷地内に植えられ、他の樹木と共に、庭園的な景観を呈していた可能性がある(Ⅴ章参照)。さらに、馬場付近にはススキなどの雑草が生い茂り、その周囲を松や杉が囲むという景観が推定される。二の丸の城内とは異なり、お裏林にはモミ・ブナ・コナラ・シデ、沢筋にはハンノキ・ヤナギなどが繁茂していたようである(Ⅴ章、Ⅵ章参照)。

調査によって明らかになったように、二の丸跡の保存状態は概して良好である。今後、計画的に、調査と保存を進め、研究機関としての大学と貴重な歴史的環境との共存を図ることが是非とも必要である。　　(梶原　洋)

第Ⅲ章　仙台城二の丸の小広間について

佐　藤　　巧

1．二の丸殿舎の概要

仙台城本丸殿舎の中心は大広間であったが、二の丸殿舎の中心は小広間である。本丸殿舎の利用期間は伊達政宗一代の約20年に過ぎず、二代の忠宗以来幕末に至る二百二十余年は二の丸が政庁及び私邸の中心であり、近世城郭殿舎としての事実上の機能は、あげて二の丸に移行した。寛永13年(1636)襲封した忠宗は、同15年、早速二の丸の普請を起こした。正保年間の奥州仙台城絵図によると、「本丸、山城、東西百三十五間、南北百四十七間、町屋之地形ニ 卅二間半高」、「二之丸、東西百七十二間、南北百十一間、本丸地形ニ廿 七間低」とあり、本丸地形の外郭線に較べ、二の丸のそれははるかに単純に描かれている。二の丸地形の西北方に道路を挟んで別に「東西百間、南北六十間、二之丸地形ニ同ジ」とある西屋敷が接続している。二の丸の敷地は後にはこの西屋敷にまで拡張されるが、当初においてはその面積は本丸に較べてとくに広大なものではなかった。

本丸敷地の輪郭は極めて複雑で、かつ西南部において起伏があり、立地上からも整然たる建造物の配列に難点があった。ほぼ矩形に近い、なだらかな傾斜面に加え、本丸より遥かに低く、城下との連絡が容易であることが新しい時代の城館敷地として強い魅力となったであろう。

「忠宗君治家記録引証記」によれば、まず焼火之間、虎之間、納戸、茶道部屋、鎗之間、上大所、風呂屋、大大所、小性之間、用之間、肴部屋、鷹部屋、筭用部屋が寛永15年12月14日迄に、次いで御座間、御寝所、奥方御寝所が同16年３月28日に上棟し、更に同16年５月より12月迄の間に蔵、大手門(詰の門か)、大書院、小廣間、舞台、歩之間が順次上棟した。[1]　政宗死去に伴う若林城経営廃止により、その撤去建築の部材がここに運ばれて転用されたものもあった。[2]ここにいう大手門は詰の門の誤りとみられる。

同16年６月にはやくも移徙の祝儀を行ない、同17年の元日儀式は二の丸において行なわれた。[3]本丸での諸規式は心経会、繊法、護摩供等の仏儀を残すのみで、他はことごとく二の丸に移行する。即ちこれより二の丸が事実上の仙台城の中心となった。

文化元年(1804年)６月24日、仙台城二の丸及び中奥は天災に罹り堂宇ことごとく灰燼に帰した。[4]　この文化元年の火災を前後にして、二の丸殿舎の構成に大きな違いのなかったことは、その前後の絵図の比較(図76及び付図２・３を参照)や儀式帳などから確認される。[5]　しかしこれらの図によって直ちに創建期ないし初期の様子を窺い知ろうとするには無理がある。「治家記録」によっても綱村の時代に一連の大きな改造工事の事実が認められるし、寛永の引証記の中に見えた大書院の姿は後世図には無く、また後世図にみられる内対面所（奥対面所）の如きは引証記中

に見当らない。即ち創建期の殿舎構成と後世図との間にかなりの変化が予想されるし、またそれなら後世図に示される殿舎構成が定ったのは何時の事かと改めて問題となる。

治家記録によると、綱村の時代、とくに元禄初年を中心として一連の新築、改築工事の行なわれた事実がある。例えば元禄3年(1690)に新造御休息所への移徙、[6] 同4年に新造御座間への移徙、[7] 萬善堂の移築、[8] 数寄屋、園の新築、[9] また同3年までに新焼火間、[10] 同7年には新舞台、新座敷が出来、[11] 同8年には新座敷を内対面所と称し、[12] 他方書院の語およびその用例が見えなくなるのがこの時期である。

従ってこの元禄初年を前後として書院が失われるかないしは使用されない状態となり、新たに寝所、休息所、御座間、内対面所が出来、また新たに焼火間が設けられることにより従来の焼火間を元焼火間と称しているなど、構成上の移動、変化が指摘できる。この改造以後においても多少の改変、修覆が行なわれているが、主に奥方関係の作事が多く、表向きにおいてはその構成を変えるような大改造は無かった。

ここに二の丸御指図と称する絵図(付図2)がある。[13] 年代不明であるが、後世の幕末図と較べてかなり古い時期のものと考えられる。東面の詰之門を入った玄関の右脇きに徒之間が、そして玄関につづいて中之間、次之間、廣間より成る一棟があり、この奥に虎之間、客之間、小廣間、書院が階段状に連り、客之間の奥、書院の北裏に焼火間、その奥に御座間、御寝所が続く。焼火間と御座間との間に小姓衆之間、小姓衆之間の裏に風呂屋がある。これらの建物の背後に納戸、上大所、大大所、肴部屋等が配置される。西南の小高いところに数寄屋関係の建物がある。この図面の示す建物名と寛永時代の引証記の述べる建物名とはよく一致している。そして奥関係諸建築の記入はないが、後世図にみるような複雑さがなく、単純、明確な構成配列を示し、初期殿舎の特徴をよく表わしている。

二の丸の初期の建物名、部屋名を治家記録で調べてみると、寛永時代にはまず書院、御座間、小廣間(大廣間とある)、数寄屋、鎖ノ間、正保年間には小廣間、焼火間、番所、談合ノ間、用ノ間が加わり、万治年間にはさらに小姓衆ノ間、物書部屋、虎ノ間、夜居ノ間、廣間等が加わる。延宝年中には客ノ間、中ノ間、次ノ間、學問所、小書院、虎ノ間押込、連歌ノ間、書院勝手ノ間、御座間寄場、御寝所、小廣間裏座敷、書院裡座敷、伺公ノ間、祠堂等が、そして天和、貞享年間には対面所、奉行ノ間、馬場座敷、大所、園、時計ノ間、小廣間勝手座敷、鑑板廊下、内舞台、御座間園、因縁殿、萬善堂等が加わってみえる。これらの中には同一の建物で別呼称のものも含まれている。[14]

いずれにしても先述の二の丸指図に示された部屋名は大体延宝以前に出揃っている。この指図の作成年代の確かなことは分らないが、書院が存在し内対面所がない点から、元禄を中心とした改造より以前の状態を示すものであることは明らかである。

書院が用いられなくなったのは天和2年(1682)以降であるが、その頃には小廣間脇に馬場座敷が設けられていたが、馬場座敷の語及び用例は天和元年にすでに現われている。[15] この指図には未だ馬場座敷が見えていないので、この図の内容は天和以後のものではあり得ない。寛永から延宝頃にかけての二の丸初期の殿舎の状態を伝えるものと考えてよい。

2. 小広間の建築

小廣間は上段、次之間、そしてこれに鉤の手に三之間が続き、入側(畳縁)が巡り、前面には切目縁が付く。上段、次之間、そして表舞台が一直線上に並ぶ。上段、次之間を結ぶ上・下の線と上段と表舞台との線とが直交する本丸大広間を古式とすれば新式の座敷配列をとっている。上段は4間に2間の16畳、次之間は柱間3間に3間(実長4間四方)の32畳、三之間は柱間3間に7間(実長4間に9間)の72畳。入側(縁通り)は東面、西面ともに2間はば、南面・北面ともに2間半はばで、(嘉永6年、即ち二の丸再興後の小広間図では北面の椽通のみ1間半と狭くなっている)(付図3)、総面積145坪となる。この三之間の広さについては、図によって(例えば文化元年二丸御造営図(巻頭図版2下)。この図は文化元年6月24日二の丸焼失直後に作成された再興計画図とみられる)実長4間に9間半と取れるように描かれていて、南北の長さにおいて半間分の差がある。

文化6年(1809)4月再興落成してから明治15年まで存在していた二の丸につき、「尊皇事蹟」(矢野顕蔵著)では、

松の間(三之間のこと、筆者註)、七十二畳。唐紙南面四枚、松に牝雉。西十四枚、松。北雄雉の画。惣金地、東洋の筆……

と記述している。七十二畳とあるから、4間に9間であったと考えられ、従って小広間の規模は創建当初から幕末まで変化がなかったものとみてよい。[16]

小広間は、本丸大広間の約6割7分程の広さであり、大広間に比べて間取りが単純化され、規模が縮少されているのが注目される。小広間と称される所以である。しかし次之間と三之間との間の襖を取り払って使用すれば120畳の大室となり、一空間の規模としては大広間に較べてとくにおとるものではない。前方に曲折して接続する客の間は、本丸大広間の鹿の間、即ち「色代」が析出、変様したものと考えられるが、この客之間は上・下の2室、総面積97.5坪で遠侍を除けば小広間に次ぐ規模をもち、従ってこれを加えれば優に大広間を淩駕する。

寛永の二の丸創建時において『引証記』は「小広間」とするのに対し、『治家記録』は「大広間」としている。[17] 治家記録中の二の丸大広間なる呼称は寛永20年6月まで続くが、やがて正保元年10月12日、嗣君(綱宗)の使用例から小広間に変り、以後は小広間の呼称を続ける。二の丸の居館を独立の屋敷として取り扱う立場からは、殿舎群の中心となる晴れの建物を大広間と称して

も、当時の慣例からは一向に差し支えないし、とくに150坪にも及ぼうとする独立棟に対してはあながち誤った呼称とは言えない。しかし仙台城総体としてみるとき、すでに本丸に大広間が存在するので、あえて小広間と称して区別したものと思われる。[18] 『引証記』はその点を意識して峻別していたのに対し、『治家記録』の編者には暫くの間なお躊躇するところがあったためでもあろうか。

一屋敷内に晴の儀式関係の空間として大広間、小広間の二つの建物を持つ場合が近世初頭の大大名邸にみられるが、大広間の建築が遅れるか、あるいは何らかの理由でこれを欠くときに小広間がその機能を兼ねるということはあっても、当初から屋敷の中心施設として小広間を建てる例は余りみられない。

伊達家においては寛文度の江戸上屋敷においても中心建物が小広間であり、この名称は仙台城、江戸上邸ともに後世まで用いられ、通常の大書院、表書院の呼称を採用しなかった。要するに寛永以後においては主要中心建物を常に小広間と呼称するのが伊達家の伝統となっていた。

小広間の奥に続く書院は上之間(3間に5間、30畳)、次之間(3間に4間、24畳)、周囲に縁通りを付し、78坪の広さをもつ。治家記録では常に書院と記されているが、創建期の引証記には大書院とある。書院の裏には書院勝手が付いていた。

小広間上段の間の床、棚、および脇壁は金の張り付け、次之間の南面、東面、そして三之間の東面、北面は障子で、上に欄間を設けていた。また次之間と三之間の境の襖、三之間の西面の襖はともに金襖であった。

元禄以前まで小広間奥にあって活躍していた書院においては床の張り付け、腰障子の張り付け、襖などにはすべて墨絵が画かれ、意匠的にも絢爛たる小広間とは対照的であった。[19]

玄関より小広間に至る間に徒之間(40.5坪)、広間(実長3間半に6間)、次之間(同3間半に4間)、中之間(同3間半に7間。中之間、次之間、広間は合して一棟を構成。前面に縁側、背後にそれぞれ夜着部屋を有する。総面積123.5坪。この棟を総称してまた広間と言う)、虎之間(同3間に7間。縁側、夜着部屋を含んで42坪)の、いわゆる遠侍部分が、そして客之間が介在する。この関係は本丸の場合と同巧であるが、客之間が加わり、より延長され、拡大されているところに相違がある。

客之間、焼火之間は上・下の二室より成り、御座間、御寝所はともに上段をもった形式である。客之間、焼火之間、伺公之間(連歌之間とも云う。二の丸指図にはここの名称が欠けている)には床(とこ)が設けられている。小広間、書院とともに客之間、焼火之間、伺公之間は比較的上位の座敷であることを物語り、いずれも上・下の二間構成をとる点、他室との格の差を窺うことができる。

遠侍、客之間、小広間、書院、御座間、御寝所は創立期の二丸殿舎構成のいわば骨格をなす

ものであり、そのうち遠侍より書院に至り、各棟の線を交互に水平、垂直に置きながら、東北より西南にわたって斜の方向に、すなわち階段状に連続させていて、配列上の大きな特徴となっている。そして、それにもかかわらず客之間の、床(とこ)のまを背にした上・下の線、小広間の同じく上・下の線、書院の同じく上・下の線は同一方向に統一されている。

客之間の南面、小広間の東面、南面、書院の南面はともに開放され、この部には腰障子が施設され、従って採光上も有利である。小広間では座敷利用の面で、上段と次之間と縁通りによる方法と、次之間と三之間と縁通りとによる方法と、二通りが指摘できるが、その配置と間取りと採光とが巧く工夫されている。また小広間の上段と次之間とを結ぶ結ぶ線上に表舞台が位置し、主君は小広間の床(とこ)のまを背にした観能が可能であり、また小広間と客之間で舞台を抱く形になり、それらの間に格好の観劇空間を形成し、客之間の前面は脇正面として利用されうるなど、建築計画上もすぐれた配慮がなされている。

ここでは本丸のように大広間を中心に、そしてそれを最前面に置く配置方法から離れて、むしろ諸建築の相互関係が重視され、綜合によって効果を発揮すること、そして使用上の利便ということが強く出されているようにみうけられる。

敷地の西南隅やや小高いところに蔵が配され、御座間の前庭には池があり、前庭前の土手を越えた小高い位置に数寄屋関係の建物が置かれ、数寄屋、鍍之間、数寄屋台所、数寄屋書院(か)を備え、御座間、書院から長い廊下によって連絡し、また二の丸敷地の正面南より路地を通り、「ひとやどり」を経て同じく数寄屋に達するようになっている。

正面の詰之門を入ってやや右折して表玄関に到るが、向って左側の塀地門を通り、舞台後方を廻って小広間、書院に達する径路も工夫されている。詰之門より右手の廐の前を通って台所玄関、さらに遠侍の裏手の台所と惣御次(そうおつぎ)との間に設けられた中之口に導かれる。

北側の北門(後の台所門)の線と、以上の諸建物との間の空白の地が奥向建物の存在する敷地に当ると考えられるが、この二の丸指図にはそこの建物の記入が全くない。未だ計画に無かったためか、意図的に欠いたものか不詳である。この図の北門の線がほぼ二の丸敷地の北限と見做されるが、これは正保年間仙台城下図中の二の丸敷地と較べても納得できる。即ちこれが初期二の丸敷地の限界であったと考える。

すでに述べたように、元禄を境に二の丸殿舎の構成に大きな変化があったが、小広間の近辺で元禄改造後の大きな変動としては、まず書院が失われ、遺ったもとの書院勝手座敷を「元御書院」と称するに至ったこと、もとの御座間の位置に内対面所(奥対面所)を新設したこと、これに伴って小広間を表対面所とも呼ぶことがあること、小広間から書院に至る廊下の出隅の位置に馬場座敷が新設されたことである。

内対面所は元禄9年(1696)、上段の工事を竣えることによって完成した。上段、次之間、三

之間と裏の座敷および附属した内舞台から成り、全体で81坪の広さをもつ。上段、次之間、三之間、舞台が一直線となっているのも新しい形式と言えよう。三之間、裏座敷、舞台のあたりが旧御座間の位置に相当する。二の丸の馬場座敷は天和元年(1681)9月に竣工している。即ち治家記録に

二丸新馬場馬御覧ノ座敷落成ニ因テ御出御御膳二汁五飯侍食伊達将監殿石川主馬殿伊達兵庫殿小梁川修理黒木上野佐々伊賀於御次奥山大炊ニ料理ヲ賜フ、畢テ於新馬場馬麾御乗初アリ、中地半右衛門馬御覧ノ座敷作事奉行ヲ命セラル落成ニ因テ鞍一口賞賜セラル

天和元・九・廿二

とある。馬場馬御覧ノ座敷を畧して馬場座敷と称するが、この座敷の前面にはこの時同時に馬場が新設された。

小広間の性格を知るにはその用法をみる必要がある。以下に他の主要殿舎のそれと比較しながら簡単に触れて置きたい。

3. 小広間の性格

元禄初年を中心に二の丸殿舎の構成に大きな変化のあった事実を指摘したが、その前後において如何なる差異が使用面にみられるか。

年始御礼は最も重要な儀式であるが、本丸時代においては大廣間が、二の丸においては専ら小広間が中心であった(表35参照)。御座間で連枝、奉行、近習とともに祝儀が行なわれ、ついで一番座、二番座の召出以上の御礼は小広間で行なわれる。諸役人、大番組以下の諸士の目見も小広間である。書院においても一時、母公、北方の使者、一門衆の嗣子などの御礼が行なわれることもあったが、これは年始儀式としてはいわば従属的なものであったようで、書院で行なわれないこともある。

元禄改造後は一時儀式の中心が内対面所に移ったが、後に再び元に戻り、以後幕末まで変りがない。二番座が二日目に行なわれるようになったのが改造後における主な違いであって、場所の移動はない。

月次の御礼もまた欠くことの出来ない行事であって、本丸では大広間で行なわれたが、二の丸に移ってからは一時書院がその中心となったが、綱村の延宝6年(1678)頃から全く小廣間に移行した(表36参照)。元禄改造後は書院が消失し、内対面所が新設される。連枝、奉行は御座間で、一門衆は内対面所、それ以外は小広間とに分けられる。なお天和元年頃から治家記録において対面所の呼称が現われるが、全く小廣間と同じである。[20] 狭義には小広間のうち、上段と次之間によって構成する一画を呼ぶ場合が多い。[21] 内対面所が出来てからは一般に表対面所と呼んで区別する。

本　　丸	御座間	書　院	大廣間
寛永6・1・1	○		◎
二　　丸 (元禄改造前)	御座間	書　院	小廣間
万治3・1・1	○		◎
延宝8・1・1	○	○	◎
1・2	○	○	○
天和2・1・1	○		◎
1・2	○		○
1・3	○		○
二　　丸 (元禄改造後)	御座間	内対面所	小廣間 (表対面所)
元禄10・1・1	○	◎	○
1・2	○	◎	○
1・3	○		○
享保4・1・1	○		◎
1・2	○		◎
宝暦9・9・1	○		◎
1・2	○		◎
文久2・1・1	○		◎
1・2	○		◎
備　　考	寺院衆は除く。 ◎は一番座、二番座で年始御礼の中心をなす。		

表35　年始御礼と建物との関係

〔治家記録、仙台城年始入賀次第書による〕

Table 35　Location of ceremonial new year's greetings

御礼行為の場合、小廣間(表対面所)は上段と次之間(下段とも云う)、さらにはその縁通り(この部は2間幅(はば)の畳縁)とを上・下の軸として儀式場に用いる時と、次之間と三之間(この時は小広間の上之間、下之間と云う場合がある)を上・下軸として一つの式場として使う時とがあるが、月次の御礼のときは、例えば「御対面所へ御出……上段ニ御着座当番并在府ノ一家一族衆当日ノ御礼畢テ間ノ襖障子開之諸役人一同ニ御礼」[22]とあるように、一家、一族衆の御礼は前者、諸役人ノ御礼は後者と、同時に二様の座敷利用が行なわれ、これが定型化している。

その他の主要な儀式について、元禄改造の以前と以後とに分けてみる(表37参照)。これらの儀式は伊達家において戦国大名の時代より引き続き行なわれて来たものが多いのであるが、[23]改造後に永く内対面所に移行したものがないのは注目すべきである(初卯の儀式が一時、内対面

本　　丸	御座間	書　　院	大　　廣　　間
慶長18(11・15)			一家、一族
二　　丸 (元禄改造前)	御座間	書　　院	小　　広　　間
寛永20(6・1)		一門、一家、一族	諸　　士
明暦3(2・15)		一門、一家、一族	惣　　士
延宝3(10・28)		一門、一家、一族	
延宝6(3・28)		連枝	一門、一家、一族
天和2(2・28)			一門、一家、一族
二　　丸 (元禄改造後)	御座間	内対面所	小　　廣　　間 (表　対　面　所)
元禄7(11・15)	連枝・奉行	一門	一家、一族、諸役人
享保9(4・28)	連枝・奉行	一門	詰所以上
宝暦2(11・28)	連枝・奉行	一門	一家、一族、諸役人
文政11(8・1)	奉行	一門	一家、一族、詰所以上諸役人

表36　月次御礼と建物との関係

〔治家記録、御入部以後諸御規式並御参詣等之覚による〕

Table 36　Location of ceremonial monthly greetings

	連歌	政治初	謡初	法間	初卯	玄猪	歌会初	講釈初	仕舞初
延宝4～8 (元禄改造前)	連歌間	御座間	書院	小広間	小広間	小広間	御座間		
元禄8～16 (元禄改造後)	連歌間	御座間	小広間 御座間	小広間	小広間 ※	御座間	御座間	内対面所	内対面所

※ 元禄14・1・6は内対面所にて行なわれる

表37　主なる年中儀式と建物との関係

〔青山公治家記録による〕

Table 37　Location of main ceremonies

所で行なわれるが、後に元へ戻る)。伝統的な諸儀は御座間と小広間を軸として営まれるものであることを知る。書院はもともと儀式、対面の場としての性格はうすいというべく、謡初の儀が以前に書院で行なわれていたのも、謡初が対面ではなく、饗応を主としたものであったからと思われる。書院に上段の施設が無いのもその点から理解されよう。

謡初の儀は江戸藩邸においても書院で行なわれ、大名、旗本衆を招請しているが、仙台ではこの謡初に参加するものが自家の家臣に限られているのも、城館におけるこの種の儀式の特色とみられる。[24]

天和2年より元禄6年に至る間は、書院が無くなり(直ちに破却されたものか何うか不詳であるが、少くともこの時期には使用例がみられない)、そして内対面所は未だ造立されない時

期に当るが、この時には玄猪の儀は御座間で行なわれたが、[25] 謡初は小広間で行なわれた。[26]

講釈初、仕舞初の儀式は新設の内対面所、内舞台(内対面所の前面に接続する座敷舞台)とともに新たに加わり、以後二の丸における恒例の行事となったことも注目に値する。[27]

つぎに饗応、接客の面についてみると、将軍家より鶴拝領の上使の応対は、寛永17年の時のみ書院で面接し、御座間で饗しているが、以後の寛永18年、同20年、正保2年、慶安2年等の例ではいずれも小広間で面接し(鶴を小廣間上段に置く)、書院で饗応し、表で(小広間で)能、数寄屋で茶、鎖之間(くさりのま)に出て帰駕という順序で行なわれている。[28] その拝領の鶴は直ちに家臣達に配分されるが、「朝御拝領ノ鶴御披、御一門中ハ書院、一家一族ノ族ハ小広間、御家老及ヒ番頭、御相伴ノ輩ハ御談合ノ間、焼火ノ間廊下、惣士ハ御用ノ間ニ於テ御料理」[29]を賜っており、饗膳の場として、書院は最上位の使われ方を示している。

延宝3年(1675)伊達綱村初入部の際に、父君・母公よりの賀使は書院で拝謁し、焼火之間で料理を賜り、稲葉氏(綱村夫人の里方)よりの使者は書院で拝謁し、客之間で料理を賜り、そして諸大名よりの賀使はすべて小広間で接見し、客之間で料理をうけている。[30] 即ち使者の性格により、接見の場所、饗応の場所をそれぞれ異にしている。そして書院がかく拝謁の場所として用いられることがあっても、小広間に較べてより内向きの性質をもつことが特徴的である。

奉行職(家老職)を命ぜられるとき、命ぜられるのは御座間で、その御礼は小広間で行ない、そして料理は書院で賜る。[31]

元禄4年(1691)、即ち書院も内対面所もともに無いかないしは用いられていない時期に、田村右京大夫参勤に就いて挨拶のため登城した際は、右京大夫はまず小広間に着座し、次いで御座間に請じ入れられて面接し、かつ饗をうけている。[32] 新たに内対面所が出来た後の元禄10年、鉄牛和尚登城し、内対面所で暫く待ってから御座間において饗応された。[33] 八重姫入輿調済を賀するため、元禄11年、水戸家より参じた使者はまず客之間に案内され、表対面所で接見し、口状を述べ、盃を賜っている。[34] 元禄11年8月、「公去年御能命セラレ且御能拝見ノ賀儀トシテ能アリ。一門一家一族衆諸役人及大番組等ニ至テ拝見ヲ命セラ」れた時は、一門衆、同子息、一家、一族衆は対面所(小広間)、家老衆は内対面所裏座敷、大番頭は元焼火間上ノ間、小性組番頭以下江戸番頭、出入司は同下ノ間、芝田文久郎は焼火間(新焼火間)、小性組小共見習、〆切番以下は大台所廊下 において 料理を頂戴している。[35] 小広間で一門、一家、一族衆等に料理が饗せられることもしばしばあったが、儀式を伴うか儀式的性格の強い場合が多い。また内対面所も裏座敷は家臣、寺院衆の 料理の場となることがある。さらに焼火間、客之間、伺公間等も、身分に応じ、機に臨んで饗応の場所としての機能をもちうるものであった。[36] これに比し、書院は常時饗応を考慮に入れた格式高い接客専用の部屋であったと思われる。

君、臣の間に行なわれる。拝謁、命令、御礼といった行為は最も頻繁にみられるが、年始、

		御座間	焼火間	書院	小広間（表対面所）
延宝3——延宝8（改造前）	接見・拝謁		○父君、母公ノ使者 ○伊達基実（妹清姫ノ婿）	○幕府馬買衆 ○父君、母公ノ使者 ○親戚大名ノ使者 ○寺社、廟等ヘノ名代 ○一門、一家、一族ノ休暇、参府	○幕府馬買衆 ○公方ヘノ使者 ○禁中ヘノ使者 ○母方ノ使者口状ヲ述ブ ○諸大名ノ使者 ○寺社、廟ヘノ名代 ○一門、一家、一族ノ休暇、参府
	使者・役目等ヲ命ズ	○禁中ヘノ使者ヲ命ズ ○父君、母公ヘノ使者ヲ命ズ ○奉行、大番頭、奉薬医等ヲ命ズ	○公儀ヘノ使者ヲ命ズ ○父君、母公ノ使者ニ書ヲ授ク ○寺社、廟等ヘノ名代ヲ命ズ ○近習、准一家ヲ命ズ	○公方ヘノ使者ヲ命ズ ○父君、母公ヘ返書ヲ命ズ ○寺社、廟等ヘ名代ヲ命ズ ○小姓組頭、名掛組士頭ヲ命ズ ○一門、一家、一族ヘ休暇ヲ命ズ	○公方、公儀ヘノ使者ヲ命ズ ○禁中ヘノ使者ニ書ヲ授ク ○一門、一家、一族ヘ休暇ヲ命ズ
	御礼	○御成リ（家臣宅）ノ御礼	○御成リノ御礼 ○一門縁組ノ御礼 ○着座命ゼラル御礼 ○出入司、納戸役、浅布作事奉行、江戸出入司、品川老命ゼラル御礼	○一門ニ命ゼラル御礼 ○一家、一族ノ家督、隠居、初テノ御礼	○奉行職命ゼラル御礼 ○一門、一家、一族ノ継目ノ御礼

		御座間	焼火間、元焼火間	内対面所	小広間（表対面所）
元禄9——元禄16（改造後）	接見・拝謁	○公方、公儀ヘノ使者 ○父君、嗣君、北方ノ使者 ○一門参府		○公方、公儀ヘノ使者 ○親戚大名ノ使者 ○大名ヘノ使者 ○寺社、廟等ヘノ名代 ○一家、一族参府	○大名ノ使者 ○一家、一族嫡子参府
	使者・役目等ヲ命ズ	○公方ヘノ使者ヲ命ズ ○奉行、若老、大番頭、武頭、近習、小姓組頭～不断頭、名掛頭ヲ命ズ ○所替、役目替、加増ヲ命ズ ○一門、奉行、若老等ニ休暇ヲ命ズ		○公方ヘノ使者ヲ命ズ ○仙洞ヘノ使者ヲ命ズ ○寺社、廟等ヘノ名代ヲ命ズ ○一家、一族ニ休暇ヲ命ズ	
	御礼	○宿老、永代着座、着座命ゼラル御礼 ○在所拝領ノ御礼 ○奉行隠居ノ御礼 ○奉行、若老、鎗奉行、旗本足軽頭、小姓頭、小姓与頭、近習命ゼラル御礼 ○一門休暇命ゼラル御礼		○一家、宿老、着座、盃頂戴命ゼラル御礼 ○分知ノ御礼 ○一門、一家、一族、番頭格以上ノ家督、隠居、初テノ御礼 ○大番頭、脇番頭、申次役、武頭、足軽頭、鎗奉行、歩小姓組頭、不断組士頭、留守番頭、評定所役人、歩小姓頭、名掛頭等命ゼラル御礼 ○一家、一族休暇命ゼラル御礼 ○御成リ、入院ノ御礼	○詰所以上、徒小姓頭、城番支配等ノ実督、隠居、初テノ御礼 ○徴出ノ御礼 ○組免許ノ御礼 ○入院ノ御礼

表38　接見、拝命、御礼と建物との関係

〔肯山公治家記録による〕

Tadle 38　Location of audience and greetings with *Daimyo*

月次の御礼以外のものについて、改造前後に分けてみると(表38参照)、改造前では諸大名の使者、公儀関係の使者との接見が小広間に限られていること。また使者を命ぜられるときの使者の性質から推して、小広間には御座間、焼火間、書院に較べて、より対外的、公式的傾向がみとめられる。御礼関係については、奉行職のときだけが小広間で行なわれる。一門、一家、一族の継目御礼も行なわれるがその例数が極めて少く、一般には他の御礼は焼火間、書院がむしろ中心である。この時期の御座間では、使者や重役の拝命が行なわれ、接見ならびに御礼の例は殆んどみられない。御成りに対する御礼は、まれには御座間のこともあったが、専ら焼火間で行なわれていた。

改造後は御座間と内対面所とにこれらの諸行為が集中され、秩序化される傾向にあり、その場合、御座間では奉行、若老等の重職、および近習諸役の御礼、そして内対面所ではそれ以外の表諸役の御礼というように区別され、小広間では役目の御礼は影をひそめる。一門、一家、一族等大身侍が仙台へ参府した時の拝謁や、在所への休暇の命令を受ける時、そしてその御礼に関しては、一門衆が御座間、一家、一族衆が内対面所と、これも区別されるようになった。諸大名よりの使者は依然として小広間で接見するが、公儀への使者は御座間、内対面所で拝謁するようになる。これは公儀への使者は自家の家中より任命するため、他藩よりの使者とはおのずから区別した扱いをうけるようになったものであろう。焼火間は改造前にはその利用範囲が広かったが、改造後の新焼火間は藩主が親しく出座して使者や家士に接する場所ではなくなるのも大きな変化と言えよう。むしろ奉行、若老等による主君の命令伝達の場、家臣への料理の場としての性格を強めてゆく。

即ち、二の丸に於てはまず書院の重要性が薄れ、ついで改造を機にして対面関係に重点がおかれ、対面関係の強化、格式化、秩序化という方向が顕著に打ち出されている。

以上のように重要な儀式、対面、接客、饗応、御礼等の場合に小広間(表対面所)、書院、内対面所、御座間等がその主役をなしていたことが理解される。なお他にこれらの補助的な役目を持った諸部屋がある。焼火間、伺公間、客之間であり、天和年間に新設された馬場座敷である。

初卯の儀式は小広間(表対面所)が中心の儀場となったことはすでにみて来たが、その時の具足餅を家中に分配するのを例とするが、　元禄元年「於御対面所下之間伊達将監殿大蔵殿御具足餅御酒頂戴於焼火間諸役人頂戴於御次日野鉄船佐藤七之丞頂戴於大所小姓組右筆茶道ノ輩頂戴於御用間上間定供大番組番外同朋頭中ノ間徒組頭組付士大所人坊主組頭同朋坊主馬方下ノ間足軽小人諸職人馬取駕籠ノ者等頂戴」[37]とあり、即ち焼火間では諸役人が頂戴する。この関係は元禄4年の時にも同様で、元焼火間で奉行衆、若老以下諸役人が具足餅を頂戴していて、新焼火間でなく元焼火間に受け継がれている。[38] 新焼火間は藩主の饗饌の場となることもあったが、元焼火間にはそのような例はみられない。[39]

要するに焼火間は元禄改造後には藩主との直接の拝謁、命令、御礼等は全く行なわれなくなり、父君、母公、北方、嗣君等伊達家個人の使者や家士に対する饗応の場としての性格がより強くなって来た。元焼火間は元禄以降、若老、出入司、納戸奉行、目付等の詰所でもあり、[40]従ってここでは奉行、若老等による君命の伝達が行なわれるに至っている。元禄の改造後もしばらく元焼火間は上・下の二間より成っていたが、[41]後に改めて一間のものとなった。新・旧焼火間を通じて言えることは、元来その位置が御座間、休息所に近いためか、その用途も御座間の延長、御座間の補助的な色彩の強いのが特徴である。

小広間の裏にある伺公間はまた連歌間とも称される。[42]上之間と下之間より成り、上之間をとくに連歌間、その場合に下之間を伺公間と言って区別することもある。上之間は実長3間に2間、下之間は実長3間に4間、床・棚を備え、表側にくれ縁、裏側に1間半の縁通りがある。連歌間では毎年正月七日の恒例の連歌会が催された。[43]連歌間の呼称のある所以である。その時ここで連歌衆に料理が饗されることもある。[44]また「奥方安鎮龍宝寺執行因テ於連歌間料理」[45]と寺院衆の饗応に用いられているし、元禄6年能始めのときは、一門衆には馬場座敷、奉行衆(家老衆)には元焼火間、そして一家、一族衆にこの連歌間で料理を賜っている。[46]伺公間は諸士の詰所の一つであり、伺公間詰と称され、彼等の家督、継目御礼等がしばしば行なわれ、その廊下では大所人等の徴出御礼もあった。[47]寺社への名代が伺公間で拝謁することもあり、[48]また眞浄殿(将軍家の位牌を安置する)が落成し、その名代と造営奉行が登城して、対面所で拝謁した時に造営副奉行が伺公間下之間で拝謁している。[49]天和3年には一門衆の在所への休暇が御座間で出され、一家、一族衆の休暇はこの伺公間で賜うている。[50]

元禄3年9月、日光普請成就の賀には一門、一家、一族衆へは小広間で、一家、準一家、一族衆の嗣子には伺公間で餅および料理が出された。[51]天和2年より元禄3年に至る間は、書院も使用されず、内対面所も未だ無い時期であることに注目するならば、伺公間に表対面所の補助的な、もしくは後の内対面所に近い用法のあることもうなずけるところである。

客之間は諸大名よりの使者を饗応するときによく用いられるが、また大名使者および一門衆との対面が小広間(表対面所)で行なわれる場合に、ひとまずこの客之間で待たされる仕組みであった。[52]初卯の具足餅頂戴の際にはしばしば対面所や焼火間とともに併せ用いられるが、その時には例えば元焼火間では奉行衆、諸役人、そして客之間では大番、脇番頭、不断頭、給主頭、名懸頭、新名懸頭、足軽頭等のように家士の役柄、身分等によって区別した用い方をする。[53]

野初めの雉の料理を総武頭中にこの客之間で振舞っている。[54]組頭、武頭の例が多く、焼火間とは饗応をうける家臣の性質が異っていることに気付く。「鉄牛和尚東昌寺萬寿寺御礼トシテ登城御帰城ノ砌於客間対顔」[55]、「於客之間極楽院年始、賀儀太刀目録拝謁」[56]、「於客間普導寺十帖一柄献上入院ノ御礼」[57]のように寺院との対面、入院御礼にもまた広く用いられている。

客之間における特色ある用法として、一門衆嗣子の元服理髪の儀が挙げられる。「於客之間伊達安藝殿長男伊達源五郎殿元服理髪大條監物公御書院ニ御出初冠素袍拝謁基御字ヲ賜フ御一字及ビ兵庫ノ名目録柴田中務御前ニ授ク公御手自賜之」[58]、「石川松之助殿伊達兵力殿伊達孫吉殿各元服命セラル於客間松之助殿麻上下理髪柴田源四郎服同上兵力殿麻上下理髪柴田土佐服同上孫吉殿ハ前年中剃セラルニ因テ無此式」[59]。この他伊達卯之助の元服(元禄3・12・14)、伊達吉之助の元服(元禄15・9・1)、三沢門弥の元服(宝暦8・6・9)等いずれも客之間においてその理髪の儀式が行なわれている。[60]

書院の裏にある書院勝手座敷は「書院勝手ノ間」とも呼ばれる。書院裏座敷とある場合、ここを指すのか、あるいは書院北側の緑通りの部を言うのか明確でない。書院勝手では儀式、饗饌の例が見られず、その内容を具体的に知り難い。書院が破却、消失してからはここを元書院と称しており、文化元年の二の丸焼失後、再興された時にも依然として元書院と呼び、その形も文化以前の状態を踏襲しているが、字義の示すまま元の書院とみるのは誤りで、実は元の書院勝手に当るのである。「書院ニ御出ノ序御座次ノ席渋川助大夫富田二左衛門各嗣子書院勝手ノ間小姓組右筆ノ嗣子七人各太刀馬代ヲ献シ拝謁」[61]と、小姓組、右筆の嗣子等の拝謁がここで行なわれるが、一般には「書院勝手座敷ニ於テ品川小姓組斉藤作右衛門子十三郎……家督ノ御礼」[62]のように品川小姓組(綱村隠居の品川屋敷付きの小姓組)の嗣子の家督および初めての御礼等に限って使用されているところが特異である。

小広間脇の馬場座敷は、規模は小さいが上・下の2間より成る。実長3間に6間、即ち18坪の建物である。寛永の二の丸創立期にはその名は未だ見えていない。すでに述べたように治家記録によれば書院の語および用例は天和2年頃よりみられなくなり、逆に馬場座敷は天和元年頃より現われてくるので、書院の消失と馬場の設置、馬場座敷の呼称の確立とは互に関係があったものと考えられる。

天和元年9月27日、綱村の妹の夏姫の婚儀が馬場座敷で行なわれ、「夏姫御方今日伊達安房殿へ婚礼ニ就テ伊達将監殿屋敷ヨリ登城、塀地門ヨリ馬場座敷ニ入セラレ御祝儀アリ……夏姫御方客之間重縁際ヨリ乗輿、玄関へ徒組舁之式臺へ……」との記事が見えるが、馬場座敷へ塀地門を経て入っている。

馬場座敷の呼称の生ずる所以は、馬場における馬術の閲覧がこの座敷の主目的となったからと考えるが、実際は種々に用いられている。例えば将軍家への献上の茶の試飲、[63]近臣に対しての茶の饗応、[64]家臣よりの茶の奉饗[65]など、茶事に関する用例が多くみられる。元禄初年二の丸の大改造後は新築の数寄屋、圍等に専ら茶事が移ったためか、このような例がなくなる。御座間の圍の普請中は藩主はここを居間の如くに使用している。[66]

「於馬御覧所晩殃将監殿侍食」[67]、「巳刻表ニ御出、詰所アル諸役人拝謁、能興行…… 於馬場

座舗公湯漬上之於連歌間御一門衆家老衆へ後段等出」[68]、「直ニ馬場座敷ニ入セラレ晩殯、於外舞臺慰能三番」[69]等馬場座敷は藩主の食膳の場ともなったし、「将監殿若狭殿数馬殿助三郎殿田手亥之助殿砂金臨吉亘理孫吉へ御能拝見命セラレ於馬場座敷料理 二汁五釘 ヲ賜フ」[70]、「能始メアリ御一門衆及在府ノ一家一族衆以奉書登城見物、詰所アル役人并大番組ノ輩ニ拝見命セラル……於馬場座舗御一門衆、於連歌間一家一族衆、於元焼火間家老衆大町備前茂庭下野奥山長十郎古内源吉、料理 二汁八釘 ヲ賜フ」[71]とあるように一門衆に対しここで料理が与えられている。また幕府の奥州馬買衆に料理を享している例もある。[72]

藩主の食饌といい、幕府の役人に対する馳走といい、はたまた上級の家士に対する饗応といい、能興行とともにこの座敷が利用される場合が多いが、書院に類似した性格が認められる。これは小広間の前に表の能舞臺があり、小広間脇に馬場座敷があり、互いに近接した位置にあるためにもよろうが、小広間の奥にあった書院が失われることにより、その役割を一部この馬馬場座敷が受けついだものと見られないこともない。

以上、一見複雑に見える二の丸の殿舎も、個々の建物の間取り構成は上・下の関係を強調して表現され、主要建築相互は階段的に曲折して配列されているが、同じく線的な繋がりを基調とする。また諸建築ないし諸部屋の用いられ方をみると、儀式・対面・饗応等殆んど藩主とその家臣によってとり行なわれ、城舘における諸行為の主軸となっている。二の丸殿舎の構成も個々の建築の間取りも全くこの関係をもとに成り立っている。元禄の改造はこれを建築の上で更に充実し、明確にしたものに他ならない。そしてそれらの中で、一貫して主軸の中心的役割を果しているのは小広間であったことが知られるのである。

註（1）忠宗君治家記録引証記　寛永15年、同16年條

（2）茂庭家記録　良元君六　寛永16年條（仙台市史資料編）

（3）義山公治家記録

（4）紹山公治家記録　文化元・6・24　是日仙臺二ノ丸及ヒ中奥天災ニ罹り堂宇盡ク灰燼ス、之ヲ幕府ニ聞ス

（5）仙台城享和二年御家作御絵図写（宮城県立図書館）、仙台城文化元年御造営御絵図写（宮城県立図書館）、嘉永六年、御二丸御城中並御中奥下水抜溝御絵図（小倉強・仙台城の建築所収）、御二丸御家作水秡御絵図（斉藤報恩会）及び席絵図（登米伊達家文書）

（6）肯山公治家記録　元禄3・10・22

（7）同　元禄4・4・2

（8）同　元禄3・11・11「御持仏堂木造始」

同　元禄3・11・13「御持仏堂鋤初アリ」

同　元禄3・11・16「御持仏堂地鎮」

同　元禄4・1・8「萬善堂柱立」

同　元禄4・4・26「萬善堂安鎮」

同　　元禄４・４・27「御堂御遷座」

（９）同　　元禄４・３・26「数寄屋造畢ノ賀儀」

同　　元禄４・４・30「新造ノ圍開アリ」

(10) 元禄３年すでに新焼火間は設けられていたと考えられる。

肯山公治家記録　元禄３・12・13の条に「夘下刻於御新宅焼火間大島良設講論語」とある。新宅（新休息所のこと）にも焼火間が施設されたことが分るが、これによって以後焼火間は二ケ所あることになる。はじめは従来の焼火間を元焼火間と称することもあったが（元禄４・１・16）、やがて元禄５年になると元焼火間、新焼火間とはっきり区別して呼ぶようになる。

(11) 肯山公治家記録　元禄７・８・６「御新宅今日地鎮執行ニ就テ……」、同元禄７・８・11「新舞臺御披ニ就テ夘刻新宅座敷上之間ニ御着座……」とあり、元禄７年８月以降しばしば新座敷の語があり、同元禄７・９・28の記事に「白河主殿殿幷當番ノ一家一族衆へ料理ヲ賜ヒ御能興行辰下刻新座敷ニ御出主殿殿於二之間拝謁於裏座舗上之間御能拝見其外御能拝見命セラル輩裏座敷三之間幷焼火間廊下ニ於テ拝見巳上刻能始ル」とある。舞臺との関係、部屋の構成からみてこれが後の内対面所であることは明らかである。なお元禄９・12・29「今晨内御対面所上段間成就安鎮」とあるから、上段はしばらく後になって成就し、ここに内対面所が完成したとみられる。

(12) 肯山公治家記録によれば元禄８年正月元日の儀式より内対面所の語が見える。その後しばらく新座敷の語を用い、元禄９年以後より内対面所の語を正式に採用している。なお以上の改造の事情について元禄３・11・22の綱宗より綱村あての書状（伊達家文書之四所収）によって窺い得る。

「然者先達休所出来押付取付之家共作り申候当年出来仕事之由萬善堂来春造替申候是ハ因縁殿山之上に而不自由ニ候故急度不仕候時分萬善堂ニて先祖をも祭申候此以前之居間西之中段高キ所之由覚申候然とも御座所地形を家共之地形同様にいたし右之所えつくり申候去十一日手釿立同十三日鍬始十六日地鎮迄首尾能相調申候之由御仮殿作り出来次第只今迄之萬善堂移し候而右之家並只今迄之休所物置こほし居間並圍地形仕来春迄作り申候居間之手釿仕来廿二日ニ仕筈之由今迄之居間ハ其儘差置内々之対面所ニ用可申か居間庭之内ニ可致か、来春之様子次第可為之由書付計にて合点参かね候半事も難計被存候へ共地鎮之作法も有之事故様子書ニも被申越ニ付申遣候由委細令承知念入候儀令承知満足事候…」

(13) 御二丸御指図（宮城県立図書館）

(14) 例えば　小広間＝対面所、学問所＝小書院、連歌ノ間＝伺公間、祠堂＝因縁殿

(15) 肯山公治家記録　天和１・９・27、天和１・９・28の条

(16) なお御入部方絵図（宮城県立図書館）等に記戴された三之間縁通りの畳の敷き方から推しても９間とみるのが正しい。

(17) 引証記には「御蔵、大手御門、大書院、御小廣間、御舞臺、御徒之間、右御家同十六年五月廿六日より十二月廿日迄ノ内御棟上相済申候事」とあるのに対し、治家記録では寛永16年12月20日の条に「五月廿六日ヨリ今日マテ御蔵、大手御門、大書院、大廣間、舞臺、御歩行間上棟アリ」とある。

(18) 他に遠侍、番所の部屋名としての広間があり、また遠侍棟（広間、次之間、中之間）を広間ということもある。しかし番所広間は単に「広間」と称し、大広間、小広間とは呼称上区別され、それらの間に混乱のないよう考慮されていた。

(19) 前掲御二丸御指図の書き込みによる。

(20) 肹山公治家記録　天和1・7・22「辰上刻御対面所ニ御出御一門一家一族衆ヲ饗セラル小廣間上ノ間ヨリ下ノ間ニ至リ両頰ニ着座 三汁十飧向詰 ニ白木具中足 能七番……」。ここでいう上ノ間、下ノ間とは小廣間上段、次之間(下段)、三之間とある次之間、三之間を指す。

(21) 例えば同天和1・9・27「伊達安房殿登城……於御対面所拝謁太刀一腰一匹毟時服十領三種二荷献上熨斗出……安房殿退出ノ節小廣間上ト下ノ間仕切際マテ公御出修理伊賀長門山城玄関薄縁ニ出」即ち小廣間次之間(下段)に於て拝謁しているが、この部を特に対面所としている。

(22) 同　元禄7・10・1

(23) 輝宗代(天正12年)、政宗代(天正16年)、綱村代(天和2年)の正月行事を比較してみると、その内容に殆んど変化がなく、伊達家における古くからの恒例行事であったことが分る(天正12年12月「正月仕置之事」、貞山公治家記録、肹山公治家記録による)。

日	輝宗代(天正12年)	政宗代(天正16年)	綱村代(天和2年)
1		陣螺吹始・鉄炮撃始	
2	買始・書始		
3	野始	野始	
4			野始
7	連歌	連歌	連歌
8	心経会	心経会	心経会
11	談合始	談合始	政治始
14	乱舞始・謡始	乱舞始	謡始
18	織法	織法	織法
20	きう所はじめ	法問	法問
22	護摩	護摩	護摩
28	護摩結願	護摩結願	護摩結願

(24) 例えば肹山公治家記録　天和2・1・14

(25) 同　貞享2・10・24、元禄3・10・6

(26) 同　天和2・1・14、貞享1・1・14、元禄1・1・14、元禄4・1・14

(27) 同　講釈始は以前にもあったようであるが、日時は未だ1月に恒例化していないし、場所も御座間で行なわれ、後のように内対面所に固定化していなかった。例えば元禄3年には11月6日に、元禄4年には4月2日に、御座間もしくは新御座間で講釈始の儀が行なわれた。より古い例は見当らない。

(28) 義山公治家記録　寛永17・2・7、寛永18・11・5、寛永20・10・15、正保2・10・21、正保4・12・1、慶安2・12・3

(29) 同　正保2・10・26

(30) 肹山公治家記録　延宝3年の條

(31) 同　延宝5・12・23、天和2・3・19、天和2・3・21

(32) 同　元禄4・3・23

(33) 同　元禄10・1・25

(34) 同　元禄11・8・3

(35) 同　元禄11・8・27

(36) 肯山公治家記録中にも頻繁にみられる。

(37) 肯山公治家記録　元禄1・2・12

(38) 同　元禄4・2・11

(39) 同　元禄4・4・11「於新宅饗饌三汁九飧吸物肴各御盃ヲ賜ヒ返上、公於焼火間御饌侍食佐藤七之丞畢テ遠藤内匠津田民部佐々豊前富田壱岐遠山帯刀富塚長門ニ饌ヲ賜フ汁飧同上於元焼火間日野鉄船若老及若老並……ニ御饌ノ餐ヲ賜フ」

(40) 同　元禄5・8・22

(41) 同　元禄5・8・22「一、若年寄衆本焼火間上ノ間ニ可罷在事

一、本焼火之間下之間ニ出入司御納戸奉行御目付可罷在事」

なお、同元禄11・8・27にも元焼火間上間、下間の語がみえる。

(42) 寛永時代の引証記中にこれに当る建築名が無い。また前掲の二丸指図中にはこの部の間取りは示されているが名称の記入がない。この指図作成当時末だこの座敷の正式名が明確に定っていなかったためであろうか。とすれば創建期に存在せず、やや遅れて附加された座敷と想像される。延宝3年には連歌ノ間の用例が見える。

延宝年間は連歌間、伺公間の両呼称を持っていて両者間とくに差異はない。

肯山公治家記録　延宝6・3・21「父君ノ御使者小荒井伊右衛門伺公間下ノ間ニ於テ料理ヲ賜フ」

同　延宝5・6・1「御一門一家準一家一族衆小廣間次ノ間片倉小十郎宿老小廣間裏座敷御奉行連歌間各詰所ヲ命セラル」

(43) 例えば肯山公治家記録　延宝4・1・6、貞享1・1・7、元禄1・1・7、元禄4・1・7、元禄6・1・7、元禄10・1・7、元禄14・1・7等。正月の7日に行なわれるのが恒例。

(44) 同　延宝4・1・6「御嘉例連歌アリ……御連歌衆ニ於連歌間料理ヲ賜フ」

(45) 同　元禄3・12・27

(46) 同　元禄6・1・19

(47) 例えば　同　延宝4・2・16「今朝御出ノ時連歌之間廊下ニ於テ瀬川伊織家督御礼」、同 延宝7・5・13「伺公間上ノ間ニ於テ古内造酒祐養子左大夫太刀目録献上拝謁」、同 天和2・3・11「連歌間廊下大所人……各新ニ徴出サル御礼目録献上拝謁」元禄以前は家老(奉行)の詰所でもあり、従って「奉行ノ間」とも称された。同 天和1・9・13「奉行ノ間廊下ニ於テ大所人久保田甚之丞継目御礼拝謁」

(48) 同　延宝7・8・8「覚範寺御名代帰遠藤山城於伺候間拝謁」

(49) 同　天和1・5・1

(50) 同　天和3・10・11

(51) 同　元禄3・9・18

(52) 同　元禄11・8・3「水戸宰相殿少将殿ヨリ八重姫君御入輿調済賀儀ノ使者安藤弥左衛門登城……客之間ニ香曽我部庄兵衛案内ス、申下刻御対面所ニ御出長袴下段ニ御着座……」

(53) 同　元禄4・2・11

(54) 同　貞享1・1・6「御野始ノ雉於客間惣武頭中ニ料理ヲ賜フ如例」

(55) 同　元禄10・1・25

(56) 同　天和2・2・6

(57) 同　元禄4・2・8

(58) 同　延宝3・11・14

(59) 同　元禄11・9・22

(60) 肯山公、徹山公治家記録

(61) 肯山公治家記録　延宝3・12・1

(62) 同　延宝7・11・18

(63) 同　天和1・10・10「御献上ノ茶御試晩於馬場座敷侍食伊達将監殿石川主馬殿小梁川修理黒木上野」

(64) 同　天和3・11・14「晩於馬場座敷古内造酒祐芝田文之允鈴木謙安ニ茶ヲ賜フ」

同　天和3・12・1「晩於馬場座敷橋本虎林日野鉄舩渋川助太夫福井玄孝ニ茶ヲ賜フ」

(65) 同　天和3・11・16「於馬場座敷伊達左兵衛殿口切ノ茶奉饗アリ」

同　天和3・11・18「晩於馬場座敷柴田中務茶ヲ饗シ奉ル」

同　貞享1・2・晦「今晩於馬場座舗遠藤内匠茶ヲ饗ス」

(66) 同　貞享4・5・29「御座間ノ圍普請初メニ就テ馬場座敷御出巳刻奉行衆御用有之」、同　貞享4・6・6「……御帰城、御座間普請ニ就テ馬御覧所ニ入セラル」

(67) 同　貞享4・5・28

(68) 同　元禄4・4・11

(69) 同　元禄12・2・1

(70) 同　元禄3・12・15

(71) 同　元禄6・1・19

(72) 同　貞享4・8・21「門奈助右衛門殿諏訪邊喜右衛門殿留別トシテ登城……於御対面所公御接見料理出土器酬酢アリ饋ノ畢リ茶ヲ饗セラル於馬御覧所吸物菓子出畢テ帰舘」

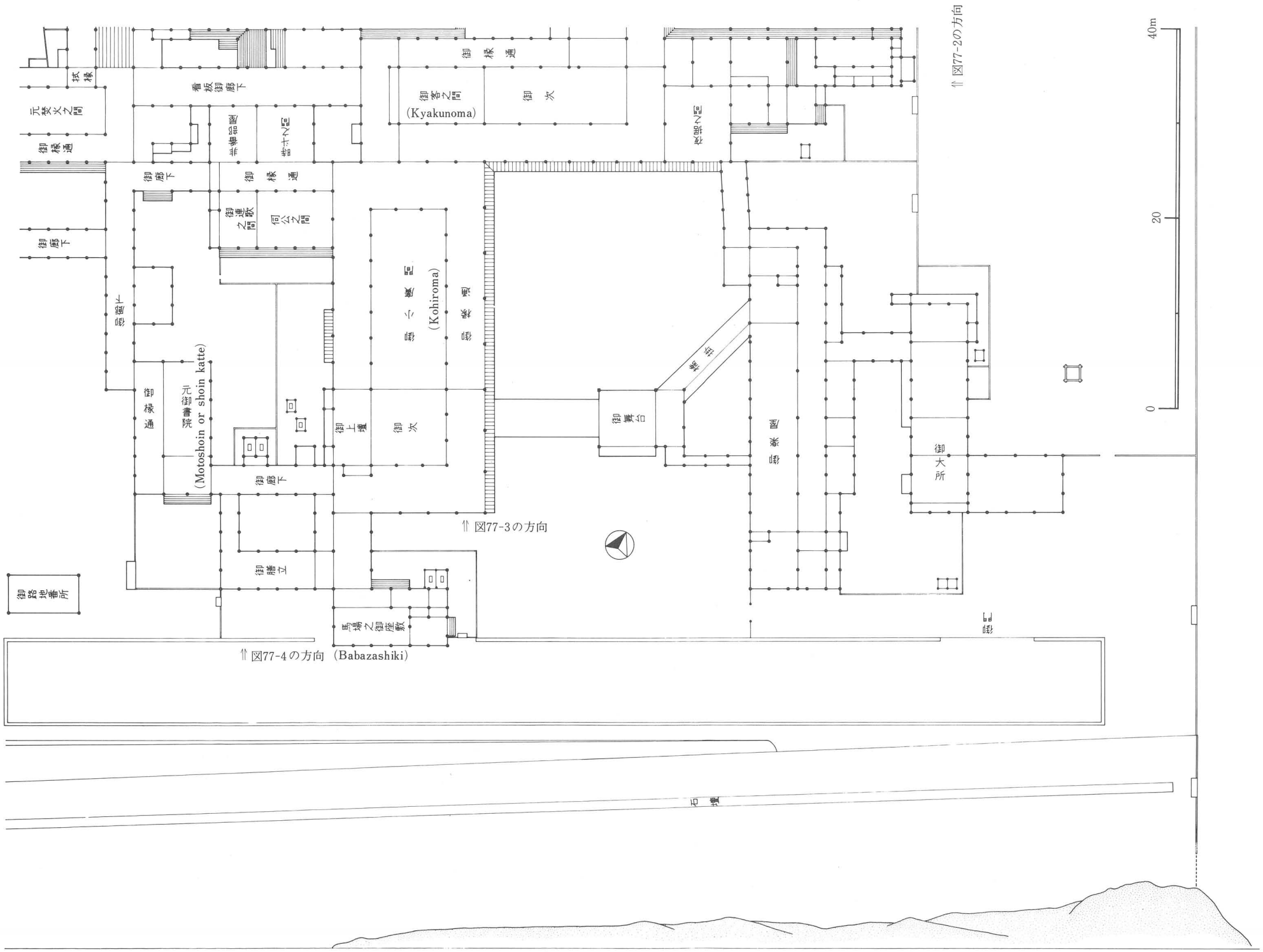
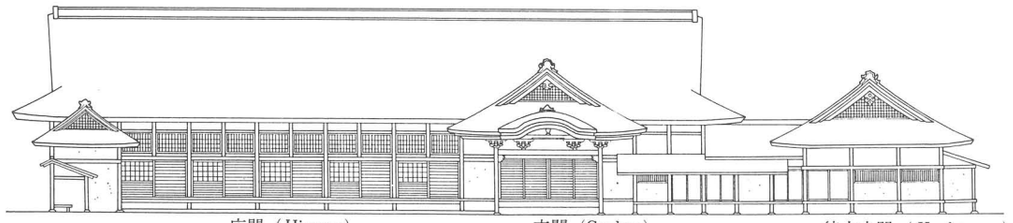
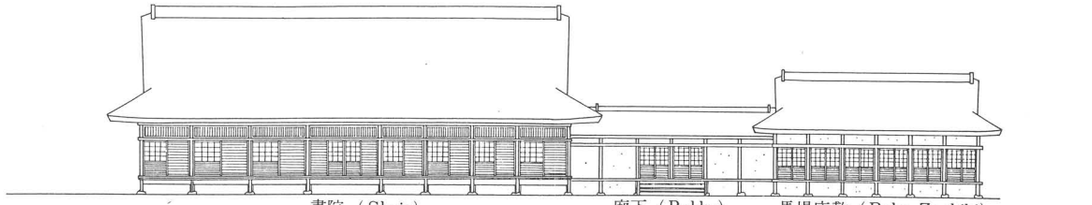


図76　二の丸小広間と周辺の建築図(幕末の状況を示す。斎藤報恩会蔵御二丸御家作水抜絵図をもとに県立図書館蔵文化元年二丸御造営図写の柱割付を参考にして作図)(図77参照)

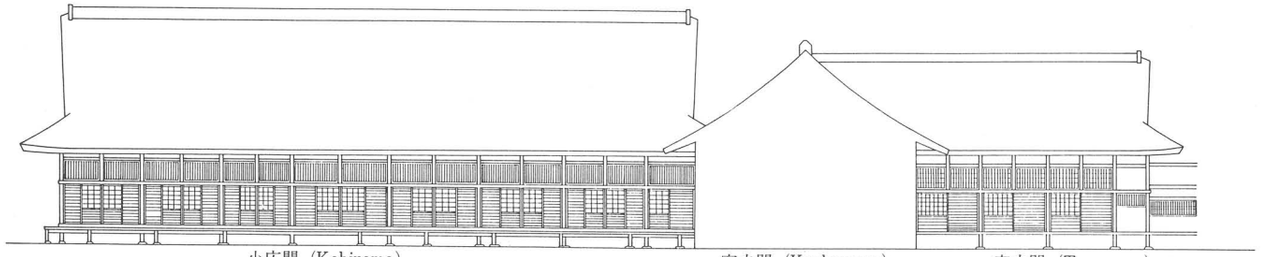
Fig 76　Central Ceremonial hall and surrounding structures in the secondary citadel of Sendai Castle In this figure shoin is lost. (Cf. Fig. 77)　Mid. of 19c



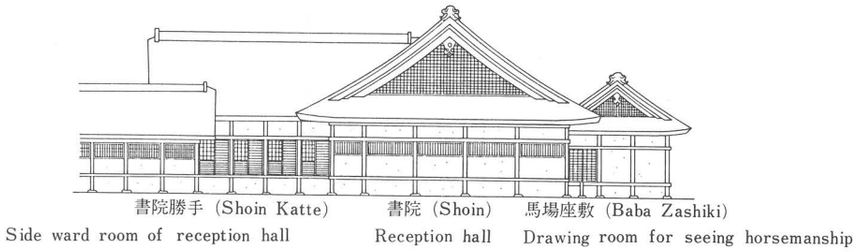
1．玄関と広間.徒士之間(東から)（from east）



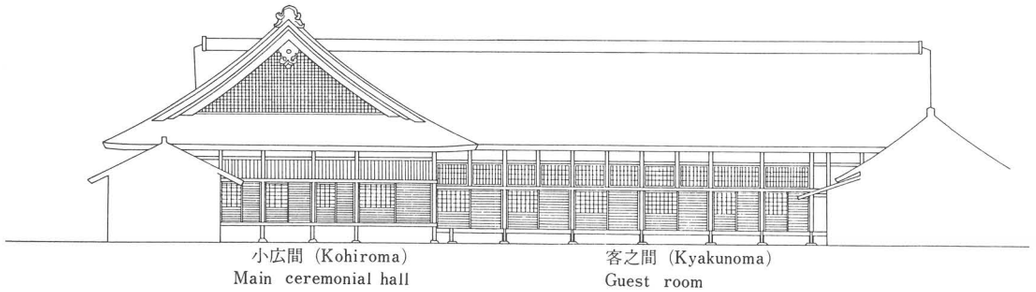
4．書院.および馬場座敷(南から)　(from south)



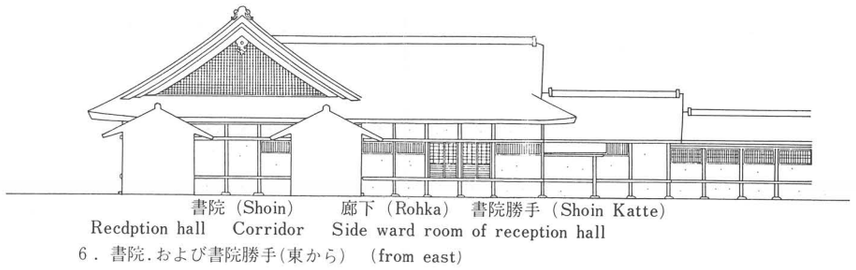
2．小広間.客之間.寅之間(東から)（from east）



5．書院.書院勝手および馬場座敷(西から)(from west)



3．小広間.客之間(南から)(from south)



6．書院.および書院勝手(東から)　(from east)

図77　二の丸表主要建物復元立面図　S＝1／400　(図76参照)

Fig. 77　Profiles of Major structures in the secondary citadel of Sendai Castle Shoin is not yet lost in this figure. (Cf. Fig. 76)

第Ⅳ章　仙台城二の丸跡から出土した陶磁器の化学組成について

蟹　沢　聰　史

1．は　じ　め　に

各地の遺跡から出土した遺物の原産地を推定することは、考古学の分野では欠かせない作業の一つである。そのため、石器については主成分あるいは微量元素組成から原産地の推定がしばしば行われている。また、土器や陶磁器などの焼き物についても化学組成の差に基づいた産地の特徴をさぐるための種々の試みがなされている。これらの試みの多くには微量元素組成が用いられているが、これには蛍光X線分析や放射化分析などの手法が必要とされ、どこでも簡単に行うというわけにはゆかない。また、焼き物の原料となる粘土や鉱物の化学組成についてみると主成分と微量成分の間にある程度の相関があるので、比較的簡単に行える主成分を分析すれば、微量成分分析を行わなくても原産地の推定が可能となる場合もある。今回は、仙台城二の丸から出土した陶磁器について原産地推定の基礎資料となるように、あらかじめ産地の判明しているものを選び、原子吸光法を用いて主成分分析を行った。なかには産地不確かな試料もある。

2．分　析　方　法

まず、出土した陶磁器の破片を水洗いしたのち、試料が大きいものは2分して、その一方はそのままダイアモンドモーターで粉砕した後、めのう乳鉢で粉末にする。他の一方は釉薬を回転式円盤上で研磨して削りとり、粉砕後めのう乳鉢で粉末化する。小さい試料しか得られなかった場合はそのまま粉末にする。0.1g程度の試料があれば分析は可能である。0.1gの粉末試料を正確に秤りとり、白金皿上でフッ化水素酸5mℓ、濃硝酸5mℓを加え砂浴上で加熱・蒸発乾固させる。これに濃塩酸2mℓと蒸留水を加えて加熱し、完全に溶解した後200mℓメスフラスコに移して蒸留水で満たす。これを原液とし、このうちから25mℓを分取して50mℓメスフラスコに入れ、全体でSr 1500ppm、1：100 HCl の濃度になるように $SrCl_2$ 溶液と塩酸を加えた後、蒸留水で満たす。Sr を加える理由は分析の際、他元素の影響を除くためである。原液をそのまま Na_2O、K_2O の定量として用い、分取して Sr を加えたものを FeO、MnO、MgO、CaO の定量に用いる。Na_2O と K_2O は炎光光度法により、他は原子吸光法によって定量した。分析結果は表40に示す。地質調査所の地球化学的標準試料（Geochemical standard）のうち、陶磁器の成分に近い流紋岩（JR－1、JR－2）を同時に分析し、その結果も併せて示した。

3．分析結果の検討

陶磁気の原料は主として粘土鉱物や長石類、石英などの珪酸塩からなっているため、分析値は酸化物の形で表すのが普通である。表40に示した成分の他に主成分としてはSiO_2、Al_2O_3、TiO_2などがあり、とくにSiO_2とAl_2O_3は最も多量に含まれているものであるが、今回分析した6成分のみからでも多くの情報が得られる。今回の分析試料は、まとまったものとしては平清水の21個、大堀7個であるが、さらに切込3個、二本松1個、平清水？4個、大堀？3個、切込？2個、産地不明1個である。このなかで明らかになったことは、釉薬付のものは産地に関係せず例外なくCaOに富んでいることである(図78－1)。これは釉薬がいずれの産地のものもいわゆる灰釉であることを示す。CaO以外の組成は釉薬の付いたものと素地のみのものでも大きな差はない(図78－2)。また、平清水のものはNa_2O+K_2Oに富み、FeO＋MnO＋MgO に乏しいグループと、Na_2O+K_2Oに乏しくFeO＋MnO＋MgOに富むグループとに分かれる。前者は素地が白く、鉄の少い原料であるのに対し、後者は素地が茶系統で鉄に富む原料であることを示す。そして前者ではFeO＋MnO＋MgOの変化に乏しく、後者ではNa_2O+K_2Oの変化に乏しい。これは、平清水焼きには2種類の原料が用いられていることを示唆するものであろう。これに対し大堀のものは全体としてNa_2O+K_2OとFeO＋MnO＋MgOとは逆相関の関係を示す。そして、平清水の磁器と陶器の中間的な範囲にプロットされる(図78－3・4)。切込の試料は少いので、はっきりしたことは云えないが、ほぼ大堀と同様な性質を示し、ややアルカリに富むようである。

また、分析した試料のうちからいくつかをX線粉末回折法により鉱物の同定を行った。いずれにも石英が存在し、次いでムライト、クリストバライトのピークが認められた。ムライトとクリストバライトは焼成によって生じたものである。表39にその結果を示す。

試料番号	石英	ムライト	クリストバライト
平清水 19	++	+	±
26	++	±	
27	++		
28	++	+	
切込 23	++	±	
大堀 21	++	+	
同上（釉付）	++	+	
二本松？	++	+	+

表39　X線粉末回折法による鉱物同定結果
++　多量、
+　あり、
±　わずかにあり。

Table 39　Mineral Compositon of ceramics determined by x-ray diffraction

4．おわりに

今回の試みはまだ始まったばかりであり、試料数も少いので結論的なものはないが、多くのデータを積み重ねてゆけば主成分分析のみでも産地同定にはかなり有効であると思われる。また、原料を採取した地域の地質や原料そのものとの比較によって、さらに確かな情報を得られるものと確信する。

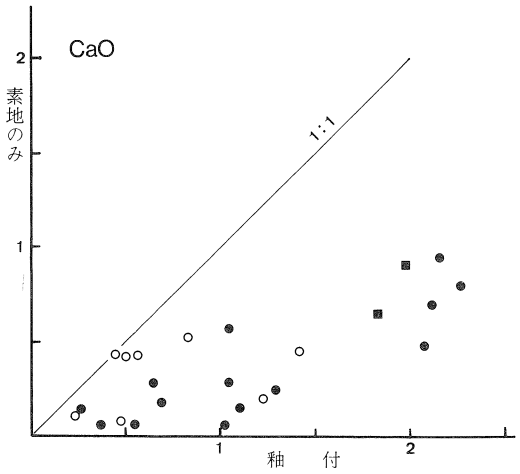
No.	FeO	MnO	CaO	MgO	Na_2O	K_2O	種類	産地	備考
1	0.88	0.006	0.58	0.23	2.76	2.23	磁器	平清水	茶碗
2	1.61	0.023	0.66	0.98	1.43	2.56	磁器	切込	茶碗78MC
③	1.54	0.023	1.83	0.98	1.45	2.57	磁器	切込	〃
④	0.76	0.014	0.28	0.13_6	0.77	3.58	磁器	瀬戸？	急須1層
⑤	0.39	0.018	1.04	0.28_1	0.23	5.26	磁器	平清水	徳利(半陶器)
5	0.35	0.007	0.28	0.17_8	0.17	5.34	〃	平清水	〃
⑥	1.60	0.019	1.41	0.34_0	0.34	2.58	陶器	大堀	徳利
6	1.74	0.015	0.46	0.33_1	0.34	2.70	〃	大堀	〃
⑦	2.23	0.019	0.45	0.49_0	0.33	2.75	陶器	大堀	土瓶 石敷 織部釉
7	2.08	0.016	0.44	0.48_0	0.33	2.67	〃	大堀	〃 〃 〃
⑧	1.06	0.014	0.56	0.28_3	0.40	3.35	〃	大堀	〃 巴文の蓋
8	1.13	0.013	0.43	0.27_1	0.39	3.43	〃	大堀	〃 〃
⑨	1.88	0.018	0.83	0.41_8	0.36	2.56	〃	大堀	〃 鉄砂を含む
9	1.92	0.017	0.52	0.40_4	0.34	2.46	〃	大堀	〃 〃
⑩	2.78	0.057	1.22	0.61_0	0.32	2.03	〃	大堀	〃 青釉 焼土の上
10	2.82	0.024	0.20	0.44_5	0.22	1.89	〃	大堀	〃 〃
⑪	1.85	0.016	0.50	0.39_5	0.47	3.05	〃	大堀	蛟肌釉 pit 27
11	1.51	0.014	0.42	0.34_3	0.37	2.86	〃	大堀	〃 〃
⑫	0.83	0.011	2.11	0.39_3	1.80	2.69	磁器	切込	皿 I_1－Ac SB 40c
12	0.86	0.007	0.70	0.34_2	1.85	2.74	〃	切込	
⑬	0.66	0.033	2.22	0.18_1	0.66	6.23	〃	平清水	菊皿 SA 68
13	0.63	0.008	0.35	0.10_8	0.63	6.34	〃	平清水	
⑭	2.66	0.026	1.82	0.49_7	0.67	1.03	陶器	大堀	皿 SA-336 黄色
14	2.68	0.014	0.76	0.38_3	0.61	0.89	〃	大堀	
⑮	0.39	0.027	2.07	0.39_1	0.17	4.81	〃	平清水	玉緑皿 SA－3
15	0.37	0.007	0.48	0.22_5	0.18	4.87	〃	平清水	
⑯	0.42	0.023	1.40	0.36_3	0.23	5.11	〃	平清水	玉緑皿P SA－256
16	0.38	0.004	0.06	0.19_2	0.20	5.21	〃	平清水	
⑰	1.47	0.018	0.97	0.06_3	1.67	2.44	磁器	切込	皿 切込
⑱	3.37	0.01_7	0.24_8	0.43_0	0.23_8	2.23	炻器	平清水	窯跡表採 へそ徳利
⑲	2.02	0.01_9	0.36_8	0.48_2	0.16_4	3.52_9	炻器	平清水	〃 飛鉢文徳利
19	2.07	0.01_2	0.06_0	0.43_3	0.13_1	3.35	炻器	平清水	〃 〃
⑳	0.23	0.01_9	0.54_7	0.23_2	0.11_0	4.72_3	陶器	平清水	〃 玉緑皿
20	0.35	0.00_3	0.06_0	0.14_2	0.14_6	4.86	陶器	平清水	〃 〃
㉑	2.09	0.03_4	0.63_4	0.72_5	0.78_9	2.54	陶器	平清水	〃 小皿
㉒	0.35	0.01_2	0.76_2	0.24_3	0.11_1	5.02	陶器	平清水	〃 皿or壺

No.	FeO	MnO	CaO	MgO	Na_2O	K_2O	種類	産地	備考
㉓	0.66	0.01_4	0.64_6	0.19_6	3.82	2.16	磁器	平清水	窯跡表採 徳利
23	0.55	0.00_8	0.29_9	0.13_6	3.66	2.18	〃	平清水	〃 〃
㉔	0.82	0.01_1	1.38	0.26_2	2.69	2.47	〃	平清水	〃 手塩皿
㉕	0.75	0.00_7	0.81_6	0.19_2	2.89	2.33	〃	平清水	〃 茶碗
㉖	0.53	0.00_7	1.04	0.23_5	3.06	1.97	〃	平清水	〃 徳利
26	0.54	0.00_5	0.56_4	0.20_8	3.21	2.13	〃	平清水	〃 〃
㉗	2.182	0.02_6	0.69_0	0.34_7	0.58_3	2.36	陶器	平清水	〃 甕？白掛菊花文
27	2.37	0.00_8	0.16_4	0.33_1	0.48_7	2.26	〃	平清水	〃 〃
㉘	1.07	0.04_8	1.77_4	0.57_6	0.42_5	3.35	陶器	大堀	油 指
28	0.87	0.00_9	0.37_7	0.35_2	0.32_5	3.01	〃	大堀	〃
㉙	1.81	0.02_4	0.81_0	0.49_0	0.21_0	2.32	陶器	大堀	徳利 TA－12
29	1.90	0.01_2	0.40_0	0.40_8	0.21_6	2.28	陶器	大堀	〃
㉚	3.25	0.03_1	1.02	0.56_9	0.15_6	3.37	炻器	平清水	徳利 B1－3層
30	3.53	0.00_9	0.05_9	0.43_3	0.16_1	3.40	〃	平清水	〃 〃
㉛	4.93	0.06_7	0.27_8	0.34_1	0.22_8	2.00	〃	二本松	急須 飛鉢文
31	4.86	0.06_5	0.24_1	0.32_4	0.17_7	1.88	〃	二本松	〃 〃
㉜	3.94	0.01_2	0.25_9	0.50_3	0.18_4	2.89	〃	平清水	徳利
32	3.90	0.01_0	0.12_3	0.49_3	0.16_4	2.77	〃	平清水	〃
㉝	0.76	0.02_2	1.29	0.17_8	0.61_3	4.61	磁器	不明	土瓶 O6－2層
33	0.80	0.01_0	0.23_0	0.11_1	0.64_2	4.66	磁器	不明	〃 〃
㉞	2.50	0.05_8	0.96_0	0.45_6	1.01	1.25	陶器	大堀	片口土鍋 2,3層
34	2.42	0.06_5	0.83_3	0.41_8	0.91_0	1.20	〃	大堀	〃 〃
㉟	0.99	0.01_1	0.24_0	0.11_0	0.72_3	4.52_3	磁器	不明	土瓶 NHC
35	0.57	0.01_2	0.95_6	0.13_8	0.98_4	5.36	〃	不明	〃 〃
㊱	1.43	0.01_4	1.97	0.95_0	1.16	2.13	磁器	切込	茶碗 77HC
36	1.43	0.01_8	0.80_4	0.93_8	1.14	2.13	〃	切込	〃
㊲	4.39	0.06_2	1.17	0.63_6	1.13	2.01	炻器	平清水	小型茶碗
㊳	0.72	0.01_9	2.42	0.23_8	2.71	2.58	磁器	切込？	茶碗 58MC
㊴	0.77	0.02_4	1.10	0.17_5	0.61_3	5.73_4	〃	平清水	茶碗UC－22
39	0.72	0.00_6	0.13_3	0.12_2	0.51_3	5.22	〃	平清水	〃
㊵	0.60	0.00_8	2.16	0.28_6	2.43	2.92	〃	平清水	手塩皿 SB-89b 呉須
40	0.98	0.00_5	0.89_7	0.24_1	2.52	2.97	〃	平清水	〃
㊶	0.58	0.00_9	2.26	0.26_8	2.62	2.42_4	〃	平清水	茶碗 SB-36a
41	0.59	0.00_7	0.79_9	0.19_9	2.81	2.38	〃	平清水	〃
㊷	0.65	0.01_8	3.00	0.36_5	2.61	2.68	〃	切込？	茶碗 MC57
㊸	0.60	0.05_3	2.29	0.33_3	2.63	2.72	〃	平清水	茶碗 AMC 3

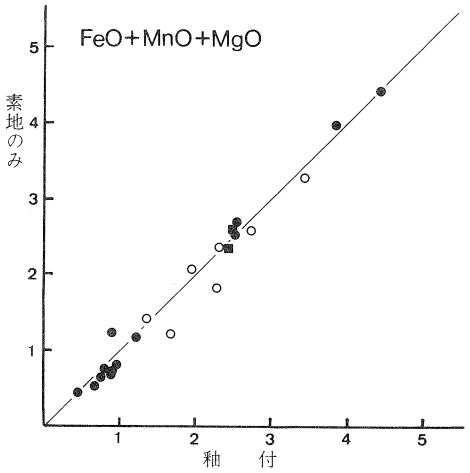
No. ＼ 成分	FeO	MhO	CaO	MgO	Na_2O	K_2O	
JR-1	0.77	0.09_4	0.12_7	0.77	4.01	4.38	Present analysis
JR-1	0.85	0.10	0.09	0.63	4.10	4.44	Recommended value
JR-2	0.72	0.10_6	0.03_9	0.48	3.98	4.49	Present analysis
JR-2	0.86	0.11	0.05	0.45	4.03	4.48	Recommended value

表40 NM2出土陶磁器および地球化学的標準試料の分析結果 (地質調査所)

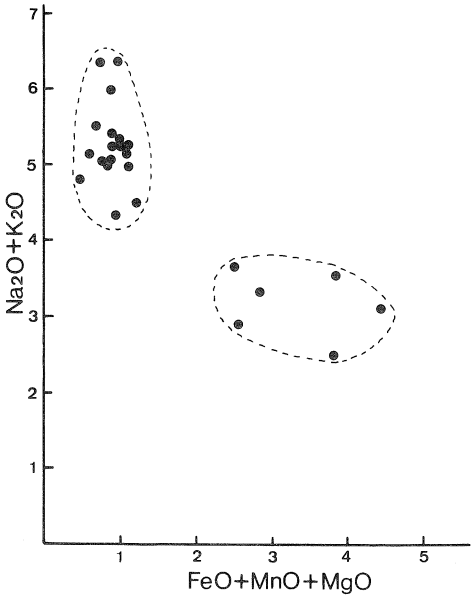
Table 40 Analytical results of ceramics from NM2 and the GSJ㊗ geochemical standards ㊗GSJ=Geological Survey of Japan(地質調査所)



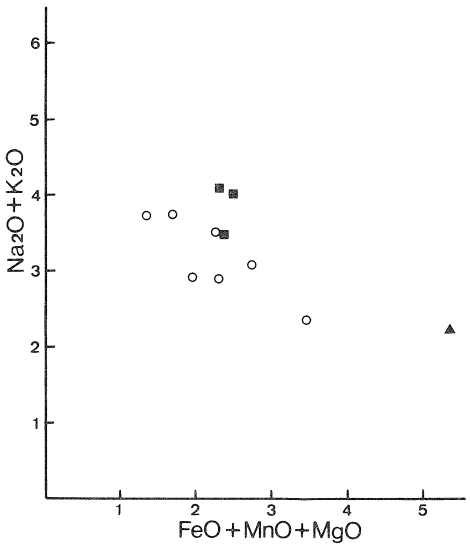
1．釉薬付および素地のみの部分のCaO 含有量



2．釉薬付および素地のみの部分のFeO+MnO+MgO の含有量



3．平清水焼の(Feo+MnO+MgO)−(Na2O + K2O) 関係



4．大堀・切込・二本松の(FeO +MnO + MgO) −(Na2O +K2O)関係

● 平清水，○ 大堀，■ 切込，（産地不確実のものは省いてある，以下同じ）

図78　仙台城二の丸跡出土陶磁器の化学組成
Fig. 78 Chemical composition of ceramics from NM2

第Ⅴ章　ＮＭ２の石敷遺構から出土した植物種子および果実

内　藤　俊　彦

1．は　じ　め　に

1602年伊達政宗が、築城した仙台城二の丸の小広間裏手で、本来は手洗い場として利用されていた場所で、明治初期にゴミ捨て場として使用された場所から、多くの植物種子および果実が出土した。ゴミ捨て場であったことは、その当時の仙台城内の生活の一部を示す資料として利用できるものと考えた。そこで、出土した植物種子および果実の同定とその状況について調査した。

2．調　査　方　法

発掘によって取り出された土壌を、0.1mmメッシュの篩で水洗し、種子および果実を取り出した後、実体顕微鏡の下で、種子および果実の表面を検鏡し、種子および果実標本として、東北大学理学部附属植物園に保存されている種子および果実と比較検討した。また、それぞれの種子および果実について、その大きさを測定した。

3．結果および考察

出土した植物種子および果実のうち、裸子植物３科３種、被子植物単子葉植物３科３種、被子植物双子葉植物17科27種、合計23科33種を認めた。この他不明種が約10種認められた(表41)。これらの種のうち、Humulus lupulus Linn. var. cordifolius (Miq.) Maxim. (カラハナソウ) が79粒、Prunus pendula Maxim. forma ascendens (Makino) Ohwi (エドヒガン) (図80－2) が54粒、Cornus brachypoda C.A.Mey. (クマノミズキ) が41粒、Rhus trichocarpa Miq. (ヤマウルシ) (図80－3) が28粒、Ilex latifolia Thunb. (タラヨウ) が27粒、Moehringia lateriflora (Linn.) Fenzl (オオヤマフスマ) が18粒などが多く出土した (表41)。

種子や果実などの植物の繁殖子の散布のされ方について、これらの繁殖子の形態的特徴に注目した、散布様式の類型化が、Clemeuts (1907)、Molinier & Muller (1938)、沼田 (1959) やVan Der Pijl (1969) などによって行なわれている。それによると、風散布型、動物散布型、自動散布型、重力散布型などに類型されている。出土した種について、散布型に分けると、風散布型のものは、Pinus densiflora Sieb. et Zucc. (アカマツ)、Cryptomeria japonica (Linn.fil) D. Don (スギ)、Miscanthus sinensis Anderss. (ススキ)、Dioscorea tokoro Makino (オニドコロ)、Carpinus laxiflora (Sieb. et Zucc.) Blume (アカシデ)、C.tschonoskii Maxim. (イヌシデ)、Humulus lupulus Linn. var. cordifolius (Miq.) Maxim. (カラハナソウ)、Acer palmatum Thunb. var. amoenum Ohwi (オオモミジ) の

		出土粒数	
GYMNOSPERMAE Rashishokubutsu			
TAXACEAE Ichii-ka			
1. Torreya nucifera (Linn.) Sieb. et Zucc.	Kaya	1	(自生or植栽)
PINACEAE Matsu-ka			
2. Pinus densiflora Sieb. et Zucc.	Akamatsu	5	(〃)
TAXODIACEAE Sugi-ka			
3. Cryptomeria japonica (Linn. fil.) D. Don	Sugi	7	(植 栽)
ANGIOSPERMAE Hishishokubutsu			
MONOCOTYLEDONEAE Tanshiyoushokubutsu			
GRAMINEAE Ine-ka			
4. Miscanthus sinensis Anderss.	Susuki	1	
JUNCACEAE Igusa-ka			
5. Luzula capitata (Miq.) Nakai	Suzumenoyari	5	
DIOSCOREACEAE Yamanoimo-ka			
6. Dioscorea tokoro Makino	Onidokoro	2	
DICOTYLEDONEAE Soushiyoushokubutsu.			
CHORIPETALAE Ribenkarui			
JUGLANDACEAE Kurumi-Ka			
7. Juglans ailanthifolia Carr. var. ailanthifolia	Onigurumi	1	
8. var. cordiformis (Maxim.) Rehder	Himegurumi	3	(植 栽)
BETULACEAE Kabanoki-Ka			
9. Carpinus laxifora (Sied. et Zucc.) Blume	Akashide	1	
10. C. tschonoskii Maxim.	Inushide	1	
FAGACEAE Buna-Ka			
11. Quercus serrata Thunb.	Konara	1	
MORACEAE Kuwa-Ka			
12. Broussonetia kazinoki Sieb.	Kouzo	5	
13. Humulus lupulus Linn. var. cordifolius (Miq.) Maxim.	Karahanasou	79	
POLYGONACEAE Tade-Ka			
14. Polygonum lapathifolium Linn.	Ooinutade	3	
15. P. scabrum Moench	Sanaetade	1	
PHYTOLACACEAE Yamagobou-Ka			
16. Phytolacca esculenta Van Houtte	Yamagobou	2	
CARYOPHYLLACEAE Nadeshiko-Ka			
17. Cerastium holosteoides Fries var. angustifolium (Franch.)	Mizushima		
	Miminagusa	1	
18. Moehringia lateriflora (Linn.) Fenzl	Ooyamafusuma	18	
19. Stellaria media (Linn.) Villars	Kohakobe	1	
ROSACEAE Bara-ka			
20. Prunus mune Sieb. et Zucc.	Ume	9	(植 栽)
21. P. pendula Maxim. .forma ascendens (Makino) Ohwi	Edohigan	54	(植栽？)
22. P. persica (Linn.) Batsch	Momo	3	(植 栽)
LEGUMINOSAE Mame-Ke			
23. Amphicarpaea edgeworthii Benth. var. japonica Oliver	Yabumame	1	
RUTACEAE Mikan-Ka			
24. Zanthoxylum piperitum (Linn.) DC.	Sanshou	5	
ANACARDIACEAE Urushi-Ka			
25. Rhus trichocarpa Miq.	Yamaurushi	28	
AQUIFOLIACEAE Mochinoki-Ka			
26. Ilex latifolia Thunb.	Tarayou	27	(植 栽)
27. I. macropoda Miq.	Aohada	3	
ACERACEAE Kaede-Ka			
28. Acer palmatum Thunb. var. amoenum Ohwi	Oomowiji	11	(植 栽)
VITIDACEAE Budou-Ka			
29. Ampelopsis brevipedunculata (Maxim.) Trautv.	Nobudou	1	
30. Vitis flexuosa Thunb.	Sankakuzuru	4	
VIOLACEAE Sumire-Ka			
31. Viola mandshurica W. Becker	Sumire	1	
UMBELLIFERAE Seri-Ka			
32. Hydrocotyle sibthorpioides Lam.	Chidomegusa	1	
CORNACEAE Mizuki-Ka			
33. Cornus brachypoda C. A. Mey.	Kumanomizuki	41	

表41 ＮＭ２石敷遺構から出土した植物種子および果実

Table 41 List of the excavated seeds from the stone floor at NM2

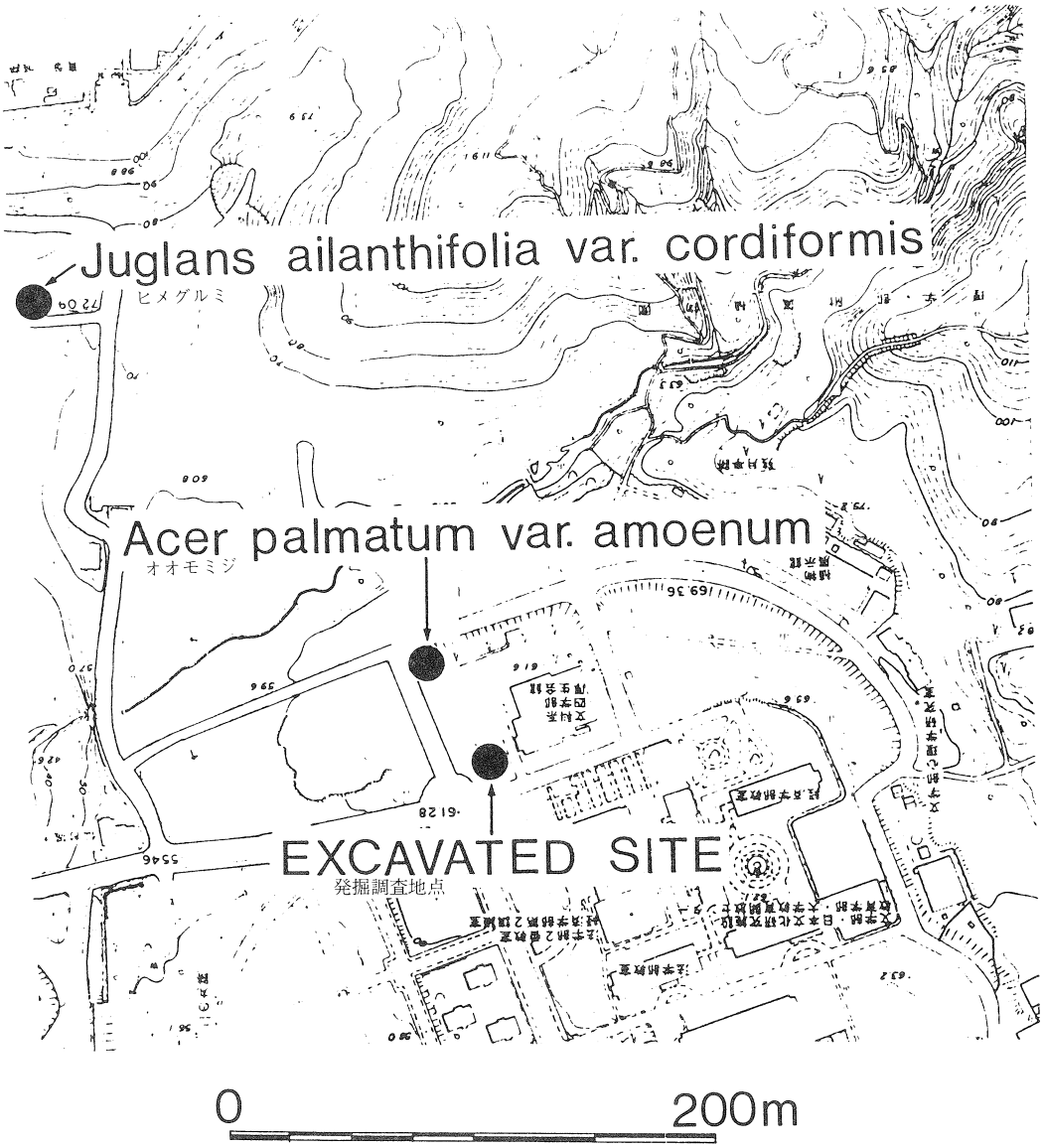


図79　ヒメグルミおよびオオモミジの生育地と石敷遺構の位置

Fig. 79 Locations of the present trees and excavated site (NM2)

8種である。これらのうち庭園内などに植栽されるものとしては、アカマツ、スギ、オオモミジがある。オオモミジは出土地点から南へ約50mの地に、仙台市の指定樹木となっているものがあり、ここから供給される可能性が考えられる。アカマツおよびスギは西南へ約200mの東北大学理学部附属植物園内から、供給される可能性もある。

ススキ、オニドコロ、カラハナソウなどは近くに馬場があったことから、この付近からの供給があったものであろう。イヌシデ、アカシデについても、御裏林と呼ばれる地域からの供給であろう(図79)。

動物散布型のものは、Torreya nucifera (Linn.) Sieb.et Zucc.(カヤ)(図82—4)。Juglans ailanthifolia Carr.var.ailanthifolia (オニグルミ)(図82—5)。J,ailanthifolia var.cordiformis (Maxim.) Rehder (ヒメグルミ)(図82—6)。Broussonetia kazinoki Sieb.(コウゾ)、Phytolacca esculenta van Houtte (ヤマゴボウ)、Prunus mune Sieb.et Zucc.(ウメ)(図82—7)、P.pendula Maxim.forma ascendens (Makino) Ohwi (エドヒガン)、P.persica (Liun.)Batsch (モモ)(図82—8)、Rhus trichocarpa Miq.(ヤマウルシ)、Ilex latifolia Thunb.(タラヨウ)、I.macropoda Miq.(アオハダ)、Ampelopsis brevipedunculata (Maxim.) Trautv.(ノブドウ)、Vitis flexuosa Thunb.(サンカクヅル)、Cornus brachypoda C.A.Mey.(クマノミズキ)の14種であり、もっとも多い。

カヤは種皮の破壊状態から、人間が食べた残渣であるとみえるが、出土粒数が1コであり、疑問が残る。オニグルミは核の破壊状態から、人間が食べた残渣であろうと推定されるが、出土粒数が1つであることが疑問を残している。ヒメグルミは、核に円形の穴が空いている。これはホンドアカネズミが食べた痕である。現在のヒメグルミの分布は、わが国では植栽されたもののみである。また、この地域でのヒメグルミの生育は、二の丸から天守台に登る道路から三の丸へ通じる道路の途中に1本確認されている(図79)。出土地からの距離は約400mであり、ホンドアカネズミの行動域の中に当たる。従って、この地から運搬されたことも考えられる。また、二の丸には中島池、瓢箪池などの池沼が、存在したことから、これらの周辺に植栽されていたものからの運搬も考えられる。さらに、救荒植物や戦時食の備蓄のために、二の丸内などにヒメグルミが植栽されていた可能性も考えられる。

コウゾ、ヤマウルシ、アオハダ、サンカクズル、クマノミズキなどは、御裏林と呼ばれた、現在の東北大学理学部附属植物園内から鳥類によって、食べられた後に排泄されたものが、集積した可能性が大きい。ヤマゴボウやノブドウは二の丸の敷地内に、生育していたものから運搬されたものであろう。

ウメやモモは自生していないので、二の丸など城内に植えられていたものか、いずれかの地から、食料にするために持ち込まれたものであろう。また、モモについては、現在多数栽培さ

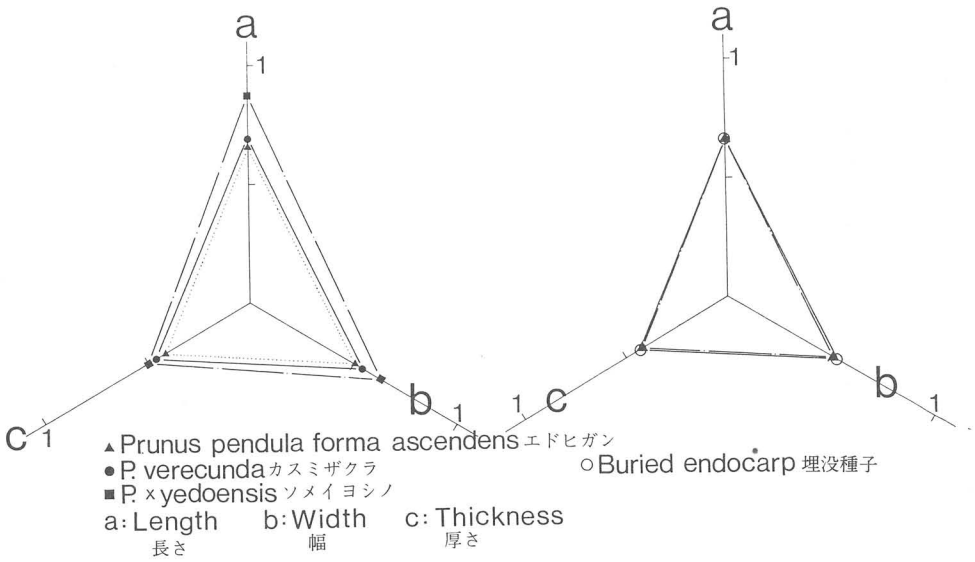


図80　桜属の核の大きさ (cm)
Fig. 80　Endocarp size of *Prunuo*

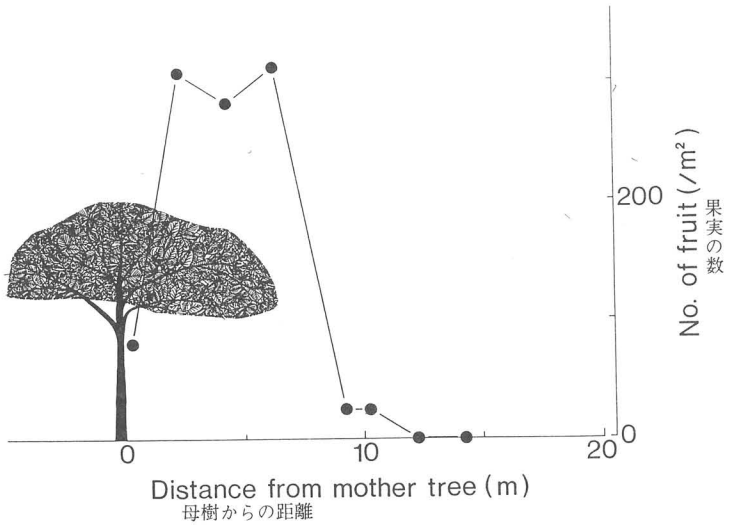


図81　エドヒガンの果実の散布
Fig. 81 Fruit dispersal of *Prunus pendula forma ascendens*

れている品種である「大久保」などではない。ウメは生食しないので、出土地の庭に植栽されていないとすれば、梅干として利用されたものの残渣であると考えられる。この点については、今後の調査に期待したい。

エドヒガンについては、出土地を中心として、現在生育しているサクラの主なものは、ソメイヨシノ、エドヒガン、カスミザクラであり、また、仙台地方の丘陵地における花見の桜は、ソメイヨシノ、エドヒガン、エンドウザクラ(垂桜)である。そこでこれらのうち、ソメイヨシノ、エドヒガン、カスミザクラの核の形態と大きさを計測した。また、出土したサクラの核について、同様の計測を行ない、図80のような結果を得た。

ソメイヨシノ、エドヒガン、カスミザクラの核の大きさは、ソメイヨシノがもっとも大きく、次いでカスミザクラ、次にエドヒガンの順で小さくなっている。出土したサクラの核の大きさは、エドヒガンの核の大きさに一致した。また、核の形態もエドヒガンのそれに似ている。この2点から出土したサクラの核をエドヒガンとした。

エドヒガンの核が、どこから散布されたのかが問題となる。そこで、エドヒガンの核の散布について、記念講堂の東側の樹高10mのエドヒガンを用いて調査した。

エドヒガンの樹幹から2m毎に50×50cmの方形枠を置いて、その中に落下している果実を全べて採集して、その数を数えた結果は、図81に示した。この結果からエドヒガンの果実の散布は、樹冠内にほとんどが落下している。このことと出土した核の数から、出土地のごく近くにエドヒガンが、植栽されていたものと推定される。また、エドヒガンを食べた鳥類が、御廊下の屋根にとまり、排糞したものが落下して、堆積したと考えることも出来る。これについては、建物の構造たとえば樋の有無や屋根の角度などが関係するから、今後の問題である。いずれにしろ、二の丸の敷地内にエドヒガンが植栽されていたことは確かである。ソメイヨシノの核が出土しないのは、樹冠から直接落下堆積するにしろ、鳥類の排糞によって堆積するにしろ、ソメイヨシノの果実を供給するソメイヨシノの植栽がなかったものと推測される。このことから、仙台城内における花見の桜は、ソメイヨシノではなく、エドヒガンであったのではないかと考えられる。また、図82・図82－1のようにエドヒガンの花は、花見に十分耐えうるものである。

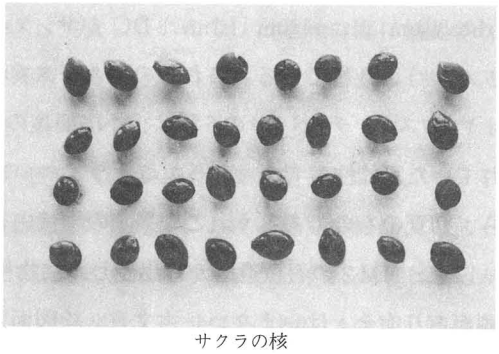
自動散布型の植物として、Amphicarpaea edgeworthii Benth. var. japonica Oliver(ヤブマメ)、Viola mandshurica W.Becker(スミレ)の2種が認められた。この2種は小広間裏の雑草として、生育していた可能性はきわめて高いものと考える。

重力散布型の植物としては、Luzula capitata (Miq) Nakai(スズメノヤリ)、Quercus serrata Thunb.(コナラ)、Polygonum lapathifolium Linn.(オオイヌタデ)、P. scabrum Moench(サナエタデ)、Cerastium holosteoides Fries var. angustifolium (Franch.) Mizushima(ミミナグサ)、Moehringia lateriflora (Linn.) Fenzl(オオヤマフスマ)、Zan-

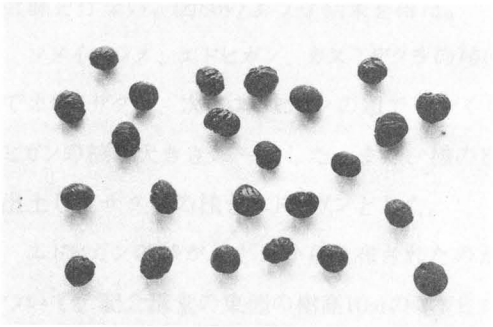
thoxylum piperitum (Linn.) DC .(サンショウ)、Hydrocotyle sibthorpioides Lam .(チドメグサ)の8種である。これらのうち、スズメノヤリ、オオイヌタデ、サナエタデ、ミミナグサ、オオヤマフスマ、チドメグサの6種は、小広間裏の庭の雑草と考えられる。サンショウは庭に植えられていた可能性も考えられる。コナラについては、まだ未熟のきわめて若い果実であることから、初夏のものであろう。この果実の堆積由来については不明である。

以上、NM2の石敷遺構から出土した植物種子および果実について述べたが、種々な点で推測があり完全とはいえない。古文書、絵図面、建物の構造や城内の住人の生活様式などとの検討が必要であり、今後の問題としたい。

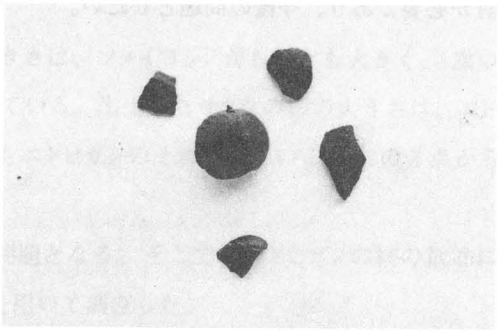
満開のエドヒガン



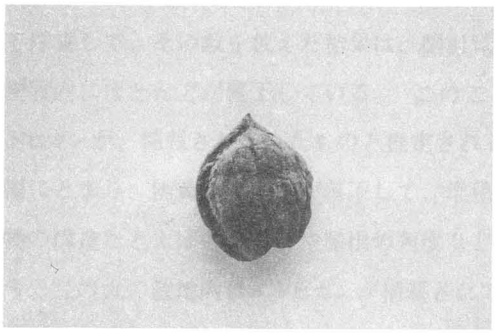
サクラの核



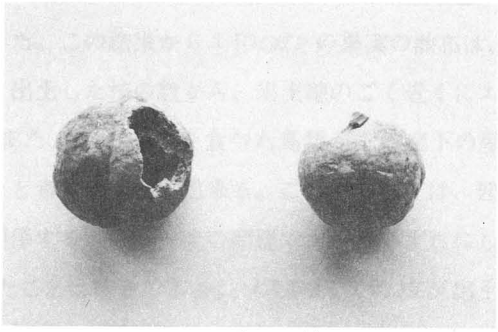
ヤマウルシの核



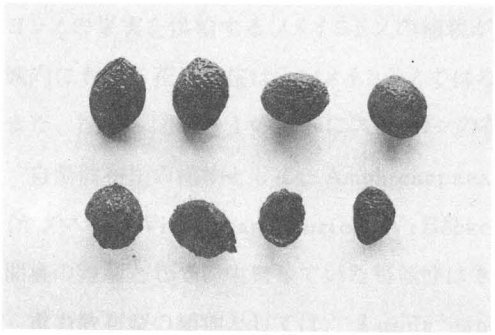
カヤの種子片



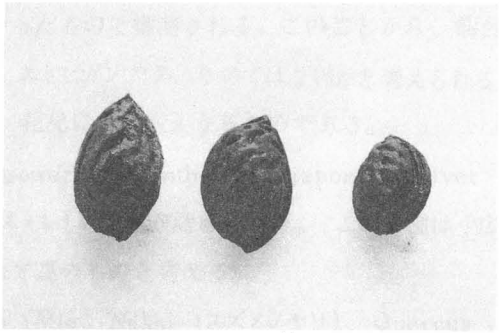
オニグルミの核



ヒメグルミの核



ウメの核



モモの核

図82　ＮＭ２石敷遺構出土の植物種子

Fig 82　Blooming *P. pendula forma ascendens* and specimens of seeds from stone floor at NM2

第Ⅵ章　ＮＭ２石敷遺構の花粉分析の結果について

竹　内　貞　子

花粉分析の結果は、表42に示す通りである。Cryptomeria（スギ属）、Pinus（マツ属）が優勢で、Fagus（ブナ属）、Quercus（コナラ属）、Abies（モミ属）などを伴う花粉組成を示している。現在のこの付近の植物から判断して、Abies は、Abies firwa（モミ）と考えられる。試料堆積当時、この付近はスギやマツに囲まれ、裏の丘陵地には、モミやブナ属、コナラ属、クマシデ属などが、また沢すじにはハンノキやヤナギなどが生い茂っていたと推測される。

種　別	和　名	%
Abies	モミ属	2.5
Pinus	マツ属	22.4
Cryptomeria	スギ属	39.8
T-C-T*1		2.9
Fagus	ブナ属	4.1
Quercus	コナラ属	3.3
Alnus	ハンノキ属	1.2
Betula	カバノキ属	0.4
Carpinus	クマシデ属	1.7
Corylus	ハシバミ属	0.4
Juglans	クルミ属	0.4
Salix	ヤナギ属	2.9
Zelkova	ケヤキ属	0.4
Viburnum	ガマズミ属	0.4
Gramineae	イネ科	2.9
Cyperaceae	カヤツリグサ科	2.1
Chenopodiaceae	アカザ科	0.8
Carduoideae	キク亜科	1.7
Artemisia	ヨモギ属	0.8
Monolete spore	単条型胞子	1.2
Trilete spore	三条型胞子	2.9
Indeterminiable pollen	不明花粉	4.9
AP/TP*2		83.0

＊1　Taxodiaceae-Cupressaceae-Taxaceae（スギ科-ヒノキ科-イチイ科）
＊2　花粉および胞子全体に対する樹木花粉の割合

表42　花粉百分率表

Table. 42　Percentages of pollens

第Ⅶ章　ＮＭ２出土の動物遺存体

高　橋　　理

同定した動物遺存体は、昭和58年より昭和59年にかけて、東北大学埋蔵文化財調査委員会によって発掘、調査が行なわれたＮＭ２より出土したものである。発掘中に目についた遺存体についてはその場で取り上げ、収納したが、ピット24と石敷遺構の場合は、ピットの埋土ごと収納し、後日室内において５mm・１mmの２段のフルイを用いて水洗いを行ない、フルイ上に残った遺存体を採集した。動物遺存体は大部分が火を受けて白色化しており、非常に脆い状態であったので、バインダーによって補強した後、接合・同定・計測を行なった。細かい骨片が少なからず出土したが加熱によるひび割れ、ねじれなど変形が著しく、同定できた遺存体はその一部にとどまる。貝類２種、魚類１科４種、鳥類１科、哺乳類２種が同定された（表43）。

１．貝　　類

１）マシジミ　Corbicula leana　シジミガイ科

Ａ－１・６層中より表皮のみが１点出土している。殻頂部を欠き、左右は不明である。殻長（殻の最大幅）は、28.6mmである。比較的新しい時期の遺跡・遺構において、このような淡水産の貝類が殻本体を消失しながら表皮のみを出土することはよくある。

２）アサリ　Tapes japonica　　マルスダレガイ科

Ｄ－２・カクランより左側の殻頂部を残す破片が１点出土している。現生標本との比較により、殻高31.5mm、殻長42.0mm程度の個体であり、アサリとしては、中型の大きさである。保存の状態は非常に良い。

２．魚　　類

１）マダイ　Chrysophrys major　　タイ科

石敷遺構より椎骨が１点出土している。火は受けておらず、全体が濃い褐色を呈している。横径5.3mm、縦径5.0mm、長さ5.8mmであり、現生標本との比較より標準体長（吻端より尾鰭の付根までの長さ）が、240mm弱と推定され、マダイとしては小型の部類に属する。解体を示すような痕跡はない。

２）マダラ　Gadus morrhua macrocephalus　　タラ科

石敷遺構より椎骨が３点出土している。火を受けた痕跡はない。

椎骨①　棘が欠損しているが、椎体はほぼ完形。マダラに特有のゆがみが観察される。前面において、横径11.3mm、縦径11.2mmを測定し、標本と比較して標準体長約600mmと推

定される。

椎骨② 棘と椎体前部の上半を一部欠損する。後面の横径が11.0mm、縦径が10.6mmで、標準体長は615mm程度であろう。

椎骨③ 棘は欠損するが、椎体はよく保存されている。前面において横径10.2mm、縦径9.1mmを測り、標準体長約615mmの個体と推定される。

以上3点の椎骨は、いずれも標準体長600mm程度の個体のもので、同一個体の可能性もある。1.2mまで成長するマダラとしては、中型の個体といえよう。解体痕などは、観察されない。

3）サ ケ 科 Salmonidae gen. et sp. indet.

石敷遺構においてサケ科魚類の椎骨破片が1点出土している。細片であるので椎体径、さらに標準体長の復元にまでは至らなかった。火を受けている。

4）フサカサゴ（クロソイ？） Scropaena neglecta（Sebastes schlegeli ？）

カサゴ科

フサカサゴかクロソイの胸鰭棘と推定される骨片が1点、石敷遺構より出土している。火を受けてかなり欠損しており、上記の2種のいずれかであろうという程度の同定にとどまる。

5）アイナメ Hexagrammos otakkii アイナメ科

石敷遺構より左主上顎骨の先端部、即ち前上顎骨との関節部が1点出土している。

3．鳥 類

Anatidae gen. et sp. indet. ガンカモ科

C－1・4層中において、鳥類の下顎骨先端部と推定される骨片が1点出土している。火をかなり受けており、変形が著しいが、カモ類の下顎に類似している。大きさは、カルガモクラスである。

4．哺 乳 類

1）テ ン Martes melampus イタチ科

C－1・4a層より右尺骨の近位端と右橈骨の近位端がそれぞれ1点ずつ出土している。大きさから同一個体の可能性があるが、火を受けて脆弱となっており、尺骨、橈骨相互の関節部の適合性は確認できない。体長40～50cmの成獣の大きさである。

2）イノシシ（ブタ？） Sus scrofa leucomystax（Sus scrofa domesticus ？）

イノシシ科

ピット24より多数の獣骨片が出土した。全てがかなり強く火を受けており、変形が著しい。以下の6点が同定された。

①上腕骨　右上腕骨の近位端の一部。成長線から遊離した部分で、上腕骨頭の後側部にあたる。

②第一頚椎(環椎)と関節する後頭顆の左側部分の下部。

③脛骨　左脛骨の外側顆後側部の一部と、後顆間区一部。成長線から遊離したと推定される。

④坐骨　右坐骨の寛骨臼切痕の一部で、栄養孔が観察される。

⑤恥骨　右寛骨臼の一部とそれに連なる恥骨体の上半部。

⑥恥骨結合面　左恥骨結合面の一部(恥骨櫛)と推定されるが形状に若干の疑問がある。

①～⑥のいずれにも解体痕など観察されなかった。上記以外の骨片もおそらくは、イノシシ(ブタ)の遺存体ではあろうが、確実に部位を判定できなかったので、以上の6点について報告するにとどめる。

区	出土地区、層位	種　類	部　位　数
NM 2	A—1、6 層中	マシジミ	1 (表皮)
	石敷遺構	マダイ	椎骨 1
	〃	マダラ	椎骨 3
	〃	フサカサゴ(クロソイ?)	胸鰭棘 1
	〃	アイナメ	主上顎骨 (ℓ) 1
	〃	サケ科	椎骨(細片) 1
	ピット 24	イノシシ(ブタ?)	上腕骨 (r) 1
	〃	〃	後頭顆 (ℓ) 1
	〃	〃	脛骨 (ℓ) 1
	〃	〃	坐骨 (r) 1
	〃	〃	恥骨 (r) 1
	〃	〃	恥骨結合面 (ℓ) 1
	D-2、カクラン	アサリ	(ℓ) 1
	C-1、4層中	ガンカモ科	下顎骨 1
	〃 4a層	テン	尺骨 (r) 1
	〃 〃	〃	橈骨 (r) 1

表43　NM2　動物遺存体一覧表

Table 43 List of faunal remains from NM2

第Ⅷ章　ＮＭ２出土の熔融ガラスの分析結果

旭硝子株式会社

1．目　　的

東北大学埋蔵文化財調査委員会の依頼により、首題試料の成分、軟化温度等について現代の板ガラスとの比較分析を当社京浜工場技術室にて実施した。当該試料は、1983年仙台城二の丸跡の発掘調査で焼土と共に発見された熔融ガラスであり、1882年（明治15年）二の丸焼失時のものと考えられている。

2．試　　料

２－１　試料の形状

約２～６㎝角位で厚み1.5～3.5㎜位のやや失透し波状に変形したカレット片が主で、他に重り合って塊状となり焼結したもの、さらに、比較的正常で板ガラスの形状を留め変形変重してないものが少量ある。

全熔融ガラス重量……約405ｇ

２－２　試料の級分け

分析にあたり外姿の中から次の様に級分けを行なった。

(イ)　試料記号「Ａ」

10～12枚位が重なり合って熔結した塊状部分。１ケ約120ｇ

(ロ)　試料記号「Ｂ」

約２～６㎝角位で厚み1.5～3.5㎜位のやや失透し波状に変形したカレット片。約280ｇ。

(ハ)　試料記号「Ｃ」

板ガラスの形状を留め変形変質していないもの。約５ｇ。

以上の試料については、外観写真、断面写真を添付するので参考のこと（図83）。

3．分析項目

①　当該ガラスの成分（組成）

②　当該ガラスの軟化温度

③　当該ガラスの比重

4．分析結果

４－１　成分（組成）（表44）

当該ガラスおよびフロートガラスの成分(組成)について分析した結果を表44に示す。

4－2　軟化温度および比重（表45)

当該ガラスおよびフロートガラスの軟化温度および比重について分析した結果を表45に示す。

試料 / 成分	熔融ガラス組成(%)			比較ガラス組成(%)
	記号A	記号B	記号C	旭硝子フロートガラス
SiO_2	72.50	72.50	71.80	72.70
Al_2O_3	0.70	0.53	0.60	1.74
Fe_2O_3	0.24	0.20	0.18	0.10
TiO_2	0.06	0.05	0.05	0.06
CaO	14.58	14.86	15.21	8.21
MgO	0.64	0.27	0.47	3.97
SO_3	0.57	0.53	0.73	0.16
As_2O_3	0.06	0.10	n、d	n、d
Na_2O	10.40	10.60	10.70	13.00
K_2O	0.30	0.40	0.30	

表44　熔融ガラスの成分(組成)
Table 44　Compositions of melted glass from NM2

試料 / 項目	熔融ガラス			比較ガラス
	記号A	記号B	記号C	旭硝子フロートガラス
*軟化温度(℃)	750.7	747.3	747.0	745.9
比重	2.5428	2.5445	2.5539	2.4886

表45　軟化温度および比重
表45　Table 45 Softening point and specific gravity

※軟化温度:ガラスには明確な融点はなく、温度の上昇と共に連続的に粘度が低下する。ガラスの粘度が4.5×107 Roiseの時の温度をガラスの軟化温度とする,

5. まとめ

（表44、表45参照）

1）試料A・Bは共にAs_2O_3(酸化ひ素）を含有しており、CaO（石灰）分が15%前後とフロートガラスに比べて多い。逆にアルカリ分（Na_2O+K_2O）とAl_2O_3（アルミナ）が少ない。

2）試料CはA・Bとほぼ同じ組成であるが、As_2O_3が検出されなかった。

3）現代のフロートガラスの組成の一般的特徴は次の通り。

① As_2O_3を含有しない。

② CaOは8～9%程度。

③ Al_2O_3を2%近く含有する。

4）軟化温度については試料A・B・Cとフロートガラスとではほとんど差異はないが、比重についてはフロートガラスの方が若干低い。

以上の点から

i）試料A・B・Cとも現代のフロートガラスと同様「ソーダ石灰ガラス」であるが、組成について（特にCaO、As_2O_3、Al_2O_3、アルカリ分）差異がある。

ii）試料AとBは同一のガラスと推定できる。

iii）試料Cについては、As_2O_3を含有していないことから、A・Bとは違うものと推定できる。

6．その他の推定事項

1）国産か輸入品か

1880年代の板ガラスの物性・組成等に関する資料がないため定かでないが、当時はまだ板ガラスが国産化されておらず、生産技術の模索時代であることから、当該ガラスが当時のものであるとすると、輸入品である可能性が強い。

日本での板ガラスの国産化は、明治42年当社の尼崎工場にてスタートしたのが最初であるが、一方国外では18～19世紀にかけてベルギー・フランス等で、円筒法による板ガラスの生産記録がある。

2）窓ガラスか否か

当該ガラスは、ソーダ石灰ガラスであり、鉛を含有していないことから板ガラスとして窓に使われていた可能性が強い。

3）明治初年における東北地方の板ガラスの普及度

具体的資料はないが、1)でも述べた通り、板ガラスのほとんどが輸入品に依るものであり、しかも高価であったことから考えると、普及度はきわめて低いと思われる。

4）製造後の経過年（絶対年代）、一枚の大きさ。

以上の２項目については、推定困難である。

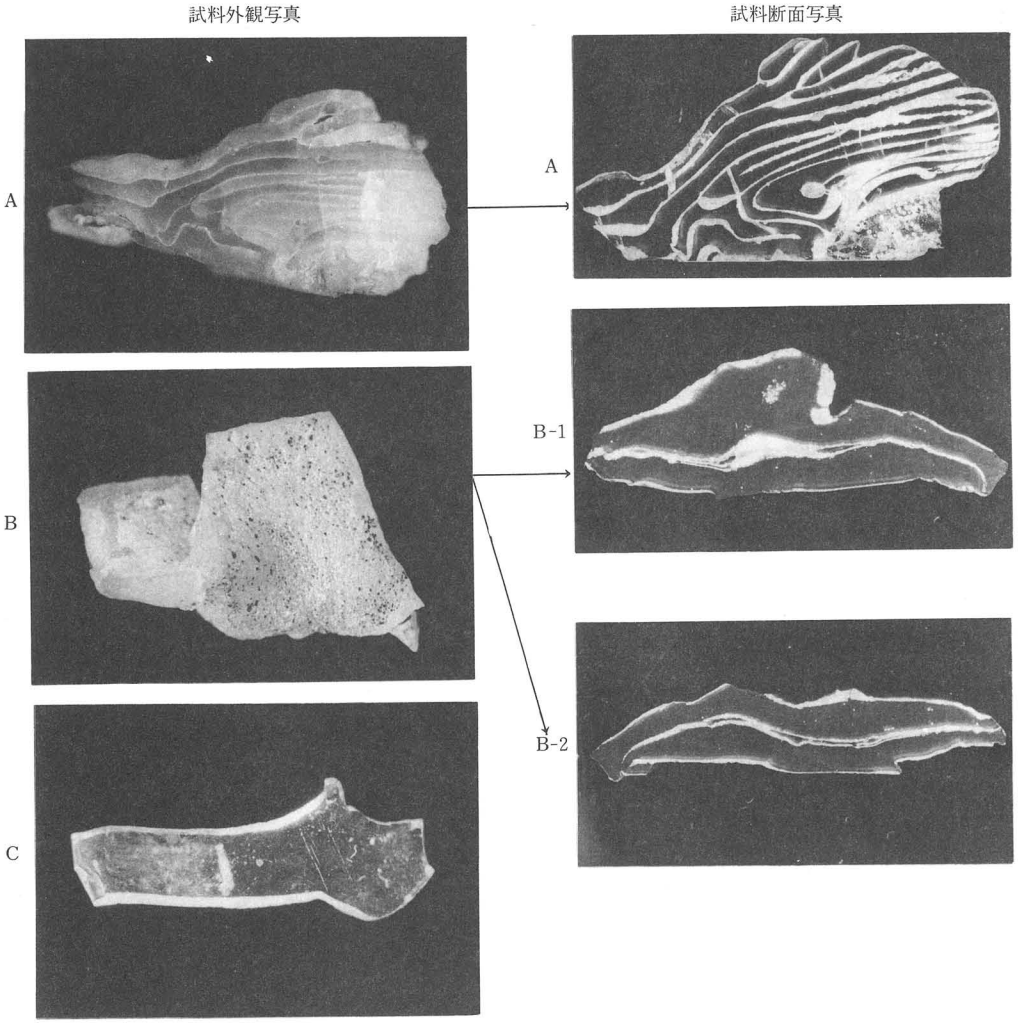


図83　分析試料写真(倍率2倍)

Fig. 83 Appearances and sections of analyzed glass specimens

《引　用　文　献》

愛知県名古屋土木事務所、愛知県教育委員会　1975　「瀬戸市かみた第１・２号古窯」　pp 32

秋岡芳夫　1984　「晴(ハレ)と褻(ケ)のデザイン」　『器のファッション』　日本と美の文化17　pp 105～113　（講談社）

朝倉治彦　他　1981　『事物起源辞典　衣食住編　第12版』　（東京堂出版）

朝日新聞社編　1985　『日本百年写真館Ⅱ』　（朝日新聞社）

伊藤ていじ　1973　『城　築城の技法と歴史』　（読売選書）

伊東信雄　1967　「仙台城の歴史」　『仙台城』　pp 1～22　（仙台市教育委員会）

伊東信雄　1979　『仙台郷土史の研究』　（宝文堂）

奥津春生　1967　「仙台城の地形・地質」　『仙台城』　pp 123～165　（仙台市教育委員会）

大森忠五郎　1937　「仙台郷土史研究」　『戊辰戦争軍事日記』　pp 9～18

小野正人　1973　『陶磁選書』　北国秋田山形の陶磁　（雄山閣）

小和田(おわだ)哲男　1979『歴史新書　日本史97』　城と城下町　（教育社）

上磯町教育委員会　1983　『松前藩戸切地陣屋跡』　（北海道上磯郡上磯町）

河原純之　編　1984　『日本の美術３』　一乗谷遺跡　（至文堂）

鬼頭　宏　1983　「江戸時代の米食」　『歴史公論　№89』　pp.43～49　（雄山閣）

九州陶磁文化館　1984　『北海道から沖縄まで国内出土の肥前陶磁』　（九州陶磁文化館）

古泉　弘　1983　『江戸を掘る－近世都市考古学への招待』　（柏書房）

古伊萬里調査委員会　編　1959　『古伊萬里』　（金華堂）

光芸出版編　1976　『やきもの辞典』　pp.206　（光芸出版）

古賀　孝　1974　『切込焼』　（雄山閣）

五島美術館編　特別展「江戸のやきもの」図録　五島美術館展覧会図録　№104

佐藤　巧　1967　「仙台城の建築」　『仙台城』　pp.23～87　（仙台市教育委員会）

残夢叟　1972　『仙台戊辰役の終戦内幕』　pp.14～20　（仙台郷土史研究　16）

澁(しぶや)谷五郎・長尾勝馬　1959　『新版　日本建築　下巻』　（学芸出版社）

白老町教育委員会　1982　『史跡白老仙台藩陣屋跡Ⅰ－昭和56年度環境整備事業概報－』

鈴木省三　1977　『仙台風俗志（全）』　（歴史図書社）

鈴木省三　編　1925　「戊辰始末」　『仙臺叢書　第12巻』　pp.41～325　（仙臺叢書刊行會）

芹沢長介　他　1981　『日本やきもの集成Ⅰ』　（平凡社）

芹沢長介　1976　「切込焼の碗と皿」　『東北考古学の諸問題』　pp.513～531　（寧楽社）

芹沢長介　1983　「東北地方の近世陶磁」　『世界陶磁全集　9』　pp.227～259　（小学館）

芹沢長介　編　1978　「切込」　『東北大学文学部考古学研究会考古学資料集別冊Ⅰ』　（東北大学文学部考古学研究会）

仙臺市史編纂委員会　1954　『仙臺市史　本篇１』

高橋良一郎　1977　『ふくしま文庫　40』　相馬のやきもの　（福島中央テレビ）

田渕実夫　1975　『ものと人間の文化史15　石垣』　（法政大学出版局）

（財）千葉県文化財センター　1982　『花前Ⅱ－１遺跡』　「常盤自動車道埋蔵文化財調査報告書Ⅰ」
（日本道路公団東京第一建設局）
中央公論社　1978　「湯呑みと土びん」　『暮しの設計No121』
出川直樹　1983　『やきもの鑑定入門』　（新潮社）
長尾勝馬　1982　『続　図解木造建築の知恵』　pp 178　（理工図書）
西岡常一　他　1981　『蘇る薬師寺西塔』　（草思社）
直方（のうがた）市教育委員会　1982　『古高取　内ケ磯窯跡』
野村泰三　1975　『図鑑　伊万里のすべて』　（光芸出版）
白山四丁目遺跡調査会　1981　『文京区　白山四丁目遺跡調査会』
兵庫県立歴史博物館　編　1984　『特別史跡姫路城跡　―兵庫県立歴史博物館建設に伴う発掘調査報告』
藤原相之助　1981　『奥羽戍辰戦争と仙台藩』　（柏書房）
平凡社編集部　編　1984　『やきもの事典』　（平凡社）
真壁豊威　編　1973　「平清水焼物の歴史」　『山形市史編集資料　32』　pp．7～84　（山形市史編集委員会）
松下芳男　1978　『改訂　明治軍政史論　上』
満岡忠成他　1980　『日本やきもの集成〔3〕瀬戸・美濃・飛驒』　（平凡社）
満岡忠成　他　1980　『日本やきもの集成〔2〕九州Ⅰ』　（平凡社）
三原良吉　1967　「仙台城年表」　『仙台城』　pp．215～238　（仙台市教育委員会）
宮城正俊　1982　『新説　切込焼』　（宝文堂）
三好　一　1975　『カラーブックス346　小皿豆皿』　（保育社）
武蔵岡遺跡調査会　1979　「東京都町田市武蔵岡遺跡」
素木（もとき）洋一　『陶芸のための科学』　（建設綜合資料社）
山下三郎　他　1982　「時代弁当箱資料集成 ―その２―」　『東北工業大学紀要Ⅰ　第２号』　pp．121～140
山田しょう　1983　「(7)　石製品」　『仙台市文化財調査報告書第58集　今泉城跡』　pp．99～123
（仙台市教育委員会）
雄山閣出版編　「帝国陸海軍」『歴史公論No89』
Simpson, P., Kitto, L. and Sodeoka, K. 1979 The Japanese Pottery Handbook, Kodansha International Ltd.

REPORT
OF THE ARCHAEOLOGICAL RESEARCH ON THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY
No-1 October 1985

Contents

1. General Review of Excavation in 1983 Hiroshi Kajiwara
2. Excavations At Kawauchi Campus of Tohoku University

   Hiroshi Kajiwara, Masatoshi Sagawa, Hirotoshi Oba, Kohei Sakuma, Fujiko Yamada, Akio Maesawa, Shou Yamada and Takenori Ichimura

   1) Geographical and Historical Environment of Sendai Castle
   2) The First Excavation of the Secondary Citadel (NM1) of Sendai Castle
   3) The Second Excavation (NM2)
   4) The Third Excavation (NM3)
   5) Relation between Excavations Area and the Structures of the Secondary Citadel in Sendai Castle
   6) The Fire of Sendai Castle in 1882
   7) A Commentary on the Contribution of the Excavation in 1983
3. The Ceremonial Hall in the Secondary Citadel of Sendai Castle

   Takumi Sato
4. Chemical Composition of Ceramics from Sendai Castle

   Satoshi Kanisawa
5. Seeds from Stone Floor in Sendai Castle

   Toshihiko Naito
6. Pollen Analysis in Sendai Castle

   Sadako Takeuchi
7. Faunal remains from Sendai Castle

   Osamu Takahashi
8. Analysis of Melted Glass from Sendai Castle

   Asahi Glass Co., Ltd.

Bibliography

Summary

THE COMMISSION
OF THE BURIED CULTURAL PROPERTIES
IN THE CAMPUS OF TOHOKU UNIVERSITY
1985

Figures

Fig. 1 Archaeological sites and Tohoku University

Fig. 2 Excavation at NM1 in 1982

Fig. 3 Location of excavations (1982, 1983) and elevations at NM1

Fig. 4 Excavation at NM1 in 1982 and 1983

Fig. 5 Cross sections of NM1

Fig. 6 Distribution of pits, drains and other features on each stratum at NM1

Fig. 7 Artifacts from NM1

Fig. 8, 9 Ceramic roof tiles from NM1 (1), (2)

Fig. 10 Grids showing location of excavations and test pits at NM2 and NM3

Fig. 11 Cross sections of excavation grid at NM2

Fig. 12 Distribution and cross sections of features on stratum 2 at NM2

Fig. 13 Distribution and cross sections of features on stratum 4 at NM2

Fig. 14 Distribution and cross sections of features on strata 5 and 6 at NM2

Fig. 15 Distribution and cross sections of features on stratum 7 at NM2

Fig. 16 Partially exposed stone floor of washing area filled with various artifacts at NM2

Fig. 17 Exposed stone floor of washing area at NM2

Fig. 18 Denomination of ceramic details and points of measurements

Fig. 19 Profiles of "rice bowls"(1-8, 10) and "tea bowls"(9, 10)

Fig. 20-23 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2 (1) - (4)

Fig. 24 "Tea bowls" with cobalt blue from NM2

Fig. 25-27 Dishes from NM2, (1)-(3)

Fig. 28 Molded square dishes from NM2

Fig. 29-31 Teapots from NM2 (1)-(3)

Fig. 32 Teapots and small teapots *(kyusu)*(12, 13)from NM2

Fig. 33 Teapot lids from NM2

Fig. 34 Teapot capacity vs. "tea bowl" capacity

Fig. 35 Capacity of teapots and small teapots *(kyusu)* from other sites

Fig. 36 Bottles from NM2

Fig. 37 Various ceramics from NM2

Fig. 38 Cooking pots covered with iron glaze from NM2

Fig. 39 Red earthenware and smudged black earthenware from NM2

Fig. 40 Rectangular charcoal heaters and braziers for smoking out mosquito

Fig. 41 Relation between the (FeO+MnO+CaO+MgO) and the (Na_2O+K_2O) in the ceramics from NM2

Fig. 42 Percentage of excavated ceramics devided according to place of production

Fig. 43 Types of excavated ceramics devided according to place of production

Fig. 44-47 Wooden materials from NM2 (1)-(4)

Fig. 48 Illustaions of building constructions from NM2

Fig. 49 Detail example of shingled roof (*Joge-nyorai* five-storied pagoda)

Fig. 50-51 Metal materials from NM2 (1),(2)

Fig. 52 Distributinon of length of Japanese nails from NM2 and NM3

Fig. 53 Various artifacts from NM2

Fig. 54 Sole of a modern military shoe

Fig. 55-56 Ceramic roof tiles from NM2 (1),(2)

Fig. 57 Cross sections of excavation and a stonewall at NM3

Fig. 58 Points of measurements and post span of construction 1 at NM3

Fig. 59-60 Historical transition of structures at NM3 (1),(2)

Fig. 61 Plans and cross sections of pits and ditches at NM3 (1)-(3)

Fig. 64 Side view of stonewall

Fig. 65-66 Ceramics from NM3 (1),(2)

Fig. 67 Various artifacts from NM3

Fig. 68-70 Ceramic roof tiles from NM3 (1)-(3)

Fig. 71 A superimposed plan of excavation university building, road and ruined structures in Yed era.

Fig. 72 Excavated stone floor, rows of foundation stones and/or their holes at NM2

Fig. 73-75 Historical transition of structures around ceremonial hall in the secondary citadel (1)-(3)

Fig. 76 Central ceremonial hall and surrounding structures in the secondary citadel of Sendai Castle

Fig. 77 Profiles of major structures in the secondary citadel of Sendai Castle

Fig. 78 Chemical composition of ceramics from NM2

Fig. 79 Locations of the present trees and excavated site

Fig. 80 Endocarp size of *Prunuo*

Fig. 81 Fruit dispersal of *Prunus forma ascendens*

Fig. 82 Blooming *P. pendula forma ascendens* and specimens of seeds from stone floor at NM2

Tables

Table 1 Rescue excavations in fisical year 1983

Table 2 A work record of daily excavations at NM1

Table 3 Strata and features at NM1

Table 4 Distribution of artifacts at NM1

Table 5 Attributes list of ceramic roof tiles from NM1

Table 6 A work record of daily excavations at NM2

Table 7 Distribution of "tea bowls" at NM2

Table 8 Distribution of "rice bowls at NM2

Table 9 Distribution of "tea bowls" at NM2

Table 10 Attributes list of "Rice bowl" from NM2

Table 11 Attributes list of "tea bowls" from NM2

Table 12 Morphological classification of dishes from NM2

Table 13 Classification of dish design from NM2

Table 14 Distribution of dishes at NM2

Table 15 Distribution of porcelain dishes from NM2

Table 16 Attributes list of dishes from NM2

Table 17 Attributes list of porcelain dishes from NM2

Table 18 Attributes list of teapots from NM2

Table 19 Attributes list of teapot lids from NM2

Table 20 Distribution of teapots at NM2

Table 21 Distribution of teapot lids at NM2

Table 22 Attributes list of on various ceramics from NM2

Table 23 Distribution of red earthenware and smudged black earthenware at NM2

Table 24 Distribution of wooden materials at NM2

Table 25 Distribution of metal and other artifacts at NM2

Table 26 Distribution of ceramic roof tiles at NM2

Table 27 Feature changes at NM3 listed chronologically

Table 28 A work record of daily excavations at NM3

Table 29 Size of post holes

Table 30 Distribution of ceramics at NM3

Table 31 Notes on ceramics in Fig. 65 and 66

Table 32 Distribution of wooden, metal and other artifacts at NM3

Table 34 Attributes list of ceramic roof tiles from NM3

Table 34 Chronolgical table on the Sendai Castle

Table 35 Location of ceremonial new year's greetings

Table 36 Location of ceremonial monthly greetings

Table 37 Location of main ceremonies

Table 38 Location of audience and greetings with *Daimyo*

Table 39 Mineral Composition of ceramics determined by x-ray diffraction

Table 40 Analytical results of ceramics from NM2 and the GSJ geometrical standards

Table 41 List of the excavated seeds

Table 42 Percentages of pollens

Table 43 List of faunal remains from NM2

Table 44 Compositions of melted glass from NM2

Table 45 Softening point and specific gravity

Plates

Plate 1 Views and cross section of NM1

Plate 2, 3 Features in east part of NM1 (1), (2)

Plate 4 Views and a feature of NM2

Plate 5 Snapshot of the excavation and close-up of artifacts

Plate 6, 7 Features at NM2 (1), (2)

Plate 8 Cross sections at NM2

Plate 9 Views of NM3

Plate 10-12 Features at NM3 (1)-(3)

Plate 13-16 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2 (1)-(4)

Plate 17 "Tea bowls" from NM2

Plate 18-20 Dishes from NM2 (1)-(3)

Plate 21-24 Porcelain dishes from NM2 (1)-(4)

Plate 25-30 Teapots from NM2 (1)-(6)

Plate 31 Teapots small teapots and teapot lids from NM2

Plate 32, 33 Teapots lids from NM2 (1), (2)

Plate 34 Bottles and various ceramics from NM2

Plate 35 Cooking pots and various ceramics from NM2

Plate 36 Cooking pot red earthenware and smudged black earthenware from NM2

Plate 37 Red earthenware and smudged black earthenware from NM2

Plate 38, 39 Ceramic roof tiles from NM2 (1), (2)

Plate 40-42 Wooden materials from NM2 (1)-(3)

Plate 43 Shingling at *Jôge-nyorai* five storied pagoda

Plate 44 Eave shingles of *Jôge-nyorai* five storied pagoda

Plate 45 Shingled roofs and implements for shingling

Plate 46 Metal materials from NM2

Plate 47 Metal materials and various artifacts from NM2

Plate 48 Various artifacts from NM2

Plate 49 A sole of military shoe from NM2 and specimens of military shoes

Plate 50 Ceramic roof tiles and a iron ring from NM1

Plate 51 Ceramics from NM3

Plate 52, 53 Ceramic roof tiles from NM3 (1), (2)

Plate 54 Ceramic roof tiles and other artifacts from NM3

THE SITE REPORT OF THE SECONDARY CITADEL OF SENDAI CASTLE

The Commission of the Buried Cultural Properties in the Campus
of Tohoku University, Katahira-cho, Sendai 980, JAPAN

This is a report of three location in the *Ninomaru* (the secondary citadel) of Sendai Castle excavated in 1983 and 1984.

Sendai Castle was built in AD 1600 by *Masamune Date* on a hill of 120m above sea level. It was a strategic point whose eastern and southern boundaries were guarded by cliffs of 70m, the *Hirose* river to the east and a stream to the south. One could see the whole city from there. In A.D. 1600, *Ieyasu Tokugawa* who became the first shogun of the *Tokugawa* shogunate, brought the whole land under his rule after a war-torn period of some 200 years. *Masamune Date* was appointed to the first daimyo of *Sendai-han* (feudal clan). However, because the age of war was over, the primary citadel on the high hill became useless, and *Tadamune Date,* the second daimyo, built the secondary citadel *(Ninomaru)* on lower terrace (60m above see level, and 40m above the river) in 1639. Since then the *Ninomaru* had been not only the residence of daimyos but the center of the government of the *Sendai-han* for some 250 years. Although it was destroyed by earthquakes and fires a couple of times, it was quickley reconstructed in each time.

In 1868, the *Tokugawa* shogunate was replaced by the new government of the Emperor (*Yedo* era was over and *Meiji* era began). Japan put an end of 200 years of national isolation, and Western cultures were imported rapidly. Prefectures were established instead of feudal clans, and the *Date* family rule was over. In 1871, the *Ninomaru* was occupied by the Japanese imperial army which was newly organized in Western style. In 1882, almost all of the structures of *Ninomaru* was lost in fire, and its brillant history was over.

The site continued to be occupied by the imperial army, until the American army occupied it after World War II. The occupation of the armies prevented any scientific investigation of the site. It was 1957 the site area changed to the Tohoku University campus and, therefore, investigation on it became possible. However the organized excavation has only started in 1983.

The exacavation revealed that the preservation of structures and artifacts was better than expected and that the arrangement of the structures fits the old map of the site very well. Furthermore, new structures which were not drawn on the old map were discovered. These results give a clue to the ordinary life of the residents of the castle as well as new information as to the architectural structure of the castle.

NM1 (Location 1 of *Ninomaru*)

This was probably the plaza in the western edge of the *Ninomaru* which was followed by the slope of the backyard forests. Although the excavated area is a rather peripheral part of the structure, underdrain ditches and pits were found. A few artifacts such as ceramics and ceramic roof tiles were also excavated.

NM2 (Location 2 of *Ninomaru*)

Rows of foundation stones and a stone floor were revealed. these structures are thought to be the corridor and its apron structure, located behind the ceremonial hall in the central part of *Ninomaru*. They were covered with strata 3 and 4 which were formed by the fire in 1882. Almost all the artifacts from NM2 are considered to be of the latest part of *Yedo* era and early *Meiji* era (mid. of 19c., before 1882). The stone floor, probably a washing area, yielded many artifacts including ceramics, ceramic roof tiles, wooden materials such as shingles and chopsticks, metal materials, plant and animal remains. Therefore, it is considered to have been reused as a trash area until the fire in 1882.

Recovered ceramics, the most abundant artifacts from the stone floor, constitute very important specimens of ordinary serving vessels of those days. However, we cannot tell much about their usage, because life style has undergone two periods of big change, at the beginning of *Meiji* era and afterWorld War II, and also, because ceramics used by the residents at the castle are thought to have been used in a rather different way than those living outside the castle. These ceramics were specially made by relatively sophisticated techniques, but include artifacts of inferior quality which suggests the users were in lower status. Most of the ceramics are thought to have been produced in the nearby production centers such as *Kirigome*, *Hirashimizu* and *Sôma-Ôbori*. This indentification was supported by componential analysis of ceramic paste. Other than these popular ceramics, very few ceramics from *Imari* (*Saga* pref.) and *Seto* (*Aichi* pref.), the two big production centers, were found. Considering the facts that the backyard of the hall was reused as a trash area and that some of the ceramics excavated are thought to have been of the early *Meiji* era, it is inferred that these artifacts were disposed in the stone floor after the imperial army occupied the area when the power of the *Sendai-han* actually disappeared. Ceramics used by *Sendai-han* cannot be distinguished from those of imperial army. Some ceramics may have been continuously used by both.

In spite of the fact that ceramics from strata 3 and 4 show some differences from those from the stone floor in the kind of ware (*Kirigome,* the kilns authorized by *Sendai-han,* is lacking) and the motif of the painting decoration, refitted sherds across the strata indicate that the destruction of the *Ninomaru* by fire occured soon after these artifacts were disposed in the stone floor. As a whole, they are considered to be the final products of traditional ceramic

techniques of the *Yedo* era, untouched by Western techiques.

Roofing materials such as ceramic roof tiles, shingles, and a tenon from NM2 give some detailed information on architectural structure. These artifacts support the idea that most of the structures of the *Ninomaru* had a shingled roof, a style which is now out of popular use.

Melted glass from strata 3 and 4 indicate that glass was used instead of paper screens on structures when the fire occurred. The glass is thought to be imported because production of plate glass had not yet begun in Japan. Also a frament of a military shoe and glass buttons (both made in Japan) from these strata indicate rapid westernization.

Ceramics, wooden materials such as building materials and a pail, a military shoe, glass and glass buttons were investigated with the aid of modern craftsmen who are accomplished and /or familiar with these techniques. Much useful information on how these products were made and used were given by them.

The stone floor yieded fish bones such as sea bram, codfish, salmon, and shellfish such as corbicula which gives us some idea as to the eating customs of the imperial army. A ditch found in stratum 7 is thought to have been built before the *Ninomaru* structure was established. The fact that this ditch is running in the same direction as the rows of foundation stones indicates that the temporal gap between these structures is not very pronounced.

NM3 (Location 3 of *Ninomaru*)

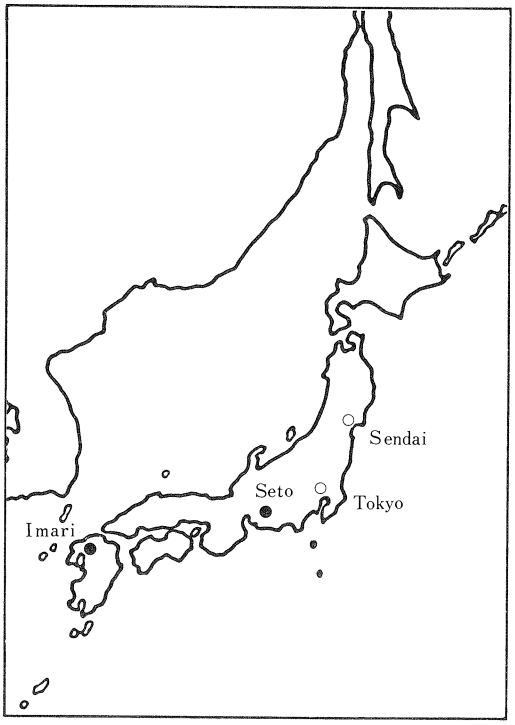
Structures found at location 3 can be roughly classified into three periods. The oldest group includes a pond which is probably a part of the residence of *Muneyasu Date,* older than the *Ninomaru* structure. This temporal sequence is supported by the fact that the pond was modified by the stonewall. The old map indicates that the stonewall was associated with the southern outline of the *Ninomaru* which was built at the same time as the main structures of the *Ninomaru.* The second period, though its actual age can not be specified, is represented by features which were found on top of the refilled layer of the pond. The last period is represented by features which are thought to have been built after the *Meiji* era.

Ceramics from location 3 are similar to those from location 2. However, differences in the size of some of roof tiles between the location 2 and 3 may indicate a temporal gap between them.

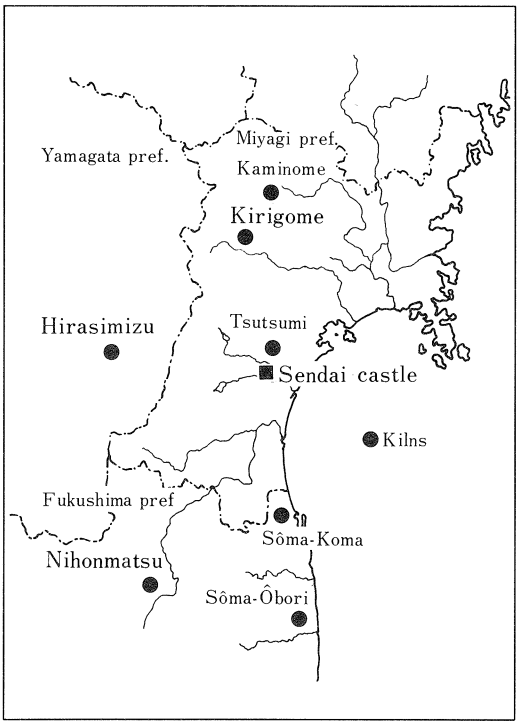
Plant seed analysis and pollen analysis of the soil from the stone floor in location 2 revealed that flora of the forest behind *Ninomaru* some 100 years ago had no great differences from the present flora behind Tohoku University. Pollen analysis shows that there were more pines

and cedars in those days than the present days. In conrast with the *Ninomaru* main area, the hill behind *Ninomaru* was covered with fir, beech and Japanese oak forests and, the valley, with alder and willow trees. Discovery of cherry blossom (Prunus pendula forma ascendens) seeds, rather than Prunus yedoensis which is the most popular today, implies that these trees were planted around the structures, forming a garden. Another thing to mention is that the riding ground area may be covered with weeds and surrounded by pine and cedar trees.

The excavation tells us that preservation of the *Ninomaru* sites is generally fine. Concerning the future, it is necessary to make planned excavations as well as conservational efforts in order to maintain the historical environment of the University campus.

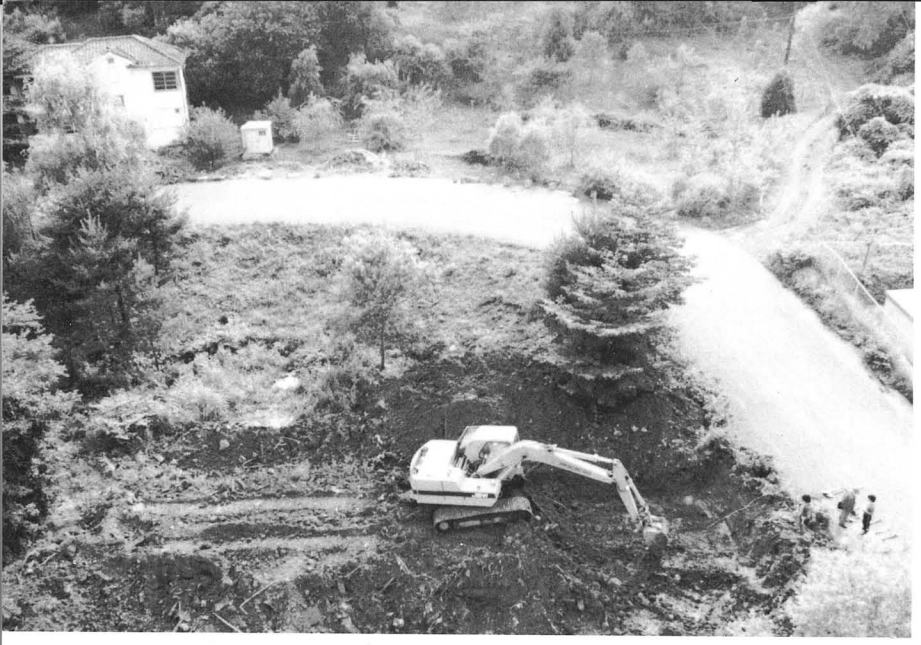


Location of Sendai

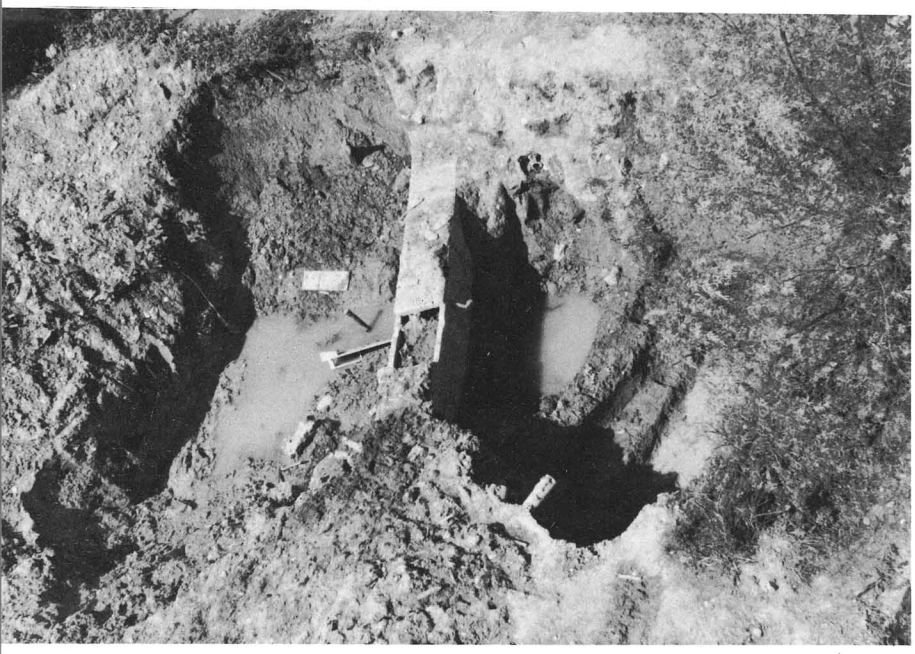


Sendai Castle and related kilns

図　　版



1．排土作業



2．精査前の発掘区

3．北壁断面

図版1　NM1全景と断面図
Plate 1 Views and cross section of NM1

1．東区水没状況

2．溝１・ピット２確認面

3．溝１・発掘途中

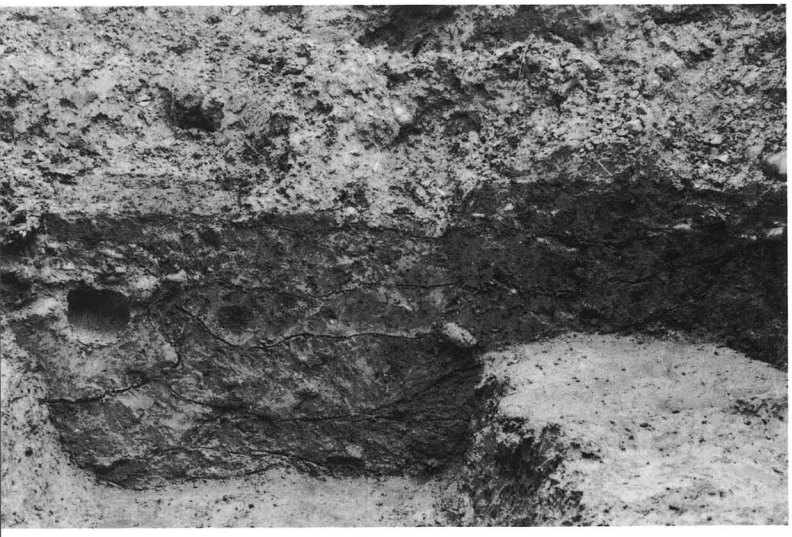
4．溝１・掘りあげ

図版２　ＮＭ１東区遺構(1)

Plate 2　Feauctures in east part of NM1(1)

1．ピット4

2．溝2



3．南壁断面
（ピット2、溝1、溝2）

図版3　NM1東区遺構(2)

Plate 3　Features in east part of NM1 (2)

1．3層上面

2．5層上面

3．6層上面

4．ピット1（礎石）

図版4　NM2発掘区全景と遺構

Plate 4　Views and a feature of NM2

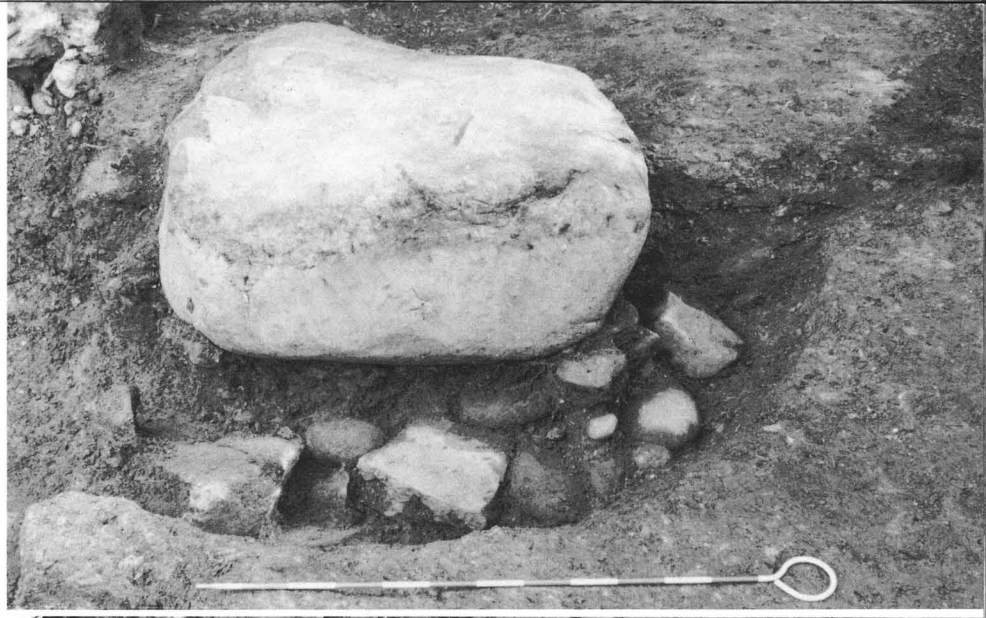
1．作業風景

2．ピット１出土の漆器

3．ピット36出土の土師質皿

図版５　ＮＭ２作業風景、遺物出土状況

Plate 5　Snapshot of the excavation and close-up of artifacts



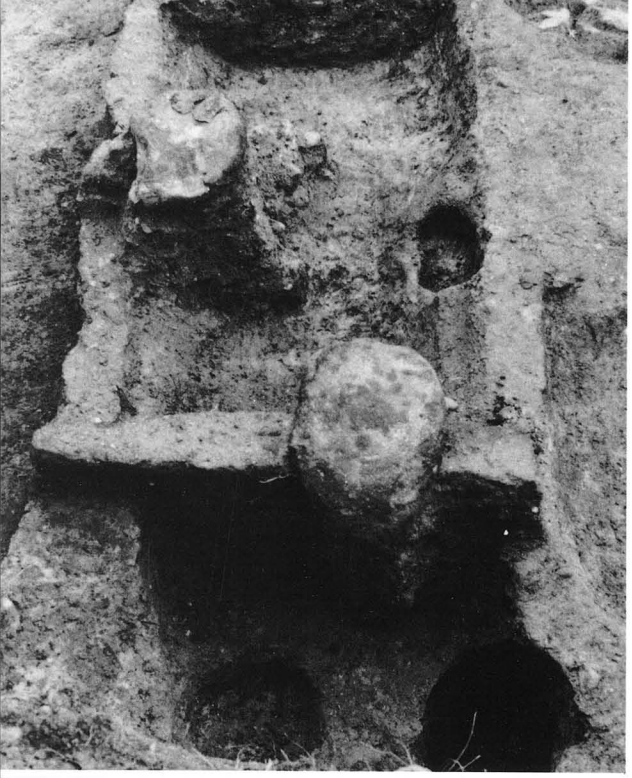
1．礎石１と掘り方

2．礎石掘り方
（ピット19）

3．礎石掘り方
（ピット23）

図版６　ＮＭ２の遺構(1)

Plate 6　Features at NM2 (1)　foundation stone



1．溝1

2．石敷遺構遺物出土状況

3．石敷遺構

図版7　NM2の遺構(2)

Plate 7　Features at NM2 (2)　foundation stone and stone floor of washing area

1．北壁ピット36
セクション

2．北壁

3．東壁

図版8　NM2の断面

Plate 8　Cross sections of NM2

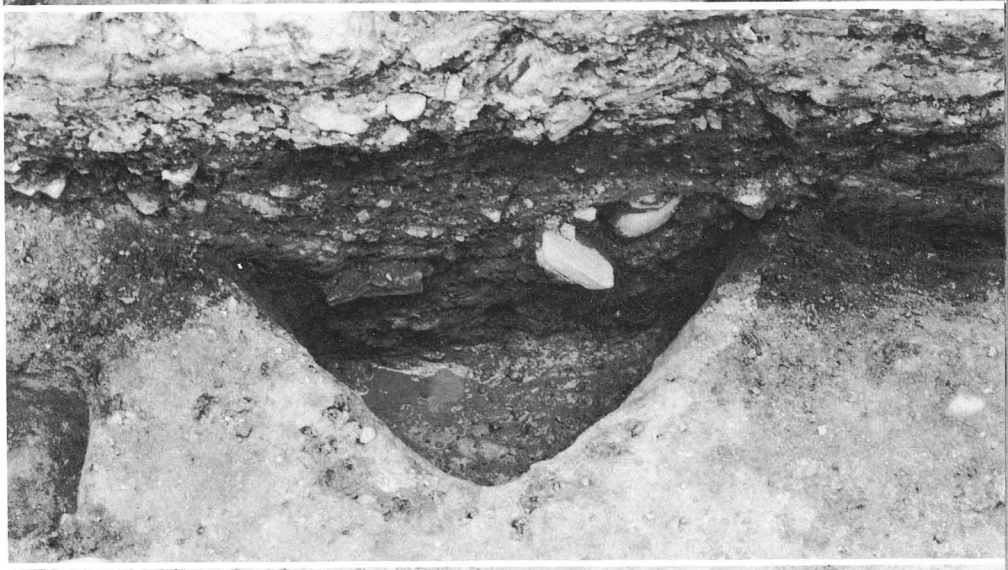
1．2層上面

2．3層上面

3．拡張区全景

図版9　NM3発掘区全景
Plate 9　Views of NM3

1．掘立柱建物１全景



2．ピット22

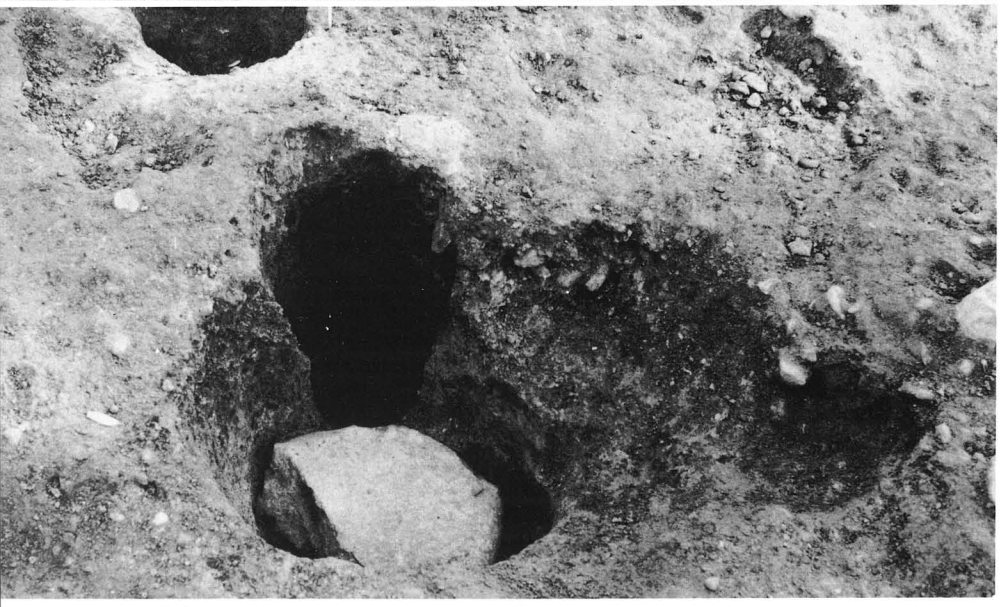
3．試掘坑からみた石垣

図版10　ＮＭ３の遺構(1)

Plate 10　Features at NM3 (1)　post holes, pit and stonewall

1．ピット17a 、17b

2．ピット25



3．ピット7、8、10

図版11　ＮＭ３の遺構(2)

Plate 11　Features at NM3 (2)

1．ピット1

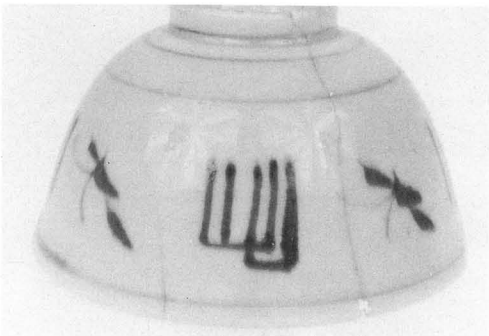
2．溝2石込め状況

3．ピット12掘り上げ全景

図版12　ＮＭ３の遺構(3)

Plate 12　Features at NM3 (3)　pit, drain and pond

1（I_1—Aa）[20-1]



2（I_1—Aa）[20-1]

3（I_1—Ab）

4（I_1—B）[20-2]

5（I_1—C：表）[20-3]

6（I_1—C：裏）[20-3]

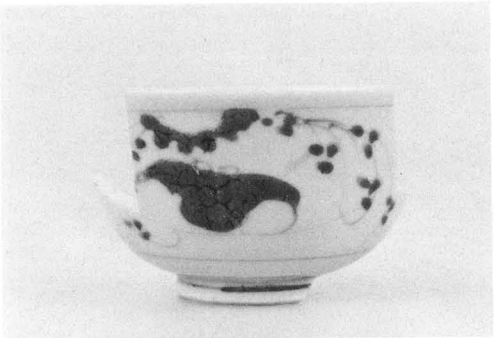
7（I_1—C）

8（I_1—D）[20-4]

図版13　ＮＭ２出土の茶碗(1)　　Mid. of 19c.(before 1882) porcelains

Plate 13　"Rice bowls" with cobalt blue from NM2(1)

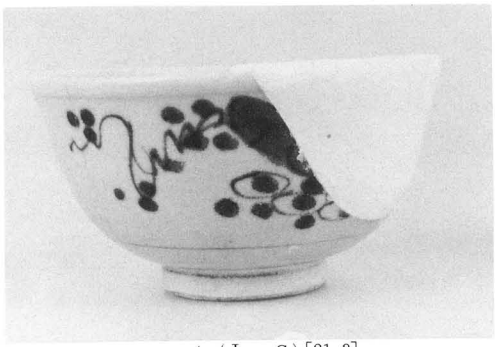
［　］内は対応する図の番号を示す。　Number in square brackets is figure number



1 (I₁—D)

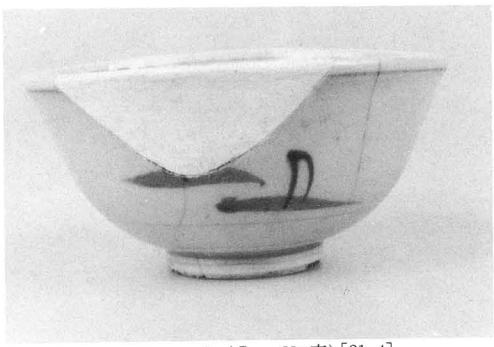
2 (I₁—E) [21-1]

3 (I₁—F) [21-2]



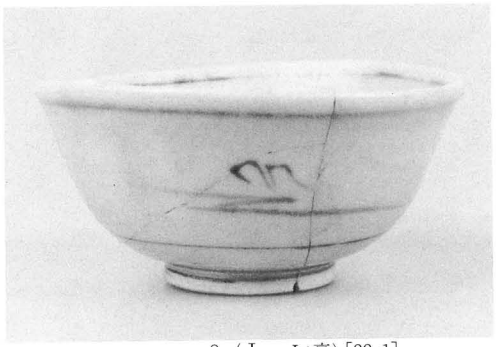
4 (I₁—G) [21-3]

5 (I₁—H:表) [21-4]



6 (I₁—H:裏) [21-4]

7 (I₁—I:表) [22-1]



8 (I₁—I:裏) [22-1]

図版14　ＮＭ２出土の茶碗(2)　　Mid. of 19c. (before 1882) porcelains

Plate 14　"Rice bowls" with cobalt blue from NM2

1 (I_1—I)

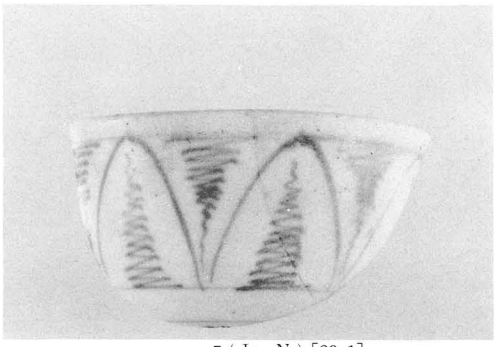
2 (I_1—J)[22-2]

3 (I_1—K)[22-3]

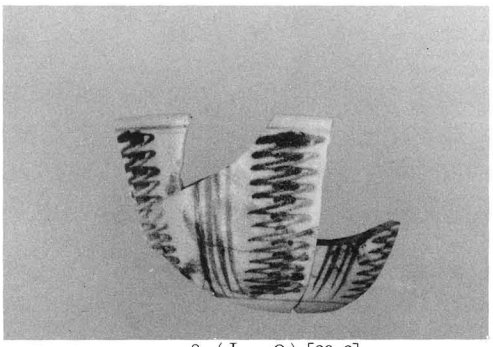
4 (I_1—L)[22-4]

5 (I_1-L)

6 (I_1-M)[22-5]



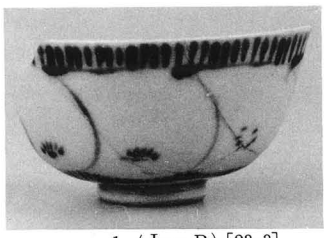
7 (I_1-N)[23-1]



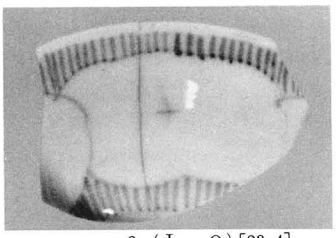
8 (I_1—O)[23-2]

図版15　ＮＭ２出土の茶碗 (3)　Mid. of 19c. (before 1882) porcelains

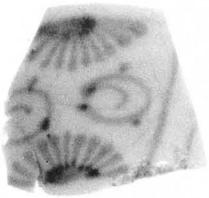
Plate 15 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2



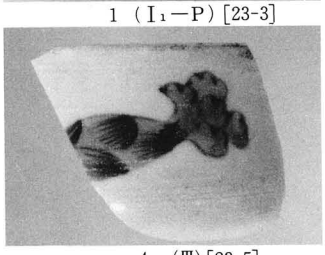
1 (I₁—P) [23-3]



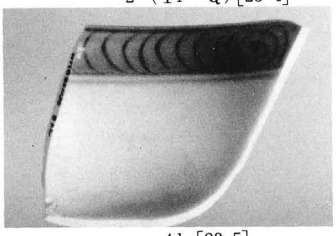
2 (I₁—Q) [23-4]



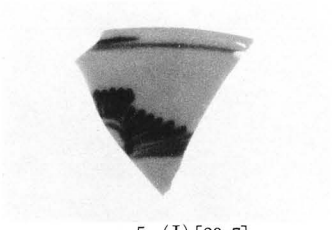
3 (I₂) [23-6]



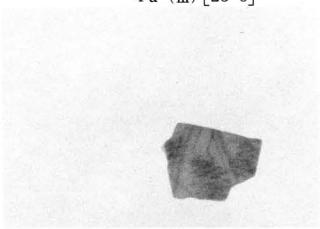
4a (Ⅲ) [23-5]



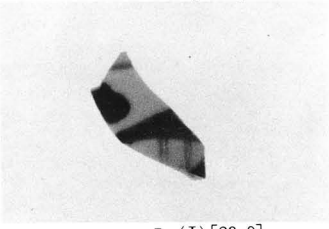
4b [23-5]



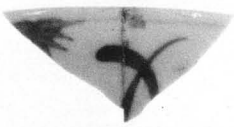
5 (I) [23-7]



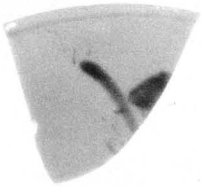
6 [23-8]



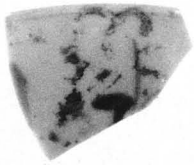
7 (I) [23-9]



8 (I) [23-10]

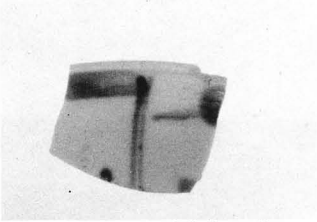


9 (I) [23-11]

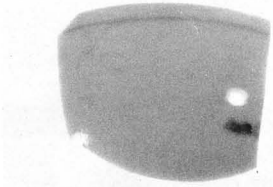


10 (I) [23-12]

11 (I₂) [23-13]

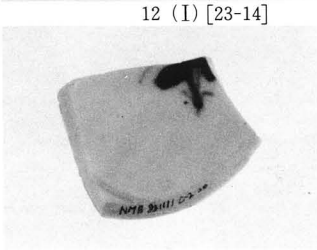


12 (I) [23-14]

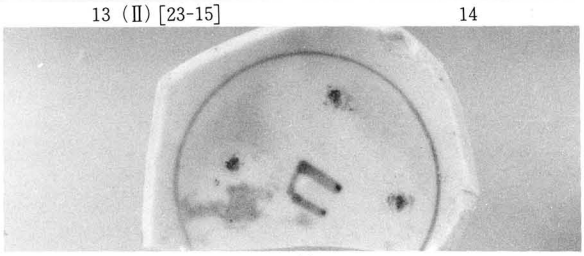


13 (Ⅱ) [23-15]

14



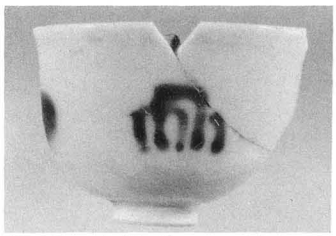
15



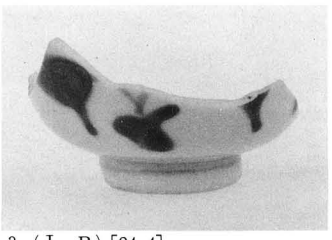
16

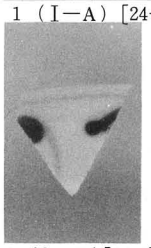
図版16 ＮＭ２出土の茶碗 (4) Mid. of 19c. (before 1882)

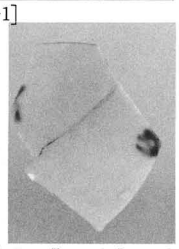
Plate 16 "Rice bowls" with cobalt blue from NM2 porcelains

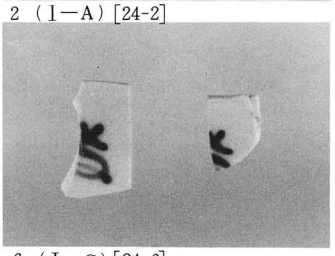

1 (I—A) [24-1]

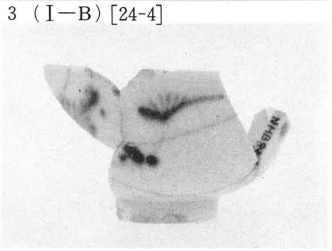
2 (I—A) [24-2]

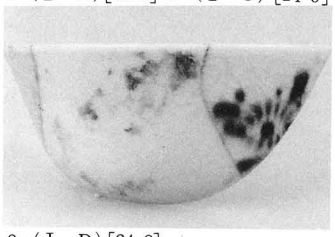

3 (I—B) [24-4]

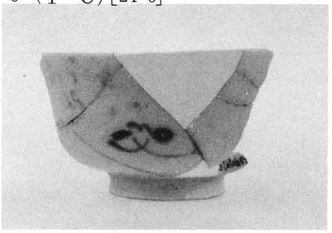

4 (I—B) [24-3]

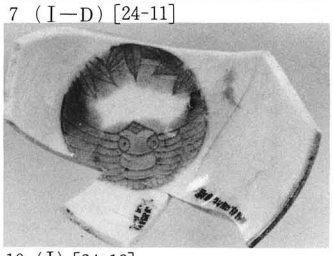

5 (I—C) [24-5]

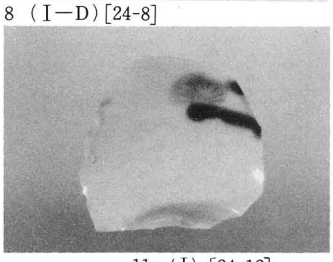

6 (I—C) [24-6]

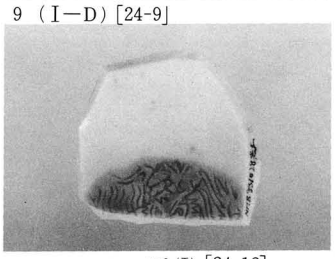

7 (I—D) [24-11]

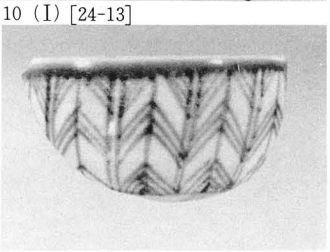

8 (I—D) [24-8]

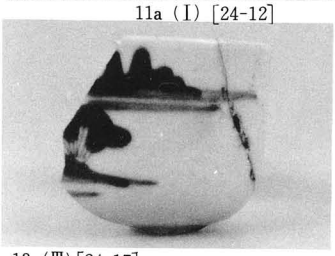

9 (I—D) [24-9]

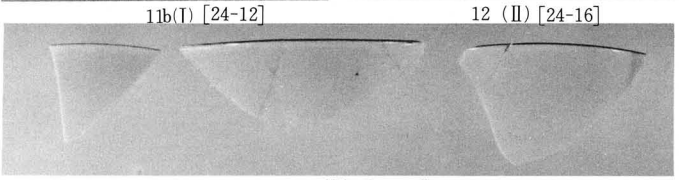

10 (I) [24-13]

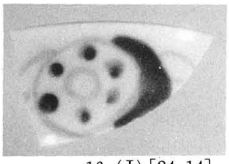

11a (I) [24-12]

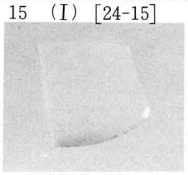

11b(I) [24-12]

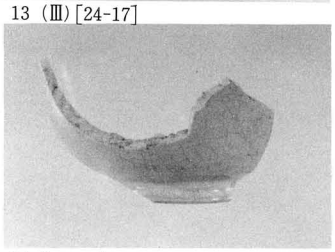

12 (II) [24-16]


13 (III) [24-17]


15 (I) [24-15]


16 (I) [24-14]

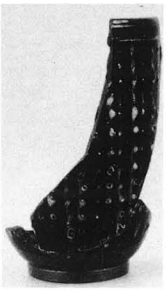

17(IV) [24-19]


14 [24-18]

18

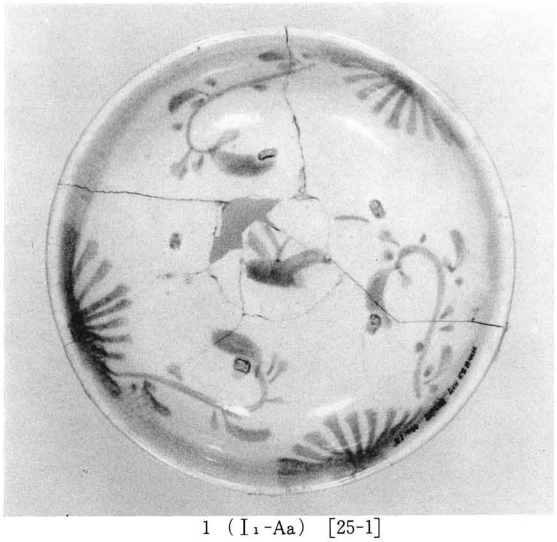
19

20

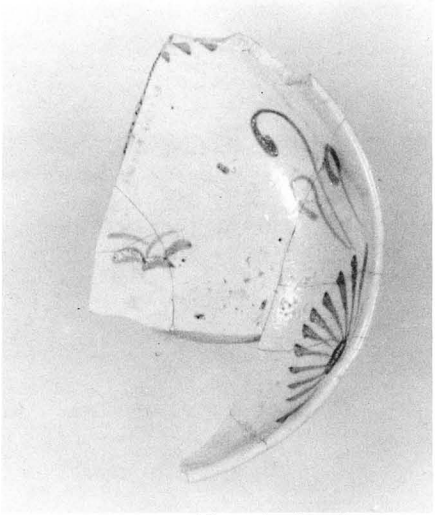

21 [24-20]

図版17　ＮＭ２出土の小形茶碗
Plate 17 "Tea bowls" from NM2

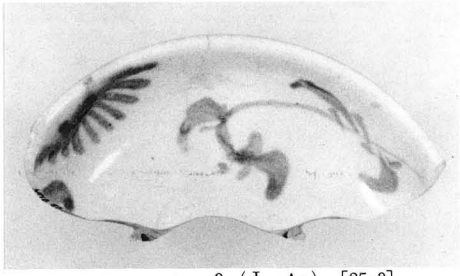
Mid. of 19c. (before 1882) porcelains (except 21)



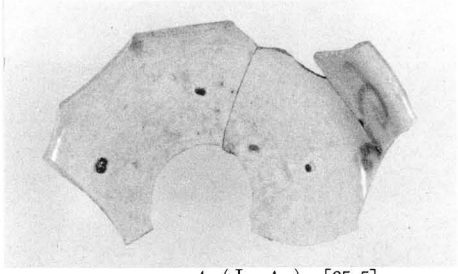
1 (I₁-Aa) [25-1]



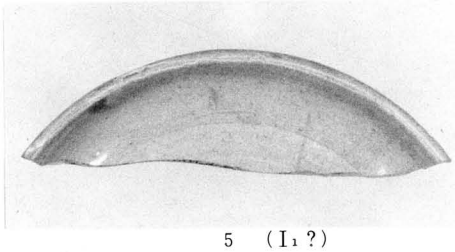
2 (I₁-Ab) [25-2]



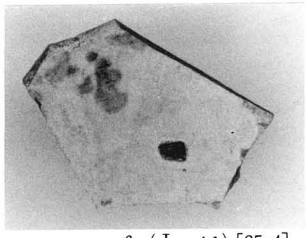
3 (I₁-Ac) [25-3]



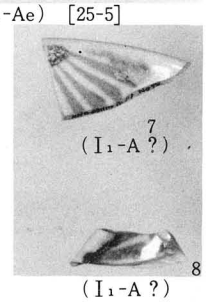
4 (I₁-Ae) [25-5]



5 (I₁?)

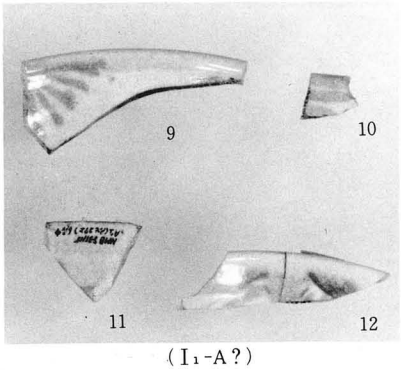


6 (I₁-Ad) [25-4]



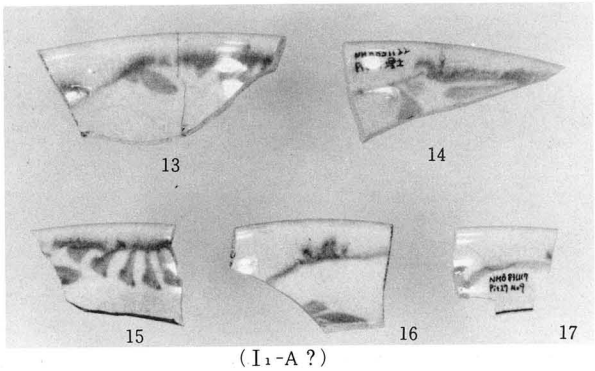
7 (I₁-A?)

8 (I₁-A?)



9 10 11 12

(I₁-A?)

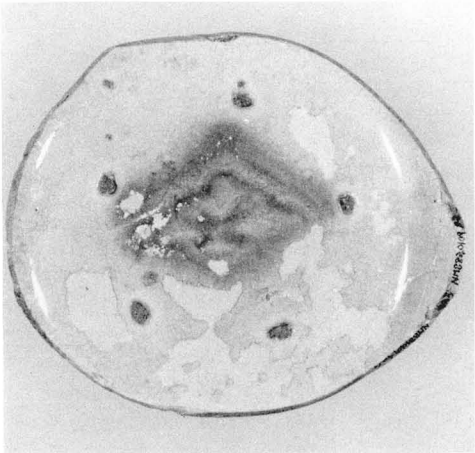


13 14 15 16 17

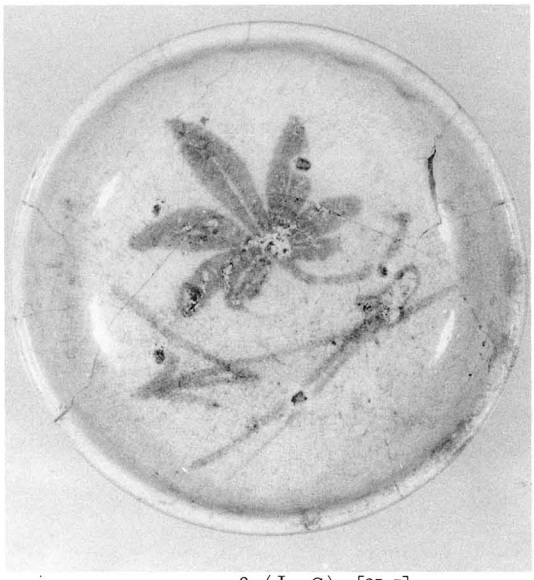
(I₁-A?)

図版18 ＮＭ２出土の陶器皿 (1) Mid. of 19c. (before 1882)

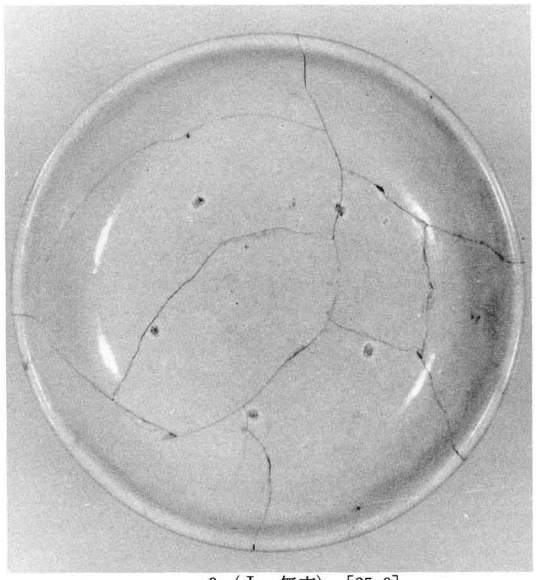
Plate 18 Dishes from NM2 (1)



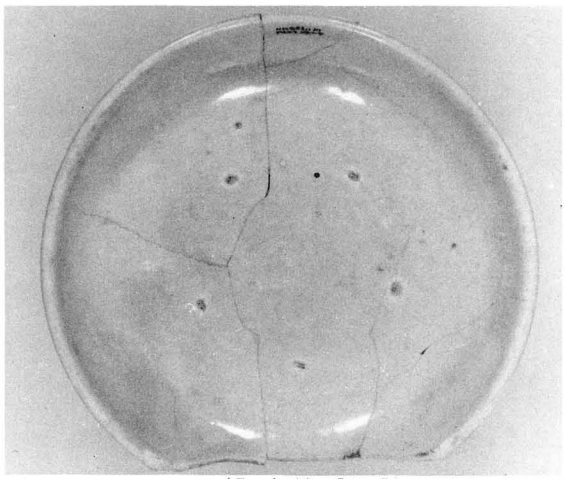
1（I_1-B）［25-6］



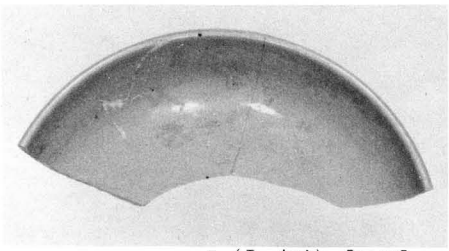
2（I_1-C）［25-7］



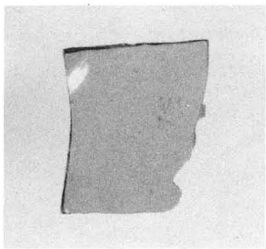
3（I_1-無文）［25-9］



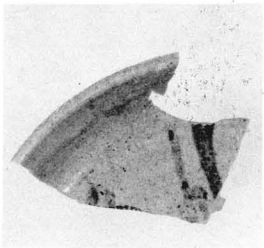
4（I_1-無文）［25-8］



5（I_2-無文）［25-10］



6（I_2-無文？）



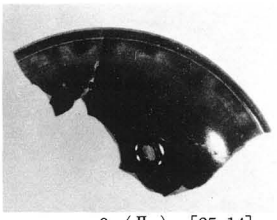
7（I_3-K）［25-11］

縮尺1：2

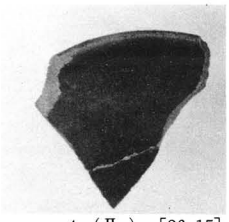
図版19　ＮＭ２出土の陶器皿(2)
Plate 19　Dishes from NM2 (2)

Mid. of 19c.(before 1882)

1（Ⅱ1）[25-12]

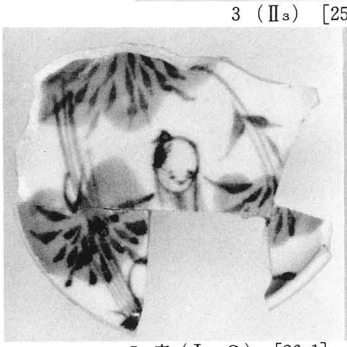


3（Ⅱ3）[25-14]

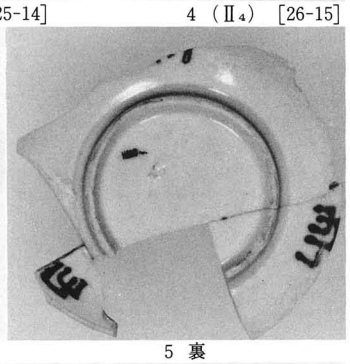


4（Ⅱ4）[26-15]

2（Ⅱ2）[25-13]

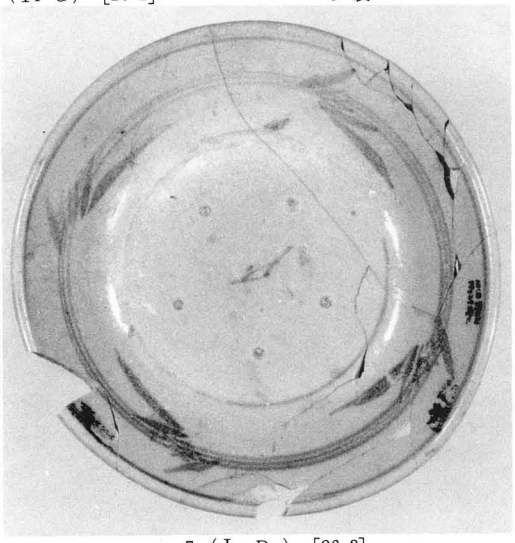


5 表（I1-G）[26-1]

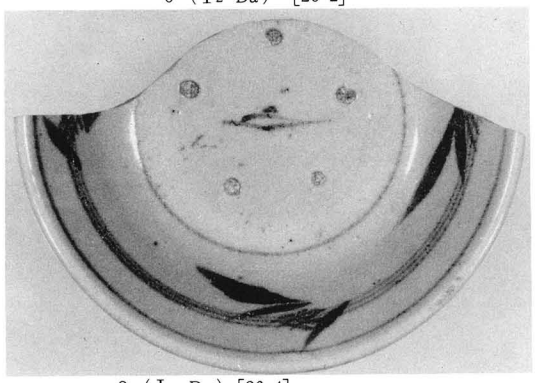


5 裏

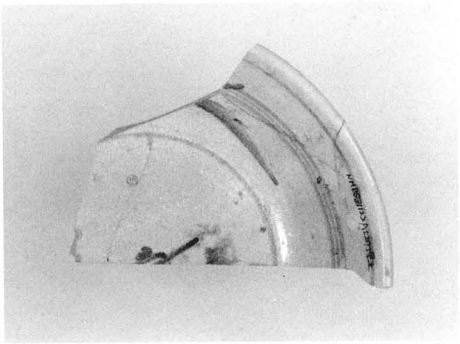
6（I2-Da）[26-2]



7（I2-Da）[26-3]



8（I2-Da）[26-4]

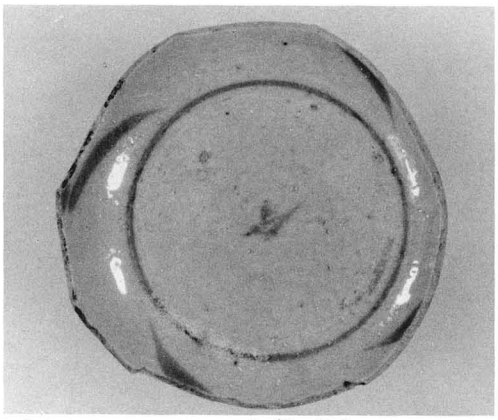


9（I2-Da）

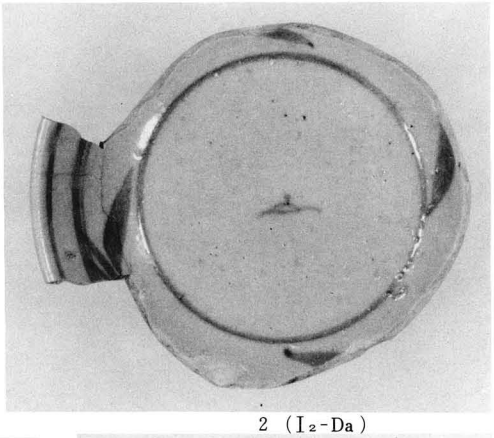
縮尺1：2

図版20　ＮＭ２出土の陶・磁器皿
Plate 20　Dishes from NM2

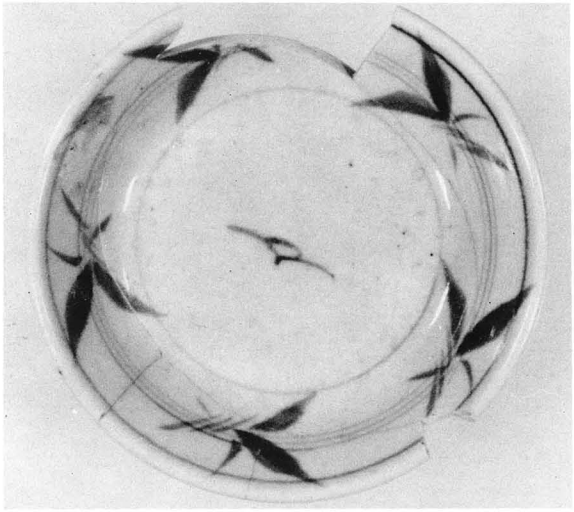
Mid. of 19c.(before 1882)
5-9 porcelains



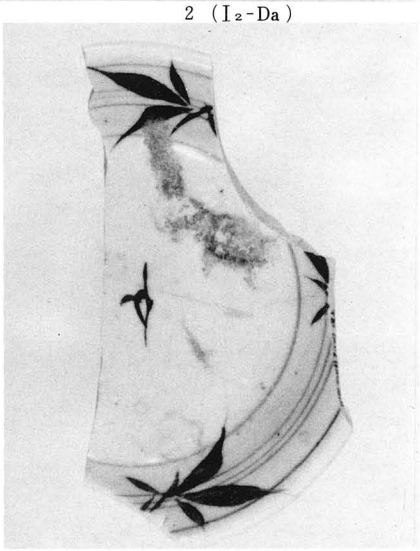
1 (I_2-Da)



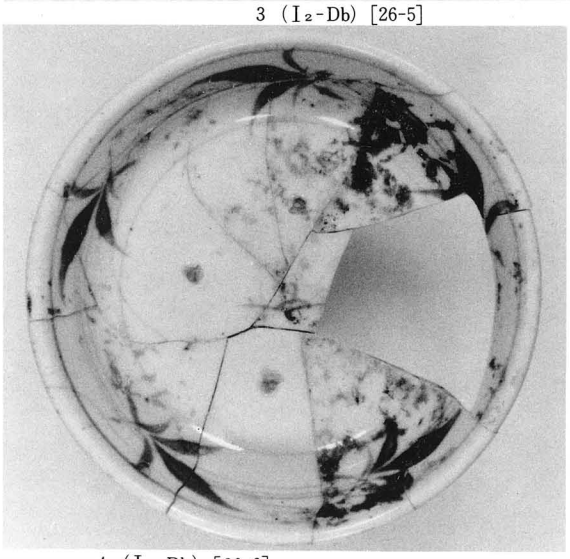
2 (I_2-Da)



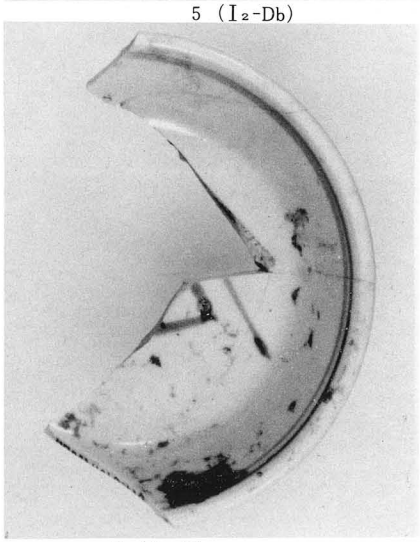
3 (I_2-Db) [26-5]



5 (I_2-Db)



4 (I_2-Db) [26-6]

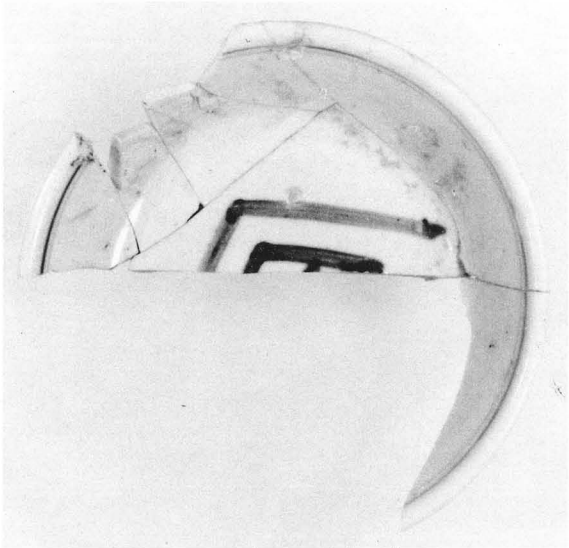


6 (I_2-B)

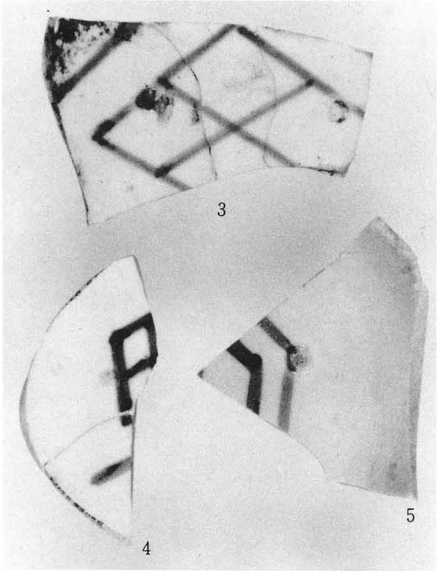
図版21　ＮＭ２出土の磁器皿(1)
Plate 21　Porcelain dishes from NM2 (1)

Mid. of 19c. (before 1882)

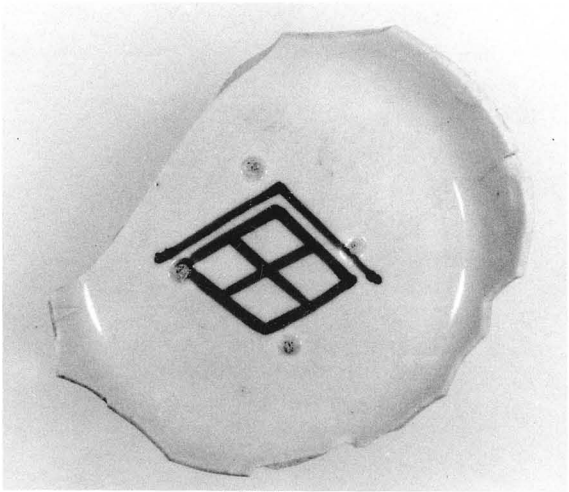
縮尺１：２



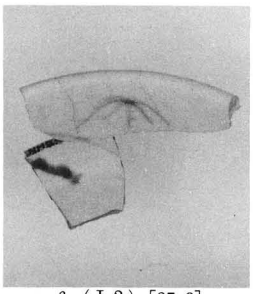
1（I_2-B ?）[27-1]



（I_2-B ?）

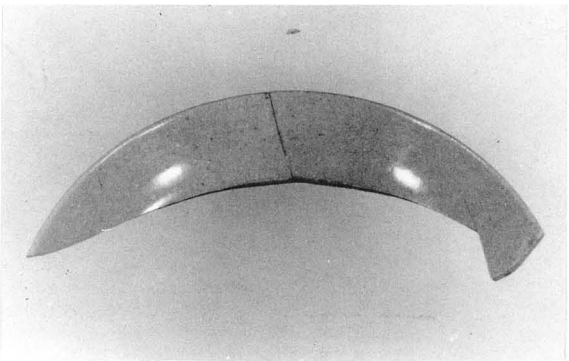


2 [27-2]

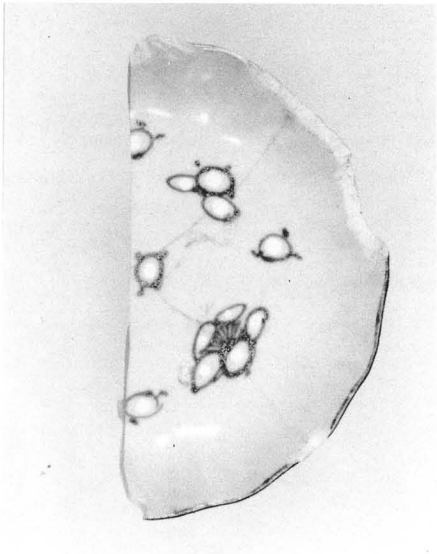


6（I ?）[27-3]

7（I_3-H）[27-4]



8（I ?）[27-5]

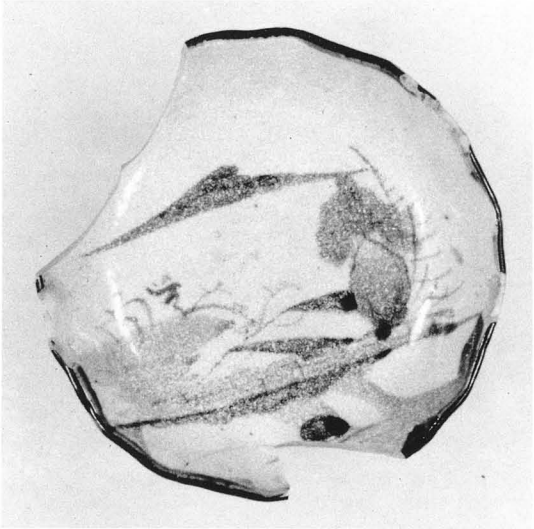


9（II_1-E）[27-6]
Mid. of 19c.(before 1882)

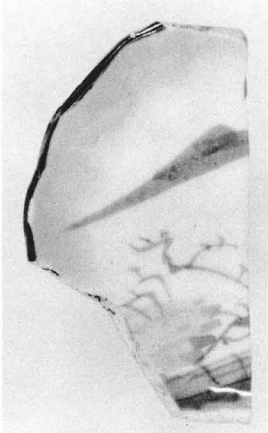
図版22　ＮＭ２出土の磁器皿(2)

Plate 22　Porcelain dishes from NM2 (2)

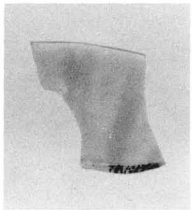
縮尺１：２



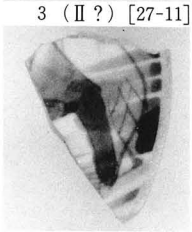
1（Ⅱ$_1$-F）[27-7]



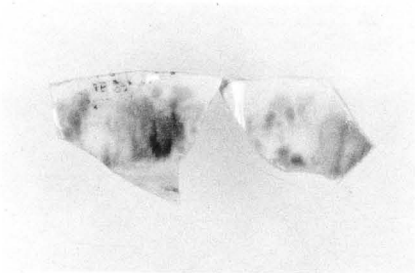
2（Ⅱ$_1$-F）



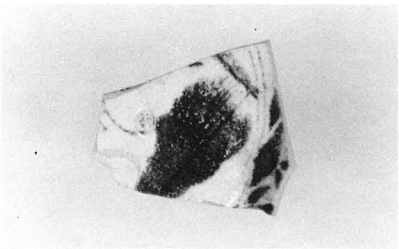
3（Ⅱ？）[27-11]



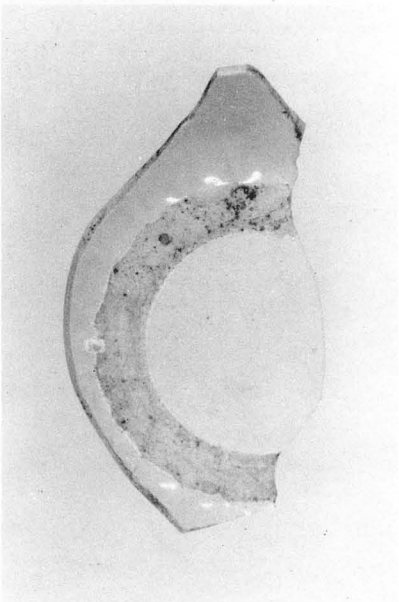
4（Ⅰ$_2$？）



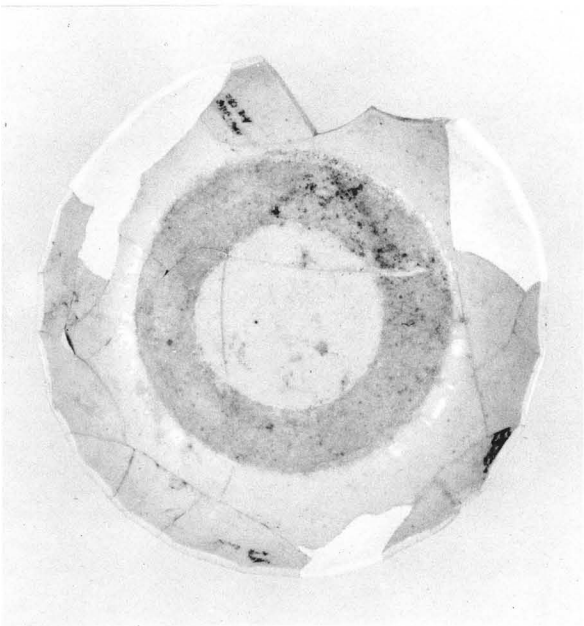
5（Ⅱ？）[27-12]



6（Ⅱ？）[27-13]



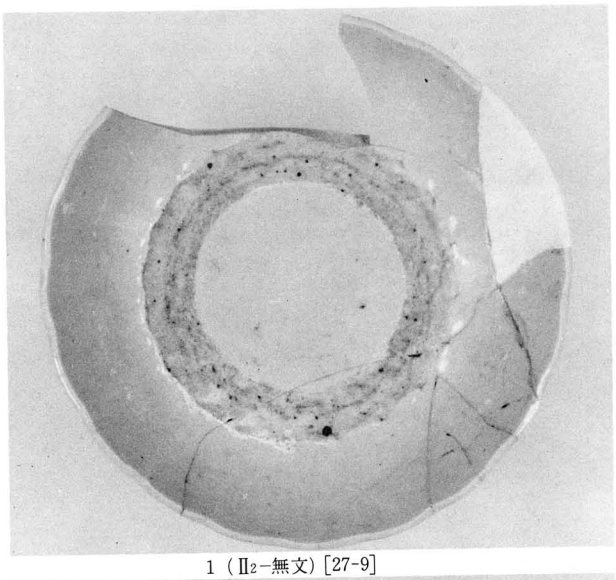
7（Ⅱ$_2$-無文）



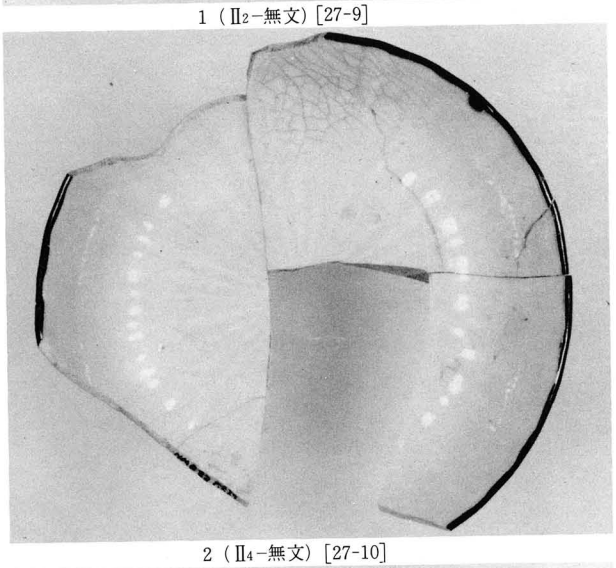
8（Ⅱ$_3$-無文）[27-8]

図版23　ＮＭ２出土の磁器皿（3）　Mid. of 19c.(before 1882)
Plate 23　Porcelain dishes from NM2 (3)

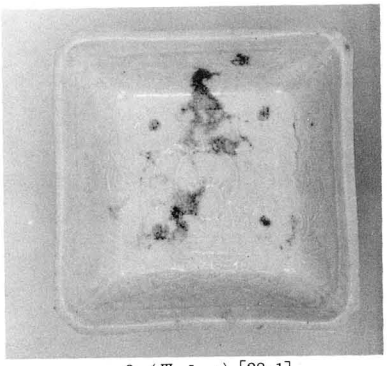
縮尺１：２



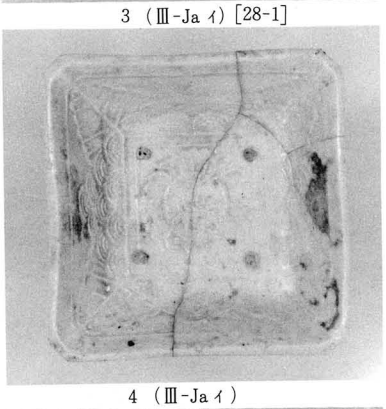
1（Ⅱ2－無文）[27-9]



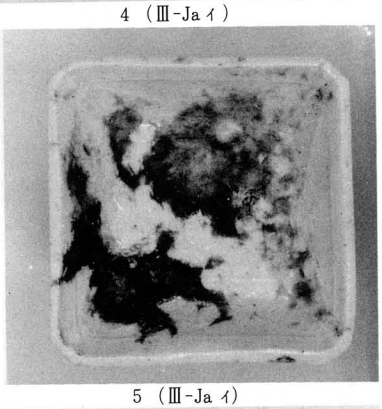
2（Ⅱ4－無文）[27-10]



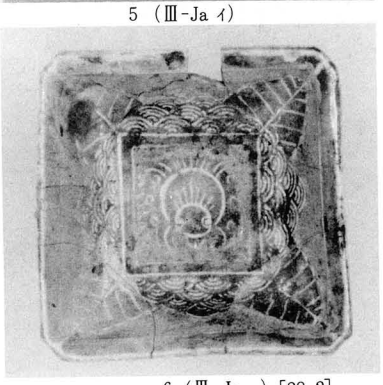
3（Ⅲ-Ja イ）[28-1]



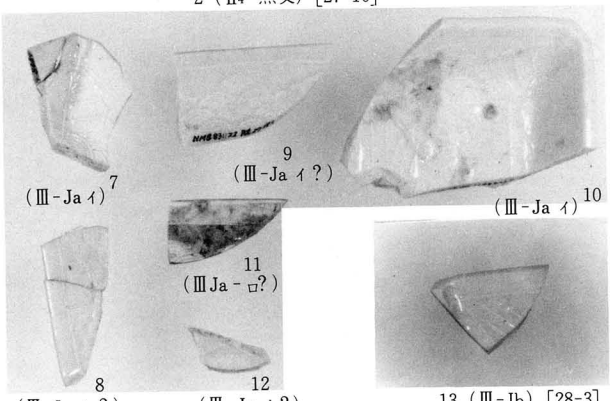
4（Ⅲ-Ja イ）



5（Ⅲ-Ja イ）



6（Ⅲ-Ja ロ）[28-2]
Mid. of 19c.(before 1882)

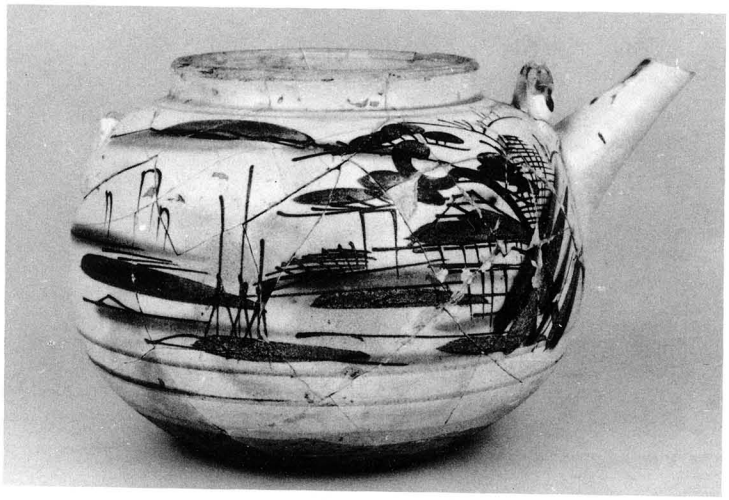


7（Ⅲ-Ja イ）
8（Ⅲ-Ja イ？）
9（Ⅲ-Ja イ？）
10（Ⅲ-Ja イ）
11（ⅢJa-ロ?）
12（Ⅲ-Ja イ？）

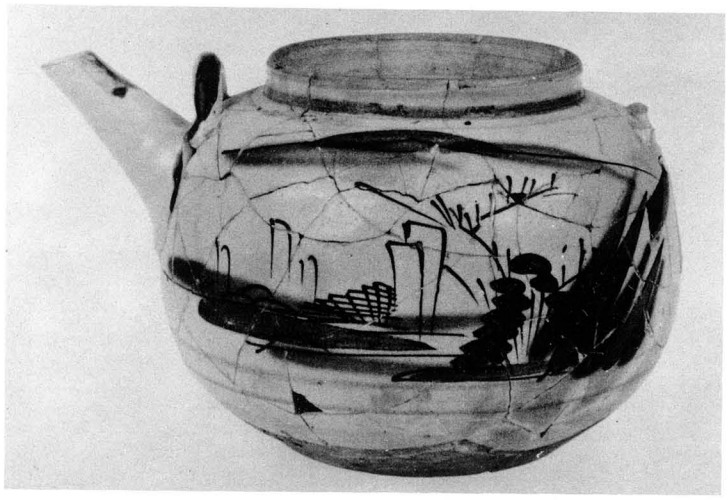
13（Ⅲ-Jb）[28-3]

縮尺1：2

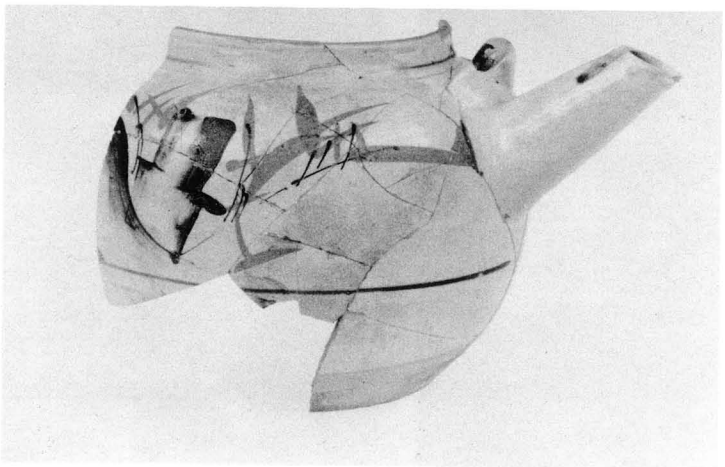
図版24　ＮＭ２出土の磁器皿（4）
Plate 24　Porcelain dishes from NM2 (4)



1a Ⅰ山水文
[29-1]



1b



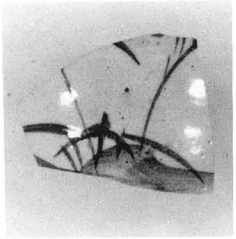
2 Ⅰ笹竹文
[29-2]

図版25 ＮＭ２出土の土瓶(1)

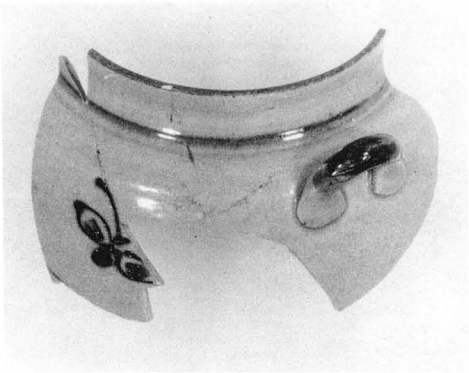
縮尺1：2

Plate 25 Teapots from NM2 (1)

Mid. of 19c. (before 1882)

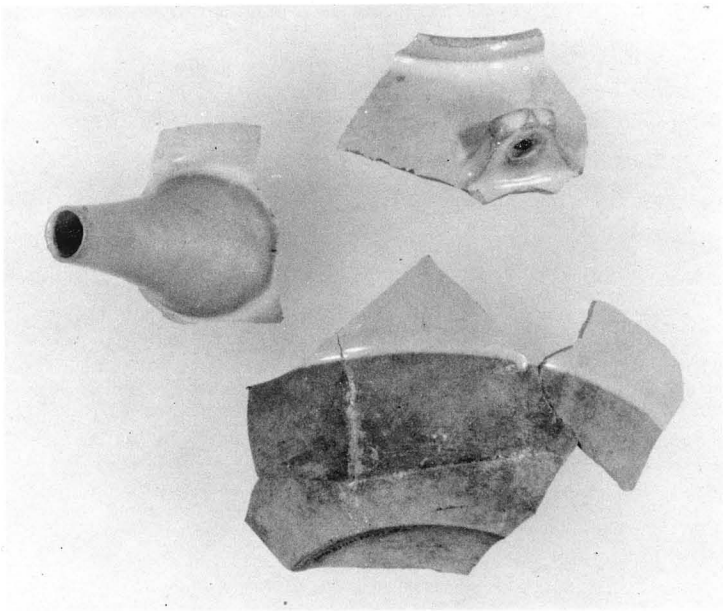


1 Ⅰ笹竹文



2 Ⅰ蝶文
[29-4]

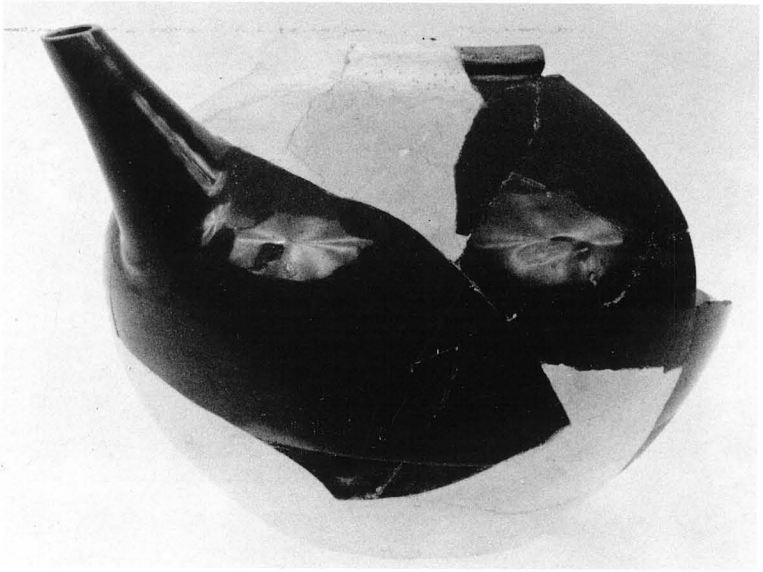
3 Ⅱ₁青釉
[29-5]



4 Ⅱ₁糠白釉
[30-1]

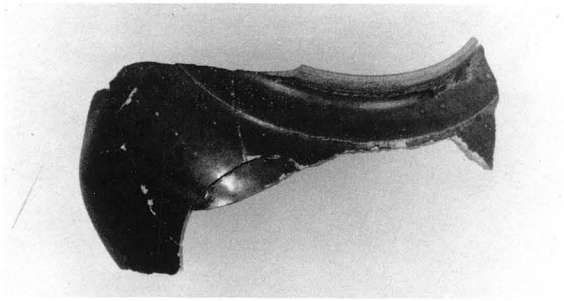
図版26 ＮＭ２出土の土瓶(2)
Plate 26 Teapots from NM2 (2)

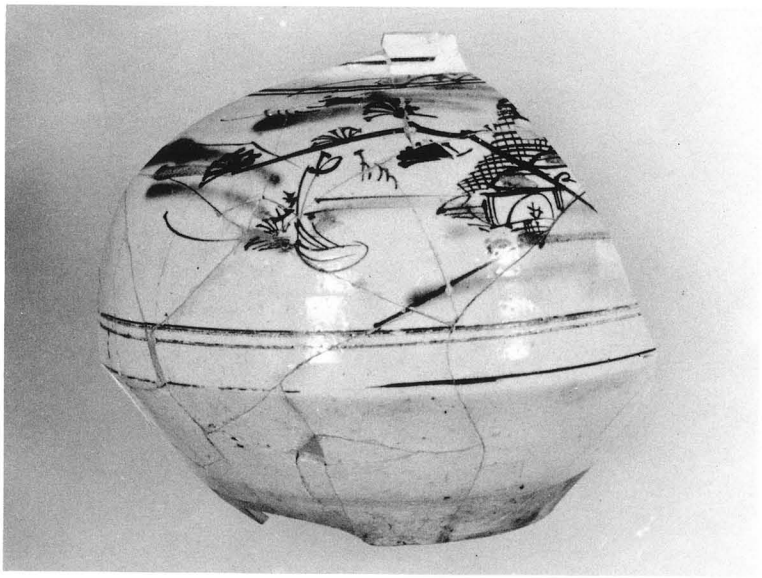
Mid. of 19c. (before 1882)



1 Ⅱ1 青釉
[30-2]

2 Ⅱ青釉
[30-3]



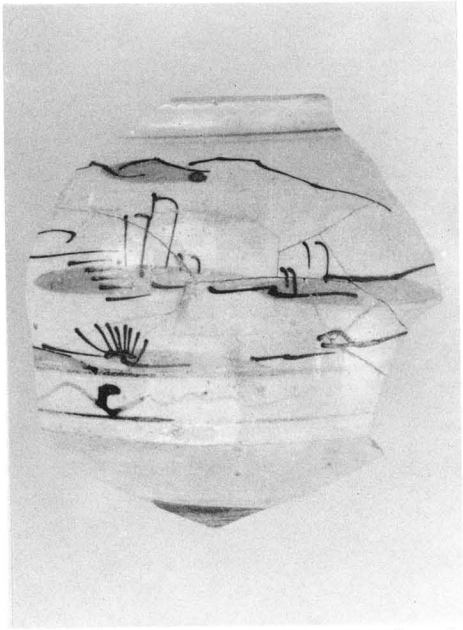


3 Ⅱ2 山水文
[30-4]

図版27 ＮＭ２出土の土瓶(3)
Plate 27 Teapots from NM2 (3)

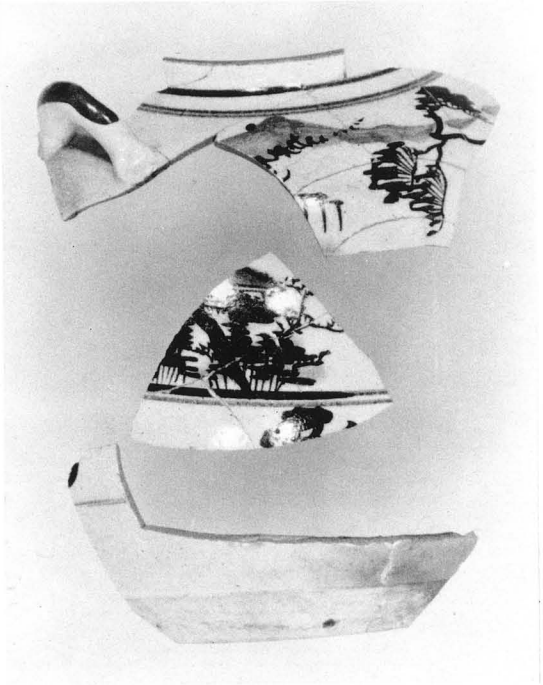
縮尺1：2

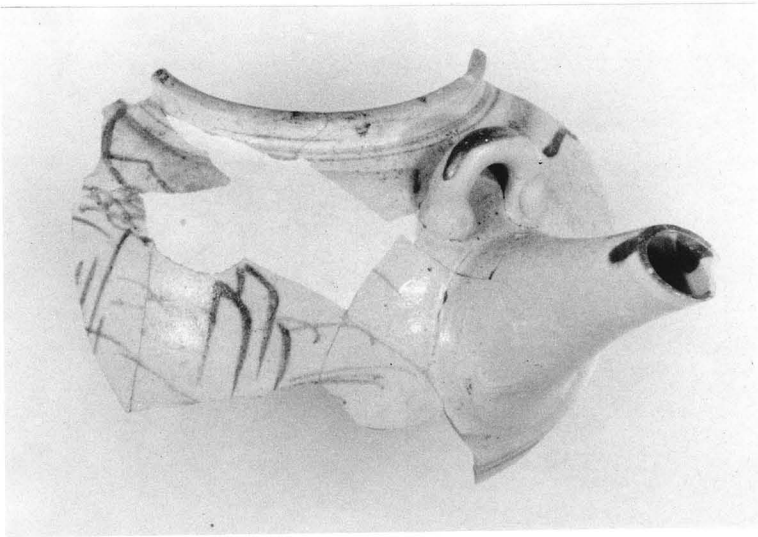
Mid. of 19c. (before 1882)



1　Ⅱ2山水文　[30-5]

2　Ⅱ2山水文　[31-1]

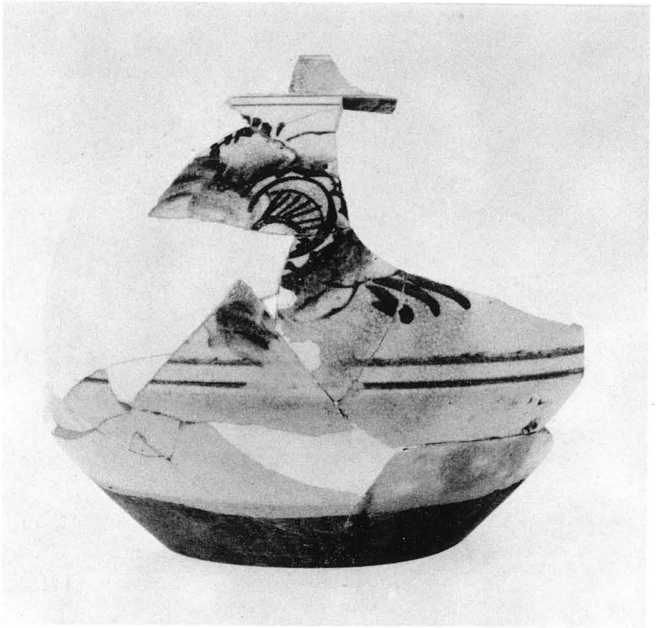




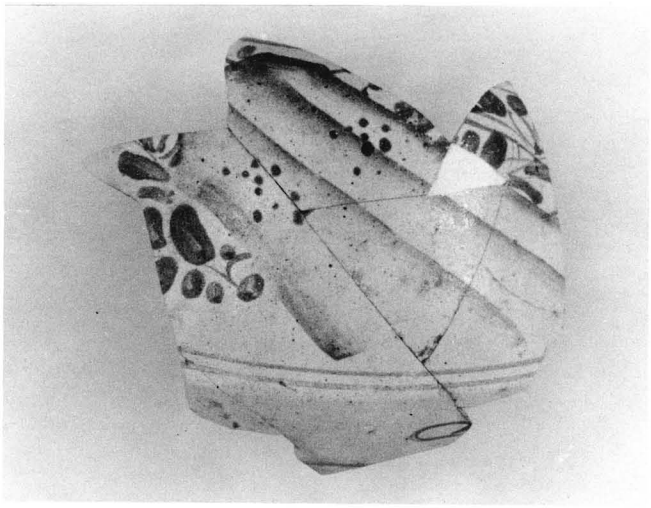
3　Ⅱ2山水文
[31-2]

縮尺1：2

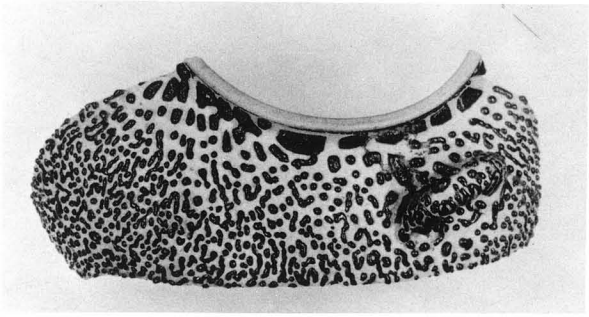
図版28　ＮＭ２出土の土瓶(4)
Plate 28　Teapots from NM2 (4)　Mid. of 19c.(before 1882)



1 Ⅱ2牡丹文
[31-3]



2 Ⅱ2牡丹文
[31-4]



3 Ⅱ2鮫肌釉
[32-2]

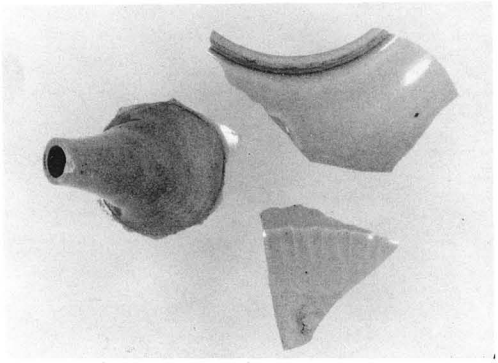
図版29 ＮＭ２出土の土瓶(5)

縮尺1：2

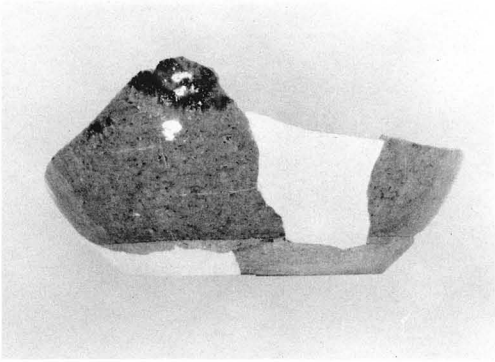
Plate 29 Teapots from NM2 (5)

Mid. of 19c. (before 1882)

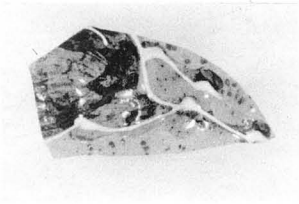
1　Ⅱ₂鮫肌釉
[32-1]



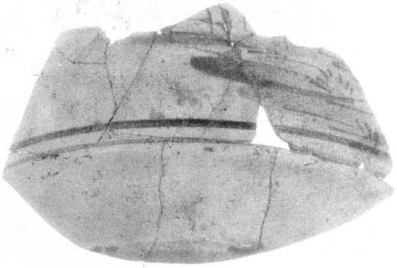
2　Ⅱ₂飛鉋文　[32-3]



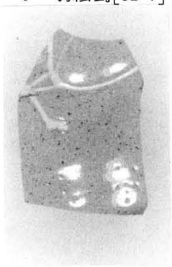
3　Ⅱ₁　[32-4]



5　駒絵　[32-6]



4　山水文　[32-5]

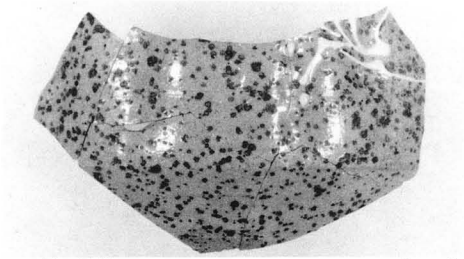


6　駒絵Ⅱ₃[32-7]

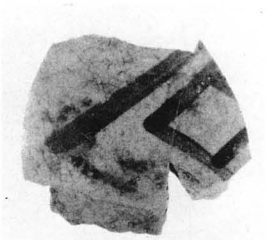
図版30　ＮＭ２出土の土瓶(6)
Plate 30 Teapots from NM2 (6)

縮尺１：２

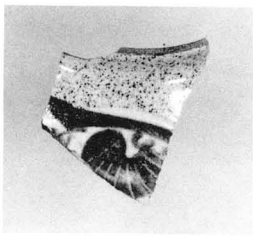
Mid. of 19c. (before 1882)



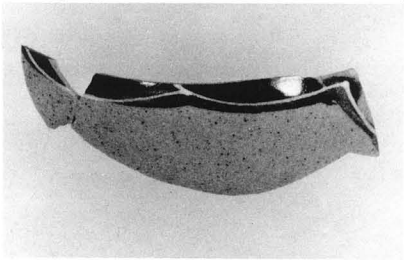
1　Ⅱ$_3$ 駒絵　[32-8]



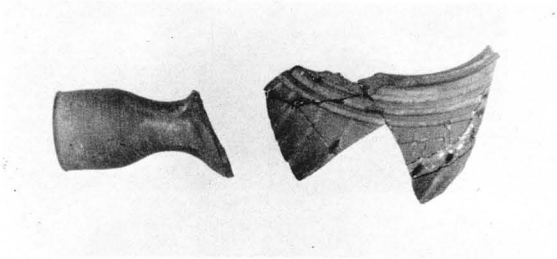
2　Ⅱ$_2$ 山形に武田菱　[32-9]



3　Ⅱ$_3$ 葡萄文？　[32-11]



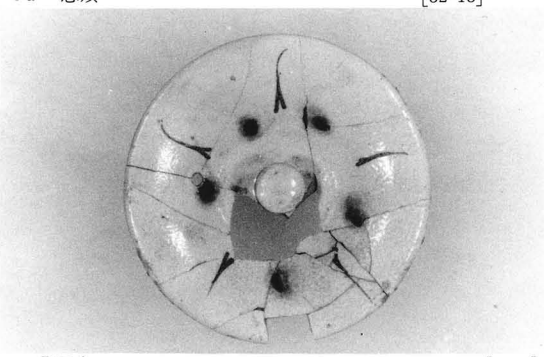
4　Ⅱ$_3$ 駒絵　[32-10]



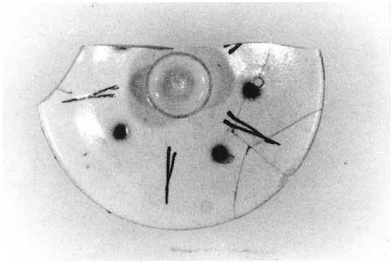
5　急須　[32-12]

6a　急須　[32-13]

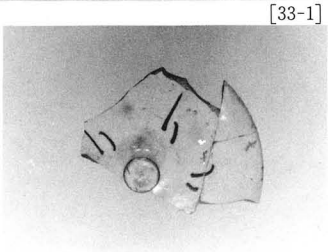
6b



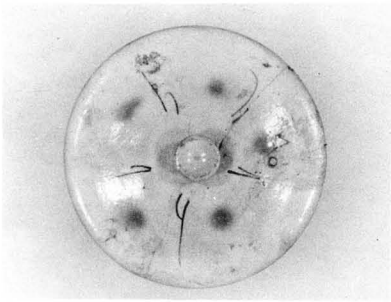
7　Ⅰ巴文　[33-1]



8　Ⅰ巴文　[33-2]



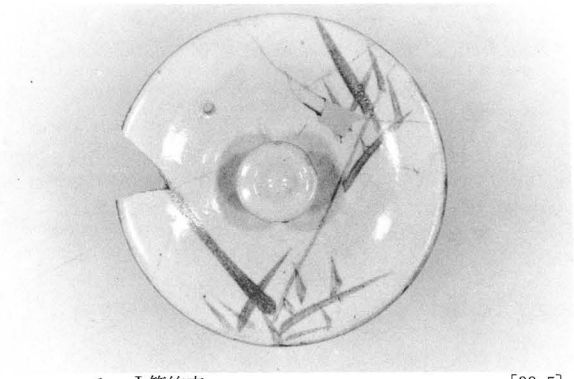
9　Ⅰ巴文　[33-4]



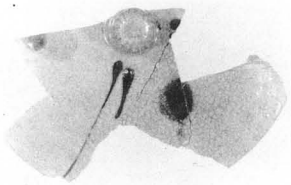
10　Ⅰ巴文　[33-3]

図版31　ＮＭ２出土の土瓶・急須・蓋

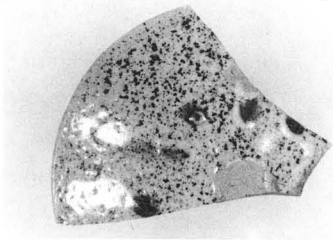
縮尺１：２　Plate 31　Teapots, small teapots and teapot lids from NM2　Mid. of 19c. (before 1882)



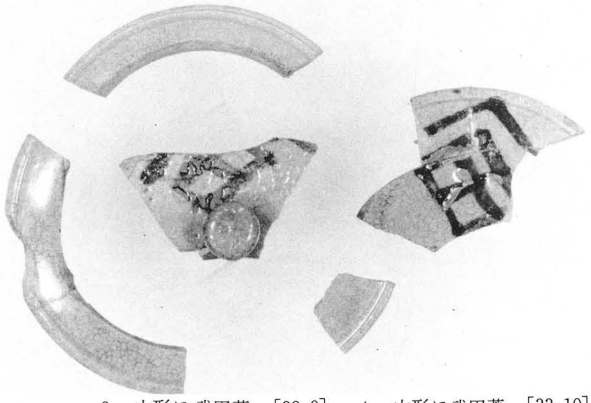
1　Ⅰ笹竹文　[33-5]



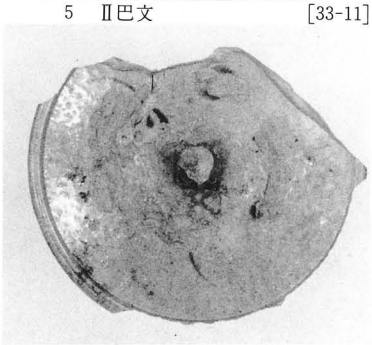
2　Ⅰ巴文　[33-8]



5　Ⅱ巴文　[33-11]

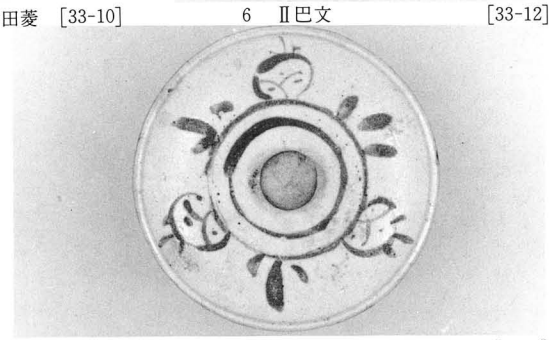


3　山形に武田菱　[33-9]　4　山形に武田菱　[33-10]



6　Ⅱ巴文　[33-12]

7a　Ⅱ巴文



8a　Ⅱ牡丹文　[33-7]

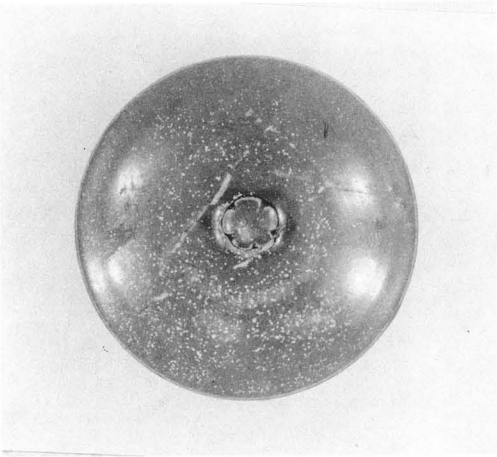
7b（うら）　[33-6]

8b（うら）

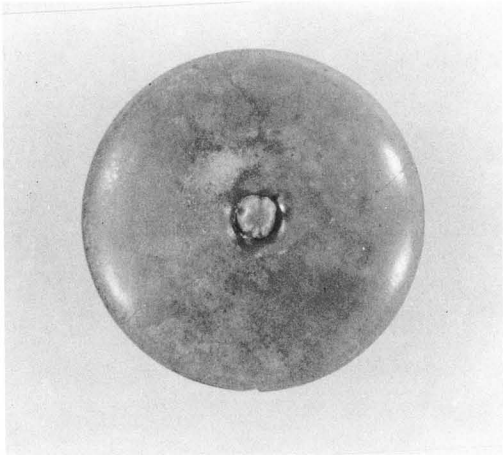
図版32　ＮＭ２出土の土瓶の蓋(1)

Plate 32　Teapot lids from NM2 (1)　Mid. of 19c.(before 1882)

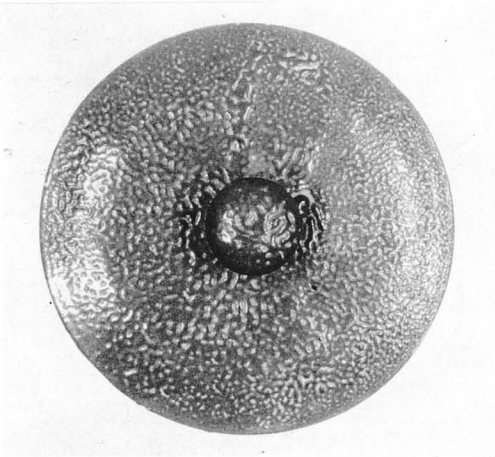
縮尺１：２



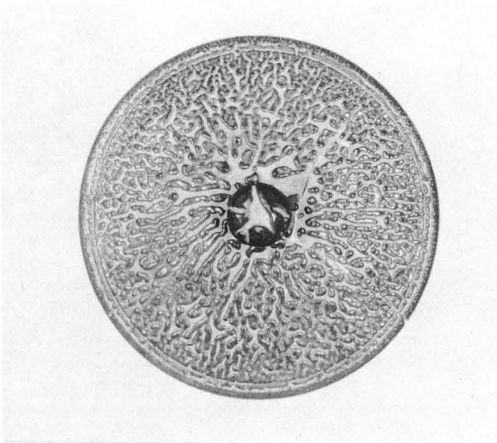
1　II_1 梅花＋青釉　[33-13]



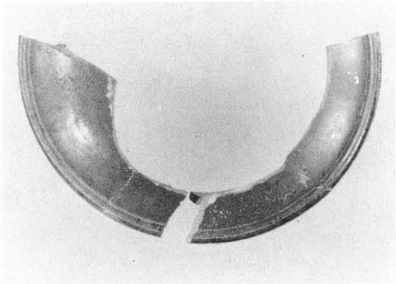
2　II_1 梅花＋糠白釉　[33-16]



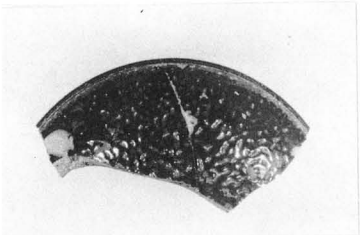
3　II_1 鮫肌釉　[33-15]



4　II_2 鮫肌釉　[33-18]



5　II_2 青　釉



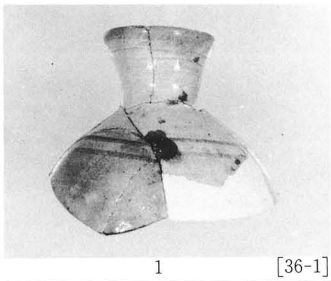
6　II_2 鮫肌釉

図版33　ＮＭ２出土の土瓶の蓋(2)

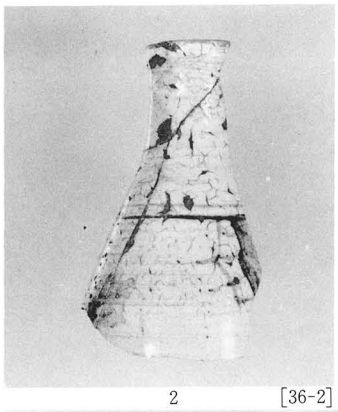
Plate 33　Teapot lids from NM2(2)

縮尺１：２

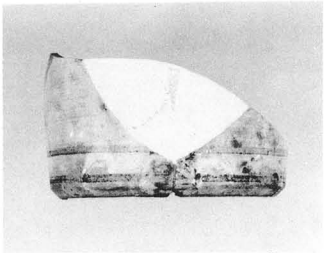
Mid. of 19c.
(before 1882)



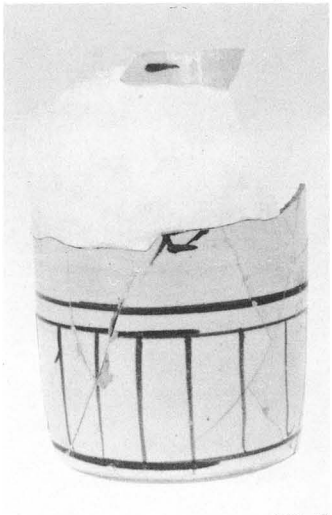
1 [36-1]



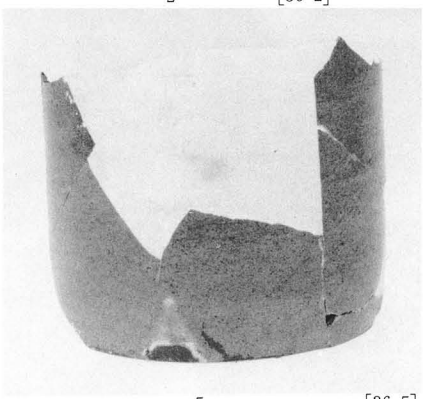
2 [36-2]



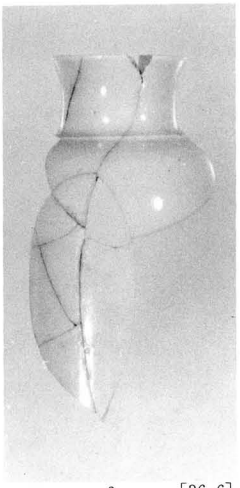
3 [36-3]



4 [36-4]



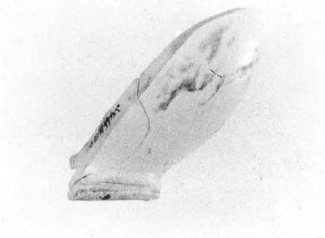
5 [36-5]



6 [36-6]

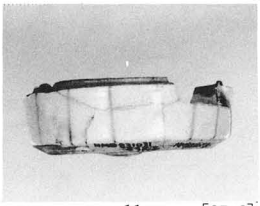
7 [36-7]

8 [36-8]

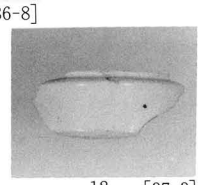


9 [36-9]

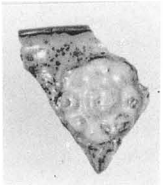
10 [37-1]



11 [37-2]



12 [37-3]



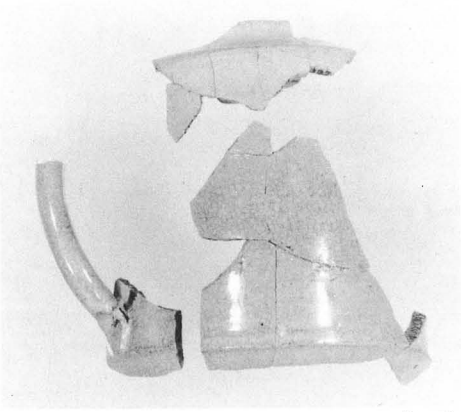
13 [37-4]

図版34　ＮＭ２出土の徳利とその他の陶磁器

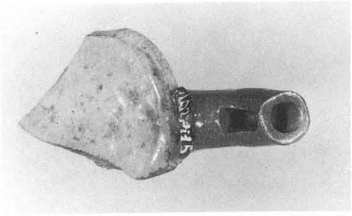
Plate 34　Bottles and various ceramics from NM2

縮尺１：２

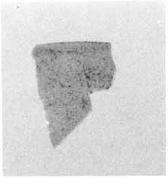
Mid. of 19c.
(before 1882)



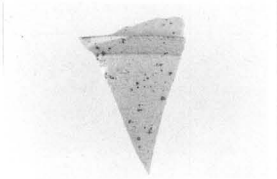
1 [37-5]



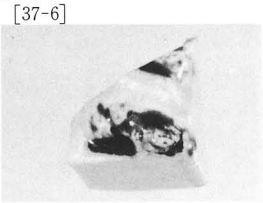
2 [37-6]



3 [37-7]

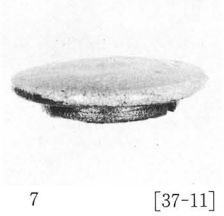


4 [37-8]

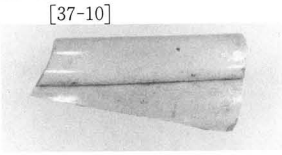


5 [37-9] 1：1

6 [37-10]



7 [37-11]



8 [37-13]

9 [25-12、37-12]
oil lamp and lamp stand

11 切込西山工房跡（東北大学蔵）
12 多賀城市山王遺跡
（多賀城市教育委員会の御厚意による）

11 specimen from Kirigome kiln
12 specimen from Sannô site

10 土 鍋 [38-1]

11 土 鍋 1：4

12 土 鍋 1：4

図版35 ＮＭ２出土の土鍋とその他の陶磁器

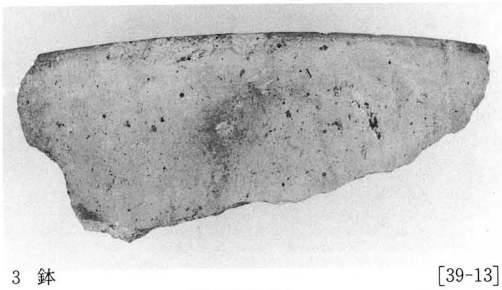
縮尺1：2

Plate 35 Cooking pots and various ceramics from NM2

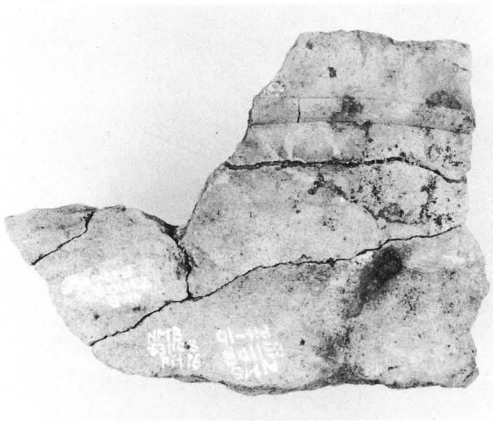
Mid. of 19c.
(before 1882)

1　土　鍋　　[38-4]

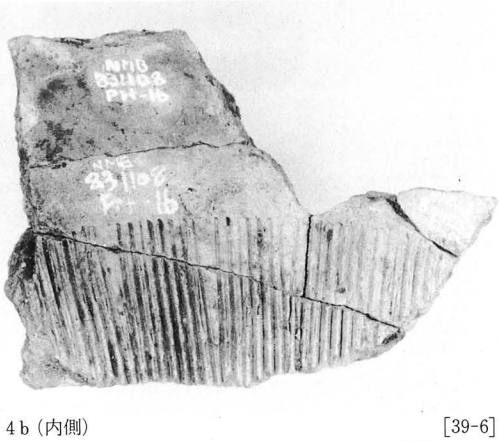
2　皿　　[39-1]



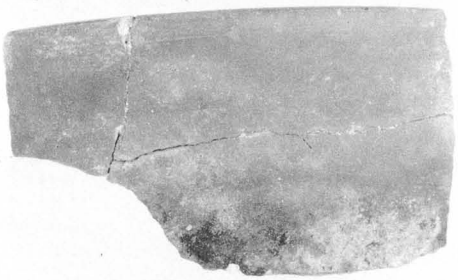
3　鉢　　[39-13]



4 a　擂鉢（外側）



4 b（内側）　　[39-6]

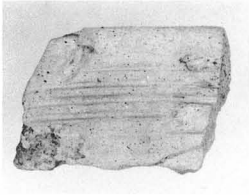


5 a　鉢　　[39-18]

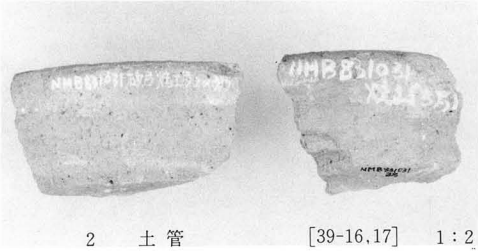
5 b　口縁のミガキ　　1:1

図版36　ＮＭ２出土の土鍋と土師質・瓦質土器

縮尺1：2　Plate 36　Cooking pot, red earthenware and smudged black earthenware from NM2　Mid. of 19c. (before 1882)



1　鉢　　[39-12] 1：2

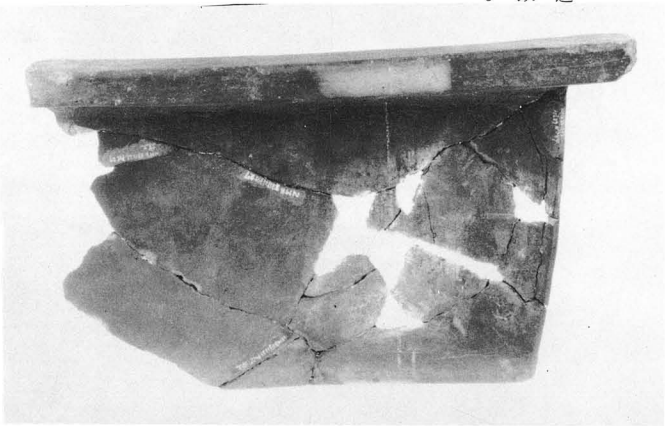


2　土管　　[39-16,17]　1：2

3　蚊遣

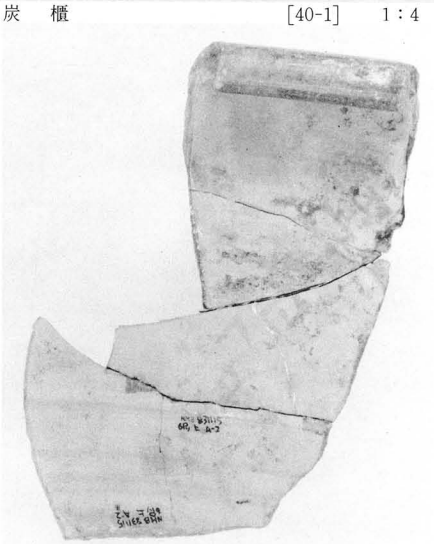
4　焙烙

5　炭櫃鍔の接合部分の写真

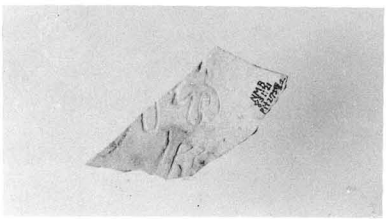


6　炭　櫃　　[40-1]　1：4

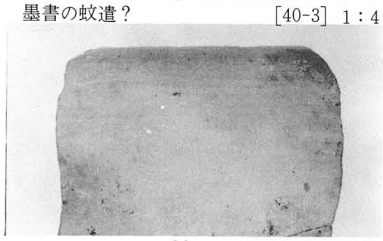
7　炭　櫃　　[40-2]　1：4



8a　墨書の蚊遣？　　[40-3] 1：4



9　土瓶の底の印



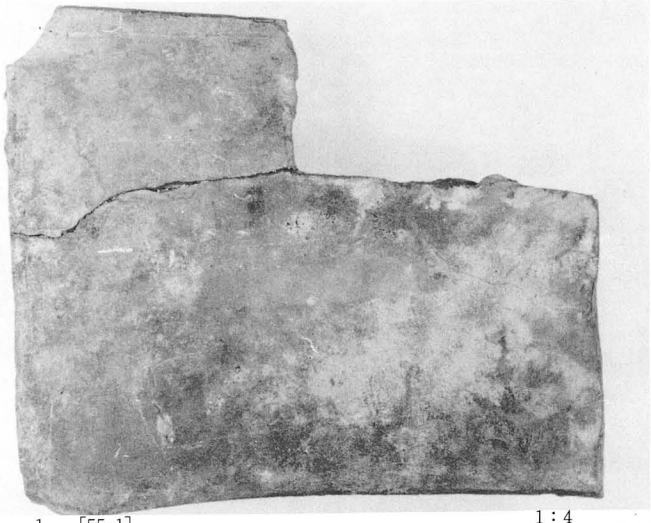
8b

Mid. of 19c.
(before 1882)

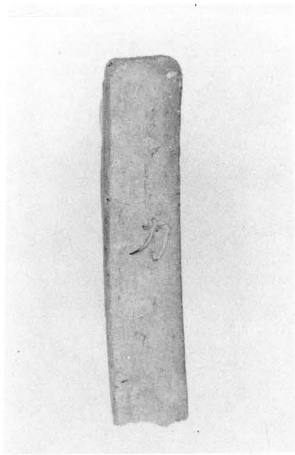
図版37　ＮＭ２出土の土師質・瓦質土器

Plate 37　Red earthenware and smudged black earthenware from NM2

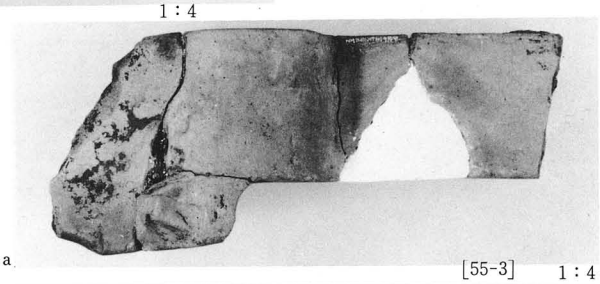
3　4　多賀城作貫地区出土(宮城県多賀城跡調査研究所の御厚意による) 3、4 specimens from Tagajô site



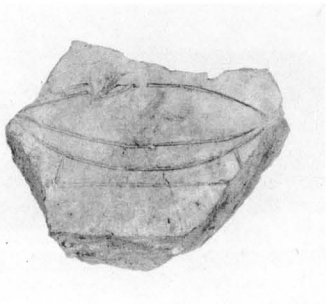
1 [55-1] 1：4



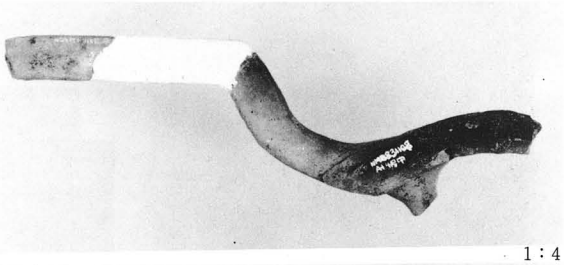
2 1：2
[56-2]



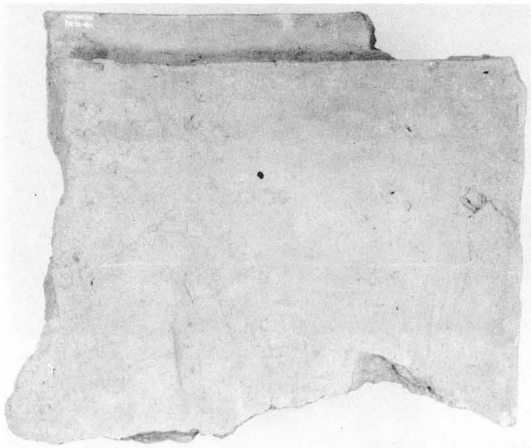
4 a [55-3] 1：4



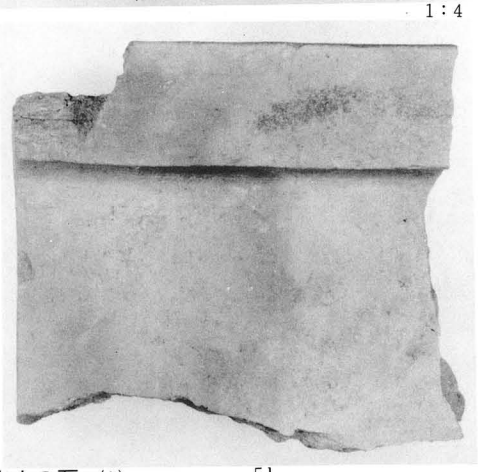
3 熨斗瓦に描れた盃と記号 1：2
[56-3]



4 b 1：4



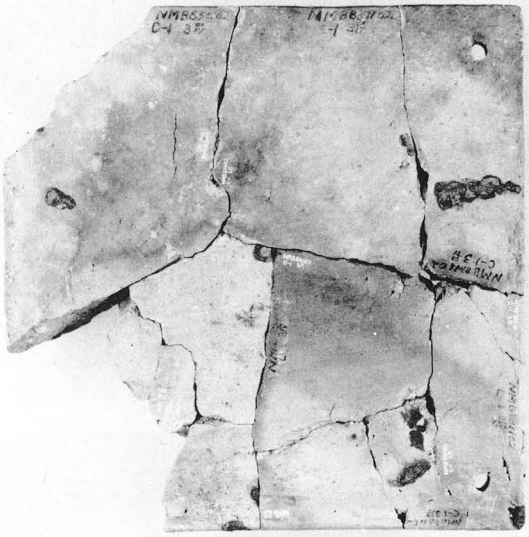
[55-2] 5 a



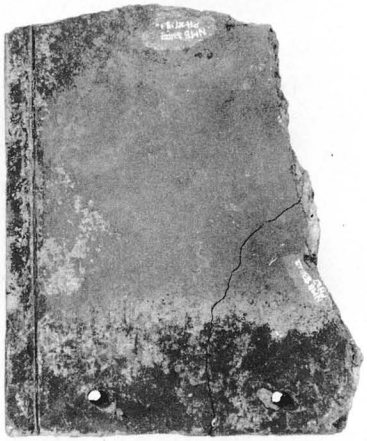
5 b

図版38 ＮＭ２出土の瓦 (1)
Plate 38 Ceramic roof tiles from NM2 (1)

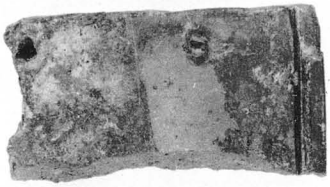
Mid. of 19c.
(before 1882)



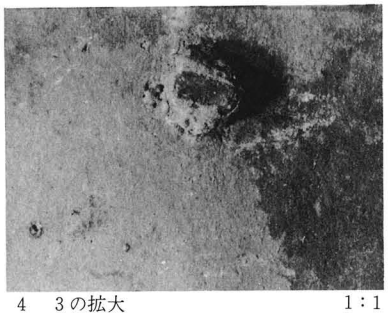
1　熨斗瓦　C 1-3層　[56-1]



2　熨斗瓦　石敷遺構
水切り溝と葺土の痕



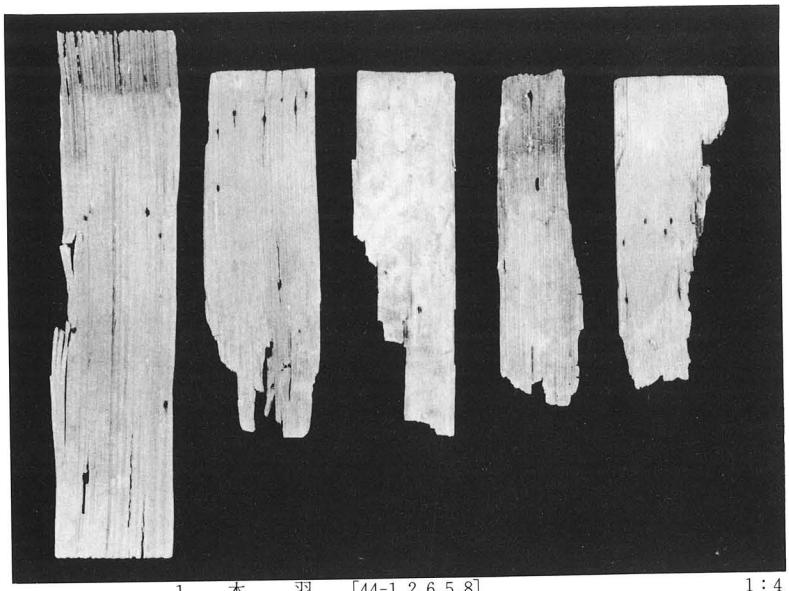
3　釘の残った熨斗瓦　石敷・ピット36



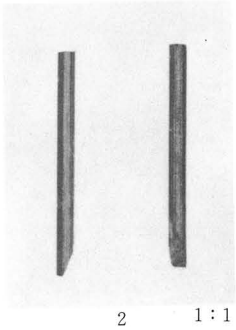
4　3の拡大　1：1

図版39　ＮＭ２出土の瓦　(2)
Plate 39　Ceramic roof tiles from NM2 (2)

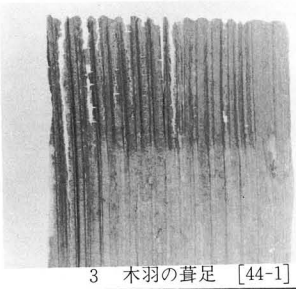
Mid. of 19c.
(before 1882)



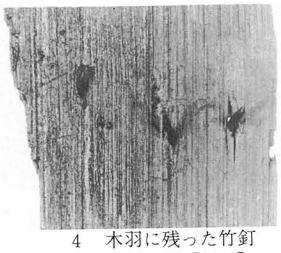
1　木　羽　[44-1,2,6,5,8]　1：4



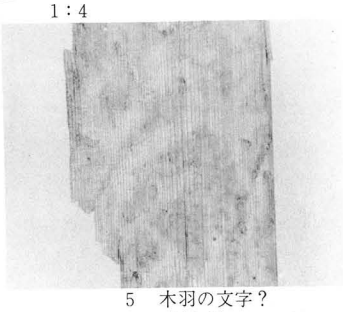
2　1：1
竹釘の見本
examples of bamboo nail



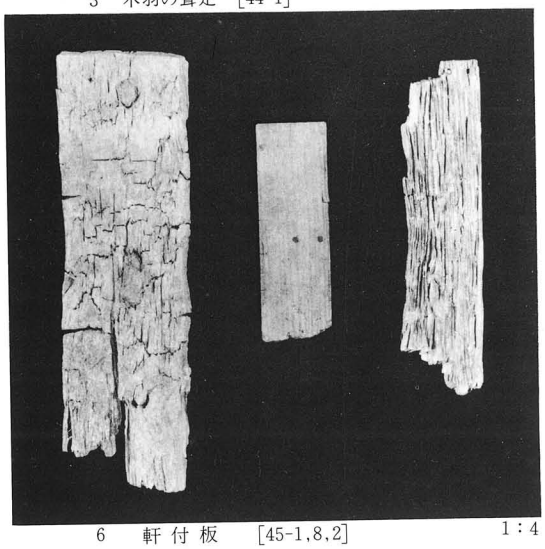
3　木羽の葺足　[44-1]



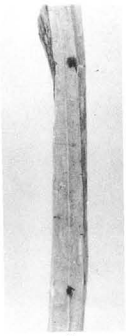
4　木羽に残った竹釘
[44-3]



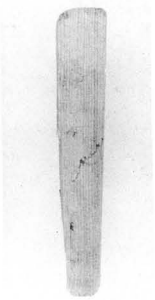
5　木羽の文字？
[44-6]



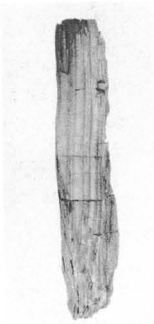
6　軒付板　[45-1,8,2]　1：4



7
側面の合釘穴
[45-2]



8
楔　[46-3]



9
軒付板？　[46-4]

図版40　ＮＭ２出土の木製品(1)
Plate 40　Wooden materials from NM2 (1)

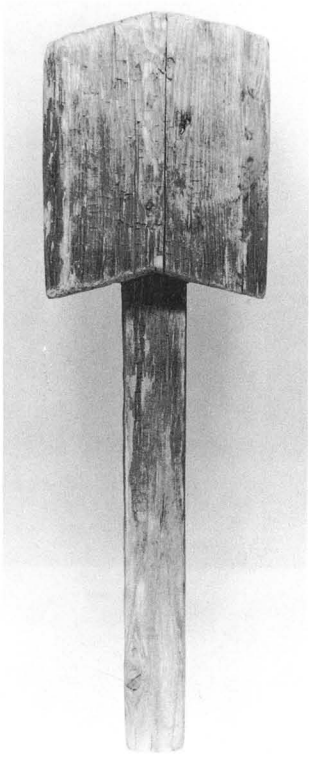
縮尺1：2

Mid. of 19c.
(before 1882)

1　棟折　[45-5]　1：4

2　桶の柄？　[45-3]

3　板　材　[46-2]　1：4



4　下げ束　[46-1]　1：4

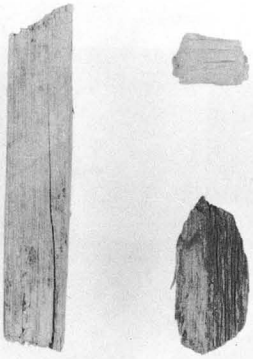
5 丸棒 [45-6]

6
角材　[45-7]

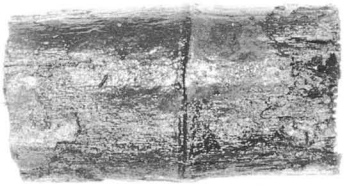
7　切 片 [46-6] 1：1

8　焦げた木材　A 1-4層

9　丸棒



10　切 片

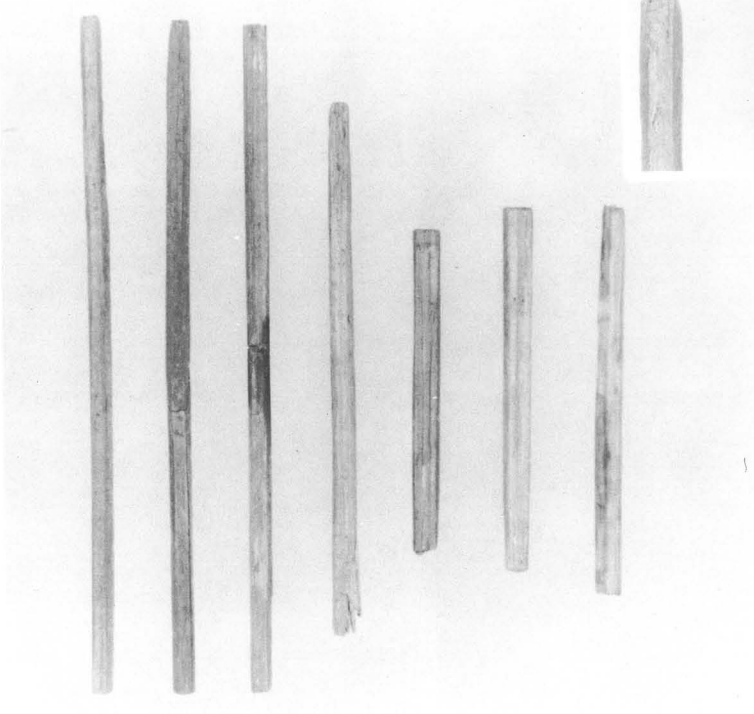


11　竹製品

縮尺1：2

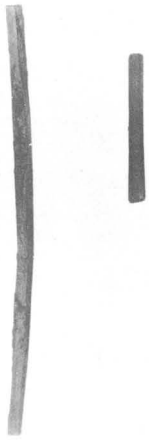
図版41　ＮＭ２出土の木製品(2)
Plate 41 Wodden materials from NM2 (2)

Mid. 19c.(before 1882)

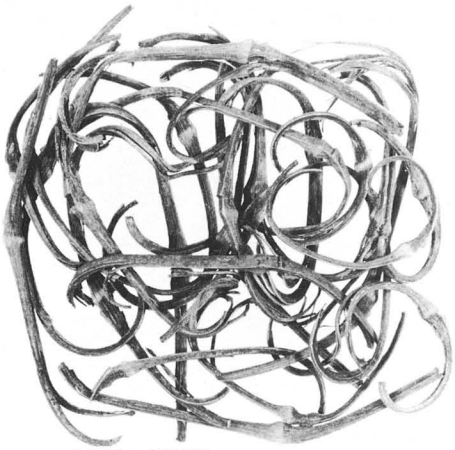


1　箸　　[47-1,2,3,6,10,8,9]

2　箸の拡大　　1：1



3　箸(小)　[47-7,12]

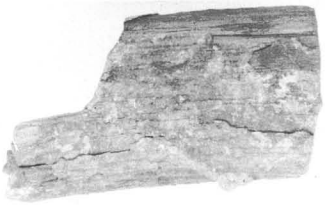


4　竹製品 石敷遺構

6　竹製品　[47-14]

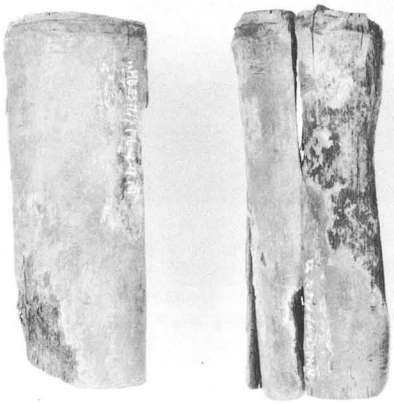
7 栓 [47-15]

8　炭？



5　炭？

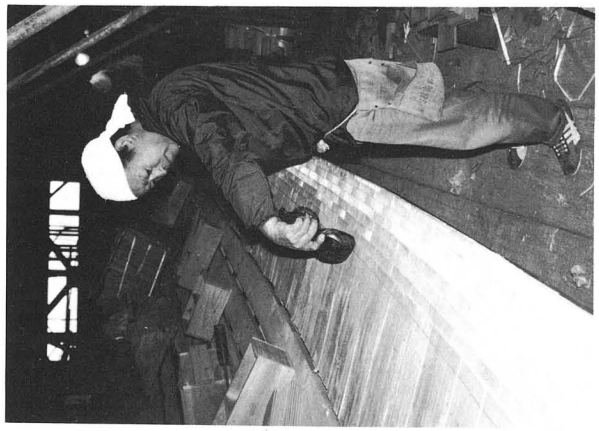
縮尺1：2

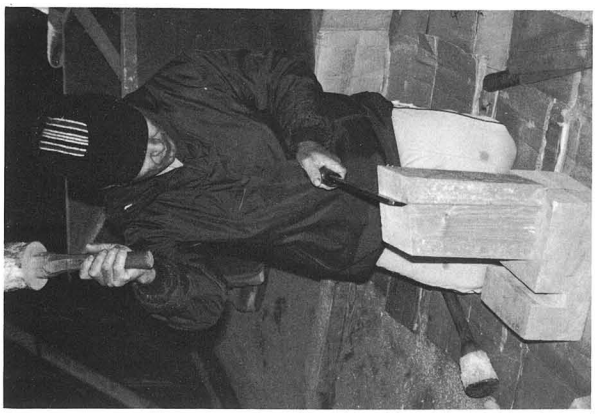


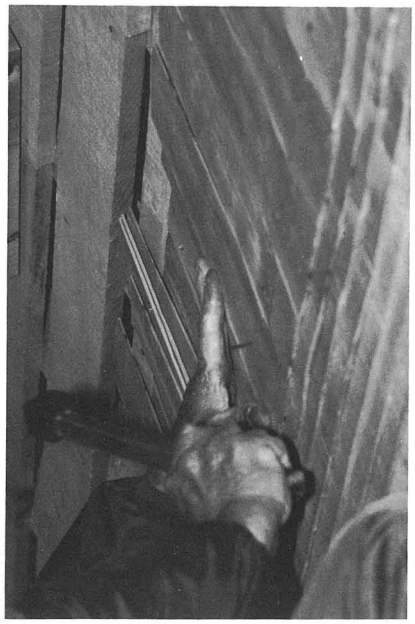
9　竹製品

図版42　ＮＭ２出土の木製品(3)

Plate 42 Wooden materials from NM2 (3)　Mid. of 19c. (before 1882)

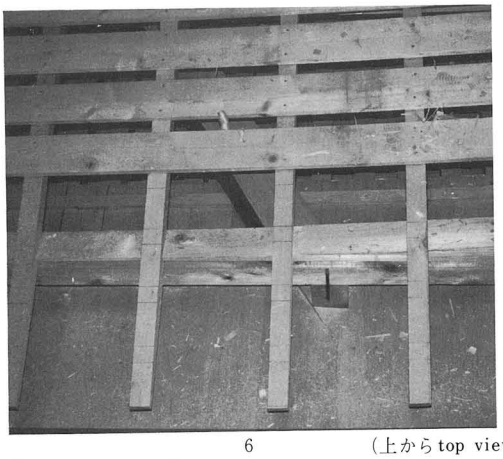




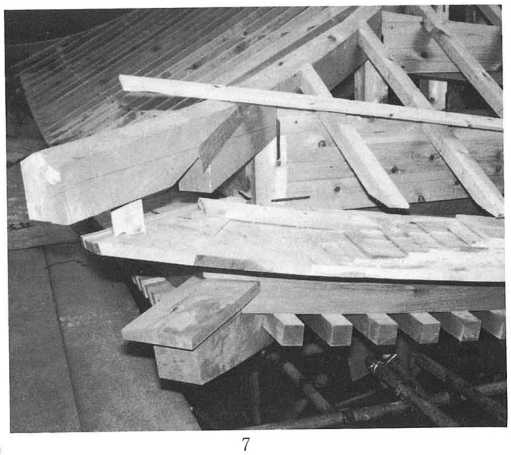


1.木羽板割り　Making *koba*(shingles) with a mallet and an adz
2.墨打ちによる葺足の揃え　Using china ink line for arranging tails of *koba*
3-5 木羽板の打付け　Nailing down *koba* with a "roof hammer" and bamboo nails

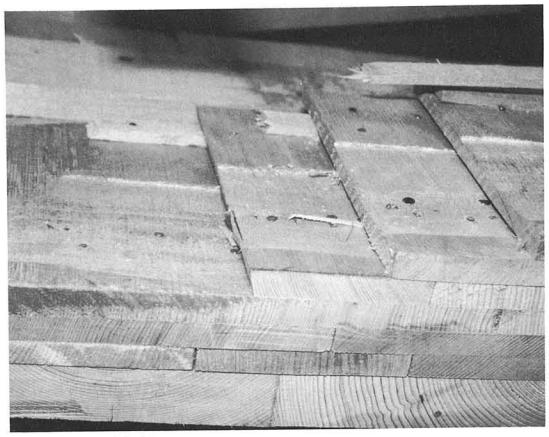
図版43　定義如来五重塔の柿葺作業
Plate 43　Shingling at *Jôge-nyorai* five-storied pagoda (*Miyagi* pref.)



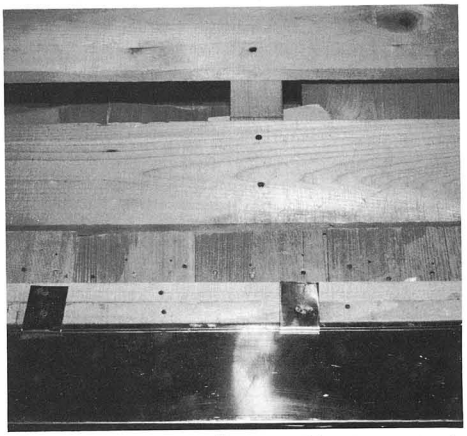
6　(上から top view)



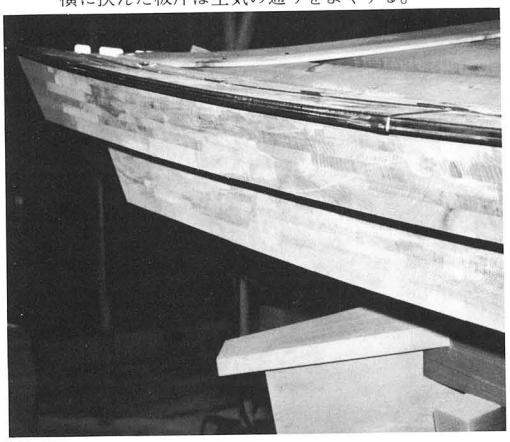
7



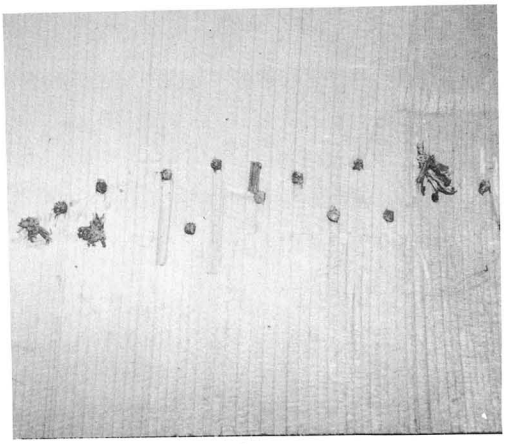
8 (7の拡大)
横に挟んだ板片は空気の通りをよくする。



9　(上から top view)



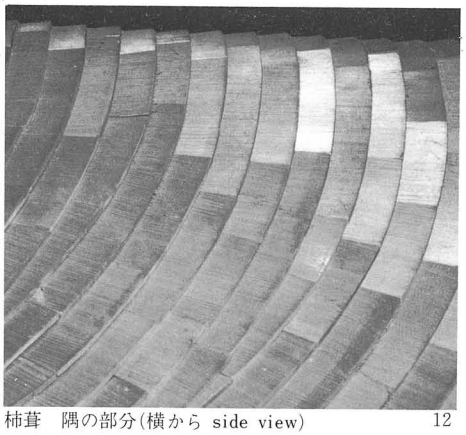
10



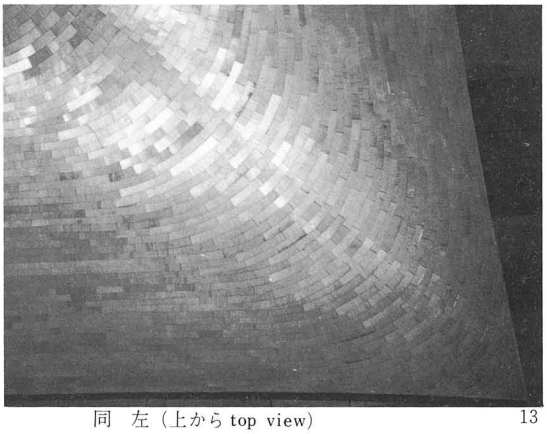
11

6.軒付板の打付け前　Eave before nailing down *nokitsuke-ita* (eave shingles)
7、8.下軒付板の打付け　Nailing down lower *nokitsuke-ita*
9、10.仕上った軒付板(柿葺の前の状態)　Completed eave (the state before shingling)
11.軒付板の竹釘　Bamboo nails in *nokitsukeita*

図版44　定義如来五重塔の軒付
Plate 44　Eave shingles of *Jōge-nyorai* five-storied pagoda



柿葺　隅の部分(横から side view)　12



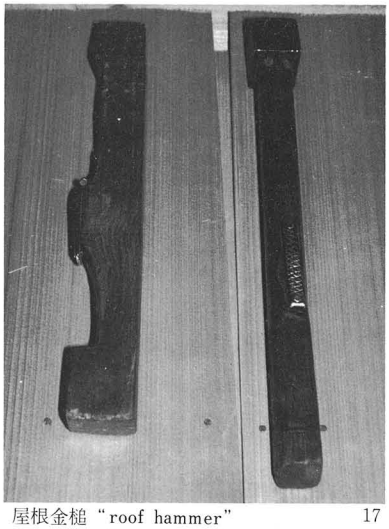
同　左（上から top view）　13

柿　葺　隅の仕上げ前　14

12-14 定義如来五重塔　*Joge-nyorai* five-storied pagoda

仙台市大崎八幡神社の柿葺と箱棟　15

木羽を割る槌とナタ mallet and adz　16



屋根金槌 "roof hammer"　17

12、13 shingled corner ridge

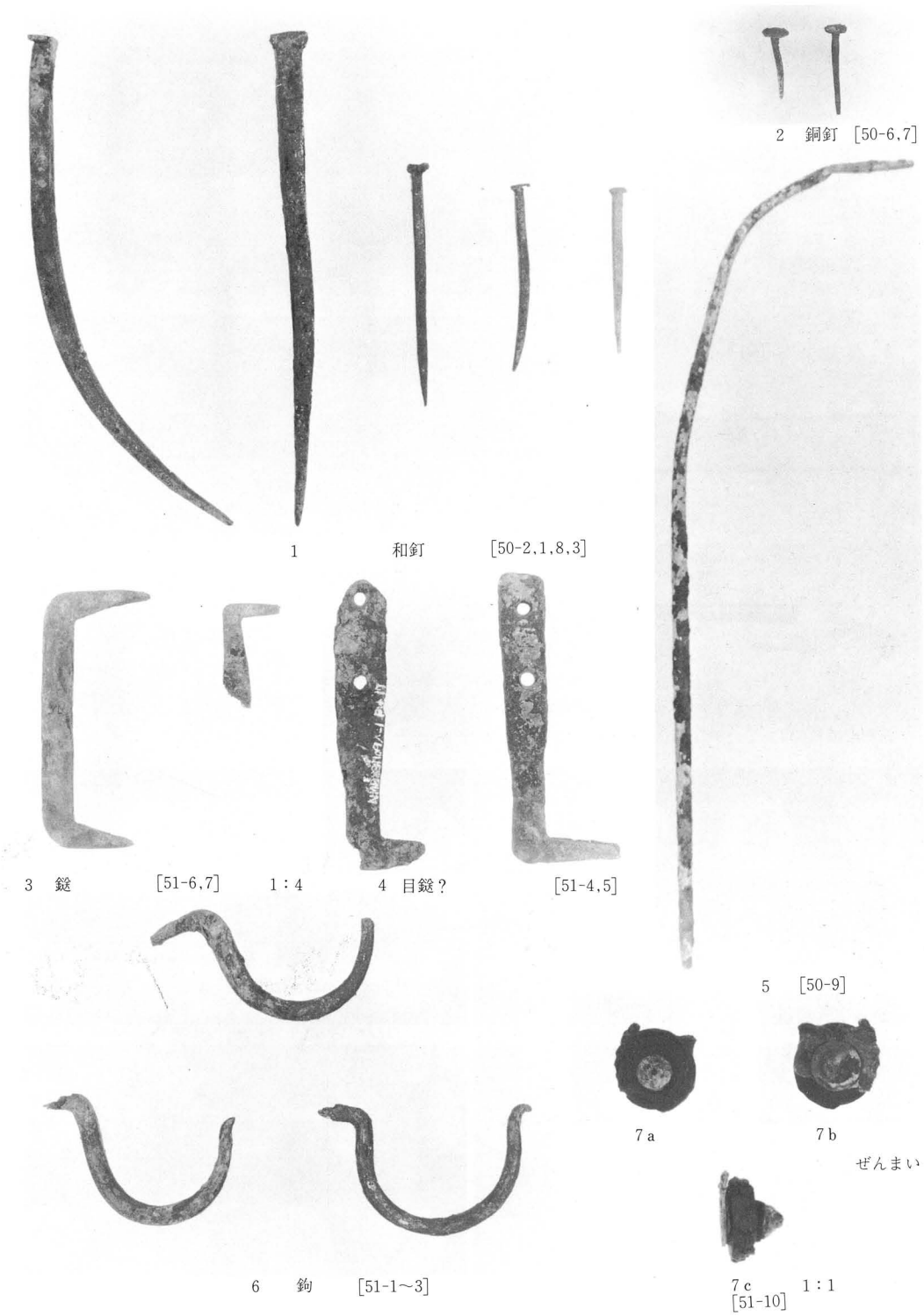
14 shingled roof before completing corner ridge

15 shingled roof of *Ôsaki-Hachiman* shrine (*Miyagi* pref.)

16、17 Implemnts for shingling

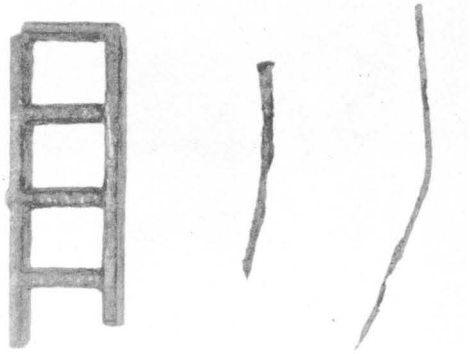
図版45　柿葺屋根と道具

Plate 45　Shingled roofs and implements for shingling

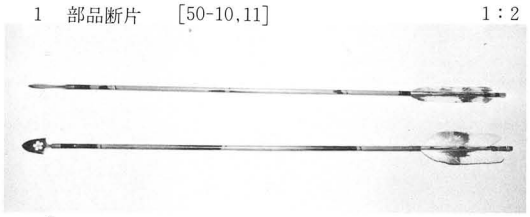


図版46　ＮＭ２出土の金属製品

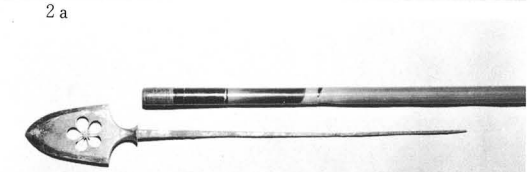
縮尺1：2　Plate 46 Metal materials from NM2　Mid. of 19c.(before 1882)



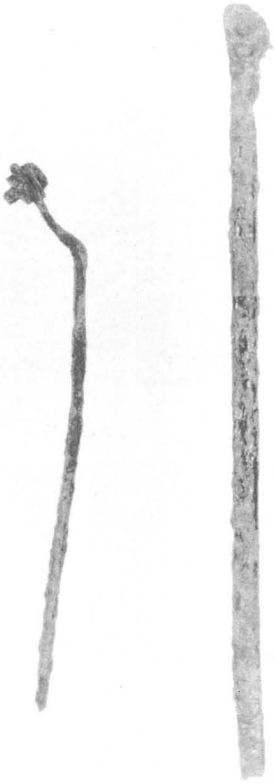
1　部品断片　[50-10,11]　1：2



2a

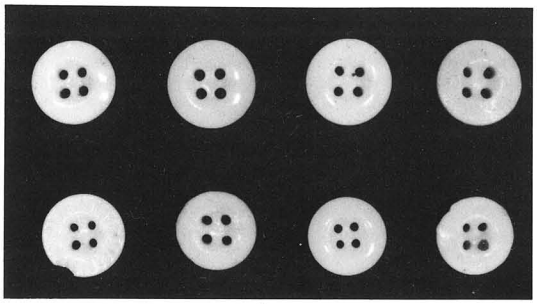


2b　伊達家旧蔵箙の矢（仙台市博物館蔵）

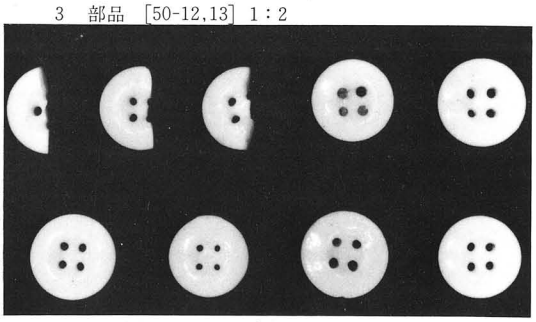


3　部品　[50-12,13]　1：2

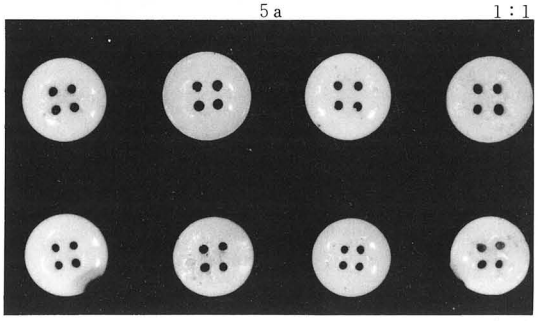
4 部品　1：2
[50-18]



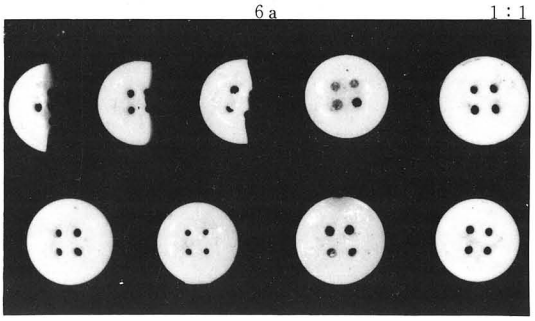
5a　1：1



6a　1：1



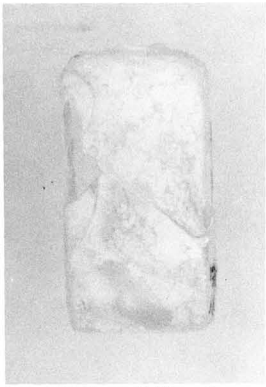
[53-1～4,7,8]　5b　1：1



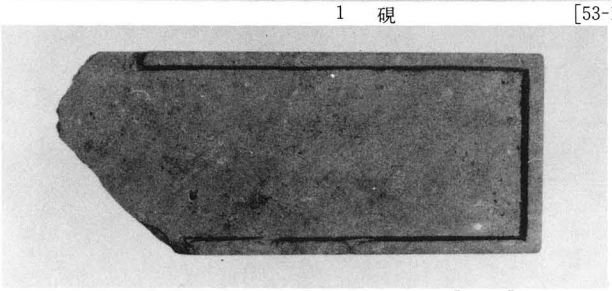
6b　1：1

図版47　ＮＭ２出土の金属製品，ガラスボタンと伊達家箙（えびら）の矢
Plate 47　Metal materials, glass buttons and examples of Date family arrow

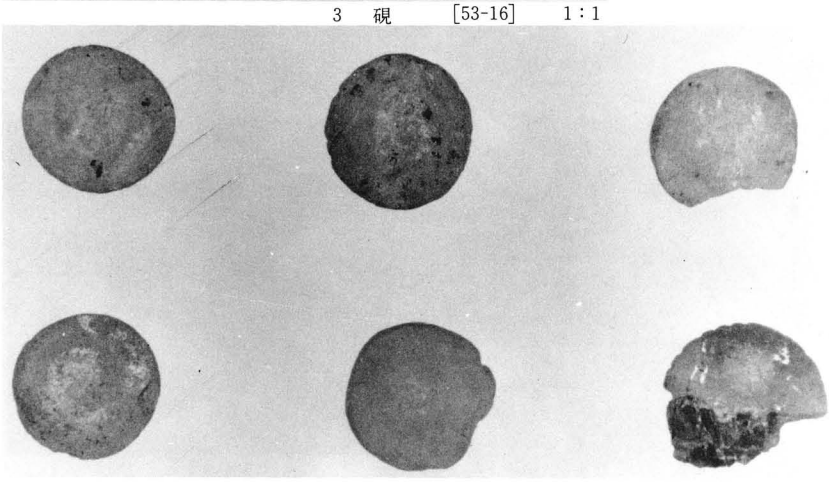
1　硯　　[53-17]



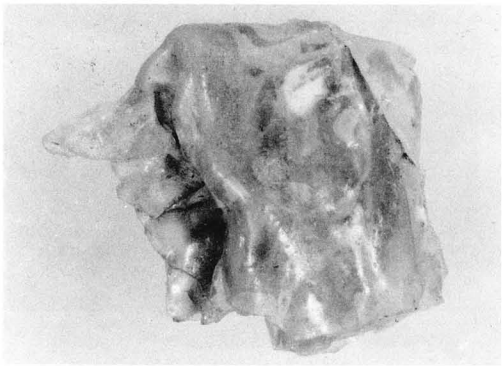
2 ガラス小瓶 1：1
[53-15]



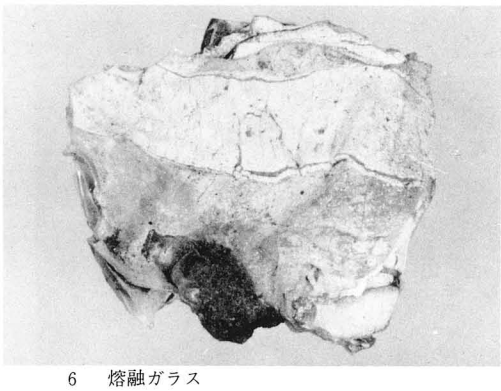
3　硯　　[53-16]　　1：1



4　土玉(土製品)
1：1　　[53-9～14]



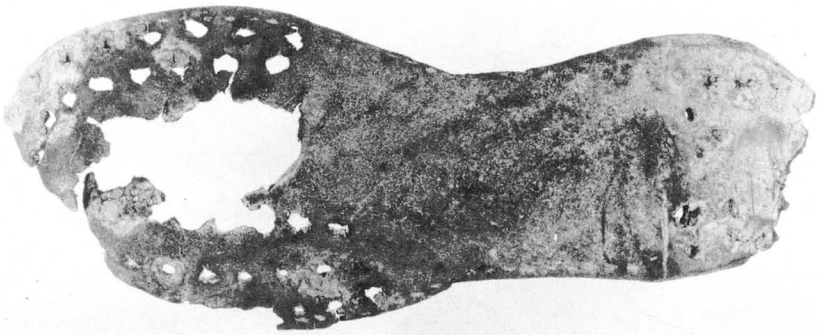
5　熔融ガラス



6　熔融ガラス

図版48　ＮＭ２出土のその他の遺物
Plate 48 Various artifacts from NM2　　Mid. of 19c.(before 1882)

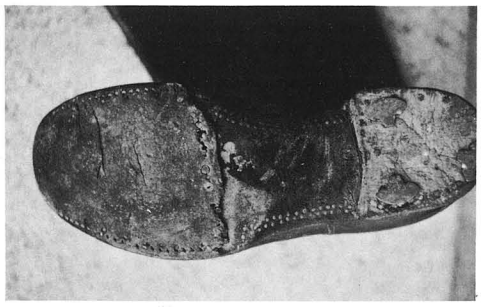
1 a [54]
1：2



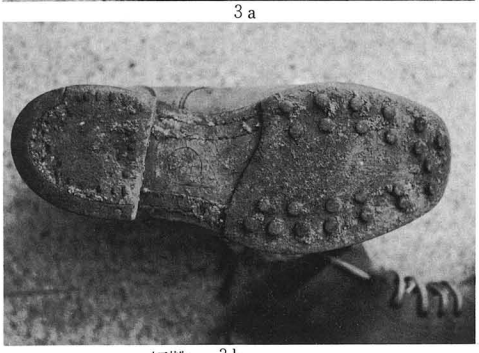
1 b
1：2

2 a

3 a



2 b
長靴

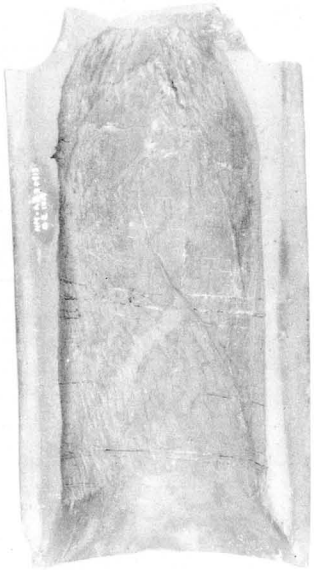


短靴 3 b

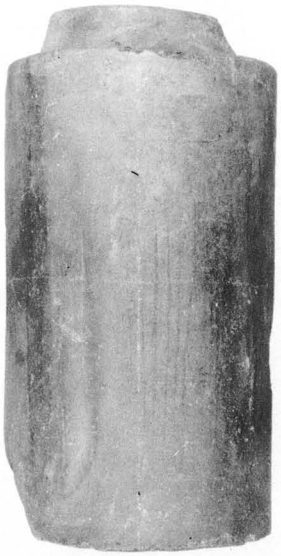
2、3仙台市歴史民俗資料館蔵

図版49 ＮＭ２出土の軍靴の底と軍靴の見本
Plate 49 A sole of military shoe from NM2 and examples of military shoes

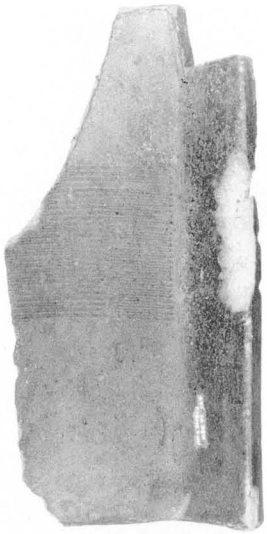
1a　1：4



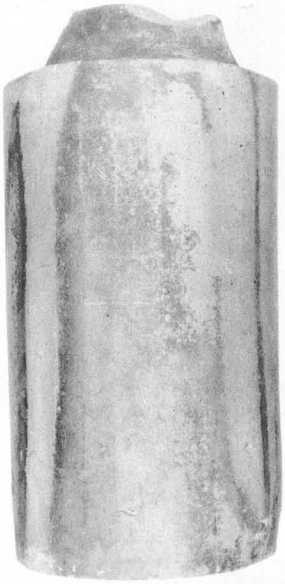
2a　1：4



3a　1：4

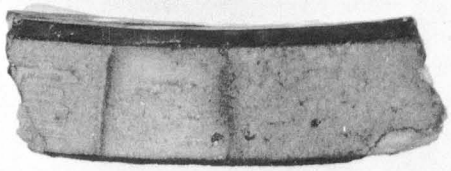


1b　[8-1]　1：4

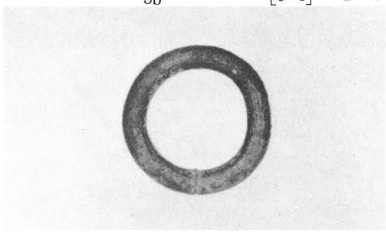


2b　[9-3]　1：4

3b　[9-4]　1：4



7　[8-2]　1：1

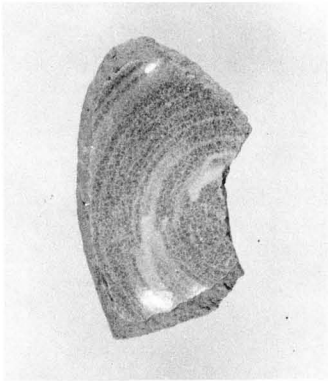


8　[7-4]　1：1

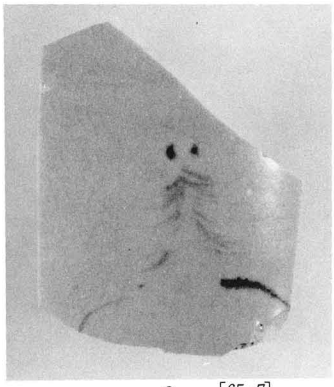
図版50　ＮＭ１出土の瓦と銅輪

Plate 50 Ceramic roof tiles and a iron ring from NM1

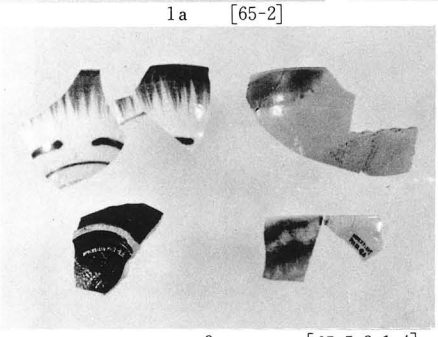
1a [65-2]



1b

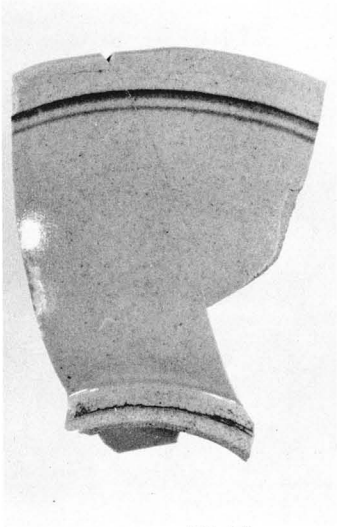


2 [65-7]

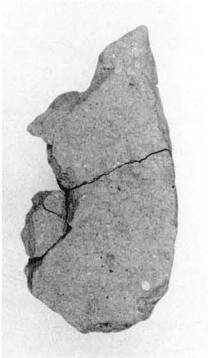


3 [65-5,3,1,4]

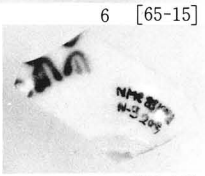
4 [65-13]



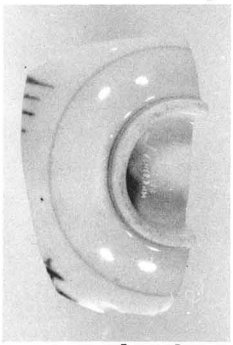
5 [65-17]



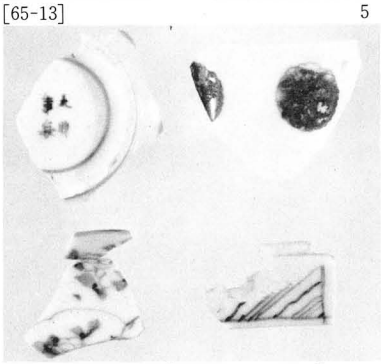
6 [65-15]



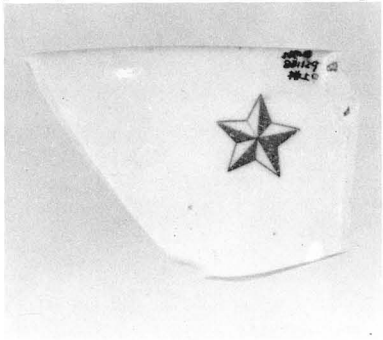
7 [65-12]



8 [65-20]



9 [65-11,19,66-2,5]



10 [65-10]

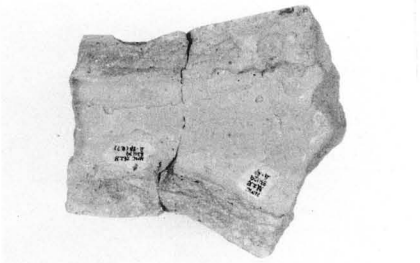
図版51 ＮＭ３出土の陶磁器

Plate 51 Ceramics from NM3

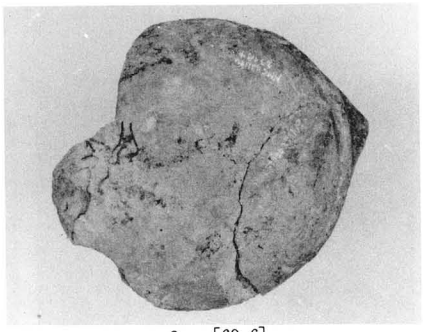
縮尺１：２

probably 19c.

1a [69-3]



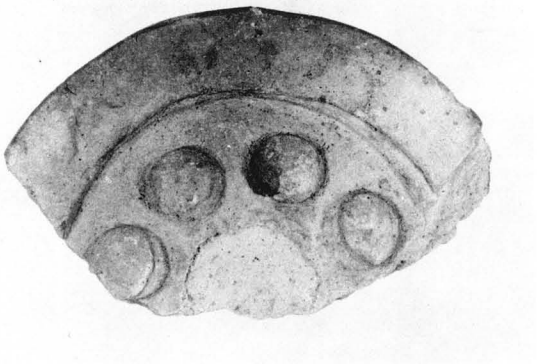
1b 1：4



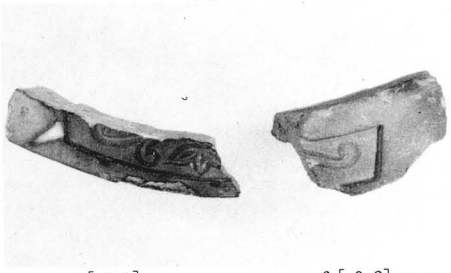
2 [69-6]

3a [69-5]

3b



4 [69-4]



5 [9-1] 6 [9-2] 1：4

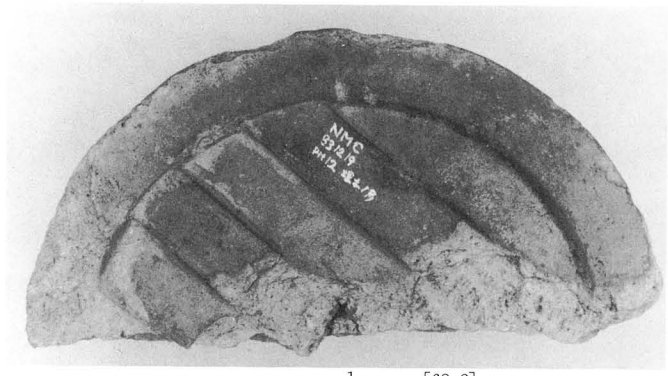
5,6はＮＭ１出土

5 and 6 are from NM1

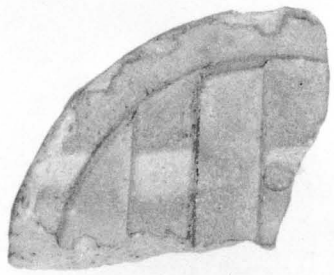
図版52 ＮＭ３出土土の瓦(1)

Plate 52 Ceramic roof tiles from NM3 (1)

縮尺1：2

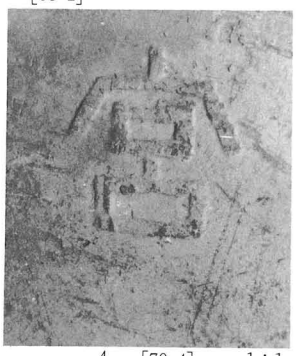


1 [68-2]



2 [68-3]

3 [70-1] 1：1

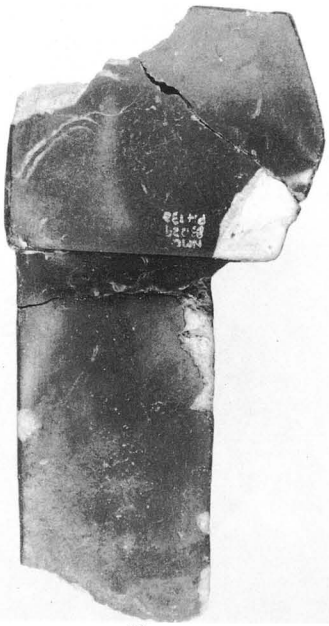


4 [70-4] 1：1

5 1：1
[70-7]

6 1：1
[70-8]

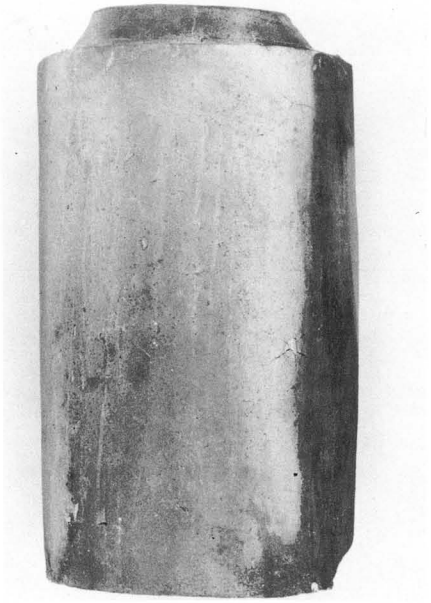
7a [69-2]



7b

図版53 ＮＭ３出土の瓦(2)

縮尺1：2 Plate 53 Ceramic roof tiles from NM3 (2) 19c.



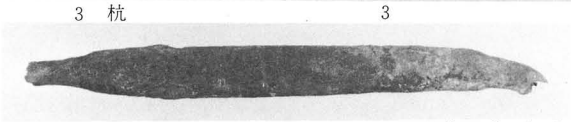
1a　1：4

1b　[68-1]　1：4

2a　1：4

2b　[69-1]　1：4

3　杭　3　[67-8]　1：10



4　キセル　4　[67-3]　1：2

5　1：2
さじ　[67-4]

6　1：2
銅釘　[67-5]

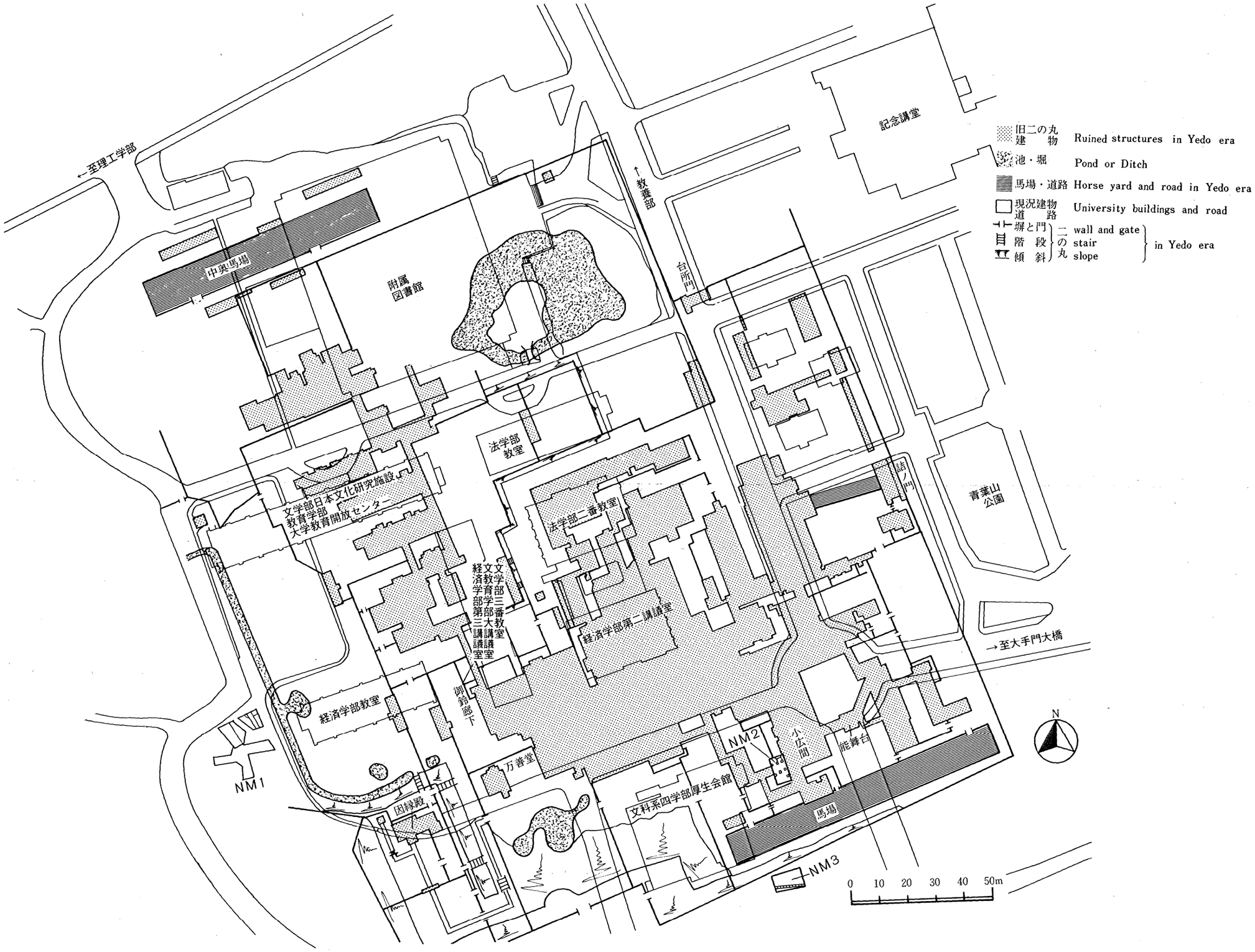
図版54　ＮＭ３出土の瓦とその他の遺物
Plate 54　Ceramic roof tiles and other artifacts from NM3

東北大学埋蔵文化財調査年報 1

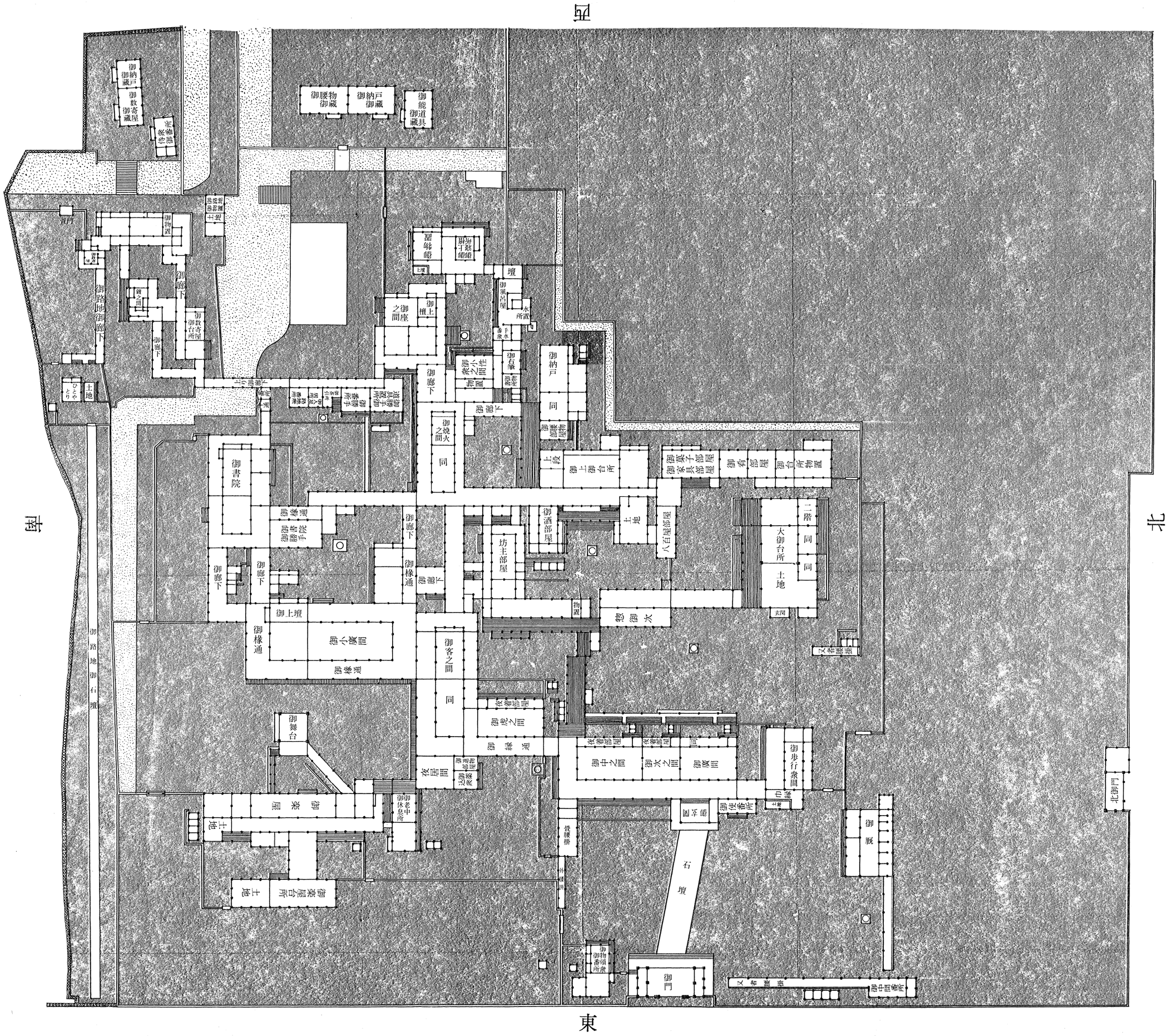
昭和60年10月11日

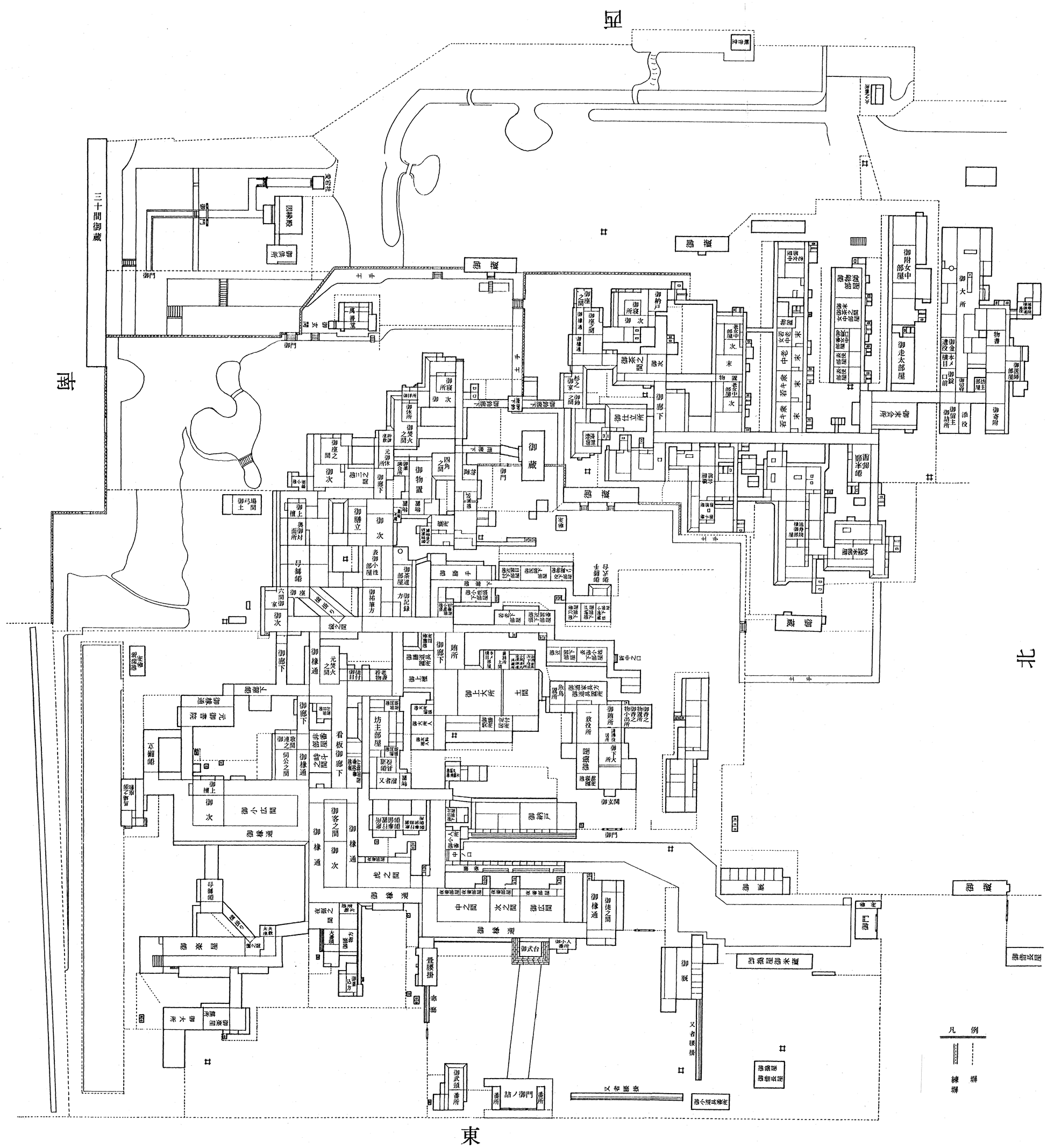
発行　東北大学埋蔵文化財調査委員会
委員長　石　田　名香雄

印刷　㈱　東　北　プ　リ　ン　ト
ＴＥＬ　0222(63) 1166



付図1　現況建造物・道路と二の丸建造物との関係(二の丸配置図は享和2年図を使用)
University buildings and ruined structures of the secondary citadel of Sendai castle superimposed on map.(17c.~19c.)


西
北
南
東
御書院
御小廣間
御客之間
御老之間
御舞台
御能道具御藏
御納戸御藏
御腰物御藏
御數寄屋御藏
御納戸御藏
御數寄屋御台所
御廊下
御路地御廊下
御路地御石壇
御上御台所
御酒部屋
坊主部屋
八石屋部屋
大御台所
二階
同
土地
御歩行衆間
御廣間
御中之間
御次之間
御使番所
御門
石壇
北御門
御厩
御物頭衆御番所
御中間御番所
又番廣場
御中間
御使番所
御老中御休息所
御數寄屋御台所
御物置
御腰物御藏
御納戸御藏
御數寄屋御藏
御能道具御藏
御廊下
御上壇
御縁通
御小廣間
御縁通
御書院
御廊下
御縁通
御廊下
御縁通
御廊下
御廊下
御廊下



付図3　嘉永六年・御二丸御城中並御中奥下水抜溝御絵図